
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～PROJECT S.W～

天破

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～PROJECT
S・W～

【Nコード】

N9760T

【作者名】

天破

【あらすじ】

とある管理世界。森の中に巧妙に隠されていた『生態兵器研究所』において3万人以上の死者が出る事件が発生した。そこで研究されていたはずの5人の少年・少女達は1人を除き全員別々の世界へ飛ばされた。誰が想像できただろう？ たった1人研究所に残り、無表情に涙を流す子供がその大惨事を引き起こしたなど――

処女作・駄文・超駄文・超亀更新です。嫌な方はお戻りください。誹謗中傷も御勘弁くださいませm（　）m

プロローグ（前書き）

始めまして。天破と申す馬鹿野郎でございます。

この拙作を1秒でも御覧頂き誠にありがとうございます。見てくださった方には本当に感謝したい気持ちで一杯でございます。

亀更新・駄文ではありますが、更新しましたらお暇なときに手にとってくださいませ。

プロローグ

———そこは、紛れも無く地獄だった。

何もかもがバラバラに切り裂かれ、人すらもただの肉屑と化して燃え盛る炎に焼かれている。

悲鳴を上げることも出来ず、瞬時に生命を奪われた人間達。

信じられるだろうか？この惨状を、た………たった1人の子供が、一分も満たぬうちに作り上げたという事を。

「うぐ…あぁっ…兄さん…？」

ふと、瓦礫の中から5歳程度であろうボロ布を纏う少年が、この惨

状の中心で座っている子供へと向けられる。

「…何をしゃがったんだ、兄、貴」

違う方向からも、くぐもった声で同じくらいの身長、同じくらいの歳である少年が声をかける。

「うう…動けない、のじゃ…」

「痛い…これは、お兄様がやったのですか…?」

更に別の方向から——これも5歳程度の——2人の少女が、畏怖と混乱を以って災害の中心に座る少年を見つめる。

八つの目を向けられて、ゆっくと“彼”は振り返る。

その目は何も見ていなかった。

ただひたすら、何を思っているかも分からず涙を流すのみ。

「『…兵器の心ウェボン・マインドが暴走して、います…すみやかに、関係者はその場を離脱して、下さい』」

その子供は、本当に機械的に、感情も見せない声でそう告げる。

「なっ！？…兵器の心ウェボン・マインド！？　そんな馬鹿な、いつの間に実装されてやがったんだ…！？」

「それどころじゃありません…兄、さん…目を…覚まし…」

幼さが残る子供が言い終える前に。

4人の子供達を、真っ黒な強制転移魔法陣が囲んだ。

「「「!!!」」」」

「兄貴!?!」

「『…もうスグ私ハ、自我を、失い…マス。このママでは、貴方達まで、殺して、しまウデショウ』」

依然として途切れない涙で、少しだけ彼は微笑む。

「『せめて、私が貴方達を忘れるマデに、この世界カラ、逃げて、下サイ』」

「そんなの認められるわけがないじゃろう!?!」

「そうですわ!?!早くこれを解いて下さいませ!?!」

しかし彼は、座ったまま頭を横に振った。

「『次期ニ、この施設ノ関係者ガ、私達を捕獲シニやってきます。恐ラク、次捕まレバ今回ノような奇襲は出来ません。洗脳モ施さレるデショウ。ココから先ハ、貴方達は関ワラナクテいいのデス』」

「そんなの納得出来るか!! 兄貴、頼む! これからも5人で頑張っ
てればいいじゃねえか!」

「そうです! 僕らがここに生きているのだって、兄さんのお陰なん
ですよ! ? お願いです、1人で背負い込まないで下さい!!」

「『…時間、デス。“強制次元転移魔法”発動』」

「兄S———」

真っ黒な魔法陣が光り輝き、懇願するような叫びは途中で途切れ、

辺りに虚しく響き渡る。

その様子を見たのか見てないのか、虚ろな目をした子供は、小さく
呟いた。

「『…魔力内臓量が30%以下に低下。休止モードへ移行します。
関係者ハ…本体ノ保護、ヲ……』」

既に言う気力も途絶えたか。その場に少年は崩れ落ちた。

涙を流したまま、たった一人で炎の中眠りにつくその姿は明らかに
異常であり。そしてそれこそがこの研究所『だった』ところの目指
すべき存在であった。
管理局の“闇”が、あらゆる技術や外道な研究を重ねた所謂“最高
傑作”。

そこそこが————『プロジェクト——secret・weapon
ウェアポン』。
シークレット

数時間後、管理局員が到着した。

しかしその会話は、正義と呼べるには程遠いものであった――

――コイツのことか？ 例の計画で5体しか成功しなかった兵器のうちの1体ってのは

――どうやらそうらしいな。信じられねえが、コレ1体で次元世界が3桁は滅ぶんとか言う話だぜ？

――よくもまあそんなもんを造ったもんだ。上も上だ、こんな餓鬼を兵器にしちまおうなんざ。怖い怖い

――まあ、不運だったと諦めてもらうしかねえな。それに今回の件は最高評議委員会が絡んでやがる。意見しようものなら即お陀仏だぜ？

――尚更同情できなくなったな。まあこの道具がどれほど役に立つ見ものでもあるが…：そういうえば、残りの4体は何処に行ったんだ？

——転移で逃げたらしい。それも次元転移だ、俺ですら出来ねえよ

——バケモンだな…つと、だべってたら怒られちまう。さつさと死体処理するぞ

——ああ、そうだな… お前も災難だな、餓鬼。自分の意志とは関係なく…血塗られた戦争への御招待だぜ？ 寒気が出るね…クックック

その言葉は、深く深く眠っている少年へは届かなかった。

——同時刻、とある次元世界——

「ん…？ ！ おい、美由紀！ 子供が倒れてるぞ！？」

「っ…酷い傷…それにこの布切れ…一体何処から来たのかしら？」

「そんなこと言ってる場合じゃ無さそうだな…気絶しているみたいだし。取り合えず、家に運ぼう」

「ええ、そうね…」

「フェイト、あれっ！」

「こ、子供…！？　っ、酷い…誰がこんなことを…！」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！　この子、傷だらけだし…」

「アルフ、取り合えず家に運ぼう！　ここだと、誰に見つかるか分からないから…」

「わ、分かったよ！」

―――更に同時刻、とある次元世界―――

『クロノ君、その子は…』

「…ああ、酷い傷だ…ほおって置けば命が危ない。早急に手当てしなくてはならないな。悪いがエイミィ、次元震の調査は一時中断だ。転送してくれるか？」

『うん、今から転送するね』

「…一体誰がこんなことを…絶対に許さないぞ…!!」

「ドクター、この子は一体…」

「ふむ、酷い傷だね…ウーノ、丁度今治療ポッドが1つ空いていた

と思うのだが」

「はい、確かに空いています…」

「それならば最高レベルに設定し、丁重に治療を開始してくれたまえ。私の勘だが、その子供はただの人間では無い気がするからね」

「了解しました」

「……あの脳味噌共が言っていた『プロジェクト S・W』…関係無いと、いいのだが」

ピースは散りばめられた。

そしてそれは、まるで引き寄せられるかのように一箇所へ集まって

いく。

ずっと昔から、決められていたかのように――

これは、とてもとっても不幸な兵器達が望まぬ戦いを強いられた結末を語るお話。

魔法少女リリカルなのはStrikerS
Project S.
W：始まります。

プロローグ（後書き）

駄文失礼します。天破です。ノリとノリとノリで書き終わりました。大変ですね、やっぱり…その場しのぎで書くというのは（お。嘗めてましたね、小説を。読むのも書くのも楽しいですが、大変さが違います（当然だ。

あ、この後にまた人物紹介を書く予定なのでよければ見てやってくださいませ。

では…閲覧ありがとうございました♪

【8／10更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）（前書き）

後々補正を加えていくと思います。

何か『これおかしいだろ』なことがあればメッセージで遠慮なくお知らせくださいませw

8／10更新…現在主人公達が使った希少能力を追記しました。

・主人公達の外見をちよつと変更しました。

【8／10更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）

登場人物の紹介です。

ネタバレがありまくりなのでネタバレするなよバーローって方は読み飛ばしても多分大丈夫です。

それでは、駄作者天破による設定の甘さをとくと御覧下さい（え

【生態兵器シリアル？1“無還者”^{リセッター}】

名前…???（現在は名前と呼べるものは無く、リセッターと呼ばれることが多い）

外見…いつもドレスのような服を着ている。髪は黒く、背中を中心にから少し長いのが特徴。戦闘時は目が紅くなるが通常時は黒。

身長…185cm以上 体重…55kg以下

所属（現在身を寄せている所）…???（分かっているのは管理局

の上層部の何処かということのみ)

魔力量…EX以上

魔道士ランク…正規な魔道士ではないため判定不可。

魔力光…黒 魔力変換資質…【炎熱】、【雷電】、【氷結】、【暗黒】、【重力】、その他

使用術式…古代ベルカ式、近代ベルカ式、ミッド式、????

レアスキル
希少能力

・【死契執行】…??? (代償として自らの命を喰らうことのみ分かってる)

・【脅威返し】メナスカウンター…障壁の類を展開し、(障壁に)直撃した攻撃を自由自在に跳ね返すことが出来る。

・【?????】…緊急時にのみ発動する能力。本人もこの能力を持っていることすら知らない。

・【音速再生能力】…腕が千切れた程度なら3秒程度で完全に再生が終わる能力。常時発動している。

・【幻影体現】ミラージュボディ…自分への注意を他のものに強制的に移すことができる能力。サーチなどからも反応を消すことが可能なので使い勝手がいい。

・【精霊人形】…魔力変換資質を利用して造り上げた炎や氷の人形を自分と錯覚させる能力。作れる個数に制限が無く、圧倒的な演算能力さえあれば全ての人形に違う動きをさせることができる。

・【創造魔力】イマジネーションエネルギー…魔力変換資質で作った氷や炎が消えなくなる。雷

ならゴムにすら帯電し炎なら水の上で燃え上がるという世界の理を無視したような能力。

備考…生態兵器研究での“最高傑作”。世界最高の魔力、世界最強の能力を持つ、管理局の『所有物』。

ウェポンマインド

感情が一切存在せず、戦うときも無表情。兵器の心と呼ばれる洗脳まがいのことを施されたことによって、自らを機械だと思い込み、苦痛も絶望も感じない兵器へとなった。常に機械の様に口に出して状況報告をするのでそれを隙だと見る人間が多いが、それが出来るのは空間認識能力、状況把握能力が異常に長けているからである。

プロローグで研究所を倒壊させたのは間違いなくこの少年。

どうやら、リミッターを常に誰かにかけられているようだが…？

【生態兵器シリアル？2

パニッシャー
消失者】

名前…高町春斗

たかまち はると

年齢…19

外見…性別は男。首程度まである茶髪で、耳を隠すように垂れている。目の色は普段は金色だが、戦闘時は銀になる。

身長…180cm前後 体重…70kg前後

所属（現在身を寄せている所）…高町家↓現在、能力がある事を隠しつつミッドチルダにてなのは手伝い。

魔力量…SSS（常に隠している為検査では出ず）

魔道士ランク…計ればSSS程度。状況によってはEX以上。

魔力光…明るいプラチナ色 魔力変換資質は無し。

使用術式…ミッドチルダ式だが、転移や飛行などの補助的なことにしか使わない。

レアスキル
希少能力

ロストバフォーマンス

・【消失処理】…白銀色の閃光を放射し、貫いた物体を文字通り消失させる能力。本人も良く分かってないが、『消失』という概念が閃光という形になったのではないかと言っている。
元ネタはワンピースの黄猿より。

マジックストップ

・【強制術式停止】…発動中の魔法を強制的に停止させてしまう術式。たいしたこと無いように思えるが、転移中に停止させられたら酷いことになる。

・【再生能力】腕がちぎれとんだ程度なら、10秒あれば回復出来る。常時発動中。

備考…なのはが5歳の頃に拾われて、そのまま成り行きの養子的な感じになった。名前は高町夫妻から受け取り、柄にも無く泣いてしまったことがある。人が怖いという理由で学校には通わなかった上、まだ未熟だったためジュエルシード事件、闇の書事件にも全く関わらなかった(というかあった事を知らなかった)。現在は自分の力を理解し、その危険性も分かっているためなのはやフェイトには黙秘している。

なのはの事を『なのは姉』と呼ぶ。なお、何故か色々な意味で時間軸があっていない事に疑問を感じている。

【生態兵器シリアル？3

再生者^{ファスター}】

名前…フラン・T・ハラOWN（誰が名づけたかは永遠の謎として処理された）

年齢…19

外見…性別は女。青い髪のスィンテール。目は普段は水色だが戦闘時には深い緑に染まる。胸は小さry

身長…170cm程度 体重…50kg程度

所属（現在身を寄せている所）…フェイト家↓管理局にてフェイトの手伝い

魔力量…魔力が無い

魔道士ランク…???（魔力が無いため現在は判定不可）

魔力光…魔法が使えない。 魔力変換資質も無し。

使用術式…魔法が使えないため無し。

希少能力^{レアスキル}

【巻緑戻光】…“戻る”という概念が光になった能力。あらゆる存

在・概念を戻すことができる。

治療にも使えるほか、人の人生を巻き戻すことで子供に戻すことすらできる。ガジェット等に使える組み合わせられる前にまで戻せるなど、攻撃にも使える能力。

【陰陽術】…『地球』に存在する一種の魔術。研究員が面白がって詰め込んだようだが、魔力無しで使える敵撃退術として大いに貢献している。補助として人払いや障壁なども存在するので使い勝手がいい。

【再生能力】…春斗に同じ。

備考…傷だらけの状態でフェイトに保護され、それからずっとフェイト宅で少しづつ何かを食べながら眠っていた。何年かたつと回復し、フェイトと共になのは宅へ行ったところ春斗に遭遇し、思わず抱きついたという黒歴史が存在する。当然彼女もジュエルシード事件、闇の書事件に全く関わっておらず、特に闇の書のバグが出現した夜にはもう眠っていた。結界があったことすら気づいていなかった。

天然でお嬢様風な口調。ちょっとツンデレ。嘗めてかかるといつの間にか赤ん坊になってたりする。

フェイトのことを『フェイトお姉様』、または『お姉様』と呼び、『兄妹』は呼び捨て、その他の人には大抵さんづけで対応している。

【生態兵器シリアル？4 創造者】クリエーター

名前…シーナ・ハラオウン

外見…性別は男。しかし女装すると女っぽくなるお約束。髪色は薄い赤でポニーテール。

身長は165cm～167cm程度。体重はなぜか極秘事項。

所属（現在身を寄せている所）…ハラオウン家↓たまにクロノの補佐で事務的なことをやっている

魔力量…SS（常に隠している為検査では出ず）

魔道士ランク…計測不可能

魔力光…少し暗い赤 魔力変換資質は無し。

使用術式…近代ベルカ式

レアスキル
希少能力

・【創造神】ザ・クリエーター…様々な物体を粘土細工のように形を変えてしまうことが出来る。何も無い所からいきなり物を造りだす等をするにはまだ経験が足りない。元ネタは遊戯王など。

・【人形支配】パペットマスター…『意思の無い物体』限定で自由自在に動かせる能力。1度に10体が限界。『意思の無い物体』にはガジェット等も含まれる。訓練次第で何体でも操れるらしい。

・【術式模倣】マジックコピー…1度見た術式を1瞬で構築できる能力。だが『見て』、その魔法を『喰らう』ことが前提なので使えたらいいな程度にしか本人は考えてない。元ネタは…色々ありすぎて忘れた。

・【再生能力】…上記に同じ。

備考…とある管理世界でのクロノの調査中に拾われて、高町家と同じ感じでそのまま養子になる。

物静かな性格で、1人称は『僕』、2人称は『君』。『一番兵器に相応しくない性格』をしているとされている。クロノ達には能力などのことは伏せてあり、ただ仕事をこなすスピードが異常な少年としか見られていない。なぜかニアミスが多く、春斗やフランと会った事が無かったりする。現在は地上本部に出張しており、レジアスやオーリス、ゲンヤとも顔見知り。特にレジアスが実は楽しい人だということを知っている数少ない1人であり、よくオーリスを嫁にどうかという誘いに対してのらりくらりとかわしている。自分の事を歩く質量兵器だと思っている。リンディによく女装させられる。この作品中で、男の娘の宿命を背負わされている駄作者が描くストリーターの被害者。

【生態兵器シリアル？5 ヴァイター 拒絶者】

名前…クインディール（イタリア語の15番から）

年齢…19歳

外見…曲線状に立つ1本のアホ毛と腰まである長い黒髪。ゴスロリ服をいつも着ている。胸が大きい。しかし背は小さく、160cm程度で止まっている。

身長…160cm前後 体重…スカリエッティ及びナンバーズ合意の元焼却された為閲覧不可

所属（現在身を寄せている所）…スカリエッティ宅でナンバーズと遊んでいる。

魔力量…SSS

魔道士ランク…SSS

魔力光…滅茶苦茶目立つ金色 魔力変換資質は電気のみ。

使用術式…ミッド式

レアスキル
希少能力

・【拒否宣言】リフューズコール…“拒絶する”という概念を持った影のようなものを操る。この概念はときに最強の盾に、時に最高の武器になる。拒絶するものは選ぶことができる。元ネタはディ・グレイマンのティキ・ミック（名前違うかも汗）。

・ ライトニングチャージ【雷電充電】…自分の身体に触れた相手の魔力を電気に変換して蓄えることが出来る。でもダメージは来る。蓄積できる量を超えるとそのまま喰らうという結構難しい能力。

・ マジックバーン【魔法爆破】…魔力を暴発させる厄介極まりないスキル。某教導官のスターライトブレーカーを暴発させたらどうなるかを考えると、この能力の恐ろしさが分かるだろう。スカリエッティですらも顔を引くつかせながらこの能力の使用禁止を言い渡した。元ネタはチンクのIS、ランブルデトネイター。蛇足だがチンク本人とも仲がよく、彼女達が組むと爆発物の嵐である。一度スカリエッティの訓練室が完全崩壊したため、彼女達が戦闘で組むのはスカリエッティの許可が無くてはできなくなった。

・ 【再生能力】…上記に同じ。

・ グロス・チャーム【艶やかなる誘惑】…理性に揺らぎがあった生き物を思うがままに操れる力。大半の男は引っ掛かるものの、当然ながら朴念仁な男やそういうことを何も知らない男、というか元々性欲がない男は引っ掛からない。

備考…14年前にスカリエッティへ拾われた。リセッター無還者を除いて唯一保護者に自分の事を明かしている兵器の1人。口調が特殊であり、1人称は『妾』わらわ、2人称は『お主』などと言う。10歳の頃にスカリエッティやその頃存在していたナンバーズへ自分が知っていることを話して出て行くこうとするも、ナンバーズとスカリエッティ総出で止められた。その後ウーノが徹夜で考えたクインディールという

名前を与えられ嬉しさと涙を流した。スカリエッティやナンバーズには手のかかる妹、または娘という見方をされており、その一方で明らかに親バカな一面を見せている。要はキャラ崩壊である。造られた成功体の中では末妹に当たる立場であり、いつも兄や姉のことを隠れて探している。周囲からはディール、またはクインと呼ばれる。

全体的な備考…彼ら『兵器』は味方を攻撃しないよう、自分以外のプロジェクトS・W関係者には攻撃できないよう洗脳されるはずだったのだが。その前にリセッターが研究所を滅ぼしたため中途半端に終わってしまった。最低でも自分以外の『兄妹』——つまりは他の『兵器』達を——見つけられて、その？を知ることが出来るだけである。フランが春斗を見て気づいたのはそういう理由があったのだが：周囲の人間には生き別れた幼馴染（？）という説明で納得してもらったらしい。現在はクイン以外は誰にも能力を言っていないようだが、いつかは…？

【8／10更新】登場人物紹介（かなりネタバレあり）（後書き）

以上、少し遅れた人物紹介でした。

御指定等々お待ちしております（キリッ

え？能力がチートすぎる？それが天破クオリティ（ry

“邂逅”（前書き）

ようやく一話。恐らく週1更新になります。

今回の話は我等が将、巨乳の星の登j（火龍一閃

注意…駄作者のせいでシグナムさんが弱体しています。申し訳在りません。

“邂逅”

「『夜天の王、八神はやての騎士　ヴォルケンリッター烈火の将
シグナムとお見受けします』」

それは普通の任務だった。

暴れている魔法生物を調査し、帰還せよという至極単純な命令。

そしてそれを命じたのは他でもない我が主——罌である筈が無い
と思っていた。

だからこそ1人でここに来て、魔法生物を調査して早く帰還しよう

と。

甘すぎた。既に、自らの主である八神はやてがこの任務を頼まれた時点で罨だったのだ。

「…だったら何だというのだ？」

任務を完了したと思ったと同時に、一目見ただけで硬いと分かる堅強な結界が辺り一面に張り巡らされ、目の前に真っ黒なドレスのような服を着た男が現れて、冒頭の言葉を投げかけた。

一瞬で形成された状況と投げかけられた言葉に呆然とするのも一瞬、呼びかけられた烈火の将——シグナムは直ぐにデバイス『レヴァンティン』をセットアップし、自らの騎士甲冑を装備する。

「『セットアップを確認：投降の気配は無いと判断。警戒度をSランクへ上昇』」

「無論だ：みすみす殺されはしない」

目の前の男は、無表情で無反応。

殺意も何も無い男だが、だからこそ怖い。

殺意の無い人間が殺しにかかってくる。矛盾していそうだがそれは即ち暗殺者である所以。

故に、武人たるシグナムは理解していた。

目の前の男は、強敵であると。

「『言動・デバイスから目前の生存反応が烈火の将であることを断定。それでは』」

警戒していたはずだったのに、次の瞬間に目の前の男はシグナムの目から掻き消えた。

「『——標的の排除を、開始します——』」

「ッ！？（速い！） レヴァンティン！」

《障壁》

完全に不意をついた攻撃にも関わらず、シグナムはその『火を纏った』攻撃をレヴァンティンの障壁で防御する。

その一撃は、鋭く、重い。

かなりの手練である。改めてシグナムは、そういう結論を出した。

「はあっ!!」

「『回避』」

この状況の打開策——つまりは勝負に勝つ方法を考えつつ、シグナムは横に剣を振るうも、男は身軽な動作でバックステップしそれかわす。

「レヴァンティン！」

《カートリッジロード!》

「紫電…一閃！」

『後退』という動作を取った隙を見逃さず、切り込んでいくシグナム。その光景は、傍目から見れば明らかに圧倒的。

しかしシグナムは攻撃しながらも、1つの確信を抱いていた。

（…違う。これは私が押しているのではない…逆に押されている…！？）

常人の目には負えない斬撃の嵐が男へ降りかかるも、男は一向に慌てる様子も無くそれを極めて無駄のない動作でかわす。

機械的に、まるで分かっていたかのように。

「『攻撃パターンの記憶70%終了。反撃に移ります』」

そして、均衡は唐突に終わりを告げる。

無機質な声の後、シグナムの顎が蹴り上げられた。

「うっ…ガッ!？」

「『炎魔の拳撃』」

「ぐうつ…嘗めるな!!」

再び障壁と炎の拳の競り合いが起き、戦況がほんの数分前へとリセツトされる。

しかし、シグナムの胸にあるのは焦燥と混乱だ。

（今、奴は私の攻撃パターンの記憶が終わったと…まさか、この短い時間で私の癖を見抜いたも——）

「『零距离 ゼロ・ライトニング 虚槍雷光』」

「!?!? しまっ、」

焦りのあまり次なる敵の行動に気づけなかった、と気づいたのは既にその攻撃を喰らった後だった。

それはあまりにも致命的で。次の瞬間には、彼女の腹に青白い稲妻の槍が突き刺さっていた。

「――ツぐ、ああ…ッ！」

痛みから来る呻き声を押し殺し、口を血が出るほど噛み締め目の前の敵を睨む。

「『虚槍雷光の効果があることを確認。連射モードへ移行――』」

その言葉を聞き、一瞬顔を青ざめさせたシグナムは直ぐに男へ剣を振りかぶる。

（冗談じゃない！ あんなものを連射されては、私とてただでは…！）

不意をつかれたとはいえ、痛みが走るまで喰らったことすら分からなかった攻撃。そんなものが連射されれば自分がどうなるかど想像に難くは無い。

「『！』」

その行為に少し驚いたのか、しかし無表情なのは変えないまま、いつ造ったの分からない雷を圧縮して作られた剣によって受け止められる。

鏢迫り合い、しかしそれも数秒。男はその膠着状態を雷の剣を思い切り振ることで打破、そのままシグナムへと振るうも彼女はそれをレヴァンティンで受け止める。

そして始まったのは剣技の応酬。

青光りする雷の閃光と炎を纏う魔剣との交錯が、何回も、何十回も繰り返される。

（私の剣技について来るか…いよいよ持ってこの男、何者だ!?!）

「『…剣技に関しての能力値はSS以上と断定。魔力ブースト使用、速度上昇開始』」

「なっ!? チッ、レヴェンティン、此方もだ!」

《了解! カートリッジロード!》

人の出せる限界を超えた剣技の応酬は、更に加速する。

彼らの剣が出す衝撃派によって地面は陥没し、不自然に風が吹き荒れる。

また、彼女自身も自分の出せる限界を超えていた。

(くっ…剣の腕には多少なりとも自信があったが、こうも容易く私と同格かそれ以上の力を……それも、デバイス無しで…)

使っている力は雷の変換資質を使い雷を圧縮した剣。当然カートリッジシステムなどは無い。

先ほど魔力ブースト——恐らくは自己強化魔法の類——を使ったことから、強化魔法も自在に扱えるのだろう。

ここに、もしレヴァンテインクラスのデバイスがあったら。それこそゾツとしない。

「くっ…はぁあっ!!」

「『…、』」

シグナムの剣を、まるで意に介さないように受け流しして斬撃を入れてくる。

その威力は鉄槌ヴァイダーの騎士の一撃に匹敵し、その速さはシグナムの宿敵フェイトを思わせる。

それに耐え、全てとは言えないが往なしつつ更に攻撃をする烈火の将もまた異常の一言。

響き渡る衝撃音、輝く火花。その光景は幻想的で、彼らが殺し合いをしているとはとても思えないだろう。

それほど鮮やかで、それでいて綺麗な攻撃・斬撃の嵐。一種の幕として金を取れそうな舞台と言ってもいいかも知れない。だが――

「『…依頼者クライアントからの、指令を確認』」

——これもまた唐突に、この一幕は終わりを告げる。

男に聞こえた言葉は、今彼が誰よりも優先すべき存在からの指令。

「依頼者クライアント…？
なるほど、その依頼者とやらに私の暗殺を頼まれたわけか」

「『…』」

その問いに、男は雷の剣を消して右手を前に突き出して。。

冷徹に、冷酷に、冷静に。

「『————依頼者からの要請により、任務を標的の完全なる排除へと変更します。1 s t e r ミッターの解除申請を開始』」

シグナムへと、死刑宣告を突きつけた。

「は————ッ!?!」

そして次の一瞬で、均衡していたはずの勝負は終わりを告げた。

彼女の、2秒に1回あるかないかの瞬きという絶対の隙。その間に、氷の杭が何本も彼女の身体に打ち込まれていた。

「…が、はぁッ…」

「『申請の承認を確認、同時に攻撃を終了。標的の損傷箇所の詳細を確認——右胸、腹、左足、右腕へ“デット・フラワーズ・アイス 氷華冷葬”の直撃と断定。生存確率は30%以下、放置によって死に至る時間は2分程度』」

そんな光景を見ても、目の前の男は眉1つ動かさない。まるで人形のように、何も疑問を持たない上に何も考えていないように。

否、シグナムが恐れたのはそんなことではない。

この杭が身体に打ち込まれた瞬間、男と目が合った。

深い、深い、闇だった。何も無い、本当の無が広がっているような目だった。

それこそ、この世界の何も見ていないような、そんな目。

（…主、はやて、私は、恐らく、ここまでで、す……どうか、お氣をつけを…あの、男）

「『——』“依頼者”の指示——処理、指示——』」

（ただの、人間では…ありませ…）

そこまで考え、同時に巨大な爆発音が響くと同時。

烈火の将、シグナムの意識は完全に闇に染まった。

“邂逅”（後書き）

天破「デバイスの口調もシグナム姐さんの口調も分らない件。如何してこうなった。というかシグナム姐さんすいません」

シグナム「色々突つ込みたいところがあるが、何だこの駄文は。私が弱すぎるではないか。まあ、奴が強すぎるというのもあるんだろうが…」

天破「自分で書いてて思った。あれ、この兵器達強くね？」と

シグナム「さすがは下書きも無く行き当たりばったりで書いていることだけあるな…いつか絶対お前批判喰らうぞ」

天破「本当に勘弁してください。まじで私立ち直れませんよ？

…というわけなので、誹謗中傷本当に勘弁してください…この小説は私の欲望と妄想が詰まった駄作者の小説です。当然駄文で超駄文です。御気を悪くされてもどうすることも出来ません。その辺りよろしく願いますm——m」

シグナム「色々と作者は現実世界で参っているらしいからな…

まあ、お手柔らかに頼む。それでは次回だが…私は生きているのだろうか？」

天破「シグナム姐さんを殺したら全世界のシグナムファンが私にスターライトブレーカー級の精神攻撃を放ってくるはず。それにシグナム姐さんはこの話の中でもヒロインに近い立ち回りなんだから、死んでもらっても困ります」

シグナム「…ヒロイン？ちょっと待て、聞いてないぞ？」

天破「という訳で次回！　いつ更新になるかは当然の如く未定です！　本当にすいません！orz　呼んでくださっている皆様には申し訳ありませんが、どうかかなり遅れても見てやってくださいお願いします…」

シグナム「答えない気か…まあいい。感想・指摘などもしもらえれば嬉しさのあまり作者がブレイクダンスをやるようだ。作者のアホ面を拝みたい勇者は、是非ともこの駄作品に感想を入れて欲しい」

天破「酷いいわれようだ…あ、処女作なのでこれからの改善はそこまで期待しないほうがいいです（キリッ　直して行きたい所存ですが、何かあればお伝えくださいませ。それでは、また次回に！」

第2話　“命令”

“命令”（前書き）

Q…何故こんなに短いのですか？

A…天破が先のことを考えない馬鹿だからです

Q…何故戦闘シーンが分かりにくいのですか？

A…第三者視点で、しかも男（シグナム姐さんの敵）が機械的に喋るという厄介な特徴を持っているので絡ませにくいからです。

という訳で第2話お送りします。いきなりお気に入り登録して下さい。あった方がいるようで、本当に嬉しいです。

では本編をどうぞ！

“命令”

第三者視点 s i d e

膝を突いたまま気を失ったらしいシグナムを虚ろな瞳で見つつ、彼女を暗殺しようとして張本人である男は、クライアアント依頼者との念話を始める。

「『標的の気絶を確認。放置しても、止めを刺しても結果は97%の確率で同じと算出しました。クライアアント依頼者、指示を』」

『。』

「『——』“依頼者”の指示を確認。優先すべきは死体の処理との事。指示を実行します』」

人形のような動作で、烈火の将へと近づく男。

動きに合わせて、ドレスのような服の裾が翻るが、それすら死神の一挙一動にすら見える。

そう、彼は今間違はなく“死神”だ。今まさに、1つの生命を奪おうとしている。

「『確実に指示を実行すべく、1ランク上の魔法の使用申請開始。承認を確認——術式展開』」

シグナムの前へ立った男の足元に魔法陣が描かれ、その手をシグナムへと翳す。

「『絶対焼却魔法^{フレイムバーン}”。発動した場合の標的死亡確率は————100%』」

彼女にとって絶望的な数値を算出し、しかし確かなる結果を未来に示しながら男はたった一言、『発動』というキーワードを唱えればシグナムの身体は文字通り完全に焼却され死体すらも残らない。

普通の人間なら、そんな光景を思うだけで嫌悪するだろう。そしてそれを見るだけで、苦しんでしまうだろう。

生憎と、今回シグナムの暗殺を依頼されたこの男は完全に『普通』では無かった。いや、『人間』という部類に入れてしまっているのかも疑わしい、そんな存在だった。

「『さようなら』」

形式だけの別れの言葉を口にし、彼は魔法を発動――――

———しようとした瞬間に、その肩へ白銀の槍が突き刺さった。

「『！ 敵対反応。数は六。依頼者の指示を———』」
クライアアント

「その依頼者っちゅーのをちょっと教えてくれんかなあ？」

「『…！ 魔力反n———』」

その槍を受けて、『石化』していく身体をもとめず指示を仰ぐ
うとした男へ、これもまた白い砲撃が直撃し大規模な爆発が発生。

その砲撃で起きた粉塵が辺りを覆った。

「やった？」

「いや、まだや。あのシグナムが、傷を1つも付けられずに此処まで酷くやられたんや…この程度で終わるわけが無い…いや、終わらせへん」

その言葉が終わると同時に、男を中心に取り巻いていた粉塵が不自然に吹いた突風で取り払われた。

「『…魔法形態をベルカ式と断定…魔法光、威力、技術から該当する魔道士を検索…完了…』」

その姿には当然のように傷は無く。

それどころか、その真っ黒なドレスにも煤1つ無い。

放ったはずの槍も、いつの間にかその身体からは消え失せていた。

そして、それだけで目の前の敵の『異常』さを垣間見た魔道士達は、全員が警戒態勢に入る。

そして男は、常人なら気絶してしまうかも知れない敵意・殺意の中心にいながらもまるで気づいていないかのように“標的”の援軍として現れた“敵”の名前を告げた。

「『98%の確率で…夜天の王“八神はやて”だと推測します』」

「…私の家族を傷つけた報い…倍にして返したるからな」

夜天の王、八神はやてとその騎士、そして仲間^{友達}が空中で男を囲んでいた。

“命令”（後書き）

天破「駄目だ私、本当に才能ない」

はやて「今更気づいたんか…」

天破「結構傷ついた、今の言葉で。…さて、今回のタイトルである“命令”ですが皆さん疑問に思ったでしょう。何処が命令なのかと」

はやて「なんてことはあらへん：ノリで決めたら書いてる途中に全くタイトルとかみ合わない内容になってるってだけや」

天破「マジでごめんなさい。次からは気をつけます。それでは次回ですが…」

はやて「私のターンが来るで！フッフッフ、あの男ギタギタにしたる…！」

天破「それは合っている様で間違っていたりする」

はやて「えゝ」

天破「それでは次回！」

第3話 “ 化け物 ”

“化け物”（前書き）

という訳で第3話をお送りします。

戦闘がようやく終了!! なのでやっぱり短いです（お

という訳で、駄文ですがお楽しみいただければ幸いです。

それではどうぞ！

“化け物”

「時空管理局です。今すぐ投降してください。投降すればあなたには弁解の余地があります」

そう告げたのは、白いBJを着た女性——高町なのはである。

しかしその目には怒りが宿っており、投降をしたとしても恐らく攻撃をするであろう意思があった。

「『…時空管理局…白い悪魔、高町なのはと断定します。更に、その申し出は却下します』」

そして彼が呟いた一言で更に怒りを強めるなのは。当然ながら、その二つ名は彼女にとってかなり不本意なものだった。

直ぐにでも特攻しようとしたが、先程男に向かって啖呵を切った――八神はやてがそれを止めた。

「落ち着くんや、なのはちゃん。アイツには聞きたいことがある」

その言葉に異論を唱えたかったのはだが、この中で一番つらい気持ちでいるのは他でもないはやてだということに気づいて引っ込んだ。

「時空管理局、やのうて私本人として質問するで。何故シグナムを狙った？」

その節々に溢れる怒りの波長。しかしそれに気づかぬとでも言うように男は言った。

「『…依頼者クライアントからの許可が取れたのでお話します。理由は簡単です』」

男は、無表情で無機質な声でその事情を告げた。

「『烈火の将、シグナムがあなたの方の中で一番大きな存在だからです。もし彼女を殺しておけば、貴方達とて復讐に取り付かれる。そこを狙って私が1人ずつ殺そうという計画でした』」

「…それはなんや？アンタが提案したんか？」

「『その問いへの返答ですが、違います。これは依頼者クライアント自らが私へ指示を下したものです。しかしながら、別に殺さなくても良かったのではないかとも言っています』」

「其は何故や？」

その問いに、少し男はその目を閉じ、大きく息をすう。

再び開いたその瞳は——紅かった。

「『皆さんがここに来るだろうからです。ほら、今殺せば一網打尽に出来るかと』」

もう、問答など必要なかった。

次の瞬間、はやての両脇に控えていた鉄槌の騎士——ヴィータと、高町なのはがそれぞれ砲撃とデバイスによる一撃を放った。

「アクセルシューター!!」

「ギガントオオ…シューラーク!!!」

魔力と共に怒りという感情を乗せ、その“鉄槌”は寸分変わらず男へ接近する。

それを見た男もまた、右手を前に上げて、攻撃を開始しようとする。
その手に、“金色”の魔法陣が現れた。

「「なっ!？」」

「あれは、私の…!？」」

そう言って驚くのは、見覚えのある魔法陣を見た——フェイト・T・ハラオウン。

そう、それは紛れもなく自分の魔法——まさか、稀少技能レアスキルかと疑う思考も束の間、それは放たれた。

「『^{クライアアント}依頼者の趣向により、フェイト・テストロッサの魔法を使用開^{ダウンロ}始^ド。発動しマス――』“ハリケーンセイバー”』」

男が一瞬で造った雷の剣を振るうと、その魔法陣より巨大な雷の斬撃がなのはとヴィータを襲った。

「っ!?! ― (フェイトちゃんの魔法よりも大きい!?) レイジング
ハート!!!」

「チィ、アイゼン!」

《《プロテクション》》

2つの堅固な障壁が張られ、男の放った“ハリケーンセイバー”（？）を受け止める。

「『…、障壁…』」

男はその様子に、全く動じずにただ一言発した。

「『障壁ヲ解除セヨ、“レイジングハート”、“グラーフアイゼン”』」

その言葉と同時に、彼女達の障壁が無かったかのように消え去った。

「えっ?——」

「な——」

何が起こったかも分からぬまま、2人の少女は雷の斬撃に直撃し、爆発した。

「なのは! ヴィータ!? :ツ、許さない!!」

どうやら直撃して一時的に気絶しているようだった。

男に感情があれば、非殺傷設定であるだけ感謝して欲しいものであるがそんなものは彼には無い。

今は目の前にいる女性の対処を優先する。

「バルデッシュー!!」

《カートリッジロード!!》

「ソニックムーヴ!!」

ただでさえ早い“金色の閃光”は、カートリッジをロードした瞬間に常人の目には追えないスピードへと変化する。

地面から空中まで、多くの虚実を織り交ぜながら――

――狙うは、男の死角。

（獲った!!）

此方に気づかない男に、フェイトは会心の笑みを浮かべ、バルデツシユを振るう。

その美しい顔が驚づかみにされ、ソニックムーヴが強制停止させられたことに気づいたのはその2秒後であった。

「…!?!? ツ、あああ…!!!」

「フェイトちゃん!?!」

八神はやて、そしてその後ろに控える守護騎士達は信じられなかった。

彼女——フェイトのソニックムーヴは人の目には追えない程に速度を上昇する強化魔法。ましてやは今は、男の完全な死角を狙った。それが今、いとも容易く見破られ彼女の顔は握りつぶされようとし

ている。

「『依頼者クライアントから許可をもらったので、貴方の問題点を指摘して差し上げます。まず先程の魔法の軌道ですが、あんなに動いていれば何処から何処を狙ってくるかなど瞬時に計算できます。早く動けるのだったら、私の背後なり斜めに回り込み、私の首を切断すべきでした。それが貴方の敗因です。しかも、そのデバイスは非殺傷ですか？ 私には感情がありませんが、恐らく自らの仲間とやらを殺されかけ非殺傷で敵を捕らえようなどとは虫が良すぎると私は思考しまさ……！
……クライアントからの指示を確認……』」

その紅い目は見る見るうちに黒くなり、フェイトをその場で放り投げた。

空中で一回転し、地面に立って男を睨むフェイトだが、当の本人は何処吹く風というものである。

「『依頼者クライアントからの伝言です。今回はこれで引かせていただきます』」

「「「!!」」」

「嘗めとんのか、私らを…これだけやられてだまっと思うんか！？」

「『いや、100%の確率で貴方は黙らずを得ないと、私は算出します。そして伝言です、“これが何か分かりますか？”』」

そう言って男が見せたのは、ミッドチルダの人々の映像。

皆笑いあい、どつきあいながら仕事をしている。

「…それがどうかしたんか？」

いやな予感を感じ、低い声でそれを聞いたはやてはその予感が正しいことを本人の口から証明された。

「『ここで貴方が私に攻撃を仕掛けた場合、“不慮の事故”で貴方方全員とここに写っている人間が殺される、と指示が出されました』」

「ッ!？」

「なんやそれ…一般の人まで巻き込むつもりなんか!？」

「『それが命令なのなら、私はその通りに動くまでであり私には何

ら関係の無いことだと回答します』」

その言葉を受けて、ついに彼女達は絶句した。

他でもない、彼は自分の手で“不慮の事故”を起こし、そしてそれを自分には何ら関係ない、と言い切ったのだ。

「『…それで、どうされるのですか？』」

「…私はアンタへ手はださん。今回はな」

「『了解しました。今の言葉を依頼者クライアントへ送信…完了。それでは、また会いましょう。』」

形式だけの言葉を投げかけ、男は霞のようにその場から消えていく。

「…化け物やな」

「『それが、私の存在意義なので』」

はやての呟きに、凍えるような無機質な声が帰ってくる頃には、もうそこには誰もいなかった。

“化け物”（後書き）

なのは「ようやく私たちの名前がでたね」

天破「実はシャルとザフィーラがでてなかったりする」

なのは「あ…で、でもでるんでしょ？でるんだよね！？」

天破「次回は他の“兵器”達の対談みたいな漢字になる予定だから無理ぽ」

なのは「出してあげて欲しいの…あまりにも2人がかわいそうなの」

天破「うん…頑張る。それで、戦ってみてどうだった？」

なのは「…強すぎるの。それに、障壁もいきなり消えちゃうし…よく分からないなあ」

天破「まあ色々と下手な伏線を入れたからなあ…いつか分かるはず」

なのは「それに、フェイトちゃんのソニックムーヴもとめられちゃうし…何者なの？」

天破「ああ、それに関して1つ。

彼が普通に言っていますが、実は何処から何処へ攻撃することを計算するのってスーパーコンピュータでも難しい計算です。それは何故かと言うと、あんなに簡単に受け止められたという事はいつ、どうやって攻撃するのも分かっていたという事なので…」

なのは「作者さんの駄文っぷりに代わりに謝るの。ごめんなさい」

天破「君もなかなか毒舌だなあ…では次回」

第4話 “兄”

“兄”（前書き）

という訳で第4話です。

今回は“兵器”との対談になります。

なのは「私の出番は？」

あるよ？何回か会話するだけだけd（ディバインバスター

なのは「ふう：それじゃあ、第4話、“兄”！リリカルマジカル始
まります♪」

：その歳でその台詞は無理があr（スターライトブレイカー

“兄”

——翌日。

管理局 機動六課 病室 side

「…、シグナム…」

「シャマル、どうや？ シグナムの容態は」

「…酷いわね。この氷の杭がそこまで深く刺さっていなかったって言うのが不幸中の幸いかしら…」

ずっと外に出しておいても何故か溶けていない謎の水を持ってそう言ったのは、現在重傷を負っている女性、シグナムと同じヴォルケンリッター湖の騎士——シャマル。

そしてそれに唇を噛み締めて答えたのは、彼女達の家族であり護るべき存在、八神はやてである。

「命に別状は無いわ。けど、出血が多すぎる…目が覚めても絶対安静になるわね」

「完治するまでどれくらいや？」

「少なくとも、1，2ヶ月はかかると思うわ」

「…分かった。そやな、私はこの事件の後処理とかがあるから…シグナムのこと、頼むで」

「ええ、任せて」

本当なら、家族である彼女の傍でずっと看病していたい。しかし、現実がそれを許してくれないことは明白であった。

彼の、“エースオブエース”と“鉄槌の騎士”、そして“金色の閃光”が負けた。しかも、それぞれがほぼ一撃で、だ。

いや、厳密的には負けたとは言いがたいのだが、このニュースは管理局中を駆け巡り、ほぼ全ての職員へと影響を与えた。

マスコミも勝手に騒ぎ立て、彼女達のこと考えずに取材の申し込みが後を立たない。

更に、現場にいた中で最も偉い立場にあるはやてからの報告は今最も注目されていた。

「……」

しかし彼女の心中は、それどころではない。

家族は傷つき、自分の仲間はいとも容易く落とされ、それどころか

それらを行った犯人はまんまと逃げてしまった。

一般市民を盾に脅迫されたとはいえ、なんということか。

家族が、仲間が傷つけられたのに、自分は何も出来なかった——
その事実が、はやての心を締め付けていた。

「くそ…くそ…っ!!」

誰もいない、淋しい六課の廊下で、彼女は静かに涙を流して泣いていた。

管理局 仕事部屋 side

カチカチカチ…

「
…」

カタカタカタ…

「
…」

カチカチカチ…

「フエイトお姉様…」

「何かな？」

「…今はなのはさんと御一緒に、検査のために聖王病院にいらっしやるはずではありませんこと…?」

現在、午後3時。確かなのはとフェイトは聖王病院で検査を受ける予定だったのでは…ということを呆れたような顔で突っ込んだ女性——フラン・T・ハラオウンは、自らの姉ことフェイトを見ながらそう告げた。

「何だと…? なあ、なのは姉。俺はその話初耳なんだが?」

「…テヘッ♪」

「…時の流れって残酷だよな…」

「…春斗？　今の流れでのその言葉はどういう意味かな？」

そのフランの一言を聞き、たった今姉と呼んだなのは本人から万力の如き力を持つその右手でアイアンクロ―をされている男――高町春斗は、登場してからわずか一分にも満たずに、その短い生涯を自業自得で終えようとしていた。

「なのは姉、俺が悪かった。大丈夫だ、なのは姉は多分…いや、まだ現役で頑張れると俺が保障するから頼む離してくれ」

「分かればよろしい」

同じ姉でもこうも違うものなのかと、フェイトとなのはを見比べて無言で涙を流す春斗に、フランは苦笑しつつ

「で、行かなくていいのですの？」

と、念を押すようにそう言った。しかしフェイトはその言葉に笑って、

「大丈夫だよ。もう、心配性だなー、フランは」

「たった一人のお姉様なんですもの、心配にもなりますわ…」

と、返してフランはため息をつきながらずっと接続しておいた回線を開いた。

「それで、こう言ってますけれどもどう致しましょう。クロノお兄様」

『…全く持って、本当に困った妹と幼馴染を持ったものだ…』

「「クロノ!?（クロノ君!?!）」」

フランは最初にフェイトに突っ込みを入れたときから、この回線を開きっぱなしにしておいたのである。用意周到と褒めるべきなのか、それともなんということをして…と叱るべきなのか、ちよつとずれた混乱をフェイトがしているうちに、クロノがじゃんじゃん話を進めていった。

『頼むから、検査だけでいいから病院へ言ってはくれないか? あまり話したくはないが、管理局にも体裁がある。ここで君達を病院へ行かせなければ、管理局は病人を働かせる場所だ、というようにマインスイメージが生まれてしまう』

「「え〜？」」

いやそんな声を出すのはとフェイト。困った顔をするクロノへ、それを傍観していたフランと春斗から助け舟が出た。

「なのは姉、俺からも頼むよ。それでもアンタの弟だ、心配なんだけ？」

「フェイトお姉様、私もですわ。確かに異常なところは見られませんが、それでも病院へ行ったほうがいいと思います。フェイトお姉様の身に何かあるとすれば、心配で夜も眠れませんわ…」

それぞれの弟、妹による心配そうな顔＋涙目＋上目遣い。

若干ブラコン&シスコン化しつつある彼女達にそれが効かない筈も無く、先程とは打って違って先を争うように彼女達は病院へと向か

って行った。

「という訳でクロノお兄様、それではまた」

『ああ、達者でな』

その言葉と共に、通信が切られる。

その会話が最後まで言うように、暫くはパソコンのキーを叩く音のみが聞こえる空間となった。

カタカタカタ：

「
…、
」

カチカチカチ…

「
…
…
…
…
…
…」

カタカタ…カタ

「
…
…
3
…
…」
フラン

「『了解。稀少能力起動【陰陽術】。人払いと聴力阻害をかけますわ』」

ふと、無機質な声が春斗から漏れるとそれに応答するかのようにな機質で機械的な声でフランがそれに応答した。

それと同時に、何重もの人払い・聴力阻害の結界が仕事室へと掛けられた。

「…一息、だな」

「いいえ、一息ではありません…きつと、始まりですわ」

主語は無いが、それだけで彼らは通じ合えた。ずっと探していた、自らの心を犠牲に自分達を助けてくれた“兄”。そしてその手がかりを得るために、あえて憎んでいる管理局へと入り込んだ。何回か、見覚えのある上官をテレビで見る度に怒りが沸いた。見覚えのある研究員や所員が自分達の姉と笑顔で会話をしている度に殺意が起こった。それでもそれを押し殺し、ようやく“兄”であるかもしれない手がかりを得た。

いや、彼らには確信があった。なぜなら、なのはやシグナムの友人である八神はやてから「何故かシグナムの身体に刺さっていた氷が溶けない」と言っていたからだ。

イマジンエネルギー 創造魔力

“兄”の数多き稀少能力の1つだった。この魔力で変換した炎や雷は、絶対に壊れない。

炎は水を掛けても消えないし、雷はゴム細工に打ち込んでもゴムに帯電してしまう。

本人が望むまでは消えない、戦闘で兄が好んで使っていた能力だった。

しかしこの能力には欠点がある。それは、絶対に壊れないという性質が仇となって敵に使われる可能性があるからだ。

だからこそ、敵を素早く行動不能にする技能が彼には求められたわけであるが…今はそれは置いて置こう。

だからこそ、彼らは確信し…同時に齒軋りをした。

“兄”が、人を殺そうとした。

しかも、誰かの命令で。

これが示すのは一つであった。

「機械的に感情の籠っていない声で話していた、というフエイトお姉様の証言にも一致しますわ。恐らく、兵器の心による完全洗脳でしょう」
ウェポンマインド

ウエボンマインド
兵器の心——

“兄”の身体のみならず、他の兵器たちにも施された洗脳。プログラム

この洗脳を施された生き物は、“管理局の上層部”からの命令に逆らえなくなりどんなことでも忠実に実行するようになる。命を顧みない特攻であっても、何の躊躇もなしにそれを実行してしまうというものであった。

どうやら、一番実験回数が多かった“兄”への被害が一番大きく、他の兄妹達にはそこまで強い洗脳はかかっていない。「何か、やらなければいけ無い気がするような…」兄以外の兄妹達にはその程度であった。

「チッ：俺達にもプログラムされていたのにも驚きだったのに、兄貴には完成されたものが埋め込まれてたっつーのかよ」

「……管理局の屑め：何処まで私達を馬鹿にすれば気がするんです

の…?」

低い声で呟く彼女の身体から、薄緑色の光が漏れ出し始めた。

それを厳しく春斗は注意する。

「落ち着け、フラン…ここを廃墟にする気か。それもまた一興だな」

「…そうですわね。申し訳ございません…それで、どう致しましたう?」

「…洗脳を受けてんのなら、俺達のことすら分からない可能性が高い。俺達は所詮、造られた存在だ。だから——」

春斗は、その目を輝くような金色から銀に変えて、笑いながら言った。

「打ち倒すしかねえ。俺達の兄貴であり、世界最凶の兵器である無^リセッター還者を」

「他にもない、お兄様の兄妹である——私達^{兵器}が、ですわね」

「それが、この世界に生まれてきしまった俺達の罪滅ぼしだ。だから、まずは他の兄妹を集めなきゃならねえ……」

その目は再び、輝くような金色に戻っていた。

「どうにかして手段を考えなきゃならねえな」

「そうですわね…」

数分間、そのままの姿勢で考え事を始めるフランと春斗。

兄程には無いにしろ、フェルマーの最終定理を2秒で解ける程度には（人間の観点から言えば、それは絶対にその程度、とは言わないが）彼らは頭がいい。

考えることなど山ほどある。計算、断定、算出を繰り返すことに、飽きなど来るはずもない。

しかし、彼女たちは1つ忘れていた。

「…フラン、なのは姉とフェイトさんっていつ帰ってくんだったけ？」

「検査だけだから一時間程度で済むはずだから——16時程度ですわよ。それがどうかし——あっ」

現在の時刻：17..23

その後、慌てて人払いと聴力障害の術を解除し、解除した瞬間に2人の姉が入ってきた。

なんでも、検査が終わって戻ろうとしたら次から次へと別の仕事が見つかり、中々こちらへ戻れなかったらしい。

事情を知っている2人からしてみれば謝りたいのはこちらのほうであつたが、そうも行かないので仕事に戻った。

2つの兵器は仕事をこなす。

———兄妹全員で挑んで、結局1度も勝てなかった“兄”の姿を思いながら。

“兄”（後書き）

天破（生還） 「ふう、死ぬかと思った」

春斗「死なないお前が怖いぜ。なんでなのは姉の砲撃2発受けて五体満足なんだよ」

天破「それが作者クオリティ（キリッ）」

春斗「意味わかんねえよWWW」

天破「で、無還者って強いのか？」

春斗「ああ。俺たちが挑んでも、結局兄貴には一度も勝てなかった
…当然、兵器としての能力を駆使してだぜ？ 強すぎるぞ、あれは
…」

天破「そういう設定にしたんだから当然だけどね」

春斗「笑顔で言うなよ。俺たち、死ぬかどうかの瀬戸際なんだぞ？」

天破「ふっ、知らん」

春斗「駄目だこの作者、早く何とかしないと…」

第5話 “FW”

注：幕問を挟む可能性があります。御了承下さい。

幕間 “依頼者” (前書き)

結局書いてしまいました。無還者^{リセッター}サイドのお話です。

ちよつと彼の戦闘シーンでは、機械的なところが分かりずらかったかな、と思い書いてみました。当然の如く短いですw

読まなくても多分支障はありませんが、フラグがあるかも知れないので見たほうがいいんじゃないかな？かな？ (え

それではどうぞ！

幕間 “依頼者”

——時間は、シグナムが殺されかけて男が撤退した頃から10時間程経過した深夜。

1人の男が、真っ暗な闇の中で何かを待っているように立っていた。顔を見られたくないのか、顔には深くフードを被っている。身体も真っ黒なローブで覆われており、しかもこの時間帯だ。余程目を凝らさなくては気づけないほどであった。

暫くして、真っ黒な魔法陣が地面に現れて輝いた次の瞬間に、別の男がそこに立っていた。

男だというのに真っ黒なドレスのような服、しかし此方は顔を隠す気も無いのか深い闇の色をした目を男へ向けて、機械的な声で言った。

「『魔力サーチ…完了。クライアント依頼者であることを確認しました。もう一度確認を取りますが、何故退け、と命じられたのでしょうか?』」

「今殺すのは得策ではない」

男はかなり低い声で、しかし嘲笑うかのように喋った。

「あの小娘共は地上本部の栄華の為には確かに邪魔だ。だが、もし今殺せば管理局の評価もろとも落ちてしまうだろう。あの小娘共は民衆にも人気がある。それが殺されたともなれば、管理局の名折れだと考えた。もし殺すのなら、それこそ大きな戦争の際に“巻き込まれて戦死”したとでもでっち上げればいい。いい考えだろう？」

醜悪な声で、最低な事をのたまう男――地上本部少将、ガルザス・サクライズは、そう言ってその口を三日月状に曲げ、気味悪く笑った。

目の前の男は今の言葉を黙って聞いていたが、話が終わると同時に小さく、無機質な声で言った。

「『…記憶を完了…』 ” に送信します…』」

「何か言ったか？」

「『エラーが発生したようです。現在修復しました…それでは依頼者^{ネット}』」

「うむ、報酬だな。任せよ、飛び切り上等な魔道士達をお前に殺させ——」

男は、それはそれは普段通りに。

「『さようなら』」

死の宣告を投げつけた。

言おうとした言葉を遮られ、状況を理解することも無くガルザスがその言葉の意味を聞こうとするも——

男が軽く蠅を追いかうように手を仰いだかと思うと、ガルザスの頭

は鋭利な刃物で切り裂かれたかのように綺麗に空中へ吹き飛んだ。

残されたガルザスの身体だけがビクビクと痙攣し、頭があった場所からシャワーのように真っ赤な液体が噴出していく。そして、これから絶対に言葉を発しものを見ることは無いその頭は、空中で回転し大地を少し転がったかと思えば黒色の雷が直撃し炭へと変わった。

「『…魔法・能力による再生の可能性0%。生命活動の停止を確認。依頼を完了』」

その鮮血が顔や服にかかるのも気に止めず、男は無機質な声で小さく呟く。

『

。

』

それに応答するかのように男の頭に声が聞こえたかと思うと、男は目を閉じて、

「『了解。管理者の指示により、帰還後速やかに休止モードへと移行します。何か指示があれば起動を。これより指示を実行します』」

と言って再び目を開き、現れたときと同じように魔法陣を展開し、次の瞬間には死体を残して男は消えていた。

幕間 “依頼者”（後書き）

当然ながら、今回のオリキャラであるガルザスはこのときのためだけに作りました。上手く悪役をかけたか不安です。いえ、無還者も十分悪役ですが。

さて、今回もやっぱり下手な伏線を入れております。とりあえず注目すべきは“管理者”とガルザスの殺害方法です。

管理者の方は予測が付く方もいらっしゃるかも知れませんwしかしガルザスの殺害方法については多分何処でも触れていないので分からないと思います。

なので、本文で書けない分ヒントを：兵器達は皆、1つは“概念”を持つ武器や力を操ります。今回の話で彼がガルザスを殺したのはこの“概念”を持つ能力か武器のどちらかです。これから出ると思うので今しばらくお待ちくださいw

という訳でこれを見てくださっている方へ感謝を捧げつつ第5話の執筆を急ぎます！題名どおりフォワードが登場です。上手く書けるといいなあ…（お

それではまたw あ、感想下さると嬉しいです^^ちょっと怖いですが楽しみです。お待ちしておりますm——m

それでは今度こそ、次の話でお会いしましょう。

改めて次回 第5話 “FW”

“FW”（前書き）

という訳で第5話、お届けします。
いつにもまして駄文だぜ…！

何だかストーリーの展開が早い気がします。おかしい、こんなはずじゃなかったのに。如何してこうなった…。

もっと緻密で濃いストーリーを書きたい（遠い目）
…永遠に無理かなあ（お

それでもこの駄文を受け入れる自信のある方は、どうぞ先にお進み
下さいませ！

よろしく願いますm|m

“FW”

管理局 機動六課 訓練室Side

「それじゃあ、今日も訓練を始めるよ！」

「「「はい！」」」

聖王病院にて治療を受け、「異常なし」と判断されたエース・オブ・エースこと高町なのはが、目の前で元気良く返事をした4人の魔道士に笑顔で頷く。

「うんうん、今日も皆元気そうだね」

「あの、なのはさん…撃墜されたと聞いたのですが、大丈夫なんですか？」

そう、小さい声で心配そうな声を出したのは青髪の少女——スバル・ナカジマである。

彼女にとってなのはは尊敬すべき存在であり、憧れだった。そんな人が撃墜されたとなれば心配もするだろう。

そんな言葉を聞いてなのは本人はくすりと笑って、

「大丈夫だよ。非殺傷設定だったし、…手加減、されてたみたいだから」

最後の言葉を小さく付け足す。この事実は彼女に重くのしかかって

いた。

数多の次元犯罪者を捕らえてきた彼女は、驕ってはいなかったが自分の強さに自信を持っていた。

しかしその力は1人の男に簡単に敗れた。しかも手加減までされて。

手加減されていたと分かったのは、非殺傷設定であったからとそこまで傷が深くなかったからである。

アレはどう考えてもフェイト本人の出力以上の雷。でもそれでフェイトのオリジナルよりも傷は無い——とすれば、恐らく当たる直前で手加減でもしたのだろう。

「あの、なのはさん？」

「！ あ、ゴメンねスバル…で、なんだったかな」

「い、いえ…何か考え事をしていたもので…す、すいません」

「如何して謝るの…いいんだよ、心配してくれたんでしょ？
大丈夫…さ、改めて訓練を始めるよ！」

「「「はい！」「」」

再び——機動六課の誇る部隊、フォワードのメンバー達は元気良く返事をした。

機動六課 執務室 side

「フラン、なのは姉しらねえか？」

「あら、春斗…確か今の時間はフォワード陣の訓練をしているはずですわ」

扉を開けるなりパソコンで仕事をしていたフランに春斗がなのはの居場所を聞く。

フランはその問いに、壁に掛けられた時計を見ることで回答した。

「っつーことは今訓練所は使ってるのか…」

「何かあったんですの？」

「いやな、新しいガジェットが発見されたって言う報告が来たんだが…気になるものを見つけてな」

「気になるもの、ですの？」

「これ見ろよ」

苦い顔で春斗は手に持っていた封筒から出した写真をそのままフランに見せる。

「これは…新型ガジェットですわね。気味の悪い形ですわ…」

写っていたのは大量の触手を持った球体型のよく分からないものだった。しかも空中に浮いている。

どういう原理なのか興味を持ったが、そんなものは次の春斗の言葉で吹き飛んだ。

「その球体の中心部分を見ろ。それは恐らく“リフューズコール拒絶宣言”のエネルギーで動いている」

ドオンッ！！と。

緑色の光が彼女の体中から放出され、そしてそれらは次の瞬間に真っ白な閃光によって“消失”した音が、執務室中に響き渡った。

幸いに今、執務室には彼ら以外はいない。

「落ち着け、フラン・T・ハラウン！！ マジで此処を廃墟にする気か！！」

「…誰ですの。私達の兄妹を幽閉し、道具として扱っているのは、何処の屑ですの！！？」

フランは、現在春斗が知る中でも一番他の兄妹への心配をしている。

春斗も当然管理局を憎んでいるし兄妹への心配を欠かしたことはな

いが、彼女の心配は度が行き過ぎているように思える。

「何故そこまで乱れる？　まだ俺は何も言って無い！」

「当然じゃありませんか！　いつも、いつも他の子たちがどんな扱いを受けてるか心配で心配で…春斗は心配してないんですの！？」

「してるに決まってるだろうが！　だからこそ俺達は落ち着かなくちゃならない！！」

その剣幕に思わず言葉を詰まらせるフラン。

そして、急激に頭が冷えたのかその場に崩れ落ちた。

「…怖いんですの」

そして小さく呟いた。

「怖いんですの…フェイトお姉様やなのはさんが、私達が造られた存在だと分かってしまったときにどんな反応をするのか…！　もう私は、失うのはいやですの…もう、別れなんて嫌ですわ…！！」

それは恐らく、遠い昔に兄が自らの全てを犠牲に他の兄弟を逃がしたことから来る恐怖。

頼れる存在が、親しい存在が急に消えて新しい環境に放り出される――それがどんなに心細く、どんなに怖いかを彼らは全員が体験していた。

保護された先が、幸運にも優しい人間であったから良かったものの、これが自分達のことを知っている上層部とかであれば、辿る運命は

変わらなかっただろう。

「今はそれを忘れなくちゃならねえ」

だからこそ、恐怖を拭う意味でも、これからのことを見据える意味でも今はそれを忘れなくちゃならない。それに、春斗はどうせいつかはバレると踏んでいた。兄が現れ、自分達が打ち倒すと決めたからには絶対なのはたちの前で能力を使わなくてはならない時が来る。

それまでは、このことを忘れて前に進まなくてはならない…そう考えた。

「俺だっ…てなのは姉と別れるのは絶対に御免だ。だが、俺達は不運にも…そういう存在だ。…なのは姉達が望むのなら、俺達は兵器として此処を去らなくちゃならねえ」

「…分かっていますわよ。それが、人間に害を為すために生まれた私達が最低限の出来ることなんですものね」

そう言って、怯えた瞳から意思のある瞳へと切り替わったフランが
ゆっくりと立つ。

「…そんなじゃあ、このガジェットのことは報告しに行く。当然、こ
れを動かしている力のことは説明しないけどな」

「ええ、それが妥当でしょうね。その分、はやてさんの頭痛の種が
増えるでしょうが…」

「違いねえな…じゃあな、フラン」

「ええ、春斗」

そう言って、執務室から出て行く春斗。

その背中に、ぶっきらぼうで小さいけれど、感情が籠った言葉がなげかけられた。

「…ありがとうございます」

兵器としての聴力でそれを聞き、扉を閉めてから「何があるがとう、なんだかな…」と言って少し笑った後、彼は自分の姉に資料を届けに歩いていった。

機動六課 訓練所 side

「はい、今日の訓練はお仕舞い。皆、お疲れ様！」

「「「……………」」」

これがRPGならば「返事が無い、ただの屍のようだ」などと出るのだろうが、当然彼女達は生きている。返事をする気力が無いだけだ。

「にやはは…大丈夫？」

「な、なんとか…」

苦笑いしながらのはが声もかけるも、帰ってきたのはオレンジ色の髪をした少女である——ティアナ・ランスターのみであった。

その横でうつぶせになって倒れているのは、この六課で数少ない男

ことエリオ・モンディアル。彼もまた言葉を発することが出来ないほど疲労していた。

「今日はもう終わりだから、皆もう休むといいよ」

「はい…」

今度は桃色の髪の毛の持ち主であり、心配そうに鳴く白き竜——フリードを撫でる少女こと、キャロ・ル・ルシエがかすれるような声でそれに答えた。

のろのろとその場から立って、安眠を求めてゾンビのように宿舍へ向かうフォワードたちに、既になのはは苦笑しか漏れなかった。

「おーい、なのは姉」

「あ、春斗？どうしたのー？」

そこに彼女の弟が現れ、新型ガジェットについての報告をする。最初は頷きながら聞いていたのはだったが、暫くしてから春斗が話終わると、

「新型ガジェットならはやてちゃんやフェイトちゃんと一緒に打開策を考えなきゃね」と言っって何故か春斗も道ずれな感じで引きずられて行った。

自分では造られた存在だとか言っっていても、恐らく彼は生きている間はなのはに心からは逆らえないだろう…。見る者にそう思わせる一面であつた。

こうして夜は更けていく――

??? ? side

「 。 」

「『——起動を確認…起動完了。魔力・能力等最高の状態です。障害等は見当たりません。指示を』」

「 。 。 」

「『任務を把握、確認します。 任務内容は“エイリム山岳丘陵地帯、山岳リニアレール内に存在するレリックの回収。場合によっては殺害も可。間違いありませんか？』」

「『了解。：任務内容に、“リニアレールの破壊”を追加します。これはジェイル・スカリエッティなどの次元犯罪者との関与を隠滅するため——で、間違いはございませんか？』」

「、」

「『任務を承認：完了。 任務開始は山岳リニアレール内に魔道士が到着し次第となりますが、宜しいですか？』」

「。」

「『最終確認を終了します。これより3秒後、指示の実行を開始します——3…2…1…』」

——夜の訪れは、闇の始まり。

あらゆる人間の想像を超える闇もまた——

「『——兵器…無還者。^{リセッター}任務開始』」

——史上最凶の兵器と共に、静かに動き出した。

“FW”（後書き）

天破「“拒絶宣言”についての説明はまだ出すべきでは無いと判断し此処では書いていません。知りたい方は人物紹介のところを見てくださいw」

フラン「作者、ふと思ったのですけど」

天破「ん、なに？」

フラン「私、本編で春斗に口論で負けるの早すぎませんか？」

天破「ゴメン、アレが天破の限界」

フラン「…低い限界です事…他の作者様を見習ったらどうですか？
大体貴方という人は…ブツブツ…くどくど」

天破「…春斗、助けて」

春斗「すまん、そのモードに入ったフランはきつと兄貴でも止められないと思う」

次回、第6話 “ALEAT”

フラン「次回の題名のつづり、間違えていないでしょうね…？」

天破「ゴメン、自信な……うわ、何するやm」

春斗「あつ、作者がフランに兵器としての力（フランはデバイスを叩き割れる程度だが）で殴られて吹き飛んだ」

お楽しみに♪

“ALEAT”（前書き）

という訳で第6話？です。すみません、駄文でry
カリムの口調が心配だ。そして原作キャラの台詞忘れた。…あつて
るかな？かな？

こんなんではければ、どうぞお楽しみ下さいませ！

注意…深夜に書いたので誤字脱字駄文が多く、後々大きく変更します。申し訳ございません。

“AL EAT”

——春斗が新型ガジェットについてなのは、フェイトらと話をしてから一週間が何事もなく経過した——。

機動六課 訓練所side

現在、六課の魔道士部隊フォワードが教導官であるのはと共に早朝訓練を始めようとしていた。

それは彼女達が機動六課へ配属された頃の数倍厳しくなってきたおり、正直言って常人が耐えられるレベルではない訓練だった。それを息を切らしながらもこなして行く彼女達は、きっと各自に才能があるのだろう。

そして、その訓練の様子を見るものが2人。

「ほお：フラン、あれがフォワードとかいう部隊か？ 中々元気な子供じゃねえか」

「ええ、あれがフォワード部隊のうち、フェイトお姉様率いるライトニング分隊となのはさん率いるスターズ分隊の子供達ですわ」

春斗とフランの両名である。彼らは朝の仕事が一段落し、丁度早朝訓練が始まるということから興味本位で見に来ていた。なのはがどういう教導をするのか、詳しくは知らなかったがために見に来たのである。

まあ、春斗からして見ればかなり扱くのだろうと簡単に予想は出来たが。

「しかし、本当に管理局は大丈夫なのです：あんな子供達まで働かせるなど、人材不足もいいところですよ」

「確かにな…」

ガジェットとの実戦訓練で至る所から現れるガジェットを各自個別撃破していく様を見ながらそんな会話をしていると、

「それを言われると何も言えへんな…」

「あら、はやてさん」

何故かこの部隊長の八神はやてが訓練所へと現れた。

思いもよらぬ人物の登場に、少なからず驚く春斗とフラン。

当然といえば当然だろう。彼女は今、『例の事件』の各所への説明や会見に追われており、とてもこの場に居れる状況では無いと聞いたからだ。現に彼女は少しやせ細ったように見える。

「オイオイ、ふらふらだぞ？そんな調子で大丈夫かよ？」

「正直、大丈夫やあらへんよ…」

そして、あのはやての口からこんな弱気な言葉が出るのも予想外だった。

「ほら、この部隊って突っ込みどころ満載の部署やろ？ 無理矢理

『各部署の抱えることが出来る魔道士ランクの限度』を無視しとる形なんや…それが、今回のことで格好の的になっとってな？ドサクサに紛れてなのはちゃんたちを勧誘しようとする部署まで出てくる始末や」

そう言って重いため息をつくはやて。何故かその一挙一動が彼女らしく無い気がして、酷く彼らは不安を覚えた。

確かに、この部隊は色々とおかしいところがありすぎる。管理局を心では嫌っている彼女達ですら、この部署の異常さを感じ取っている。

リミッターを掛けることで、魔道士ランクの限度をギリギリに保つ部署など聞いたことが無い。それにリミッターというのは諸刃の剣である。リミッターを掛けるということは少なからず弱体化するという意味であり、もしその状態で兵器クラスにでも出会えば遺言を^{リセッター}考える間もなく殺されるだろう。

それをはやても分かっているのか、もう一度彼女は深いため息をついた。

「本当はリミッターなんて掛けたくないんやけどな…さすがにそれはどうにも出来なかった…」

「リミッターを掛けるということは弱体化を示すことでもあり、そしてそれは今回の事件のようになのはさん達の死亡率を高めますわ…」

低い声でフランが言った言葉は、まさにはやてが危惧していることであった。

彼女の方が少しだけ震える。

「はやてさん。私は貴方のことが嫌いではありません、寧ろ大好きですわ。フェイトお姉様に連れられてお会いしたところから、親しみやすい方だと…しかし」

彼女は流れるように言葉を紡ぐ。

「私は最後まで、この機動六課へフェイトお姉様のみならずなのはさんを入れることは反対でした。それは春斗も同じですわ」

「この部署は確か、『表向きは』レリックとか言うロストログアの回収を専任としてるんだったか？ はやて…その程度のことならば一般局員でも十分事足りるはずだ。わざわざなのは姉達に頼む必要もねえ」

「だからこそお聞きしますわ。—この部署の本当の目的はなんですか？ 《……………》」

気づけば、フランと春斗の4つの目は鋭くはやてを射抜いていた。

はやてはそれに、気づかれぬように動揺する。

(…この2人は、確か『普通』の一般人やっという話だったはずや……何処が普通なんや、もうこの部署の異常さとおかしさ、そして裏の目的に気づきかけとる…)

なのはやフェイトも疑問に持ってこそいるだろうが、ここまでは突っ込んでこない。

しかし彼らは臆することなく、その裏にある真意を見抜くために真正面からはやてに問いただした。

それはある意味で驚嘆に値することであり——即ち、はやてが疑われている。これに関しては当然の事だろう、自分の家族が危険な事に巻き込まれているのかもしれないのなら疑心暗鬼にならざるを得ないと思う。そこまで考えたはやては暫く目を閉じて深呼吸すると、彼女もまた2人を正面から見据え、

「…悪いけど、まだその件に関しては言えへん。たとえば、春斗とフランであつてもや」

謝罪の言葉を放った。

「これはなのはちゃんやフェイトちゃんであっても同じことや。確かに二人の言うように、この部署には裏がある。けど、私は誰一人死なせる気はあらへん」

そして、心からの言葉を話す。

「どうか、今は引いてくれんやろうか。時期を見て話すことを約束する」

「それは信じていいのですわね？機動六課部隊長さん」

「夜天の誇りに懸けて」

交わした言葉は短く、しかしその言葉には確固とした意思が存在していた。

それを見て取ったフランは目を閉じ、はやてに向かってこう言った。

「分かりましたわ、今は退きます」

その後、春斗が脅すように付け加える。

「だが、俺達はこのことを忘れない。なのは姉、フェイトさんのみならず、怪我を負った人間が出た場合は責任を取れよ。機動六課部隊長、八神はやて」

「その言葉、肝に銘じておくわ」

その言葉に頷き、そしてフランが時計を見てはやてにいつもの調子で促す。

「ほら、はやてさん今日は聖王協会でカリムさんと会う約束があつ

たのではありませんこと？」

「へ？ …ああっ、しもた！フェイトちゃん待たせたまんまやった
…行ってくるわ！」

はやてもまた、いつも通りに会話をした。

その慌てて走り去っていく後姿を見ながら2人の妹と弟は思う。

「俺達の姉は良い友人を持ったものだ」

「ええ、本当ですわね」

彼らは改めて、八神はやてという人物の再確認をした。
その顔に、穏やかな笑みを浮かべながら。

「あら？　終わったようですわね、フォワードの早朝訓練」

それからまた暫く雑談しながらフォワードの訓練を見ていたフランと春斗だったが、なのはの攻撃を疲労した状態で5分間避け続けるかなのはに一撃入れるという鬼畜訓練に春斗が心底同情していた以外は何事もなく終わった。

「なのは姉に、もう少し訓練優しくしてやれよと言ってくるか…」

「きっと無理ですわね」

「だよな…」

一言で断定され項垂れる春斗。笑いを押し殺すのに必死なフランに、更に春斗の心は傷ついた。

そしていつかのように、再びゾンビの如くのろろと、それでもキツチリとした足取りで宿舍へと戻っていくフォワード陣に、春斗は再び心底同情した。

「…今度何か驕ってやるか、アイツラに…」

そしてそれは彼らの食欲を知るものからして見れば金銭的な意味で完全な死亡フラグなのだが、それを知ることとは春斗にはなかった。

そんな対極的な2人に気づいたのはが近寄ってくる。

「あ、フランに春斗。見学してたの？」

「ええ、彼女達も中々やりますわね。貴方の鬼の訓練についていつてるんですから」

「そうだな。なのは姉、だから管理局の白い悪魔なんて呼ばれるんだ」

「うう…、一応私も気にしてるんだからそんなこと言わないでよ」

そういいながら困ったように笑うのは。そしてその手にはレイジングハートが握られていた。

「なのは姉、取り合えず何故フランにはデコピンで俺にはデイベインバスターなのかを教えてください。レイジングハートに溜まってる魔力マジで半端ねえ」

「春斗、貴方はいつも一言多いんですよ…」

今度は呆れるような口調でフランが言う。その横では、命乞いをしている見つとも無い春斗の姿があった。

聖王協会本部 side

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしゃいました」

「早かったのね…私の部屋まできてもらってくれる？」

「はい」

「あ、それからお茶を二つ…頼めるかしら？」

「畏まりました」

椅子に座り、傍にいた騎士へお茶と案内を頼む女性——聖王騎士団が魔道騎士、カリム・グラシアは扉を控えめに叩く音を聞き「どうぞ」と声を上げた。

その声を聞き、扉を開けて入った来たのは当然、機動六課が部隊長、八神はやてであった。

「カリム、久しぶりやな」

「ええ、はやて。いらっしやい」

柔らかな笑みで挨拶しあう2人。そして暫く雑談しあうと、真剣な表情となって本題を始めた。

「あのね、はやて。まず機動六課の職員が発見した新しいガジェットなんだけど…」

「ああ、あの半透明で浮いてたやつやな？」

「あれを分解したら、動力部分に不可解な力が働いているのが見つかったの」

「不可解な力…やと？」

「ええ」

短く答えるとカリムは部屋中のカーテンを閉め、薄暗くなった部屋へ色々なデータの映っているモニターを展開した。

そしてそれを見たとき、はやては絶句した。

「これは…」

「ええ…恐らく稀少^{レアスキル}能力の類でしょう」

「いや、そうに違いあらへんやろ…—魔力や剣を弾いて無効化する
《……………》魔力なんて聞いたことあらへん」

「しかも一定時間がたつとこれは消えてしまうの…お陰でなんなのか全く分かってない状況よ」

「しかし、これは厄介やな」

「ええ、いくら貴方やその仲間がどんなに優秀だろうと、魔力を無効化されては何も出来ないわ…まだ発見数は少ないけど、貴方も気をつけてね」

「分かったわ。それで、それだけや無いんやろ？ 何の用件で呼んだんや？」

「…いい、これは口外無用よ…たとえば、貴方の友人に対しても話してはならないわ」

低く、威厳のある声でカリムは喋る。そこにいたのは『優雅な女性』では無く『聖王協会騎士魔道士』としてのカリムであることを理解したはやては背筋を正す。

「まず一つ目よ。これを見て頂戴」

「…っ、こ、これは…!!」

それは、はやてが建てた部隊、機動六課の表向きの目標のロストロギア。

“レリック”であった。

「一昨日にこれが運び込まれたの。それに、この新型ガジェットが

出たのも一昨日…偶然とは思えないわ」

「…ガジェットがレリックを見付けるんは、早くて今日明日の話や
ったな…分かったわ、警戒しておく。それで、まだ他にはないんか
？」

「あるわよ…あのね、はやて。貴方、管理局を信用してる？」

「？ 信用しとるも何も、管理局は私の償いの場や。それに次元犯
罪者を捕まえるための組織なんやから、信用しとるのは当然や。信
用してなきゃ部隊なんてつくらへんもん」

「…」

カリムは黙ってパネルを操作し、ある画面を表示した。

それを暫く何気なく見ていたはやてだが、少しすると何が書いてあるのか理解したのか、顔をゆがめて怒鳴った。

「……なんや、これ」

「…、」

「…なんや、って聞いとるんや、カリム!!」

その画面の最上部には、こんなことが書いてあった。

『I P R O J E C T S・W I プロジェクト シークレット・ウ
エポン 研究成果及びそれに伴う能力の説明』

機動六課 デバイスルームside

此方では、デバイスマスター――シャーリーより、フォワード陣
に新しく改良され、強化されたデバイスを配っている所であった。

余談だが、春斗やフラン用に通信機のような物も作ろうとしていたらしいが本人達から普通に却下をもらったため断念となった。彼らからしてみれば、別にそんなもの無くても念話で会話できるため必要ないのである。…ただし自分達に魔力があることを知られたくないので暫くは無理であるが…。

「わぁ…これが…」

「あたし達の…新デバイスですか…」

フォワード陣は感動で声も出ないようであった。その中でもスバルは無邪気な子供のように新しいデバイスをいろいろな角度から見たり触ったりしている。

「設計主任は私！協力者はなのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長」

「えーっと、ティアナのがクロスミラージュ、スバルのがマツハキヤリバー。エリオとキャロはいままで使ってたのと同じ名前だよ」

「あれ？ ストラードケリユケイオンは変化無しかな？」

「うん、変わって無いように見えるけど…」

「違います！ 変わってないのは外見だけです！」

「わっ！ り、リインさん！」

そこに急に現れたのは、小さな妖精のようなユニゾンデバイス——
—リインフォース？である。

「はいです！ 実はずね、2人はちゃんとしたデバイスの経験が
なかったですから、使い方などに慣れてもらうために必要最低限の
機能と基礎フレームのみで渡してたです」

「あ、あれで最低限！？」

「凄い…」

これまでずっと使っていたからこそその驚きだろう、エリオとキャロ
は自分の使っていたデバイスが最低限の機能しか備えていなかった
ことに驚いていた。

「みんなが扱うことになるこの4機は、六課の前線メンバーとメカニックスタッフが、技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。

部隊の目的に併せて、エリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた、文句無しに最高の機体です！」

そう言ってリインは4機のデバイスを宙に浮かせて話した。

「この子達は生まれたばかりのいわば赤ん坊です。でも、色んな人の想いや願いがいっぱい込まれていて、たくさんの時間をかけてようやく完成したです」

デバイスをもう一度ティアあたちに返しつつ、笑顔でリインは続ける。

「だから、ただの都合の良い道具や武器と思わず、大切に、けど性

能の限界まで思い切り引き出して使ってあげて欲しいです」

「「「…はいっ!」「」」」

元気良く返事をし、新しいデバイスの確認をしようと訓練所へ向かいおうとした――

次の瞬間だった。

「!?!? このアラームは…」

「第一級警戒態勢!?!?」

「な、何が…」

『なのはちゃん、フェイトちゃん、グリフィス君、此方はやて!!』

そこにはやてからの通信が入る。フェイトはどうやらグリフィスと通信しながら帰っていたようで、同じく回線を開いていた。

『はやて、此方フェイト。これは…』

『教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった! 場所、エイリム山岳丘陵地帯、対象は山岳リニアレールで移動中や』

「移動中?...まさか!」

『そのまさかや！内部に侵入したガジェットに操縦機関を完全に奪われてもうとる…リニアール内のガジェットは最低でも30。未確認のガジェットもいるかも知れへん。いきなりハードな任務になるけども…なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか？』

「わたしはいつでも大丈夫！」

「私も大丈夫だよ！」

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、皆も出れるか？』

「」「はいっ！！」「」

『よし、良い返事や。シフトはA-3、グリフィス君はそのまま行つて宿舎で待機、ラインは現場管制や』

「はいです！」『了解！』

『じゃあ行くで…機動六課フォワード部隊！出動や！…！』

「「「「「はい！」「」「」「」

一糸乱れぬ返事後、一同は現場へと向かった。

「『…（ピクッ）…魔道士の接近を感知……』」

「『リニアレール、速度70維持……。レリックの位置、把握完了』」

「『レール内ガジェット数、70体前後。空中に200。未確認ガジェット3機』」

「『魔道士到着時刻を、現在の速度から計算し残り十分〜二十分と判断します』」

「『——地形条件、及び魔道士の強さを把握完了。任務成功率は99%』」

「『残り12分程度にて、兵器…無還者^{リセッター}、任務を開始します』」

——そこに、何がいるのかも知らずに。

機動六課

山岳リニアレールに到着するまで

残り12分前後――

“ALEAT”（後書き）

天破「という訳で、六課の死亡フラグとカリムが何故そのことを知ってんだ！？…な回でした」

フェイト「あれ！？私たち死亡フラグ！？」

天破「いや、もう無還者リセッターがいるところは全部死亡フラグ立つから」

フェイト「理不尽すぎる…で、でも原作キャラは死なないんでしょ？」

天破「死ぬような目にはあってもらう可能瀬が高いっ！」

フェイト「ええっ！？」

♪宣伝♪…天破は感想を正座でお待ちしております♪ww

では次回！

第7話 “技能”スキル

次回、遂に無還者の能力の片鱗が明らかに！！お楽しみに♪

“技術（スキル）”（前書き）

という訳で第7話です。ちょっとこの話を読むことで注意したいことがあります。

原作と台詞が全く違う箇所がこれからいくつかでてきます！いやな方は御注意ください、本当にすいません m――m

Q それは何故ですか？

A、アニメや漫画を見直す時間がないのです。家のゴタゴタや学校のゴタゴタにいい感じに巻き込まれています。

それでも許せるという大きな心の持ち主の方は、どうぞ御覧下さいませ m――m

“技術（スキル）”

機動六課 出動ヘリ side

「問題の貨物車両を捕捉！速度70を依然として保ったまま進行中です」

ヘリのレーダーに捉えられ、それを見て状況を報告したヘリのパイロット――ヴァイス・グランセニックは背後に控える頼もしき魔道士達へと声をかける。

「状況から見て、まだ重要貨物室の突破はされていないようですが、ガジェットの数などを計算すると…」

「時間の問題か…」

ヘリを運転しながら、注意深く周囲を見渡すヴァイス。最近は新型ガジェットが多く、何処から出てくるか分かったものでは無いと事前に聞かされていたからだ。

（新型ガジェット：確か、AMFも発動されていないのに攻撃全般を無効化するアンチ魔道士のようなガジェット。体型は丸型：って、アレは！！）

注意深く当たりを見回していたヴァイスが『何か』に気づくと同時になのはが大声で指示を出した。

「！ アルト、ルキノ、広域スキャンお願い！ 空に何かいる、サ―チャーを飛ばして！」

指示を受けてサーチャーを空へ飛ばす。

一回目のスキャンでは引っかからなかったが、もう一度スキャンすると同時に『何か』が現れた。

「これは…」

「新型ガジェット!？」

風船のように、大きな球体型の機械が大量にヘリの周りを飛んでいた。

「ここまで接近されるのに気づかないなんて…」

「でも攻撃する様子がないっすね」

そのガジェットはただ只管に浮いているだけだ。此方に近づいてくる気配も無ければ、攻撃を仕掛ける気配も無い。

ただ、ヘリが前進すると遠巻きに囲んだまま前進してくるのが不気味であった。

「…ん？」

ふと、ヴァイスがその球体の中から一体良く分からないものを見つ
ける。

他のガジェットの機体は透明なのに、その一体だけ赤く塗りつぶさ
れていたのだ。

何となく薄気味悪さを感じ、前進しながらもヴァイスはそのガジェ
ットから離れようとして――

赤い球体ガジェットが何やら細かく光ったり消えたりを繰り返した
かと思うと、ヘリの傍で漂っていたガジェットが爆発を起こした。

――ドオンッ！！という音と共に、ヴァイスはこの危険な兵器の
本領を悟る。

このガジェットは、赤い機体以外はただの爆弾。

そして、赤い機体が光ったときに爆発する――これだけの数を一
気に爆破されたときを考えると、それだけではどうしても避けたい。

「ヴァイス君、このガジェットは私に、「無理っす！下手にでたらあの爆発に巻き込まれます！」っ！」

焦ったなのはを慌てて止めるヴァイス。この判断は正しいだろう。いくらなのはとレイジングハートが優秀でも、全方位からの爆発をバリアジャケットと障壁で耐え切れるかと問われれば疑問である。まあ、彼女なら受けきれぬ気もしなくもないが、もしもという場合もある。ここで六課の主戦力が落ちてしまつては話にならないのだ。戦力は当然、新戦力であるスバル、ティアナ、エリオ、キャロのモチベーションの低下へと繋がってしまう。それを分かっているからこそ、なのはもギリギリで踏みとどまつたといえるだろう。

しかしこのままでは膠着状態であり、しかもリニアレールはまだ前進を続けている。どうやら移動手段がヘリであることを利用しての足止めだったようだが、それは結論として大成功だっただろう。これを造った科学者の高笑いが目に浮ぶようであった。

——唯一の誤算は、そこに“金色の閃光”がいなかったことだろう。恐らく此処に彼女も乗っていれば、それこそ他の局員に駆けつけてもらわねばならなかった。

悔しさで歯を噛み締める彼女達の目の前を、瞬きする間もなく“閃光”が通り抜けて。
更に次の瞬間、全てのガジェットが撃墜され沈黙した。

「フェイトちゃん！」

「なのは！大丈夫！？」

その影は、言うまでも無くフェイト・T・ハラOWNである。彼女はグリフィスに市街地の飛行許可をもらって、自力で此処まできたのである。金色の閃光、というだけありそのスピードは尋常では無いものであった。

フェイトが元気そうな親友に安心するのも束の間、直ぐになのははヴァイスへと叫ぶ。

「ヴァイス君、わたしも出るよ！ フェイトちゃんと一緒に空を押さえる！」

「ウッス、なのはさんお願いします！ まだあの球体型がジェットがいるかも知れません、気をつけて！！」

「うん！ じゃ、ちょっとでてくるけど皆もズバツとやっつけちゃおう」

「」「」「はい！！」「」「」

「…、」

元氣良く返事をするフォワード陣だが、キャロだけが震えているよ

うに見える。

それを見たのはは、そつとキャロに近づいてキャロの頭を撫でた。

「キャロ」

「…！」ビクッ…！

「自分の力が怖い？」

「…は、はい」

「大丈夫だよ」

「えっ？」

「自分と、自分の仲間を信じれば…きっと大丈夫」

「…、」

困惑したような表情のキャロに苦笑し、エリオに「キャロのこと、頼むね」と耳打ちした後ハッチの開いたヘリで彼女はデバイスを起

動した。

「レイジングハート・エクセリオン！！セットアップ！！」

《セットアップ！》

真っ白なバリアジャケットが、その身体に装着される。

その色は、美しくもあり気高くもあるようなそんな姿。

これこそ、管理局のエース・オブ・エース高町なのはであった。

「スターズ1、高町なのは!! 行きます!!」

そして、また彼女も空へと出撃した。

出撃した瞬間、あたり一面から群れるようにガジェットが出現する。

当然の如く例の爆弾ガジェットも混ざっていた。

「っ、レイジングハート!!」

「凄い数…バルデッシュ…！」

《アクセルシューター！》

《ハーケンセイバー！！》

彼女達はそれを、少しずつしかし確実に減らしていった。

「今回の任務は二つ。全てのガジェットの掃討とレリックの安全な確保。ですから…スターズのティアナとスバル、ライトニングのエ

リオとキャロ2組の分隊に分かれて行動します。ガジェットを破壊しつつ、スターズとライトニング先に着いたほうがレリックを確保するですよ」

「」「はい！」「」

「…で、私も現場に降りて指揮をします」

なのはが戦いへ身を投じた後のヘリ内では、新人達への説明が終わりを告げ初出陣、というところまで来ていた。

なにあるかは分からないけど、全力で。それが彼女達の共通意思。

この辺りは教導の成果というべきだろう。そう――

「『魔道士の参戦を確認。デバイス、声紋、バリアジャケットなどから機動六課所属の魔道士、フォワードと一致します。行動パターンから、狙いはレリックと判断。――妨害を開始』」

相手が、人の努力を嘲笑うかのような力をもつ者であれば、確固たる意思ですらも砕け散る。

「っ!?!? なのは!」

「うん…魔力反応…大きい!!」

その異常とも言える魔力に、ガジェットですら動きを止めて周辺のサーチを開始している。ただ、それが有効なのはサーチが効く相手だけであり――

「『…ミラージュボディ
“幻影体現”』」

幻影体現――

男の持つ希少能力の1つであり、自分への注意を強制的に別のものへ逸らせることで自分を相手の視界・サーチから消す能力。
男が好き好んで使う能力の1つである。この能力があれば、大抵の人間は自分へ気づくことも無く殺すことが出来るからだ。

《マスター、サーチ反応ありません》

《サー、同じく此方も反応ありません》

「そんな！？魔力反応がしてるのにそれを放つ敵が分からないなんて…どういふことなの！？」

《魔力反応、SSを突破！！サー、一旦軌道上から離れてください！！》

「軌道上？待って、ここを撃つと言う事は——狙いは、私達だけ？」

そこまで自分で言った時、彼女は理解する。

相手の目的は六課の足止めなどと柔なことではない、六課の支えであり中核を担う私達だけを目的として撃つ気だ、と。

「なのは、逃g——」

《!! マスター、魔力反応が増大しました! 撃たれます!!》

「「っ!!!!」」

わずか、此処まで53秒。

もう少しフェイトやレイジングハートが気づくのが早ければ、どうにかなっていたかも知れないが——すべては遅すぎた。

「『魔力チャージを完了。発射します、デス・デミス・ブレイカ
』」

そんな声が聞こえて、空を見上げるフェイト達。

声の主を確かめるまでもなく——彼女達は、真っ黒な魔力の奔流に飲み込まれた。

“技術（スキル）”（後書き）

なのは「にゃああああ！　いやなの！わたし達が死んじゃうー！」

天破「いやいやいや！多分死なないから大丈夫だよ！？それに、ここで死んじゃったらこの先どうするの…？」

なのは「ま、まあそうだけど…作者さんは何するか分からないから、ねえ…？」

天破「ヒデエ…だが否定できない…この話がいい札だものねえ…という訳で、原作をかなり改悪してしまいません。時間が取ればアニメなり万がなり見るんですが」

なのは「現在作者さんはテスト中なの…大目に見てやってもらえる嬉しいかな」

天破「ホント、申し訳ない…では次回予告」

第8話 “理由”

なのは「…危険な匂いがするの。何、理由って」

天破「次回の主役っぽい存在はティアナとスバルです。しかしシリ

アスっぽいのでツンデレは無いと思います。期待していた方申し訳ない！（キリッ）」

なのは「あれ！？わたし達の無事かどうかは言わないの！？」

天破「いやー…それ、ネタバレじゃん」

次回も楽しみにお待ち下さるよう、土下座しつつお願いいたします！
それではまた、次回でお会いしましょう！

“理由”（前書き）

まず最初に言っておきます。

前回、ティアナとスバルが中心のことを言いまくりながらなのはとフェイトが中心的感觉になっております。

…あい、すいません。だからその蔑むような目をホント止めて下さい。反省しております。

そして、如何してこうなったのか私にも分かりません。

更に謝罪しなくてはなりません。

すいません、はやて好きな方。はやてが今回ボコされます。

それでも良いという全治全能な神様以上の心の広さを誇る方は、どうぞ私の駄文を御覧下さいませ。

注：投降して直ぐに修正しました。重ね重ね申し訳ないmm

“理由”

六課へり内部side

「す、スターズ1、ライティング1謎の敵とエンカウト!!
の魔力数値：推定、SSS!？」 敵

「さ、サーチャーに先程まで無かった反応が確認されました!
置関係から見て、この反応が魔法を撃ったのかと！」 位

「で、誰なんだよソイツは!？」

「い、今映像を出します!」

焦って混乱しかけたパイロット達を、ヴァイスが怒号で無理矢理自分のやるべきことを再確認されるが、気持ちはよく分かった。何しろ管理局の技術を結集して造られたサーチャーで察知できず、しかも不意打ちとはいえあのエース・オブ・エースに直撃したのである。

更に追い討ちを掛けるようにこの魔力量の多さだった。混乱するのも頷ける。

「…映像でした！此方です！」

パイロットの1人、アルトがヘリの画面や各自のデバイスに映像を送る。

映像に映っていたのは、真っ黒なドレスのような服を着た男だった。

「…何処かでコイツを聞いたことがある気がする…」

呟いたのはヴァイスである。そう、それこそ何処か、しかし結構聞いて間も無い気が――

『――以上、シグナムさんを殺そうとした男の特徴だ。もし出合ったら即撤退をお勧めするぜ、ヴァイス』

「っ、そうだ!! この男、シグナムさんを殺そうとしたって言う次元犯罪者だ!!」

「「「!?!」」」

その事件なら既に知らぬものはいない。

烈火の将がいとも容易く殺されかけ、管理局の誇るエース達もそれぞれが一撃で落とされたという忌まわしき事件。
しかもこれは知られていないとはいえ、それを命令したのが管理局の上層部だというのだから笑えない。

「マジかよ…ハルト、すまねえ。いやな予感大当たりだったぜ」

このハルトとは御存知高町春斗のことである。彼らは六課に配属されている数少ない男として仲が良かった。

「とにかく、誰か連絡取れる奴はなのはさんとフェイトさんに連絡してくれ！」

ヴァイスが指示を出し隊長陣へ連絡を入れようとしたところで、

『それには及ばないよ』

「フェイトさん!？」

ヘリの内部に回線を開いたのだろう、ヘリにフェイトの姿が映しだされた。

『私達で時間を稼ぐから、皆は早く行って!』

「どのくらい持ちそうっすか?!」

本当ならばその様な質問はモチベーションが低下してしまうから聞
いてはならないのだが、今回は敵が敵である。聞かずにはいられな
かった。

『んゝ…そうだなあ…』

そういうと金色の閃光は苦笑しながら、しかし目は笑わずに言った。

『持って5分かそれ以下。もし相手が私達を殺す気だったらもう終わってる…どうやら今回はレリックがターゲットみたい。私達を殺す気は無いと思うよ』

絶句する新人達とヘリの職員達。六課の主柱の1人にそこまで言わせるのだ、一体どれほど強いのか想像もつかない。

一番早く立ち直ったのはヴァイスだった。彼はこのヘリの操縦を任されている。ここで暢気に停滞していた巻き込まれてしまうかもしれない。

「――ウッス、了解！ 無事でいてくださいよ、フェイトさん、なのはさん！！」

そう言って手馴れた手つきで戦闘空域を離脱するヴァイス。更に呆然としている新人へ素早く活を入れる。

「しっかりしろ新人共！！今ならまだあの男はなのはさん達に抑えられてる、比較的安全に降下できるはずだ！！お前達はなのは隊長達の努力を無駄にする気か！！」

「」「」「っ！」「」

「…準備はいいな！？」

「「「はい!!」」」

「いい返事だ!ではまず、スターズ、行け!!」

「「はい!」」

気を引き締めた顔でハッチの前に立つティアナとスバル。下を見下ろし、大きく深呼吸した後。

「スターズ3．スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「行きますっ！！」

二人合わせて、ハッチから勢い良く飛び降りた。

徐々に迫ってくる地面を見つつ、彼女達は確かな信頼を持って己のデバイスへ呼びかけた。

「行くよ、マツハキヤリバー！！」

「お願いね、クロスミラージュ！」

「セットアップ!!」

《了解、セットアップ!!》

同時に装着されるのは、白を基調としたバリアジャケット。

そのまま浮遊魔法を使って、上手くりニアレールの上に着地した。

それを見届け、更にヴァイスは声を出す。

「次! ライトニング2人、行け!!」

「は、はいっ! :ねえ、キャロ」

「え？」

「…手、繋いで一緒に行こう！」

「！ …はい！！」

続いて出陣するのはライトニングが2人、キャロとエリオ。

まだ少し震えている彼女は、エリオが提案したことに笑顔で応じた。

「…ライトニング3、エリオ・モンデュアル」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「キュー！」

「行きます！」

手を繋いだまま降下する2人。彼らもまた、自らのデバイスの名を叫んだ。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「セットアップ！」

同じようにセツトアップし、列車の最後尾に着地。これでヘリ内にいた全ての戦闘員が出撃した。

だが、ヴァイスの仕事はこれで終わりではない。

「…なのはさん、フェイトさん…！」

コントロールパネルを操作し、サーチャーで六課の隊長2人の姿を写そうとする。確かにティアナたちも心配だが、なのはとフェイトの方には限りなく強いあの男がいる。今のティアナ達ならばガジェットの一機や二機問題はない。しかし隊長達の方は相手が相手だ。気になるのも仕方ないだろう。

暫くして、ヘリ内部のディスプレイになのは、フェイト、そして今だ謎の多い男の戦闘画面が表示される。

——そこに映っていたのは、肩で息をしているなのとはフェイト、そして全く疲れているように見えない男の姿だった。

なのは&フェイトvs謎の男side

「はあ、はあっ…」

「くっ…っ、はあ」

方や、肩で息をしているエースオブエースと金色の閃光。

「『敵対魔道士の体力減少を確認。リニアレール速度70を維持』」

方や、全く息も乱れていない上に無傷な男。

———どちらが優勢かなど、子供にも分かる状況だった。

「はあ、はあ…っ！レイジングハート！」

《はいっ！カートリッジロード！！》

「バルデッシュ！」

《了解！カートリッジロード！》

「デイベイン…バスター！！」

「プラズマスラッシャー！！」

「『A Aランク級攻撃を感知。防御します、
“脅威返し”』」
メナスカウンター

確かにその魔法は彼に直撃したかに見える。炸裂音が聞こえ、爆音が響いた。

しかし次の瞬間、桃色の砲撃と金色の斬撃が飛んできたのは自分達の方だった。

「「!？」」

突然のことに驚く二人だが、直ぐにその場から退避し『自分達が放った攻撃』を避ける。

また、これだ。先程からこれの繰り返し。

攻撃してはその攻撃が弾きかえってきて、向こうはたまに砲撃を放つだけ。明らかに時間稼ぎが目的であることは確実だ。

馬鹿にしているのか、それとも何か考えがあるのか……いや、彼の性格からして恐らく後者だろうと彼女達は考える。まだ2回しか戦ってはいないが、彼は恐ろしく打算的で冷静だ。仲間が目の前で血の海に沈んでいても冷静でいられるようなそんな性格。だからこそ、恐ろしい。相手には恐怖と言う物が存在しないから、どんな手でも使ってくるのである。

（なのは、このままじゃ拙い）

ふと、再びにらみ合いになった際にフェイトから念話が入る。

（多分だけど、ティアナ達がレリックを確保した瞬間にそのレリックを奪うんだと思う。それこそ、ティアナ達は殺されちゃうかもしれない）

（…っ、それだけはなんとしても避けなきゃね…っ！！）

「『砲撃。魔力解放、SSランク。発射。』 “デスワールド・バスター”」

「！ レイジングハートッ！」

「バルデッシュ…ッ！！」

《《ロードカートリッジ！！…プロテクション！！》》

——ドォンッ！！という豪快な音と共に一段と大きい真っ黒な砲撃を桃色と金色の障壁が受け止める。

「（ビキビキビキッ！！）！？ 障壁…がっ…！！」

「如何して…さっきまでと威力が、全然違う…！！」

障壁が割られる———そう思った瞬間、黒色の砲撃がいきなり止んだ。

「「…？」」

不審に思い、なのはとフェイトは男の方を見る。

彼は既に、こちらを見てはいなかった。

見ているのはリニアレール。今だ速度70を維持しているリニアレールを見ながら、何かブツブツと言っていた。恐らく先程もやっていた状況把握のようなことを呟いているのあろう。

そしてこれに呆然としたのはなのは達であった。

当然といえば当然だろう。彼女達は女だからと嘗められることはあっても無視されるようなことは今まで無かった。しかし、いきなり目の前の敵は攻撃を停止し、まるで自分達がいらないかのように振り舞い始めた。未だに一向に此方を向く気配は無い。これが示すのは、一つ。

——『相手にするまでも無い』と判断されたからに他ならなかった。

「…レイジングハート」

《了解…魔力充填開始》

「!?!? なのはっ!?!?」

「フェイトちゃん…ゴメン。此処まで馬鹿にされたら、さすがの私も我慢できないよ…」

その先端に、桃色の魔力が溜まっていく。

「無理だよなのは! 忘れたの? アイツに放った攻撃は全部帰ってき

「ちゃうんだよ!？」

「今なら余所見してる…それに、跳ね返せないだけの魔力をぶつけ
れば…!!！」

フェイトの必死の忠告も聞かず。

彼女はそれを男へ向けて放った。

「はぁぁぁぁ!! スターライトオオオ…ブレイカー!!！」

《スターライトブレイカー》

リミッターを掛けられているとはいえ、彼女が出来る最大にして至

高の砲撃。

荒れ狂う桃色の魔力砲は、そのまま男を飲み込んでいった。
：そう、飲み込んでいった。

「：跳ね返って、来ない：？」

フェイトが呟いた瞬間、どうやら男に直撃したようでそのまま爆発が起きる。

その横では、もう体力の限界という顔をしたなのはが肩で息をしながら勝利を確信した顔で笑っていた。

《マスター、敵の抵抗もありませんでした。直撃したと思われます》

「うん：確かに手ごたえを感じたよ。　ね、フェイトちゃん！これで私達の勝ちだよ！」

微笑みを向けてくるパートナーに曖昧な笑みを返す。

しかし、フェイトは素直に喜べない。未だに粉塵を撒き散らしている場所を見ながら考える。

SS級の砲撃をあんなに簡単に放てる人間が、こんな簡単にやられるはずが無い。

そう思っていたからこそ…彼女は、なのはの背後へと鎌を突きつけた。

「!? ふえ、フェイトちゃん!? どうしたの?!」

「大丈夫だよ、なのは…… 出て来てください。そこにいるのは分かっています」

フェイトが低い声で、呟くようにそう言う。

まるで霧が晴れたかのように、無傷の男がなのはの背後へ現れた。

「――!?」

「バルデツシュ！」

《プラズマザンパー！！》

「『…回避』」

驚愕するなのはと、あらかじめ準備していたフェイト、そして何も動じぬように回避する男。そのまま男は距離をとり、2人を見据えてこう言った。

「『…ミラーージュボディ幻影体現を見破ったことを確認。フェイト・T・ハラオウンへの警戒ランクを2段階上昇』」

その目に宿るのは先程とは打って変わった警戒の光。

「フェイトちゃん、どうしてあの人が私の後ろにいるって…」

「ただの勘だったんだけど…まさか当たるとは思わなかった、って所かな」

「でも、確かに私の砲撃は…!?!」

なのはが粉塵の晴れた先程砲撃が着弾したところを見ると。

そこにあったのは、氷で出来た男の人形。砲撃を受けたからか、少し欠けていること以外はほぼ無傷な人形だった。

彼は砲撃を受ける直前に、二つの能力を発動した。1つは幻影体現、もう1つは――――

『『S級魔力砲感知。幻影体現、精霊人形使用開始』』
ミラーージュボディ マジックデコイ

精霊人形——

魔力変換資質で作り上げた物体を自分の姿に錯覚させた上で三時間程度動かすことが出来る。意思と質量を持つ幻術というイメージだが、これは影分身と言ったほうが正しいのかもしれない。

しかし使われた側は溜まったものではなく、分身を造りだせる量に制限が無いため何十体もの男が一斉に襲い掛かるという地獄絵図すらありえるのだ。そう考えるとこの稀少能力も十分恐ろしい。

要するに彼は自分の姿を強制的に認識をずらすことで消すと同時に分身も作成し、なのはの背後に回って彼女を気絶させようと——としてフェイトに見つかり、一時的に距離をとった。

「『……』」

「『…』」

無言のまま睨みあう両者。彼も警戒ランクを上げた、というのは嘘ではないらしくもう余所見をしたりなどはない。

「…お聞きしても宜しいでしょうか？」

「『…』」

その膠着した空気を見て、フェイトが感情を押し殺した声で口を開く。

「何故、こんなことをするんですか？もし事情があるのなら、管理局が解決できると思いますし私達も貴方の力になれます」

質問。それは、自分達へ害を加える理由と如何してこんなことをしているのか、という二つの意味がこめられた質問だった。

そして、その言葉を紡いでから数十秒が経過する。ふたたび膠着状態に入ったかため息をつこうとしたフェイトの耳に、無機質な声が届いた。

「『貴方の力になれる』』『事情があるのなら』』『どうか話を聞くために管理局へ――』」

それは自分の声だった。

無機質で、感情の無い人形のような自分の声を聞いて、フェイトは思わず鳥肌が立ち、男を見た。

男は相変わらず表情を変えていなかったが、雰囲気が少し変わったような気がする。

「『――その言葉、それに準ずる言葉を管理局から聞くのは通算37086回目となります』」

と、雰囲気は変わらないが声は戻り、男は言葉を紡ぐ。

「『私は命令に従うために造られた兵器なので。理由などありません。しかし、センサーで探知したところ貴方の言葉には嘘が無い。管理局の人間は皆、私の力を手に入れようとして私に近づきました。しかし今はそれありません、私は管理局の絶対^{貴方}に手の届かない場所にいるので』」

男には嘘発見器のような能力があるらしい……しかしフェイトはそう

考えた後にその言葉のおかしさに気が付いた。

「管理局が貴方を手に入れようとしている？ ……待って。それは…」

犯罪組織や次元犯罪者なら分かる。しかし管理局が手に入れようとしているとなれば話は別だ。

彼女達も管理局の闇までは知らないが、はやてなどから聞いた話で自分達を引き抜こうとする他の部署の話は聞いたことがある。しかしそれは管理局の味方であり、自分達が管理局に所属しているからこそでる話だ。これでもしなのはやフェイトが犯罪組織などにいればそんな話は一切出なかっただろう。

管理局が“悪事”をしている人間を取り立てるはずが無い…とすれば、男は管理局と連絡が取れる立場にいることになる。

「貴方は一体…」

「『申し訳ありませんが』」

その言葉を遮るかのように、男は断固とした口調で言った。

「『これより先は機密事項なので話すことはありません。更に、貴方は忘れている。——リニアールには生命反応がありますね』」

一瞬、頭が真っ白になった。

しかしそれも一瞬、彼女達は腕を振り被った男を止めるべく魔法を放とうとする。

何をするのかは分からない。

しかし————止めなくてはならない、と本能が言っている。

魔法を放とうとする直前。
無情にも、男はその腕を一文字に振るった。

―――同時。

轟音を立てて何かが吹き飛んだ。

何が起こったかなど、フェイトとなのはに分かるはずも無く。

そして呆然としている2人の魔道士を無表情で男が見ているという奇妙な光景のまま数分が経過して、ヘリから聞こえてきたのは絶望の宣告だった。

『…フェイト隊長、なのは隊長…たった今、リニアレールが『何か見えない力に』ぶち当たったかのように吹き飛びました！ リニアレールは大破…ライトニング3、ライトニング4、スターズ3、スターズ4との連絡が取れません!!』

「…貴様、今何をした…!?!」

フェイトが低い声で、怒りを押し殺した声で聞く。

確信があった。これはこの男がやったことだと。というか、そんなことを出来る人間が、する人間が一人しかない。

「『…いくら強かろうと』」

彼はその問いに答えるのか、無表情で言葉を紡ぐ。

「『いくら硬かろうと、いくら速かろうと』」

その目はやはり、何も見ていないけれど。

「『——世界に存在している物体である以上、“死”という概念からは何者も逃れられません。これはこの世界の絶対の理デス』」

悪寒が、走った。

何かがまとわりつくような、そんな悪寒。ぞわぞわ、と何かが自分の周りに集まってくる感じ。

「こ…れ…フエイトちゃ…ん」

「なのは…、！！」

考えていることは同じで、2人とも相手の顔を見ただけで伝わった。

『アレはヤバイ。私達の手には負えない“何か”を持っている——』と。

心の底から認めたくは無い。

まだたくさん疑問はつきない。

しかし、まだ彼女達は男を何処か甘く見ていたことは事実。

——ここからリニアレールに攻撃することはない、と、決め付けていたからその可能性に気づけなかった。

だからこそ、ヘリから届いた報告を聞いて彼女達がすべきことは1つ。

“撤退”。即ち、敵からの逃亡だった。

「なのは、一旦リニアレールに向かうよ!」

「っ……うん!」

高速でその場を後にするなのとフェイト。

途中、フェイトが一瞬だけ追ってきていないか気になって後ろを振り返る。

だが、そこには既に…誰もいなかった。

——時は、ライティング2名がリニアレールに降り立った頃に遡る

リニアレールside

此方ではスターズの2名、ティアナとスバル、そしてライトニング2名、エリオとキャロが、それぞれガジェットを破壊しているところであった。

列車に降り立った後、ティアナとスバルは一旦別れて個別にガジェットを撃破していく。

「はあああ!!」

此方はスバル。ガジェットの開けた穴から侵入し、列車内で動き回るガジェットをその拳で次々と仕留めて行く。

「うおおおっ…って、うわあああ!？」

が、勢いが余りすぎてガジェットを破壊すると同時にリニアレールの天井まで破壊してしまい外に放りだされてしまった。

《ウィングロード》

しかし投げ出されバランスを崩し落下する、という瞬間に彼女のデバイスであるマツハキヤリバーがウィングロードを発生させなんとかスバルは体勢を立て直した。

「マツハキヤリバー…凄い、強化や加速にウィングロードまで…」

《私は貴方をより強く、より早く走らせるために作られましたから》

「…うん、でもマッハキャリアーはAIでも心があるでしょう？ だったら、少し言い換えようよ！ …お前は、私と走るために生まれてきたんだ、って！」

《…同じ意味に聞こえますが…》

「ちょっと違うんだよ」

《考えておきます》

「うん！」

そんな会話の後、再びスバルはガジェットの中へ突っ込んでいった。

同時刻、ティアナとリインフォースが列車内に進入しケーブルを破壊していた。

「駄目です…ケーブルの破壊、効果ありません」

「分かりましたです。では、ここから列車の停止作業は私が引き受けるので、ティアナはスバルとの合流を目指しつつガジェットを破壊してくださいです」

「了解！」

再び、彼女もまた列車内を走りガジェットを殲滅しながらスバルの

いる方向を目指して行った。

更に同時刻——山岳リニアレールより数キロ離れた地点。

二つの人影があった。

1つは、『真っ黒なドレスのような服を着ている』男。

もう1つは、『真っ白な騎士甲冑を着ている』女性。

他ならぬ、機動六課部隊長、八神はやと、『今はなのはとフェイトと戦っているはず』の兵器^男だった。

男は無表情で言葉を紡ぐ。

「『管理局機動六課部隊長、八神はやて。通告します』」

「…、」

彼女は^{はやて}何も答えない。

否、答えられない。

既に、この場所に――ヘリのサーチャーやなのはやフェイトでも
気づかないような結界が張られているこの場所に誘い込まれた時点
で、既に勝負は決まっていたのかもしれない。

男の真っ黒な瞳に映るのは、ほんの数分前まで敵意を越えた殺意を
放っていた少女ではなく。

右腕が変な方向に曲がり、力なく浮いているような八神はやての姿だった。

「『――これ以上の戦闘は貴方にとって命の危険を及ぼします。算出した結果では、貴方の魔力で私に勝てる確率は0・1%未満です。今すぐ投降を』」

「…誰、が、降参する、かい…!!」

懸命に意識を保ちながら、彼女は再びその瞳を男へ向ける。

男はその様子に、少しも顔色を変えることも無く、ただ『右腕を右上から左下へ少し振った』。

瞬間、はやての体に『右上から左下』へ切り傷が走った。

「うう、あ…ぐあああああ!!」

悲鳴を上げるはやて。しかしそれでも唇を噛み締め、目に灯るのは憎しみと憤怒。

その一方で、彼女は頭をフル回転して考える。

（なんや、これは…！！ さっきからアイツが手を振るうたびに私が殴られたり切られたり…こんなのありえへん。どんな能力やっていうんや…！！）

一向につかめない謎の能力。

彼女は男が腕を振る動作だけで自分の体が傷つけられていくという『攻撃』という動作をまるで無視した『傷』に内心舌打ちした。バリアジャケットなどまるで意に介さぬように自分の体へ傷を付けていく謎の攻撃。この腕は結界に閉じ込められた瞬間に折られたもので、激痛で思わず大声を上げた。

しかしそれすら馬鹿らしくなるような謎の攻撃が続き——しかも明らかに手加減している様子で——はやては既に精神的にも肉体的にも限界であった。

「『！ ……1の魔道士2名との接触を確認。敵対対象は高町なのは、フェイト・T・ハラオウンの両名』」

ふと、男が何かに気づいたように声を少しだけ大きくした。はやてに“？1”の意味は分からなかったが、とにかく自分の見えないところで2人の親友が頑張っているのだけは理解できた。

自分だけがくたばっているわけには行かない。そんな想いが更にはやての体を突き動かしていく。

「『（ぴくっ）…抗戦の意思を確認』」

「当然や…なのはちゃんやフェイトちゃん、それにライトニングやスターズも頑張つとる…私だけが…気絶しているわけにはいかんのだや!!」

でも体は正直で、既に意識を保っているのも限界であった。今大声を出せたことすら奇跡、という状況。

体のいたる部分は悲鳴を上げて、直ぐにでも倒れてしまいそうであった。一瞬でも目の前の敵が放つ圧力に負けないように、彼女は四肢の力をこめて顔を持ち上げて、男を睨んだ。

そのまま暫く膠着状態が続く。

何分か経っただろうか――男が急にはやて手を翳した。

「っ!!」

迎撃体制に入るはやて。しかし彼は全く予想外のことをした。

「『――癒^{ヒーリング}しの光』」

無機質な言葉で紡いだその言葉と共に、はやての傷が全快した。

「…は？」

「『条件を満たしたことを確認…契約を終了します』」

「な、なんて…」

「『…、』」

ボキュンッ！という音と共に、男は陽炎のようにその場から消えた。

と同時に結界が解除され、はやては無傷の状態で結界から離脱する。

しかし彼女は、とても助かった気にはなれなかった。

いや、それよりも——『助けられた』気すらする。

はやてに気づいたヴァイスが呼びかけるまで、先程の『条件』と『契約』について、彼女は深い思考の海へ沈んでいった。

―――更に同時刻、リニアレール内。

ライトニングの2人がレリックの置いてある重要貨物室の前車両へ到着したのだが、そこに待っていたのは例の爆発ガジェット群と触手が大量にある新型ガジェットという地獄だった。

お馴染みの赤い球体ガジェットが点滅し、半透明の爆発ガジェットが起爆する中で新型ガジェットの触手の猛攻が迫る。隊長格ならなんとかなるだろうが初陣でこの戦いはきつく、避けきれるものではなかった。

「っ、ぐああ!!」

「え、エリオ君!!」

爆発によって起こる粉塵は、ほぼ密室なりニアレール内では最大限の力を発揮する。列車の外にいるキャロはともかく、内部にいるエリオに煙の中から迫り来る触手を避けるというのも酷だろう。エリオは判断ミスで触手に捕まり、壁に激突させられた。

「エリオ君!!」

悲鳴のような口調でエリオの名を呼ぶが、返事はない。どうやら完全に気絶してしまっているようだった。

「っ…私…私、どうすれば…!？」

フリードの炎は弾かれる。しかもAMFが発動しているため魔法も掻き消されてしまう。

万事休す。そんな言葉が彼女の頭によぎった。

そう、このままではエリオは——死ぬ可能性すらある。

それだけは、どうしても避けなくては。

（なんとか…何とかして、エリオ君を助けなくちゃ…!!）

そんな時だろうか。

この状況に追い討ちをかけるかのように、『何か』が存在しているのに気が付いたのは。

ゾクッ……！！

っと、一瞬にして背筋に悪寒が走る。これは1人の少女としては無く、竜召喚の巫女としての本能。

『何か』いる。フリードもさっきまではガジェットを警戒するように飛び回っていたのに、今はキャラの肩で少し震えているようにすら見える。

気配が大きくなった。でもまだ何処か分らない。

更に大きくなった。大体分かってきた、それは自分の後ろにいる。そこから更に大きくなった。今キャラの顔は冷や汗で一杯であり、フリードの怯えも更に酷くなった。

ついにキャラは耐え切れず——後ろを向いた。

「…、あ…っ……」

そこにいたのは、山ほどの大きさでリニアールを見下ろしていて、真っ黒なローブだか布のようなものを着ている――

『骸』だった。

それは死神を連想させる、そんな姿。風に揺れて真っ黒な服がはためいている。

剥き出しになっている骨。人間に入っているはずの骨が、今日の前で動いている――。

悲鳴を上げる声すら出ず、彼女は顔を真っ白にして固まった。

『ホホオ…ソコノ女、我輩が見エルカ。余程の素質カ、アルイハ死

『恐怖』が彼女の頭を埋めていく中、彼女は必死で考えた。

目の前にいるものは、何なのか？

明らかにアレは、召喚術で出せるようなものではない。この世界に存在しているようなものではない。

それだけは…本当にそれだけは、一目見ただけで分かった。

『マア、関係無いガナ』

『それ』は不気味な声で、キャロにのみ聞こえているらしい言葉を吐いた後、その骨で出来た拳を握り締め。

そして、何処までも低い声で、一言呟いた。

『……
シャッジメント
“執行”』

キャロ・ル・ルシエは信じられなかった。

目の前の存在が放った一撃で、殴られた箇所から『リニアレール全体』が吹き飛んで、爆発したかのように粉々になっているというところを。

車両のコントロールを取り戻そうとしていたリインフォース？は何があったか分からない。

突然大きな揺れが走ったかと思えば、リニアレールが線路上から空中に投げだされて破壊にされているなど。

別の車両にいて、外の様子を見ていなかったティアナ・ランスターも何が起きたか理解が出来ない。

自分が立っていた車両に揺れが走ったかと思ったら、次の瞬間にその車両は陰も形も無く粉碎され、自分は崖の下へと落下していることなど。

——そして、ティアナ・ランスターと共にガジェットを破壊しつつレリックのある車両へ接近していたスバル・ナカジマを見た。

落ちていく自分を、真っ黒な魔法陣の上に立って見下ろす、ドレスのような服を着た男の姿を。

「『…リニアレール、能力“ ”によって破壊^死を確認。任務第一目的のロストログア、“レリック”の入手も終了。…任務達成』」

そんな光景を見納めながら。

彼女達は、崖の下へ、下へと落ちていった。

“理由”（後書き）

天破「マジ申し訳ない」

フェイト「土下座してる…ねえ、状況説明してくれない？」

天破「かくかくじかじか」

フェイト「恐ろしい程にカットされた気がするけど、なるほど…それは謝らなくちゃいけないね…」

天破「うん…だから、私、学んだんだ」

フェイト「？」

天破「…もう、次回予告、しない」

フェイト「…ええええええええええ！？」

という訳で、次回予告を今日でやめます。本当にすいません。次回はできる限りアニメ準拠にする…『予定』です。

天破「あくまでも『予定』です」

フェイト「そんなに繰り返さなくても…」

天破「本当に申し訳ありませんでした…」

フェイト「あ、作者さんに代わって私がお礼言うね？ お気に入り登録してくれた人、ありがとう！ まさかこんな駄作品に8件も登録してくれるなんて思わなかった…って、作者さんが」

天破「あい、それはマジで感謝しております。その調子で感想の方もどうかお願いします」

フェイト「そういえば、まだ一件も来てないんだよね…（苦笑）」

天破「宜しくお願いしやーす!!」

それでは次回の更新を、心の隅でも良いのでどうかお楽しみ下さい。

“死神”（前書き）

さて、次話をお届けします、天破です。

今回はほとんど無還者の能力が無双しています。

つまり、今回で聡明な皆様ならば恐らく彼の能力がほぼ分かる事でしょう。

というか本編中に答えが出てます。

という訳で、そのチートっぷりをお楽しみください。

それではどうぞ!!

“死神”

男side

「『レリックを確保、これにて任務を終了します』」

『カッカッカ：他愛モ無イ：コノ程度ノコトニ我輩ヲ呼ンダノカ？
ツマラン』

「『その質問に答える義務はありません』」

男が、背後に控える黒い死神のような服を着た骸と——見えない者からすれば、ただ男が1人で呟いているようにしか見えないが——話している。

先程リニアールを粉碎したときよりも縮んでおり、現在は男とほぼ同じ大きさだった。

どうやらどんな大きさも自由自在らしい。

そして、その話しかけられている男は合いも変わらず無表情だが、骸のほうは心なしか笑っているように見える。

白骨で出来ている顔が笑うというのかなり気味が悪かった。

「『確認したいのですが、あの魔道士達は死んだのデスか？』」

『我輩ニ聞カズトモ、貴殿ナラバソノ程度分カルデアロウ』

「『確かに彼らは今は生命反応があります。しかしもし貴方がその気を持っていたのなら彼らは時期に死に至るでシヨウ。その為の確認です』」

『我輩ハリニアレールニノミ“力”ヲ行使シタ。人間ニハ何モシテイナイ』

「『そうですか。分かりました：では、魔道士達のデータを管理者へ一斉送信、後に痕跡の抹消後に帰還します』」

兵器は状況を把握し、そのまま転移でこの場を去ろうとする。

その目はやはり何も見ていないような闇そのものであった。実質、この状況から魔道士達がまた反撃するとは確率的にありえなかったし、更に言えば反撃してきたとしても対応すればいい。

常に機械的に状況を把握する。人間ならばそれは100%不可能なことだが、男はそれを可能にしていた。

だからこそ気づけなかった。

自分の真下にいる竜の存在に。

「『!?!? 生命反応、数は5…その中に竜と思われる魔法生物の存在を確認』」

真っ黒な魔法陣の更に下。

真っ暗な崖下から、竜の咆哮が響いた。

『ホオ』

「『何后感嘆しているのか理解出来ません』」

先程からその黒い服をはためかせている骸は、少し右にその白骨を

傾け、人間が考えるときするように骨のみで構成されたその右手で自らの顎に触れた。

それを見て無表情且つ無機質な声で男が機械的に言った。もしかしたら突っ込みを入れたのかもしれないが、それは無いかと骸は思い返す。

そんなよく分からないやり取りをしていたら。

「フリードリヒ！！ブラストレイ…ファイア！！」

「グオオオオオオオ！！！！！！」

崖下より、真紅の炎が男と骸めがけて放たれた。

「『…炎熱反応…竜の息吹系統の魔法と判断します。現在の状況による障壁展開による抵抗は困難と判断、能力を使用します』」
ドラゴンプレス

呟くようにそう言って、男はその目を荒れ狂う炎へと向けて、右手を前に出した。

それを見た骸は、笑うように曲がっていた口を元に戻し、無表情——骸骨に表情があるかは分からないが——のまま、一言、歌うように呟いた。

『汝はどの様な“死”を望む? 《Was du Wunsch
u sterben?》』

その問いに、男はおどけるでもなく、怒るでもなく、困惑するでもなく、当たり前のような感じでこう返した。

「『我は永遠なる死を望む 《Wir hoffen, den
Wigen Tod》』」

『永遠なる死』——そんなものが存在するのか。死とは一瞬であり、一度味わえば生き返ることの無い限りもう味わうことの無いはずの痛み。

普通ならば意味など分からないだろう。しかし、その答えに骸はこう返した。

『ならばその望み、叶えよう 《Wenn es Wunsche
wahr werden》』

彼もまた、その骨で構成された左手を炎へ向けて差し出す。
骸骨

真紅の炎が、今まさに敵を焼き尽くそうと骸と男に迫る。

それに全く動じず。

そんな炎へ贈るように、彼らは声を合わせて。

『「凍死せよ」
《Erfrierungstod》
Cold Case》』

炎が手のひらに触れる直前に、そう言った。

「…、え…っ？」

全速力でリニアレールのあった場所に駆けつけ、その様子を見ていた高町なのはとフェイト・Tハラオウンは——信じられなかった。

否、信じたくない。

——男の手に触れたフリードの炎が、一瞬にして凍った、など。

崖下side

「きゃあああああ!!」

落ちる。

このままじゃ、スバルもティアナもエリオも…そして、自分も、全員。

スバルは突然のことで体が追いついていないらしく、マツハキヤリバーを使おうとしても落ちる速度が速過ぎてウィンググロードで体勢を立て直せない。

ティアナも何とか浮遊魔法で落ちる速度を軽減しているようだが、此方も少し状況の把握に追いつけないらしくただ落ちるのを遅くしているだけであった。

エリオに至っては体の自由が未だに利かないらしく、気を失っている。

「ツ…スー、ハー、スー、ハー」

この状況で、自分のすべきことは1つだった。

全員が助かるには、これしかない。

失敗したらどうしよう、なんて考えられない。

失敗したら、全員命は無い——だから、失敗は許されない。

でも、それでも。

「フリード…ゴメンね、私ちゃんと制御するから…」

「キューー！」

護りたい。

本当の意味で自分に優しくしてくれた人たちを、自分に笑いかけてくれる人たちを…自分に居場所をくれた人を…護りたいから。

「いくよ!!！」

彼女はその思いをこの詠唱に込めて、呟くように言葉を紡ぐ。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ!! 来よ、我が竜フリードリヒ…竜魂召喚!!！」

召喚呪文の終了と同時に、白き巨大な竜がキャロらの下へ現れた。

「フリード、大丈夫!？」

「グルッ！」

主の言葉に、頼もしい返事を返すフリード。

これがフリードの真の姿であり、そしてキャロがしっかりとフリードをコントロールできた始めての瞬間であった。

「やった…わたし、制御できてる…！あ、今はそんな場合じゃなかった！フリード、まずはティアナさんとスバルさんをお願い！！！」

感動も束の間、慌てたキャロからの命を受けたフリードは全力で降下し、少し下へ落ちていたスバルとティアナを拾い上げる。

更にその後、エリオの体を丁度抱き寄せたキャロも救い上げ、どうにか全員が助かった。

「キャロ、これがアンタの…」

「はい！これが、フリードの真の姿です」

「わあ…大きいなあ」

場違いな台詞を言うスバルと驚きを隠せないティアナ。

更にここでエリオも回復した。

「…ん、あれ…キャラ？」

「あ、エリオ君…大丈夫!？」

「う、うん僕は何か…これは？」

その説明をスバルとティアナが引き受け、キャラはフリードに指示を出す。

「フリード、上に行って！」

「グルッ」

再びキャロの命に応じて、上へ上昇していくフリード。
しかしキャロやエリオ達が振り落とされないように、スピードは保
つていく。

そして、キャロの目は捉えた。

真っ黒なドレスのような服を着た男と、その背後に存在している骸
骨の存在を。

「フリードリヒ！　ブラストレイ…ファイア！！」

「グオオオオオオオオオオオ！！！！」

完全に死角を突いた一撃。

炎の威力も申し分なく、相手がどんなに化け物でも少しくらいのダメージは負わせることが出来るはずの一撃。

キャロの目が、骸骨と男がそれぞれ手の平を炎に向けて差し出すのを捉えなければ——この攻防は、『キャロらの負け』だった。

再び背筋に悪寒が走る。

この感覚は、リニアレールが粉碎され自分達が落下したときと全く同じ感覚。

「フリード、停止!!」

慌てたように大声を出すキャロ。その言葉に従い、急停止するフリード。

怪訝な目をキャロへ向けるティアナ、スバル、エリオだが、次の瞬間にその顔が真っ青になった。

ワンテンポ遅れて、ティアナらが視線を向けている方向へキャロも視線を向けた。

そこにあったのは、真っ赤に燃える炎などではなく。

おぞましいまでの冷気を放っている、氷であった。

炎が凍る。

そんな非現実なこと、信じたくない。

しかし、現に今その“非現実”が目の前で起きている。

そして、男の目が自分達を捉えたのと、キャロが素早く指示を出したのは同時だった。

「『——キャロ・ル・ルシエを視認、その他ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンデュアルを確認。攻撃を開始——』」

「フリード、旋回してあの人から逃げて!!」

フリードが旋回し、男とは真逆へと飛び出す。

と同時に男の足元に大きな魔法陣が展開された。

「『―――“ 執行モード ”』」

その言葉と共にキャロの目に映るのは、リニアレールを吹き飛ばした巨大な骸骨。

ティアナ、スバル、エリオは気づいている様子は無い。

とすれば——気づいているのは、自分^{キャラ}1人。

山と同等、いやそれ以上の大きさを誇る骸骨は、キャラの見ている前で謡うようにその低い声を紡いだ。

『汝はどのような死を望む？』《Was du Wunsch zu sterben?》『

それはベルカ語だった。

更にその言葉に返されるように、男の声が響く。

『苦しまず、一瞬で眠れる安らかな死を望む』《In Leiden, Sterben und erholsamen Schlaf in einem Augenblick hoffen》『

『ならばその望み、叶えよう』
《Wenn es Wunsch
wahr werden》

骸の低い言葉と共に、キャロの目に、自分達の数十倍は大きいハンマーが骸骨の手に出現したのが見えた。

そして、それを振りかぶると同時に放たれる男と骸の言葉。

『「『庄 死 せ よ』
《zu Tode gequetscht
Fall》』

その言葉がキャロの耳へ届いた刹那、それが振り下ろされる。
ハンマー

狙いは、どう考えても——自分達。

「フリード、加速ッ!!」

「グルッ！？…グオオオオオオオ！」

この状況で何故加速するのかフリードにも分からなかったようだが、キャロが言うのでそれに従い急加速する。

振り落とされぬよう、ティアナやエリオたちも必死にしがみ付きながら。

何とかその攻撃範囲から抜けた直後。

先程まで飛んでいた場所を、巨大なハンマーが轟音を立てて通り過ぎていった。

「…ほ」

思い切り安堵の溜息を付くキャロ。スバル達はいきなり聞こえてきた轟音に少々パニックに陥っているようだったが。

そして安堵と同時に寒気が走る。もし自分にアレが見えてなかったら、あのハンマーで潰されていた、と。

「『！…回避？ 理解不能です。キャロ・ル・ルシエは一体…』」

『言イ忘レテイタガ、アノ小娘ハ我輩ガ見エルゾ』

「『…把握しました。キャロ・ル・ルシエに対する警戒度を3ランク上昇し、転移を発動しこの戦闘地域を離脱します』」

「ッ！？ ま、待ちなさいッ！！」

「『…警告。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン』」

その言葉に反応したのかしていないのか。

男がなのはの名を呼ぶと同時、なのはの首に『何か』が突きつけられた。

「…!？」

得物の姿は見えない。それどころか、『何か』を突きつけている存在すらなのはの目には見えない。

当然、フェイトにも何がか分からない。急になのはが冷や汗を流して動きを止めたように彼女には見えるのだ。

「『失礼ながら、貴方方の戦闘力と私では100%私の勝利です。もう私に関わることは止めることをお勧めします』」

「そんなこと出来るわけがない!!」

そんなのはに変わってフェイトが若干イラつきながら大声を出す。

「『…残念です。しかし、これだけは言わせていただきたい』」

その言葉が彼の口から漏れた瞬間。

なのは、フェイトの周りの空気が明らかに変わった。

「ッ…？何…？」

「…（がたがたがた…）」

「？
なのは…！？」

そして、なのはの方を向いたフェイトは驚く。

なのはの首に、銀色の大鎌が突きつけられていたからだ。

そしてその鎌を突きつけているのを見て——更に、信じられなかった。

否、呆然とした。

「…骸、骨…？」

そう、そこにいたのは黒衣を纏い、両手でなのはの首に突きつけている鎌を持っている——骸骨だった。

「……！！」

恐れからか、焦りからか。

顔をゆがめながらバルデッシュをその骸骨に向けて振るう。

しかしそれは何の意味もなさず、骸骨をすり抜けた。

「!？」

「『死』という概念とは何処にでも転がっています』」

その混乱を更に深めるかのように、男からの追い討ちがかかる。

「『例えば貴方の周囲に飛んでいる空気。それらが圧縮して刃になり、貴方は斬首されて死ぬ…ほら、死ぬでしょう?』」

「何を言っ——（ヒタリ…）て……?」

何の意味か分からず問いただそうとしフェイトの首にも、いつの間にかなのと同じ大鎌が突きつけられていた。

「『もしかしたら、空気が圧縮して貴方達を押しつぶそうとするかもしれない』」

その言葉に呼ばれたように、男の周りにハンマーを持った骸骨が現れた。

「『もしかしたら、酸素に火がついて貴方達を焼死させようとするかもしれない』」

その言葉と共に、両手に火の灯った骸骨が4〜6体現れた。

「『もしかしたら空気が槍状に圧縮され、貴方達を突き殺そうとするかもしれない』」

その言葉と共に、今度は槍を持った骸骨が現れた。

「『ホラ。死って本当にたくさんあるでショウ?』」

真っ黒な魔法陣の上に男は立ち、その周りで骸骨が自由自在に動き回る。

真っ黒なドレスのような服がその光景に妙にあっており、更なる恐怖を彼女達に与える。

その顔の表情は結局変わることはなく――

「『私は死を操る死神。もう、貴方方は近寄らない方がいい――マニユアル通りの説明を終了します』」

最後にこの場では少し緊張感に欠ける台詞を言いながら、男は指を鳴らす。

と、同時に全ての骸骨が消滅し、男も同時に消えていた。

「…ねえ、なのは」

「…何？フェイトちゃん」

今の説明を受けて、気づいてしまった。

あの男は、あの骸骨を自分達が気づく前からなのはに近寄らせていた。

ということとは、だ。

「…あの男の能力って、さ…本人の話を照合するなら…私達…ううん、『どんなものでもいつでも殺せる』って…事だよね…」

「…（ペタン）」

空中でへたり込むという器用なことをするなのは。

暫くして、エリオ、キャロ、スバル、ティアナが戻ってくるまで彼女達はずっと噛み締めた。

またしても何も出来なかった自分達の無力さへの悔しさと、絶対的な力を持つあの男に対する絶望感と憎しみを――。

??? side

その頃、何処かの研究室。

1人の科学者っぽい服を着た男と、一般的にゴスロリと呼ばれる服を着ている女性、更にもう1人此方も何処か可笑しな服装をしてい

る女性がガジェットに残した映像を見て話し合っていた。

「なるほどのう」

その中で、ゴスロリ服を着た女性が年寄りのような口調で一言洩らす。

その声には、怒気が入り混じっていた。

「そうかそうか、やはり“兄上”は管理局に…絶対に許さん」

その言葉と共に吹き荒れる殺気。冷や汗を流す男ともう1人の女性。

それを少しでも和らげるため、男が殺意を放出する女性へ問いかけた。

「ふむ…“デイル”、あの男が君のいう“兄”なのか？」

「間違いない…妾^{わらわ}達は皆他の兵器を区別できる目を持っておるからの…この映像の中にいるこの男は、紛れも無く兄^い上じゃ」

苦虫を潰したように言う——ディールと呼ばれた女性は、さすがに気づいたのか殺意を引っ込めた。

それにホッとしたもう1人の女性は、改めて男に問いかける。

「それで、ドクター、いかがでしょうか？ 追撃戦力を送りますか？」

「…いや、さすがにこの状況で追撃戦力を送るのは止めてあげるとしよう。彼女達も疲弊しているだろうし、今更新しいデータは取れないさ。それよりも、ディールの言う兄の方が気になるね」

「少々お待ちください…出ました。魔力数値、推定SSS…魔道士ランク、推定EX…これまで確認された希少能力は5個以上…ディールと聞いたのもあわせると20を超えます」

「20以上の希少能力、か…此方としても敵に回したくないんだが…」

「それだけは分からんのじゃ。今の兄上は管理局の上層部に絶対に従うように洗脳されておる。もし管理局が此处を襲え、と言ってくれば…」

「彼が此处に来る、というわけか」

頭を抱える男。今回確かにレリックを失ったのは惜しいが、そのレリックを奪い取った真犯人がディール曰く管理局の上層部なのだから笑えない。

男はただの人形、ただの駒——しかしその駒の印象が強すぎて、裏に誰がいるかまでの考えに至れない。

もし彼らもディールからこの男について聞かなければ、恐らく彼らも何も考えることは出来無かっただろう。

「で、どうするのじゃ？ 妾としては、今からでも管理局を潰しに行きたいのじゃが」

「まあ待ちたまえ。そんなことをせずとも、次の出撃任務でストレスを発散して来たほうがいいんじゃないかね？」

「むう…しかし、管理局の方が面白そうじゃし」

面白そう、という理由だけで世界最高権力者を潰そうとしているデイルに内心再び冷や汗を流す男と女性。

しかしそれでも何とか説得に成功し、くれぐれも勝手に行動しないように、と念を押され、それでも分かっているのか分かっていないのかデイルは鼻歌を歌いながらその部屋を出て行った。

「…ふう」

「…ドクター、心中お察しします」

「はっはっは…全く…アレで本当に管理局を1人で潰せる能力があるから性質が悪いね」

「全くです」

「さて、約束したからには次の出撃で外に出して上げなくてはならないな。次は…」

そういいながら、次ガジェットを出撃させる場所へのリストをUPする男——ジェイル・スカリエッティ。

そのジェイルの質問に応答をしていく女性——ウーノの2人は、自分達の家族同然の女性である“クインディール”の頼みに応ずるため、ああでもないこうでもないといいながら2人だけの会議を始めた。

“死神”（後書き）

天破「という訳でデイルが登場したわけですが…」

ティアナ「…ねえ、ちょっと思ったんだけど」

天破「何かね」

ティアナ「今回、キャラかつこ良すぎない？」

天破「えっ、そっち？」

ティアナ「だってそうじゃない！その割にはあたしやスバルの活躍がほとんどないわよ？これはどういうことなのかしら？」

天破「まあまあまあ…今回はキャラ初の竜魂召喚というわけで見せ場だったわけよ。しかも設定上、君達の中ではキャラしかあの骸は見えないわけで…もし誰も見えてなかったら君たち今頃ハンマーで圧死してたよ？」

ティアナ「うっ…想像すると怖いわね…前兆なしに人間がつぶれる姿って」

天破「まあそりやそうでしょ」

次回 幕間 “ ? 5 の日常 ”

クインデイル

ティアナ「あれ？次回予告しないんじゃないの？」

天破「内容は言えないけど、次回はディールのぶらり一人旅です」

ティアナ「…今回の事件の顛末とかはどうなるのよ？」

天破「次回でちょこっとだけ入れるけれど、詳しくは次回の次回だね」

ティアナ「まあ、頑張んなさい」

天破「人事だと思って適当な…まあいいけどさ…」

次回も、心の何処かに鍵を掛けてでもいいので楽しみにいただけると幸いです^^

それでは閲覧ありがとうございましたm|m

幕間“?5（クインディー）の日常”（前書き）

てな訳で幕間をお届けします。

今回のお話はディール含むオリキャラが中心です。

そして駄文です…これはいつもでした、申し訳ない。

それでも良い方はどうぞお進み下さいませ（＾▽＾）

幕間“?5（クインディー）の日常”

——リニアレールの事件から次の日……

ミッドチルダ市内side

リニアレールでののはらの葛藤・混乱など全く知らないミッドチルダは、今日も人々で賑わっていた。

「……暇じゃのう」

そしてその街中をフラフラと歩くゴスロリ服を着た女性——クインディーは、一言そう溢した。……此処にもしスカリエッティやウーノがいたら、「何故そこにいる」と突っ込みを入れるだろう。

そう、彼女はスカリエッティのアジトから脱走してきたのだ。

だが、脱走と言っても決して彼女は不自由を強いられているわけではない。食事はナンバーズの誰かに上目遣いで頼めばいつでも作ってくれるし、欲しい玩具があればスカリエッティが何でも作ってくれた。しかし、彼女はその変わらぬ日常に飽きたのであった。確か

にスカリエッティ達には感謝しているし、絶対に裏切るつもりは無い。しかし飽きるものは飽きる。まさに彼女の現在の思考は子供のそれであった。

ここらで少し刺激が欲しい。そう思って脱走したのだが：

「…平和じゃ。平和すぎて詰まらん」

少々問題発言をする彼女もどうかと思うが、クインデイルは現在暇すぎて困っていた。

この話はまたいつかすることになると思うが、デイルは研究所にいた頃から『非日常』が大好きであった。おかしい言い方ではあるが、厄介事を見つけてはそれを解決することが楽しいらしい。

変わらぬ日常より常に変化する日常へ。それが彼女の本心であった。その点では、兵器達の中でも少し可笑しな変わり者だといえるだろう。その一方で、有り余る元気と嘘を付けない性格が彼女の周囲に人を集まらせる要因のひとつとなっていることも事実であった。

それはさておき、そんな本心を胸に刺激を求めてデイルは町へと繰り出したのである。

しかし、本当につまらなすぎる。かなり前になるが、ウーノに連れて行って貰った時の燃える空港からのレリック奪取は中々に刺激が強かった。最初は一般人を装って普通に奪うだけの簡単な作業のはずだったのだが、突然空港に火災が発生し、見事に彼女の望む『非日常』があの時始まったのである。結局火災を起こした犯人は分からなかったが、彼女は最初の方はその犯人に感謝すらしていた。

——その火災で、人が死んだことを知るまでは。

しかも明らかに火災による死ではなく、強制的に焼死させられたかのような痕跡があることに彼女は気が付いた。しかし管理局はそれに気づかず、ただ火災による事故死ということで片付けられた。

確かに刺激は欲しいが、刺激が欲しいからと言って人を殺してはならない。それもまた彼女の本心の1つであった。

「……ふむ……少しくらいならば人を躓かせるくらいは……いや、それをしては兵器と変わらんではないか……妾は人を傷つけることに能力を使っては……」

……現在の彼女の眩きからは、到底想像できない本心であることは誰も否定できないが。

と、そんな危険なことを眩きながら人ごみを歩いていたときだった。

「ふぁー…そろそろ姉上達も心配する頃じゃし…帰るかのう…と、うん？」

欠伸をしながら引き返そうとすると、ふと目に飛び込んできたのは泣いている男の子だった。

辺りを見回すも、親と思われる人間の姿は何処にも無い。この人ごみではぐれてしまったのだろう、と見当をつけたデイルは迷わずその子供の下へ向かった。

「ひっく…うう…？」

「ほれ、どうしたのじゃ？泣き止むのじゃ、男じゃろう？」

優しく話しかけると同時に、関りたくない一心で男の子をスルーしていた大人に白い目を向けるのも忘れない。何人かの大人が目を見返したのを見て満足すると、泣きやんできた子供の頭を撫でながら会話を始めた。

「お主、母親か父親は？」

「ひっく…お母さんが…あっちではぐれちゃった…」

「この人混みじゃ、確かに逸れるのも無理は無かろう…分かった、では妾と一緒に探すのじゃ。お主、名前は？」

「一緒に探してくれるの…？ あ、僕ラース…ラース・アディアクスです」

「ふむ、いい名前じゃのう。妾はクインデイルじゃ。長いからクイン、またはデイルと呼んで欲しいのじゃ」

「じゃあ…クインお姉さん？」

「おお…姉、と呼ばれるのは新鮮じゃのう。おっと、そんな場合じゃ無かったの…まあお主の好きなように呼んでくれ。じゃあ、行く」

とするかの」

「…はいっ！ありがとうございます！」

5，6歳にしては中々しっかりしている少年に苦笑を洩らしながら、
ディールは少年と手を繋いでミッドチルダを散策し始めた。

…とまあ、色々な所を探し始めたのだが。

「…いないのう」

「うう…」

ラース本人から聞いた話によれば、ラースとその母——リース・アディアクスという——は、このミッドチルダに父の誕生日プレゼントを買いに来たらしい。

しかもこの人混みに加えて、リースは子供のラースから見てもとてもなくマイペースな人で、例え質量兵器を突きつけられてものほんとしている人とか。

もしかしたらラースのことも慌てずにゆったりと探しているのかもしれない。いや、寧ろいつか見つかるだろうと思って探してすらないのかも知れない…とはラースの弁である。

「ふええ…お母さん……」

「ううむ…ラースよ、お主の母の特徴をもう一度言えるかの？」

「え？ あ、はい…えっと、髪が長い栗色で、身長はクインお姉ちゃんより高くて、目の色が白くて…うう、すいません、これくらい

しか…」

「いや、それだけ聞ければ上等じゃよ」

仕方が無いので、少々…いや、かなり遠慮したいが管理局に頼ることにした。実は彼女は“兵器”としても魔道士としてもサーチ能力において、才能は一般人以下のため人に聞くしか道が無いのである。幸い、自分が人間じゃないことは他の“兵器”でない限りはバレないはずだ。そこまで思考したのち、ディールは探す相手を“母親”^{リリース}から“管理局の服を着ている人間”へ切り替えた。

まあ、さすがは管理局本部がある世界である。探し始めて5分少々で見つかった。

何やら焦ってそうに見えるオレンジ髪の少女であった。

（? …あの娘は確か）

何やら見覚えがある気がして、出掛かっている記憶を少し思い返してみる。

直ぐに思い当たった。

（ああ：兄上の能力の被害にあった管理局の：確か、スカリエッティがスターズ分隊だとか何とか言っていたのう）

彼女も：というか、兵器達は自分以外の兄妹達の能力の名称は良く知らない。実際、デイルがスカリエッティに齎した“兄”の希少能力の中にリニアールを吹き飛ばしたあの骸の能力は入っていなかった。

：しかし、スカリエッティ達の様子から恐らくあの死神のような存在が見えたのは自分だけだということは理解出来た。研究所にいた頃からそうだが、未だに兄の底は見えないのだった。

（おっと、思考が脱線してしもうた）

首をかしげて此方を見ている少年の為にも早くあの管理局の少女と接触しなくてはならない。

そう思い、少し小走りで少女の元へ向かった。

「…ん…こっちにもいないわね…何処に…」

「すまぬが、ちょっといいかの？」

「う…ん…取り合えずスバルに…って、あ、すいません！！　な、何でしょう？」

何やら考え事をしていたようで、此方に気づくまでに時間が掛かったが話は出来た。

「実はの…」

迷子の子供と、その母親の特徴、たまにラース本人の言葉も交えて

これまでの経緯を説明する。

「栗色の髪…？ リース…あ！ やっぱりそうだわ！あの、その子なら今管理局の方で搜索願が出てたんです！」

「なん…じゃと？」

「あのマイペースな母さんが…僕のために搜索願を…？」

だが、探している途中でどれだけリースがマイペースかを聞かされていたディールとそのマイペースな性格の被害をともに受けることの多いリースにはそれが全く信じられなかった。

「で、私がその子を探している途中で…じゃあ、管理局のロビーに来てくれますか？」

「ふむ…正直（管理局も搜索願の件も）信じ難いが…行くとするかの。良いな、レース？」

「は、はい」

まあ、もし行って見て嘘なら自分が暴ればいいだろう——とまたしてもとんでもないことを考えながらレースとディールは逸れない様手を繋ぎつつオレンジ髪の管理局の少女の下へ付いていった。

「あ、お母さん!？」

「……本当にいるとはのう…」

「あらー、レース。探していたのですよー? …で、貴方はその女性の方に私をどう説明したのですかー?」

「いふあい、いふあいよー」

ロビーに着くと、管理局の女性と仲良く談笑しているレースに聞いた特徴とほとんど同じ女性——レースがそこにいた。少しレースの情報に加えるとしたら、胸が大きいことであろうか。ディール並に、それ以上かもしれないほど大きかった。

暫くじゃれ合っていた（リースによるレースの尋問をしていた）親子であったが、レースから事の次第を聞くと、リースがディールの元へやってきた。

「レースから聞きました。 親として、本当に感謝してますー。ありがとうございます」

柔らかな笑みと共に頭を下げるリースに、デイルは少し照れてこ
う返した。

「いいんじやよ、妾とて嫌では無かったからのう」

「そう言っていただけだと嬉しいですー♪ さ、レース。帰りま
しょうか？」

「うんっ！」

レースも満面の笑みで返事をして、ロビーの出口へ歩いていく。

出口から出る直前、ラースが振り返ってディールへと呼びかけた。

「クインお姉ちゃん！　また一緒に遊んで下さいねー！」

「うむ、約束じゃぞー！」

その会話を最後にして、その親子は一瞬の笑顔の後に消えてしまった。

魔力反応無く転移したアディアクス親子に驚きを隠せないディールだったが、皮肉にも先程ラースと談笑していた管理局員である――
――なのはが説明した。

「アディアクス一族はですね、大昔から“魔法薬”の分野で凄い活躍を残してるんです。でも残念ながら、その凄い魔法薬は一部しか出回ってなくてしかも高価で…管理局でも一部の人しか持っていないんです」

なのは曰く、今の転移のようなものはその薬の一部を使ったものらしい。

「それは便利じゃな。しかし…ふむ、一部しか出回っていない、というのは如何してかの？」

「それが、聞いてみたら…」

『貴方方が“本当に信頼できる組織”だということを証明出来るのなら、いくらでもただで差し上げるのですが…後100年は無理そうですねー♪』

「…って、よく分からないことを言われてはぐらかされちゃって…」

それを聴いた瞬間、ディールの中で1つの仮説が芽生えた。

もしかしたら彼女のマイペースという性格は見せ掛けなのかも知れない。

わざとマイペースに見せることで、相手のペースに巻き込まれず、しかも同時に本当の自分をごまかすことが出来る。簡単なようであり難しい会話術に置いての高等テクニックだ。

もしそうだとしたら…リースという女性是中々の曲者である、とディールは不敵な笑みと共に小さく笑った。

「成程のう…ふむ、それでは妾もここで失礼するとするかの。一応家族も待っているのじゃ」

「あ、分かりました。捜査協力に感謝します！」

「ほっほっほ、別によいぞい。そういえばお主の名を聞いていなかったの。名はなんという？」

「あ、高町なのはといいます」

「ティアナ・ランスターです」

「そうか、そうか。良い名前じゃのう…ではお主らに忠告しておこう」

ニヤリ、と。

悪どい笑みを浮かべ、不審がっている2人の魔道士へ彼女はこんな言葉を投げかけた。

「…骸”に注意じゃ。もし会ってしまったのなら逃げよ。戦えば、お主らに助かる道は残されておらん」

「―――!？」

「…?」

対極的な反応。

思い当たることがありすぎるのはと、よく分かっていないティアナ。

特になのはの頭に鮮明に蘇るのは、『男』が操っていたと思われるあの“死神”である。今でも思い出すだけで恐怖が走る。

呼び止めようとデイルの方へ意識を向けるが、彼女はそのまま出て行こうとしていた。

「あ、待ってください！貴方はあの男の人と関係が…」

直ぐになのはが追いかけて、詳しく聞こうとするも。

既にそこには、ゴスロリ服の女性の姿は無かった。

スカリエツァ
デジタル
side

「た
だ
い
m
」

「「「「「!!」
(クイン) ディールー!」」」」

「ぬおあああ!?! やつ、すまなかったのじゃ! 反省しているから
許S: 説教は嫌なのじゃー!!」

「全く、お前という奴はクドクド…」

「君は自分が狙われていることを…ガミガミガミ…」

「全く、どれほど心配したと…グチグチグチ…」

因みに、帰宅してから5時間超の説教にあったことを此処に記す。

幕間“?5（クインディール）の日常”（後書き）

天破「少しくらい、ギャグを、入れたかったんだ」

ディール「ふむ…何故妾をそのギャグに起用したのじゃ？」

天破「一番ギャグに絡ませやすいから」

ディール「よし、それは妾への宣戦布告と受け取った。表へ出るのじゃ」

天破「いや違…」

リース「あらー…作者さんが首を捕まれて連れてかれちゃったわねー。…まあ、いっか♪ ええと、作者さんが言う予定だった事を言わせて頂きますー。私達…リースと私の初登場となった訳ですがー、どうやら私達をただのモブキャラにするつもりは無いみたいですねー、作者さんは…私としては別に今回限りの登場でも良かったのですがー。まあ、もう一度出るとしてもかなり先のことになると思うのでそのときはどうぞよろしくお願いしますー♪」

ディール「ただいまなのじゃー」

リース「あらー、お帰りなさい、ディールさん…作者さんはー？」

ディール「今頃ゴミ収集車に回収されてる頃じゃないかの」

リース「作者さん、冥福をお祈りしときますねー」

次回は個別スキル訓練に入ります。

：が、『計画』を知ったはやてが少しゲンヤへ迫ります。兵器に関してゲンヤの知っていることとは如何に！？ と同時にこの作品中で遂に最後の兵器（？4）の登場です。皆！この作品唯一の男の娘の登場を見逃すなよ！！

？「：なんで僕がこんな目にい：（涙目）」

サーセン、自重しませんでした。でも後悔はしていません。

それでは、心の隙間でもいいので楽しみにしてくださいさるようお願いします^^

1万PV達成記念！ 閑話“何処にでも無さそうな日常風景”（前書き）

どうも。1万PV達成してて舞い上がっている男、天破です。
これも皆様のお陰です。土下座しつつ感謝しております。

さて、今回は先程のディールの日常みたいな感じではなく、本当にギャグそのものというか和むことに重点を置いたお話です。お楽しみいただければと思います。

では、どうぞ！

1万PV達成記念！ 閑話“何処にでも無さそうな日常風景”

兵器の日常？ 『？1…無還者^{リセッター}の休日』

「『…』」

真っ黒なドレスのような服を着た男が、アホ毛を立たせながらとある家の屋根に座ってミッドチルダ市内を見物していた。どうやら任務という訳ではなく、何もすることがないように見える。

「『…理解できませんが、この状況を暇というのでしょうか』」

『ソレ以外ニ何ト言ウノカ知リタイモノダ』

そんな呟きのようなものに反応したか、男の後ろにフードを被った骸が現れて突っ込んだ。

しかし男はそれを華麗にスルーし、丁度近くに寄ってきた蝶々を何ともなしに目で追っていた。

『大体、何故任務ガナイ。我輩ラノ能力ニ頼ル人間ハ大量ニイルハズダガ』

「『その質問に関する回答ですが、実際のところ私の存在を知る人間がほとんどいません。更に私に依頼した人間は“管理者”を除いて全員抹殺しているので、少なくなっているのが現状デス』」

『…ツマランナ』

一言呟くと、妙な骸骨もまたその辺にふよふよと浮きながら通行人を見物し始めた。

「…!!…、…!!」

「『…真下より生命反応?』」

ふとそのまま数分が経過した後、男の真下——つまり家の中から口

論が聞こえてきた。どうせすることもなかったので、聞いてもいいか否かを計算してまあいいだろうと何とも彼らしくない曖昧な答えを出して耳を済ませた。正直これは任務でもないので真剣に計算・断定・思考する必要もない。なのでバレ無い程度に魔力を使用して聴力を上げた。

「もうあの桜の木は駄目です…私の薬でも治せませんー」

「そんな！そこをなんとか…」

「私としても心苦しいのですがー…死んだ存在を治す、ということ
は私達の家系でも不可能です」

「うう…そんな」

「『…声紋から、アディアクス家現当主リース・アディアクスと断定します。もう1人の声紋はデータが存在しないので判別不可。年齢は50～60前後と推定します』」

自分の声で結論付けたところで、男は彼女達の話題の元である桜の木を見る。

確かに、その桜の木は『老死』しており普通ならば二度とその花を咲かす事はないだろう。

そう、普通ならば。

「『死因は老死と判断……能力を使用し、対象の回復を始めます』」

『ム?…ホホオ、面白ソウダ。暇潰シニ最適カモ知レヌ』

男が“幻影体现”を使用し、自分の存在に気づかれぬようにする。その後、その場から動かずに掌を老死している桜の木へ向けると、骸骨が愉快そうに『唄った』。

『汝は死を何とする? 《Was ist dein Tod?》』

その唄に、男は無表情でこう返した。

「『死とは投げ捨て、操るもの《Der Tod ist nich
ht manipulierbar und weggewor
fen》』」

その言葉に満足したかのように、骸骨は愉快そうに頷いた。

『ならば、汝に“我ら”を操る力を授けよう《Thee, dan
nschenken die Kraft, uns zum
anipulieren》』

骸骨はその骨のみで構成された手の内、中指であろう骨を1本突き
出して、男と共に最後の唄を謡った。

「『死よ、我が前に跪け《Ich tot, kniet vo
r uns》』」

最初は、何も起こらなかった。

しかし少しすると、その桜の木から子供程度の大きさの骸骨が次々と出てきて、それに反比例するかのように桜の木が若返っていった。

「…あ、あらー？」

「まあ…」

困惑した声と驚愕したような声。

無理もない、彼女達の眼からは桜の木が勝手に若返り、たった今季節はずれの花を咲かせたようにみえたのだから。

「『…能力の使用を終了します』」

『フム、“老死”カ。我輩モコノ“死”ハ使ッタコトが無イナ』

そう言った男と同じ程度の大きさの骸骨は、老死していた桜から沸いて来た骸骨達と何やら会話していた。その言語はベルカ語でもミッド語でも無い為常人には理解できないが、どうやら骸達の間でのみ通じる言葉らしい。

「『論理的に考えると、老死よりも焼死や凍死などの方が一般の人間ならば確実に且つ安全に殺せます。従って、老死を使う機会というのはそこまで無いと思われます』」

『ソウカ。残念ダ』

その会話と同時、一瞬だけ男は桜へと目を向けた後全ての骸と共に消えた。

後に残されたのは、美しく散る桃色の桜と、リースが治したと勘違いした女性が彼女に感謝しているという、真実を知る者からすればかなりおかしい光景だけであった。

兵器の日常？ 『？2…消失者&？3…再生者の休日』
パニッシャー ファスター

「何故休みの日までお前と付き合わなければならないんだ、フラン」

「それは此方の台詞ですわよ、春斗。はあ…」

珍しく私服を着てミッド市内を歩く、2人の男女——まあ、春斗とフランなのだが——は、互いに愚痴を溢し合いながらノンビリと歩いていた。

目的は単純で、彼らの姉の知り合いへ荷物を届けにいくだけの簡単な作業であるのだが。

「はあ…いい加減、なのは姉達のワーカーホリックは何かしなくてはならないな」

「ええ。はやてさんは部隊長だからともかく、このままではフェイトお姉様達はいつか倒れますわ」

管理局ほぼ全ての局員に休日が許されているというめでたい日に――なのはとフェイト、はやては相変わらず六課で仕事していた。

いや、これには語弊があった。なのは、フェイト、はやてのみならずフォワード陣は一般局員を除いて全員が訓練か仕事中だ。本当に彼らの体は大丈夫なのかと思ってしまうのも無理はないだろう。

「何処をどう間違ったらなのは姉があんなワーカーホリックになるんだか。仕方ねえ、前々から計画していた高町家乗り込ませ作戦の実行の時が…」

「止めなさい。死人が出ますわ。主に恭也さんとか」

此処で管理局ではなく、なのはの兄である恭也の死を予見する辺り、恐らく彼女も高町家の上下関係の実態を把握していると思われる。しかも彼女の予想では、その恭也を死なせるのはなのほだというのだから全く以って笑えない。

春斗も当然分かっているらしく、冗談だと言って力なく笑った。

「そういえば…」

「ん？」

そこから暫く会話もなく、欠伸をしながら歩いていた春斗へフランが話しかけた。

彼女から春斗に仕事の件以外で話しかけるのは珍しい。そう思った春斗はその言葉に耳を傾けて――

「別にそこまで重大なことではないのですけれど。昨日、なのはさん達が出動してる最中に他の局員の方から手紙をもらったのですが、どう断ればいいでしょう？」

傾けたことを次の一瞬で後悔し、思い切りその場でこけた。

「なんというリア充…ッ！！ 俺はラブレターなぞ生涯に一度たりとももらったことはないぞ…今俺は性別は違うがお前が憎い…！！」

そのラブレターをもらえない理由の1つに、自分の姉が一枚噛んでいるということを彼が知ることは永遠にないだろう。

「…つか、断ること前提なのな。いいじゃねえか、許可しちまえば？」

「……フェイトお姉様が黙っていませんわ…」

「……ああ…」

確かに若干シスコン化しつつあるフェイトさんならば、フランが付き合うことを了承した男は次の日に丸焦げになって転がっていそうだ…と春斗は思った。

「という訳でどうかして断りたいのですわ…勇気あるその方の為にも」

「そうだな…金色の閃光の妹に交際を頼む位だ。中々に根性のある奴と見たぜ…」

「……少し位私のことも心配してくれてもいいですけどに（ボソツ）」

「何か言ったか？俺は今その男をどう慰めるか考えるので忙しい」

「…ばーか、ですわ」

「何故!？」

いきなりの罵りに本当に分からないような顔をする春斗。フランはその言葉に合わせるようにそっぽを向いた。

その顔には、如何してあんなことを口走ったのかという恥ずかしさと女心を全く理解していない春斗への苛立たしきで赤く朱が差していた。

さて、若干彼ららしくない会話もあったが何とかその荷物を届ける家へ到着。

到着、したのだが…。

「……（啞然）」

「そ、そんな…ありえせんわ」

「「……桜？」」

このミッドにはないはずの、綺麗な桃色の桜が一本だけ満開の状態
で存在していた。

「おや、この木を知っているのかね？」

「「！」」

その木を潜る様にして、50代程度の女性が現れた。

「君達は？」

「あ、高町春斗です」

「フラン・T・ハラウンですわ。私達のお姉様達の代わりに荷物をお届けに参りました」

「おお、そうかいそうかい。なのはちゃんとフェイトちゃんの。ありがとうねえ」

持ってきた風呂敷を女性は丁重に受け取ると、右手に持って春斗とフランに「せっかくだから上がっていきなさい」と誘われたので2人は好意に甘えることにした。

そのまま靴を脱いで、女性に連れられて和室へと上がりこみ、3人で座る。

そこは桜が良く見える場所であった。

「あの桜はねえ、さっき凄腕のお医者さんに見てもらって、もう駄目だって言われてしまった桜なのよ」

女性は優しい目で桜を見ながらそう語る。

「寿命らしくてねえ：私のご先祖様が地球、ってところから持ってきたらしくって。綺麗だから、私の息子も娘も大好きで：あの桜は家宝みたいなものなんだ。今管理局で働いてる娘も、もし私に何かあればこの家と桜を継ぐって言うてくれたのよ：

でも、それももう無理かと思ったら…不思議なことが起こったの」

「不思議なこと？」

「ええ…私達が見てる前でね、急に桜が若返り始めたのよ」

「…は？」

そんなことはありえないはずだ。希少能力でも使わない限り、いきなり桜が蘇ったりするはずがない。

そんな疑問を見て取ってか、女性はクスクスと笑って、言った。

「でもね、本当なのよ？現に今、桜は咲いてる。まるで、別れたくない、って言ってるみたいで嬉しかったわ…」

その目は、嘘を言っているようには見えなかった。

春斗とフランは、拭えない疑問はあるものの今もまだ綺麗に咲いている桜へと目を向けた。

まるで何事もなかったかのように、若返った桜は今もその桃色の花を散らしている。

まるで、自分を蘇らせてくれた者へお礼を言っているかのようにだった。

兵器の日常? 『?5…拒絶者の休日』
ライター

「何もすることがないんじゃないが」

「…その言葉を言い到此処へきたのかね…」

スカリエツティのアジトにて、暇つぶしの標的とされたスカリエツティがデイルの処理に困っていた。

「せめて何か手伝わせてくれんかのう…」

「しかしね…正直君が作ると何故かこの世の理を無視したかのよう
な形状になるじゃないか。あのガジェット^{爆破ガジェット}Xも同じだろう？一応中
身を見てみたが、結局どうやって爆発したのか分からなかったのだ
が…」

「そういうのはな…根性でなんとかなるのじゃ!!」

「いや、それはない。それだけは科学者として譲れないね」

むう、と膨れるディール。反応がまんま子供な彼女を華麗にスルーし、スカリエッティは自分のすべき研究に没頭する。

その奇妙な状況のまま数分が経過する。

…遂に根負けしたのはディールの方であった。

「うう…分かったのじゃ。おとなしくしてるのじゃ…」

涙ぐみながら出口の方へ歩み寄り、研究室の外へ出て行くディール。

その様子を見ながら、スカリエッティは溜息をついて額の汗を拭いた。

「…危なかった。あと五分粘られていたら私が折れていたかもしれない…」

どうも、彼らの間には見えない戦いが繰り広げられていたらしい。

タイミングよく研究室へ入り、その言葉を聞いたウーノはそう結論付けた。

―数分後―

そんなスカリエッティとの戦い（？）から数分後、ミッドチルダ市内に降り立つゴスロリ服を着た女性の姿がそこにはあった。

「さて、例の如く脱走してきたわけじゃが…」

何が例の如くなのか全く分からないが、この瞬間、彼女に再び説教が降りかかることは確定したといえるだろう。

「相変わらずこの辺りはにぎわっとるのう」

そんな決まりきった運命から目を背けるかのごとく、ディールは様々な店を冷やかしてはそのまま出て行く。

そんなときだった。

「あれ？クインお姉ちゃん？」

「む？」

後ろから呼ばれたかと思うと、先日迷子になっていたばかりのラー
ス・アディアクスがソコにいた。
今度はリリースに手を繋がれている。迷子ではないようだった。

「あらー、クインさん。お久しぶり…と、言う訳でも無いでしょう
がー」

「そうじゃの。ほんの少し前にあったばかりじゃ」

握手して再会を喜ぶ3人。少し雑談をしてから、デールが彼女達
にここに來た用件を聞いた。

「それで、如何してまた此処に？」

「それがですねー、1つ依頼を受けて此処にきたのですが…不思議なことがありますー」

「不思議なこと？」

「ええ…聞いていただけますかー？」

前置きすると、リースは本当に不思議そうに話し始めた。

「先程の依頼の内容なのですが、桜が枯れてしまったから何かもう一度だけでも生き返らせる方法がないか、というものだったのです」

「ふむ…桜、というのは確か何処かの世界にあったものじゃの？」

「はいー。続けますねー？　で、私はそれを身に行ったのですが、聞けばもう何十年もそこに根を張っていたそうでー…完全に寿命だったんですー。心苦しいんですけど、私達でも老死してしまったものは何も出来ません…諦めるしか無いと思っていたのですがー」

「ふむふむ」

「急に、私達の見てる前で…その桜が若返り始めたんですよー」

「…なんじゃと？」

さすがに信じられなく、ディールはリースの顔を見る。
しかしその顔は嘘をついているようには見えない。本当に何故あんなことがおきたのだろう、という不思議な顔だった。

「信じられないでしょう？でも、本当なのですー…その依頼人は私が治したのかと言っていました、私は何も出来ませんでしたしー」

「ふむ、興味深いのう…いきなり若返った桜、か」

「あ、それなら見に行きますかー？ 場所ならお教えしますー」

「おお、では頼めるかの？」

「もちろんですー」

そう言って、その“不思議な家”の場所を教えるリース。ディールはそれを頭の中で地図として記憶し、理解した後に礼を言った。

「ふむ、分かったのじゃ。 礼を言うぞい」

「いえいえー。それではまたー♪」

「またねー、クインお姉ちゃん！」

アディアクス親子に手を振って、自分の記憶を頼りにしながらその家まで歩いていった。

「…これが…」

その家について最初に出た言葉は、それだった。

乱れ咲く桃色の花。散っていく花も凄く幻想的で、和風っぽい家の門に良く合っていた。

「おお、今日は客の多い日だねえ」

「！」

その門から出てきて思わず身構えるが、どうやらこの家の主のよう

であつた。

「私はこの家の主よ？　貴方もこの桜に惹かれたのかしら？」

「惹かれた、というか…リースからこの桜のことを聞いたので、見に来たのじゃが」

「あらあら、先生が？　そうなの。惜しかったわねえ、あと少し早ければ貴方と同じ位の2人を紹介できたのに」

「妾と同じくらい？」

「そうなのよ…2人ともいい子でねえ。まあ、折角きたんだから上がりがなさい。お菓子もあるわよ」

「お邪魔するのじゃ」

少し気になってその“2人”を聞きたかったのだが、後半のお菓子という言葉で全ての疑問が吹き飛んだ。

笑顔の女性とそれ以上の笑顔のディールは、スキップしながらお菓子を楽しみにその門を潜った。

その後、桜の良く見える場所へ案内してもらって、そこでお菓子を食べて和んで、何事もなかったかのように帰宅した直後に説教で1日潰れたことは言うまでもないだろう。

日常? l a s t』とある兵器の遺言状』

? s i d e

……俺ももう此処までのようだ……

見ればその横で、なのは姉やフェイトさんも既に三途の川を渡る直前のようだ。体は痙攣し、その顔は青い。

フェイトさんに至っては「ああ、母さん……アリシア姉さん……私も一緒に……」とかうわ言を呟いている。これは俺よりも拙いだろう。

駄目だ、力が抜けてきやがった……そのまま俺は食堂の床へ倒れ込む。

机の下から、青い顔で呻いているフランを見つけ、目が合った。俺はそっと微笑み、口パクで「お前のことは嫌いじゃなかったぜ……」

と言った…が、口もほとんど動かないので本当に通じたかは分からない。

フランはその口の動きを見て、あいつも微笑み、そして力なく果てた。くっ、フランも向こうへ逝っちまったか…

俺の頭に浮ぶのは、兵器であった頃に感情の乏しい兄貴と過ごした記憶と高町家に拾われた後に起きた様々なこと。ふっ、これが走馬灯って奴か。中々乙なもんじゃねえか…

だが、このまま眠るのも、悪くはなさそうだ…せめて、他の兄妹に会って話をしてから向こうに逝きたがったが…いつかは通る道だったはずだ。後悔はねえ。

…お？

「何だ、フラン、此処にいたのか…大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですわ…」

目を閉じると俺は、いつの間にか花畑にいた。そこに倒れていたフランと、起き上がりつつ会話する。

「兎に角、あの川の方こうへ行きましょう…？何か、渡らなければ、行け無い気がしますわ」

「確かなな…よし、渡ってみるか…。？　お、なのは姉じゃねえか、あんなところにいたのか…よっしゃ、今行くぜなのは姉ー…」

「皆、次のご飯よ……ってきゃああああ！！！！何これ！？」

俺——高町春斗は、食堂で料理を作ってこの場を死屍累々へと変えた張本人である——ヴォルケンリッター、シヤマルの悲鳴を何処か遠くで聞きながら、フランと共に向こう岸で待つ姉の元へと駆け出した。

魔法少女リリカルなのはs t s
PROJECT S. W
end

「『…まだ終わりませんよ？』」

『主、イキナリ何ヲ言ッテイルノダ？』

何処かの兵器とそれに付き添う骸骨がそんなことを言っただとか言わないとか。

1万PV達成記念！ 閑話「何処にでも無さそうな日常風景」（後書き）

“その後”

フラン「ええと、ここですわね？手紙にあった場所は…」

？「あ、あのっ！」

フラン「？あ、貴方が……って！？貴方、女ではないのです！？」

？「はいっ、フランお姉様！手紙を読んでいただきありがとうございます！？」

フラン「フランお姉様！？」

？「あのっ、此処に着てから貴方に一目ぼれしました！どうかお願いします…あたしと付き合ってください！！！」

フラン「ちょっと待って下さい！？女が女に告白するなんて聞いたことが…」

？「私は本気なんです！さあ、どうなんですか！？」

フラン「いやっ、あのそのっ…？」（ドスッ！）はう！（ドサア…）「！は、春斗ではないのですの！？」

春斗「何かおかしいと思ったらこういう事か…いるんだな此処にも…百合っつーのは…」

フラン「焦りましたわ…でも助かりました。ありがとうございます…」

春斗「まあ良いって事よ。それにしてもお前は本当に男でも女でもひきつけるよな…フェイトさんがいるから近寄れねえ、っていう奴も結構いるんだぜ？」

フラン「そ、それは初耳でしたわ…」

春斗「逆に、お前といつも一緒にいる俺は嫉妬の対象になっているがな」

フラン「…」

春斗「そんな申し訳無さそうな顔するんじゃないよ。やりづれえだろうが。ま、お前は結構面白いしたまに信じられない位に（弄った時の反応が）可愛いからな」

フラン「!?!? か、かわっ…!?!?」

春斗「ん? 何顔赤くしてんだ…って、フェイトさんいつの間に俺の背後に!?!? ちょっ、二股って誤解ですよ! なのは姉は姉ですから! 如何してなのは姉が俺の交際相手に上がるのか物凄い疑問ですけど!?!? いやだから俺はどちらかというとフランを助けて…って、ザンバーフォームは止m…ぎゃあああああああ!?!?」

フラン「…本当に、ばーか…ですわ…／／／」

“その後” END

え？フラグ？ H A H H A H H A、何のことだか分かりません↑
勘違いからのフラグって、結構面白いじゃないですか。えっ？その
せいで春斗が死んだじゃないかって？残念ですが奴は死んでません。
ギャグ補正が働いたようです。

さて、改めて1万PVありがとうございます！！これも皆様のお陰
です。

こんな馬鹿な駄作者と作品ですが、これからも見ていってもらえる
と嬉しいです。そしてどうか私に感想を↑ ∴せめて、1つでも、
来て欲しいなと思ってます。

という訳で、次回のお話を改めてお待ち頂けるよう、よろしくお願
いします。

誤字脱字報告感想お待ちしております！！

”？4 シーナ”（前書き）

タイトルがつ、思いつかなかったんだ！！

シーナは最後の方にしか出てきません。タイトル詐欺ゴメンなさい
orz

…次回までに地球へのミッション行けるかなあ…？

では、どうぞm——m

追記（7月10日）…NOOOOO！！申し訳ありません、サブタイトルミスってました！！

誤↓？5 シーナ 正↓？4 シーナ

改めて申し訳ないです。混乱させてしまったことを深くお詫びします
m——m

それでは改めて、天破の駄文を御覧下さい^^；

”？4 シーナ”

初出動から数日後の事。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロはそれぞれの個性^{スキル}を強化すべく、チーム戦からそれぞれ訓練に適した隊長陣が就いた個別訓練を始めていた。

スバルはヴィーダと。

ティアナはなのはと。

エリオとキャロはフェイトと。

それぞれハンマーで叩かれたり砲撃で吹っ飛ばされたり体力切れで倒れたりなど第三者視点から見ればほとんど苛めにしか見えないような訓練内容だが、取り合えず彼女達は生きていた。

そしてそんな新米魔道士を、同情の目線で見える影が三つ。

“無関係”を貫くヴァイス、春斗、フランであった。

「…うお、今また吹き飛ばされたぞ。スバルだっけか、アイツ…生きてるよな?」

「まあ、一応非殺傷設定にしてあるはずだから大丈夫だろ…多分」

「ヴァイスさん、そこは断言してほしかったですわ…」

頬が引きつるフラン。実は春斗とフランは、非殺傷設定と言うものがよく分かっていない。

疑問に思ったならば考えてみるとしよう。まずはやての使う氷結の

吐息と言う魔法だが、アレは少し昔にあった空港の火災事故を炎ごと凍結させてかたをつけた魔法だ。

ふと考えてみる…あれは非殺傷設定に出来るのか、と。

氷に閉ざされれば当然息が出来なくなる。その前に凍死するかもしれないが、もし凍死するまでも無く凍ったのなら息が出来なくなつて苦しみながら死んでしまう。

石化の槍ミストルティンでもそうだ。石化するあの魔法は何処が非殺傷設定なのか。というかあの魔法に非殺傷設定が存在するのだろうか。

それをヴァイスに話したら、真顔で「ハルト、フラン。　そういうのはな…気にしたら負けなんだよ」と言われた。

その言葉に何処か無還者以上のプレッシャーを感じたので、彼らがそれ以上追求することは無かったが。

「…というかこれが午前の練習って何処かおかしいよな…」

確かに基礎は大事だが、何も早朝に起きて此処まで濃密な訓練をする必要は無い気がする…というのは春斗の弁である。

その件にはフランも同意した。

「このままではいつか彼女達は倒れますわよ？　まあ、なのはさんがあの子達のデータをいつも纏めているから暫くは大丈夫ですけれど…」

しかし、とフランは前置きして、目を細める。

「…意外と分かりにくいですが、この訓練は自分の成長を実感しにくいですわ」

その言葉にヴァイスが反応した。

「それはどうということなんだ？　此処まで濃密な訓練をすりゃあ、直ぐに成長していくと思うんだが…」

「ではヴァイスさん、お聞きますが…昨日、貴方の50m走のタイムが7秒3台だったとしますわ。で、一週間今あの子達がやって

いる以上の訓練をしてようやく7秒2台になった場合…どう思いますか？」

「まあ、俺としちゃ少しでもタイムが伸びたのは嬉しいが…あれ以上の訓練をするならもう少し伸びても、と…って、そっか」

「まあ、そういうことだな」

春斗がフランの言葉を引き継いだ。

「確かにちょっとずつは伸びるだろうな、あれ程の訓練をしてれば…だが、人間てのは意外に強欲だからな。自分の思ったよりも成長して無いと、必ず焦るようになる」

「特に今すぐ力が欲しいと思っている人間は、その焦りが更に焦りを呼んでいく…そしてその末路にあるのは、焦りによる“事故”、または敗北ですわ」

「…、お前ら本当になのはさんやフェイトさんと同い年の非戦闘員か？ あの人たちに失礼だが、今俺はお前らが歴戦の戦いを見て理解してきたような感じがしたよ」

実はそれは当たらずも遠からずなのだが、当然彼らがそれを言うはずが無かった。

しかし少々拙いと春斗が感じたその時、丁度なのは笛が鳴って午前の訓練が終了した。

「お、訓練が終わったみたいだな…じゃあなハルト、フラン。食堂で会おうぜ」

それ以上ヴァイスも追求することは無く、そのまま食堂へと去っていった。

安堵の息をつくフランと春斗。そしてこれからは、人の前で考察のようなものを説明するのは控えようと心に決めた。

そして昼飯を食べに行こうとするのは達と合流し、そのまま食堂へ向かう途中のこと。

例の“烈火の将殺害未遂事件”に加え“リニアレール粉碎事件”のせいで色々とボロボロなはやてとリインが外回りへ出かけるところに遭遇した。

「あつ、訓練が終わったところかいな？ 皆、お疲れさん」

「「「はいっ！」「」」

「あ、はやてちゃん…大丈夫？ フラフラだけど…」

「何とかシグナムの件については落ち着いてきたんやけどな…というか、今地上本部はそれどころじゃないらしいで」

「それどころじゃない？」

なのはが反応し、はやてにそれはどういうことかという目を向ける。

「それがな？ 地上本部を構成しとった重要な役職についてる人が、次々と殺されとるんや…」

その言葉に顔色を変えるなのは達。

「つい最近も、ガルザスっちゅー少将が首から上が無い状態で放置されたのが見つかったばかりなんや。その他にも人為的な心臓発作を起こされて死んだと見られる人や、酷いものやと体中切り刻まれて内臓が晒されてる状態で見つかった死体もあるんや」

「…うふふ」

想像してしまったのか、顔を青くして口を押さえるキャロを慌ててエリオが支える。

「酷い…でも確かに、それだと他の事に構ってる暇なんて無いね」

「それでな？ …うちとカリムとそして今日話すつもののゲンヤさんは…この地上本部の連続殺人事件の犯人と例の男は…同一人物だと見てるんや」

「「「!!!」」」

驚くと同時に、なのは達に寒気が走る。

やはり相手は、自分達を殺そうとしている犯罪者であり——そして説得して分かり合うことが不可能だということを——改めて、思い知った。

そんななのは達の心情を察してか、はやてが再びかすれるような声

で言った。

「じゃ、その話も含めて行ってくるわ…」

「行ってるっしょい、はやてちゃん、リイン。ナカジマ三佐とギンガによろしくって伝えてね」

「分かったわ。スバルは何か伝言あるか？」

「いえ、大丈夫です！」

「ほんなら、行ってくるわ」

「行ってきますです」

そんな気の抜けた返事と共に――恐らく疲れが溜まっているのだろうが――はやてはナカジマ三佐こと、スバルの父でありはやての尊敬する上司ゲンヤ・ナカジマの元へと向かった。

そして。

今のはやての言葉を反芻し…そして結論の出た2人の兵器が、数秒間だけ無表情だったことに、気づく者はいなかった。

――食堂 兵器side

「フラン、今の話をどう思う？」

「別に私に相談せずとも貴方なら分かるでしょう…はやてさん達の予想は100%当たってますわ」

食堂の人にいつも通り大盛りに載せてもらうスバルたちを見ながら、
彼らは小声で会話する。

食堂はこの時間になるといつも賑わっている。その中での会話なら、
誰かが近寄ってこない限りは聞こえはしない。

「恐らくその殺された人間は、お兄様に任務を依頼した方なのでし
よう。ウェボンマインド 確か“兵器の心”が自動的に実行できる指令の中に、“依
頼者”の抹殺も含まれていたはずですわ」

「その兵器の心の中に含まれている指令ウェボンマインド プログラムを実行するにはそれを操作
できるキーが必要なはずだ。そしてそれを持っているのが」

「…兵器の管理者。完成した私達を引き取る予定だった人間ですわ
ね」

その言葉を最後に、何も言わず黙々と食事続ける春斗とフラン。

彼らは、自分達を引き取る予定だった者の名前も姿も知らない。

知る必要もないし、というかそれ以前に引き取られている頃には自分達も兄と同じく洗脳されていたに違いない。とすれば、研究者達がわざわざ教える道理は無いと判断するのも頷ける。

という訳で知っているのは消去法で無還者1人だけであるが、完全に洗脳されている彼が自らの管理者を話す訳が無い。

万が一別ルートで判明したとしても、何の準備もせず乗り込んでそのまま無還者を敵にまわすこととなる。どう考えてもそれは得策ではない…とすると、何とかして無還者を足止めすると同時に管理者の所へ行ってキーを奪うしかない…のであるが。

「…無理だな（ですわね）」

この案はほぼ同時に却下された。第一、研究所にいた時代何度も殺し合いで挑んだが成功体の兄妹全員で戦って一度も勝てなかった相手なのだ。その頃は兄妹全員で足止めしたとしても4分持つかどうかという瀬戸際であった。

現在はどうか分からないが、向こうは感情を封印された上に子供であった頃よりも強化されている。現在の春斗やフランですら1人で

管理局を完全に崩壊させる自信があるのだから、恐らくその上を行く強さを手に入れているに違いないだろう。

そんな男を、同じ兵器とはいえ足止めしろとは無理な相談である。

「まあ、まだ時間はある。もう少し考えようぜ」

「…ですわね。万が一と言うこともありますし…」

ちらり、とフランが目を向けた先にいるのは…

何かを話しながら大量のご飯を食べている、新人魔道士達であった。

「まだアイツらは不安定すぎる。全員に才能はあるが…全員に同じ位厳しい過去があるだろ？特にティアナ・ランスターはそれがかなり如実に表れているからな」

結構な量のスパゲッティを一口で口に入れ、口を動かしながら春斗が言う。

「確か…兄の死、でしたか。そしてそれを管理局の上司が侮辱した、と…」

当時の事件のことを少しは知っているようで、フランが額にしわを寄せながらその言葉に答えた。

「人事だと思えねえんだよ…俺達の兄貴も死んだようなものだ。俺達のこともう分からないだろうからな」

その言葉に春斗がこう返すと、フランが溜息をつけながら更に言葉を返した。

「生きて動いているだけでも幸いですわ。まだかなり少ないですが望みはありますもの…」

——その代わり、史上最凶の敵になりましたけれど。

皮肉っぽくそう付け足したフランだが、それは冗談でもなんでもなく、今彼らが最も逃避したい現実でもあった。

「…久しぶりだな、八神。そろそろ来る頃だと思ってたぜ…」

場所は地上本部、陸士108部隊宿舍。

108部隊の隊長でありスバルの父、ゲンヤ・ナカジマと何故か無表情な女性、八神はやてが向かい合っていた。

そのゲンヤはかなり疲れたような顔であり、そしてはやてが何故此処に来たのかも知っているような口調であった。

「…ナカジマ三佐。出来ることなら貴方を疑いたくたくはありませんでした。しかし…今の言葉から見て、『何か』を…知ってるんですね？」

「…、」

「∴此方は私の家族が被害に合ってるんです。ナカジマ三佐∴お願いします。貴方の知っていることだけでいい」

はやてには珍しい、硬い硬い口調で。

彼女は深呼吸してから、言った。

「――『プロジェクトS・W』について、教えてください」

その言葉と同時に、ゲンヤが深い、深い、溜息をつく。

「何処まで知っている」

「カリムから見せてもらいました。プロジェクトF、戦闘機人計画、違法魔獣製造計画：管理局が『追っていたはず』のあらゆる違法計画の礎となった計画で、被験者の子供は5〜6歳前後。死者は実験に掛けられた6万超のうち、約5万9995名：

実験に成功したのはたったの5人。用途は管理局の上層部による管理外世界の征服：此処までは」

スラスラと、しかし耐え難い事実が彼女の口から漏れる。

彼女にとって、否：管理局にとって許されざる悪であった“違法研究”。彼女本人からして見ても勝手に命を作って捨てていくのは許されないことであるし、許すつもりも毛頭無かった。

しかし、蓋を開けてみればどうだろうか。彼女が許さないと思っていたものはほとんどが管理局がバックについて、資金提供すらしていることもあるという。

しかも真実を知った者が消されるオマケ付きだ。現実逃避だっけ
たくなる。

カリムから聞いたときは、思わず彼女に怒鳴り散らしてしまった。
…が、しかしそれに構わずカリムは話を進め…はやては絶句した。

バッグにいる権力の大きさに、ほぼ管理局公認でそんな非道な実験
が行われていると言う事実。

そのはやての言葉を黙って聞いていたゲンヤは、はやてを真正面か
ら見て、低い声で言った。

「浅いな。やはり聖王協会にはそこまで情報は行かないか…その程
度、まだこのプロジェクトの入り口にもならん」

衝撃であった。カリムから見せられた情報だけで彼女には十分すぎ
る程の苦痛を与えたと言うのに、あの情報はゲンヤの知っている情
報に比べればなんて事はなかったのだ。

「確かに俺程度の地位となれば情報は入ってくるが…正気か？ 分かるだろう、知れば消される可能性すらあるんだぞ」

「…貴方が誰にも協力を仰げず、そうしてやつれるほどのバッグホーンがこの計画にはある、と？」

「正確には俺もこの計画の裏にいる奴は知らん…だが、この件をマスコミに流そうとした俺の同期が次の日にそいつの家ごと焼却された状態で見つかった。一家心中と片付けられたらしいがな、そんな訳が無い。恐らく捜査した局員も息がかかってたんだろ。そして手を下したのは十中八九このプロジェクトの成功体ひがしやの一人だ。…皮肉なもんだろ？ 俺の同期はこの計画を告発して生き残りの子供を保護しようと思ったたのによ、その同期を殺したのは保護しようとしていた子供なんだぜ…」

「…ゲンヤさん、その件と同じく地上本部の重鎮が次々と殺害されている事件ですが…あれはもしかしたら…」

「お前の予想通りじゃねえか？ あれをやったのは全部プロジェクトの成功体だ。ただ、…これは俺の推測でしか無いが…恐らく殺された地上本部の奴らは、何かしらプロジェクトの成功体に依頼した奴らだ」

「!!!!」

更にその言葉ははやての心を抉った。

はやては、あの男を兵器ずっと憎んできた。

シグナムを傷つけ、大事な親友を、家族を傷つけ更には躊躇い無くリニアレールごと新人魔道士達を落として殺そうとすらした。

しかし、それは全て“命令”だった。彼は何も疑問を持たず、自らを道具として与えられた任務をこなしているだけだったのだ。

そう、それはつまり——『シグナムを殺せ』と命令したのも管理局の人間だと言うことになるし、レリックを回収するためだけにリニアレールを破壊してティアナ達を殺そうとしたのも管理局の何者かによる指示なのだ。

「信じられへん…嘘やろ？なあ、嘘やと…」

「甘ったれるんじゃない、狸。これがお前の望んだ答えだ」

あまりの出来事に錯乱状態に陥ったはやてを、ゲンヤの厳しい声が無理矢理現実へ引き戻す。

その目は真剣そのもので、はやてが口を挟む余地すらなかった。

「いいか、よく聞け…この瞬間、管理局はお前の味方では無くなった」

そしてその一言一言が、彼女の心へ突き刺さっていく。

「上層部の8割以上はこのプロジェクトを知らながら俺のように見なかったこととして処理している。更にそのうちの2割はこのプロ

ジェクトで作りに出された兵器に任務を依頼している。この分だと、近いうちに管理局は管理局によって滅ぼされる日が来るだろう…」

一息ついて、更にゲンヤは言葉を紡ぐ。

「しかし、だ。1つだけだが希望はある…お前も自分で言っていただろう。計画の成功体は全部で何人だ？」

「えっと…5人です」

「そうだ。しかし、俺が知る限り管理局の駒として使われている兵器いしやは一人しかいない…つまり、だ。この広大な世界…管理世界、管理外世界から他の成功体を見つけ出すことが出来、なおかつ管理局の味方に付かせれば対抗出来るかも知れねえ」

「…私がもし彼らの…この計画の『被害者』の立場の子供なら、絶対に管理局には協力しないと断言できます」

「だからほとんど無いに等しい望みだっつーことだ。…正直、今

ほど俺は何も知らない、ということを羨んだ事はねえよ。最近は何々殺られるか殺られないかの瀬戸際だからな：俺の同期や上司も部下もさっき話した奴も含めて何人か消されている。お前も気をつけろ：先程も言ったが、この計画を知ったからには、管理局は味方では無く敵になる。近づく奴は全て注意しておけ」

「…っ、了解しました」

暫く、双方が無表情のまま何分かの時が流れる。

しかしその空気に耐え切れなくなったか、はたまたもう考えるのを止めたか——恐らく後者だろう、ゲンヤが笑いながら豪快に言った。

「…さて、この話はもう終わりだ！ もう一つ用件があるんだろ、八神」

「あ、えっと」

その行動について更に問おうと一瞬だけ思ったはやてであったが、ゲンヤの心境を察し踏みとどまった。

“この話はもう終わり”——つまり、もうゲンヤは何も知らない、または何も言う気は無いということなのだろう。

そう考えたはやては、ゲンヤに会いに来た表の理由を言った。

内容はレリックと思われるロストログア密輸ルート探索依頼。つまりは人手が足りないので誰か貸して下さいということであった。

「ふむ、ふむ…まあいいだろう。辻褄は通っているからな…で、誰を連れて行くかだが、捜査主任はカルタスでその副官にギンガを付けるか。後誰か…」

「いえ、2人だけで十分ですよ？」

「相手は管理局（くわんりょく）そのものだ。何人いたとしても困るものじゃねえ：そうだ、今確かアイツが来てたな」

「？ 誰です？」

「ん？　そういやお前は面識が無かったな：　今レジアス中将のお気に入りと言うか弟子と言うか、まあそんな奴が今来てるんだ。本人にも中将にも許可は取ってある。好きなのところに飛ばしていいつー事だから、お前らを手伝わせるか」

「いやいや！　そんな、レジアス中将のお気に入りなんか私の部隊に入れてしまったら、また中将から：」

レジアス・ゲイズ中将のみならず、地上本部には魔法を敵視するような動きが多い。

その筆頭とも呼べるレジアスのお気に入りが機動六課に入ったりでもしたら：レジアスの機嫌を損ねるのはほとんど間違いない、そう思ったからこそそのはやての言葉であった。

しかしゲンヤの口から出たのは驚くべき言葉であった。

「ああ、心配するな。そいつが言うことなら、大抵レジアス中將は聞くからな」

「何者なんですか!？ あのレジアス中將に言うことを聞かせるって!」

レジアス・ゲイズという人物は、地上でも管理局でも頭の固い人物であることで有名だ。自分の決めたことは一度たりとも曲げたことが無いというほどの強情さで、だからこそあの地位にいると言っても過言ではない。

一部で親バカ且つノリのいい男という噂がある…が当然の如く相手にされていないのは言うまでもない。

「まあ、それ程お気に入りだってこった…噂では中將の娘のオーリスを嫁に出そうとしているらしい」

「いやいやいや、それじゃその人次期中將候補見たいなノリとちやいますか!？ もっと無理ですって! 絶対に面倒なことになりますって!」

「じゃ、手伝う手伝わないはともかくまずは会って見ろ。話はそれからだ」

そう言った時、丁度カルタス陸尉からの通信が入る。タイミングが良い、という訳でゲンヤから捜査協力の話をした。

「おう、丁度いいな。八神二佐から外部協力調査の依頼だ。ギンガとを連れて会議室で打ち合わせをしてくれ：あ、それと“シーナ”も同行させるから、此処へ来てくれるように言ってくれや」

『し、シーナもですか？ 了解しました：失礼ですが、それ程の危険な任務なのでしょうか？』

「いや、心配するな。ただのロストログアの密輸ルート調査だ：大事には大事を取る、つつうこった。 じゃ、頼むぜ」

『はっ、了解しました。失礼します』

「おう、頼むぜ。 ……どうした八神、何か恐ろしいものを見たような顔をして」

回線を閉じたゲンヤが、はやての顔を見て怪訝な顔をしながら尋ねる。

「いえ…カルタス陸尉に心配させる程その人って戦力になるんですか？」

「まあ、な…質量兵器を持たせればA Aランク級魔道士三十人に囲まれても無傷で生き残れるような奴だ。正直もしアイツが管理局員ではなく犯罪者になっていたら、俺は捕まえられる気ません」

「それ、道を間違えたんじゃないですか？ 良い意味で…」

確かにそんな人間が犯罪者にでもなれば、悪い意味での大物になるに違いなかった。というか、自分の尊敬する上司にまでそこまで言

わせるシーナとはどのような人間なのか：はやてはちょっと興味が出てきた。

丁度はやてがそう思ったときだった。

呼び鈴のブザーが鳴り、一人の男がゲンヤの部屋に入ってくる。

薄い赤色の髪をした男だった。美青年——というよりは正直美少女と言った方が良いだろう。何故男だと分かったかと問われれば、そこに胸が無かったからとしかはやては答えられない。

いや、かなりの貧乳という可能性は捨てきれないが。

「失礼します。シーナ・ハラオウンです」

「おう、来たな。こいつが話してた八神二佐だ」

「あ、八神はやてです。宜しく願いしますな」

「あ、此方こそ。シーナ・ハラオウンです」

その自己紹介を受けたとき、はやての頭の中に疑問が浮んだ。

“ハラオウン”という単語は、自分の親友であるフェイトその義妹のフラン、義兄のクロノ、そして彼女達の母リンディの苗字である。ということは目の前の男はクロノやリンディの家系になるが…フェイトからシーナという義弟（もしくは義兄）がいるという話は聞いたことがない。

その疑問を見て取ったのか、ゲンヤが笑いながら言った。

「ああ、コイツは何か訳ありしくてな…お前の親友と同じくハラ

オウン家の養子らしい」

「あ、そうなんですか…何か申し訳ありません」

「いえいえ、リンディ義母さんやクロノ兄さんには感謝してますよ。身寄りのない僕を引き取っていただいて…実は僕、フェイト姉さんやフラン姉さんに会ったことがないんですよ」

「ええ!？」

それもそれでおかしい話だ。しかもフランやフェイトから話を聞かないと言う事は、よくよく考えてみれば彼女達は自分たちの義弟の存在すら知らないと言うことである。

ちょっとだけはやては、ハラオウン家の不思議さを垣間見た気がした。…いや、八神家も高町家も色々と思議な点が多いのだが。

「なので、姉さん達が出向してるという六課を手伝えると聞いて…もしかしたら会えるかと思ったんです。是非とも手伝わせて下さ

い、八神二佐」

「うん、宜しく頼みます…ところで、シーナ…君？の階級って何なん？」

「えっと…まず君付けするところで何故疑問系なのかを少し聞いたんですが…その質問に答えると、僕は一応一等空尉という扱いになってるらしいです」

その歯切れの悪い回答（前半の疑問は華麗に無視した）に首をかしげると、ゲンヤが再び笑いながら、

「シーナはな、八神…その功績から、周りの人間から次期中将として持ち上げられてんだ。レジアス中将を筆頭に少将に持ち上げようとする動きすらあるんだぜ？」

と言った。その言葉を聞いたシーナが頭痛をこらえるかのように頭を押さえつつ「レジアスさん…」と呟いたのを見て、なんだかはやては同情してしまった。というか一等空尉から少将になるなど前代未聞の大出世である。それを推すレジアスのイメージが、はやての中で徐々に変わりつつあった。

「こ、コホン…という訳で改めてお願いしますが…八神二佐、どうかその任務手伝わせて下さい」

「うん、此方からも改めて…そうや、最後に1つだけ確認良いか？」

「？　　なんでしょう」

はやてはじつと真剣な目でシーナを見て、そして数十秒間くらいその顔をじっくりと眺めた後、溜めに溜めてこう言った。

「————女やろ？」

「男ですっ！……！！！！！！」

その疑問に対し、シーナの全身全霊を掛けた叫びが陸士宿舍全体を揺るがしたのは——言うまでも無い。

そして更に追い討ちを掛けるかの如くゲンヤの爆笑も混じったことを此処に追記する。

”？4 シーナ”（後書き）

天破「最後に何故かギャグが入る不思議」

シーナ「ああ：遂に八神二佐と会ってしまった」

天破「え？いやなの？」

シーナ「だて、色んな二次創作であの人よく人を着せ替えてたりするじゃん：僕も着せ替えられるのかなあ：子供の頃のリンディ義母さんみたいにな」

天破「えつと：なんというか：ドンマイ」

次回、ガジェット内部に仕込まれていた宝石の謎に迫る！！
果たしてガジェット製作者の正体とは！？ 乞うご期待！！！！

？「：ふむ、既に答えは出ているようなものだと思うのだがね」

天破「まだ貴方は出てこなくてok」

次回をお楽しみにお願いしますm——m

追記…感想を誰にでも書けるようにして見ました^^と言うか制限がかかっていることにさっき気づきましたw申し訳ないです^^；

“正体”（前書き）

今回のタイトルには色々な意味が含まれています。

この作品中のレジアスの実体や、ガジェットを操る黒幕などなど。

…微妙？ゴメンなさい。天破が一番分かってます↑

それでも良ければ、どうぞ天破が誇る超駄文を御覧下さいませ。

では、どうぞ！

7/21 13:00頃、文が一文丸々抜けていることに気づき修正しました。

申し訳ないっすm——m

“正体”

——はやてがシーナと初めて出会った頃…

首都中央地上本部 side

「…以上がレリックのデータです」

此方では、シャーリーとフェイトがレリックについての会話をしていた。

とはいえ、現在レリックについて分かっていることは少ない。正確には何かのエネルギー結晶、ということ位しか判明していないのだが。

「うーん…封印はしてあるんだよね？」

「はい、それはもう嚴重に…けど、本当にレリックの存在意義って何なんでしょうね？ エネルギー結晶体にしては良く判らない機構がたくさんあるし、動力機関にしてもなんか変だし…それに、封印を自動解除しようとするし」

「そうだね…って、ちょっと待って。封印を自動解除する？」

何気なくシャーリーが洩らした一言に、フェイトが驚きで目を開きながらその言葉を聞き返す。

その言葉を受けてシャーリーが「あちゃ…」と言いながら申し訳無さそうに、

「す、すいません…一応まだ誰かに話すことを許可されてなくて…聞かなかったことにしていただけませんか？」

と言うので更にフェイトは驚いた。なぜならレリックの処理などを

担当する管轄は他でもない機動六課じぶんたちなのである。なのに封印の自動解除などということは知らされた覚えがない。

「本局の命令で…こんなシステムがあることが知れ渡ればパニックになる可能性があるから今は伏せておけ、と」

そしてその言葉に納得すると同時に複雑な気分になった。確かにそれが局員から管理世界に住む人間に知れ渡れば色々とパニックになるだろう。しかし現場に直接行ってレリックを封印・確保する自分達には知らされておらず、サポート役のシャーリーが知っていたというのは少し複雑な気分である。

それを察したのか、シャーリーが「私もたまたま知っただけなんですけどね」と苦笑しつつも言った。

「まあ、レリックについてはこの位です…次はガジェットガジェットのデータですが…」

「あ、うん。あんまり他の型と大差ないよね…あの球体爆発型ガジェット以外は」

気を取り直してレリックからガジェットの話へ。その流れは自然にフェイトらも出会ったあの爆発ガジェットの話になる。

「結局、部品が1つ残らず消滅しちゃったんだよね…」

「外装すら燃え尽きちゃいましたからね。結局あれはどんな素材で出来ていたのでしょうか…」

なのはやフェイト、フォワード陣が遭遇したガジェットは、レリックが奪われたことが知れ渡るや球体ガジェットと共に自爆した為、回収が不可能な域にあった。

どうやら、司令塔的存在である赤い球体ガジェットが存在しなくても自力で自爆出来るらしい。いや、あるいは何処から遠隔操作で爆破させただけかもしれないが。

しかしそのどちらにしても、殺傷能力はあったとはいえそんなに大きくなかった爆発で外装すら破片も残らずに消えると言うのはおかしい話である。現場検証に駆けつけた局員も、爆発するところを見たフェイトらも頭を捻っていたが結局説明されずじまいであった。

「うーん。まあ、あのガジェットの件は追々調べていくとして…他には何かある？」

「いえ、特には…」

「そう…ん？ ごめんシャーリ、？型の写真をアップにしてくれない？ 気になるものが映ってるの」

「あ、はいっ」

カタカタ、とコンピューターを操作してフェイトに言われたとおり？型の写真をアップにする。フェイトはそのガジェットの中心部分に存在する——宝石のようなものに注目していた。

「…なんでしようこれ。宝石？ レリックと同じエネルギー結晶ですかね…」

「…ジュエルシード」

「え？」

「随分昔になのはと私が集めたロストログア…今は局に封印されて
厳重に保管されてる…」

「へえ…って、如何してそんなものがガジェットに!？」

「シャーリー、このジェイルシード、何か書いてある…ここ拡大し
てくれる？」

「は、はいっ」

フェイトの指示で『ジュエルシード』の部分を拡大するシャーリー。確かに良く見ると、名前のようなものを書いてある。

「これは名前ですね…えと、ジェイ…」

「ジェイル・スカイエツティ」

「? フェイトさん、知ってるんですか？」

「ドクター・ジェイル・スカリエツティ超広域指名手配：第一級捜索指定の次元犯罪者。ちよつと訳ありで、この男は何年か前から追ってるんだ」

「どうしてそんな犯罪者がこんな分かりやすく自分の手がかりを？」

「あくまで推測だけど…本人なら挑発、他人ならミスリード…どちらにしろ、この事件になのはと私が関わってることを知ってるんだと思う」

そこまで言って、ふと頭をよぎる例の骸とそれを使役する謎の男。

まさか、あの男の依頼者というのは――

「…それはない、か」

一瞬、男の言う依頼者がジェイル・スカリエッティかと思ったがその直ぐ後に男が言った言葉が頭をよぎりそれは無いかと思い返す。

もし依頼者というのがジェイル・スカリエッティだとして、あの科学者に何の利点がある？

それに、あの男1人いればガジェットを出す必要性すらないと思う。とすれば、あの男とスカリエッティは別勢力と考えるのが妥当なところだろう。

更に言えば、“あの男は、管理局と連絡に取れる立場にある”という説——まだ彼女はなのはにやてにも話していないし確証すらない。

というかそれ以前に、シグナムを殺そうとした上にリニアルールまで跡形も無く破壊して新人魔道士達を殺そうとしたあの男が管理局に通じているなど有り得ない、と心の何処かで思っているからか詳しく調べてすらいなかった。

しかし彼女を責める訳にも行かないだろう。フェイトは過去のジュエルシード事件が終わってからずっと管理局で勤めてきた。彼女の管理局への信頼は絶大なものだ。そしてそれは、ほぼ同時期に管理局へ協力を始めたなのも、ある事件を境に親友となり、一緒に働くようになったはやてにも言えることである。

彼女も、どんなに強くてもどんなに早くても、やはり1人の人間である。“今”というこの恵まれた環境が、自分の不用意な一言、又は行動で崩れ去ってしまうかもしれない——そう思うと、とても彼女は真実を調べられなかったのだ。

「…フェイトさん？」

「…っ、」

「フェイトさん！」

「!？ あ、ゴメンシャーリー…少し呆然としてた…」

「大丈夫ですか？」

心配そうに顔を覗き込んでくるシャーリーに、笑顔を作りながら軽く頷く。

「大丈夫大丈夫。とにかく、このデータを纏めて帰ろう。隊長陣を集めて緊急会議を開きたいんだ」

「あ、はい。分かりました」

目の前でキーボードを撃ち、データを纏めるシャーリーを見ながら
フエイト
彼女は自らに問う。

自分の居場所と真実。自分はそのどちらを取るのかを――。

地上本部 はやてside

「：ん、了解や。直ぐに対策会議を始めよか。アツと驚く助っ人も
来ることやしな」

『助っ人？ 誰なの？』

「ふふふ、まあ会ってからの楽しみってやつや。じゃ、私は今から戻るからもし先に戻ったら、会議の準備お願いできるか？」

『うん、分かった』

色々と紆余曲折あったものの、はやて達は打ち合わせも終わり、食堂でお昼を食べていた。

「何か分かったのですか？」

「うん、ちょっと事件に関してな…」

通信の内容は、ガジェットの中に仕込まれていたジュエルシードの件。そのジュエルシードに“ジェイル・スカリエッティ”と書かれていた事だ。

それを聞いたはやては正直驚いた。そんな大物がいるとは予想だにしていなかったのだ。

とはいえ、判明したからには会議して対策を練って、新人魔道士達にも注意を呼びかけて…昼食はしっかりと食べながら、彼女の頭は部隊長のそれへと切り替わる。

そして頼んだ分の昼食を食べ終わり、「申し訳ありませんがこれで…」と、ゲンヤに頭を下げつつ、せめて昼食の代金でも払っておこうと領収書を取ったところで、その領収書をゲンヤが奪い取った。

「え、そんな…」

「大丈夫だ。今回の昼飯代は——」

「あ、僕が払います」

「——っつーこった」

「はあ、そうですか…っついていやいやいや、おかしくありません!？」

レジアス中将のお気に入りなんですよね！？ 次期中将なんですよね！？」

「大丈夫です。レジアスさんにツケておくので、はやてさんには一切お金の請求は行きません」

「しかも中将に払わせようとしとる！？ ええんか！？ それでええんかシーナ君ッ！！！」

思わず叫んでしまった彼女を誰も咎めはしなかった。寧ろ普通の管理局員ならこれが正常な反応なのかもしれない。

「あはは…一応本人公認なので、スルーしちゃってください」

「あ、勝手に払わせようとしとるんや無くて公認なんやな…尚更レジアス中将のキャラが分からなくなってきたわ…」

はやてのレジアス像は既に全壊状態である。もう何を聞いても自分

の目で確かめるまでは信じない、と彼女は心に決めたとか何とか。

「と、とにかくまたレジアス中将のこととかは詳しく聞かせてくれな？　…じゃ、申し訳ありませんがお先に失礼します」

「おう」

「「はいっ」」

そんな会話の後、はやては陸士宿舎を離れ六課へと戻っていった。

フェイト&シャリーside

本当に普通の人間か疑うような速度でデータを纏めたシャリーと

フェイトは、手際よく車に乗り込み機動六課へ戻っていた。

「フェイトさん」

「ん？」

急ぎながらも律儀に車の速度を守りながら走っている最中、ふとシヤリーがフェイトへと話しかけた。

「ドクター・スカリエッティでしたっけ？その次元犯罪者」

「そうだよ」

「その人がレリックを集める理由って、例えばどんな…」

「あの男は、ドクターの名の通り生命捜査とか生体改造とかに関して異常な情熱と技術を持つてる。そんな男が、ガジェットみたいな兵器まで用意して捜し求めるからには…きつと、また人の人生を狂わせるようなことをするつもりなんだ」

「…、」

普段、特にエリオやキャロの前では絶対しないであろう、怒りを露にしているフェイトの顔を見て、シャーリーはそれ以上何もいえなくなってしまったのだった。

ジェイル・スカリエッティ side

「スカリエッティ、ゼストとルーが活動を再会したぞい」

スカリエッティの研究室へ入り、ゴスロリ服を着た女性——ディールがその裾を翻しながらスカリエッティへと報告する。

「ふむ…クライアントからの指示は何かあるかい？」

「ルー達への無断の協力は極力控えよとのことじゃ。ふん…全く、何処までも上から目線じゃのう」

「そんなことは今更だろう？ それよりも、自立行動を開始したガジェットは私の完全制御下では無いのでね。プログラム上、勝手にレリックの元へ集まるのは勘弁して欲しいものだ」

「分かったのじゃ。 そのように伝えて置く様にウーノ姉上に頼んでおく…で、次の任務の際には妾も出してくれるんじゃない？」

「まあ、約束したからね…ただ、やり過ぎないでくれたまえよ？

君が暴れると、辺り一面が焼け野原になってもおかしくは無いのだからね」

「それは承知の上じゃ…万が一、他の兵器達（きようぐだい）が敵として現れればその限りではないが、の」

「…考えたくないな。君のような存在も信じられないというのに、その上がまだ4人いるとは」

「…会いたい反面、怖いのもう…兄弟喧嘩（けんわ）はいやじゃ…」

なまじ、その喧嘩がミッドを壊滅（しやうめつ）させる可能性もあるからのう——
——続けて小さな声で呟いたこの言葉を聞いたスカリエッティの頬が、
思いつき引きつったことに、ディールは全く気づかなかった。

ジェイル・スカリエッティ side out

「じゃ、夜の訓練おしまい！」

「「「ありがとうございます！」」「」」

つい最近までゾンビ状態になって宿舎に帰っていたとは思えないほどの元気の良さで返事をし、疲労してはいるもののしっかりと足取りでシャワーを浴びに行くらしい新人魔道士達。

恐らく、良くも悪くも“死”という恐怖^{もの}を間近で見たお陰なのかも知れない。

人間、危機が迫っていると知らず知らずのうちに必死になるものである。それはなのは達でも、ティアナ達でも変わらない。本人達は気づいていないだろうが、リニアールの事件の前と後では、訓練における身の入り方が違う。

当然、事件の前もかなり頑張っていたのだが、やはり命の危機があるとなると体の方が勝手に『更に能力を高めて危険を回避』しようとするので、賛否あるだろうがやはり恐怖と言うものは人を強くす

るのかもしれない。

そして、新人魔道士が去り、なのはが1人でティアナ達のデータを編集しているところに春斗が通りかかった。こんな遅い時間にまだ仕事をしているなのはに疑問を感じたのか、春斗がなのはへ問いかける。

「ん？　なのは姉、まだやってんのか？」

「え？　ああ、春斗…大丈夫、もう終わるから」

「そうか。手伝わなくて大丈夫か？」

「いいよ、大丈夫」

「…そうか」

元気があるようななのはの返事に更に返事を返しつつ、その後ろで

心配そうになのはを見つめるヴィータの方へ近寄り、小声で尋ねる。

「（ボソボソ…）…で、実際あれはどれ位いつもやってんだ？」

念話でいいんじゃないか？と思ったヴィータだが、春斗にはリンカーコアが無い（ことになっている）ため念話が出来ないことを思い出し、自分も出来る限り小声でそれに答えた。

「（ボソ…）…いつも、訓練が終わってから3時間以上は」

「（ボソボソ）労働基準法ガン無視だなオイ…分かった、これはやはりなんとかしなきゃならんようだ」

「宛があんのか？」

「まあな…宛、というものでもない。が、結構身近にこういうことには理解のある人がいる」

「？」

最後まで小声で話していたため、なのはに気づかれることは無かったが、そのなのはを見る春斗の目は何だか可哀想な人を見る目だった。

「知ってるか、ヴィータ。局員にはな、有給ってのが存在するんだぜ？」

「…いや、管理局員としてそれは知ってなきゃ拙いだろう…」

まるで分かってないかのような春斗の物言いに、少し呆れながら答えるヴィータ。

しかそその後、春斗から「知ってたか？ 機動六課隊長陣の有給消化率は0なんだぜ？」と聞かされ、「ああ、さっきの質問はそういう意味か」と納得してしまったヴィータがいた。つまり、有給が溜まりすぎてるらしい。どうやら1年くらいはバカンスに行っても大

丈夫な位溜まっているとか。よくもまあそんなに仕事ができるものだ、と春斗は呆れと驚きしか出なかった。

「その勢い：クロノから『春斗、なのは達をどうにかして休ませてくれ』と泣きながら懇願される始末：なので少しリンディさんに事情を話して、任務という名の有給をとってもらうことにした。最近には特になのは姉やフェイトさんも頑張ってるから、さすがに休んだ方がいいだろうしな」

「ああ、そうだな。：てかクロノ：アイツも大変だな：」

同時に溜息をつくヴィータと春斗。なお、2人とも気づいていないがヴィータも隊長なのではやてと同じく有給が溜まりに溜まっている。なので彼女は本来なら溜息を疲れる側なのだが、それは一先ず置いておこう。

「で？その任務って一体…」

「それは明日辺りに来ると思うからな。楽しみに待っておけ」

「あ、ああ…って、撫でるなあ！」

「ああ、すまん。身長的な意味で丁度良かったから」

「…アイゼンでぶっ潰してやろうか？」

そんな漫才を繰り広げている間になのはの仕事も終わり、それぞれの寝室へと戻っていった。

ジェイル・スカリエッティアジトside

「…」

ふと、ディールの目が覚めた。

「…嫌な夢を見たのう」

それは、全兵器に共通する“悪夢”。

彼女達が生まれた場所で起きた、地獄と惨劇。

どれだけ幸福になっても、それだけ恵まれても…消えることの無い、
彼女達にとっての呪縛^{くわつばく}。

それは、自分が人間では無いことを思い出させる。自分が幸福にな
ってはいけないことを思い出させる。

見た者を全て、不幸と絶望の底へ叩き落す——ただそこに存在する
“過去^{ゆめ}”。

しかしディールは、この夢を嫌だとは思いつつも忘れようとは思わない。見たくないとも思わない。

この夢は、離れ離れになった兵器きょうつたぐのディールなりの最後の思い出なのである。

どんなに辛かろうと醜かろうと、それは大事な思い出である。

それを忘れるなどという選択は、彼女には無いのだった。

「…妾らしくも無い。もう一度寝るかの」

しみりと思いい出に浸る自分が恥ずかしくなったか、再び布団を被って目を閉じ、眠りに落ちようとするディール。

けど、その表情は何処か幸せそうで――

願わくば、他の兵器達きょうだいも自分と同じ気持ちでありますように。

――そんなことを心の何処か、頭の隅で考えながら、彼女は再び深い眠りに落ちた。

“正体”（後書き）

天破「ディールの最後の夢については、物語の後半あたりに話す事になるかと思っています」

スカリエッティ「ふむ、確かにディールらしくないね。私達にも研究所での出来事は全く話してくれないしね…さてどうしたものか」

天破「そしてもうぶっちゃけて出てくるスカリエッティさん。一応近くにフェイトさんいるんだからさ…自重しようよ」

スカリエッティ「自重？ 無限の欲望に君は自重を求めるのかい？」

天破「サーセン、良く考えれば確かにそうだった。貴方に自重が出来るわけが無い」

次回は地球へ。

この作品中で数少ないギャグがかなり入る回にしたいです。なぜなら、地球から戻った後のホテル・アグスタですが――

これだけ予告します。『原作とは180度違います』。しかも無還者がリニアレールの際以上に無双します。しかも、遂にフランらが他の兵器達と邂逅を…するかもしれません。

あくまで予定です。予定は未定。素晴らしい言葉です（滅

天破「そして、此処で発表したいことがあります」

スカリエッティ「む？何かね」

天破「なんとっ…初感想がきましたああああ！！」

スカリエッティ「おお！それは素晴らしいではないか」

天破「ホント嬉しいっす。このまま終わりまで一切感想来ないのかな？戸まで考えてました」

スカリエッティ「それは無いと思うが…まあ、良かったではないか。だから、そのデイルの下着写真を出してもらおうか？」

ダッ（天破、逃走）

スカリエッティ「ウーノ、デイル。作者の逃げた位置を捕捉してくれたまえ。絶対に逃がしてはならない」

ウーノ&p,デイル「了解」

作者の命運は地獄だ！！？

天破「あれ！？　もう私の未来→で決定してない！？　って、何か砲撃キター！？」

“ 続かない ”

では、深夜更新&a m p.;茶番申し訳ありませんでした><;
次回も出来ればお楽しみにしていただけるよう、よろしく願
います^^

それでは、またよろしく願います^^

“地球”（前書き）

地球編です。完全に暴走した結果です。そしてシリアスなどほとんど見られません。

というか、かなり更新遅れてすいません m——m 夏休み色々と予定入ってまして。

それでも見てくださっている皆様に感謝の言葉を。本当にありがとうございます。

そして書いてからふと気づいた。

ヘリでの会話で、はやてが喋ってない…

…では、どうぞ！

“地球”

さて、春斗が思わせぶりの台詞を言ってヴィータへの死亡フラグを建てまくった次の日のこと。

部隊長である八神はやての仕事用PCに、一通の仕事依頼のメールが届いた。

「ん？ メール…なんやろ…また別世界の任務やろか」

PCを操作してメールを開く。

そこに書いてある内容を見て…と同時に頭も回転し…そして最後に任務地を見て、はやての顔が輝いた。

「…くっくく…私の時代が来たようやな…！」

嬉しすぎて少し混乱しているのか、その口から漏れたのは現れて数秒で勇者に倒されそうな気がする中ボス的な台詞であった。

「はやてちゃん？ どうしたんですか？」

そこに近寄ってくる純真無垢なリインフォース？。現在の状況をと
ても誰かに話したかったはやては、輝く笑顔で事の次第を彼女に話
した。

機動六課 仕事室side

「…おっしゃ、朝の仕事終わり、っと」

「えっ、春斗もう終わったの!？」

此方では今日も変わらない時間が流れていた。春斗やフランも、本
当に平和だなあと脱力してしまうような時間である。

「いやだって、いつもよりちょっと少なかったからな」

「そんなこと無いよ!？ それでも結構あると…」「ふう、終わしま
したわ…」 って、フランも!？」

額の汗を拭いながら、フェイトの義妹であるフランの口からも“仕
事が終わった”という言葉が。そう、彼女達は自分の弟と妹に負
けたのだった…いや、隊長であるのは達と一般事務員である春斗

とフランでは仕事量などに大きな差があることはあるのだが。

「き、今日は早いんだね…？　いつもは（主に春斗が）脱走に脱走を繰り返したりしてるのに」

「ん？　ああ、帰って来た時に仕事を多くしたくは無いらな」

「そうですわねえ」

なのはとフェイトには分からないが、どうやら彼らの間では通じるらしい会話をして苦笑しあう春斗とフラン。そして、少々危険な方向コンへ向かっている2人からしてみればそれは地味に面白くない。

「ふーん…フラン？」

「何ですか、フェイトお姉様？」

「やっぱり春斗のことが好きなんじゃないの？」

「ふえ…？　……………はうう！？　そそ、そんな訳無いですわ！！
というか如何してそんな結論に！？」

「だって、何も話さなくても通じ合ってる感じだし…」

それにしてもフランは慌てすぎである。　これではそうでなくても誰だって邪推する。

「確かにフランと春斗って仲が良いよね。　ね、春斗はどうなの？」

「ん？ 俺？ んゝ：双子の兄妹みたいな感じだな」

正直リアクションに困る例えが返って来た。しかも事情を知っている者からすればそれは例えでもなんでもなく、（過程はどうあれ）ほぼ同じ時、同じ場所で生まれたのだから笑えない。

「双子かぁ：でもさ、それ少し違うない？」

「？ 何がだ？」

「兄妹じゃなくて姉弟：じゃないかな？」

「待つんだフェイトさん。それはどういうことなんだ？」

その問いに、フェイトは顔を背けた。見ればなのはまでもが春斗に視線を合わせまいとしている。

「：俺ってそんなに幼く見えるか：？」

その声が少々泣くのを我慢しているかのように震えているのは、決して勘違いでは無いだろう。

「：兄妹……か……」

そしてフランと言えば、春斗の言った単語を反芻しつつ、自分でもどう表せばいいのかわからない不満と焦りのようなものを感じながら顔を赤くしてモジモジしていた。こういうことを天然でやるから、彼女は色々な噂が立つのである。

そこから更になのはとフェイトによる弁明や尋問が始まり、収集が

付かなくなってきたとき。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、フラン、春斗おるかー!? 大ニュースやで大ニュース!!」

「はやて…お前が神か…!!」

「ふふふ、そうやろそうやろ——って、私まだ何にも言ってへんのやけど…何や、その疲れた顔は?」

「いや、なんでもない…で、大ニュースって言うのは?」

そんなカオスに空気を読まず飛び込んできたはやてにこれまで無い以上の感謝をした春斗であった。

「そうそう、聞いて驚き…機動六課に、出張任務依頼が来た」

それを聞いて姿勢を正すのはとフェイト。いつもはのほほんとしている（春斗視点）彼女達でも、やはり仕事となれば至極真面目になるのである。

「そして…なんと! 任務先は…「地球だろ?」って春斗ォ——! なんて事をしてくれたんや! 突っ込み役として失格やで今のは!」

「いや、俺はお前の突っ込み役になった覚えは一瞬たりともないんだが」

しかし彼は気づいていない。既に現在進行形ではやてに突っ込みを入れていることを。

「いや、チヨイ待ち：なんで春斗が地球に行くってしつとるんや？」

「知るも何も、その任務を出してくれるよう頼んだのは俺とクロノだ」

「「「ええ！？」「」」

まさかの黒幕に驚きを隠せないのは達。

「いや、何を驚いてんだ：じゃあ聞くがな、なのは姉よ。あんたら最近休んだか？」

「？ 休んでるよ？ 仕事合間の10分くらい」

「それは一般的に休むとは言わない。それどころか微妙な休みがある分逆に辛いと思うんだが」

6時間続けてする仕事と、三時間置きに10分の休憩がある仕事。人にもよるだろうが、全く同じ内容の仕事なら3時間もやっていればトランス状態（何も考えずに仕事をするような感じ）に突入する。ある意味、そこに水をさすような10分の休憩はキツイと思う。集中力が切れてしまう場合があるのだ。

それに耐えている自分達の姉はやはりおかしいのでは無いか、と思ってしまう春斗であった。

「まあ、そんなわけだ。当然俺とフランも行く」

「だからこうやって早く終わらせたのですわ」

「な、なるほど…」

今此処に、1つの謎が解けたのだった。

…しかし、それはつまり。

「あ、なのは姉、フェイトさん、はやて。当然だが、隊長陣である3人は任務から帰ってきたらピラミッドを軽く超越する位の仕事が残ってるだろうし…今ある仕事だけでも全部やらねえと、帰ってきたとき大変なことになると思うぞ」

その言葉が終わるか終わらないか、春斗ですら見極められない速さではやては部隊長室へ戻り、なのはとフェイトは先程の約3倍の速度で仕事を片付け始めた。

やはり彼女達も仕事はばっちり来的な感じだが、大量にありすぎるのは勘弁して欲しいらしい。

(…良かった…あそこで『それくらい帰ったらやればいいよ』とか言われてたら、本当にこの人達を人間か疑うところだったぜ…)

彼女達の与り知らぬ所で、実は春斗も安堵していた。

まあ、そこまで深く考える必要も無い事なのだが。

「そんじゃ、俺らは任務の準備してくるからな」

「うん、私達のもできれば先お願い！」

その返事を聞いて、苦笑しつつも春斗とフランはともに自分の部屋へ準備しに向かった。

「…ん？　なのは姉の準備って…着替えだよな？　…俺がなのは姉の下着とか服を準備しろと。何処の罰ゲームだ」

なのは
エースオブエースをファンに持つ者からしてみれば、それは罰ゲームどころか羨望の対象に入るのだが…それを春斗が知る機会は永遠に無いだろう。

それから2時間程度経過し、なのはたちの仕事も終了。更に準備も終わって（結局春斗はなのはの任務の準備をしなかった）地球へと出発するときにやって来た。

「地球かあ…何お土産に買おうかな」

「スバル、アンタねえ…遊びに行くんじゃないわよ？」

「わ、分ってるよティア。でもさ、地球ってあたしのお父さんの故郷だから一度行ってみたくって…」

「そういや、ゲンヤ三佐も地球出身だったな」

そこに現れた春斗。彼は他の者より早く仕事と準備を終わらせたので暇らしい。

「あっ、春斗さん」

「はっはっは、きっと驚くだろうな。お前ら、なのは姉と俺の家族想像できるか？」

「えっ？ ええと…」

春斗の問いに、ちょっと考えてみるティアナとスバル。何処から「ポク：ポク：チーン！」と聞こえてきそうな勢いでスバルが答えた。

「ええっと…なのはさんって魔力の塊から生まれたんじゃないんですか？」

「馬鹿ね、スバル。きっと父親も母親も素手で管理局の魔道士を手玉に取れる手練に違いないわ」

「スバル、前提条件から間違ってるんだが。そしてティアナ、お前は俺となのは姉の親を何だと思っているんだ」

だが、普段の彼女を見ているとそうと取れなくも無いから不思議だ……いや、スバルのは論外の領域だが。

「大丈夫だ。俺らの母と父は人間やってるからな。人間じゃないのはなのは姉だけだって肋骨が碎かれるような痛みがあー！！！！」

「春斗？ 貴方はティアナとスバルに何を教えてるのかな？ かな？」

「それはティアナの台詞だろうが！？」

「待ってください。何で今のが私の台詞になるんですか」

それは“中の人”という概念が存在しないティアナやスバルには絶対に分からないだろう。春斗も勢いで言ってしまったらしく、何故ティアナの台詞になるのか自分でも分からないらしかった。

「ぐうう…何故バカンスに行く前に致命傷クラスの傷を負わなくてはならないんだ…？」

「それを人は自業自得と呼びますわ」

「フラン…」

そこに、短い裾のワンピースを着たフラン登場。なんと言うか、遊ぶ気満々であった。任務に行くという気配が微塵も感じられない。

その後ろで一応隊服を着ているフェイトは苦笑している。どうやら黙認する気らしい。

そして、そんな彼女を——脇腹の痛みにより倒れたまま見て——春斗がボソツと言った。

「…しr」

次の瞬間、世界最大級の金色の刃が彼を襲った。

「まさか一日で2回も三途の川を見ることになるとは驚きで一杯だ」

「：／／／／」

「春斗さん、サイテーです」

ティアナの汚物を見るような視線すら慣れているらしく軽く受け流す。その横では、顔を真っ赤にしたフランが意味の無いことを呟きつつスカートの裾を強く掴んで俯いていた。

「春斗？ このことはお母さんに言うからね？」

「サーッセンでしたアアアアアアアア！！！！」

そして、なのはの冷たい笑顔から放たれた言葉と同時に素晴らしい姿勢で土下座した。はやて曰く、『あのスピード、姿勢、そしてその謝罪の速度。どれをとっても、あれは世界を狙える土下座やった』という。

そしてその様子を見て、やはりなのは両親は人間では無いのではないかと失礼なことを考えたスバルとティアナであった。

なお、春斗が何を見て何を呟こうとしたのかは——ご想像にお任せする。

「さて、時間になったから行くで！…って、如何していく前から春斗はボロボロなんや？」

「大丈夫だ。何も問題はねえ。それよりも次のお仕置きこうげきが来ないうちに早く行こうぜ、はやてよ」

「よし、私は何も聞いてない。だから何も問題はないんやな？　じゃ、出発しようやないか！」

因みに、残念ながら例の事件によってシグナムとそしてその看病としてシャルは今回の任務の参加を辞退した。本当ならばやても残ろうとしたのだが、シャルに「はやてちゃんが休んだら今回の任務の意味が無いんじゃないかしら？」と諭されたので、心配になりながらも六課の部隊長として任務に参加することにしたのである。

なので、見かけ上は元気でもはやての心は重かった。

「…ま、せっかくの任務きむうかだしな。　楽しもうぜ、はやて」

その心情を察してか、後ろから（春斗よりは）身長の低いはやての頭へ手を乗せる。

「…そやな」

一応はやてと春斗は同い年のはずなのだが、その光景だけ見ているとはやてが年下に見えてくる。更に曲解すると彼氏が彼女を慰めている光景に見えなくも無い。

その光景をみたフランが、無言のまま春斗の脛を音も無く思いつきり蹴った。

「…………ツ!？」

無言でその痛みに悶える春斗。何が起きたか分からないはやてはその光景に目を白黒させて「ど、どうしたん？」と慌てたように言っていた。

「さ、行きますわよ!」

そして場を混沌にした張本人であるフラン本人は——自分でも分からないような不満を胸に押し込めて、何事もなかったかのように春斗に呼びかけた。

そしてその光景を見たのはとフェイトがニヤニヤとしていたのは、彼女にとっては知らない方が身のためだろう。突っ込めば弄くられることは目に見えている。

そしてそれから物理的な意味で被害が主に春斗に降りかかったりしたが、収拾が付かなくなるので此処では省略する。行く前から迫り来る災害に少々疲労しながら、春斗達はヘリに乗るべくヘリポートへと移動し、ヘリへ乗り込んだ。

―ヘリ内部side―

「そういえば、この課って地球出身多いよな」

早くも少し回復した春斗が誰に言うともなく話を振る。

「あ、そうですよね。春斗さん、高町隊長、八神隊長…あ、フェイト隊長とフランさんも一時期地球に住んでたと…」

「俺達は成り行きだけだな」

「成り行き、ってどういうことですか？」

「私達は捨て子ですよ」

苦笑いしたまま“設定”を口にすると、ヘリ内の温度が少し下がった気がした。

「あ…ご、ゴメンなさい」

「別に謝らなくても…所詮、過ぎたことだ」

「不思議なものもあるものでしょう？ 春斗は私が捨てられたのと同時期になのはさんの近くの山に捨てられたのを見つけられて保護されたのですわ」

「そしてフランは異次元に放り出されたんだが運よく地球に漂流してフェイトさんとその家族に保護された…確かフランは精神的なショックで3年位何も食わず、何も喋らずに眠ったようになってたって話だからな。 良く生きていたと思うぜ…」

“設定”^{うっそ}をペラペラと話す春斗とフラン。しかし、彼らの姉の顔がどんどん沈んでいく為信憑性は高い。というか裏事情を知らないな

のは達にとってこれが真実であり事実である。嘘などと思うはずもない。

「…、あの」

「何だ？ エリオ」

「…なんで捨てられて、怒ったりしないんですか？ 家族のことを、憎んだりとか…」

おどおどしく言ったその質問に、なのはとフェイトが顔を見合わせる。

エリオの素性を知っている彼女達にはその気持ちが良く分かるが、何も知らない春斗達に言っただけでエリオの納得のいく答えは得られないんじゃないだろうか――しかし、春斗の口から出た答えは彼女達の予想を大きく上回った。

「何言ってるんだ。今も昔も憎んでるさ」

「「！？」」

「…えっ？」

当然驚いたのはエリオだけではなく、静かに聴いていたのはとフエイトもだ。春斗は子供の頃は確かに混乱しているような感じがあったが、幼い頃から彼を見ているのは達から見れば、春斗に“憎む”という感情は全くないように見えた。

その春斗がたった今、人のことを“憎んでいる”と明確に言った。しかもその声色に冗談とは思えない重い響きがある。なのは達は思わず、それについて突っ込むことすら忘れたように固まってしまった。

そんな、なのはとフエイトの動揺に気づかず春斗は続ける。

「ああ、そうだな…憎くて憎くてたまらねえよ。——八つ裂きにしてやりたい位にな」

ヘリの内部に、冷房が効いているだけとは思えない寒気が春斗とフ

ラン以外の全員に走った――

「（バキィ！）いだっ！？」

――と思った瞬間、フランが春斗の頭をグーで殴った。

「何をするかフラン！ いいところだったんだぞ！」

「馬鹿ですか貴方は！ 芝居に力を入れすぎですわよ…」

「芝居…？ ！ あ、そうだな。力を入れすぎちゃった」

一瞬怪訝な顔になった春斗だが、何かに気づいたように笑顔で遠まわしに“今のは芝居”と言った。

「し、芝居？」

「ああ、芝居だ。 ごめんな、憎んでんのは嘘だが、感謝している
気持ちはあるぜ」

「感謝？」

「ああ。親ではなく“兄”にだけどな」

しかしこの話題転換にはさすがに無理があると春斗自身も思う。現に、春斗の背後には疑問の視線を向けるなのはとフェイトの姿があるからだ。

憎んでいると明言した親の話題からいきなり他の対象を話題に上げる。エリオ達は気づいていないようだが、これでは話題の摩り替えと同じである。しかも巧妙にも同じ家族の話をしているのだから気づきにくい。

そして、これに何か言おうとしたフェイトだが、なのはに目で制され留まった。

（フェイトちゃん、いいよ。春斗が芝居だって言うんだから信じよう）

（でも、春斗が親のことを話してた時のあの寒気は…）

絶対ただの寒気じゃなかった。念話でそう続けようとしたフェイトだが、またしてもなのはがそれに被せるかのようにフェイトに言った。

（うん、そうかもしれない…けど、春斗は絶対に私を裏切らないでくれるはずだから）

（でも、それに確証は…）

（じゃあ、フェイトちゃんはフランが裏切ると思うの？）

（そ、そんなことある訳ないよ！）

自分で力強く言った言葉に、ハッと気づくフェイト。
なのははそれに薄々気づきつつも、決して攻めずに優しく諭した。

（ほら。…家族を信じるのに、確証なんて必要かな？）

（…ごめん）

（うん、いいよ）

だからこそフェイトも謝ったし、なのはもそれを許した。
フェイトの気持ちも良く分かったし、もし先程エリオと話していた
のがフランであれば、なのはもきっと同じように疑っていたと思う
から。

念話とアイコンタクトで会話を終えた2人は、何事もなかったかの
ように視線を春斗へと戻す。

——全ての念話内容を、フランに盗聴されているとも知らず。

(…本当に、私達には…もったいない、家族ですわね…)

シークレット・リーケツジ
機密漏洩

他の兵器——？1である無還者すら持っていないフランだけの希少
能力。発動さえすれば、『いつでも』『何処でも』『何処にいても』
発動した対象の念話を聞き取ることが出来る。例えなのはが地球に

いて、フランがミッドチルダにいても発動できる優れものである。この能力を発動できる条件が、“一度でも対象にしたい人間の声を聞く”だけと緩く、彼女にかかれば念話で交わされる機密情報もただ漏れという、サポート系能力では最高級のスキル。そもそもフランは兵器の中でもサポート役に特化するよう造られたので、当然と言えば当然だが。

思わず熱くなる目頭を気づかれないように押さえながら、彼女はティアナ達に自分達の兄のことを話している春斗の方へ耳を傾けた。

「俺の兄貴はな、本当に人形みたいだった」

「人形、ですか？」

「そう、人形だ。さっきも言っただろ？俺は捨て子だ…即ち、親から愛情を受けずに育ったんだ。兄貴も俺もな」

「…、」

愛情どころか、彼らの記憶にある『幼少期』とは“死”か“苦痛”か“眠る”かの三択しかない日の繰り返しだった為、記憶は思い出す必要もないほどその身に刻まれているのだが。

「兄貴は…まあ、14年も前のことだ、全然覚えてないんだが…確か、いつも何処か遠い所を見てたな」

それを聞いて、フランも少し思い出した。確かに彼女達の兄は、いつも地下牢の様な部屋で隅に座って何処を見ているかもわからない空虚な瞳で上を向いていた。

今覚えれば、あれは何処をどう壊せば上手く脱出できるか考えていたのかもしれないが所詮推測である。そして、この脱出の件もいつか話すことになるので今は置いておく。

「俺はそんなでもないんだが…兄貴は確か、毎日のように殴られては蹴られ、妙な薬物を投与されては苦痛に喚いてたな」

そしてこれもほとんどが本当なのだが——苦痛に喚いていたと言うのは嘘である。その頃から兵器の心ウェポン・マインドによる洗脳を受け始めていた無還者は、既に痛みをほとんど感じなくなっているようであったし感情もほとんど失くしてしまっていた。よって、どんな惨いこと

をされても悲鳴の1つもあげないし抵抗すら見せなかったのだ。

「まあ、こんなところだ。俺が覚えてるのは…」

「えっと…なんていうか…ご、ごめんなさい」

「だから謝るなよ…謝られても困る」

「…あれ？　その、お兄さんはどうなったんですか？」

その言葉に、一瞬だけ険しい顔を作った春斗だが直ぐに戻し、困ったような顔をして言った。

「分からねえ。　バラバラになっちゃって、行方不明なんだ…だから、いつかは見つかるよう、日々繰り返し祈ってるわけだ」

祈っているではなく、日々管理局のメインコンピューターに侵入を繰り返しているという方が正しいのだが此処で言う必要は無い。というか言った瞬間に逮捕物である。

「そう、ですか…」

何かを思いつめるように俯き、拳を握り締めるエリオ。それを見て目を細める春斗。エリオの燃えるような赤髪を見ながら春斗は少し考える。

（プロジェクトF、ねえ…）

兵器として造られたところから、管理局の闇は全て“記憶”としてインプットされている。其方の方が管理局にとって何かと都合がいいからである。だからこそ彼は——いや、彼らはフェイトとエリオがプロジェクトFの数少ない成功体だということも、スバルが戦闘機人だということも看破していた。

（見た感じ、人体及びその中身に破損箇所及び異常は見られねえ…成程、成功体と言われる訳だ。人間の体でありながら、自分は人間じゃないと考える——俺はそれが羨ましいぜ、エリオ）

「？ 春斗さん、どうかしましたか？」

「いいや、なんでもねえ。しかし、何か考え事があるんだったら遠慮なく話してくれよ？ 俺はお前の味方だからな」

「! …はいっ!」

そんな思考を顔の一部にも出さず。

春斗の笑顔の確認に、エリオも笑顔で頷いた。

管理局本局 side

その後は暫く雑談を続け、ヘリは何事もなく地球への転移ポートがある本局へと着陸した。

「…あれ? 私の一世一代の見せ場的な所がスルーされた気がするです」

ヘリ内で、キャロやエリオ位の身長にチェンジしたリインが呟くが、誰に聞こえることも無くその言葉は流された。決して作者が忘れていた訳ではない事を追記する。

「さて、なのは隊長、フエイト隊長。私達は先に寄る所があるから…」

「うん、先に現地入りしとくね」

「」「お疲れ様です!!」「」

「うん、また後でな」

手をひらひらと振って、その場を後にする八神家。なんと言うか、やはりシグナムとシャルがいないと少し少なくて感じてしまうのが悲しい。

「さ、私達も行こうか」

「「はいっ（おー）（分かりましたわ）」」

纏りのない返事と共に、なのは達も転送ポートへと動いた。

地球
s i d e

転移ポートで転移した先は、周囲を緑で囲まれた美しい庭であった。

「ん…あれは…なのは姉、此処はあの2人の別荘じゃねえか？」

「あれ？ 春斗知ってたっけ？」

「いや、この場所は知らん。 だがあんな高級車あの2人とフェイトさん以外に持っている奴なんて俺の記憶には存在しない」

春斗が視線を向けた先を皆が見ると、真っ黒な車が滑るようにこちらへ向かってきているのが見えた。 これに驚いたのはティアナだった。

「え、車？ この世界にもあるんだ」

「おいおいティアナ。 車が無いとかどんだけ遅れてる文化なんだよ」

その言葉に苦笑しながら言う春斗。しかし気持ちも分かる。文化レベルBというのは微妙なラインだから、遅れている世界はそれこそ未だにTVすら開発されていない場所がある。アニメやドラマを良く見る春斗にとって、それは苦痛以外の何者でもないのだ。

そんな世界に飛ばなくて良かったぜ…とかなんとかどうでもいいことを考えていると、先程の車が春斗達の前に止まって女性が出てきた。

「なのは、フェイト！ あ、春斗もフランも来てたのね！」

「アリサちゃん！」 「アリサ！」

「よ、バニングス」 「こんにちですわ、アリサさん」

「相変わらずね…というか春斗！ 貴方はいつになったらあたしのことを名前で呼ぶのよ！」

「恐らく永遠に名前を呼ぶことは無い」

「なんでよ!?!」

「気分で…冗談だ。ただ単にバニングスという呼び名が気に入っただけだ」

「少々腑に落ちないけどまあいいわ。それにしても皆ご無沙汰してたじゃない」

「にやはは、ごめんね」

「色々忙しくてさ」

「あたしも大学忙しいわよ」

「アリサさん、こんにちわですー！」

「あら、リイン。久しぶり！」

「はいです♪」

「あ、そうだそうだ。紹介しとくね。私となのは、はやての親友で幼馴染」

「アリサ・バニングスです。宜しくね」

「」「宜しくお願いします！」「」

頭を下げ、元気良く挨拶をするFW陣。その一人一人の顔を覚えようと、アリサがゆっくりと4人を見ていく。

「元氣そうな子達ね。あら、そういえばはやて達は？」

「えっと、別行動なの」

「多分すずかのところじゃないかな？」

そんな会話から急に会話が弾み始めてしまった。せめて何をすればいいのか指示が無ければ動けないのだが、FW陣では隊長達の邪魔をするのは気が引ける。

そんな空気を察したのか、春斗がだるそうに口を開いた。

「うおーいなのは姉。取りあえず俺らとFW陣はコテージ行ってもいいか？」

「え、春斗？ …あつ、ゴメンゴメン！ そうだね、じゃあ着替えて、コテージのリビングで待機してくれるかな？ 皆」

「」「はいっ！」「」

「で、俺とフランは着替え次第遊びに行ってくる」

「久々ですものね、海鳴は…」

「え？ アンタ達は仕事じゃないの？」

「俺達は有給つかってんからな。大体、その隊長が休み無く働かなければこんな任務の話すら持ち上がらなかったぜ」

「休み無く働いた…？ なのは、フェイト、ちょっとその辺り聞かせてもらいましょうか」

「…は、春斗！ 弁明は！？」

「じゃあな、なのは姉。心配してくれていいじゃねえか。そして少し位は心配している俺の身にもなってくれ」

「えと、フライン…」

「それでは、お先にですわ♪ フェイトお姉様♪」

「…(泣)」

満面の笑顔で放たれた言葉は、即ち春斗と同じ行動を取ると言うことであり。

暫くアリサの質問ならぬ尋問に、必死で誤魔化しも入れつつ説明を始めたのはとフェイト。

そんな2人を見て笑いながら、何処行くかを考えつつ春斗達もコテージへと向かった…。

地球side out

???side

「おーいスカリエッティー、こっちじゃこっち！」

「いきなり連れ出したと思えば、何故このような場所へ連れて来たのかね？ 私の記憶では、此処は彼のエースオブエースやフェイト・テストロッサの出身地の場所であったはずだが」

「そうじゃが？」

「“そうじゃが？”では無いだろう！ 敵地そのものでは無いかね！？ 鉢合わせしたらどうする！？」

「大丈夫じゃ。妾が全力で潰す」

「いや、そういう問題ではないのだが」

「まあ、まあ。いいではないか。一応書き置きも残しておいたし、ウーノ姉上からも『ドクターは少し根を詰めすぎているから休んだ方がいい』との言葉をもらっておるしの」

「ああ、なるほど…って、やはり結局直接許可をもらった訳ではないのか…帰ってから何があっても私は知らないぞ」

「分かってるのじゃ♪ いやー、TVで見てから此処には来てみなかったんじゃないよ！ 海と言うものも見たことが無かったしの…ほら、行くぞスカリエッティ！ 海が妾を呼んでいるのじゃ！」

「まさか泳ぐ気ではないだろうね！？ 君は唯でさえ目立つんだからこれ以上目立つのは…待て待て、腕を引っ張るんじゃない！ デイル、聞いているのかね?!」

そして同時刻、非合法の転移機械で地球への侵入を果たした男女（男性はどう考えても無理矢理連れてこられた感がある）も行動を始めるのだった。

“地球”（後書き）

春斗「ちょｗｗｗｗおま、ラストｗｗｗｗｗｗｗｗ」

天破「神からのお告げが聞こえてきた。ディールを出せ、と」

フラン「私たち無双ではありませんでしたの!？」

天破「いや、普通じゃつまらないから色々と変えてみようかな、って」

春斗「変えすぎだろｗｗ」

フラン「ううゝ…私だって、もう少し、もう少しあれば…」

春斗「何がだ？」

フラン「五月蠅いですわっ!!!!／／／／／」

春斗「ぐはっ!？」

天破「あ、春斗が空の彼方へ…」

次回も何時投稿できるか分かりません。申し訳ありませんが、少し待てば落ち着くと思うのでそれまでお待ちくださいm——m

フラン「では、次回もごらんいただけるよう、よろしく願いしますわね♪」

【重要】謝罪とお知らせと訂正と（前書き）

すいませんでした。本当にすいませんでした。

なんと言うか：詳しくは本文にて：o r z

【重要】謝罪とお知らせと訂正と

えー、登場人物紹介（ネタバレあり）を読み飛ばした方には御関係はありませんが：

登場人物紹介（ネタバレあり）の無還者の能力を完全に間違えてましたああああああ！！

混乱させてしまったことを誠心誠意謝罪すると共に、無還者の能力の記述も直させて頂きました。

名前を間違えただけとはいえ、（別作品の能力を間違えて使ってしまった）こうしてみると能力の印象が180度違うことが伺えます。

なので、宜しければもう一度無還者の能力欄でも見て『何だこの厨二www』とでも鼻で笑ってやってください。今回の件で責められるのは致し方ないことだと私も分かっております。

お詫びとして、ディールのお色気シーンでも本編に：

ディール「Σ」

と思いましたが、正直どうなるか分かりません。

ディール「（・ω・）」

何故もったいなさそうな顔をしてるんだ。

と言う訳で、謝罪と訂正でした＜＞ 一応小説を書いている身分でこの失敗は無いと思いましたが、処女作だと言うことでどうか多めに見てくださいよう、お願いしますm（ m

それでは、改めて次回もお楽しみに。天破でしたm（ m

“任務”（前書き）

おはようございます。何とか完成しました。色々と駄文ですが。

取りあえず注意点をば。

? 取りあえずフランに萌えて下さい。

? そして春斗の境遇に同情してください。

? 次回の銭湯イベントに期待してください。

あれっ、これ注意点というよりr y

あ、そうでした。皆様お待ちかね(?) 遂に三角関係が…!?

では、どうぞ♪

※8／6の16…24、またしても文が丸々抜けていたので修正しました。申し訳ありませんm () m

“任務”

暫くして、比較的着替えの早い男性陣エリオと春斗がリビングで話していた。まあ、男2人（しかも片方は年の差が4年以上ある）揃うと、話すのは身近にいる女性のことになる。

「そういえば、春斗さんってフランさんのことどう思ってるんですか？」

「……何か少し前にもそんな話題があった気がするな…何だろうか、思い出さんほうがいいと本能が訴えている」

少し前と言うかほんの数時間前だと思うのだが、彼の被害を考えると思ひ出さないほうがよいのかも知れない。しかし何という都合のいい記憶力だろうか。見習いたいほどである。

「まあ、それは置いておくか。どう思う、ねえ…」

「あの、例えば家族みたいだったりとか、やっぱり親友だとか、その…恋人、とか…」

「ああ、まず恋人はねえな」

この瞬間、お約束的な意味で春斗に不幸が降りかかることが確定した。

「そうだな、やっぱり兄妹…というのがしっくり来るな。お前とキヤロみたいな感じだよ」

「な、なるほど…でも、僕達ってそんなに兄妹に見えます？」

「何だ？ お前はキヤロと恋人同士に見られたかったのか？」

「い、いやいや！？ 違います違います！？ 僕がキヤロの恋人なんて、釣り合わないですよ…」

そんなことは無いと思う——というのは、自分のことを遙か上空の棚に上げた（というか気づいてない）春斗である。キヤロとエリオは歳も近いし中々にお似合いだと彼は言う。当然自分とフランのこともなど全く考えてない。

「はっはっは。子供の恋愛ってのはいいな、純粹で」

何を基準にこの男は純粹と言っているのだろうか。

「でも、は、春斗さんだってフランさんとお似合いじゃないですか？」

そこに放たれる、少し顔を赤くしたエリオの子供なりの反撃。

しかし、この程度の質問なら春斗は度々切り抜けてきた。この男、今更この手の質問で動じることはない。

余裕のある笑みを口元に浮かべながら、彼はエリオに言った。

「いいかエリオ。俺は貧乳には興味が無い。寧ろ俺は美乳・巨乳派で、例えばスバー（ゴオンッ!!）ぐああああ後頭部に鈍器が激突したかのような痛みがああああああああ!!!!!!」

その一瞬、エリオはおろか春斗すら反応できない速度で何かが飛来し正確に彼の後頭部へと直撃した。

それを冷めた目で見つつ、丁度着替えから出てきたのだろう――フランは笑顔を作って、春斗達にこういった。

「エリオ、春斗。着替え終わりましたわよ」

「……………は、はい…」ガタガタガタ…

取りあえずエリオは、フランの額に浮んでた青筋とその横で頭を抑え悶絶している春斗とその傍に転がっているゴルフバッグをすべて見なかったことにした。

「……………ちょ、ちょっと嬉しい……………かも…」

そしてフランの後ろで、少し顔を赤くして照れているスバルのこと
も——これ以上場の混乱を避ける為——本能が記憶から消去し
た。

＊

暫くして、なのは達がコテージの外に集まった。

「旅行が始まる前に酷い目にあったぜ…」

「春斗さん、ホントツサイテーです」

「春斗？この事はお母さんに報告するからね？」

「やべえな…風邪を引いたか？ 膝の震えが止まらねえ……っ！！」

それは決して風邪ではなく、恐らく怯えによる体の拒絶反応だろう。

「ま、まあまあティア！ 春斗さんだって冗談で言ったんだし、許
してあげよ？」

「スバル、アンタはそれでいいの？ 客観的に見て、アンタも被害
者の1人だと思うんだけど…」

「じ、冗談だって分かってるしね…」

「…ふうん？」

何やら疑わしそうな視線を向けるティアナに、目線を合わせず下手な口笛を吹くスバル。

そしてその後ろでは、再びフランを傷つけたということとで春斗がフエイトに断罪されていた。旅行に行くというのに、彼はその前に病院へ運ばれそうな勢いであるが、当然ながら自業自得である。

ドゴオオオオオオオ！！！！

「ぎゃあああああああ！！！！」

金色の斬撃と共に、いつもより大きい爆発音と春斗の断末魔が空に響き渡る。

今日も、現在進行形で機動六課は平和であった。

「すまん、遅れた…って、如何して春斗は行く前かr…これ、地球に来る前もやったような気がするんやけど」

「奇遇だなはやてよ、俺もだ。理由を聞くか？」

「少し怒ってそうなフランとかなり怒っているフェイトちゃんで大
体把握したから大丈夫や。さ、皆聞いてやー！」

“少し”と“かなり”。言葉にすれば1文字しか変わらないこの表現
は、現実世界ではどんな谷よりも深い違いを表す。

それすらも理解しているように同情の目線をはやてから向けられた
春斗は、少々涙が出そうになった。

「気を取り直して：今回の任務はロストログアの発見からの確保や。
なのはちゃん、フェイトちゃん、頼むわ」

「了解。じゃあ、スターズは私とリイン、スバルとティアナの二
組に分かれて捜査ね。中距離捜査は任せるよ、リイン」

「お任せくださいです！」

「クロスミラージュにも簡易型の探索魔法をセットしてあるから、
そっちとこっちで少し離れて探そう。いいね？」

「「はいっ」」

「ライトニングは市内の各地にサーチチャーとセンサーを設置。そ
れが終わり次第捜査の協力：で、いいかな？」

「「はい」」

「ヴィータは上空から探索と設置をやってくれとるから、これで皆1つは仕事が出来たか？」

「あの、はやてさん」

「なんや？ フランは此処には有休で来たと思ったんやけど…」

予想外にも、はやての言葉に手を上げたのはフランだった。しかしはやての言う通り、彼女ははやて達とは違って有休を使って此処にきているはずである。

その疑問に、フランは少し笑いながらこう答えた。

「いえ、普通に春斗と一緒にだといつも通り過ぎて味気ないので、せっかくですしライトニングかスターズの方に付いていきたいなと…」

「うーん、なるほど。本来なら駄目なことのような気がするんやけど、まあええやろ」

「いいのかよ」

「此処に私達の他に管理局員がいるとは考えにくいから、少し位のこと大目に見れるんや。で、フランはどっちに付いていきたいんや？」

「私はスターズとご一緒したいですわね」

「じゃ、俺はライトニングに付いてくぜ。いいか？ エリオ、キャ

ロ」

「あ、大丈夫です」「誰かと一緒にいた方が楽しそうですから!」

「私も、いいですか? スバル、ティアナ」

「はいっ、喜んで!」「はい、大丈夫です」

「じゃ、決定やな。ほんなら、ロストログニア探索、任務開始や!」

『はいっ!』

ともかく、色々あったがようやく地球でのロストログニア探索が始まった。

＊

スバル&mp;ティアナ+フランside

さて、此方はガールズオンリーのチーム。しかしその中の1人は仕事ではなく休暇であり、更に魔力が無いので普通にアイスや食べ物を買って食べながら歩いていた。現在、スバルとティアナはアイスを買いに行っているフランを待っている最中である。

「もう、フランさんたら…」

「そうだね、もう少し仕事中の私達のことと考えて——」

「あ、スバルさん、ティアナさん。お待たせしました、アイス買ってきたんですが食べますか？」

「——部隊長の言うように、少し位多めに見なきゃ駄目だね！」

「スバル…アンタって人は…」

珍しく正論を述べようとしたスバルだったが、フランの買ってきたアイスに簡単に陥落した。それに頭を痛めるような動作をするティアナだったが、彼女もすっかりアイスを受け取っている。

「でも、フランさんは如何して春斗さんと一緒に行かなかったんですか？…あつ、このアイスおいしい」

「ああ、あの時も言いましたが海鳴は久しぶりとはいえ色々知っているの…春斗も同じでしょうし、それならこっちに来たばかりの貴方達を案内して差し上げようと…迷惑でしたかしら？」

「いえいえ、助かります！ 私達此処のこと何も知らないし、アイスも買ってくれるし！」

「…スバル、本音が駄々漏れよ」

「ふふっ…」

慌ててフランをフォローしようとしたスバルだったが、普通に自爆して赤くなって俯いた。再び頭痛を堪えるかのように頭を押さえるティアナと、その反応が面白くて思わず笑ってしまうフラン。

傍から見れば、姉妹が3人仲良くアイスを突いているようにも見えるほほえましい光景であった。

「そういえば、何度か話題になったと思うんですけど」

「なんですか？」

「フランさんて、春斗さんのこと好きなんですか？」

直球であった。思いも寄らなかった質問がスバルの口から出たことにより、フランは思わず口に含んでいたアイスを噴出しそうになってしまった。

「ん、んぐっ…な、何を言ってるんですの？ 私が春斗のこと好きな訳ないじゃありませんか」

危なげなくアイスを飲み込み、冷静さを保ちながら笑顔で答えるフラン。

だが、その答えを受けてスバルが少し顔を赤らめながら核兵器クラス
の爆弾を投下した。

「へえー、そうなんですか？　じゃ…じゃあ私が告白してもいいで
すか？」

「「!?!?」」

これに驚いたのはフランだけではなくティアナもだ。彼女の目から
見ても春斗は仕事は出来るのだが遊んでいるようにしか見えず、顔
はまあまあだが性格が全てを台無しにしているように見える。正直、
フランが彼のことを好きだというのも信じられない位である。

「べ、べべ、別に、構いませんわよ。は、春斗のことだから、告白
されても分からないと思いますけど」

完全にパニック状態になっているフラン。しかしその言葉に『それ
はありえない』と断言できないところが悲しい。　それ程春斗は朴
念仁というか、人の心に鈍感なのである。

「別に構いませんよ？　分かってくれるまで言い続けますから♪」

「はう…?!」

しかし返って来た返事はポジティブにして、更にフランの立場を危うくさせるものだった。

フランも自分が人間では無いと言っではいるものの、当然ながらこういう場合の対処法を分かっているはずも無い。思わず強敵(?)の出現に焦るばかりであった。

「スバル、正気？ あの手斗さんよ？ あの手斗さんなのよ？」

「うん、それに手斗さんっているも見てれば凛々しいし格好いい時もあるんだよ？」

一体手斗はティアナの中でどうカテゴリ付けられているのだろうか。少なくとも手斗は聞かない方がいい気もするが、それは置いておこう。

それにしてもスバルは、顔を朱に染めていかにも恋する乙女という感じだ。一体あの男の何処にその様な魅力があるのか疑問であるが、これ以上書くと作者の黒い部分が顔を覗かせるので止めておく。

そしてこの状況に慌てたフランは、『そこら中に聞こえるような大声で』スバルにこんなことを言った。

「だ、駄目ですわー！！ は、手斗は絶対に、その、渡しませんから！！！！」

一瞬、空気――否、世界の時間が止まった気がした。

「……おお……／＼／」

「……はっ!？」

自分の発言を見返してみる。

そして周囲の様子を確かめてみる。

……何だか、生暖かい視線が浴びせられていた。

「……はうっ／＼／／」

恥ずかしさのあまりオーバーヒートしたのか、息を吐くように言った後顔を真っ赤にして固まった。

動く様子が無い。

「だ、大胆だね、フランさん……／＼／」

「……聞ってるこっちも恥ずかしかったわ……／＼／」

完全に復活するまでに30分以上の時間を要したことを追記する。

スバル&p;、ティアナ+フランsideout

エリオ&p;、キャロ+春斗side

此方は別段変わったことも無く、雑談しながらサーチャーやセンサーを設置したりしていた。普段、何故か互いに話そうとしないエリオとキャロだが、今回は上手い具合に春斗が潤滑油のような働きをしておりますもより多く話をしているようである。

「しかし、サーチャーやセンサーを仕掛けるだけの作業と言うのも暇だな」

「いや、春斗さんは何もしてないじゃないですか…」

「そうだったな。言い換えるか、仕事を淡々とこなしているのを見ているのは暇だ」

「……………それもそれでどうかと…」

今の会話を聞けば分かるように、春斗がボケ役でエリオとキャラが突っ込み役である。違和感が無いのが凄い。やはり春斗ははやての見込んだとおり、突っ込みとボケの才能があるのだろう。

「いらん才能だなオイ」

「「？」」

「いや、何でもねえ。何だか口から出て来たと言うか…気にしないでいいぞ」

よく分からないが、春斗が言うなら気にしないでおこう…というところで再びサーチャーやセンサーを設置していく。地道な作業だが、その大切さは春斗も分かっているようで暇だとは思いつつ口出しはしなかった。

そこから、暫く淡々としたサーチャー&センサーの設置と雑談を繰り返す。

「よし、これで最後です」

「うっし、終わったか！じゃ、もう少し時間あると思うし何か驕ってやるよ」

「え、でも悪いですし…」

「遠慮するなって。機動六課は結構給金がいいからな、それなりのものは食えるぜ？」

「え、えっと…」

「エリオ君、せっかくだしご馳走になろ？ 断るのも悪いし」

「う、うん。じゃ、いいですか？」

「よし！ じゃ、何が食べてえk——（ドンツ）っと、すいませ
——」

仕事も終わったことなので、早くも何を食べるか考え始めた春斗だが、誰かの肩にぶつかってしまった。慌てて誤った春斗であるが

「テメエ、痛えじゃねえか！何しやがる！」

——そう簡単に、トラブルから逃れることは出来そうになかった。

「いや、謝って…」

「オイ、どうしたよ？」

「それがコイツがよォ、俺の肩にぶつかって来て謝りもしねえんだよ」

当然抗議した春斗だが、此方の話を聞かず、そしてぶつかって来た男共の顔がニヤ付いているのを見て顔を顰めた。

これは難癖つけて、此方を脅迫し金等を奪おうとする輩の集団だと分かったのだ。

古典的な方法だが、確かにエリオやキャラ程度の子供なら効果はある。大抵はその剣幕に怯えてしまうからだ。

だが、エリオ達は子供でも管理局員。この程度の男達ならエリオ1人でも簡単に片付けられる。だがそれはデバイス、または武器を使ったときの話だ。こんな街中でセットアップしてしまったら大変なことになる。そしてこれはキャラにも同様のことが言える。

つまり、今物理的な意味で動けるのは春斗のみだ。

「だから謝ってるだろうが」

「ぶつかった相手にその態度はなんだよ、ああ？」

だが、春斗はこの状況をさほど危険視していなかった。

こういう相手は大抵、金を出せだとか何とか言ってくる。そう言われたら、相手の度肝を抜く金額を出してやればいい。札束にしていくつか現金を持ってきている春斗に、この手の脅迫紛いの手は強さ的な意味でも通じない。

だが、状況は春斗の理解を超えた方向へ動き出した。

「ん？ …ほお、そこの桃髪の嬢ちゃん、可愛いじゃねえか」

「は？」

思わぬ方向へ飛び火したので、思わず間の抜けた声を出す春斗。
しかしそんな彼を嘲笑うかのように、男は卑しい笑いを浮かべながら言った。

「どうだ？ この嬢ちゃん、一晚貸してくれんだったら許してやる

ぜ？」

「……………はぁ！？」

春斗も予想外であった。　　というか誰が予想できただろう。

この男が、ロリコン変態であったなど。

「…ふざけてんのかお前。金ならあるからそれだけは止めろ」

色々な意味での動揺を胸に押し込め、春斗は冷静に努めながら男に向けて言う。

「ふざけちゃいねえよ。だが、それなりに楽しめそうだからよ…クツクツク」

聞く者全てを吐き気を及ぼせるような笑い。春斗は更に顔を顰め、キャロは怯えたような表情でエリオの後ろに隠れてしまう。　無理も無いことだ。正直キャロの歳で変態の相手は難しすぎる。

（ちい、面倒なことになったぜ…フェイトさんでも居れば…って、此処じゃ魔法は使えないんだった）

確かにもし此処がミッドチルダで、そして同じようなことが起こっていたのなら恐らく既にこの男達の命は無いだろうが所詮結果論である。

ニヤニヤと笑っている男共にロリコン集団という括りをつけつつ、この状況の打開策を暫し考えた春斗はふと溜息をついた。

（…仕方ねえ。 “可能性” の為だ。一肌脱ぐか）

そこまで考え、そして更に相手の思考回路を計算し自分が相手ならどうするかを考えて答えを出した。

——そして、全ての計算を終えた兵器は、悪い笑みを浮かべながら話し出す。

「オイ、お前」

「ああ？ 何だよ」

「そんな女より、もっとお前好みの女を知っているんだが…そっちの方で勘弁してくれねえか？ 流石に知り合いの娘が目の前で連れ去られるのは見たくねえ」

「「春斗さん！？」」

何を言っているんだというライトニングの叫びも聞かない振りをする春斗。今ほど自分が念話を使えないという設定になっていることを悔やんだ記憶は無い。

そんな春斗の心情も知らず、変態^{バカ}はホイホイ釣られて来た。

「ほお…？ 因みにどんな娘だ」

「○学○年生、胸はAAA、まだ未経験」

「乗った」

相談は一瞬で終結し、そして目出度くも成立した。春斗の中で目の前の男が完全なる変態だと認定された瞬間だった。

「で？ どうすればいい？」

「連絡先を教えろ。それだけで後は俺達でやる」

「そうか。だが、連絡先の前にその少女のヤバイ画像があるんだが」

「見せろ」

「よし、じゃあこっちに顔を近づけてくれ——そこに近づこうとしている変態^{おとし}10名、後で教えてやるからお前らは待て」

少々ルビが可笑しなところに振られていた気がするが、何もおかしな所は無かった。

「…みえねえぞ？」

「まだまだ近づけ」

怪しげに、春斗の携帯画面を覗こうとする変態。因みにライトニングはといえば、春斗の演技に騙されているので今までの春斗のイメージが崩れているところだった。

「ほれ、これだ…」

「…っ？」

態と真っ暗にした携帯画面を、見えにくいように男へ見せる。

男がそれを見ようと、顔を近づけた瞬間――

「…………ドリアアアアアアアア！……！！！」

――男の顔面に春斗の右の拳が入り、数メートル吹き飛んで痙攣

し動かなくなった。

「「「「「!?!?!?」「」「」「」」」」」

そこにいた皆——様子を伺っていた町の人々も入れて——彼らの表情に浮ぶのは、驚愕。

そんな感情を知らん振りし、変態おとしを殴った方の右腕をブラブラさせながら苦い顔で春斗は呟いた。

「あー、変態の汗が付いたっ！最悪だよ畜生！」

「変っ…お、お前も我らの同志では無かったのか!?!」

「誰が同志だ誰が!! お前らの仲間ってだけで虫唾が走るわ!!」
「!」

変態達おとしども以外の全員が同意し、春斗を見直そうとしたところで——

「俺は貧乳には興味は無いッ!!」

——次の一言ですべてが台無しになった。

「デメエ！よくもリーダーを…全員かかれえっ！！」

「一々掛け声が雑魚キャラ臭えんだよ雑魚があああ！！！」

バカ正直に突っ込んできた変態の1人の顔面を待たしても右の拳が捉え、先程の変態の如く飛んでいく。

だが、残念かな今回の春斗のターンはこれでは終わらない。

「デメエら見てえな変態はこの世から消えとけ！！必殺！ゴオオオオオオオルデンクラアアアアッシュ！！！」

吹き飛んだ変態に向けてジャンプし、ジャンプした直後に丁度地面へ仰向けに倒れた変態へと飛び蹴りを放つ。

そしてそのとび蹴りは吸い込まれるように、変態へとヒットした。

————男なら誰でも知っている、自分の大事なところへ。

「がふうっ!？」

春斗のノリで叫んだ必殺技を（自分の大事な部位へ）喰らった変態は、2，3回痙攣した後泡を吹いて動かなくなった。

そしてこれを見ていた野次馬含む男性全員が、自分の大切な部位を思わず抑えたり変態への冥福を祈っていた。

「? : エリオ君、モジモジしてどうしたの？」

「へっ!？ いやいや、なんでもないよ!？」

子供ながらにして、春斗の攻撃に何かを感じたエリオは何も悪くないだろう。寧ろそれは男性として必然といえる。

「さあ…テメェら…」

「「「ひっ…!」「」」」

「俺と俺の連れに難癖つけた罪…去勢した上で断罪してやらああああああああ!……!」

「「「去勢した上で何かやるのかよ!？ うわああああああ!……!」

」

追いつかれれば、自分に（男性としての）明日は無いと判断した変態達は、全力で駆け出そうとして――

「（ドスッ）グボアアッ！！！！？」

春斗に背を向けた瞬間、尻の穴へ正確に箒が突き刺さり変態が2名逝った。

「「はぁ！？」「」

「馬鹿め！俺の投擲のコントロール嘗めんじゃねえぞ！」

「いやそうじゃなくて、春斗さん今追いかけてようとしたんじゃ…？」

全員が入れたかった突っ込みを、まさかのエリオが代弁した。だが春斗はそれに全く慌てず、ただ冷静にこう言った。

「俺は一言も追いかけるとは言ってねえ」

「…え…？」

「いいか？ エリオ、キャロ…残念ながらこの世界は、勝てば官軍

なんだ。敗者の言うことなど、誰も聞きゃしねえよ…」

「最低だ！？ 格好いいこと言ってるような気がするけどそれは犯罪者の台詞ですよ春斗さん！！」

「はっはっは、素晴らしい褒め言葉だな…ん？ オラ、逃げようとしてんじゃねえぞ！ テメェらの大事なもん置いてきやがれ！！」

「「「ぎゃああああああ！！！！」」」

「「春斗さああん！立場逆！逆ですってばー！！」」

そして、遂に狩られるはずだった方と狩るはずだった方の立場が逆転した。

收拾が付かないかと思いきや、最終的には駆けつけたパトカーによる周辺住人の事情聴取が始まった――が、その頃には春斗及びエリオとキャロの姿は消えており、代わりに残されていたのは全員が全員自分の急所を抑え泡を吐いて気絶している変態だけだった。

＊

「いやー、いい汗掻いた」

「いい汗掻いた…じゃありませんよ?! 逃げられたから良かったものの…もしこれがフェイトさんの耳に入ったら…!!」

「大丈夫だ、お前らには絶対被害は及ばない。どう考えてもこのパターンは俺1人に被害が来るだろうから心配するな」

それが分かっているのなら、普段から自重すれば何も問題は無いはずなのだが…。そこは春斗、ということだろう。

「でも、春斗さん強かったですよ?」

「ん? そうか? でもな、この事は出来るだけ人には言わないでくれ」

「何ですか? もしかしたら認められて昇進も出来るかもしれないのに…」

「それが嫌なんだよ」

予想外の答えに驚くエリオとキャロ。しかし、そんな彼らに春斗は笑ってこんなことを言うだけであった。

「お前らはまだ子供だから、分からねえかも知れねえ。いや、実力なら明らかに普通とは一線を規しているがそれでもまだ10年と少し生きた子供だ。俺も同じようなもんだけどな。しかし、俺は上に立つべき人間ではない。俺はまだ護られているからな」

笑っている。笑っているのに――普段、おちやらけている春斗の
声とはまるで違う、低くて威厳のある声。エリオとキャロも、何も
言えずに黙って聞いている。

「しかし、これだけは言わせてくれ。醜悪な環境で生まれながらも
何とか生き抜いてきたバカからの言葉だ：無意味かも知れんが、覚
えておいておくといいかも知れねえ」

「…、」

「自分が『護られている』ことを自覚しろ。俺は父さんや母さん、
兄さんや姉さん、そしてなのは姉に護られてきたからこそここにい
る。フランはフェイトさんやアルフさんに護られてきたからこそこ
にいる。そして俺が高町家にたどり着けたのは、兄貴が命がけで俺を
護ってくれたからだ。それを自覚するまで、俺は何年も無駄な時
間を費やしちまった：お前らは繰り返し返すんじゃない。んで、護ら
れているうちは護られとけ。絶対に後悔しねえからな」

「…はいっ」

「よし、いい返事だ。：もう少し集合まで時間あると思うしな、改
めて何か驕ってやるぜ。何がいい？」

「「中華料理を食べてみたいです！」」

「ははっ、息ピッタリだな。いいことじゃねえか：よし、じゃあ
その辺の中華料理店に入るか！俺の驕りだ、食いまくれよお前ら

！」

「はいっ！」

その後春斗、エリオ、キャロの3人はその辺に都合よく近くにあった中華料理店に入り、そのまま流れる的にコック達とのガチバトルが始まった。

「ラーメン20杯追加頼む！」

「あ、こっちにえーつと、チャーハンの大盛10皿を！」

「…ふ、2人とも凄いね…」

とは言っても、バトルに参加してたのは春斗とエリオのみでキャロは常人よりも少ない量をちびちびと食べていただけだったが。

その後、突如始まった無限胃袋×2VS中華料理店は熱き戦いを演

じ、遂には引き分けとなり、料理長と春斗、エリオの間に歳を越えた友情が生まれた。当然料金は支払ったが。

「ああ、食った食った」

「あのおじさん、いい人でしたね…」

「ああ、いつでも食いに来てくれだってな。普通なら二度と来ないで欲しいといわれてもおかしくない状況だったのにもかかわらず…あの店はこれから人気が出るな。勘だが」

「また行きましようね？」

「おう、だが今度はお前らが驕ってくれよ？ 年上にも一応敬意って奴をな」

「任せてください！」 「待っててくださいね！」

傍から見ればほほえましい光景のまま、彼らは談笑しながらコテージへ帰還した。

この後直ぐに春斗に不幸が降りかかることも知らないまま…。

＊

コテージside

春斗達が帰っている間に、はやてからスターズ及びロングアーチに連絡があった。

今回のターゲットのロストギアの所有者の情報、及びロストログア本体の性質。どうやらダミーを生成しながら移動していくという感じらしい。攻撃性は無いようだ。

つまりはこの町にとりあえずは危険はないということなので、皆ホッと一息ついた。

「おっ、コテージだ」

「あ、そうですね…皆揃ってます」

「やべえ、遅刻か？　これで尚更俺の命が失われる危険が高まったな…去勢事件、無断でエリオ達に中華料理を食わせ…そして遅刻…あれ、俺死んだ？」

「いやいや、そんなことで怒ったりしませんよフェイトさんは！」

「怒るから怖えんだよバーロー」

どこぞの名探偵の口癖を真似しつつ話ながらコテージへ歩いてると、向こうからフランが走ってきた。

「ん？　フランか…あれ、何だ？　俺にはアイツが死神に見えるんだが」

「そんなことはありませんよ！？　フランさんはフランさんじゃないですか！」

「いや、違うな…俺の第六感が告げている、コイツは俺の不幸連鎖のスタートの合図だと。したがって俺は——」

「はーるーとー…死んでくださあいつ！！！！／／／／／」

「タイミングよく、しゃがむッ！！」

ボキュッ！！（常人の目には見えない速度でフ란の拳が放たれる音）

バツ！（春斗が即座にしゃがんだ音）

パパパンッ！！（フ란の拳が放たれた為空氣が破裂した音）

「ううう！！おとなしく殴られてくださいですわー！！」

「何故だ！俺は全く身に覚えが無いんだが！？」

「春斗には無くても私にはあるんですの！私……わ、私がま、街中であんな、ことを……！！貴方さえいなければああ！！／／／／」

「意味が分からんがどう考えても逆恨みだということは理解できる！取りあえず落ち着け！俺は腹が減った！！」

「ええっ、もうお腹が空いたんですか！？」

「あ、ぼ、僕もちょっと……」

「エリオ君までっ！？」

中華料理店涙目である。彼らの胃袋がどうなっているか興味が尽きないが、春斗は現在死と言う名の脅威に追われているためそれどころではない。

逃げ回り、ギリギリでかわし、逃げ回りを繰り返しているとそこになのはが接近していく。彼女もまた、普段とは違う雰囲気——具体的には現在のフランと同じ雰囲気を感じていた。

「畜生！理不尽だ…あ、なのは姉！　すまんがフランを何とかして——」

「春斗？　私が見回りしてたら、“春斗”っていう名前の人が桃色の女の子と赤色の男の子を連れて不良10人以上と喧嘩したって聞いたんだけど…これについて少し、お話ししようか？」

「——さらばだっ！！」　ダッ！

「待ちなさいですわー！！」

「春斗っ！　あれ程言ったのにまた騒ぎを起こすなんて…今度こそ、ちゃんとお話するんだから！！」

そして、彼の味方は居なくなつた。

「だあああ畜生！不幸だああああああああああ！！！！！！！！」

特別な右手を持っているわけでも無い春斗だが、取りあえず魔王^{なのは}と兵器に追われているこの状況を表すには——この一言しかない、と直感で考えた結果であった。

そしてその後、フェイトまでもが敵に回って簡単に捕まり、説教と言う名の肉体言語を夜飯のバーベキューの準備が出来るまで喰らい続けたことは——お約束あり、言うまでもないことである。

「お約束とか、ふざけんじゃ、ね…え…」パタッ

しかしそれでも一応生きている辺り、彼の生命力が尋常では無いことが理解できる。だが満身創痍のようなので、バーベキューは無理かと思われたが。

「春斗さん、バーベキュー始めましたよ！」

「良くぞ知らせてくれたスバルよ。今行くぜ俺の肉っ！——っとお！？」

「わわわ、まだ傷が回復してないんですから…肩貸して差し上げましょうか？」

「むぐぐ…（体力的には大丈夫なんだが、体が安定しねえ…フランめ…平衡感覚を狂わせやがったな…？） すまん、頼めっか？」

「はい、喜んで♪」

そうでも無かったようである。それどころかスバルに肩を貸されるというおいしいイベントまで無自覚に手に入れている辺り、彼は運がいいのか悪いのか。

ただ1つ言える事は――

（…なんですよ、スバルに肩を貸されて…わ、私に言えば肩くらい…あ、私が平衡感覚を狂わせたんでしたっけ……自業自得とは言え、何だか…いい気がしませんわ…）

――フランの機嫌が、また一段階春斗の知らないところで悪くなったことだろう。

そして暫くして平衡感覚が回復した春斗は、先程の友情は何処へやらエリオ、スバルと歳の差を越えた肉の奪い合いを始め、それは蹴りあり拳ありの戦争へと参加して行った。

「…春斗さん、大人気ないです」

ちよつと苦笑しつつキャラがそういったが、まさに今大きな肉をスバルと奪い合っている春斗には全くと言っていいほど聞こえなかった。

??? side

「いやー、楽しかったのう!」

「疲れた…ん? そういえば私は休むべきではなかったのかね?」

「あ…はっ! い、いやはや、思わず妾が楽しんでしまったが…し
かしの、最後に行く所は決まっているのじゃ」

「…ほお。どう考えても忘れてそうな感じだったが、それは置いて
おこう。それは何処だい?」

道路にて、ゴスロリ服を着た巨乳の女性と紫色の髪を持つ男性が共に歩きながら漫才のような会話をしている。

女性の方が、にやりと笑って呟くように言った。

「“銭湯”というところじゃよ。妾はもう少し遊びたいから、スカリエッティ、お主は先に入ってきてはどうじゃ？きつと休まると思うのじゃが。当然妾も後で入るがの」

「銭湯、か…ふむ、分かった。君がそこまでいうのなら行って見るでしょう。案内してくれるか？」

「任せるのじゃ！ えーっと、こっちじゃこっち♪」

そして再び、早くも此方の環境に適応を始めた男女のペアも1つの行動を起こすのだった。

“任務”（後書き）

天破「ディール崇拝者諸君に告ぐ！！！！ 次回はディール様含む
銭湯イベントが光臨される！ 総員全裸で待機せよオオオオオオオ
オオオ！！！！」

崇拝者諸君「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

崇拝者A「ディール様hshs」

崇拝者B「バカ、あえてのフランにも期待だろjk」

崇拝者C「エリオ君マジ天使」

崇拝者D「やはりシグナム姐さんがいねえと始まらねえ！！総員武器を取り立ち上がれえええ！！ シグナム姐さんのあの巨乳を取り返すのだっ！！！！」

崇拝者E～Z「YA————HA————
！！！！！！！！！！」

フラン＆春斗「煩いッ！！！！」

天破「モルスアッ！！？」

春斗「何だコイツラのテンション！？バカか？バカなのか？」

フラン「というか変態じゃないのですの？」

天破「変態の編隊だよ」

春斗「おま、バカテスwwwwwwww」

天破「貴方はどの崇拝者でしょうか？出来ればC以外をご選択して
いただきたいのですがwwww」

フラン「あら、ディールは？」

天破「次回の台本読んで、恥ずかしくなって部屋にこもっちゃった」

フラン・春斗「あのディールが恥ずかしくなる内容…だどっ…！！
？」

次回に期待してくださいませ（^▽^）ちょっと百合っぽくなって
しまうかもしれませんが、もしそうなれば次回の前書きで告知しま
すので大丈夫です（何がだ

では、次回も閲覧宜しく願います^^

閲覧、本当にありがとうございました♪

“銭湯”（前編）（前書き）

（今回の話を読むに当たっての注意事項）

？取りあえず春斗の境遇に同情してやって下さい

？エリオも今回いくつか不幸が降りかかります。基本この小説における男性は、ギャグで不幸な扱いを受ける代わりにシリアスで格好良かったりします。

？思った以上に長くなりそうなので前編後編になってしまったことをお許しください。皆様お待ちかねのディールの入浴シーンも次回に持ち越しです。

皆さん

作者

（）、。∩。’（）∥∥∥∥∥∥∥∥∥@、∩。∴∴∴∴∴∴∴すい
ませんでしたッ！！！！

申し訳ない。お願いだからブラウザバッグで戻らないで下さい。

ギャグを重視しすぎてました。今回はいつにもまして短いですが、その分次回は女性風呂sideを堪能していただきたいと思います。
前半フラン、後半ディールの意味で。

今回はお色気シーンなんて少ししかありませんし、女性風呂side
eすらありませんけどね！（殴

では、どうぞ m
|
m

※8／9 追記・・・銭湯入場の際に、本気ですずかとアリサの存在を忘れてました…ッ！！　そしてティアナとスバルが子ども扱いに…マジすいません…ッ…！　修正いたしました；

“ 銭湯 ” (前編)

時間は夜、バーベキューの肉が春斗、スバル、エリオによって大半胃の中へ消えた頃。

「銭湯？ あー、あそこか」

「うん、せっかくだから春斗とフランもどうかなーって」

血で血を洗うかのごとく行われた戦争の成果といえば、おいしい肉と少々の傷。歳も考えずはしゃぎすぎて疲れた春斗は、そのまま寝ようと思っていたのだが。

「そうだな、せっかくだし行くか。他の奴に説明はしたのか？」

「うん、まあ皆完全に理解はしてないみたいだったけど…」

「そりゃそうだよな。ミッドチルダに銭湯なんて風習がある訳がねえし…経験したことのない奴の方が多いだろ」

のんびり欠伸をしながら、「着替えを取ってくる」とコテージへ戻っていく春斗。その姿に苦笑しつつ、なのはは再度フォワード陣の点呼を始めた。

「数十分経過」

「さ、出発しよか！」

まあ、数十分程度では何も起こらず、普段の調子ではやてが号令を掛ける。しかしながら任務のような堅苦しさは無く、いつものように春斗がエリオやキャロと世間話をしていたりフランがスバルとティアナに何やら打ち明けていたりなど、そういう感じであったためフォワード陣の緊張がほぐれていた。

「そーいや、なのは姉。銭湯には予約とかとったのか？」

「ううん、取ってないけど？」

「そうなのか。別にいらんお世話かも知れないが、この大人数で行くと女湯は混むかも知れねえぞ」

「あゝ、確かに…今からでも予約しといた方がいいかな？」

「でもまあ、この時間帯だし、そこまで利用してる客もいねえだろうし…居るとすればスバル達のような異世界から来た観光客位だろうし…いたとしても一人か二人位だろうから、多分大丈夫だろう。悪かったな、変な所に突っ込んでしまった」

「ううん、いいいいよ。良かった、春斗が女湯を覗きたいとか言うのかと思って思わずレイジングハートを握り締めちゃったよ」

「やべえ、一方的な勘違いで現在進行形で俺の命が失われる危険性に晒されていたらしい。フラン助けてくれ」

「ふええ！？　…し、知りませんわよバカっ！！」

「俺に味方は居ないのか…ド畜生…！！！！」

今の春斗さんの立ち位置は、ある意味自分で手に入れたようなものなのだと思います…しかしこれに言及すると危険な気がしたので、そう考えてしまったエリオは口をつぐんだ。

一向は漫才のようなものをしながら、フラフラと銭湯に向かう――
|。

??? side

「…ふむ」

紫色の髪の毛をした男が、誰も居ない大浴場でゆっくりと湯船に浸かっている。

「：ディールの紹介だったから少々不安だったが、これは確かに休まるものだ…：そういえば、日頃から忙しくて風呂など入る時間どころか考える時間すら無かったような気がする…。 そうだね…：ナンバーズには機体の洗浄として提供してあるものだったが、私専用の風呂も造るのも悪くは無いかも知れないね」

頭に暖めた四角いタオルを乗せて、男は自分の知らなかった癒しに和みつつも自分の居場所はどうやって自分専用の風呂を作るかということをゆっくりと考える。

————男湯の入り口が、少し騒がしくなってきたことにも気づかぬまま。

??? side out

銭湯の入り口side

「到着だな…で、何人だったけか」

「えーっと、私、フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん、春斗、フラン、アルフ、アリサちゃん、すずかちゃん、スバル、ティアナの大人11人とアルフ、キャロ、エリオ、リインの子供4人かな？」

「バカだなのは姉。ヴィータは子供料金で入ったほうが安上がr右の親指に超絶的な痛みがあああああー！！！」

「あたしは大人だっ！！！」

春斗は一応正論を言ったはずなのだが、残念ながら相手がヴィータだったことが災いした。彼の親指の命は既にマッハである。

「くっ、俺は正しいことを言った筈なのに…この仕打ちは無いぜ…」

「あ、あはは…と、兎に角入ろ！　ね！」

「待てなのは！　子ども扱いされたあたしへの反論は無しか！？」

ヴィータの言葉は、残念ながら隊長陣全員が彼女から視線を背けることになっただけであった。

「…春斗、今ならお前の気持ちが分かる気がする」

「ああ、その気持ちは大事に取っておけ。この世界はいつでも理不尽だからな」

「肝に銘じておく」

ヴィータと春斗の間で、共通の理不尽を感じ取った友情が生まれた。微妙な友情といえどそれまでだが。

しかし結局ヴィータは大人料金で入り、状況が改善されることはなかったのだった。

「…俺、やられ損じゃね？」

正直今更な意見であるが、これほど春斗を如実に表している言葉も無いだろう。

「あの、春斗さん」

「ん？何だエリオ」

「…此处、男女別ですよね」

「ん？ …あっはっは、そりゃそうだろ！ ……混浴だったら俺の死が確定しちまうだろうが…！！！！」

「で、ですよね！はは、はははは！」

その質問に最初は笑いながら答えた春斗だが、後半の台詞には魂と
言うか気迫が籠っている様な感じがしたエリオであった。

「んー、銭湯かぁ…楽しみだね、エリオ君！」

「そ、そうだね！ …なのは隊長たちと楽しんできてね？」

「…えっ？ エリオ君も一緒に入らないの？」

ズサアッ！（春斗が思わずコけた音）

ゴンッ！！（エリオが銭湯の壁に思いっきり頭をぶつけた音）

それぞれがそれぞれの反応で頭をぶつけたため、春斗とエリオの目に火花が散った。

「何いってんだキャロ？ お前は女。エリオは男。OK？」

優しく諭そうとする春斗だが――

「はい！ でも、良く向こうでは一緒に入ろうとしていますから！」

「……………ほう」

「わわっ、違います違います！ 自分から入ろうといったんじゃない
くて、向こうから誘われて…！」

キャロの口から放たれた爆弾発言に、嫉妬で目を光らせながらゆっ
くりとエリオの方を向こうとする。その視線に命の危機を感じたエ
リオは当然直ぐに弁明した。

「…エリオ、断言するぞ。 お前将来女関係で絶対苦勞するぞ」

「え？」

「なんでもねえ。 フェイトさーん、キャロ何とかしてください」

人生の先輩としてエリオに注意した後、自分で説得することは早々
に諦めて神頼みならぬフェイト頼みを敢行した。

が、帰ってきた答えは予想外もいいところであった。

「え？ エリオも一緒に入れればいいじゃん」

「なん…だと…？ エリオ、お前今日何かしたか？ これはその天罰とか…」

「春斗さんじゃないんですから何もしてませんよ！」

「よし、ちょっと外に來い。その言葉の真意を少し話してもらおうか。拳を使った語り合いでな」

エリオ、自爆。 春斗も違う意味での敵に回り、遂に味方が消えたかと思いきや――

「まあまあ、フェイトお姉様、キャロ？ 一応エリオも男の子なんですから、無理を言っではいけませんわよ」

救世主降臨。今のエリオにはフランが輝いて見えた。

「えー、でも…ほら！ フランさん！」

「？ えーつと…『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします』…」

尚、エリオは10歳である。即ちこの看板通りにいくと、エリオは

別に女性風呂に入っても大丈夫だと言うことになってしまう。そう考えたフランは、少し微笑むとエリオの方に手を置いて、言った。

「：諦めるのですわ、エリオ。別に私もエリオなら構いませんし」

「そんなあああああ！！」

救世主も、キャロの前ではやはりというべきか容易く陥落した。崖っぷちのエリオ。精神的な意味での死を覚悟したその瞬間だった。

「あっ！ あんなところに次元犯罪者のジェイル・スカリエッティがいやがる！！」

「「「「ツ！！？」」「」」」

ある者は次元犯罪者という単語に、ある者はその犯罪者の名前につられ——思わずデバイスを握り締めた彼女たちが、春斗が叫びながら指を指した方向へ振り向くと——

そこにいたのは、新聞をのんびりと読んでいるこの銭湯の経営主の年寄りの女性であった。

「…春斗おお——っ!!」

「あっ! エリオ君もいないっ!」

「いや…普通こんな所に次元犯罪者が居る訳が無いでしょう…せめてフェイト姉様は気づいて欲しかったですわ」

「やっぱり嘘なんだ…キャロ、さっき春斗さんもう男湯の方に逃げちゃったよ?」

「うう…一緒に入れると思ったのに…ん?」

「残念ですが、諦めるしかないですわよ。ほら、ここにいると他のお客さんの邪魔になりますし、銭湯へ入りましょう」

「この仕返しは絶対するけどね…あれ? キャロ?」

「あ、今行きまーすっ!」

銭湯の入り口 side out

男湯 side

フェイトの叫びとキャロの驚きの声が聞こえてくる。それを聞いて風呂から出た後の死の危険に悪寒を覚えた春斗だが、オロオロしているエリオを見ていられなくなったのも確かな為、彼を護れたのなら命の一つや二つ別にいいか——と危険な現実逃避で自己完結することにした。

「…よし、逃げられたな」

「あ、ありがとうございます…春斗さん…」

それにしても、とっさにジェイル・スカリエッティという名前が出てきて彼は心底安心していた。これで万が一なのはやフランの名前を出してしまったらボコされるか白けるかの二択であつた為である。

「でも、僕ジェイル・スカリエッティって人聞いたことが無いんですけど…どんなことをしたんですか？」

「んー、確か違法な研究をしていると聞いたが内容は知らん。それどころか名前を知ってるだけで顔も知らねえぞ、俺」

「あははっ、じゃあ本当に会っちゃったら春斗さんなら友達になっちゃうかもしれませんね」

「ははは、確かにな…だが俺は直感で悪そうな奴と面白そうな奴を見分けられるから、大体は分かると思うぜ」

因みにこれは嘘でも何でもなく、本当に春斗はジェイル・スカリエッティの顔を知らない。プロジェクトFなどに関わったことなどは一応知っているのだが、兄のことを調べていくうちにそこまで重要視することも無いような気がして記憶から暫く抹消していたのだった。

というか、何だか犯罪歴にあったものがほとんど管理局員の上層部辺りが行っていた研究の物であった為、『ああ、被害者か』と記憶に残ってはいたのだが。この土壇場で彼の名前が出るとは、色々な意味で俺も成長したものだ：と良く分からない自己満足に浸っていると、エリオがあることに気づいた。

「あれ？ 春斗さん、誰かの服が入ってます」

「マジか？ じゃあ先客が入ってるみてえだな」

銭湯では良くあることというか当然のことなので別段驚きもしなかったが、こんな時間に、それも1人で銭湯に入るというのは中々の銭湯好きなのか？ と春斗が予想して見るが、ただ単にたまたまこの時間入ることになっただけなのかも知れない。

というか後者の方が確率が高いだろう。

「とにかく、誰にせよ先に入ってる人がいるんならマナーは守んなくちやなんねえな。まあ一応俺がいるし、なんとかなるだろ。普通の風呂とそんなにかわらねえからな」

「はいっ」

そういった感じで雑談しつつ、腰にタオルを巻いて銭湯へのドアを開ける。

「うわぁ…」

「おお、前に来たときよりも何だか拡張してるじゃねえか。これは楽しみだな」

此処の銭湯は、アニメや漫画などなら“どーん”などと擬音が付きそうな位広かった。エリオは何やら感動なのか言葉を失い、春斗は前回来た時よりも広くなり、その上新しく出来た風呂に入れるのを楽しみにしているようである。

「取りあえず、まずは体を流してから入らないとな」

「あ、そうですね」

感動もそこそこに、それぞれその辺にあった桶を取って、湯船のお湯をすくって頭からお湯をかけていく。やはり少し熱かったが、銭湯ならこの位が丁度いい。

「つと…そんじゃ、入るか」

「はいっ！」

何回かそれを繰り返したところで、遂に風呂に浸かる 때가やって来た。まあ別にそんな大袈裟なものでもないが、エリオは六課に配属されてから男のみで風呂に入ろうとするのは始めてであったし、春斗からしてみれば今日一日だけで殺されなかった回数が既に数え切れないほどあるため、口ではどう言おうと疲労を流すために銭湯を楽しむにしている、というのが本音であった。

足からゆっくりとお湯に入り、そのまま身体全身を湯船の中に浸らせる。あまりの気持ちよさに、思わず春斗の口から「あゝあゝ…」という年老いた男性風な声が漏れたので、エリオが思わず噴出した事以外は何事も無く湯船に浸かる事ができてホッとした春斗であった。

そして、その春斗の声と彼らの身体が浸かったことにより発生した湯船の波によって、先に来ていた『先客』が動き出した。

「……ん？ 他に誰か来たのかね？」

「お？」

湯煙により分からなかったが、どうやら同じ湯船に先程話していた先客がいたらしい。良く目を凝らせば人影がある。

「つと、こんばんは。先に入っていたのに挨拶もせず申し訳ないな」

「いや、気にしないでくれたまえ。私も考え事をしていたのでね、今気づいたところなんだ」

湯煙の向こうからスィー…と紫色の髪をした、独特の目をして、少々痩せている様に見える男が現れた。そしてその男を見て、「やっぱり観光客なのか?」「そうじゃないですかね」とアイコンタクトで会話している春斗とエリオオを見て――

「…!!?」

男の黄色い目の瞳孔が、驚愕と混乱で限界まで開かれた。

「あ、ごめんなさい。僕も挨拶しないと…こんばんは、エリオ・モンデュアルです」

「俺も改めて挨拶するぜ。高町春斗だ、宜しく頼む」

「っ…ははは、いい名前だね。私は…あー…そう、ジュエル・スカエルッティだ。此方こそ宜しく」

風呂というこの場所だからこそ気づかれないが、ジュエル・スカエルッティと名乗った男の顔や体中からは冷や汗が溢れまくっていた。

何故。

どうして。

こんなところに――

（そんな馬鹿な！ 何故こんな所に管理局の、それも機動六課の魔道士がいるのかね！？ しかももう1人の男、今“高町”と……エース・オブ・エースの血筋か……？ とすると……まさかこの銭湯には……今機動六課の魔道士^{エース}達が来ているのか……！？）

引きつる頬を意識して抑えながら笑顔を作る次元犯罪者――ジュエル・スカエルッティ――否。ジェイル・スカリエッティは、全力で頭を回転させながら、この状況をどう打破するかを考え始めた。

男湯 side out

??? side

「この海鳴饅頭もらおうかの。後このキーホルダーも…」

「はい、毎度ありがとうございます！ お嬢さん綺麗だからオマケ
しますよ」

「おお、助かる。礼を言うぞ、ありがとうの」

此方は紫色の髪の男と先程別れたばかりのゴスロリ服を着たアホ毛
ジェイル・スカリエッティ
のある女性。　どうやら誰かへのお土産を買っているようだ。スカ
リエッティを至る所に連れまわすなど好き勝手な行動が目立つ彼女
だが、それでもしっかりと自分の家族のことは考えている辺り素晴
らしい女性だといえるだろう。

既にその手には大量の買い物袋。どう考えても第三者視点から見れ
ばそれは165cm弱の女性が持てる量ではないのだが、彼女は疲
れる様子もなく軽々とそれを持っている。それどころか何が嬉しい
のかスキップをして坂道を登ったりする……のだが…。

スキップするたびにそのアホ毛と、身長に似合わない豊満な胸が揺
れるもんだから彼女・妻と一緒にいる男はそれこそ必死にその現実
から目を背けんとしていた。　やはり誰でも彼女や妻は怖いが揺れ
る胸＝ロマンという考えが強いのだろうか。

『…あなた？　ちよつとあつちに来てくれないかしら。　お仕置き
があるのよ』

『待て、誤解だ桃子！　私は決して彼女の揺れる胸を見たりなどは
してい
n—————』

しかし中には目を背けるのに失敗し、現実どころかこの世から旅立
ってしまう者もいるのだが、世界とは非情である。　所詮は元々妻
がいるというリア充な者、ましてやその妻が綺麗であつたあらば同
情などすることも無いというのがこの世界の真理だからだ。　いいや
違ふ、決して作者の個人的な感情は一切含まれていない。

更に観察してみると、独り身の男には天と地のような違いがあるの
が分かる。　卑しい笑いを引っさげて隠そうともせずジロジロと見
る輩、見ないよう我慢しているが顔を赤くしつつもチラチラつと見
てしまう輩。　別に彼女は気にしないようであつたが、前者の男はそ
んなことを女性の前でするから彼女が出来ないんだと言つてやりた
い物である。　余談になるが彼女の的には後者の方がそそり：タイプ
らしい。

そして彼女が注目されるもう1つの要因はその服装である。　服装
としては半袖にスカートなのだが、上半身を見れば胸元が大きく開
いていて、滅多に見ることは出来ないであろう深い谷間が顔を覗か
せている。　スカートは膝ぐらいまでしかない上に前述したように
気まぐれでスキップすることがあるため下着が見えるか見えないか
の瀬戸際という、何とも（別の意味での）男のロマンが凝縮された
女性である。　そっちの趣味を持つ男性には堪らないだろう。

「ふむ、この位かの：これだけあればウーノ姉上やクアット姉上もどうにか買収できるはず…」

そしてこの一言さえ無ければ家族思いの女性で通っていたのだが、残念ながらそうも行かなかった。勿論、本当の意味での日頃から感謝をこめて買ったのだがやはり怒られるのは嫌であった。

（さて、これは隠しておかなければの）

自分の力を使えば、誰の目にも止まらないところへ簡単に隠せる。やろうと思えば能力を使って地中にだって隠せるのだが、流石にそこまでする必要はないような気がする。

そう考えた女性は、素早く誰もいない路地裏へ入り込むと跳躍してビルの屋上に着地する。しかしそこにタイミングを合わせたかのように懐中電灯の光が自分を照らしたことで、思わず彼女は舌打ちした。

「誰だ!？」

このビルを見回っている警備員らしい。声から男と推測した女性はニヤリと笑うと、面倒なことにならないうちに買い物袋を置いて素早く男に接近した。

「っ!？」

「…、」

素早く相手の男の歳を肉体年齢・精神年齢などから計算し、わずか5秒で22歳程度だと予測し、再び笑う。

「のう…?」

「…!？」

まずは抱きつき、その豊満な胸を押し付ける。

その後潤んだ瞳で、相手の目を正面から見ると、身長差から自然と上目遣いになる。

そして、色っぽい声と子供のような声が合わさったような不思議な声で、彼女は泣きそうな顔を作りつつ。

「…妾の言うこと…聞いて、くれないのかの……………」

と、一言。

それだけで、いきなり男の身体から力が抜け、その瞳から光が消える。

「…ふ、容易いものよ」

それを確認した女性は、抱きつくのを止めて少々距離を取る。その顔に涙や泣きそうな顔など微塵も無く、今は不敵な笑みが張り付いているだけだ。

「もう一度聞くのじゃ」

悪戯っぽく笑い、一指し指を口元へ持って来てから、彼女はウィンクしながら言った。

「妾の言うこと…聞いてくれるじゃろ？」

その言葉を聞いたと同時に、警備員の男はディールに跪いてこう言った。

「仰せのままに、ディール様」

今ディールと呼ばれた女性の為だけにある希少能力。

相手の目を見ながらでは無いと発動できないが、『自分を見て動揺した人間』を自由に操れる洗脳系の希少能力。

ただしこの場合の『動揺』というのは理性に揺らぎがあった場合のみの判定となる為、大半の男は引かかるだろうが超朴念仁な男だったり、まだそういったコトを知らない子供だったり、そもそも“性欲”という概念が存在しない男だったりすると引つかからない。

一応女性にも使えるが、そう簡単に“そっち系”の趣味を持つ少女はいない為まだ試したことは無い。

「ふふふ、本当に容易いのう。男というものは…これを使って落ちたことの無い男はまだいないんじゃないかな。あ、そうじゃった、命令せねばの…その荷物を管理しといて欲しいのじゃ。傷1つ付けるでないぞ。良いな？」

「はっ」

「それでは頼んだぞ。あ、洗脳されていることも気づかれてはならんからな」

そう言って、女性――デイルもまた動き出す。

「買い物も終わったことじゃし、そろそろ妾も銭湯というものに行
って見るかの。スカリエッティが念話をしてこないところを見ると、
念話を忘れるほど寛いにいるということじゃろうし……ふふっ、楽し
みじゃ♪」

ビルの屋上から、1人の女性が黄色い閃光を残して、消えた。

それは音も、証拠すらも残さず――後はただ、洗脳された哀れな
男がデイルの荷物を見つからないように屋上の更に分かりにくい
場所に隠している姿があっただけであつた――。

“銭湯”（前編）（後書き）

天破「後半がデイル無双だった。反省も後悔もしていないが、読者の皆さんには本当に悪い事をしたと思う。すいませんでした」

フラン「作者、ちょっと疑問に思ったのですけれど」

天破「？」

フラン「何故私には“艶やかなる誘惑”が使えないんですの？」

天破「いや、それは希少能力だから。人には向き不向きもあるわけだし」

フラン「ちょっとその向き不向きについて、どの辺なのがそうなのか外でお話しましょうか」

今回は遂に女性風呂side!! 全裸待機で、いいんじゃないかな↑

春斗「あれ、作者は？」

フラン「さあ？ 夢の島の何処かにいるとは思いますが」

春斗「さらば作者、安らかに眠れ」

次回もお楽しみに♪

“地球”（中編）（前書き）

この小説は、18禁ではありません（重要）

すいません、何の事だか分かりませんよね。それよりも何故中編なのか説明しろって感じですよ。

デイルの下りが長すぎて、ロストログアまで入りきらなかったんです。もうその辺は皆さんの情熱が私の指を天元突破させたってことで勘弁してください。

では恒例のこの話を読むに当たっての注意事項！

- ・フラン可愛いよフラン
- ・デイル様マジデイル様
- ・YA—————HA—————！！春斗を○せえっ！！
- ・ラストはギャグ的な意味でのスカリエッティ無双です。スカさんが嫌いな方はお気をつけて；
- ・デイルによる被害者Ⅱはやて、スバル、なのは
- ・春斗とフランに本人たちも知らないところで進展が…！？↑
- ・ちよつと百合要素が入っていると感じるかも知れません！ご注意ください。

意味分かりませんね。私も分かりません。

今回長くなりました…読み難い上に駄文ですが、ご容赦ください m

では、どうぞ^^

“地球”（中編）

時間は、春斗とエリオが銭湯に自分達以外の誰かの服が入っているのを発見した頃にさかのぼる。

女性風呂 side

此方も銭湯自体は『どーん』と擬音が付きそうなほど豪華であり、なのは達のような大人数であっても持て余す様な場所だった。このことから、わずか3人しかない男性風呂がどれだけ彼らがその空間を持て余すかがわかるだろう。

「これだけ広ければ一杯泳げるよ、フエイト！」

「いやアルフ、およいじゃ駄目だからね？」

「えゝゝゝ？」

「そんな不満そうな顔されても…スバル？何で貴方もショック受けたような顔になってるの？」

「いや、あの、ごめんなさい！ アルフさんと同じ事考えてました！」

「……………」

「スバルさんらしいといえばスバルさんらしいですが…」

スバルのまさかの告白に、フェイトもフランも苦笑で返したので彼女は少し恥ずかしそうに俯いた。

「だ、だって広いと泳ぎたくなるじゃないですか！ ね、ティア！？」

「私に振らないでよ！？ 泳ぎたくならないわよ！」

「そ、そんな…！ 春斗さんなら乗ってくれるところなのに…」

「確かに乗りそうですわね…：…っと、早く入りましょう？ このまま入らなければせっかく来た意味がありませんわ」

「あ、はいっ」「ああ、そうでしたっ！」

フランに促され、ゆっくりと熱い湯船の中へ身体を入れていく2人。やはり男性風呂sideとは違って、その行動が色っぽく見えるから人間の目と言うのは不思議である。

「はあ…気持ちいいですわね…」

その横では、綺麗な肌にお湯を掛けながら湯船の中で足を崩して座るフランがいる。なんと言うか、元々顔が整っているのもあって扇情的だ。スバルらとはまた違った魅力があるといえいいだろうか。

暫くは話すことと言ってもこの銭湯の感想位で、それぞれゆったりと疲れを癒すべく湯船に浸かっていたのだが、やはりこれ程女性が集まれば会話の内容は自然と決まってくる。

「さて…皆、良く聞き？」

「「「？」」」

「——これからフランが、春斗のどういった所が格好いいかを言ってくれるそうや」

「「おお」」

「「！！？」」

そんな話は聞いてない。フランが思わず叫んだのは言うまでも無いだろう。

「はやてさん！いきなり何を言ってますの！！？」

「え、話さへんの？」

「如何して話すのが当然見たいな口調で話してるんですか！春斗に格好いいところなんて…」

風呂で体温が上がったからか、それとも恥ずかしさからか。頬を赤く染めたフランが、恐らく『ありませんわよ』とでも続けようとしたところでフリーズする。

「…か、格好いいところなんて…」

その目は右に行ったり左に行ったりで、顔も徐々に赤くなってきている。体温が上がったから赤くなっているという言い訳はもう通用しないだろう。

「あ、あんな、バカで、鈍感で、私が告白されても何も感じない男に…格好いいところなんて、ありませんわよ…」

どう考えてもその様子から見て、はやての言う『格好いいところ』という言葉に心当たりがあったのだろう。遂には恥ずかしさが頂点に達したのか、高い身長を器用に曲げて、口まで湯船の中に入ってしまった。

そしてそれを見たはやてがにやりと笑い、

「ほほお、格好いいところが無いんやな…?」

「あ、ありませんわよ」

「それなら格好悪い所はあるんやな? 言ってみてくれへんか?」

「そ、それならいいですわよ? えっと…」

話題がそらせて安心したのか、顔の赤みも引いて急に饒舌になるフラン。それがはやての罨とも知らずに…

「は、春斗は勉強嫌いでもいつも私が傍にいて逃げないように監視し無いと駄目なんですわ。それに好き嫌いも多くて、そのくせ味に煩くて…いつも私が作りに行つてあげてるんですよ? それに、この前町を歩いてたら知らない女の人と歩いてて…春斗によればなのはさんのファンでなのはさんのことを聞かれていたらしいですが、アレは春斗を狙っている目でしたわ。いつも春斗は鈍感だし、女心が分かってないので、ほとほと困つて…」

「…ほお…それは裏を返せば、『いつも春斗と二人きりで勉強して、いつも春斗に自分の手料理を食べさせてあげてて、しかも春斗が鈍感なのに困っている』ってことやなあ…?」

「そ、そうですけど…あ…」

この瞬間彼女は自分の話した言葉の意味をようやく正確に自覚し：今度こそトマトの如く真っ赤になった。

「ち、ちち、違います！違いますわよ！ 今のはなし！ 書き直しですわ！」

「いや、それはありえへんから：書き直してなんや書き直して」

「い、いや口から咄嗟に：そんなことどうでもいいですわ！ いいですか、誤解しないで下さいね？！春斗のことなんか好きでも何でもないんで——」

相変わらず顔を赤らめつつも、ニヤついているはやてに釘を刺そうとした瞬間、男湯の方向から声が響いた。

『うおおい！？何故にキャロがここにいる！！？』

『キャ、キャキャキャ、k y y y y y y y…』

『エリオ落ち着け！ キャロ！ これ以上この場で今お前の身体を覆っているタオルを外すなどと言う愚行を犯すな！エリオが死ぬ！』

「「「……」」」

取りあえず、向こう側がカオスになっていることだけは理解できた

女性陣。

暫く騒いでいた男湯の方だが、段々春斗の突っ込みとエリオの壊れたような声が聞こえてこなくなってきたことから事態は集束したと思われる。どう集束したのかどうかはわからないが。

「ああ、なるほど。誰かいないと思ったらキャロでしたか…」

向こうのカオスな状況を受け取って、幾分か冷静になったフランが女湯を見渡しそう呟く。

「あはは…でも、大丈夫かな？向こうにいて」

「心配なら念話してみてはどうですか？春斗には通じませんが、エリオとキャロは出来たかと…」

「あ、そうだね」

苦笑したフェイトが、フランの提案にしたがってゆったりと湯船に浸かりながらエリオへと念話を飛ばす。

（エリオ？ 聞こえる？）

（あ、フェイトさん！？ ああ、湯船がキャロに入ってきてきて男湯に

っ)

(落ち着いて、言葉になってないよ)

どうやら落ち着いたのは身体のみで、心のほうはまだパニック状態らしい。

(す、すいません…)

(えと、キャロが入ってきたんだよね？ 春斗が叫んでたから間違いないと思うけど…)

(はい、その通りです…助けてください…春斗さんに完全に見捨てられました)

その言葉には彼の切実過ぎる思いが籠っていたのだが、エリオの子供としての恥ずかしさを未だに完全には把握していないフェイトはそれに気づかず。

(いいじゃん、そのまま一緒に入っちゃいなよ。流石に春斗もキャロなら変な事言わないだろうし)

(えええ!?)

その言葉は紛れもなくエリオ終了の知らせであった。

（だって、春斗とエリオ以外にはいないんでしょ？男湯？）

（…っ！いやいや、実はいるんです！　…今春斗さんと良く分からない話題で盛り上がってますが…20歳よりちょっと上っぽい男の人が！）

（あ、そうなの？）

その『エリオと春斗以外には誰もいないだろう』発言を好機と見たエリオがここぞとばかりに畳み掛ける。子供なりに頭脳をフル回転させ、自分達以外の男性が入っていることが分かれば見逃してくれるかもしれない。そう考えたのである。

そして女湯が誰もいなかったからだろう、まさか男湯に誰かいるとは思わなかったフェイトだが暫く思考して、再びエリオに向けて爆弾を投下した。

（うーん、ちょっと心配だけど春斗がいるんなら大丈夫だと思うし…何も心配は無いよ、エリオ。キャロとの親睦を深めるいい機会でしょ♪）

（親睦を深めるステップが飛びすぎですよー！）

彼の言うことは最もだ。確かに最初はちょっとしたハプニングがあったにしろ、まだ彼らは少し皆の前で話したり雑談するのが丁度い

位だとエリオは思っている。それが階段を1段、2段所か5段位飛ばしていきなりお風呂である。しかもお互い裸で。

10歳頃になると異性……というか『性』そのものを意識し始めることがあるというが、やはり強ち間違っていないのだろう。現に今エリオはキャロの方を見ないようにするので既に精一杯である。

（エリオは男の子なんだから、キャロを引っ張ってあげないとね）

（会話が繋がってるようで繋がってませんって！）

「フェイトお姉様、今宜しいですか？」

（あ、ごめん。それじゃあ頑張ってるね！）

（だから何をですか！？フェイトさ——）

エリオの切実な声くフランの声。彼女も無意識なのだろうが、今の瞬間にそんな公式が成り立ってしまった。エリオには黙祷を捧げるしか手は無いだろう。

『いやいや！ 助けてくださいよ！』

『エリオ君、いきなりどうしたの？』

『ああああキャロ、こっち向かないでっ!』

そんな声が男湯の方から聞こえてきたとか何とか。

「ごめんねフラン、何だった？」

「向こうに露天風呂があるらしいので、一緒に入りませんか？
そろそろ私ものぼせて来ましたし…」

「そういえば、フランは昔からのぼせるの早かったね」

「なので、最後まで露天風呂でどうでしょう？」

「うん、一緒に行こう」

「あ、私も付いていいですか？」

「あら、ティアナ。大歓迎ですわ。一緒に行きましょう♪」

そんな男湯のカオスな光景も知らず、彼女達は更なる娯楽を求めて
露天風呂へと歩いていった。

女湯 side out

男湯 side

さて、ここでキャラが男湯へ入ったばかりの彼らの状況を確認してみよう。

「さて：フェイトさんからの処刑は、全治5ヶ月程度で足りるだろうか」

「キャ、キャ、キャラ、如何してここに!？」

「：（春斗君の台詞からしてフェイト・テスタロッサもここにきているのか：というかキャラ・ル・ルシエ、竜の召喚師ではないかね：何故此処に？） ふむ：処刑だとか全治5ヶ月とか明らかに危険な単語を呟いているところ申し訳ないが、春斗君、君の知り合いかね？」

「ああ、まあ：知り合いの女の人の娘だ」

実際は娘では無いのだが、養子云々を説明するとややこしい上に面倒なことこの上ないと考えたので省いた春斗であった。

「で、キャラ。何故此処にいる？ お前は女。俺達は男。OK？」

風呂に入る前も見ただことがある光景が再び展開される。違う点があ

るといえば、紫髪の20代後半程度の年齢と思われる男性——ジュール・スカエルツティ——否、次元犯罪者ジェイル・スカリエッティがいる点であろうか。

スカリエッティが何故こうもリラックス（心境は少々複雑だが）した感じで彼らと話しているかといわれれば、まず自分の顔を見ても通報する様子が無かったのを不審に思ったのが始まりである。

念話で高町なのはやフェイト・テストロッサ等の隊長各に連絡され、既に風呂の外で待ち伏せられている線も考えられたが、それにしては動揺と言いか何かを隠しているような動作が全く見られない。春斗はともかく、まだ子供のエリオまでそんな感情を隠せるとは思えない。

決め手はキャロが入ってきたことだった。彼が仕入れた情報では、フェイトはキャロとエリオを実の娘と息子のように大事にしているとのことである。万が一の場合もあるので本当に自分がいるかどうか確かめるために入ってきたという考えが頭を掠めたが、それならサーチャーなどを飛ばせば済む話である。

結論として、現在男湯に入ってきている機動六課の魔道士達は——ジェイル・スカリエッティの顔を知らない、ということになる。

まだ気を抜けない状況ではあるが、デバイスを携帯している様子も無いので今はリラックスすることにした。普通次元犯罪者のみならず犯罪者というものは、警察（管理局）が近づけば何とかして逃げようとするものだがそれをしないあたり彼が変わり者であることが伺える……と思う。

「あれ？ 春斗さん、その人は？」

「ああ、この人は…」

「ジュエル・スカエルツティだ。宜しく頼む」

「はいっ！ キャロ・ル・ルシエです！」

「はっはっは、元気な子供じゃないか。 親の顔が見てみたいね」

「止めとけ。 あの人のことだ、キャロに付く男は数秒のうちに闇に葬られるに違いない」

「…その女性は暗殺者か何かなのかね……？」

ちよつとフェイトの事が分からなくなったスカリエツティであった。

「つて、何和んでるんですか！ キャロ、男湯に入ってきてちゃ駄目だよ！ 早く戻らないと…」

「ううん、大丈夫だよ！ ほら！」

キャロの指差す方向を見ると、先程エリオを追い詰めた例の看板が見える。 一体何を言いたいのかと不思議に思ったエリオ達だが、スカリエツティが思いついたように言った。

「ああ、なるほど…『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします』だが、逆に11歳までなら女性でも男湯に入って

いいということなのか」

「はい！ 受付の人にも許可をもらってきました！」

「その行動力に俺は完敗だ。 エリオ、諦めろ。 お前はキャロには勝てない」

「そんなあっ！？」

「ジュエルさん、他の風呂に行こうぜ。 若い二人を邪魔したら行けないだろうし」

「ふむ、分かった。 大人は大人、子供は子供で出来る話もあるだろうしね。 まあ、二人ともゆっくり休んでくれたまえ」

「ちょっと！？ 春斗さん、見捨てないで下さい！」

「離せエリオ！ もはや事態は俺の手には負えない！ 大丈夫だ、お前らはまだ子供だから間違いは起きないと信じている！」

「間違いって何ですか間違いって！？」

「エリオ君、ほら露天風呂があるよ？ 行こ？」

「わあああ！？ キヤ、キャロ！ まだ僕髪の毛も洗ってないから、その後で…」

「あ、じゃあ私が洗ってあげる！」

「…え」

エリオ、自爆。

「春斗さん、ジュエルさん、助け…」

「あゝ、この泡が出る風呂気持ちいな」

「この電気が流れると言う風呂も中々だ…身体が解れるようだね」

「駄目だ…！ 完全に見捨てられた…！」

「ほら、エリオ君！ 此処に座って、洗ってあげるから♪」

そしてこの数分後、フェイトからの念話が入り…現在に至る。

男湯side out

露天風呂side

「ふう…良いお湯だね」

「外のお風呂っていうのも風流ですわね」

「はい…何だか和みますね」

此方はティアナ、フラン、フェイトの3人が浸かる露天風呂。まあなんと云うかこの3人が並ぶと…持つ者と持たざる者の違いがはつきりするとか…。

「……………」

「フラン!? どうしていきなり負のオーラを纏い始めたの!? 余りの力にお湯が振動してるよ!？」

「いえ…、何故か誰かを可及的速やかに殺さなくてはなら無い気がして…」

「結構危険な考えだよそれ! 落ち着いてフラン!」

「…きつと春斗ですわ…：：：：：銭湯から出たら本気の一撃を2〜3発は打ち込まなくてはなりませんわね、これは…」

「春斗さん…今回ばかりは少し同情します」

謂れの無い罪で、また1つ尊い命が消えようとしていた。

『…っ!』

『どうしたのかね?』

『分からん…分かんが可及的速やかにこの銭湯から逃げた方がいい気がする…!』

『一体何があった!? 落ち着きたまえ! そしてその格好で逃げれば捕まってしまうと思うのだが!?』

男湯でそんなことがあったとかなかったとか。

「冗談ですわ…多分…」

(…これ多分フラグ立ったなあ)

「ティアナ? そんなこの世界の真理を悟ったような顔をしてどうしたの?」

「い、いえ、なんでもありません!」

フェイトの言葉は当たらずも遠からずなのだが当然この場では触れないこととする。

「…で、さ。フラン」

「何ですか? フェイトお姉様」

「さっきはやてが言ってたこと、本当なの？」

「――」

まさかこの場でもその話題をぶり返されるとは思わなかったフランは暫しその言葉の意味を考えて：再び湯船の中に顔を埋めた。

「：フェイトお姉様までそんなことを：／／／　だから、私は、春斗のことなんかなんとも思ってたませんって！」

「でも、さっきの様子を見る限り：好きか嫌いかは別として、格好いい所はあるんだよね？」

「あー、えーと、それはまあ……」

「それに、一緒にサーチャーとかを設置していたときにも春斗さんは自分の物だって言っていましたしね」

「ティアナ！　何で此処でそれを言うんですかっ！／／／」

「：へえ：それは少し詳しく聞きたいなあ……」

「：ふえ、フェイトお姉様？　目からハイライトが消えてますわよ？」

今度はフェイトから負のオーラが立ち上り始める。　それを見て、

もしかしたら負のオーラって伝染するんだろうか…と彼女らしくも無い変なことを考えてしまったティアナだった。

「で、ですからね、フェイトお姉様。春斗の為にも説明させていただけますが、私は春斗のことなんて何とも——」

そんなフェイトを見て春斗への危険を悟ったフランが、彼の為にそして自分の為に色々と説明しようとした、その時。

ガラッ

「わあ…：凄い広いお風呂だね、エリオ君」

「そ、そうだね…：／／／」

「あっはっは、もう諦めろエリオ。人生時には死を覚悟すr…：違った、諦めることも大切だぞ」

「いや、どういう間違え方ですか今のは…っ…て…？」

「んあ？ どうしたエリオ、さっさとはいらねえと湯冷めしちま——」

「「…」」↑フェイト、フラン、ティアナ

「あ、フェイトさんにフランさんにティアナさんだ！」↑キャロ

「「…」」↑春斗、エリオ

時が止まったかのように、キャロ以外の全員の動きが停止する。

当然理由は——書くまでも無いだろう。

「…よし…状況を整理するか…」

春斗がおもむろに呟き、現実逃避とも呼べる状況整理を始める。
彼もまた、脳の処理速度が追いついていないのだろう。

「…目の前にフェイトさん、フラン、ティアナ…此方にはエリオ、
今まさに湯船に浸かろうとしているキャロ…そして今思い出してみ
れば混浴と書いてあったような気がしなくもないこの露天風呂…つ
まりこの状況から導き出される、俺がすべき行動は…」

そういうと、春斗は自然な動作でフェイトらに背中を向けてエリオ
の方を叩いた。

「エリオよ」

「は、はいっ!？」

「俺の部屋のベッドの下の金庫の中になのは姉の目を潜り抜けて生き抜いてきた聖書^{エロ本}がある…ヴァイスに渡してはくれないか。そして伝えてくれ、『高町春斗は男のロマンの為に散った』と」

取りようによっては遺言に聞こえるのは気のせいではあるまい。

「さて、と俺は…」

「…春斗…何処に行くんですの…?」

「…なんだフラン。別にかまわないだろ?俺が何処に行こうと」

「…見ましたわね?」

「何も見てねえ。俺は何も覚えてねえ」

「見ましたわね?」

「何も見てない。全知全能の神に誓って俺は何も見てn」

「皆様の胸の大きさはどうでしたか?」

「フェイトさんはF以上、ティアナはC〜Dの間、フランはA A〜

Aだな、じっちゃんの名にかけて間違いねえ」

気持ちいい位の即答であった。取りあえず春斗は全世界の金田一ファンに謝ったほうがいいと思う。

「…っ！！／＼／＼／＼ こ、のッ…ばかはるとー！！！！！！」

「しまっ……………バカ正直に答えちゃった…！ この高町春斗、一生の不k————」

ドスッ！！（春斗の鳩尾に正確にフ란の拳が入った音）

…ド サッ（春斗が一瞬で気を失い倒れた音）

さて、いつもならこの状況で春斗が不幸になるといういつものオチがつくところだが…残念、今回はこれだけでは終わらない。

「はあ、はあ……………あ…っ！？」

ここで、もう一度この状況を整理してみよう。

此処は銭湯である。いつものように春斗たちは服を着ていない、当然フ란や春斗もタオル一枚である。

そして銭湯に来る大体の男性客は腰にタオルを巻いていることが多い。巻き方はそれぞれだが、今回春斗が持ってきたタオルはどうにも小さかったようで、彼の巻き方では押さえて無いと直ぐに落っこちてしまうような感じだった。

…もう、お分かりだろうか。　そんないろんな意味でのギリギリを維持していた春斗が気を失い仰向けに倒れてしまったのだとしたら…どうなるのかを…。

「…あ……ああ…っ／／／／／」

「え？……ってうわぁっ、春斗さぁあん！！？」

最初に気づいたのは当然のようにフラン、そしてその次にエリオ。

あまりの“光景”に頭が追いついていかないらしいフランだが、顔を真っ赤に染めながらも何故か“それ”から目を離さない。

そしてそんなフランに気づかないまま慌ててタオルを腰に掛けるエリオ。　彼とて少年ながら異性にそれを見られてしまうことの恥ずかしさを知っている。…ただ、子供と大人の“それ”には大きな差があることを知ったのもエリオは初めてだった。

その点では春斗も色んな意味で役に立ったのかもしれないが、もっと別のところで役に立って欲しい。　いろんな方からの切なる願いである。

「…」

「…」

そして腰にタオルを掛けてから、ふとエリオが上を見上げるとまだ顔が真っ赤のフランと目があつた。

「…見ましたよね」

「見てませんわ」

そして先程と立場が逆転した。 いや、10歳児に追求される19歳の女性もどうかと思うが。

「フランさん、見てましたよね？顔真っ赤にしながら」

「いいえ、見てませんわ、あ、あんなもの覚えてませんわ！／／／／／」

「今自白しましたよね?! 結構大胆に!」

「はっ…いや、いや見てません! わ、私が見るわけが無いでしょう! ? 直ぐに目を逸らしましたわ!」

「本当ですか?」

「勿論ですわ!」

「なるほど…」

「…な、なんですか、エリオ」

「…本音を聞いても宜しいですか？」

「……い、色々な本で見るよりも…大きかった、ですわ…／／／／／
／／」

「……フランさん…」

「………はう……／／／」

パタッ（フランが遂に気を失い倒れる音）

そして兵器としての頭を持ってしても遂に処理が追いつかなくなっ
たか、顔を真っ赤にしたまま気を失って倒れてしまった。彼女の場
合、想像以上に春斗のが大きかったのと純真無垢なエリオの瞳に責
められるような感じで見つめられるのが耐えられなかったのかもしれない。

それを聞いて（彼女達も起きたことを把握し顔を赤くしていたが決して見ては居ない）、取りあえず春斗を運ぶ……のは後回しにしてフランの介抱から始めることにしたフェイトとティアナだった。

神の気まぐれにも程があるのだが、皮肉にもこれで起動六課所属の“兵器”が全て気を失ったことになる。：気を失った理由は到底話せるものではないが、ともかくこれで“兵器”か“人間”かを区別出来る者がいなくなったのである。

そんな時：運がいいのか悪いのか、銭湯の前に1人の女性が現れた。

露天風呂 side out

銭湯入り口 side

「…到着…じゃの」

成人というには少々小さい身長を持つ女性――ディールがそう溢したのは、丁度フランが倒れてから10分程が経過した後だった。

「スカリエッティからは相変わらず連絡はないから…楽しんでるんじゃない？　もし何かあったりとかすれば大変なことになるんじゃないが…主に妾とスカリエッティ本人が」

ならば何故銭湯を紹介したのか。

「地球といえば娯楽、娯楽といえば銭湯…と知り合いに聞いたのじゃ」

あらゆる意味で間違った情報だ。　銭湯は確かに娯楽の1つだが、娯楽＝銭湯とはどういうことなのだろう。　彼女の交友関係が気になるところである。

「確か、何処かの世界の王とか言っておったかな…まあこの話はいじやろ。　というか妾は誰に話しておるんじゃない？　…少し疲れておるのかのう…早く帰って休むとするかの…」

現在ディールは、帰宅した後に待ちうけるであろう説教のことを完全に忘れていた。

「さて、まずは受付を…っと、うん？」

そして銭湯の暖簾を潜り：いきなり首をかしげた。

番頭がいないのだ。 受付に誰も居ない。

「おかしいのう、誰も居ないというのは：あ、これを鳴らせばよいのか」

誰も居ない受付にあるチャイムを見つけ、指先で押す。『チリンツ』と軽快な音が鳴って暫くすると、何故か男湯のほうから1人の女性が出てきた。

「申し訳ありませんお客様、お1人ですか？」

「うむ、妾は大丈夫じゃが：何かあったのかの？ 今男湯の方から出てきたようじゃが：」

「ああ、えーと：その：男性のお客様が露天風呂で倒れてしましまして、先ほどまで救護室でお世話をしています：／／／」

何故そこで顔を赤くするのか少し疑問に思ったディールだが、“銭湯”と“お世話”というワードからぴんと来た。

「ああ、なるほど。理解したのじゃ。そういうことなら仕方あるまい」

「そ、そうですか。それは何よりです」

「で？」

「…えっ？」

「…どうじゃった？」

「…彼氏より大きかったです／＼／＼」

どうやらその女性はその男性の大切な物を見てしまったらしい。

その真っ赤になった顔を見たディールは更にこの女性を弄りたい衝動に駆られるが、何とか自粛した。

「くっくくく、お主も中々やるのう。まあそれは置いて…いくらになるかの？」

「あ、えと…大人料金ですので…」

提示された金額は全く問題ないものだったのでその場で払い、ついでにタオルやシャンプーも買った。少し顔が赤い女性に『ごゆっくり』と言われて少し笑いながら頷き、女湯の暖簾を潜って…

「…おや、たくさんあるのう」

どうも10人以上の衣服が入っているのが分かった。この時間にこんなに来るものなのかと疑問に思い、引きかえして聞いてみれば、どうも団体客が来ているらしい。

団体客なら纏りもあると思うし、大丈夫だろう…そう考えたディールは、伝え忘れたことに謝罪する女性に対し気にしてないと告げて再び女湯へ向かった。

「ふふ…楽しみじゃな…どんな客がいるかの？」

服の止め具を慣れた手つきで外して、真っ黒なゴスロリ服を床へ落とした後に開いていた籠へと投げ入れる。

「…ん、シャンプーとタオルも持ったことだし…入るとするかの」

そう呟き、どんな客が入っているのか楽しみにしつつ、彼女がその扉を開けた。

「…おお、なかなか広いの…」

銭湯 side 改めデイル side out

女湯 side

ちよつとした（？）事件はあつたが、改めて露天風呂に浸かつているフェイト、ティアナも含め全員がゆったりと湯船に浸かり、日頃の訓練や出動の疲れを落としていた。

一部、巨乳に敵意を光らせてる者やあわよくばその胸を揉まんとする者もいるが、此処ではあえて拾わない。

何はともあれ、何事も無く日ごろの疲れを癒していた———その時だった。

女湯の扉が開き、こんな声が聞こえたのは。

『…おお、なかなか広いの…』

「（一般客！？　やばっ：アルフ、耳と尻尾隠してくれんか！？
その他の面子も魔力を隠すんや！　絶対に不審な様子を見せたらアカンで！」

「「（了解！）」」

まさかこの時間に客が入ってくるとは思わなかったはやては面食らうが、そこは機動六課部隊長。直ぐに全員に念話で指示を出して隠し通すことを命じる。　命じた後に魔力を隠す必要は無かった気もしたはやてだが、念には念を入れたことにして黙った。

『～♪』

問題の女性は鼻歌を歌いながら湯煙の中を此方に近づいてくる。

『問題』ということでもないのだが、万が一自分達が魔道士だとバレたらややこしいことになる。場合によってはミッドチルダで記憶を消さなくてはならないかもしれない。　そう考えたはやて達は、ならべく不審がられず『一般客』を装うとして――。

「…ん？…おお、奇遇じゃのう。　あのエース・オブ・エースや夜

天の王率いる機動六課の面々と一緒に風呂へ浸かれるとは…もしや、任務の最中かの？」

「「「へ…？」」「」」

驚いたような顔をして、腰まである黒髪に一本のアホ毛を揺らす女性――ディールはまさかの自分達の天敵との邂逅に、顔とは裏腹に状況を楽しみ始めていた。

（まさか、機動六課も此処に来てるとは…何かのめぐり合わせかう？ まあ良い、相手は妾が兵器であることもスカリエッティに与することも知らぬじやろうから、このまま入るとするか…）

「あの、貴方は私達を知ってるんですか？」

一瞬で自分達の正体を見破られたはやてが、少しの警戒を持ってディールに問いかける。その言葉にディールはクスッ、と笑みを溢し、

「そりゃ知つとるに決まっておろう。管理局全魔道士の憧れであり象徴、“エース・オブ・エース”高町なのは。その幼馴染“金色の閃光”フェイト・テストロッサ、同じく“夜天の王”八神はやて。ミッドチルダの週刊誌を読んではこの位のこと子供でも知ることが出来ると思うぞい」

「…えーと…もしかして…」

「そうじゃよ。妾もお主たちと同じく、ミッドチルダから来た旅行客じゃ。此処で会ったのも何かの縁じゃ、宜しくのう♪」

「…えええええ!？」

そんな偶然が普通あるものだろうか。はやてが驚きで叫んだのも無理は無いだろう。

「…あ、思い出した! 確か、ラース君を届けてくれた…」

「そうじゃよ、改めて自己紹介するのじゃ。名はディール、今回は…父? いや、義父…どっちでもいいか。とにかく父親と共に慰安旅行に来たのじゃ」

「そ、そうなんか…なんや、緊張して損した…」

「はっはっは、しかしこんな偶然もあるんじゃないか…」

そこまで言ったところでふとディールは気づく。女湯に機動六課の面々が揃っているということは、今男湯はどうなっているのだろうか? 機動六課にも少なからず男性は居るはずであるから、もしかして既に拘束されていたり…

(…スカリエッティー? おーい、聞こえるかのー?)

ようやく事の重大さに気が付いたディールは、少々心の中で焦りつつスカリエッティに向けて念話を向ける。返事は直ぐに返って来た。

（おや、ディール。どうしたんだい？）

（どうしたもこうしたもないのじゃ。今女湯で機動六課の隊長陣が勢ぞろいしておるんじゃが、そっちは大丈夫なのかの？）

（ああ、今の所は問題ない。どうにも、男湯に入ってきた局員は私のことを知らないらしくてね…運よくバレてないよ、今の所は）

（今の所は、を強調するあたりお主の慎重さが伺えるの…そうじゃな、そういうことならもう少し妾もゆつくりとするとしよう。ただ、危なくなったら此処を破壊してでも脱出するから言うのじゃぞ？）

（ああ分かった。ありがとう、ディール）

無事は確認できた。その事に気づかれないようにホッと息を付くディール。これで本当に拘束されていたら洒落にならないところだった。

「…そういえば、ディールさん」

「なんじゃ？」

「あの、初めて会ったときの…骸に注意、ってどういう意味だったんですか？」

しかし危機は去ってはいなかった。

（…忘れてたの…何故あんな馬鹿なことを言ったんじゃ、妾は…）

もう会うこともないだろうと簡単に予測していたのだが、良くも悪くもやはりこの出会いは予想外であった。今ほど彼女は自分の軽い口を恨んだことも無いだろう。

「ああ、あれはの…妾は実は占い師のようなものをやっておっての…ちよっとお主にそういった相が出ていたのだな」

我ながら苦しい言い訳である、と思う。実際は無還者のことを色々と知っているからに他ならないが、そんなことを言えば色々大変なことになる。当然ながら、彼女としても銭湯での流血行為は望むところではなかった。

しかし事態はディールの思わぬ方向へと進んでいく。

「あ、そうなんだ？」

「!?!?…そ、そうなんじゃ（あれ？ 信じた？ 信じたのか?!?!?）」

まさかこんな苦しい言い訳を信用されるとは思わなかったディールは、思わず驚きで少し目を見開いてしまった。

それとも何だろうか。たまたま相手が高町なのはだから騙せただけなのだろうか？ と考えていると更に思わぬ言葉が彼女から飛び出した。

「あ！ じゃあ、この中の誰でもいいから占ってみてませんか？」

「…なん…じゃと…？」

非常に困る頼みだ。しかも彼女の顔を見る限り素でこれをやっているのだから困る。少しこの状況の打開策を思案するも、適当なことを言っただけかもしれないと怪しまれることに代わりは無い。それならば、適当なことを言っただけ誤魔化そう…という結論になった。

「わ、分かったのじゃ…そうじゃなあ…じゃ、その女子。良いかの？」

「あ、あたしですか？ はいっ、宜しくお願いします！」

ディールが選んだのはスバルだった。本来なら誰でも良かったの

だが、何ともなしに誰にしようかと選んでいたらこの部隊がとんでもない集団の集まりだということに気づいたのである。

（戦闘機人にプロジェクトFの成功体、夜天の書ヴォルケンリッターの鉄槌の騎士…この部隊は一体…明らかに一部隊が持つて良い戦力では無いじゃろうて…）

だがそんなに興味も無いことだったので直ぐにその考えは霧散する。今は目の前でどんなことを言うのだろうか期待しているのが丸分かりな戦闘機人の対処だ。

「そうじゃな…まず名前を聞いてよいかの？」

「スバル・ナカジマです」

「（スバル…ナカジマ？ 何処かでそんな名前を聞いた気が…まあ良いか）ふむ、スバルじゃな？ 良い名じゃ」

「えへへ、ありがとうございます」

「そうじゃなあ…お主、最近良いことがなかったかの？」

「えっ？」

ディールが取った戦法とは、あやふやな占いを相手に伝えることで相手に当たっていると錯覚させる方法——良く地球でも出ている占

い師の中にもそういった方法をする人間がいるが、いざ引っかかる
と気を付けていても当たっているように感じてしまう、人間の心理
を上手いこと利用した手法である。

案の定、スバルは驚いたような顔をしている。何かしら思い当た
っていることがあるのだろう。そう考えたディールは小さく微笑
むと更に言った。

「そうじゃなあ、最近誰かに嬉しいことを言ってもらえたとか…」

「な、なんで知ってるんですか!？」

それにしても分かりやすい少女である、と面白くなって、ディール
は思わずクスッ、と笑みを溢してしまった。どうやら隠しごとが
出来ない真っ直ぐなタイプの少女のようである、と結論付ける。

そういうタイプは嫌いではなく、寧ろ大好きなディールは笑顔を浮
かべながら更に続ける。

「ズバリ当てようかの？ その者は…男性…？ いや、女性…」

それっぽく声を作りながら、バレ無い程度にスバルの顔色を伺う。
やはりというべきか、“男性”という単語を聴いた瞬間スバルの
顔が少しだけ赤らんだ。

と同時にディールの口の端が吊り上った。『これは面白くなりそう
じゃ…』的な意味で。

「ふむ、分かったぞ。その者は男性じゃな？」

「えっ…」

「驚くことでもあるまい？これは占いじゃぞ、妾はお主の心を見抜いてるのじゃよ」

当然大嘘である。しかしたでさえ人を疑うことをしないスバルはそれを真に受け、『す、スゴイ…』などと呟いていた。

「さて、ちょっとここからは臆気なんじゃが」

「？」

「むむ…お主…その男性に恋心を抱いておるのではないかの？」

「……ふわぁっ…」

今度こそ急激に赤くなったスバルの顔。それを見て更に笑みを深めるデイル。

正直、その辺の局員でも出来るような簡単な推理である。女性が誰かに嬉しいことを言ってもらえた、そしてその“誰か”が男性ならば、大方その女性はその男性に恋心を抱いているんじゃないだろうかという、身も蓋も無い言い方をすると推理でも何でもなくデイル

ールの勘だった。しかし現に当たっているのだから恐ろしい。

「その様子を見るに、凶星かの？」

「あ、う、あ、そのう…ええと…」

「凶星なんじゃな？」

「…………はい／＼／＼／」

返事は小さかった。

「…ま、誰かまでとは聞かんの。これで証明出来たと思うのじやが」

「は、はい…ありがとうございます」

なのはもう少し予想外だったのか苦笑している。ただ、彼女がもしスバルが恋心を寄せる人物のことを聴けば、この銭湯は戦闘地域になる可能性があるのでディールの判断は賢明といえるだろう。

「あ、そうじゃ」

「え？」

まだ少し顔が赤いスバルが、黒い笑みを浮かべたはやてを牽制しつつ遠くの風呂へ移ろうとしているのを呼び止め、此方を向かせる。

「な、なんですか？」

「いや、占いの件でまだ一つ伝え忘れたことがあってのう…あ、恋人の件ではない、別の占い…というより勘なのじゃがな」

「？ はい」

可愛らしく首を傾げるスバルにススス、つと近寄るディール。

「お主——」

「…ッ!？」

「——つい最近、胸が大きくなったじゃろ!？」

ふにゃん…という擬音が付きそうな程勢い良く、ディールの手がスバルの胸を一瞬の後に驚づかみしていた。

その速さたるや、なのはですら認知出来なかった程であり——いや、だから凄いと言う訳でもないのだが…。

「うあ…な、なんでそれを?!」

「言ったじゃろ、勘じゃ♪」

「ふわあ、あ、ちよ、揉まないでっ、あっ」

「中々柔らかい胸では無いか。羨ましいのう」

「で、ディールさんだって私くらいあるじゃないですかっ…やんっ、何でこんな揉むの上手なんですかあっ」

「いやいや、妾はギリギリD程度じゃよ。お主のはほれ、どう考えてももう少し大きければEは行くと思うんじゃないが?」

「質問につ、んあ、答えて下さ…ああん」

離している間も、スバルの豊満な胸から手を離さないディール。その一方でスバルも何とか抵抗しようとしてディールの持つ胸に腕が行くような構図になっているので、もう台無しにするような感じが言うにエロい。春斗がいればきつとこの光景を激写していただろうが、恐らくなのは手でカメラごと消し炭にされているだろう。

脱線したので話を戻す。

「はやてき、助け…」

「誰かカメラ持ってきてや! 今なら特別ボーナスつけるで!」

「完全に敵に回った!?　じゃ、じゃあなのはさんっ」

「うん、はやてちゃん! 私行くよ!　何だかこの光景は収めなくちやいけ無い気がする!」

「なのはさああん!?　貴方はそんなキャラないって信じてたのに!...あ、ヴィータ副隊長、助けてくださー!」

「巨乳なんて消えちまえー!!」

「癪癪起こしてる!?　そんな:はあ、ああんっ!　あ、ディールさん、そこは駄目で:にやああっ!」

次々と部下の前でキャラ崩壊を起こして行く上司達。　因みに、何処をどう触っているかはご想像にお任せする。

「ふふ、良い声で喘ぐのう:止めて欲しいか?」

「当然、です:あ、うっ」

「それじゃあ、小さな声でも良いから、『お願いします、止めて下さいディール様』と言うのじゃぞ」

「ええ!?　そ、そんなこと出来ません!」

「それならこっちにも考えがあるんじゃないかの:ふうっ」

「うにゃああ!?! み、耳に息吹きかけないで下さいよ! ビックリするじゃないですか!」

「次は嘗めても良いんじゃないぞ?」

「あ、う、いや、それは止めてください!」

「で?」

「いや、だから…その…」

「なんじゃ? 大きな声で言わんとわからんぞ?」

「~~~~~っ!! / / おっ、お願いしま——」

「はいストロップ! それ以上はこの世界の存亡しょうせつの危機が始まるかも知れへんから終わりにしてや」

遂に悪魔デビルの手によって屈服されかけたスバルとこの世界だが、どうにかはやての手でスバルと世界は守られた。あのままではこの世界にR—18というタグが張り付いていたに違いない。

「手遅れな気もするんやけどな…」

「妾もじゃ」

「はあ、はあ…う~~~~、あたし、なんてことを言おうとして…つて、二人は何を言ってるんですか?」

当然ながら、その疑問に答える者はいなかった。

「しかし、中々いい揉みっぷりやなあディールさん」

「ふっふっふ、そうじゃろ？ いやなに、スバルが感じやすそうな身体をしていたのでつい…」

「感じやすそうな身体って何ですか！」

「勘じゃ」

「勘！？ さっきも言っていましたけど、勘であたしの胸は揉まれたんですか！？」

どう考えても今日会ったばかりの面子ではおかしすぎるこの会話。だが被害にあったスバルも近づいて来たはやてもそれぞれ身近に居る者の胸を（本人たちはスキンシップのつもりで）揉むことがあることを忘れてはならない。揉み屋というものは自然と集まるものなのだろうか？ だとしたら被害にあっている女性からしてみれば迷惑なことこの上ないだろう。

とにかく、これで銭湯で起きたプチ事件は幕を閉じたかに思われたが――

「しかしなスバル。それ程大きければ、その男も振り向いてくれる

んじゃないのかの？」

「ふわぁ！？／＼／＼」

——しかしまだスバルの受難は終わらなかった。

「…う…まあその男の人も、あたし見たいな胸が好きって言ってくれたんですけど」

「ふむ」

「…こ、ここにはいないけど、もう1人の女の人もある人が好きみたいで…」

「三角関係か…なるほど、本当に面白…面白いのう」

「言い切った！？ …コホン、と、ともかくそういう訳なんで…踏ん切りがつかないと言うか…なんと言うか…ぶくぶく…」

言ってて恥ずかしくなったのか、銭湯の湯船に口まで沈めてもうそれきり何も話さなくなってしまった。

「さすがにもう限界か…すまないことをしたの」

「あの、ディールさん、気になってたんやけど」

「？ 何じゃ？」

「ディールさんって、いくつ何や？」

「妾か？ …えーっと…」

はやての突然の問いに少し指を折って数え始めるディール。だがそれも数秒程度のことで、顔を上げると笑いながら言った。

「今年で確か19じゃな」

「そうか、19か…私達と同じとsってええええええ!!？」

「なんじゃ、いきなり大声を出して」

そして彼女の歳を聞いたはやてがいきなり奇声を上げた。他の女性も同様に、驚きで目を見開いていたりする。

「いやだって、それにしても身長と胸と歳が釣り合っていないかな…と…思ったり思わなかったり…」

「今の台詞に胸という単語が入る必要があったのかどうかは別として…そんなことを言うのじゃな…お主、今のをどう思う？」

「？ 誰に聞いて…」

ディールが後ろを向いて誰かに話しかけると、それを疑問に思ったはやてがディールの後ろを覗き込む。

——目に一杯涙を浮かべたヴィータが、そこにいた。

「…あ…」

そして気づく。ヴィータはとある理由から身体的な成長をしないことに。

「…いいよ…あたしはどうせ、小さくて、胸も無くて、癩癩もちだから…」

「ああっ！ヴィータ、違うんや！私はヴィータのことを言ったんじゃないんや！」

「しかもはやてと会う物凄い前から生きてるから、はやてよりも歳取ってるんだよな…」

必死に弁解するはやての言葉も聞こえていないのか、空——この場合は天井であるが——を仰ぎ見て、懸命に何かを堪えようとするヴィータの姿は非常に見る者の涙を誘う光景であった。

「…ヴィータ？」

「はやて…雨が降ってきたな…」

「いや、雨って…ここは屋内で、しかも銭湯——」

「いや…雨だ。絶対雨だ。これはどう考えても雨なんだ」

「……うん、そうやな…雨やな、これは……」

ヴィータのみに降り注ぐ雨を降らせた原因が自分であることを悟ったはやては、『ごめんな…本当に、ごめん…』と、心の底から謝ったのだった。

（それから各自ゆっくりと銭湯で湯浴みタイム）

ここからは音声のみで楽しんで頂こう。

『ディール、それにしても大きいね…わたしくらいあるんじゃないかな』

『いやいや、なのはも中々じゃよ。いいのう、身長が大きくてそ
ちちの方もある女性は…憧れるのじゃ』

『いや、それは違うで。　ディール、あんたはそのままロリ巨乳路線で行くべきや。　そっちの方が希少価値が出ると思うし』

『いや、はやてさん、何かそのアドバイスは違うと…』

『そういえば先程スバルにも聞いたが、当然お主たちもしてくれるんじゃない？』

「何をや？」

『想い人の話じやよ』

『ぶっ!？
な、
ななな何を言ってるのかなデイル!？』

『何を慌てとるのじやなの？ やはりエース・オブ・エースも人の子じやのう…♪ で、誰何じや？』

『いや、わたしじゃなくて最初にはやてを聞くべきだと思うな!』

『なのはちゃん!?!? ここで親友を売るんか!?!?』

『本当に大きいからのう、エース・オブ・エース殿は…この胸でその男性を籠絡するんじゃない？ そうなんじゃろ？』

『にやあつ!？
そ、そんなこと触らないで欲しいの…』

『お主にもこの胸が無かった時代があるのかのう。想像も出来ないのじゃ』

『といふかなのはちゃん、小さい頃の口調に戻つとる戻つとる』

『にゃ…なんでそんな手馴れてるの、ディール…あ…んっ』

『家にいる姉上達で練習しとるからの』

『それを聞いて私はどう反応すればいいんやろか』

『はやてさん、何も反応しない方が吉かと』

『そんなことどうでもいいから助けてなのー!』

『ふふふ、さあ次はお主じゃぞ、はやて』

『いいやろう、来るがいい…だが、私とてタダで揉まれる程安くは無いんやでー!』

『うお!?!』

『ふふふ、ディールの胸も大きいな』

『やるのう、はやて…だが甘いのじゃ!』

『え? ちょ、ま、そこはやめ…この小説本当に滅びるって、んあ、あっー!!!』

『…すずか、何か騒がしいわね…向こう』

『そうだねアリサちゃん…ふわぁ〜そろそろ出よっか?』

『ええ、そうね…もしかしたら皆はしゃいで、自分が茹で上がって

ることに気づいてないかもしれないし…』

「…ディール、男湯に丸聞こえなのだが…」

結局この状況で一番得したのは、恐らくディールでもはやてでも無く、聞きたくとも聞こえてしまうある意味ラッキーな立場にあった――ジェイル・スカリエッティであろう。春斗が聞いたら血涙を流して悔しがりそうな役得であるが、スカリエッティ自信はそこまです胸の大きさなどに興味が無いのであまり過度なアクションは期待できないのが残念である。

「ある意味春斗君が居なくて良かったというべきか…流石に倒れたと聞いたときは焦ったがね…」

苦笑すると、彼はディールへと念話を繋げた。

（ディール、聞こえるかい？）

（聞こえるぞい。何じゃ？）

（そろそろ出ようかと思うのだけれど、君はどうする？）

（丁度良いの、妾も今出ようと思っていたところじゃ。では、この銭湯を出たところで待っていて欲しいのじゃ）

（機動六課と被る心配は？）

（大丈夫じゃ、なのは達はサウナに入ってから出るようじゃしの…
といいつつ、サウナが何なのか妾は良くわからないのじゃが）

（そうか、ならば問題はないな。分かった、先に出ているよ）

（頼むのじゃ）

念話で打ち合わせをし、そうと決まればさっさと銭湯から出る。
下手に遅れて鉢合わせをしてしまえば大変な事になる為である。

服（とは言ってもラボで着ている白衣とほとんど変わらない）を着て、男湯から出る。出る直前に女性店員に会釈するのを忘れないのが、この男が次元犯罪者なのかどうかをディールが疑う所以である。

（…当然だが、まだ出てきてはいないか）

女性とは身だしなみなどの準備に男の倍は掛かる…と、この前ディ

ールから進められた漫画で見た。正直それまで漫画には興味すら持っていなかったが、見始めてみると中々面白いものだった。現在では自分で色んな分野に手を伸ばしている。

その話はまたいつか詳しくするとしても、まあとにかく時間が掛かると思っていたの、だが――

「おお、待ったかの。すまんのう、遅れて」

「いや、想像以上に早くて今驚いた所だ」

待つことたった3分だった。これはディールだからこんなに早いのだろうか、それとも女性の準備は倍の時間掛かるというのが間違いないのだろうか？

「さ、行くとしようではないか。でもまずは姉上たちの土産を取りに行かなくてはな」

「ああ、そうだね……って」

相槌を打とうとした瞬間、スカリエッティの頬が引きつった。

いきなりディールが自分の腕を掴み、自分の胸に押し付けるように抱いてきたのだ。

「…何かね、ディール」

「なんじゃ詰まらんの、少し位反応を見せれば良い物を…役得じゃぞ？」

「すまないが役得の意味が分からない。現に私は今この住人の敵意の渦に晒されているのだが」

何時の世も人の嫉妬とは醜いものである。

「まあそう言うな。別に減るものでもないじゃろう？」

「理由を説明してくれないか」

「…妾1人じゃと面倒な男に声をかけられたりするのじゃ。すまんが暫くこうしていてくれ」

「ああ、そういうことか…もう少し早く説明してくれれば精神的にも助かったのだが…」

「いや、慌てる“無限の欲望”を見てみたかったのじゃが、期待はずれじゃった」

「そんな期待はするものでは無いな、ディール…」

「クックック、まあ少しの辛抱じゃ。その辺の路地裏に入るまでの」

「……その台詞だけ聞かれると、私が凄い勢いで誤解されそうなんだが」

第三者の目からは夫婦漫才にしか見えない、そんな会話を交わしながら、次元犯罪者と兵器は仲良く帰って行ったのだった。

「……ちょっと待ってくれたまえ、ディール」

「何じゃ？」

「……あまりこういうことは聞きたくないのだが……君、まさか——」

「あ、下着はつけてないぞ？」

「……」

「下着は付けるのが面倒なんじゃよ。別に妾の胸はパットやら何やら入れる必要もないし、何よりこの服に下着は邪魔なんじゃ。それにほれ、分かったということは感じてるんじゃない？ 妾の生乳の柔らかさをのう…役得ではないか。で、何故そんな怖い顔をしておるのじゃ」

「…すまないねディール。もう弁明は不可能だ…あれ程ウーノやクアットロが言っていたのに、君は…向こうへ帰ったらまた皆からの説教が待っていると思っていたほうが良い…」

「…解せぬのじゃ」

「いや、そこは理解してくれ」

夜の町に響いたスカリエッティの声は、どこまでも切実だったという…。

“地球”（中編）（後書き）

天破「総員整列」

ザッ！（不気味な宗教服の団体が銃を構える音）

天破「対象はジェイル・スカリエッティ及び高町春斗」

高町「えっ、ジェイルは分かるけど何で俺？」

ジェイル「…（遠い目）」

天破「罪状を読み上げろ」

団員乙「はっ。ジェイル・スカリエッティ被告はディール様の胸をその右手で獲物をむさぼる獣の如く味わったとして我々はこれを青少年云々条例に反する物として定め可及的速やかな判決を彼の者に求めるとして」

天破「御託は良い、つまりどういうことだ？」

団員「高町被告はムカつくから、ジェイル被告は羨ましいからボコしたいのであります」

天破「すばらしい罪状だ。両被告、理解したな？」

春斗「いや、できねえよ！！ 何だ俺の罪状！ムカつくからって！

酷すぎんだろが、横暴以外の何者でもねえよ!？」

団員C「裁判長、判決を」

天破「死刑で」

春斗「話を聞け!!! ってぎゃあああっ!!!」

「暫くお待ちください」

天破「悪は滅んだ…」

ディール「どう考えてもお主らのほうが悪じゃろ」

なのは「でも、今回は拙くない？ 結構ギリギリだよね、コレ…」

ディール「いや、アウトじゃろ」

天破「それだよね、問題は…」

今回の話でいやな思いをされた方、本当に申し訳ありません。感想等で突っ込んで頂ければすぐに修正いたします。

では今回は、ロストログアの捕獲回！

と、オリジナルの展開が少し入ります。

デイル&p;なのは「え？」

次回もお楽しみに♪

“地球”（後編）（前書き）

取り合えず今回の話を読むに当たっての注意事項をば。

- ・春斗がカッコいいだと：！？
- ・ティアナが奴の手に落ちた模様です
- ・クロスミラージュさんが狸の手に落ちていた模様です
- ・あれ、スライム捕獲任務がメインじゃなくなってる
- ・魔王フラグ消滅↑

それでは、どうぞ！！↑

“地球”（後編）

「何故だ！！ はやて、何故写真を撮らなかった！？ そこは撮るべきだろ！！」
美乳スバルとロリ巨乳ディール…だっけの競演だぞバカ野郎、そこは写真に撮って六課陣営のテンションを上げる為にも印刷して焼き増しして配るべきだろうが！！」

「すまへんかった…この八神はやて、一生の不覚や…！！ 話すことに夢中になりすぎて、結局写真を撮ることを忘れとった…！！」

銭湯の入り口にて、どう考えても成人男性と女性が話すにはおかしい話題をしているのは——見間違えようも無い、先程フランの手で行動不能にされた春斗と、銭湯から出たばかりのはやてである。

春斗は先程復活したばかりだが、はやてが女湯での出来事を口にした瞬間血涙を流して拳を握り締めていた。

「くっ…だが、まあいいか。 流石に俺も知り合いの女の裸見て欲情したりするほど腐ってねえし」

「えー、それは残念やなあ。 私、春斗君にやったら見てもらってもええのに」

「はやてよ、冗談も過ぎると俺が殺されるぞ」

「…あー、ごめんな、うん、今は冗談や。 ……別に見てもらっても良いというのは本当なんやけどなあ」

「何か言ったか？」

「ううん、何も」

この男は一体幾つフラグを立てれば気が済むのだろうか。

「でも、エリオから聞いたで？」

「何を？」

「ベットの下に、そういった方向のを隠しとるんやって？」

ダッ（春斗が駆け出す音）

ガシッ（丁度銭湯から出てきたのはが春斗の頭を鷲づかみにする音）

「頭蓋骨が軋む様に痛い！！！！！！」

「春斗？ 貴方は、こんな所でも問題を起こすんだね…本当にもう…」

「なのは姉、それは説教なのか！？　じゃあアイアンクローはいらねえよな！？」

「あ、なのは。次私ね」

「なん…だと…畜生っ！　エリオオオ…帰ったら覚えとけ…」

「うっ…ご、ごめんなさい、口を滑らせちゃって…」

5分間程なのはによる“愛の鞭”アイアンクローを喰らうと、もう終わった…かに見せかけてフェイトが春斗の間接を極めてしまった。

「がああああああ！！　痛い！何故だ！？　何故俺がこんなに責められなくてはならない！？」

「自業自得ですわよ！／／／／」

顔を赤く染めてそういうのは勿論フランだ。春斗よりも少し遅く目が覚めたのだが、あの光景はまだ頭から抜けならしい。

「俺はお前に何かしたというのか！？」

「覗きの現行犯ですわ！！」

「それを言われると何も反論できんぎゃあああ！！　腕が外れる音

がしたあああ!!」

実際は何も知らずに入っただけで覗きにカウントされないはずだが、見たものは見てしまったのだから仕方が無い。

「だがフランよ」

「…な、なんですの?」

「丁度風呂に入ってから状況整理を始めた先の記憶が無いんだが、何があったか説明してくれないだろうか」

「…／／／／／ い、いやですわ」

「何故に」

「いやって言ったらいやなのですわバカ春斗ー!!／／／／／」

「キャラかわってんぞお前ってがああー! 左肩が外れたあー!」

次元犯罪者も去った夜の町に、しばらく春斗の大きな絶叫が響き渡った。

「ふむ…で、俺が気絶している間にロストログアの反応があったと」

「はい」

「なるほどなるほど…で？」

「なんですか？」

「何故俺はお前に背負われて居るんだ、スバルよ」

ちやっかり幸運も手に入れている男、高町春斗。この男の朴念仁
っぷりは底知れない。

「え、私に背負われていたら嫌ですか？」

「いえ、寧ろ風呂上りの女性特有のほのかな香りが漂ってきて物凄
く嬉しいでsゲフンゲフン、違う。お前らは任務があるだろうが、
俺は本来ならここに来るべきではなかったかもしれないんだぞ？」

作者としてはそれは困る。春斗が消えたらネタの9割が消失してしまうからである。

「それでも、大切な六課の仲間ですっ！」

「…、仲間、か」

「はい！」

「そっか。それは嬉しいな…つか、少し思ったんだが…」

「え？」

「どう考えてもお前無理してるよな」

春斗の身長は185cm前後と中々の大きさであるが、対してスバルはまだまだ春斗に比べれば小さい方である。小さい方が大きい方を背負うというのは中々に疲労する。だからこそ春斗の的確な指摘である。

「いやっ、そんなこともあるようなないようなあるような」

「あるんじゃないか」

「で、でも！ …せっかくじゃんけんで勝ったから、譲りたくなくて」

「…？ 何か言ったか？」

「いえっ、何でも！」

「今日は何だかはぐらかされることが多いな。まあいいか、もう下ろしても良いぞ。完全に意識が覚醒した」

「そうですか？ じゃ。下ろしますね」

結局、良く分からない問答の結果スバルはゆっくりとしゃがんで春斗を降ろした。

「つとつと…久々に目が覚めた気分だ」

「あら、春斗。おきましたのね」

「あー、フランか。…？ お前は何故少し怒ってるんだ？」

「いえ、貴方にはほとんど関係ないことなので心配ありませんわ」

「そうか。なら良いが…そうだ、忘れてた。おーい、なのは姉ー！」

「…（あの時私は何故…チョコキを出してしまったのでしょうか…全くもう、スバルにデレデレして…）」

デレデレはして無いと思うのだがそれは一先ず置いておく。

「よし、許可取ってきた」

「何の許可ですか？」

「ちょっとな。六課の面子に土産でも買ってってやろうかと思っ
て、聞いてきた。ロストログアを捕獲した後ならいいらしい」

「あ、じゃあ私もギンガ姉と父さんに買ってってあげようかな…」

「あ、そうなのか？ それじゃ、仕事が終わったら『一緒に』買い
に連れてってやるよ。お前だけじゃ名産品とかも分からないだろ」

「！ は、はい！ 絶対に連れて行ってくださいね！」

「！…は、春斗。1人だけじゃ案内しきれないでしょうから、
私を連れて行っても——」

「いや、なのは姉には俺だけで十分だといってあるしな。だが俺
はゲンヤさんとギンガの好みは知らんから、スバルは連れて行かな
くちやならんし…それに、お前だって今日の夜位ゆっくりしたいだ
ろ？」

「…、」

彼のその気遣いは満点なのだが、女心が分かっているないので残念な
がら0点だ。彼女たちにとって重要なのは春斗と出かける事であ

り、スバルだって普通に考えれば父と姉の好みを春斗に伝えれば済む話なのだ。それに気づかない春斗も、ある意味兵器としてみる
と色々と抜けているように見える。

そして春斗の詳細な説明に、フランは返す言葉が無い。その言葉
が自分を労わってくれていることを指していることがわかるからこ
そ、その想いを無下に出来ないのがフラン・T・ハラウンという
女性だった。

「…そうですわね…分かりましたわ、お言葉に甘えて今日は休ませ
ていただきますわ」

「ああ、それが良いと思うぜ。 お前には迷惑掛けてるからな。
今日くらいは休んでくれ」

出来ればその心遣いを別の方向に向けて欲しい。 そんな涙を押し
殺したかのようなフランの感情が、ただでさえ兵器の中でも一番“
考える”ということが苦手な春斗が分かるはずも無いのだった。

「で…結界内に着いたんだけど…」

「…何これ」

「スライムか…合体したらキングスライムにでもなるのだろうか？」

「いや、色からしてスライムマデユラかも知れませんよ」

「話が分かるなスバル。今度ゲームを片手に二人で話合いも（ドゴオ…!）」

「ごめんなさい、このバカはほって置いて今はこのロストログアに集中してくださいですわ」

「は、はい…」ガタガタガタ

「エリオ君!? すっごく小刻みにデバイスを持つ手が震えてるけどどうしたの!？」

フランのオーラに気おされたのか、はたまた地球へ来た当初のセクハラ発言の際に春斗が受けた傷を思い出したのか…どちらにしろ、エリオの身には未来永劫忘れることの無いトラウマがこの任務でいつの間にか刻まれていたのだった。

『あたし達は空から散らばったダミーを片付ける』

『本体を封印すればダミーも消えるよ!』

『頑張ってくださいです!』

「――と、高町隊長達も任せてくれたことだし…私達でやるわよ！」

「「はいっ！（うん!）」」

「ああ、応援してるぞー。頑張れよ」

「って、春斗!? 貴方何時の間に復活してましたの!?!」

「俺の再生速度を嘗めるな」

腕が吹き飛んでも元に戻ってしまう彼が言うと、困ったことに全く嘘にも冗談にも聞こえない台詞であった。

「…って訳で、まずはエリオ、スバル！」

「了解! はあああああっ!…!…（ぽよんっ）…えっ!?!」

「おりゃあああああっ!…! （ぷるんっ）…こ、これ…」

「斬撃…打撃無効化能力!? ちょっと待って…」

このロストロギアは、外見の通りその身に加わった衝撃を全て吸収してしまうという特性を持っていた。当然それは魔法も例外ではなく、直撃したと思った瞬間魔法弾があらぬ方向へ飛んでいった。

再びフェワード陣が集まって、これをどうするかを考える。

「打撃も駄目、魔法も駄目…さて、これからどうするかだけ…」

『フラン、これ一つ位持って帰っては駄目だろうか』

「そうだよね。　　どうにかして本体を見つけ出さないと…」

『いや、何を言ってるんですの貴方は。　　駄目に決まってるじゃありませんか』

「でも、どうやって見つけましょう？　　皆同じ形で、行動に違う点があるようにも見えないし…」

『いや、ラインも言ってたろ？　　ダミーは本体を封印すれば消えるって。　　だからその間だけでも…このぷよぷよした感じが応用できればなあ』

「ちょっと待って、行動に違い…？」

「ティア？　どうしたの？」

『例えばそうだな、コレとか。っと、やっぱり滑り落ちてくんな。こら、逃げんな』

「そうだわ、ダミーは本体の危機にのみ生成される…そしてその用途は、本体を欺く為の物…」

「…あ！　ということは…」

「ええ、この中で1つだけ、この場から逃げようとするような動きをする物が居る筈よ！」

「あ、なるほど…流石ですティアナさん！」

「…、」

「いや、それほどでも…　スバル、どうしたの？」

「いや、春斗さんの持つてるスライム…ダミーで遊んでるのかなー、と思ってたんだけど」

「」「？」「」

『んー、なんだ？ 俺はスライムに嫌われているのか？ 何故か逃げるのかコイツだけ早いな』

『というか捕まえてどうする気なんですか？』

『あー、フラスコに入れて実験生活…』

『非常にかわいそうですわね。 それでしたら普通に封印されていた方が幸せかと…だから逃げてるんですわよ、その子』

『マジか…駄目だな俺気を付けるとしよう…よし捕獲！！ ころ、逃げんじゃねえっ…と（パキンッ）あれ？ 少し強く掴んだら何か壊れたな』

「「…あれだ————ッ！！！」」

そう、春斗の捕まえようとしていたスライムこそ本体だった。 どう考えても周りのスライムよりも動くのが早いからである。 因みに、春斗が壊したのは兵器（彼ら）にとっては空気とそんなに代わり無い程度の障壁だった。

「は、春斗さん！ それ！ そのスライム！」

「どうしたティアナ。　これがどうかしたか？」

「いや、それが本体なんです！　それさえ封印すればこれ全部消えるんですって！」

「なん…だと…？　もったいねえ、せっかく捕まえたのに！　なのは姉、これもって帰っても良いよな！？」

「駄目に決まってるよ！？　何言ってるのかな！？」

「もったいねえ、せっかく商売道具が入ったと思ったのに…！　くっ、じゃあ封印頼むわ」

「えと…あ、はい…」

残念そうに手からスライムを落とすと、再び地上へと落下した。

すると凄い速さで春斗から離れ、ティアナ達の方角へ向かっていった。

まるで「早く封印してあの人から助けて」と言っているようだった。

（ロストロギア封印中）

まさかの展開もあって、非常に脱力するほど簡単に任務は終わった。
特に見せ場も無かったエリオとスバルは少しむくれていたが、まあ春斗さんだから、というような感じで落ち着いた。

「もう、春斗ったら：せっかくフォワードの皆の活躍が見れるはずなのに、なんで手を出すの？」

「そこにスライムがあったから」

「流石私の見込んだ六課局員やな！」（サムズアップしながら

「いや、そういう問題じゃ無いからね？　　というかはやてちゃん、
仮にも部隊長がそんなノリでいいの…？」

因みに新人たちの横で空から降りてきた隊長陣と春斗が漫才的な会話を交わしていたが、華麗にスルーした。

「だけど、とにかくこれで任務完了だよ！　お疲れ、皆」

「あたし、何もやってません…」

「僕もです…」

「私は一応封印したけど…何もやってないのと同じよね」

「わ、私も同じく…」

結局、本人に自覚はないが今回の一番の功績者は春斗であった。ただ、動機が不純なのと本物を見つけたのはどう考えてもまぐれだったので別に褒められることも無く地球への任務は終了したのだった…。

さて、時間は深夜になっていく。

「という訳で、部屋割りを決めるでー」

「待てはやて。何故部屋割りを決めるのに俺とエリオが呼ばれる？」

ようやく任務も終了したことだし各自就寝モードに入ろうとしたところで狸こと八神はやてが眠そうに集合を掛けた。

眠いのならそのまま寝りゃいいのに、と春斗が思ったのは秘密である。

「え?」

「え?　じゃねえよ。今日だけで3回は説明しているが、俺とエリオは男。お前らは女。　OK?　ほら、もう答えは見えたはずだろ?」

「なるほど：つまり、私らが一緒に寝る時、どちらが襲う方が襲われる方かをはっきりさせたかったんやな?」

「違えよバカ狸!　何処をどう間違ったらそんな解釈が生まれるんだよ!」

隣では色んな意味でエリオも絶望している。確かに今よりもずっと子供の頃はフェイトと一緒に寝ていたりした頃もあったが、前話で述べた通り彼は今“異性”を意識し始めていると思われる。そんな彼が万が一キャロと一緒に寝ることになったりしたら：風呂場での彼女の裸が思い出されて、眠るところでは無いだろう。

「で、でもはやてさん。別々のベットですよね?　そうなんですよね?」

「あー、そのことなんだけど…」

ここですずかが申し訳無さそうに前に出る。

「ゴメンね、此処はここまで大人数が泊まりに来ることを想定してないロッジなの。だから、3組く4組位は一緒のベットになっちゃうんだよね…」

「よっしゃエリオ！ 俺、色々ゲームやら漫画やら持ってきたから今日徹夜して遊ぼうぜ！ 勿論その部屋でな！」

「そうですね春斗さん！ 僕、少し前からそういうゲームとか漫画とか興味あったんです！！！」

ダッ（春斗とエリオが駆け出す音）

ガシッ（同時にはやてに腕を捕まれる音）

「離せはやて！ お前のその顔から俺はお前が何を考えているのか全て分かる！ その思考はどう考えても俺を社会的に殺せる考えを秘めている目だ！」

「はやて部隊長！ お願いです、今日だけは！ 今日だけは勘弁してください！」

「嫌やなあ、二人とも。 まだアンタ等が誰と一緒に寝るか決まっ

てへんのに、何をそんなに慌てとるんや？」

「エリオはともかく、俺はなのは姉以外と…いや、なのは姉とでも一緒に寝たらどう考えても犯罪だろうが！　つーか恭弥兄と士郎父さんに殺される！」

何処の世界でもあの兄と父は恐ろしいらしい。

「まあ、それはこれを引いてからでも遅くは無いやろ？」

「籤かよ。いつ用意したんだお前」

「こういうこともあろうかと、遊びに行くときはいつも準備しているんや！」

「無駄な才能だな」

適切に突っ込みを入れつつ、籤の概要を確認していく。割り箸の先端に色を塗っただけのものだったが、何処かに仕掛けが無いか、形が違わないかを確かめていく。　全ては、生きる為に――

「いやいや！　流石ににそんなことせえへんて！　春斗の中で私だけでなく信用ないん！？」

「エリオ、お前も見えておけ。　この籤には、俺達の安眠と明日が掛かっている」

「っ…はいっ!!」

「エリオまで!?! 何が私をそんなに不審にさせたんや!?!」

「こういうことをするからだ」

「はい、返す言葉もございません」

そんなことをしているうちに、エリオも籤の調べを終えたらしくはやてに丁重に割り箸を渡した。何処か釈然としないものを感じながらもはやてはそれを受け取り、改めて割り箸を混ぜる。

「それじゃ、改めてくじ引きを始めよか。勿論、引いた籤の交換は無しやで?」

それぞれの願いを胸に秘め、藁（今回は割り箸だが）にも縫う思いで籤を引いていく。全員引いたところで、それぞれの籤の色を見せ合った。

「…エリオ、何色だ?」

「…青です…春斗さんは?」

「がハッ…緑…だ」

「∴」

当然といえば当然なのだが、この二人の色がこの状況で揃うはずも無く。 エリオは青、春斗は緑であった。

さて、彼らの気になるペアだが。

「ええっと、私は青です！ ∴あ、エリオ君青なの！？」

「あ、私は緑ですわね」

悲しいかな、結局こうなった。

「はやて」

「なんや？」

「再抽選を希望する」

「却下や」

「はやてさ「却下や」僕は何も言ってますよ！？」

このメンバーの中でも最悪のペアになってしまったことに、地に膝

をつき項垂れる春斗。いや、別にフランが嫌という事ではないのだが――

「春斗…？ 分かってる、よね？」

「イエス・マム。全て理解しております」

修羅と化したフェイトの処理が恐ろしく怖い。気分はさながら一歩間違えば奈落の底への転落のデスゲームである。春斗の背中は汗で濡れていた。

「もしフランに何かあったら…」

「いや、フェイトさ――いや、フェイト様…お言葉ですが、もしはやてが許可をしたら籤を貴方様のと…」

キッ！（フェイトがはやてを見る音）

コクコクコク（少々震えながらはやてが頷く音）

「（よし、俺の命はコレで護られた…ッ！） じゃ、フェイトさんこれを…」

「まあそういうわけだからフェイトさん。はいよ、これ」

「うん、ありがとう」

「止して下さい。俺にお礼なんて…」

命が助かったのでそれだけで十分です。 とは勿論言わない春斗だった。

「…？ あれ、それじゃ俺は結局誰とペアに…」

「…、」

「…あ」

春斗の手↓橙色の割り箸

ティアナの手↓橙色の割り箸

「はやて審判！ やはり再審を要求し——」

「すまへんが、流石にこれ以上はルールを曲げられへん」

「——畜生！！」

今日も深夜も、今はやっぱり機動六課は平和だった。

〈部屋移動中〉

「で、ダブルベット、かよあの狸め…帰ったらゲームデータ全部削除したる」

「はは…」

「…ま、なってしまったもんは仕方ない。俺は床で雑魚寝するからティアナはベットの上で寝とけ。お前は今日はずっと任務やらなんやらで疲れてるだろ」

そう言ってベットの上から1つ枕を取り、床に放り投げて寝転ぶ春斗。ある意味ではやて、否…全ての読者の期待を裏切る男、それが高町春斗である。

「あ、ありがとうございます…」

その好意に甘え、ティアナもベッドの上に身を預けるようにして寝転んだ。

暫く無言の時間が続く。双方、起きているのは分かっているのだが春斗の方は別段話す事も無いのでそのまま寝ようとしているだけであり、ティアナの方は、いくら春斗が何もしてこないのは分かっているでも自分の“兄”以外の男性と寝るのは始めてである為、少し緊張していた。

そして、睡魔に負けて春斗が眠ろうとしたその時――

「春斗さん」

春斗には背を向けたまま、ティアナが春斗の事を呼ぶ。その言葉で春斗は一瞬で眠りから覚醒した。これは、名前を呼ばれたら直ぐに起きる習慣が研究されていた頃から存在していた為の癖の1つである。

「…どうした？」

「…私って、中途半端だとは思いませんか？」

「何？」

いきなり話題を振るわれて、些か混乱気味の春斗。当然だろう、ティアナの台詞は台詞として成り立っては居ないようなものだった。

「春斗さんは、なのはさんに子供の頃からついてるんですね？」

「ああ、だが魔法を知ったのはなのは姉が教えてくれた頃だから…
10歳前後の頃だけだな」

「その頃のなのはさんって、今みたいに凄かったんですか？」

「…、」

少し真意が見えてきた春斗は、逆に彼女へ質問を返した。

「その質問に答える前に逆に聞くが…お前は、天才って居ると思うか？」

「え？ ……いる、と思います。だって、現になのはさんやフェ

イトさんは、19歳でエース・オブ・エースっていう称号を獲得してるし…」

「…ふむ。それで？」

「はやてさんは、あの歳でSSランク相当の魔道士になっています。それに、私よりも年下のエリオやキャロも希少能力レアスキルや、魔力変換資質を…親友のスバルだって、私と違って接近戦の才能がある。

…前線に立つ皆からしてみれば、私だけなんです…このフォワード隊の中で、凡人…才能が無いのは…」

やっぱりだ。と、春斗は思う。

彼女が自分に才能が無いと思い込み、強くなりたいたと焦っているのは大体分かっていた。しかし今彼女はこうして自分の心境を言葉にして吐き出している…何故自分に相談、というか言ったのかと問えば、おそらく魔力0の自分になら同情をもらえらると思っただのか…それとも、純粹になのはの過去を聞きたかったのか…

「…、それは違うな」

「え？」

驚いたような顔をするティアナ。春斗はゆっくりと身体を起こし、そのまま床で寝て固まった身体をほぐしながらティアナの横に座った。

「少し、昔話をするか。誰にも言わないでくれよ？　なのは姉にも秘密にしてくれて言われてるからな」

それに、俺もその時の状況は良く分かっていないけどな、と前置きして春斗が始めたのは： “不屈のエース・オブ・エース” 登場秘話。

：というと少々幼稚に聞こえてしまうかも知れないが、その内容は残酷なものだった。

始まりは、あるフェレットを拾ったことだった。

その正体が実はユーノ・スクライア：現在は無限書庫にて不眠不休の活動をしている『不死の史書長』と呼ばれる男：で、彼は単身、ジュエルシードと呼ばれるロストログアの探索・回収に来たという。

「変なところで人が良いなのは姉は、それを俺達に内緒で手伝い始めてな：」

それは本当に偶然が重なった——重なりすぎた出来事の連続。

なのはにS級の魔力適正があったこと。

そしてなのはがジュエルシードを集め始めたことにより、時を同じくしてジュエルシードを集めていた幼少時のフェイト・ハラオウンと激突。最初のなのはは負け越しであったと言う。

そのままことあるごとに対立、激突する二人だが、遂にその魔法の使用に丁度地球の近くに居た管理局の分局“アースラ”が反応。どちらもA級を超える魔力と知り、小規模の次元震も起こったことで、看過出来る事態ではなくなり直ぐに現場へ急行したこと…。

「って、なってる。表向きはな」

「え?」

「考えても見ろ。ここは管理外世界だぞ? ここで違法に魔法を使用していたからと言って、管理局のかの字も知らんなのは姉、しかもまだ8歳程度の頃に管理局の法律を捻じ込むのは間違ってる。俺は思ってる」

「…あ」

続けるぞ、と含み笑いをしながら更に言葉を紡ぐ春斗。

そしてリンディ・ハラオウンの説得により、そのまま管理局に協力する魔道士になってしまったこと。

「なって“しまった”？」

「先程も言ったがなのは姉はその時まだ8歳だ。恐らく理解していなかったんだろうが、その時リンディさんが提案した条件は“管理局の指示に従うこと”これ1つのみ。だがおかしいとは思わないか？」

「え？ でも、それだけで自分の故郷が守れるのであれば……って、あ！」

「そうだ。もう一度整理すると、なのは姉は真正銘管理外世界の生まれであり化け物的な魔力適正があったのも偶然……しかも成人どころか中学生にもなってねえなのは姉をここぞとばかりに勧誘しようとした理由は恐らくひとつだ。現在もそうだが、今管理局は人手が足りない。全く足りていない。今はその頃程でもないが、その頃はもっと深刻だったに違いない……そんな時、目の前に転がってきた未来のS級魔道士。どうするかなんて答えは決まってるだろう？」

「……無条件で獲得できる、割の良い兵士……ってことですか」

「そうだ。しかも自分がやらなくては駄目だという固定概念がその頃からなのは姉には染み付いていたからな。地球は、自分が護らなくてはならない見たいな感じでプレッシャーを感じまったんじやねえかな。きっとリンディさんも上手かっただろうさ、努力も

せずに管理局の中でも希少なレベルの魔道士が手に入ったんだ。しかも自分のことを素直に聞いてくれると来た。色々トラブルもあったようだが、リンディさんがその頃の狸だったことは間違いねえ」

さて、この先はフェイトさんの過去も侵害しちまうから簡潔に説明するが、と前置きして春斗は続ける。

「この頃のフェイトさんはなのは姉と敵対関係にあったってのは言ったよな？」

「はい、それっぽいことを1回だけ…」

「まあ、結局は仲良くなって『友達』になったらしい。魔法のことを話してるなのは姉は、その事を話すときものすごく顔が輝いてたよ」

「へー…」

じゃ、次な。と春斗が何故か急に感情をなくした声で次を告げたので、何か悪寒を感じて真剣に耳を傾けるティアナ。

「はやての過去の罪は知っているな？」

「はい、まあ。あんまり詳しくはスバルの方が詳しいかと思えますが…」

「そうか、まあ良い…とにかく、闇の書事件と呼ばれるそれははやての意思で起きたものでもなければ、総合SS級魔道士という称号もはやて自身の意思で手に入れたものではなかった」

「…、」

言葉を失うティアナを見据えながら、春斗は口を動かして言葉を吐いていく。

「闇の書には致命的な呪い^{バグ}が掛かっていたんだ。所有者を喰らって死に至らしめる最悪の呪いだ。防ぐ手立ては闇の書を完成させ起動させるしかない…しかしその起動させるためには、魔法生物や魔道士が持つ、リンカーコアが必要だった」

「…まさか」

「勘違いしないで欲しいのは、これははやての意思でやっていたことではなく、闇の書の守護騎士であるヴォルケンリッター…シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラ、ヴィータの4名がはやてのことを想い、勝手にやっていたことだ。はやてが命令していたかどうかいう気に食わん上に陰湿な噂が流れているが、根も葉もないどころか嘘そのものだ。まずこれではやてが攻められる理由は何処にも無い」

「…、」

「さて、そのリンカーコアを奪う方法だが蒐集という。この蒐集を使うことにより、敵の魔力を吸収して持ち主の魔力が更に大きく

なっていくと言う寸法だ。つまりはやては、自分も知らないうちに魔道士や魔法生物の魔力を吸収して、今ほどの魔力を手に入れたわけだ。望まぬ形だな」

「！　そ、それじゃあもしはやてさんが闇の書の主で無かったら…」

「ああ、管理局に入っていないければそれどころかなのは姉と知り合うことすらなかったかもしれないな。だが全ては結果論だ。結局、管理局のとある上層部の1人の策によって闇の書は暴走してしまった。そして戦闘が起き、最終的には闇の書のバグはアカンシエルで吹き飛んだらしい。…が」

「“が”？」

「闇の書はそもそも“夜天の書”と呼ばれるロストログアが何者かによって改造されたものだった。元々このロストログアは偉大な魔道士達の魔法を保存する為に作られた由緒正しきものだったが、悪い事に使用する魔道士が増えた為に闇に染まってしまったと言われている。結果、“夜天の書”の管理人格である“リインフォース”：まあ、リインの一代目ってことだな。その“リインフォース”は、内部にまで侵蝕していたその呪いと共に消失した」

「っ…」

「はやての悲しみは相当なものだったらしい。事後報告だったんで俺らにその気持ちは簡単には分からないけどな…以上、あの3人の過去を簡潔に説明したわけだが。どうだ？」

「全然、知りませんでした」

ずっと言いたかったことをいう子供のように、彼女は堰を切ったように言葉を吐き出した。

「なのはさんが子供の頃、そんな体験をしたことも、はやてさんがそんなつらいことを体験したことも…それなのに私、勝手なことばかり…」

「反省しているところ悪いが、もう1つ言わなくてはならないことがある。なのは姉の教導を受けているお前達新人魔道士には知ってもらいたいことだ」

「…え？」

「“不屈のエース・オブ・エース”。なのは姉の代表的な二つ名の一つだが、こう呼ばれた理由をお前は詳しく知っているか？」

「えっと…たしか何年か前になのはさんがガジェットに墜落させられて…それでも引退をせず、懸命なりハビリの後にまた前線で活躍をし始めたという理由からかと思いますが…」

「そう、概ねあっているな。だが、二つ…ガジェットに墜落させられた理由は、一重になのは姉のミスにあったんだ」

「!？」

『あなのはさんがミス?』と驚愕で頭の中が一杯になったティアナに追い討ちを掛けるかのごとく春斗はほとんど感情の無い声で続

きを言っていく。

「あの頃のなのは姉は、自分の疲労も省みずに無茶苦茶な訓練や任務をこなしてばかりだった。それこそ俺達の忠告なんて耳も貸さない程にな。そしてお前の言う数年前、遂にその無理が祟った。

あの頃の本来の実力なら倒すことなんて造作も無かった筈のアンノウン…ガジェットだと思うが…に疲労でバランスを崩した所に攻撃を喰らったんだ。バリアジャケットを貫通するほどの大怪我…誰もがもう前線復帰は無理だと諦めていた。それどころか普通の日常生活を送ることもな」

「そんな…！」

「最初はなのは姉も生きることすら諦めかけていた。だがフェイトさんやはやての励ましもあって、生きているのすら奇跡ともいえる怪我が悪化するのを覚悟で、見てると痛くなるかのようなリハビリを毎日毎日繰り返したんだ。フェイトさんや俺、そしてなのは姉と俺の家族も皆心配し、時には反対もした。が、最終的にはなのは姉は奇跡の回復をして、大怪我に屈することなく前線に復帰した。これで“不屈のエース・オブ・エース”の誕生だ。」

「…！」

「これを聞いて、誰か連想できないか？」

「？」

「テメエだよ、ティアナ」

「!！」

肩を震わせるティアナ。　ここで自分のことが話題に上がるとは思っ
ていなかったのだろう。

「隠れて練習しているつもりか？　はっはっは、俺ら機動六課平隊
員の情報網を嘗めるなよ。　お前がどれほど練習をしているか、何
時から練習しているかなど、なのは姉やフェイトさんの隊長・副隊
長陣に隠して伝達するなど歩くことよりも簡単なんだよ。　実際、
前線メンバー以外は皆知っているからな。　お前が夜隠れて練習し
ていることを」

「っ！　何故、なのはさんたちにそれを言わないんですか…？」

「俺達にも気持ちは分かるからさ。　強くなりたい気持ちはな…そ
の点で俺はお前に言いたい。　自分を凡才というのは結構だが、そ
れを魔力適正が無い奴には言わない方が良い。　魔法が使えるだけ
でどう考えてももうお前は非凡だよ。　しかも卓越した指揮能力と
狙った物を正確に打ち抜くガンナーとしての才能…どれをとっても
凡人には不可能なものばかりだ」

「あ…っ」

「あんまり高みを目指すと顰蹙を買うぞ。　謙虚なのも良いが、無
理をしすぎればなのは姉のようになる。　なのは姉の教導は、正直
強くなるという実感を感じにくいからな」

「分かってたんですか!？」

「なのは姉の教導は“積み重ね”を前提としている。急激に強くなるなんてどんな奴にも無い。それこそ、外道な方法でなら別かも知れねえけどな…俺がなのは姉達の過去話をしたのはそういう意味も含めてだったんだが、分かりにくかったろ？」

「あ、えっと…」

「…だよな、小さな頃からどうしても説明が苦手なんだよなあ…だからいつも殺されかけるんだろうか…？」

「いや、あの…春斗さん…」

「ん？ おお、すまねえ。ま、つまりは、だ」

ポスッ、と。

春斗の大きな手が、ティアナのまだ少し小さな頭に小さな音を立てて、収まった。

「ん……」

「お前は凡才じゃねえよ。いつか、なのは姉も越えることができるだろう。それが何時になるかは流石に分らないが…」

ふと、ちょっとだけ撫でられている頭を上によらずして、今自分の頭を撫でている男性を見る。

不覚にも、一瞬だけ――いや、何故か心臓の動悸が止まらなくなつた。

朝や昼、彼女が“最低”と評した男の面影はそこに存在していなかった。

ただの、笑みだった。

愛想笑いでも作り笑いでも、おかしさから来る笑みでもない。純粋な、白も黒も無い笑み。 純

春斗からしてみれば、ティアナを妹を見るような目で見ていただけなのだが…その親しみやすい笑みこそ、彼に好意を持つ人間が増えている理由なのかもしれない。

『どんなモノでも受け入れる器量』。これが春斗の最大の長所であり、彼が考えるのが苦手な所以である。

兵器であった彼がこれほどの心を持つまでに成長できたのは、きっと高町家に拾われたということもあるだろう。考えない代わりに、どんなものでもいつの間にか受け入れてしまうのが、本当の彼であり、本当の高町春斗という人物なのである。

ティアナは焦っていた。

頬が熱い。

心臓の動悸が止まらない。

先程の笑みが、頭から離れない。

頭に乗っかってる手が、暖かい…。

先程まで意識しなかった“春斗”があらゆる形で認識出来てしまう。

今彼女の前にいるのは、彼女にとって普通の男性が居るのではなくなった。

そう————ティアナ・ランスターが、初恋をした瞬間だった。

「さて、もう夜も遅いな」

「…、あ」

彼女の頭から春斗が手を離す。思わずもったいなさそうな声を上げるティアナだが、それに春斗が気づく様子は無い。この男は本当に、無意識に格好良いところを見せるのにこういうところで疎いのが非常にもったいない。

「そんじゃ、お互い明日に備えてゆつくり寝ようぜ。俺ももう眠い：「あ、あの：」 ん、まだ何か質問があるのか？」

「えと、その、あの」

呼び止めたことを後悔しているのか、少し赤い顔で目線をグルグルと右往左往させるティアナ。しかし次第に収まると、軽く深呼吸して、言った。

「きよ、今日だけ！ 今日だけ、お願いがあるんですけど――――」

(どうしてこうなった)

10分後、高町春斗が思考することと言えばこれに限る。

目の前にはティアナの寝顔。

自分は何故かベットに寝ている。

そしてそれは、目の前で寝息を立てているティアナ本人の希望に他ならなかった。

『き、きよ、今日だけ…その…一緒にベットで寝ることを…ゆ、許して、あ、上げま…しゅ』

『お願い』なのに何故上から目線なのかという突っ込みや最後囁んだっぽいという指摘はともかく、春斗は完全に混乱していた。

まあティアナの心情の変化を知らないのだから無理は無いだろうが。

(なんだ。これは俺を陥れようというコイツの策略か？ 確かにこのまま俺が寝れば明日は俺の命日になること確定だろうが、そんなの脱出すれば済む話…子供でもコイツは執務官希望者だ、もっと搦め手を使ってくるもおかしくはない。ということは何者かの指

示か？ フランかフェイトさんあたりが妥当か：俺の処刑理由を造ろうという戦法ってところか）

悲しきかな、春斗の脳に『ティアナが自分と一緒に寝たかった』という考えは一切存在しない。育ちが研究所↓高町家というへビーな人生だし、その上最近フェイトやフランからの処罰が段々酷くなってきたため異性に好かれると言う考え事態が消滅して来ているのだ。フェイトはともかく、フランにとっては本末転倒以外の何者でもないがそれは置いておこう。

（だが貴様らの思い通りにはさせんぞフラン。俺は貴様の魔の手から離脱してやr 「兄さん：（ムギユ）」 がハッ!？）

既に春斗の中ではフランが黒幕で固定されていた。否、今彼はそれどころではなくなった。

ティアナが寝ぼけて春斗のことを兄と勘違いしたのか、春斗の腰に抱きついてきたのだ。

この瞬間、春斗の頭の中でフランへの逆襲くこの状況の離脱に優先順位が切りかわった。正直相手が自分より3歳年下の子供だとは言え、身体ごと抱きつかれるのは非常に拙い。

：彼女もスバルとまではいかないが、女性としてでている箇所は出

ているし全体のプロポーションのバランスも良い。しかも今は隊服ではなく結構露出の多い寝巻きを着ているのだ。

結果、16歳特有の太ももや柔らかい胸がダイレクトで春斗の身体に直撃していることになる。

(…色是御恋…汝姦淫すること無かれ…ッ!!…)

とあるライトノベルの主人公も使っていた呪文を使って見たが、使い方はともかく内容が違う。これでは恐らく効果は無いだろう。

(くっ…ん？ あ的光ってるのは…クロスミラージュか!!…)

闇に一筋の光を見つけたかのような表情になる春斗。 小声で呼びかけてみる。

「(ボソボソ) おい！ クロスミラージュ！」

《春斗さん、申し訳ありませんが事態は私の手には負えません》

「（ボソボソ）諦めんの早くね！？　つかお前饒舌だなオイ！！」
せめてテメエの主を起こしてくれ！
俺の命の灯火が理性と共に消えそうなんだよ畜生！」

《申し訳ありませんがその様な動作は登録されていません》

「（ボソツ）シャアアアアアリイイイイ！……ア
イツだなこれを教えたのは！？ いや狸か！？」

《いえ、男と女が一緒のベッドで寝ている場合は起こしてはならないと…はやて部隊長から》

「やはり狸か!! あ的女ア：絶対にセーブデータ復元不可能領域まで破壊してやる…俺が生きてたらな…」

小さな声で叫んでいたら疲れてきた。

思わず目を閉じかける春斗。だが強靱な精神で耐える。ここで寝てしまうのは拙い、しかし何もしなければ疲れは……

（なんだコレ……この状況を見られても死、ティアナを起こしても死……生きる選択肢がねえ……）

…何もしないはずなのに更に更に疲れてきた。そして、遂に眠気に身を任せてしまう。

(あー…もう、明日なんて…こなけりゃ…いいのに…)

作者の願いでもあるが、それはきつと永久に叶わない願いだろう。

く早朝く

コンコン

「…ん、もう朝かあ…」

「そうみたいですネ…」

ガチャ

「春斗、ティアナ。朝ですわ、おはようございますです…わ…」

「ふわぁ…昨日はなんか恐ろしく疲労をした気がするんだが、何故だろうか…確か、ティアナが…」

「うう…そうでしたっけ…アレ？ 何で、私、春斗さんと一緒にベツトで…」

「…一緒にベツト？」

サアッ（春斗の顔が一瞬で青ざめ、後に眠気が一瞬で覚醒した音）

かあああっ…（ティアナの顔が真っ赤になった音）

「あ、あの春斗さん」

「言うな…言うなティアナ…」

「違うんです…あのその…」

もごもご言っていたティアナは、さめた目つきのフランと逃げる準備をしている春斗が見つめている中で――

「き、昨日は頼みを聞いていただきありがとうございました！！
しかも、一緒に…あの…だ、抱きついてしまって…も、申し訳ありません…で、でも、すっきりしたので…そ、その…嬉しかったです
…／／／／／」

春斗処刑フラグを――――投下した。

「この表現の中には未成年者には見せられない表現が存在します。
ディールとスバルの絡みを想像してお待ちください」

「……………え！？ 誤解！？」

「…その言葉、俺が殴って蹴られ逆さまにぶら下げられる前に聞く
ことは出来なかっただろうか…」

無理だと思う。 全世界の読者の総意だろう。

どうにか釈放され、ティアナとスバルによって支えられ何とか体制
を整える。

「もう帰るんだろ？」

「そうなのよ。もう少し居れば良いのにね」

「そうだよな。俺は普通に平穏な生活が出来れば何処でも良い」

「無理ね」

「即答かよ」

まあ、いつも通りといえはいつも通りである光景だった。

「それじゃあね、皆。……頑張りなさいよ。あのバカは鈍感だから」

「鈍感？誰が？」

「アンタだ」

「俺が鈍感？はっ、何を言ってるんだか。俺が自分に向けられた好意なら1秒も経たずに気づける自信がある」

それは絶対に無い。

「さ、皆。元気でね！」

「「「はいっ！」「」」

春斗を軽く無視して、アリサとすずかが手を振るのを最後見ながら機動六課の面々は転移して行った。

――管理局本部　転移ゲート前――

ヒュオン…

「到着…やな。　　「！！　や、八神部隊長！！　　！？」

一息つこうとした瞬間、息が完全に上がっている六課隊員と思われる男性が敬礼をしていた。その様子からただ事ではないことが伺えたはやて及び機動六課の面々は、直ぐに仕事モードに切り替わる。

「…どうしたんや？」

「緊急事態です」

短くそういうと、男性は少し深呼吸をして、敬礼を崩して――

「管理局地上本部のロストロギア保管施設が強襲されました！！
犯人は一名と思われませんが、施設に配備されていた魔道士は全員殉職を確認しましたッ！！
現在保管されていたロストロギアと現在の保管庫のロストロギアをリストアップして照合していますが…
どうやら、“レリック”のみが全部奪われているようです…！！！！」

――平穩を終わらせる、新たな物語の幕開けを、告げた。

“地球”（後編）（後書き）

フラン「どうします？ あの時感男、また作りましたわよ」

スバル「春斗さんだから仕方ないんじゃないかな…」

はやて「うん、私もそう思う」

ティアナ「は、春斗さん。 これ…食べてくれませんか？」

春斗「サンキュ、丁度腹が減ってたところだ（パクツ）…ふむ旨いな。 なんだ、コレ」

ティアナ「え、えっと！ 手作りのパイです…」

春斗「また作ってくれよ。 どうも甘いもんが無いと仕事がかどらないんだ」

ティアナ「！ は、はい！／／／」

天破「離せデイル！ 私は奴を…奴を…！」

デイル「よせ作者！ まだ奴らには無意識の無限の糖分が展開されとる！ 一体あの中に行ってどうする気なんじゃ…！」

天破「うるせえええ！ 離せよコノヤロー…！」

次回はこのタイミングでの閑話です。というか幕門と言うか番外編です。

一応兵器だって女の子。 さて、女性が風呂上りに乗るものと言え
ばなんでしょう？

勿論、全ての兵器がでるはずですよ♪

次回をお楽しみに〜^^

閑話“機動六課ダイエット作戦”（前書き）

という訳で閑話です。そしてこの瞬間、私の閑話ネタが切れました。誰か、オラに、ネタを分けてくれ！！（殴

忙しいので更新が更に遅くなる予感。これが9月最後の更新になる可能性があります。　　というか多分そうなります。

この話を読むにあたっての注意事項！

- ・フラン。・。（ノ、）。。。
- ・はやて（、＼、＊）
- ・春斗（、。、）
- ・ヴァイスに異変…！？
- ・ラスト、急展開

この意味を知りたい方は！

どうぞー♪ m () m

閑話“機動六課ダイエット作戦”

「きゃあああああああああああー!!」

その夜、そして次の日からの女性陣の苦悩は、フェイト・T・ハラオウンの義妹フラン・T・ハラオウンの六課全体に響き渡る悲鳴から始まった。

〽次の日の早朝〽

「…エリオ？」

「…はい、春斗さん」

「これはどうした？」

「いえ、僕も今起きたところで何がなんだか…」

朝、もう皆朝食をとってもいいような時間帯。

しかし食堂に広がるのは、まるで通夜のような雰囲気。

良く見ればその中心にいるのはフランであり、その周囲になのは、フェイト、はやて、ティアナ、ヴィータ、シャルと続いている。

一体どういう集いなのか、良く分からない春斗達は互いに顔を見合わせながら首を傾げつつ食べ物を取りに行く。

と、取りに行く途中に少し寝過ごしたらしいスバルがやって来た。

「おはよーございます…って、なんだろう、この空気…」

「スバルも分からののか」

「あ、春斗さん、エリオ、おはようございます」

「おはようございます！」 「ああ、おはよう」

「で、これはどうしたんですか？」

「少し前に俺がエリオに全く同じ質問をしたところだ。 だが原因は不明…。つまり触らぬ神に祟り無しと言うことだ。 とりあえず朝食を食うぞ。 朝飯食わないと太るらしいからな」

「「「それ本当!!!?」」「」」

「うおあ!?!? 急にどうした!?!?」

春斗が知っているようで知らない人のほうが多い微妙な豆知識を披露した瞬間、通夜モードになっていた女性陣がいきなり食いついてきた。

「春斗！？ それは本当ですよ！？」

「いや、本当だぞ。 実際、相撲とかを職業にして頑張ってる人は朝飯抜いて昼飯大量に食ってるらしいしな」

「マジか…じゃあ、朝飯も昼飯も大量に食ったほうが太らんのやない！？」

「いや、それは一概にはいえないぞ流石に。 痩せるんだったら運動や適切な食事量が必要だからな…ってうん？ まさかお前ら…」

まだ少し眠気の残る頭の中で春斗が唱えた言葉は、

「太ったのか？」

自分を死へと誘う自壊呪文だった。

「春斗さん：流石に女の人に今のは拙いと思います…」

「10歳の子供であるエリオに女性へのマナーを正される19歳の俺：第三者から見ればかなりシユールな光景だろうな。で、結局話を整理すると、近頃食ってばかりだったからいつの間にか体重が増えていたと。だからあんな雰囲気になったのか：体重ぐらいで大袈裟な…」

「体重ぐらいつてなんですか！」

「そうですわ！ 私達にとってこれは重大なことなのですっ！！」

「俺の目の前にそれとは全く無縁そうな奴が1人いるが」

「ふぁい？（口いっぱい米を含みながら）」

「まずは口ん中を飲み込んでから話せ、スバル。コイツはどう考えてもそういうことに無縁な気がするが…」

「ん…（ゴクツ）ダイエットは今まで一回もしたことありませんね、

「そういえば」

「ほらな」

「それだけいつも食べて、一回もダイエットしたことが無いのですの!？」

「あたしは何故か太らない体質なんですよ」

「…それは私への挑戦状なんですね? そうなのですわよね?」

スバルとしては本当のことを言ったままでなのだが、フランには挑発と思われてしまったようだ。無理も無い。

「そういえば、春斗やエリオも一杯食べるのに太らないよね」

「そういう体質らしいです」

「エリオに同じく」

「なんて羨ましいんや…!! 全く努力せずそのプロポーションを維持しとるやと…!? 特にスバルの場合、この世界の不平等さを垣間見た気すらするんやけど」

「はやて…アイツの胸はおかしい。絶対におかしい。だから気にしたら負けなんだ」

きつとスバルの場合、食べたカロリーが全て胸に言っているのだろう。信じたくないが、凄い勢いで食べまくる度に少し揺れる胸がそれを物語っている。

覆ることのない（胸的な意味での）戦力差に、遂に永遠に叶わないことを悟ったのかフランとヴィータが膝を突いて落ち込んでしまった。

「ま、それならダイエットを頑張ることだな。俺らはそんなお前らの目の前でめっちゃおいしく料理を食ってやるから」

「それってただの嫌がらせだね！？ 春斗なんか私達に怒ってるの！？」

「大丈夫だ。逆にそうすることによって精神力が鍛えられ、それに耐えることにより体重が激減を…」

「それ多分ストレスだからね！ ストレスで痩せたって何も嬉しくないよ！？」

「我儚な…別に直ぐリバウンドするんだから少しでも痩せた方が良いだろ？」

「それは横暴だよ！ どう考えても横暴だから！」

なのはと春斗の漫才合戦が展開する。これを天然でやるからこの姉弟は性質が悪い。收拾がなくなるなることがしばしばあるので

ある。

「まあまあ、落ち着いてなのはちゃんも春斗も…ここでそんなこと言ってもしょうがないやろ。それよりも春斗」

「なんだ？」

「当然そこまで言ったからには、私らのダイエットに協力してくれるんやろなあ…？」

「…」

閑話休題。

「と、言うわけで良く分かんが機動六課女性陣ダイエット作戦を始める。全員仕事は終わらせてきたんだろっうな？」

「…(サッ)」

「その狸、露骨に顔を逸らすな。お前だけ仕事やって来い、終わらせないと参加させん」

「そんな殺生な！ す、少し位ええやろ！？ なあ！？」

「部隊長としてそれはどうなんだ。妥協は許さん、部屋に帰れ。既にリインに監視を申し付けてあるから逃げられないぞ」

「…もし、逃げたら？」

「カロリー1000を超える俺特性ハンバーグを1日三食食ってもらう」

「行ってくるす！！」

カロリー1000を超えるハンバーグとはどんなものなのだろうか。少々興味がでてしまったスバルとエリオ（今回の作戦では春斗の手伝い係）だった。

「さて、改めて確認するが…正直俺はこの企画に気が進まない」

「…「何故っ！？」」

「考えてもみろ、俺は太んないからダイエットなんて興味持ったこともないし…知識なんてあってないようなものだぞ。それに見た目からして、お前らそんな太る前と変わらない気がするが…」

「それは無いよ!! 私なんて0.3kgも太ったんだよ!？」

「私だって、この前よりお腹が0.6mも出てるんです! どう考えても太ってますよね!？」

「ああ、お前らはダイエットをする意味が無いことは分かった。取り合えずこの部屋から出て行ってくれ」

―フェイト・T・ハラOWN & amp; ティアナ・ランスター
リ
タイヤ―

早くもリタイヤが出たこの作戦。 まあ当然と言えば当然なのだが、早くも『コレ大丈夫か?』と頭を痛め始める春斗だった。

「で、残ったお前らは? まずフラン」

「…あ…う…… (ボソボソ) kgぐらい…／／／」

「…そりゃまた結構太ったな……外見からは全然分からんのに。なのは姉は?」

「(ボソボソ) kg…」

「あんたは何を食ったんだ!? 何を食ったらそんなに太るんだ!」

「そ、そんなわたし分らないよー!／／／」

「はあ…ま、いいか。取り合えずこんだけk………:すまんシャル。本気で忘れかけてた」

「同じ部屋にいるのに!？」

「ああ…作者すらも本気で忘れかけていたぜ…」

春斗のメタ発言はスルーしておこう。

「で、お前は何kg太ったんだ？」

「えっと…(ボソボソ) kg…だけど…」

「なのは姉とフランに比べたら微々たるもんだな。だがまあ良かった、まともな太り方をしてる奴がいて…全員フェイトさんみたいに桁がおかしかったらどうしようかと思った」

そうなっていたとしたら、機動六課の将来がかなり心配になるころだろうが。

「さて、改めてどうするかだが：まず食事量の制限からやってみるか。それで早寝早起きは：十分すぎるほどやってんな。どうして太ったのかいまいち原因が分からねえんだよなあ：じゃ、そういう方向でどうだ？」

「そうですわね、取り合えずそれからやってみましょうか」

「私もそれで…」

「うん、それで良いと思うわよ」

「じゃ、決まりだな。だが無理に制限する必要性は無いと思うから、少しずつ減らしていくとしよう。食堂の人には俺から頼んでおくから」

「宜しく願いますわ」

「よし。じゃ、早速明日から実戦だ。いいな!？」

「うんっ!」「はいっ!」「分かったわ!」

こうしてシャル、フラン、なのはの3人はダイエットを開始した

———その次の日。

「…」 ↑フラン

「…」 ↑なのは

「…」 ↑シャル

早朝の食堂に広がっていたのは、死屍累々の光景であった。

「ってなんでやねーん!!」

「どうしたはやて。 朝から元氣だな」

「いやこれは突っ込まんと駄目やろ! 何があったんや!？」

「何って…」

恐らく今機動六課中で注目されているであろうその質問の答えに、
春斗は少し遠い目をしていった。

「食えば食うほど腹が減るスープを食わせたただけだぞ」

「鬼畜やないかー!!」

それは確かに鬼だろう。一応記しておく、『無理にダイエットすると身体に良く無い』と言ったのは彼自身である。

「大丈夫だ。一応機動六課所属だからな、多少のリスクは問題ない」

重ねて記すが、『無理に制限する必要性は無いと思う』と言ったのも彼自身である。

「お腹が…減り…ましたわ…」

「うう…訓練できないかも…」

「はやてちゃん…お菓子ちょうだい……」

「いや、死屍累々やん! 日常生活に支障が出るレベルやでこれは!」

「大丈夫だ、問題ない。取り合えず食堂のおばちゃん、一番いいスープを頼む」

「あいよ！」

ゴトツ（食堂の従業員の手でスープが置かれる音）

「…あれ？ 先程のスープと違いますわね…」

「ああ、これは普通に腹が膨らむスープだ」

「「「…（ばあああ…！）」」」

「あ、ただし後になればなるほど今の2倍は腹が減っていくからな。その少ないエネルギーで何処まで活動できるかが鍵だぞ」

「「「…（ガクッ）」」」

こうなるとキツイのはなのはである。彼女には問答無用でこの後に教導が待っている。シャマルは保険医だし、フランは一般局員だからそこまでエネルギーは消耗しないだろうが、なのははこれから一日中、歩くだけで空腹になるような食べ物だけで過ごさなければならぬのだ。

「せめて…せめて春斗、私だけでも…この後、教導があるから…！」

「エース・オブ・エースは空腹なんかで自分の信念を折らないよな？
なのは姉」

「…（涙）」

弟に泣かされる姉。何かもう…色々と台無しだった。

―朝↓昼までキング・クリムゾン中…―

「いやいや、元ネタしらへんのに何言ってるんや」

「はやて、何言ってるんだ？」

「あ、ヴィータ？ いや、別に…」

「そうか？ それよりも、アレ何とかしてくれねーかな…正直、見ているのすら辛くなってきた」

「え？」

「…」↑フラン（死体）

「…」↑シャルマル（死体）

「…」↑なのは（屍）

1人屍が混ざっていた気がする。

「ってなのはちゃん！！　しっかりするんやー！！」

「ああ…刻が見えるの…」

「って、だから元ネタ知らへんのにネタを使いすぎや！　いつか消滅するで！？」

「だから落ち着けはやて！　錯乱しすぎて何言ってるのか分からねーぞー！！？」

朝よりも酷いこの状況。　何があつたのかは大体予想はつくが、フランとシャルマルはそんなに動かない仕事の筈である。　何故ここのまですで疲弊しているのだろうか？

「何故今日に限って大量に仕事が回って来るんですの…」

「如何して今日に限って…たくさん…患者さんが来たのかしら…」

「まあ俺が手を回しただからだ」

謎は全て解けた。

「貴方は私たちを殺す気ですの!？」

「いや、それは……………そんなことある訳ないだろう、馬鹿だなあ★」

「今の間はなんですか!？　　というか語尾に星つけたって、貴方がやっても気持ち悪いだけですからね!？」

「言うな。　　今のは俺でも無いと思った」

春斗、自爆。　　しかし彼には珍しく後悔した。

「心配するな。　　昼は普通の食事だ」

「!!　　ホント!？」

「食いつきすぎだぞなのは姉。　　…っと、ほら来た」

くフラン達の昼食く

・ポテトサラダ

・蜂蜜掛けたリンゴ

・にんじんジュース

「つてちよつと待ちなさいですわー!!」

「お前は元気だなオイ…どうしたんだよ？」

「何ですかこれ！　こんなの食事じゃありませんわよ！」

「そりゃ、消化の良いものを選んだからな」

「今はとてもカツ丼とかのお肉が食べたいよお…」

「お前らダイエットしてるんだよな！？　そうだったよな!？」

早くも揺らぎ始めた彼女達の石の決意。　まあ初日からこのスパル
タではめげるのも分かる。

「リタイアならリタイアでもいいぞ？」

「い、いえ…まだ、まだ私は頑張りますわ…」

「私も…なんとか…」

「ふえええ…私、もう無理かも…」

そう言って春斗特性のダイエット料理に口を付けるフラン達。

当然だが、腹が膨れた気がしなかった。しかし彼女達にはまだ仕事が残っている。少し休憩し、空腹で震える身体を引きずりながら、全員それぞれの仕事場に向かうのだった。

―昼↓夜へキングクリムZ（ry―

「「…」」

「ああ、遂に台詞の括弧が3人纏められたで…もう言葉喋ってへんし…というか燃えつきとるし…」

「これ一週間続けるのか…無理じゃね？」

「少なくともあたし達は無理です」

「はい。絶対に無理です」

確かに、三食通常の5倍以上は食っているような彼らが今のフランらのようなダイエットをすれば、餓死して死んでしまう恐れすらあるだろう。人にはやはり向き不向きというものがあるのだ。しかしこの考え方だと、フラン達にもダイエットは不向きだと言えるのでは無いだろうか？

「やり方にもよるけどな、まずはカロリーの軽減とかだろ？ あ、でもやはり空腹スープの方は止めた方が良かったか…？」

「…ごはん…」

「？ 何か聞こえたか？」

「え？ いえ、何も…」

「……おにく…」

「いや、やっぱり何か聞こえるぞ」

「ちょ、ちょっと！ 怖がらせないで下さいよ！」

「いや本当だって…何か、亡霊の如き声がなのは姉達の方角から」

「「「私たちだー！！！」」」

「「「わあああああああ！？」」」

先程まで屍状態だった3人が急に起き上がり春斗に飛びついた。
春斗はそれを転げまわって回避する。

「お腹が減りましたわ…早く…早く御飯を…！！」

「お願い春斗おー！ 私が間違ってたよ…ダイエットなんてするもんじゃないね！」

「お願い…春斗君…もう…止めて…ッ」

「駄目だ…もう諦めモードに入ってるぜ、こいつ等…」

飛びつきが失敗し、起き上がる気力も無くなったのか床にへばり立つ元氣すらなくなった様子のフラン、なのは、シャル。 どう考えてもこれ以上ダイエットを実行できるとは思えない。

仕方ないか、と諦める春斗。 それに今回のメニューは恐らく自分

にも原因がある。ダイエットなんてやってことが無いからほぼ適当に無理矢理なことを考えていた節があるのだ。一応今は改善したものを作ったが、これでは試すことも恐らくは出来ないだろう。

となると。

「何処へ行く狸」

「（ギクッ）」

犠牲になるのは当然、ダイエットの件があやふやになりかけていたはやてである。

「心配すんな。ちょっとメニューを変えたからな、もうなのは姉達のようになったりはしない」

「い、いやでも…私にはやっぱり不向きかなあ、って…」

「そうか？ まあそれならそれでいいが…ふむ、とすると俺はエリオでもランニングするか」

「ああ、そうしてくれるとありがたいんやけど——ってちょっと待ちい！ どういうことや!？」

「ん？ ああ、言ってなかったか。丁度良いから俺も早朝ランニ

ングを始めようと思ってな…が、1人だと流石に詰まらないからダイエツト参加者でも巻き添えにするかと考えたんだが、皆不参加なら仕方ないだろ…おいスバル、エリオ、実はな——」

「ストップ！ 待つんや、やっぱり私参加する！！」

「え？ 何故？」

「ちょ、ちょっと急にやる気が出たんや！ やっぱりダイエツトはせなアカンかなあ、と思っただけや！ 本当に！」

？ と首を傾げる春斗の真後ろで、少しはやての言葉と春斗の言葉を空腹で働かない頭で考えてみるフラン。

はやてがダイエツト計画に参加する

←

春斗がそれに便乗して、参加者を巻き込んだランニングをしようと思っている事が発覚

←

このまま行けば参加者ははやて1人

←

……朝、春斗とはやてが二人きりでランニング…？

そこまで考えたフランは、人間の目に止まらない速度で起き上がり声を大にして言った。

「ッ、それ、私も参加しますわ！！」

「なん…だと…？」

「（チッ、読まれたか…流石やな、フラン）あ、フランも参加するんか？」

「（そ、そう簡単には行きませんわよ！）え、ええ。やっぱりやてさんの言うようにダイエットって大事ですものね」

「フラン、本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですわよ！ …今日は後、御飯さえ食べれば…」

「そうか…なら良いが。じゃ、ちょっと待ってろ。打ち合わせしてくる」

気になる単語を発した後、乙女の戦が現在進行中のはやてとフランの両名から離れる春斗。 現在舌戦…ではなく、アイコンタクトで全て会話を済ませている辺り、この2人は意外と相性がいいのかも

しない。

「(しかし、フランもよーやるなあ。いくら春斗の為とはいえ、散々今日は酷い目にあったのに)」

「(は、春斗の為なんかじゃありませんわよっ！ その、やっぱりダイエットは大事ですから、それだけです！)」

「(いい加減素直にならんと、婚期のがすで〜？ スバルはともかく、私とフランは正直ギリギリだと思ってるんやけど)」

「(…、いいですわよ。 私、結婚とか興味ありませんから)」

「(ほお〜…?)」

詰まらなそうにはやてからそっぽを向くフランと、ニヤニヤしながらそれを見るはやて。 傍から見れば何がなんだかわからないが、今はまだはやての方が優位な状況だと言えよう。 だが問題は朴念仁春斗がそれに気づくかどうかであるが、それだけは正直望み薄である。

そのままの状態で時間が何分か経過し、春斗がようやく戻ってきた。

「よし、決まりだな…はやて、フラン」

「はい」「なんや？」

「明日は早朝6時起きでロビー前集合だ。動きやすい服を着て来い。スバルとエリオは特別参加で、ティアナはそんな俺達の為に飯を用意して待っていてくれるそうだ」

「え？ ティアナ、ええんか？ 場合によっては私らより早く起きなきゃアカンやん」

「食堂のおばちゃんも快くOKしてくれたしな、何も問題はねえ。こいつのパイはおいしいからな、楽しみに待っておけ」

「では、お言葉に甘えて：宜しく願いますわね、ティアナ」

「はいっ！ 分かりました！ 『春斗さんの為に』とびきりのを用意して待っています！！」

「ああ、楽しみに待ってるぜ」

此処で、ティアナの言葉によく注意して聞けばお分かりだろうか。彼女は目先の欲に惑わされ、春斗らの役に立つことによって人知れず春斗へのポイントを稼いでいたのだ。 なんとという策士。 それでいて無意識なのが恐ろしいところである。

因みに、これを聞いた乙女の戦勃発中の両名は：

「（春斗は意外と億手やからなあ〜♪ 朝なら襲っても分からないやろうし…フランをどうするか、やな）」

「（あ、あの目は絶対に春斗を襲おうとしている目ですわ…!!
絶対に春斗には手を出させないようにしないと…!!）」

哀れ、『春斗と2人きりになれるチャンス』という目先の欲に見事に囚われており、ティアナにまで気が回っていなかった。

だから、ティアナの春斗を見る目が『女の敵』では無いことにも、誰一人気づいていないのだった。

次の日。

「オーッス。眠たそうだな」

「ふわぁ…せやなぁ…」

「結構眠たいですわねえ…」

「だが、チビ二人はやる気満々だぞ？ ほら」

次の日の早朝、何とか起きてこれたフランとはやて。

春斗の指差した方向では、エリオとスバルが思い思いのストレッチをして身体を温めていた。　どうやら本気で望むようである。　…　いくら春斗と共に居たいからと言っても、体力が元々無いはやてと、兵器の中でも体力の無いフランはこれから始まるハードなダイエツトに顔を引きつらせた。

「っし、ストレッチは終わったか？」

「はいっ」　「はい」

「お前らも少しはやっておいた方がいいぞ。　俺は少し前に終わらせた」

「あ、先程私達は軽くやっておきましたわ」

「うん、本当にかかるーくやけどな」

「それならいいか。　よっしゃ、行くぞー」

春斗による何処か抜けた号令と共に、ジャージ姿の彼らはミッドチルダを走り始めた。

出発して100mを過ぎたところで、何か見覚えのある影が見えるのに気づく。

「…？ あ、ヴァイスじゃねえか！ こんな朝早くからどうしたんだよ？」

ランニングを止めて、店の前にいた——ヴァイスに話しかける春斗。その声を聞いたヴァイスも振り返り、春斗を見て少し驚くと笑顔で春斗の肩を叩いた。

「おお、ハルト。おはようさん…いや何、ちょっと冷蔵庫の中のもんきらしちまってよ」

「食堂で食べば良いんじゃないのか？」

「栄養ドリンクだよ。最近仕事が増えてきてるから飲み始めてるんだ…っと、後ろにいるのは…スバルにエリオに…フランに…八神隊長！？　お、おはようございます！」

「いや、今更畏まらなくてもええよ？　今は朝早いし、普通に碎けてくれればいい」

「ええ…そうは言われましても…」

「まあまあはやて。この馬鹿は変なところで堅いんでな…気にすんなって」

「馬鹿は余計だ」

「はっはっは、言うな。　…そうだった。お前、妹とはどうなってる？」

屈託無い笑いから、急に少々低い声に変わる春斗。感情の移り変わりが激しい男だと思いつつ、ヴァイスの方も少し沈んだ声でそれに答える。

「すまない…お前と話してから少し会いに行こうとしたんだが、まだ決心が付かないな」

「そっか。　ま、ゆっくりと和解していけばいいと思うぜ？　俺にはそれしか言えないからな…」

「いや、あの後少し楽になったよ。本当に感謝してるぜ…出来れば、俺の代わりにラグナへ会いに行って欲しいんだが…いや、俺の代わりに謝って欲しいとかじゃない。俺が傷つけてしまった、右目の状態を見に行って欲しい」

「！」

「？ どうした？」

「…ああ、分かった。いいぜ、その頼み承った。明日なら用事も無いしな、それで良いか？」

「本当か？ ありがとうよ…それじゃ、もう少し仕事頑張ってくるぜ…八神隊長、頑張ってくださいね。それとフラン、エリオ、スバル。またな」

「「はいっ」「はい。 また後でお会いしましょう」 「ほな、またな」」

少しだるそうに手を振って六課の方へ歩いていくヴァイス。 それを軽く見送って再びランニングをやり直そうとしたフランらだが、今回の主催者の春斗がヴァイスの方をジッと見ていることに気づく。

「どうしましたの、春斗？」

「…っ、あ、フランか。 悪い、もう一度出発するか」

「？ 大丈夫ですか？」

「ああ」

短く返事をした春斗だが、

「…問題ない。 恐らく、な」

結局そのヴァイスの背中が消えるまで、彼が出発することは無かった。

「ふう、お疲れさん。これで終わりだ」

春斗のその声と共に、午前8時ごろようやくランニングが終了し六課のロビーにへたり込むはやてとフラン。

その後、結局往復4kmを走った。スーパダイエット（フラン命名）よりかは効果はありそうな気がするが、やはり魔法や術での強化も無しだと疲れてしまう。強化したらダイエットの意味が無いことも確かだが。

「これを夜も走って、一週間続けるか。それで効果を確かめるってのはどうだ？」

「それでええんやないかな…はあ、はあ…疲れた…」

「……2人になる余裕なんて微塵も存在しませんでしたわね…」

「フラン、何か言ったか？」

「いえ、何も言ってませんわ!？」

「如何して疑問系なんだよ」

少し首を傾げつつ、スバルやエリオと共にティアナの用意したパイとジュースを口にする。彼曰く、『ティアナは仕事に不可欠な糖分を含む料理を作る才能があるかも知れない』らしい。

「それじゃ、仕事行くか。エリオ、スバル、ティアナ、行くぞー」

「「はーいっ!」」「「はいっ!」」

「フェイトさん、なのは姉、フランとはやての連行宜しく」

「うん、任せて」「いいよー♪」

「「って何時の間に（いたのですの!?!）（いたんや）!?!」」

そんな異常の無い日常が、ゆっくりと、且つ有意義に過ぎて行き…
遂に一週間が経過した。

「キンクリは流石に辞めたらしい」

「春斗、何を言ってますの?」

「別に何でもない。　　というかさっさと乗れ」

「うっ…」

一週間が経過したため、あの忌まわしき体重計に乗ることになった
フランとはやて。だが、再びあの数値が出たらと思うと怖くて乗れ
ずに10分以上経過している。

「…じゃ、私から…」

だがそんな硬直状態に終止符を打ったのは、部隊長八神はやて。局員よりも自分を犠牲にするその姿勢は素晴らしいと言えるだろう。

はだしになり、目の前に置かれた忌まわしき物体へと足を乗せる。そして足で電源を入れて暫く待つと、電子音が響き、結果が表示された。

「……………ふっ」

ドサア…（はやてが倒れた音）

「はやてええええええええええっ！……！！」

「嗚呼、春斗君…ごめん、やっぱり私、ダイエット無理や」

「諦めるな！気をしっかり持て、まだやれるだろ！！？」

雪山で遭難したかのようなシーンだが、誤解しないで欲しい。これはダイエットに失敗（？）しただけである。こ

「…っ…はやてさん…」

「フラン…後は、任せるで…！」

「……お任せ下さいませ……！」

繰り返すが、これはダイエットである。

「とにかく、フラン。乗ってくれ」

「……はい」

短く返事をし、少し深呼吸をすると体重計へと乗り、電源を入れるフラン。そのまま硬直し数秒待つと、再び電子音が響き体重が表示された。

「……あ」

「どうした!？」

また倒れるんだろうか。誰もがそう思ったとき、まるで夢かと思っ
っているかのような声がフランから聞こえてきた。

「……痩せてる……」

「え?」

「痩せてますわ…元の体重よりも、痩せてます…！」

「……（チラッ）」

「（コクッ）…ああ。…フラン。よくやった！ ダイエット、成功だ…！」

かつてない犠牲を払ったこともあったが、何とかフランのダイエットは此処に完結したのだった。少し感動のあまり泣いてすらいるフランを見ていると、なんだかダイエットを強要してしまったようで少し申し訳ない気持ちになる。

さて、残念ながら痩せられなかったはやては溜息をついて直ぐ傍のイスに座った。

「あー…やっぱり私はむかへんのかなあ」

「いやいや、しかしおかしい。あの運動音痴のフランが痩せてはやてが痩せてない…？」

そう言って少しはやての身体を眺める（決していやらしく見ているわけではない）春斗。彼としては何か発見があるかな、と思う程度だったのだがふとある一部分でその視線が停止した。

と同時にある突拍子もない考えが浮び、その考えを思考が全力で否定しながらも本能が確認せよと警報をならしている。しかしこれを聞くと、正直に言って聞いた方が大惨事に見舞われる気がする。

少し悩んだが、それなら頼める奴に頼めば良いんじゃないか？ という結論に至り、フランとはやてに1つ頼み事をすることにした。

「あー、フラン、はやて」

「なんや？」 「なんですか？」

声のトーンが違いすぎることにちよつとやりにくさを覚えながらも、体重計を指差し、

「これを片付けてきてくれないか？ シャマルのところで良いと思うから」

「1人で十分では？」

「一応身体を急に動かしたようなもんだから、身体に異常がないかどうか検査しに行ってくると良い」

「なるほど、そういうことならいこか」

「はい、そうですわね♪」

はやてが体重計を持ち、そのまま歩いていく両名。完全に歩き去ったのを確認し、たまたま近くに居たティアナから端末を借りて、シャルへと連絡を取った。

「あ、シャルか？ …ああ、ちょっと頼みてえことがあってな、俺だと殺されかね無いから…変わりにやつてもらいたいんだが…大丈夫だ、断言は出来ないが、お前に被害は行かねえと思う」

「フラン & amp; はやて、身体計測中…」

「春斗、戻ったで」

「戻りましたわ」

「…、」

「あれ？ シャマル…そんな深刻そうな顔をしてどうしたの!？」

戻って来たのは、フランとはやてだけでは無く保険医であるシャルも二人の付き添いのような感じで付いてきていた。しかしその

顔にはかげりがあり、何かが起きていることを暗に告げている。

「……………シャル？」

「……………ええ、貴方の予想通りよ」

「……………そう、か……………」

そしてなにやら深刻そうに春斗と頷き合う。 慌ててはやてがシャルに聞いたのだした。

「ちょ、シャル！？ 私たちの体に異常でもあったんか！？」

「いえ、異常と言うかなんというか……………」

「非常に言いにくいんだが……………」

シャルはともかく、あの春斗ですら迂闊に言えないような言葉。 いよいよ心配になってきたフランとはやて。

その後ろでは、どうやら春斗とシャルの言葉を理解したらしいティアナが涙を拭いていた。 フラン達としてはその涙の訳を早く知りたいのだが。

「いえ…世界って、ままならないものだなー、って思っただけです

…」

「どこにそんな要素があったんや!？」

「えっ、ちよつと本当に心配になってきたのですけれど」

素早く視線を交わし合う春斗、シャル、ティアナ。そして数瞬後、一瞬の内に交わされたアイコンタクトによる攻防戦にて敗北したシャルは重い口を開いた。

「ええと…非常にいいにくいんだけど…」

「「?」」

「貴方達が瘦せた箇所と太った箇所の変化にちよつと共通点があったね?」

「「え?」」

そう言ってシャルが開いたのは、端末に入れた先程の身体計測のデータ。見ると、はやてとフランのデータの一部分が光っている。

「…どうもね、貴方達……………」

「…シャルさん」

「…その…いいづらいのだけど…」

「…言わなくて、いいですわ…」

「…貴方達…二人とも、どうやら“胸”の脂肪から体重が増減して
るわね」

フラン・T・ハラウン…バスト↓前回測定より7cm弱減少

八神はやて…バスト↓前回測定より11cm強増加

「……………」

「……………」

広がる沈黙。

動きがあったのは、

「…つん…。。。。*…。」ダッ

フランだった。

「フライン！！泣きながら逃げるな！一応ダイエットは成功したんだから笑顔で泣け！」

「五月蠅いのですわー！！春斗なんか私のことなんて分かりませんわよー！！。（ノム）・・・」

「まさか俺だってこんなオチ予想外だよ畜生！」

「えっと…これ私、喜んでええんか？泣けばええんか？」

「笑えばいいと思うわよ」

「なんだろう…フランさんのことが人事だと思えない…涙が止まらない…」

見事に彼女達のダイエットは成功（？）した。いや、完全に成功したかと問われれば少し首を傾げなくてはならないが。

さて、この件に関しては余談がある。

「あっ、体重が減ってる…走り込みしてるからかな？ うーん、これ以上減ると体に悪いかもしれないし、もう少し食べる量増やそう、っと♪」

「あれ？ 僕も少し減ってる…増えないのに減るって何かおかしい気がするなあ…」

結局、今回ダイエットが成功したと言えるのはこの両名だけだった…と言えるだろう。

「ダイエットなんて懲り懲りですわー！！」

「だから泣きながら叫ぶな！ …あれ？ この構図って色んな意味で誤解されねえ？」

そして今日も、フランの叫びは機動六課全体に木霊するのだった。

さて、時間は同日の夜に移る。

あの後も色々あって、やはり誤解したフェイトが室内で攻撃を仕掛けてきたりフランが部屋に閉じこもってしまったので機嫌を直すのに2時間程度費やしたり、スバルとエリオが痩せたという報を聞いてはやてと春斗がギャグ的な意味で転けたりなど。

「なんだろうな…めっちゃめっちゃ疲れた…」

ため息混じりにそう言って、六課のヘリポートの地面に座り込む。
此処は良く月が見えて綺麗なので、一部の男性局員しか知らないスポットだった。利用する目的は不純なもので、失恋の傷心を癒すためだとか春斗のようにストレスが溜まった時に来たりだとか、その程度のことなのだが。

「…お、ハルトじゃねえか？」

「ん？ ああ、ヴァイスか」

ふと声を聞き後ろを振り返ると、そこにいたのはヴァイスであった。手には缶コーヒーを2本持っている。

「これ、飲むか？ 今日もなかなかカオスだったらいいからな」

「…ああ、もらっていいか？」

「そらよ」

春斗の返答を聞き、左手に持っていた方の缶コーヒーを放り投げるヴァイス。それを片手でキャッチし、それを見届けつつヴァイスも春斗の隣に座り込む。

「しかし、ダイエットねえ。俺ら機動六課男性陣には恐らく永遠に理解できないな」

「そうだよな。そしてそれにまきこまれる俺の心情も察してくれ」

「はっはっは、違うない」

「いや、笑い事じゃねえから」

そう言いながら笑い合い、雑談する春斗とヴァイス。

これだけ見れば、彼らがどれだけ仲がいかをうかがえることが出来るだろう。

「————それで？」

「ん？　なんだよハルト。　それで、って？」

夜も更けてきて、そろそろお開きになりかけた瞬間に春斗がヴァイスの肩を叩きながら笑いながら呼びかける。

それに笑顔で応じるヴァイス。

春斗、笑みを顔に貼り付けながら、ただこう言った。

「機動六課に何の用だ、
無還者」
リセッター

『…』

返ってきたのは、肯定でも否定でも言葉でもない。

『攻撃』であった。

“ヴァイス”がその指を春斗に向けたと同時に、春斗は座っていた位置から驚異の跳躍でその場から離れる。

瞬間——豪音が鳴り響いて閃光が走り、春斗がいた位置から直線上にヘリポートが消滅した。

「————オラァッ!!」

空中に跳んだ春斗は体制を崩したかのような格好でそのまま拳を振るう。

“ヴァイス”との距離は推定20m以上。しかし彼はそれに構うことなく拳を振り切り——

轟ッ!! という音が空気を裂いて、

直後、ヴァイスへと“何か”が直撃した。

再び夜の空へ粉碎音が響き渡る。春斗が空中に浮いたまま辺りを見回すと、薄く、それでいてかなり高度で堅固な結界がヘリポートに張られていた。

「（機動六課の結界魔導士全員を注ぎ込んでもこれ程の結界は出せねえだろうなあ…俺も俺だが、やはり規格外は変わらず、か）」

そう思いながら、空中で一回転しボロボロになったヘリポートへ着地する。

「…少し違えたか。 テメエは無還者じゃねえな？ だが、気配も匂いもこれは無還者だ。 改めて聞くな、 テメエは何だ？」

『…、』

その問いにも反応せず、春斗には見えない粉塵の向こうで黙り込んでいる“ヴァイス”。

一方の春斗は、敵の一瞬の動作も見逃さないよう睨むように見ながら構えている。

もし相手が無還者に縁がある者だったりすれば最悪である、と春斗は考える。

なぜならば、春斗が最初に“ヴァイス”のことを無還者と言ったのは、隠しきれていない強大な魔力と違和感のある言葉からそう推測したものであり、もし無還者の協力者であれば——無還者の周囲に、本人と同様の力を持つ者がもう一人いることになる。

果たして、空気が張り詰めたまま1分か2分が経過し——

『フム』

沈黙を破ったのは“ヴァイス”であった。一言呟きを漏らすと同時に彼の周りを取り囲んでいた粉塵が、ボッ！！と音を立てて霧散し、消えていく。

『何故“ヴァイス・グランセニック”デ無イト分カタ？ 吾輩ノ
憑依ハ完全デアッタ筈ダガ』

「テメエがヴァイスで無いと分かった理由は3つある。一つ、完全て言うけどな、“兵器”おれたちでないといけない位だったが、テメエからかなり高濃度な魔力が微量だが漏れてやがるぜ。ヴァイスのものとは思えない禍々しい魔力がな」

『ホオ？ ソレハ気ヅカナカタナ』

「二つ、一週間前に朝テメエと出会った時、ヴァイスの妹のラグナの話をしたな。だが、ラグナの負傷した目は右目ではなく左目だ。ヴァイスは負傷させた大事な妹の患部を間違える程愚かな馬鹿じゃない」

“ヴァイス”——いや、人間のする笑みとは思えない程狂った笑みを顔に貼り付けながら、春斗の話を聞く“何か”。その口はつ

ぶやく言葉と共に動くが、とてもその声は人間の出せる声では無く。

得体のしれない悪寒と鳥肌を感じながら、春斗は次の言葉を紡ぐ。

「で、3つ目だが」

『?』

「俺はブラックコーヒーが嫌いだ。　ヴァイスならよく知ってるはずだぜ?」

『:フツ、ハハハハハ!!　成程、ソコマデハ考エテイナカタナ。全ク、汝等“兵器”ハ誠ニ面白イ』

「さて、質問には答えたぜ?　次はテメエの番だ。　もう一度聞こうか、『テメエは無還者の何なんだ?』」

『ヨカロウ、楽シマセテクレタ褒美ダ。　答エヨウデハナイカ』

楽しそうに笑いながら、“ヴァイス”もその声で言葉を紡ぐ。

『吾輩ハ汝ラが“無還者”ト呼ンデイル男ノ話相手:否、従者トデモ言ウベキカ』

最悪の予想が当たった。　春斗の顔が一瞬だけ歪んだのを見逃さな

かった“ヴァイス”は更に楽しそうに話す。

『安心シロ、コノ行動ハ吾輩ノ独断ダ。主ニモ報告ハセヌ』

「分かんねえな。こんな面倒な行動をしてテメエになんのメリットがある？ テメエ程の実力なら、指一つで機動六課全勢力を相手にだって出来るはずだ。わざわざヴァイスに化けてまで潜入して来る理由を知りてえな。まさか俺ら兵器を見に來ただけとかじゃねえだろ？」

『御名答。其ノ通りダ、No. 2“消失者”ヨ』

バレている。“兵器”であることだけではなく、自分の忌まわしき“製造番号”や“二つ名”までも。血が出る程唇を噛み締めながら、更に春斗は目の前の“敵”に質問する。

「尚更分からねえ。 テメエは何が目的だ？」

『ナアニ、 簡単ナ事ダ。 アノ人間共ガ造ッテイタ兵器ノ、主以外ノ生き残りニ興味ガ沸イタ。 ソレダケダ』

「…人間共？ まるで自分が人間では無いみてえにいうんだな」

『其ノ件ニツイテハ言ウワケニハイカンナ。 主ニ止メラレテイル』

「…そうかよ。 じゃあ最後の質問だ」

そう言うのと、春斗は腰を低くし、足に力を込め、瞬時に飛び出す準備をし、

「ヴァイスを何処へやった？」

と、聞くと同時に飛び出した。

春斗の本気のスタートダッシュのスピードは、秒速700km超を記録する。一瞬だけだが、それは瞬間移動にも等しい速度であることには変わりはない。

パパパパンッ！！ と、空気が破裂する音が響き——響いたと感じた瞬間には、春斗は“ヴァイス”の後ろを取っていた。

『！
ムッ』

そして“ヴァイス”が振り向いたのは、春斗が攻撃を放つ寸前であり。

「零距离」

———パニッシュインパクト!!

巨大な光の砲撃が彼の拳が振るわれると同時に放たれ、夜空の下、本日最高の威力を持つ一撃が“ヴァイス”に直撃した。

「（手応えは感じた!!　だが、一瞬のうちに障壁を展開された……!!　構えてから放つまで2秒も経ってねえのに今の砲撃の威力を3分の2以上殺す障壁を展開するとか、マジでバケモンだなクソッ……!!）」

『見事。　誠ニ見事。　S級砲撃ナラバ無効化スラ可能ノ吾輩ノ障壁ヲ打ち砕クトハ、本当ニ汝ラハ面白イ』

“消失”の概念を喰らって平然している“ヴァイス”は、愉しそうに手を叩きながら口を開く。

『シカシ、1ツ汝ハ勘違イをシテイルナ。吾輩ハコノ“ヴァイス・グランセニック”ノ身体ニ取り付イテイルダケダ。憑依、ト呼ベバイイカ？ 吾輩ハ汝ノ言ウグランセニックデアリ、ソウデハナイノダ』

「んなことはどうでもいい。それならさっさとその体を返しやがれ」

『…フツ、アノ頃トハ全ク違ウナ。自分ノコトデハナク友人ノ身体ヲ優先スルカ…』

「…あの頃？ …ッ！？」

“ヴァイス”の言葉に引っかけりを覚えた春斗はその意味を考え――目を最大限にまで見開いた。

そして口を開こうとした瞬間、それに被せるように“ヴァイス”が低い声を轟かせた。

『^{パニッシャー}消失者…否、“タカマチハルト”。真実ヲ知ロウトスルソノ姿勢、誠ニ興味深イモノダ』

常人なら、気づかぬ内に膝を付いてしまいそんな威厳を持つかのような言葉。

春斗はこの声を本能が知っている。

そう、自分が子供の頃、投与されたDNAの中で唯一“悪夢”として記録されていた声。

『ダガ、知レ。　コノ件ノ真実ハ、汝ガ思ウ以上ニ闇ノ中ヘ沈ンデイル』

「テ、メエ」

『真実トハ、イツノ時代モ残酷デ穢レテイル。　汝ハ知ルベキデハ無イ』

「まさか、テメエ、は…」

『――ソウデアッタナ。　吾輩ノ名ヲ言ウノヲ忘レテイタ』

冷や汗が止まらない春斗を見据えながら、“ヴァイス”の身体から得体のしれない真っ黒な“何か”が溢れ出してゆく。

そして。

パンツ、と。

何かが、ヴァイスの体から飛び出した。

「――――ッ!!!?」

飛び出した“何か”は春斗の真横を横切り、そのままの速度で消えていく。

『吾ガ名ハ“デミス”。真ノ名ハ分カラヌ、トイウコトニナツテイル。汝モ吾輩ノヨウニナリタクナケレバー――今ハ只、時間ニ身ヲ任セヨ。マタ会ウコトモアルダロウ。次ハ主ト共ニ、戦場デナ』

春斗は振り向けない。

そして“デミス”と名乗った“何か”の気配が消えると、そのまま膝をつき息を吐く。

「…ッ！　　はあ、はあ、はあ…！！」

冷や汗で水たまりが出来ている。　これは本能が危険信号を発していた証拠でもあり、そして…

「…畜生…情けねえ…ッ！！」

彼が怯えた証拠でもあるのだった。

分からない。

だが、大昔に実験と称して投与されたDNAが、拒絶反応を示しているのは確かだ。

何の、誰のDNAかは聞かされていない。当然といえば当然であるが、“デミス”というのが何者であるかはなんとなく理解した。

「何故だ…」

満月が照らす、ボロボロになったヘリポートで春斗は呟きながら自分の頬を触る。

小さく、斬られていた。

それこそ、彼らにとってはそこまで意味の無いような傷。

だが、治らない。

再生能力というものが彼らにはあるのに、傷が治らない。

不可解な点はいくつもあるが、春斗は今はまだ只管に、

「何故…この時代に…古代ベルカ時代の“王”がいる…!?!?」

どうしても受け入れられない現実を、噛み締めるのだった。

〳〵次の日〳〵

「おはよう、春斗…あれ? その絆創膏、どうしたの?」

「…?」

「ああ、なのは姉にフラン…ちよつと転んじまってな」

「そうなの? まったくもう、変なところで春斗は抜けてるからね。
気を付けなきゃ」

「あはは、わりいわりい」

笑い合う姉弟。少し雑談し、しばらくして仕事があるからとなのは先に行った。

後に残ったのは、春斗とフランのみ。しばらく無言の時間が続くが、先に口を開いたのはフランだった。

「何がありましたの？」

「…、」

「私達には共通して驚異的な治癒能力がありますわ。その程度の小さい傷なら、1秒も経たずして治るはず…考えられるのは、そう簡単に治癒できない傷であるのかあえて治癒をしないのか…」

「すまねえな」

その声は、フランには重く、聴きたくない言葉だった。

「話すわけには、いかない。まだ…な」

「…どうしてですか？」

「もう少し、待ってくれ。頼む、お前には絶対に迷惑は掛けない」

「…、」

少し見つめ合う兩名。

そしてこの言葉に折れたのも、フランだった。

「わかりましたわ。でも、何かありましたら絶対に私に報告するのですわよ？」

「ああ、分かってるさ…」

その眩きは、空気に溶けて、消えた。

余談になるが――――――

“ ホテル・アグスタ事件 ” が起きたのは、この数日後の事だった。

“生命”（前書き）

安定の深夜（というか朝）更新ッ！！ 眠すぎて死にそうな天破です。

今回はとんでもなくシリアスです。始まりから終わりまでシリアスです。もうね、ギャグがない話を私が書くことになるとは思わなかった。精神的にも死にそうですが私は元気です。

この話を読むにあたっての注意事項！！

- ・シリアスです。『ギャグなんて無かった』状態です。
- ・なのはさん好きの方ご注意ください！ ちょっと今回はなのはさんが悲惨です。
- ・フェイトさん好きの方ご注意ください！ 今回はフェイトさんがズタボロです。
- ・春斗がキれます。結構怖いです。

さて、新章突入ということで無還者VS機動六課がいよいよ本格化してきたような来てないような。ただ、正直春斗やフラン達が協力しなければ絶対に無還者には勝てませんけどねw

まずはその前哨戦的なもの。果たして最後に笑うのは誰でしょう？

それではどうぞm——m

“生命”

『ぎゃあああああああ！！ やめ、止めてぐ、れ…！！』

『嫌だ！ 俺には家族が居るんだ！ 頼む、助k——』

『あゝあああああああ！！ が、どうゝじでこんな』

「…うぷっ」

場所は機動六課会議室——
ミーティングルーム

見ているのは、本部のロストログア保管所で起きた“レリック”強奪事件——否、『レリック強奪虐殺事件』でかるじて残っていた監視カメラの映像だ。

見ている局員の中には、本人の希望によりキャロやエリオ、春斗やフランの姿も見える。だが年齢問わず、その場にいる局員の顔は青かった。

『じ、にたくなゝい、やめ…』

『任務条件は“ロストログアレリックの強奪”及び“兵器発見局員の抹殺”です。その命令は受け付けられません』

『ぞ、んゝな…あゝ…』

『ひいひいひいひい！！くるな、来るなああああゝあゝ…』

マジックオーブン
『魔術開放…詠唱破棄 “フォトンランサー…”』

「…ッ！！？ 止め——」

『は、はは…こんなの、聞いて、ない——』

『“エクスシフト”』

蹂躪しているのは、“黒いドレスのようなものを着た男”。

蹂躪されているのは、ほんの2日程前まで笑顔で会話していた管理局員達。

監視カメラ最後の映像は、男が一瞬で生み出した金色の槍が男性局員を抵抗なく貫いた所で終りを告げた。

「…ッ！！！！」

歯を食いしばりながら、フェイトが思いっきり拳を握り締めて映像の男を睨む。

「…今の、魔法は…」

「…うん…昔、フェイトちゃんが使ってた魔法…」

心優しき金色の閃光の魔法が、人殺しの為に使われた。

その事実には、皆顔を歪めて悲痛な顔をしている。

静まり返るミーティングルームで、一言春斗がつぶやいた。

「…おかしい」

「春斗？ 何がおかしいの？」

その一言に敏感に反応したのは春斗を聞いたです。

春斗が顔をしかめつつ、口を開いて疑問をそのまま言った。

「『映像がそのまま残っていること自体』がおかしい。なのは姉から聞いた話からすると、監視カメラなんて全て壊されて証拠なんてなくなっておかしくない筈だ」

「壊し忘れたとかじゃ——」

「スバル。炎を凍らせたりとか、なのは姉やフェイトさん、果てにははやてを相手に遊ぶような奴がそんなへマをすと思うか？」

しかめ面を崩さずそう断言する春斗に、それは確かにと納得し引込むスバル。

「ちょっと待つんや春斗。じゃあなんや？ この男は——『監視カメラがあることを知って』こんなことをしたと言うんか？」

「そうなるな」

「どうして？」

そういったのは、言葉の節々からイラついているのが丸分かりなフェイトだ。よほど自分の魔法を使われた事が悔しいらしい。

「そんな事をしてアイツにメリットなんて一つもない！！ あるとすれば、私達への嫌がらせとか——」

「恐らくそれで合っていると思うぜ？ フェイトさん」

「——え？」

静かに告げる春斗の目に宿っているのは、画面の男と混乱している様子のフェイトだった。

「考えても見てくれ。この映像は随時管理局の本局のみならず他の管理世界で自立的に警察みたいなことをやっている組織にも配布される」

「…、」

「これは俺の推測に過ぎないが…もしこの映像を見た奴らが、この男が映像内で唯一使っている魔法を調べ、それが管理局の誇る“金色の閃光”と同様の魔法であると分かった場合はどうなるか…」

「…ちょっと、待って…」

「俺だったならば恐らく——フェイトさんと男と関係があるのではないかと疑うな」

「そんな事ある訳がない!! 私…」

「当然だ。そんなことはこの機動六課メンバーや管理局員がよく知っている…だが管理局以外の自立した組織はそうはいかない。恐らく管理局、そしてフェイトさんやフェイトさんに関係のある人物に疑念を持ち始めるだろう」

「…ッ!!」

「…春斗、それはつまり…」

「ああ。“レリックの強奪”というのも目的なんだろうが、もしかしたら——所詮1局員の被害妄想に過ぎないかもしれないが——」

春斗は相変わらずしかめ面を崩さず、ただ事務的に言い切った。

「この男の本当の目的は——『管理局の信頼の低下』もしくは『機動六課』そのものにあるかも知れねえな」

機動六課 side out

??? side

「『任務完了です。レリックの強奪、及び局員の殲滅を終了しました：質問です。まだ他に任務はございますか?』」

『

。

』

「『了解：ロストログア“レリック”の嚴重封印を施した後、管理者の下へ転送、同時に次の任務へ移ります。同時に確認します。』」

任務について他に追加することはありますか？」

「

。

」

「『任務内容の詳細を把握。 確認します——』」

雨の降っている、今も話し合いが行われている会議室の上——上空。

真っ黒なドレスのような服を着た男が、空中に浮きつつ、黒い瞳で眼下に存在する施設を見ている。

いや、正確には——その施設内で今も会議が行われているであろう、とある課のミーティングルームを、禍々しい魔力を放出しながら見据えていた。

??? side out

機動六課 side

「『管理局の信頼の低下』と…『機動六課』そのものが目的…?」

「あるいはその両方ってとこだ。　はやて、その件に関しての可能性は?」

「十分にありえるな」

即答であった。　“秒”を待たずしての即答に、それも部隊長が管理局そのものを否定しかねないことをズバッと言い切ったので流石のなのはや春斗までも目を丸くする。

「だってそうやろ?　…フォワードやなのはちゃんには黙って来たんやけどな、せっかくやから言うで?　この部隊は知っての通り『部隊の持てる魔導士ランクの限界』というのを完全に無視している状態や」

「うん。　それは私も思ってた」

「そやろ?　それをやって周りからとやかく言われない訳はな、皆にリミッターを掛けて無理矢理魔導士ランクを下げているから…そして強力なバックホーンが後ろにあるからや」

「強力なバックホーン?」

「…三提督を始めとして、リンディさんやカリム、クロノ君辺りがな」

これには皆が少しの間絶句した。まさか伝説の三提督までもがバックにいるとは思わなかったのだろう。

「もちろん、そうなると快く思わない人もいるということや。地上本部のレジアス中将がいい例やな。他にもたくさん私らの部隊に反対の人は多くおる」

「…はやてちゃん、それ、どういうことかわかってる？」

「なんのことや？」

「とぼけないで！ はやてちゃんは今、遠まわしに『今回の事件は管理局の誰かが手を引いている』って言ったのと同じなんだよ！？」

「「「！！」」」

「「「…」」」

なのはの悲痛な声での指摘に、驚愕するフェイト達と黙り込むはやて、フラン、春斗。

そもそもはやてはこの“兵器”が命令されてこういうことをやっているのだと既にゲンヤやカリムから聞いている。だからこれも——信じたくはないが、管理局の上層部の何者かが任務を依頼してやったことなのだと考えていた。

春斗とフランは——言うまでもないだろう。彼らは知っている

も何も彼と同じ“兵器”である。当然ながら無還者が命令されて局員を殺しているのだと分かっていた。

だからこそ、彼らにとってはやての『管理局を疑う姿勢』は予想外だった。なのは、フェイト、はやての3人は小さい頃から管理局に勤め、その信頼も大きいはずだ。人はそう簡単に一度信じた物を裏切れない。はやてがそんな柔軟な思考を持てるとは思わない、とすると――

（プロジェクトの事を知った…？）

フランと春斗の思考がリンクするも、その可能性は低いと自分達自身で考える。もし知ったとして、誰から聞いたのか？ 少なくとも“兵器”以外の管理局員で“無還者”に適う者など検討がつかない。プロジェクトのことは普通に考えて極秘事項、外に漏らせば兵器よる処刑が待つ。

こんな状況の中で、誰か上層部がはやてにプロジェクトの事を漏らすとは考えにくい。

しかし、万が一はやてが知っていた場合――彼女はいったいどうするだろう？

そしてそれを知っている上ではやてが自分達の正体を知ったら？

(…考えるな……今はまだ、最悪の結末を考えるとときじゃない…)

頭の中に起きた“結末”を振り払い、白熱し始めた会議に耳を傾ける。

「——せやから、私はただ可能性を述べただけや！」

「可能性！？　こんな非人道的なことをする人が、管理局の…私達と同じ組織にいるの！？」

「管理局に居るからって、皆が皆同じ思想を持っているとは限らんやろ！？　私達みたいに犯罪者を捕まえようとする局員も居れば、それを疎む輩もおるんや！！　その何がおかしいんや！？」

「それはそうかもしれない、けど人を殺していい理由にはならないよ！！　はやてちゃんは許せるの！？　そんな人が同じ場所で働いてて——」

それを聞いた春斗の感想はといえば。

“子供の喧嘩か”

ただ、それだけだった。

しかし今のなのは言葉は春斗の顔にさらに皺を作るのには十分過ぎる物だった。

気付かないうちにヒートアップしているから気づかないのかもしれないが：余りにも今の言葉は戴けない。

ここには無還者よりも数は少ないかもしれないが――人殺しをした者が最低“5人”いる。

春斗と、フラン、そして――ヴィータとシャル、ザファイラのヴォルケンリッター。ここにいないシグナムもきつと一人は殺したことがあるだろう。

見れば、ヴィータとシャルは顔を俯けてしまっている。ザファイラは狼モードだが、やはり何処か寂しそうだ。

春斗達は人殺しの経歴が浅い上、殺すのは管理局から『捨てられた』局員達であつたため感慨など何も起きなかったが、彼女達は違う――春斗達が生まれるさらに以前から、主の命令で、そして主そのものを本心では無いのに殺してきたのだ。

つまり、今のなのは言葉はヴィータ達を全否定してしまっていた。

「（フラン。頼む）」

「（ええ、わかりましたわ）」

今も子供の喧嘩の様に怒鳴り合うのはとやて。 フェイトはどうやらそれを静観する様で、エリオ達新人魔導士を落ち着けている。これはいい判断だろう。これでフェイトまでもあの喧嘩に参加するようだったら、本当に無還者やその管理者の思う壺だ。

せめて、俺だけは冷静に行こうと何とか深呼吸しなのはの肩を叩き呼びかける。

「なのは姉？」

「何！？ 今は『春斗には関係な——』」

「ちょっと黙ろうか、エース・オブ・エース」

「————え？」

無理だった。なのはの不用意な言葉によって一瞬で冷静さを失った春斗は冷たい目でなのはを見据え、言葉を紡ぐ。

「俺には関係ない？ ああ、そうか、それならそれでもいいぜ？俺はもともと平隊員だからな、誰が死のうと知ったこっちゃない」

「は、ると？」

「アンタはやてが死ぬのは困るから声をかけたただけなんだけどなあ。そうか、アンタのことは分かったよ、なのは姉」

「はる——」

乾いた音が響いた。

春斗が、なのはの頬を叩いた音だった。

「出て行ってくれ。んで少し頭を冷やして来てくれ。さっきから聞いてれば『人殺しそんな人が同じ場所で働いてていいの?』だの不用意な発言が目立つな。ここに人殺しをした事がない程綺麗な奴ばかりがいると思ってたか?」

「……う、あ…」

その言葉に『春斗は関係ない』と怒鳴りかけた事への追求は含まれていない。それは春斗が諦めたからなのか、それとも追求することすら忘れるほど怒っているのか…

「殺しは確かに重罪だ、許されることではないと俺だって思う。

だが、悔い改めて反省し、そして関係者にも謝罪して心を入れ替えて管理局で働くのは駄目な事なのか?」

「…ち、がっ……」

春斗自身と言えば、管理局で働くのは一向に構わないが殺した罪

は永遠に背負うべきだという考えを持っている。

「しっかりと自分の言った事を反芻して来い。今のアンタは此処にいる資格はない」

「…っ、あああああっ！！」

春斗の冷酷な目線と、言葉の攻撃に耐えられなくなったか、遂には椅子を蹴ってその場から駆け出した。会議室の扉が開いて勢い良く締まり、再び沈黙が会議室全体に広がる。

「…春斗…」

「何だはやて。俺への罰ならなんでもいいぜ？ どうせならクビにしてもいい」

「違う…そうやない…ありがとな。ヴィータ達のことを思っ言ってくれたんやろ？」

「それもあるけどな…なのは姉の考えは少し固まりすぎだ。もう少し柔軟な思考が欲しい所だな」

そう言ってなのはが座っていた椅子を起こし、そこに静かに座る。そしてじっと俯いているフェイトの方をむいて、笑って言った。

「すまないなフェイトさん、行ってやってくれないか？」

「…、」

「今のなのは姉には俺が行っても逆効果だ。親友のフェイトさんが居た方が良い」

「…分かった。ありがとう、春斗」

言葉は小さかったが、確かに伝わった。笑みを浮かべて春斗が頷くと、フェイトもなのは追いかけるように会議室を出ていく。それを見ながらはやてもクスリと笑う。

「さ、皆。ちょっとトラブルもあったけれど、続けよか。春斗、フラン、この中では一番アンタらが管理局と関わって日が浅いやろ。言い方は悪いかもしれないが、私達みたいに管理局のいい所ばかり見てはいないんじゃないかと思う。何でもええ、管理局やこの男について気づいたことがあったら話して欲しい…もちろん、ヴィータやティアナ達もな」

少し躊躇った者もいるが、全員元気よく返事をし、会議は再び始まった。

エース・オブ・エースと金色の閃光を外したまま――。

機動六課 side out

フェイト・T・ハラOWN side

なのはは何処に行ったのだろう。

小走りで息を切らせながら、辺りの職員に聞きつつ歩を進めていく。

「…ここにもいない……」

中庭に出てきたが、ここにも誰も居なかった。

昔から一人で抱え込むのはのであるから、ひと目のつかない場所にいるかと思ったが――

「（中庭にも部屋にも居なかった…じゃあ、何処に…？）」

いよいよ見つからず、焦りが彼女の顔に浮かんだその時。

ポツ…ポツ…ザアアアアッ…!

「…雨…」

いきなりの豪雨が彼女を襲った。当然ながら傘など持っていないので、彼女の特徴である金色の髪も雨水で濡れていく。

《サ、このままここに居ては濡れてしまいます。一旦隊舎に戻るべきかと》

「うん、そうだね…ありがとう、バルディッシュ」

そんな彼女を心配して声をかけた愛機デバイスに礼を言い、この雨ならなのはも外には出ないはずだと考え、隊舎に戻ろうと引き返した。

「『こんにちは、フェイト・T・ハラオウン』」

「――――」

挨拶と共に彼女を襲ったのは、巨大な大鎌であり。

卓越した彼女の反射神経は、それをバルディッシュのザンバーフオームで受け止めた。

「…おま、えは…！」

「『お久しぶりです。 お元気でしたか？』」

「ふざけるな！！ お前のせいで…私達は…！」

金色の大鎌と銀色の大鎌が鏖迫り合いをし、バチバチバチと火花が散っていく。

その様子を見て、フェイトは歓喜もせず気も緩むことすらせず――

「（そんな…鏢迫り合い“してる”…!?!）」

愕然とした。

バリアジャケットを展開していないとはいえ、現在バルディッシュの魔力出力は全開だ。ダイヤモンドすら切り刻むであろうその刃が、見た目はただの鉄の筈の質量兵器と互角。いくら相手の実力が底知れぬからといって、こんなこと起こり得るのか？

数分、そうやって鏢迫り合いした後にとちらからともなく力を込め鏢迫り合いを解く。そしてその一瞬の内にフェイトはバリアジャケットを装着し、更にバルディッシュの出力を上げる。

最早形振り構ってなどいられない。今の鏢迫り合いで理解した、理解してしまった。

この男は異常だ。

管理局と繋がっているか繋がっていないかと言う以前に、勝てる要素が見つからない。

「『そういえば、何か捜し物をしていましたね?』」

「…それがどうした?」

「『もしかして、彼女の事ですか?』」

その言葉と同時、『誰もいなかった筈の場所』からなのはが現れる。

「!?　なのは!!」

「…フェイト、ちゃ、ん…!!」

その声は苦しそうだが、紛れも無くなのはの物であり。

「貴様…なのはに何をした!?!」

「『その問いにお答えすることは出来ません。　彼女が何をされて
いるか私は知りませんので』」

「…う…フェイトちゃ、助け…!!」

「…ッ…!!　…要求は?」

「『ご理解が早くて何よりです。　私の目的は貴方の魔力です。』」

リンカーコアを頂きました』」

「…蒐集ってこと？ 分かった、それでいい。でもまずはなの
が先だ」

「『いいでしょう。 解いて差し上げて下さい』」

その言葉と共に、なのはの体が一瞬だけ揺れて頭を抑えるように膝
を付く。

「…はぁ…はぁ…」

「なのは——」

「『おっと』」

走り出そうとフェイトがなのはの元へ向かうとした瞬間、機械的
な音声が響きフェイトとなのはの間に巨大な亀裂が走った。

それが一瞬の内に男が放った斬撃によるものだと理解したのは、亀
裂が走った後だった。

「（全く見えなかった…！？）…ッ……！！」

「『警告です。 貴方はそこで停止してください』」

「……分かった…」

その言葉を聞き、ゆっくりと、しかし確実にフェイトのもとへ歩いていくのは。

そして時間は掛かったが、ようやく亀裂を超え――

「なのは！」

「フェイトちゃん――」

フェイトがなのはを抱き締めた。

「――ありがとう。そして、ばいばい」

「え？」

今言われたことと自分の状況を確認するフェイト。

なのはの腕が、自分の胸を貫いていた。

バルディッシュのコアが、相変わらずの無機質な目でこちらを見て
いる男から放たれた小さな針で貫かれていた。

そして——今、なのはは何て？

《サ……》

コアのみを正確に破壊され、所々ノイズを発生させながら、バル
ディッシュは愛する主の為に警告する。

《お気を、付けて……その者は……人間では、ありません……（バキィッ）》

そしてコアが完全に壊れるのと同時に、“なのは”の腕がフェイト
の胸から引き抜かれる。

その手には、小さな金色の玉が握られていた。

「かハ…」

「ふははは、上手くいったな」

「『任務目的“フェイト・T・ハラオウンのリンカーコアの蒐集”の達成を確認。管理者への報告を開始、並行して次の任務へ移ります』」

痛みで膝を付いてしまうフェイト。気絶しないよう歯を食いしぱり、拳を握り締めながら彼女は男と“なのは”を睨みつける。

「…貴様…なのはじゃ、ないな…!?!」

「ああ…そうか。フェイト・T・ハラオウンとはまだ会ったことがなかったか？ 主」

「『その回答ですが、正直私は貴方の行動を全て把握している訳ではありません。しかし、私と共に任務を行なった際には邂逅したことはないと思われます』」

「そうか。ならばせっかくだ、自己紹介でもして置くとするか」

そう言って、“なのは”は自分の顔に手を置いて…

自分の顔を『剥いだ』。

「…え？」

『…改メテハジメマシテ、ダナ』

顔の右面だけ、なのは顔の皮膚がついていた。

左面は、ただの“骸”であった。

『吾輩ノ名ハ“デミス”。 以後才見知リオキヲ、フエイト・T・ハラオウン』

「ひ…ああ…あ…」

片面はなのは顔、もう片面は骸骨。 その異様な光景に、フエイトは思わず腰が抜けてしまい泥状態の地面に座り込んでしまう。

そんな彼女を見ながら、無還者は骸骨に向けて言う。

「『デミス。 記憶はどうせ“飛んでいることになる予定”なので

すからそこまで効果は無いと思われませんが？」

『別ニ減ルモノデモアルマイ？』

「『申し訳ありませんが言葉の意味がよく理解できませんでした』」

『…兵器の心トイウモノハ日常生活ニハ不便ナダケデハナイノカ？』
ウェボン・マインド

「『その言葉の疑問点ですが、残念ながら私には“日常生活”を送った記憶がありません』」

『…違イナイ』

何やら話している2体を前に、フェイトは動けない。

自分の理解の範疇を超えた『化け物』が2体——冷静な自分があるゆる逃走手段を提示するが、また別の冷静な自分がその手段が成功する確率の低さを提示する。

走って逃げる？

——無理だ。相手はソニックムーブを身体強化なしで捉えるほどの演算能力を持っている。魔力強化なしで走って逃げたりすれば、一瞬で追いつかれるのがオチだ。

無理を承知で挑む？

——リンカーコアを奪われた痛みで立つこともままならないこの状況で？ バルディッシュも破壊されたこの状況下で救援が来るはずもない。しかも此処は今も豪雨が降り注いでいる。彼女が叫んだところで、雨の音にかき消されるだけだろう。

見逃してもらおうよう頼み込む？

——論外だ。それをやったとして見逃して貰えるはずがないだろうし、何より自分自身のプライドが許さない。

『ホホオ？』

ふと、そこまで考えたところで骸骨が感心したような声を上げる。

『自ラノ生命ヨリ自ラノ尊厳ヲ優先スルカ。 見事ダ、ソレガ蛮勇ナノカ汝ノ勇氣トイウモノナノカハ分カラシガナ』

読み取られている——。そして悪寒と共にもう一度理解する。

自分の全てを費やしても、恐らく目の前の“化け物”には勝てない。

（せめて――）

だから彼女は、少しだけ体に残っていた魔力を全て使い念話を繋げる。

自分の記憶を、誰かに遺す為に。

（せめて、この事だけでも誰かに――！！！！）

が。

「『残念ですがその思考は無駄だと断定します、フエイト・T・ハラウン』」

それすらも、目の前の化け物には通用せず。

辛うじて繋がろうとしていた念話の糸は、何かに遮られるかのようにブツリ、と切れてしまった。

「『機動六課全体に念話のジャミングを仕掛けさせて頂きました。所詮5分程度の応急措置の様な物ですが、今の貴方になら十分でしょう』」

念話のジャミング——言うは易しだが、それを実行するにはAMFなどの魔法を丸ごと無効化するような機械が無いと通常なら不可能だ。

それを、目の前の男は瞬時に仕掛け、同時にフェイトの最後の希望をも絶った。

「『ご心配なく。死ぬことはありません。私と出会い会話をした記憶が飛ぶ』だけです」

「…何故」

「『…“何故”？ 申し訳ありませんが質問の意味が分かりません』」

「何故、貴方はこんなことをするの？」

全ての希望を完全にへし折られ、かろうじて出た言葉はそれだけだった。

その質問に兵器は暫し考え込むような動作をみせ、直ぐに口を動かした。

「『それが任務ですので』」

「任務？ ああやってレリックを奪うついでに人を殺すのが任務？」

「『はい。 全て指示通りに私は動いた。 その結果“生命”が失われた。 それだけのことです』」

「…っ、どうして、なんで貴方は何も感じないの！？ 貴方は人を殺した、でもそれは自分の本意じゃないんでしょ！？ 少しでも命を尊ぶ気持ちがあるのなら…！！」

その言葉に、彼は無言で首をかしげた。

「『何故、“命”に尊ぶ気持ちが必要なのですか？』」

「え？ そ、それは――」

「『申し訳ありませんが理解出来ません。 生とは確かに全ての人間に平等に与えられる権利ですが、死という概念も等しく全ての人間に与えられます。 その違いは与えられる時間…それが私の行いで長くなろうと短くなろうと、それは私が“命を尊ぶ”という概念を持つに至りません』」

「…！？」

「『命とは所詮、いつかは消える電子データと同義。 いつかは散る木と、いつかは燃やされる塵と何ら変わりはないのです』」

そして、フェイト・T・ハラオウンは悟る。

目の前の化け物は、根本的に自分達と考え方が違うことを。

目の前の“兵器”にとって、生命とは“塵”や“電子データ”と同様の物であり——“生命”を“生命”として見ていないという事を。

「…こんな、ことって…（ガシッ）　　！！」

『申し訳ナイガ、時間切れダ。　フェイト・T・ハラオウン』

暗く沈む意識の中、この世のものとは思えない程狂気に溢れた声が彼女の脳に響く。

『ホーピーター
希憶喰い』

そして、フエイト・T・ハラオウンの意識は暗転した。

“生命”（後書き）

天破「イメージと違う展開と私の表現力に絶望した。眠いぜ…！」

春斗「いや、寝ろよ」

今回の無還者の“生命”についての考え方は週刊少年ジャンプ連載中の『めだかボックス』の“悪平等”を参考にさせて頂いております。

尚、最後にデミスが使った『希憶喰い』ですが適当に考えたので後に変更するかもしれません（お。何かダサいじゃないですか。

春斗「なら記憶を忘れさせるなよ」

天破「だってここでフェイトさんが『デミス』の事覚えてたら閑話の存在意義なくなっちゃうでしょうが」

春斗「ああ、成程」

それでは、次回もお楽しみに^^♪

“信頼”（前書き）

安定の深夜更s（ry

大丈夫です。天破は生きていますからそのお経をおやめください。
本当に成仏したらどうするんですか。（え

さてさて、此処でお知らせです。なぜこうも奇跡の高速（？）投降
を出来ているかという上天破が勉強をサボっているからでして本来
ならこんなことはありえませんが。なんという自業自得。 留年する
未来が見えるようです。（お

という冗談に聞こえない真実もあって、要するにこれからは更新速
度がガタ落ちします。

暖かい目で見据えてやってください。よろしくお願いします（（（
（；。d。））））

という訳でこの話を読む上での注意事項！！

・なのはがどうも格好いいです。あと何かフラグ的な何かが立って
います

・無還者vs機動六課前哨戦終結！結果がどうでも怒らないでね☆
△（殴

・無還者に異変…だと…！？

・チート集団よりなる国、ようやく登場

ごめんなさい、相変わらずよくわからん注意事項で。
ラストの方で前々から出す予定だったオリジナルの世界が出現しま
す。

第2管理外世界って、原作じゃ出ませんでしたよね？ 適当です。
ごめんなさい。

それではどうぞ（、ー、）

“信頼”

——結果として、最初に異変に気づいたのは、春斗だった。

今の今まで全く感知できなかった“兵器”クラスの魔力反応が一つと“兵器”とまでは及ばないが強大な魔力反応が一つ。

いつ転移したのか、何をしていたのか、全く気付かなかった程の隠密作業。

唇を誰にも気づかれぬ程度に噛み締め、フランにのみ分かるように念話する。

（フラン！）

（分かっていますわ…くっ、不覚！でもどうしてですか？今の今まで気づきませんでしたわよ！！）

（慌てんな…もう結果は出ちゃっている。幸い、六課内で生命反応が消えた人間はいない。なのは姉の反応もあるし…フェイトさんも…！？　オイ、フェイトさんの魔力反応が弱いぞ！？　どういうこった！？）

（待ってください……　成程、このフェイトお姉様の状況は“蒐集”に似ていますわ。　恐らく侵入者の目的は、フェイトお姉様の魔

力…いや、もしかしたら他の方の魔力も狙われているかもしれない…！）

（ツ…！　くそ…この状況を狙ったかの様な襲撃…となれば此処にきているのは…）

（ええ…見事に私達は、“お兄様”…またはその“依頼者”の策に嵌ったようですわ…！！）

彼らの予想は、間違っただけではなかった。　無還者の狙いは確かに『機動六課』だった。

だがその目的が『魔力』であつたことだけは予想外だった。　無還者一人で管理局の全勢力を100倍した値を相手に完全完封勝利出来るまで言われているのだ。　魔力だって桁違いである。　そんな彼が今更自分の意思で魔力を欲する筈もない。

となればやはり命令しているのは裏にいる何者か――。　はやて達はもちろん一向に気づく様子も無くミーティングを続けている。

　歯がゆい思いを感じつつ、この状況を打破するべく本気で頭を回転させる春斗達。

（“兄貴”の狙いはやはりこの機動六課か…！　一時的でもいい、大量の魔力を持つ隊長各が一人、それか少数になるのを待っていたんだろうな。　そして少数になった所を狙って襲撃して魔力を蒐集…フェイトさん、なのは姉の実力は高いが、流石に兄貴には及ばない。　一般局員が近くにいるもおそらく結果は同じ。　せめてフェイトさんと俺らが一緒にいれば…！！）

（しかし、何故少数になった所を狙ったのでしょうか？ お兄様の実力なら、ここを直接狙って纏めて蒐集することも可能な筈ですわよ？）

（それは分からん！ 何か理由があるのかもしれないねえ…魔力を蒐集しているのをまだ知られたくないのか、それとも“依頼者”の意向なのか…とにかく、まずはフェイトさんをどうにかしねえと！）

「そういえば、フェイトちゃん遅いなあ…なのはちゃんが見つからんのやろうか？」

そこまで考えたところでいい具合にはやてから心配の言葉が。ここがチャンスと、春斗が身を乗り出して口を挟む。

「確かに遅えな…ちよつと探してくつか？」

「そうやなあ…春斗、頼めるかいな？」

「任せとけ。多分説得に時間が掛かってんだろうしな…俺が言えた義理じゃないが、時間を置いたほうがいいかもしれないし、呼び戻してくる」

「頼むわ」

平静を装い、フランに『念話で何か異変があったら連絡を来れ』と

頼んでおく。微かに頷いたのを確認し、会議室を出てドアが締まったのを確認すると高速で駆け出した。

（フラン！ フェイトさんの詳しい位置は分かるか！？）

（問題ありませんわ！ ええと…此处は中庭です！ どうやら外に出たところを襲撃されたらしいですわ…）

（了解した、サンキュー！）

行くべき場所は理解した。バレない程度に魔力を使い、曲がり角を加速を緩めずに直角に曲がって更に駆け出す。

頭の中の地図を頼りに走り、中庭に出ると見慣れた金髪の女性が倒れていた。

「フェイトさん！」

自分が濡れるのも構わず思いっきり足を踏み込み再びバレない程度に魔力を使い跳躍する。

20 m以上の距離があったが難なく着地し、倒れて服もびしょ濡れなフェイトを仰向けにして状態を調べる。

「…（よし、命に別状は無さそうだ。だがリンカーコアが異常に

弱体化してるな。　　：バルディツシュも壊されてやがる：抜かりねえ、流石は兄貴：此方にとつての嫌がらせを的確にやってくれるぜ）

：これは無理に起こさずに運んだほうが良さそうだな」

バルディツシュが破壊されていなければ相手の戦略も少しは分かったかもしれないのだが、無還者がそんなミスをする筈も無く。何か極細の針の様なもので綺麗にコアを貫かれていた。

その針を抜き、手にとって少し眺めてみる。正体は直ぐに判明した。『創造魔力』で造り出した氷の針であった。ご丁寧に微量の電流も流されている。

「（貫くと同時にこの微量の電流で自己修復システムやバグアッププログラム、記憶領域も破壊か：運が悪いと完全にメインプログラムがイかれていてスクラップの可能性もあるな。それだけは避けたい所だが…）ったく、本当に嫌がらせが多いな、俺達の兄貴は」

いくらバルディッシュが雷の魔力変換資質を操るフェイトのデバイスだと言っても、精密機械そのもののメインコアに電流を流されては身も蓋もない。これでは壊れてしまうのも当然だろう。

「取り敢えずフェイトさん隊舎の中に運び入れて……っと、フランに連絡しなくちゃな」

（フラン、聞こえるか？ フェイトさんは保護した。状態は安定、

ただしリンカーコアが異常に衰弱している。デバイスのバルディッシュは大破、原因は氷の針による物理的破損と同時に流された微量の電流。元の状態での復旧は恐らく不可能だ)

(了解ですわ。後はなのはさんが心配ですわね…)

(ああ、ここに来る途中も色々見たがどこにもいなかった。フラン、お前なら分かんじゃねえか?)

フランの探査能力の高さは兵器の中でも随一である。その代わり体力がないのは、元々フランがフルバックのポジションに付く予定であった兵器だからだろう。

(申し訳ありません。この六課の何処かにいるというのは分かるのですが、どうやら補助系統の魔術使用に阻害が掛けられていますわ。私達の念話は問題なく機能しますが、はやてさん達の念話は恐らく使え無い状態かと。同時に私の探査魔法もボヤけてよくわからない状態：正確な位置は分かりませんわ)

(チツ、認めたくねえが良い手だな。確かに普通の魔導士なら誰かがいなくなればまず念話で呼びかけるだろう)

その念話が使えなくなれば今度はサーチャーなどの探索魔法を使うだろう。が、それすらも機能しないと分かった瞬間、一時的な物だろうが魔導士達を混乱が襲う。情報系統の混乱というのは戦う上で一番恐ろしいことだ。敵は良くそれを理解している。

（取り敢えず了解した。 何か不信な魔力反応があったらすぐに連絡してくれ）

（ええ、わかりましたわ。 しかし、何故フェイトお姉様がそんな簡単にやられたのでしょうか…？ やはり死角からの奇襲等でしょうか？）

（もしかしたら機動六課の誰かに化けたのかも知れないな。 もしそれが当たっていて、化けた対象がなのは姉だとしたら恐ろしい。 兄貴は現在進行系でこの機動六課の状況を理解出来ていることになる）

感じるのは、未だ底のしれない“兄”^{てき}への畏怖。

自分の義姉が無事であることを信じ、フェイトをロビーで寝かせ、壊れたバルディッシュをポケットに入れると再び春斗は駆け出した。

春斗 side out

??? side

コッ、コッ、コッ。

規則正しい足音が、機動六課の廊下に響く。

流れるような『金髪の髪』とその整った顔はその女性が何者かであるかを示していて、たまに局員がすれ違っても、会釈をするのみで誰もその女性が誰であるかを疑わない。

その普段と全く変わらない柔らかな笑みは、そんな局員に会釈を返す事に少しずつしぼんでいき、遂には何処か落ち込んだような顔になってしまった。

「詰まらんな」

ボソッ、と。

女性の口から女性の声で、女性の口調ではない物が漏れる。

「もう少し、楽しみたかったが…主、本当にこの女が機動六課の最高クラスの戦力の一人なのか？」

「『その疑問への回答ですが、与えられたデータのみで推測するにあたって機動六課の主な戦力は“高町なのは”、“フェイト・T・ハラオウン”、“八神はやて”の3名であり、この3名を行動不能にすることは機動六課を行動不能にすることと同義と考えられます』」

「それにしても呆気無いものであったな。そう言えば主、高町なのはとこの女の…フェイト・T・ハラオウンには弟と妹がいなかったか？」

「『管理者より与えられたデータを参照しましたが、その2名——“高町春斗”と“フラン・T・ハラオウン”はどちらも一般局員であるが故、この任務においては関係は無いと思われます』」

「果たしてそうか？」

楽しそうに、“フェイト・T・ハラオウン”は誰もいない廊下を歩きながら呟く。

「『理解できません。貴方は何を根拠に其のようなことを？』」

「“勘”だ。そう、勘でしかない」

「『“勘”』。尚更分かりません、勘とは最も信用し難い人間の不

確定で不透明な存在です。 そんなモノを信用する事は、論理的な思考に重大なエラーを及ぼします』」

「いいや、主よ。 世界は広いぞ。 この世界には勘や直感を自分の武器にして戦っている者も存在する。 いつかは其のような者とも見えてみたいものだな」

「『勘や直感を武器に…確かにそれは興味深い事柄ですが、現在の任務には何ら関係は無き物です。 …最後の任務目標である“高町なのは”の場所は既に把握しています。 予定よりも早急に動けているとは言え、次の管理者からの指示の遂行には比較的早い行動が必要になるとデータより算出されました。 よって、もう少し早く動いて頂きたいものですが?』」

「疑問形にするでないぞ、主。 少々恐ろしい。 いつの間に無言の脅迫など覚えた?」

「『申し訳ありませんが、“無言の脅迫”という単語に心当たりが無い故その質問に答えることは出来ません』」

「…吾輩がもし“兵器の心”を弄れるのなら、もう少しユーモアのあるプログラムにしようがな…」

と言いつつ、やはり誰もいない廊下で一人何かと会話しながら、“フェイト・T・ハラオウン”は歩く。

向かうは『医務室』。

シャルが会議に出ているため、今は誰もいないその部屋で蹲っている“^{フェイト}自分”の“親友”を迎えに行く為に。

??? side out

春斗 side

(! ? 春斗!!)

(どうしたフラン? 何かあったのか!?)

(いえ、フェイトお姉様は今歩ける状況ではないのですわよね!?)

(ああ、リンカーコアがかなり衰弱していて一日二日で回復できるような傷ではなかったことは確かだ!! それがどうかしたか!?)

(今そのフェイトお姉様の魔力反応が“2つ”、別々の場所に出ましたわ! やはりばやけていてよく分かりませんが、1つはロビー周辺、もう1つは今六課内の何処かを歩いている様子です…ロビー周辺のフェイトお姉様はどうやら動いてないので直ぐに判明しまし

たが、阻害魔法のせいで動いているフェイトお姉様の方は正確な位置が特定できませんわ)

(いや、理解した！ ロビーに寝ているのは俺が保護したフェイトさん、んで今動いてんのが恐らく偽物の方だ！ とうかやはり擬態魔法を使ってやがったか…!! やはり“兄貴”は俺達の動向を何らかの方法で読み取っている可能性がいよいよ高くなってきたな…)

(その辺も私の方でできる限り調べておきますわ。 偽物、なのはさんの正確な居場所は相変わらずわかりませんが、この阻害魔法をしたのが“お兄様”だとしたら既になのはさんの居場所はつかまれている可能性が高い…何処か、なのはさんの居そうな場所に心当たりなどはございませんか?)

(有ったら苦労しねえよ。 だが誰もいない場所にいる確率が高い。 こういう時のなのは姉は一人になりたがるからな)

だが『誰もいない場所』と言うだけなら容易いが、探すとなればいくら春斗とフランでも時間を要する。 しかも探索魔法に制限がかけられているこの状況下では全て探すのは絶望的とすら言えるだろう。

「俺の責任だな…」

彼らしくもない独り言が、彼の口から静かに漏れる。

まさか、隊長陣がバラバラになったこのタイミングで襲撃してくる
とは思わなかった。

まさか、狙われたのが命ではなく魔力であつたのは予想外だった。

まさか、“兄”に協力者がいたのは予想外だった――。

全ては結果論だ。それは自分がよく分かっているしフランにもそう
言った。

だが機動六課の隊長陣をバラけさせたのは紛れもなく自分が原因だ。
あそこでののはとはやての喧嘩を何もせずに見守っていたら、そ
うじゃなくてもフェイトになのはを追うように促さなかったら。

この状況は少しでも改善されていたのかもしれない、あるいは更に
悪化していたのかも知れない。

未来を見通す術を持っていない春斗には分からない。

しかし。

（――！！！！ 春斗！ 阻害魔法が解けましたわ、探查魔法、念
話も問題なく使えます！ 例の偽物は現在医務室へ向かっているの
を確認しましたわ！ で、医務室からなのはさんの反応が出ました
！ このスピードと距離だと、お兄様がなのはさんの場所まで辿り
着くまで1分も掛からないかと！！）

自分には心強い味方がいるから、彼はどんな佳境にあっても自分の

“勘”を信ずることができる。

小さい頃から同じ苦痛を体験してきた『妹』であり、大切な仲間である。恋愛感情では無いと思うが、何だかんだ言って彼自身、彼女へ好意を抱いていることは確かであった。

（よし、ナイスだフラン！ 丁度良い、俺はこのまま医務室へ向かう！）

（了解しましたわ。 お気を付けて…！！）

向かうは医務室。

小さい頃、まだ出会って間もない頃から良く気に掛けてきてくれた、返しきれない恩のある義姉を助けに行く為に。

春斗side out

???side

「…、」

真っ暗な部屋。

一人ベッドに腰掛けて、とある女性は考える。

「何やってるんだろう、私…」

冷静に考えてみれば、あの時とても信じられないことを自分は言っていたと思う。

そう——あの言動・あの態度は全て春斗やヴォルケンリッター、はやてやフェイトまでも蔑ろにしてしまう物だった。

春斗が諫めてくれなかったら、どうなっていたことか。

二度と埋まらない溝が、はやてやフェイトの間に出来てしまっていたかもしれない…。

そう考えると、恐ろしくて怖くって、彼女は逃げたまま未だ戻れずに此処にいる。

生き抜こうと決めた現実からも、大切な親友からも、果てにはずっ

と一緒にいた義弟からも目を背けて、情けないな、と自分を嘲笑し、再び自分の頬を涙が伝うのを感じる。

今彼らは何をしているだろう？

自分のことなど忘れて、ミーティングを続けているだろうか？

それとも自分を探してくれているのだろうか？

もしそうだとしたら、自分はなんて傲慢で、なんて欲張りなんだろうか？

勝手にわめき散らして、勝手に飛び出して、それでも自分は見捨てられないことを願っている。

『ちょっと自分の言ったことを反芻して来い。今のアンタは此処にいる資格はない』

「――――ッ」

でも、春斗の拒絶の言葉を思い返す度、胸が締め付けられる様に痛くなって戻れなくなる。

あれ？　こんなに、春斗から嫌われることって心苦しかったっけ？

昔からこういう風に喧嘩して、二度と会うものかと考えて、でも結

局はどっちかが折れて仲直りして――

次の日には二人とも忘れて、他愛もない話をしたし笑いながら遊んだりして――

そこまで考え、あ、そっか。と彼女は思う。

「嫉妬してるんだ、私」

自分で思ってた、すごく醜いと思う。

きつと、小さい頃から一緒にいたから、いつの間にか、なんかこう……独占欲、みたいな物が生まれてしまったのかも知れない。

ダメだとは思いつつ、春斗が誰かの為に怒っていると考えたら、どこか遠い場所に春斗が行ってしまうんじゃないかと考えてしまう。

気付かないうちに依存していた。

弟離れの出来ない、ダメな姉だな、と思って、なんだかおかしくな
って笑う。

「ねえ、春斗。覚えてる？」

誰にも聞こえるはずもないのに、涙を流したままなのは暗闇に向

けて呟く。

「小さい頃、本当に小さい頃…春斗、私に向けてさ——」

そこまで、呟いた時だった。

コンコン、と電源を切ったので手動になっている医務室の扉が叩かれる。

誰かが来た。　そう思っつつぶやくのを止めて耳を傾ける。

『なのは、いるんでしょ?』

聞こえたのは紛れもなく、自分の親友の声。　ビクツと体を震わせ、縮こまってしまふなのは。

『いないならそれでもいい。　答えたくないならそれでもいい。でもね、聞いて?』

そんななのはの様子を見透かしたかのように、親友——フェイトは呟くように話す。

『皆、これだけでなのは嫌ったりしないよ。はやてだってなのはの事、分かってる。だから私に探させてくれたんだよ?』

今の自分には、何て綺麗で甘い言葉。

『謝ってもいないのに許される』。それは子供であつても大人であつても、甘美な響きであることに変わりはない。

「でも!」

でも彼女は、それだけではとても自分への嫌悪を収めることができない。

「私は、ヴィータちゃん達やフェイトちゃん、貴方まで傷つけたんだよ!?! このまま許される筈が無いよ…ごめんね。本当に、ごめん…!?!」

『いいよ』

即答だった。何処か望んでいたろうその答えに、思わず顔を上げてしまうのは。

『私は怒ってない。今回の事はなのはも、はやても悪くない。でもなのはが謝りたいんだったら謝ればいいよ。今回の事はそれだけのことなんだから』

「…春斗は？ お、怒ってた？」

『春斗？ うん、少しね…でも、きっと春斗だって許してくれる。春斗も私も、なのはの事は大好きだから』

「私は…わ、私は…」

『だから、ここを開けて…皆に謝りに行こう？ 大丈夫…私も一緒に謝るから…』

なのはへ向けて持たされるのは、何よりも甘い“友情”と言う名の言葉。

レイジングハートは無言で主を見守っている。

そして彼女はフラフラとベッドから立ち、ドアの電源を入れようとスイッチに手を掛ける。

自分には親友がいてくれる——

謝れば許してくれる——

何よりも大事な親友が、そう言ってくれたから、彼女は——

（なのは姉、開けちゃ駄目だ！！！ そいつはフェイトさんじゃねえ！！！）

『…なのは？』

フェイトの声は、もう耳に入らなかった。

今、なのはの頭に響いたのは…紛れも無く…

（春斗？ 春斗！？ どうしたの、春斗！？）

応答はない。 当然といえば当然だ。 彼には魔力適正が無い筈であり、つまり念話だって使えないはずだ。 だからこのタイミングで、この場で聞こえるはずが無い。

幻聴？ 自分の被害妄想？ 考える要素はたくさんある。

だが、この場言えることは、一つ――

『どうしたの、なのは？ 早くここを開けて――』

「貴方は、フェイト・T・ハラOWN隊長ではありませんね？」

『――』

返ってきたのは、息を飲む音。それがどういう意図なのかはわからない。

でも、自分の弟がそういうのだったら、信じよう。

だって“高町春斗”は、今も昔もなのはにとって大切に、大好きで、信用出来る弟だから。

「擬態魔法を解除し投降してください。許可無き他人への擬態は重罪です。素直に投降すれば情状酌量の余地があります――」

2回目のなのはの言葉。

返ってきたのは、強大な魔力反応だった。

《マスター！》

「うん、分かってる！！」

S級は下らない魔力反応を感知し、機動六課内に設置された緊急事態を告げる警報も鳴り響く。

同時。

扉の前から左に回避行動を取ったのはが見たのは、頑丈に作られているはずの扉を呆気なく蹴り壊し飛び込んできたフェイトだった。

『おおかしいいなあああああ？』

その声はフェイトのものではなく、そしてその顔もフェイトのものではなかった。

綺麗に整っているはずの顔やスラリと伸びている体の所々に罅が入り、ボロボロとその欠片が床に落ちていく。

罅が入り、欠けた場所から覗くのは真っ白な“骨”。

首は人形の様にガクンと左に傾き、右目が不自然に血走っている。

両手には既に全体に罅が広がり、見る影もないほど無残な姿だ。

しかしその姿からは相も変わらずフェイトの魔力反応が出ている。

「レイジングハート！」

『了解。セツトアップ!!』

敵は異常にして強大だ。

鳴り響くアラームの音と、邪悪で強大な魔力を受けながらセツトアップしレイジングハートを“敵”に構えるのは。

そんなのはを曲った笑みを顔に浮かべながら見据える“フェイト”は、再びその壊れた音楽プレーヤーが出すような不透明な声で疑問をぶつける。

『わたしいい、どこからおおみても“ふえいと”そのものだったと、おもうんだけどなああああ？ どうして“わたし”じゃないってわかったのかしりたいなああああ!？』

繰り出されるのはセツトアップしていない人間の速度とは思えない“抜き手”。

それを驚異的な反射神経で回避し、狭い医務室で“フェイト”の背後を取り高速で魔力集収を開始、“フェイト”がこちらを向いた瞬間にそれは放たれた。

《ディバイン…》

「バスター——！！！」

桃色の光ををほぼ零距离で見た“フェイト”も、次の瞬間にその閃光と同様の威力を持つ闇色の魔力を右手に集結させる。

『あはははハハハ！ “ジャツジメント・エクスキューショナー”！！！！』

闇色の閃光と桃色の閃光が、零距离で激突した。

と、同時。

「なのは姉！？ ———ッ！！？」

なのはの声に、聞きなれた声が響く。

否、『響いた気がした』と言った方が良いか。

目も眩むような閃光の後彼女の胸から、色白の男の腕が生えていて。同時に強制的に砲撃を終了させられ、相殺しきれなかった黒き魔法の衝撃派がレイジングハートに直撃、バルディッシュほどではないがレイジングハートのコアにも罅が入った。

「てめえらあああああッ!!!」

激高し、思わず魔力を解放しかける“兵器”。それを冷静な目で見据えながら、もう一方の“兵器”は静かになのはの胸から腕を抜き、桃色のリンカーコアを蒐集した。

「『デミス。任務は完了しました、撤退します。既に機動六課に用はありません』」

『それはいいけど、アレはなああに?』

「『その疑問に対する解答ですが、どうやら貴方の“勘”という物が当たった様です。と解答します』」

『! :へええ。この“なのは”もそうだけど、ここはほんとうにたのしむばしょがおおいなあ』

闇色と桃色の魔力の衝撃で粉々になった医務室で、無還者が静かに手を振るう。

何かを弾くような動作をした瞬間、怒りで我を見失い掛けている春斗が抵抗もできずに廊下の壁へ叩きつけられた。

「が…ッ！！（重力の魔力変換資質か！？ いや、それにしても重すぎる…！ 何か別の魔術も同時に掛けやがったな…！！？）」

「『高町春斗』。貴方の事はどうやら管理者も知らない、人間とは全く別の“何か”だと推測できます』」

「…、」

「『ご安心を、管理者への報告は致しません。もし内容が分からなければ聞き流し、お忘れください。万が一貴方の事が漏れれば、その瞬間この“機動六課”の局員の生命はないものと警告します』」

「…何だ？」

「『“何だ”？ 主語のない質問止めていただき——』」

「テメエの、テメエらの目的は何だ！！ どうしてこんなことをする！？」

「『…目的』」

目の前で頭を抱えよろける“兄”を見て幾分か冷静になったのか、状況の整理を開始しようとするが。

『っ、ざんねん、だけど、きょうはこのへんでおわりだよ!』

フェイトの身体をした“何か”が無還者の腕を掴むと、真っ黒な光を発してその場から消えた。

逃げられた？

「いや、違う。 “逃げた”？ あの“兄貴”が？」

過去の無還者を知っている者からして、まず疑問に思うのはそこだった。

指一本で機動六課を蹂躪出来る“兄”が逃走。
兵器の心の異常事^{ウェポンマインド}態。

そのキーワードが、“目的”という単語。

「どういう、ことなんだ？」

ただ、疑問。

術が解け、何か正体不明の重圧から解き放たれ、なのはの元へ駆け寄り脈を確認する。

脈を確認し、安心して――それでもその疑問は氷解せぬままに、異常事態のアラームとS級魔力の発生源を受けて駆けつけたはやてらによって春斗となのはは保護されるのだった。

春斗が駆けつけるのが遅れたのは、無還者本人が現れ行動を妨害されたからだった。

彼らにとっては小規模、しかし一般魔導士に取っては殺傷能力の存在する魔術を使って攻防を繰り返していたのだが、ふと攻撃が通ったかと思ったら爆発して消滅。分身で化かされていたことを知り、それまで以上の速度で向かっている最中に思わず念話でなのは注意してしまった、というのが真実であった。

しかし残念ながら、丁度春斗が到着した瞬間にはレイジングハートも魔力の衝撃でコアが壊れ、なのはの魔力は丁度蒐集される寸前であった。

しかし全てが奪われた訳ではない、得るものもあった。今回の件で、2つ分かったことがある。

無還者はやはり何も覚えていなかった。春斗の事も、フランの事も、何も。

春斗を直接見て尚、それがN.O. 2であると分からなかった様子であるからこれは間違いないだろう。一縷の望み位は持っていた春斗達には少々キツイ現実である。

もう一つ、無還者が“目的”という単語に敏感な反応を示したこと。

これには分からないことが多すぎてフランもお手上げだった。もしかししたらこの“目的”に何か隠されているのかもしれないが分からない物は分からない。

数々の疑問を残したまま、“隊長陣2名の魔力が蒐集される”という前代未聞の事件から3日が経過した――

「まだなのは目を覚まさないの？」

「ああ」

心配していそうな声のフェイトに、急遽用意された医務室変わりの仮眠室で眠るのはを見る春斗。

「砲撃を撃った瞬間にリンカーコアを取られたらしいからな。痛みも相当なものだっただろう：そういうフェイトさんは大丈夫なのか？」

「うん、まだ完全には回復してないけど：仕事をする分には大丈夫だよ」

「それは何よりだ」

笑顔で言うフェイトは、なのはの髪を触りながら呟く。

「でも本当に私、情けないよね。まさか、『一瞬で背後を取られて気付かないうちにリンカーコアを取られちゃう』なんて…」

「…、」

「春斗？」

「いいや、なんでもねえ…」

そして、当然のごとくフェイトの記憶も操作されていた。

シャルを筆頭とした管理局が誇る最高の医療チームが精密検査を敢行し、それでいて尚異常が発見できない程レベルの高い記憶操作。春斗はもちろん、恐らく“兄”以外の兵器にすら不可能なレベルだろう。

いや、無還者がこれ程高性能な記憶操作が出来るとは聞いたことが無いが…もしかしたら協力者が施した物かもしれないし、結局の所全ては謎の中である。

「…頃合なのかも、しれないな」

「え？ 何が？」

「いや、なんでもない」

「むう、春斗？ 何か私に隠してない？」

「いや、フェイトさん？　一体貴方様は何故そんなに顔を近づけてくるのでしょうか？」

何か俺したっけ？　と考えるもそんなことはないと思いたい春斗。
あるとしたら自分の命は今頃ないだろうが。

「ううん、別に。　何かパニックになって口からこぼさないかなあ、
と思って」

「何だ、それだけか。　俺はてっきりまた命の危機に瀕しているの
かと…」

「私、春斗からどう思われてるのかちょっと知りたくなったんだけ
ど…？」

回避したと思ったら死亡フラグ成立。　さすがは春斗、期待を裏切
らない。

「つと…ごめん、仕事が入っちゃった。　行こう、バルディッシュ」

《了解》

が、ここで念話ではやてに呼び出されたのか臨時医務室から出てい
くフェイト。

春斗とのすれ違いざま——バルディッシュのコアが、何かを言いたそうに光っていた。

「あれ？　バルディッシュ、どうしたの？」

《サー、申し訳ありませんが少し春斗卿と話してもよろしいでしょうか？》

「どうして？」

《改めて、サーを発見していただいた事についてお礼を言いたいの
で》

「ええ！？　もう、そんなのいいのに…」

《お願いします》

「分かったよ…それじゃ春斗、なのはとバルディッシュのことよろしくね？」

「了解、っと」

バルディッシュを受け取り、丁重なのはの頭の上にある熊の人形の手に乗つけたのを確認すると笑みを浮かべつつ、フェイトは臨時医務室を出ていった。

沈黙が広がる。バルディツシュも、春斗も、当然ながらなのはも喋らぬまま1分、2分と経過していく。

バルディツシュも春斗も、どちらかが話し出すのを待っているようだった。

5分程度経過しただろうか？

ようやく春斗が口に出した言葉は、謝罪だった。

「ごめんな、バルディツシュ」

《…》

「まだ、誰にも言う訳には行かねえんだ」

静かにそういうと同時、小さく指を振って部屋全体に聴覚障害を掛ける。

その様子を見守っていたバルディツシュも、その言葉に反応するかの様に言葉を紡ぐ。

《…『それ』は…我が主やなのは嬢、はやて嬢にも言えない事…なのか？》

此処で、壊れたバルディッシュが春斗のポケットに入れられたあの後の事を話さなくてはならないだろう。

バルディッシュについてフランによる鑑定の結果——どうあっても管理局の技術での修復では不可能と断定された。だがこの先使い慣れたデバイスがフェイトにないのは困る。

というので——“兵器”だというのがバレるのを覚悟で、フランの能力を使ってバルディッシュの状態を壊れる前まで“巻き戻した”。

それこそがフラン・T・ハラOWN、No. 2の能力——『リウエンド巻緑
プログラム戻光』。

『戻す』という概念が宿った光を操る能力で、対象のあらゆる概念を戻してしまう事が可能な能力。

集収された魔力を再度バラけさせたり、今回のように壊された物を壊される前までに巻き戻す。戻すこと限定なら時間すらも操れる、それが彼女の力である。

そして彼らが懸念していたように——ついに機動六課の仲間に、能力を隠し持っていることがバレてしまった。

そう、他でもない。フランの能力で壊れる前に“巻き戻された”バルディッシュに。

「ああ、言えない」

《…あえて、聞くが…もし、私がサーへ言うとしたら…どうする？》

「その時は非常に心苦しいが、お前の記憶領域を全て消さなくてはならない。^{ウェボンルール}兵器の掟、という奴だ」

《…、》

その目は冗談の無き本気であり、その声も普段の声とは違う低く、意思のある声だということを理解したバルディッシュは、再びチカチカと光った。

《分かった。サーと私の名に掛けて、この件に関しては春斗卿、フラン嬢の口から出るまで追求せず、そして私の口からも口外しないと誓おう》

「ああ…本当にサンキュー、バルディッシュ」

《その変わり、一つ約束してはくれないか？》

「？」

バルディッシュは、主を思うが故、何より主の幸福を願う故。

今一度、春斗へ問う。

《信賴しても、良いのか？》

「当然だ」

当然の疑問と当然の即答。

暫しの沈黙の後、どちらからともなく、笑い合う。

再び指を軽く振って聴覚阻害の魔法を解除し、その後は他愛もない世間話で時間を費やした。

フェイトですら久々というか初めて聞くバルディッシュの笑い声に驚愕を隠せなかったらしいが、真相は定かではない。

機動六課 side out

??? side

「『…っ、……?』」

『ヌ…主、体調ハドウダ?』

「『…異常ありません。これは貴方が? それとも管理者が?』」

『イヤ、違ウ。　：ナント言エバイイノカ：』

「『：？　よく分かりません。　しっかりと説明をして頂けなければ状況把握が不可能に：』」

頭に乗つけられていた氷囊を取って側の棚に置き、男は辺りを見廻す。

整えられている部屋だった。　質素な部屋と言えばそれまでのだろうが、よく見れば本はきちんと五十音順に並べられ片付いているし、氷囊を置いた棚だって埃一つ被っていない。

この部屋の住人はかなりの綺麗好きと見える。

そこまで見たところで、ふと男はある疑問点に気がついた。

「『デミス？』」

『…何ダ、主』

「『その姿は一体？』」

『言ウナ。　何モ言ウナ。　正直コレシカ思イツカナカタノダ』

「『：尚更理解できません。　一体此処は何処で、私は何故：』」

男が“デミス”と呼んだ男性の姿は、どう考えても子供の物であり。そしてその後悔したような言葉が、更に男の状況把握を難しくする。いよいよ状況が混沌として来た時、これまた質素な木の扉がコンコン、と音を立てて叩かれた。

『ヌ：主、少々吾輩ノ設定ニ合ワセテモラエルカ？』

「『設定？ …ちよつと待ってくださいデミス、詳細な説明を求めま———』」

男がその言葉に何かを感じたか、“デミス”への説明を要求するが。その件を追求する前にドアは開かれ、流れるような桃髪を持つ：18〜20歳程度の女性が優雅に入ってきた。

「失礼します：あ、目が覚めたのですね？」

「うん！ ありがとう、お姉ちゃん！」

「いえいえ。 それにしても本当によかったわ、私が偶々通りかかって：貴方一人じゃどう考えても運べませんからね、この方は」

少々混乱した読者がいる可能性が高い為念の為書いておくと、「お

姉ちゃん」などと言ったこの子供こそが先程の“デミス”である。

「あ、いきなりでちょっと混乱しているようですね。まあ無理もありませんか…」

「『……………ええ…』」

兵器の心は既に安定している。ウエボンマインド 結局、何故暴走したのかは分からなかったが安定したのならばそれに越したことはない。

だがそれ以上にわからないのはこの状況だ。取り敢えず人間を卓越したその思考でまず考えたことは、デミスの変り身の早さについての謎であったことをここに記す。

「この子からお聞きしましたが、管理局に無実の罪を着せられて雨の中さ迷っていたとか…心中お察知します」

そしてこの嘘はもう少しなんとかならなかった物だろうか。

普通に考えて管理局の所有物の自分がこんな事を言うのはありえない。そう考えて、女性の後ろをよく見ると“デミス”がサムズアップしていた。

何処にその動作をする要素があるんですか、と疑問を提示したくなるのを後に廻し、目の前の優しく微笑んでいる女性に疑問をぶつけ

る。

「『申し訳ありません、まずここが何処だかお聞きしたいのですが…』」

「ああ、これは此方こそ申し訳ありません。大事な事を言い忘れてしまつて…」

どう考えても話の腰を折った自分が悪い筈なのにわざわざ頭を下げる女性。しばらくして顔を上げると優しい笑みを浮かべたままこの場所の詳細を言うのだった。

「此処は第2管理外世界。正式な惑星名称はまだ無いけど、国の名前は“アルデイス”。そして私の名前は“アルデイス王族警備軍副隊長”、リンと申します。改めて、ようこそお兄さん。私達の国、アルデイスへ」

「『……………?』」

恐らく、この瞬間こそ19年片時も休まず兵器としての任務を果たしてきた無還者が始めて『呆けた』瞬間だろう。無表情だからわかりにくいのは変わらないが。

見れば今は子供である“デミス”の頬もかなり引きつっている。

——“第2管理外世界”アルデイス。別名、“異端者の国”。

違法研究で造り出された“人造生命体”や、無実の罪を着せられた“次元犯罪者”を率先して庇い、守護し、そして民として住まうことを許可している都。

そんな場所があるのに、何故管理局が手を出さないか？理由は簡単だ、『出せないから』。

この都には管理局に対する“反抗軍”^{レジスタンス}を始めとし、『アルデイス』に古くからある警備軍がいくつか存在する。

各軍はそれぞれ友好的な関係を結んでおり、有事には戦力を決して、敵へと向かう矛となる。

中でもアルデイスの『王族警備軍』は別格であり、たった3人で構築されたその警備軍ははるか昔にこの都を占領しようと大挙して押し寄せた管理局軍を“2日”で全滅させたという。

つまり結論としてこの都は——管理局にとっての敵地そのものであり。

「あ、そういえばお兄さんの名前はなんですか？」

「『……、』」

「…あ、お姉さん！ ごめんね、お父さんまだ具合が悪いみたいだから、もう少し待ってから聞いてくれる？」

「あら、そうなの？ 分かったわ。では、御ゆっくり…」

パタン、とドアがしまつたのを確認し、トテトテと近寄る“デミス”。

そして溜息でも付きたそうな男。

「『デミス』」

『…何ダ』

相も変わらない変り身の速さ。　だがその声には少々陰りがあるのがわかる。

「『この状況はともかく、この設定だけではどうにか出来なかったのですか？』」

『…イヤ…ウム…スマナカッタ』

「『この状況も十分問題だと推測…いえ、断定できますが』」

彼とて流石にこの国そのものを敵に回せば無事では済まない。それを分かっているからこそ、デミスも子供ではありえないような顔で悩んでいるのだろう。

そして男―――“無還者”と子供に化けた“デミス”は、この状況をどう打破するか、兵器最高峰の頭脳を使って頭を悩ますのだった。

“信頼”（後書き）

『アルデイス』は『アルカディア』を参考にさせて頂きました。そのまま使うのはなんだかまずい気がしたのでこんな感じです。ネーミングセンスなくてマジすいません。

春斗「…バレちゃったな。バルディッシュに」

フラン「ええ…」

天破「バルディッシュならまだいいじゃん。それにバレたことに後悔は無いんでしょ？」

春斗「まあ、それはそうだが…」

天破「どうしたん？」

春斗「これが前哨戦だと思うと…本当の戦いするときどれ程の被害が出るのか…」

天破「……ああ…」

それはきっと、破壊の章終盤になったとき嫌でも理解するでしょう…（何）

感想、お気に入り登録ありがとうございます。本当に励みになります！

これからも天破をよろしくお願いします m (m

それでは、次回もお楽しみに (´A`)/~

“過去”（前書き）

正真正銘、9月最後の更新です。 10月はテストだやっほい／＼
^o^）／オワタ

取り敢えず今回の話を読むにあたっての注意事項をば。

- ・無還者の過去が一部明らかに……！！？
- ・アスデイスの国の過去も少し登場。正直チートです。
- ・なのはが目覚めたよ！
- ・やったね、たえちゃん！
- ・おいばかやめry

色々と詰め込まれていく下手な伏線。果たしてすべて回収できるのか、かなり不安な作者でございます。泣きたいです。

それではどうぞ（ωゝゞ

※9／23、修正しました。

誤…メビアとある幻想種の女性の間↵

正…先代とある幻想種の女性の間↵

申し訳ありませんm（┐┌）m

“過去”

「こんにちは、そしてようこそ。歓迎するわ。客人さん」

真っ黒なドレスの男が無機質な目で、そしてまだ顔をかなり引き攣らせている少年の目が映し出すのは、みかけは8歳程度であるニコニコと笑う小さな少女とその両脇に控えている男性と女性。

彼らは今、俗に『王室』と呼ばれる場所へ招待されていた。

「あたしがアル^{この国}デイスの王女：まあつまり頂点ね。王女のロザリー・アルデイスよ。そしてこっちが、」

「よく誤解されがちだけどロザリー姉ちゃんの弟のメビア・アルデイスです。そして：」

「ロザリー姉さんの妹であり、メビアの姉の：改めて始めまして。王族警備軍副隊長兼何か良く分からないけどお姫様っぽいのをやってるリン・アルデイスです」

「「宜しくお願いします」」

「『：、ええ、此方こそ：』」

その声は無機質だが、どう考えても兵器の心^{ウエポンマインド}がどんな反応を返すか

迷っているのが丸分かりな返答だった。

無理もない。この男は此処まで礼節を尽くされた挨拶をされたことがないのだから。

「（ボソボソ）主。何だこれは。 どうしてこうなった？」

「『……その疑問への解答ですが、これは98%の割合で貴方の責任であると断定します』」

彼らの目の前で、豪華な椅子に深く座りすぎてるせいで床に足が届かない様子のロザリーが弟と妹に笑われて怒っているのを見ていると何だか誤解しがちだろうが――

断言しよう。 彼らはこの国で最強、そしてあらゆる次元世界で化け物の部類に入る存在だと。

そう、子供――デミスと、男――無還者は、元々インプットされていた情報データからこの兄妹が何者であるかを知っている。

まず末弟の“メビア”と名乗った少年。 見かけは本当に何処にでもある高校生っぽい少年だが、その正体はあらゆる全ての幻想種の根源とも言われている『真祖の吸血鬼』である。

『ライフテイカー精魂吸引』などの希少能力レアスキルを備え、特に満月の夜は彼の独壇場であり、無限に魔力が回復していくのである。 実際に戦ったこともなければこれまで会ったことも無かったため、詳細な能力はわから

ないが、満月の夜ならば無還者と互角なのではないかと推測出来る。

次は穏やかな笑顔で優雅に立ち、先程も無還者達を迎えた“リン”という女性。ほんわかとしていて無害そうな感じであるが騙されてはならない、何を隠そう彼女は大昔に第97管理外世界^{地球}の^{地球}とある国で起きた『魔女狩り』という非人道極まりなき取締の中から魔術を使ってこの世界へ逃げ延びた本物の大魔女である。

よってどう考えても見かけ通りの年齢とは考えにくい。何らかの術で外見を変化させているのだろう。何よりこの国のNo.2を任され、その上で王族警備軍の副隊長を兼任しているのだからもうこの時点で普通の人間では無い筈だ。

無還者の“リン”に関するデータにも詳細な能力は無い。ただ一つ言える事だが、彼女と戦った管理局員は皆同様に外見を留めていなかったそうである。

最後、今もその小さな体でニコニコと笑い無還者とデミスを見据える少女。この国の2代目の王であり、その実態は今年で92歳——管理局創設前から生きていることになる——になるという、超大型の古龍種だ。

真の姿を見た者は誰もおらず、そして見た者は平等に殺されると言う。“死を告げる黒龍”とも言われ、その目で睨まれた者は蒸発し、その息吹を受けた者はたちまち腐蝕するという伝説を持つ。初代アルデイスの王が彼女の父であり、史上最古の龍種であったのは有名な話である。

最強にして最凶の布陣の『王族』である。正直この中の誰か一人でも出れば戦場に他の味方なんて要らないというのが実情であった。

「そう言えば、まだ貴方達の名前を聞いてないんだけど」

「ああ、先程はの方が具合が悪いらしくて先延ばしにしたの。コホン、改めてお聞きしますが、貴方方の名前はなんですか？」

さて、いきなり難問が飛び出してきた。再びなんと答えていいかわからない為（寧ろ解そのものが存在しない為）、兵器の心がフリーズし、今は子供の姿である“デミス”が冷や汗を流しながら視線を右へ左へと移動させる。

先程も記述したようにこの3人の実力は無還者とデミスをしてどうなるかもわからない程強大な物である。これが一般人であつたら『情報漏洩の危険が合った為事故死した』で片付けられるのだが、此処は管理外世界であり相手はその世界の唯一存在する国の王族である。何かあれば管理局とこの世界の全面戦争になりかねない。

「（ボソ…）主。 こういう時の兵器の心だろう？ 何かいい手を…」

「『……警告。兵器の心及び“無還者”に予期せぬ質問、または動作が命じられました。関係者は速やかに問題を修正してください……』」

「これほど主の兵器の心を作った人物に殺意を抱いたのは始めてだ。
もし許されるのなら今すぐその者を殺しに行きたい」

許されない。　　ウェボンマインド　　というか兵器の心の基礎を作った人物は既に無還者
本人の手によって惨殺されている。

そんなこともあり、暫く双方無言の時間があつたが、ふとメビアが
困ったような顔で言った。

「…もしかして……名前も告げられない位、深刻？」

うまい具合に勘違いし始めたようである。　　そう考えた一瞬デミスの
目があらゆる世界の法則を超えて光った。

「……ずっと真っ暗な部屋にいたの」

なるべく涙を堪えるかのごとき声を作り、『不幸な子供』という役
を作ろうとする。　　無還者の目が少々突き刺さっているように感じ
るが、何も言わないところを見ると兵器の心ウェボンマインドが自分に任せるとい
う判定を下したらしい。　　今はそっちの方が好都合である。

「ご飯も食べさせてもらえなくて…お父さんはいつも無理してて…
何とか脱出できたんだけど、でも…でも…」

「ああ、良いわよ良いわよ！　もう言わなくて大丈夫！」

ロザリーが慌ててデミスのを止めたのを聞き、俯けた顔で口を曲げるデミス。人間の姿に変貌していると元は骸の姿である彼でも表情が分かりやすい。

「リン……頼むわ……」

「ええ、分かってるわ……姉さん」

しかし演技は止めず泣いているかのように身体を震わせていると、ふとリンとロザリーがボソボソと話してリンが部屋を出ていった。何故だろうか？　性質上この状況では言葉を出せない無還者だが、その行為をよく観察すると彼らの顔から怒りのような感情が読み取れた。感情を持たぬ彼からすれば意味のわからない物であるが。

「でもまあ、それだと無理矢理名前を聞くわけにもいかないし……客人さん、でいいかな？」

困ったような顔から一転、こういう件には慣れているのか笑顔でそう提案するメビア。ふと考える無還者だが、元々名前が無いので軽く頷くことで了承した。

「うん、じゃあ取り敢えずこの件は置いて……せっかく来たのも

縁だし、この国を見てったらどうか？ 楽しい国だよ、此処は。

僕はここに来て確か：100年：150年：？ その位になると思うけど、先代の頃からこの国は勢いが衰えないから」

「普通ならメビアが王になる筈だったのに、お父様が先代ってだけで私が推されたのよ？ おかしいでしょ？ 私はその辺でお菓子とか食べてたほうが似合うのに」

「『…？ 今の言葉への疑問点ですが、貴方方は“兄妹”なのでは無いのですか？』」

「ああ、形だけよ、形だけ。ただそれの方が次王位を受け継ぐ人がはつきりしてるからそう決めたの。籤引きで」

「籤引きで王様が決まったの！？」

思わず泣き真似を止めて大声を上げるデミス。だが子供口調なのを忘れない辺は流石と言えよう。

「いや、王は：非常に不本意だけど私なんだけどね？ その次の王様が誰か決まってるってないと困るから、せっかくだから『兄妹』を作ろうって事になって：で、このメビアとさっき出ていったリンの二人が次の王様の候補者で、でもどっちも王様は誰がやってもいいよね？ って感じだから籤引きで弟と妹っていう順列を決めたの」

「…（管理局では考えられぬな…）」

一般的に王位というものは、その位に就くだけで莫大な財力と強大な権力が得られる物である。管理局では元帥がそれに該当する。

誰もが垂涎必死のその職が、この世界では血塗られた戦争もなく汚れた裏取引も無く籤引きで決まるらしい。

なんと平和な世界と平和な国だろうか。正直デミスとしては、無還者に命令して邪魔者を消している管理局の上層部に見習って欲しいものである。

「まあそんなどうでもいいことはどうでもいいわ。えーっと、この時間帯暇なのは確か…ライム？」 暇ならこっち来なさい」

少しおかしな言葉を使い、コンコンと頭を叩いて――念話なのだろうか、ここにはいない誰かへと呼びかける。

返事はこの部屋の扉のノックだった。

「（ガチャ）失礼する。 ロザリー、暇だから呼ばれたが何の用だ？」

王が相手だというのに敬語どころが礼儀のひとつも見られない。だがそれをメビアもロザリーも気にすることなく、ニコニコと笑ったままロザリーは要件を告げる。

「ええ、客人よ。 暇潰しでもいいから簡単に案内してくれる？」

「此処に客人？ 珍しいな：お初にお目にかかる、私はライム・ロ
ーディウス。この小さな王女とその隣の化け物王子を護る王族警
備軍の補佐役をやっている。宜しく頼む」

入ってきた男性は人懐こい笑顔を浮かべた20代後半のような感じ
の男性だった。しかしその頭からは曲がった角が生えている。先
程から実年齢とは程遠い外見をしている者が続いている上、この男
からもギリギリ気づける程度の異常な魔力が漏れていた。人間で
ないことは確かだろう。

「ちょ、ロザリー姉ちゃんはともかく化け物王子って何さ！ 否定
はできないけど！」

「化け物だろうが！ 此処へ来た時の我々がお前を見たとき腰を抜
かし掛けたのだぞ！ 吸血鬼の真租クラスはとうの昔に滅んだ物だ
とばかり思っていたからな：」

「あ、真租っていう括りで言うなら吸血鬼の生き残り僕だけになっ
ちゃうけど」

「知っている。まあ、一般の吸血鬼の寿命も300年程度あるの
だから真租はどれ程寿命があるのか計り知れないがな：」

「いや、そこはあたしの言い方も疑問に思っ
てよ！？ 小さな王女
って何よ！ その通りだけど、あたし人への変
化だけは苦手なんだ
もん！」

「『そうなのですか?』」

「ええ、そうなのよ…って、ごめん客人さん。置いてけぼりになっちゃたわね」

横槍を入れない子供のようない合いが続くかと思いきや、無還者の純粋な疑問によって何とか収まった。そしてこのロザリーの言葉にライムが疑問を提示する。

「む? ロザリー、『客人さん』では流石に失礼ではないか? 名前は…」

「……ライム、この人たち管理局の訳ありで…」

「…そうか、それはすまなかった。どうやら裏の関係者のようだが…あそこは悪夢だっただろう、嫌なことを思い出させてしまったな」

しかしなにやらメビアが耳打ちすると、一瞬だがその笑顔に陰りを差し謝罪をした。その表情の変化を見逃さず、デミスが子供の口調のまま彼に尋ねる。

「お兄さん、ぼくたちのいた場所知ってるの?」

「あはは、お兄さん? あかね、この人は実は70歳前後の鬼神族の一人で（ドゴォー!）」

「あ、お姉ちゃんの頭に巨大なコブが」

なにやら笑いながら訂正しようとしたロザリーだが、ライム本人によって封殺された。だがデミスと無還者はそれを聞き逃さない。聞捨てならない単語が再び聞こえたからだ。

『鬼神族』。昔、管理局の『平和の害』になる種として住処を追われたA A A級のレア種。非合法的な奴隷売買にもたまに出品されるがそれは非力な女性のみ。鬼神族の男は例えば子供であっても拳の一撃で人間の身体を肉塊に変えてしまう程の怪力を持つ。更に共通して希少能力である『老力増加^{エンシエントアップ}』という能力を持っており、歳を重ねれば重ねるほどある一定の時期までは力が増加していくという種族だ。

そして目の前にいる男性は先程70歳といった。しかし衰えている様子は全然見えない。先程記述した能力の傾向から言って、その怪力はどれほどの物になっているのだろう。

しかし鬼神族は本来平和主義者で、人間との交流を積極的に望んでいる種であるのだが…。

「（ボソ…）主？」

「『データを発見しました。当時の少将が鬼神族のDNA目当てで『種族狩り』を行なった種族の生き残り、または子孫と思われるます。尚このデータは第一級危険任務のフォルダ内に保存されてお

り、管理者の許可が無い者には閲覧が不可能となっている様です』」

「……やはりか」

目の前にいる男も、管理局の行なった『正義』の生き残りというわけだ。　そう思い、気づかれないよう顔を歪めていく。

洗脳を受けた自分の主はその行為が善か悪など考え無い様にプログラムされている。　よって無還者について行って様々な事を思考するのは自然と彼になるのだが、彼自身は管理局があまり好きではなかった。

寧ろ嫌いと言っても良い。

管理者の姿を見た事がある彼としては、尚更の事。

「ま、すこし気分が沈んじゃったかもしれないけど…案内頼めるわよね？」

「うむ、了解した。　それでは客人殿…此方だ。　まずは城の中を案内するでしょう」

だからこそ、今は子供の姿の彼にとってこの世界は異様に輝いて見えるのだった。

自分の夢見た世界と、重ね合わせて。

「『…?』」

ふと気づけば、ライムに付いていこうとしている自分の主がこちらを見て無表情で首をかしげている。　どうやらいつの間にか話が一段落していたらしい。

「あ、ごめんお父さん！」

子供の声と子供の口調を作って、まだ自分の事を何も話していない主に向けて彼は走る。

他でもない、『自分の後継者』を探すため。

無還者 s i d e o u t

機動六課 s i d e

「…、う……」

「「「なのは!?(なのは姉っ!?) (なのはちゃん!?)」」」

「…、あれ? 私、どうしたの…?」

「良かったあああ……よかったよおお…」

「フェイトちゃん、泣いてるで?」

「な、泣いてないもん!」

「はは、気絶してるだけで命に別状もないんだろ? いいじゃねえか」

未だに医務室は復旧しないので、現在急遽医務室代わりとなっている仮眠室。

あの六課襲撃事件から3日が経ったある日の午後、エース・オブ・エースはようやく目を覚ました。

まだ寝ぼけてるかのうちにここがどこだかも分かっていないようだが、10秒くらい春斗、フラン、はやての顔を順番に見ていったかと思えば、はっ!として春斗の肩をつかんで揺さぶった。

「あ、あの男の人は!? そして偽物のフェイトちゃんは!?」

「落ち着けなのは姉、パニックになりすぎて何言ってるのかわからねえよ! 偽物のフェイトさんで何だ!? んで男って誰だ!?!」

「あ、ごめん…」

「まあ、目が覚めたばかりで良く状況が分かってへんやろ。簡単でええ、思い出しながら話してみてくれへんか？」

「うん」

そして彼女は話す。その日、彼女が涙を流していた頃何があったのかを。

その前に、思い出していく段階で彼女は謝った。自分が熱くなっていた周りに目を向けていなかったこと、そして春斗やはやて達にとんでもないことを言ってしまったことを。

しかし皮肉にもあの時の偽物が言っていたように、彼女はあっけなく許された。はやては笑いながら、春斗は少し苦笑しながら。春斗としては、なのはが襲われたのは自分の責任であったかもしれないので心苦しい思いだったが。

まず彼女はフェイトの偽物について話した。声だけではなく、風貌、魔力、全てがフェイトの物と全く同じであり、気づくまでは全然わからなかったという。

となれば何故偽物だと分かったのか、ということになるがそれは何とか第六感ということでごまかした。あの時春斗の声が聞こえたのはやはり幻聴であると考えたのだ。こっそり春斗が安堵したのはバルディッシュの記憶領域の奥の方に仕舞われた。

次に蒐集されたときの様子。これは彼女は今も鮮明に覚えているという。

子供の頃、ヴィータ達がまだ敵だった頃だ。その頃に蒐集されたときと同じく、自分の体から急速に魔力が抜けていく感じと激痛が走った。そこまでは同じだったのだが――

「…凄く冷たかったの」

「え？ 何が？」

「その、私のリンカーコアを蒐集したあの男の人の腕。まるで冷水に浸かってるみたいに冷たかった」

「！ …なのは姉。それは人間として感じる体温が低かったように感じたか？」

「ううん、違うの。何て言えばいいのかなあ…身体の中に手を入れた時、自分とは違う何か冷たい物感じたっていうか…」

「…マジか………ッ」

「？ どうしたんや、春斗」

それを聞き、春斗が頭痛を堪えるかのような動作をしたのを見てはやてが尋ねる。返ってきた声は低かった。

「はやて、直ぐになのは姉の身体の精密検査行けるか？」

「！　それはまたどうしてや？　それになのはちゃんの体の精密検査は気絶しとる間に既に終わっとるで？」

「なのは姉のその感覚には聞き覚えがある。昔の俺の同僚がとある任務地でそんな感覚を味わったって言ってな？　ソイツは一週間の内は元気だったんだが…」

「（コクコク）」

「一週間が経過したとある日のことだ、ソイツの口から突然巨大な蟲^{ワーム}が出てきたらしい。理由はその任務地に潜伏していた次元犯罪者の使った魔道具だそうだ」

——『死蟲破喰^{ワームクラッカー}』。

裏の世界で出回っている、管理局が第一級使用禁止魔道具に指定している魔道具だ。

使う者の魔力を人の魔力を喰らって成長する卵に変換し、敵の体内へ産み付ける魔道具。だが使用には相手の体の中へ直接ぶち込まなくてはならないので使用難易度は高い。

使う者の魔力が高ければ高い程、蟲^{ワーム}は強大で獰猛な物になるという。さて、そんなものを無還者が使ったらどうなるだろう？

…想像には難くないだろう。

「はははは、春斗!!　それ治療法は!?!　治療法はあるんだよね!?!」

「大丈夫だ、卵がある位置さえ分かればシャマルさん辺りが取り出せる筈…というかそれしか治療法はない。卵が孵ってたら本気で不味い、早く手配を」

「もう済んどる」

「流石はやて。　よしなのは姉、起きたところ悪いが病院に直行だ。異議は?」

「無いよ!!」

「素晴らしい答えをありがとう。　で、すまんフェイトさん、バルディッシュを貸してくれるか?」

「?　バルディッシュを?　私は良いけど…バルディッシュはどう?」

《問題ありません》

「じゃあ、はい。　最近春斗、バルディッシュ借りること多いけど…」

「ああ、日々綺麗になっていくフェイトさんについて論議を交わしている」

「ちよっ!!?／／ バルディッシュ、それ本当!?!」

《サー…春斗、あれ程内密にしろと言ったのに…》

「え!?! ちよ、ええ!?!」

流石はバルディッシュ、主のツボを心得ている。なかなかノリの良いデバイスである。

「じゃー、ちよっと外出てくる。なのは姉、冷や汗掻きまくってる所あれだが命の危険は感じなくていい状況だ。まだ卵は孵ってない筈だし、第一その蟲が喰うのは魔力だし」

「焦るよ!?! 自分のお腹にそんなのがいるって分かったら焦るからね!?!」

「って2人とも! さっきの春斗の話は本当なの!?! ねえってば!?!」

そんな声を聞きながら、春斗は臨時医務室を出た。

「絶対にあの男はまたなのは姉達の前に来る」

中庭に出て寝っ転がりながらつぶやくように隣のバルディッシュに漏らした言葉はそれだった。

《それは回避可能か？》

今更バルディッシュもそれが本当か、など聞きはしない。その声色が、その表情が本当だと言うことを物語っている。

「無理だ」

そしてバルディッシュの疑問に対し、春斗の答えも簡潔で残酷だった。要するに今のままでは、今回以上の被害が何れまた出ることになるのだ。

「この課が色々と問題を含んでいる課である限り、この状況は改善

せず寧ろ悪化するだけだ。　　いつその事解散しちまえば平和になる
かもしれない」

《…、
》

「と、思ったんだが」

《？
》

「平和には絶対にならん事に気がついた。　俺達が居る限り」

《…それは、一体？
》

穏当ではない言葉。　その疑問に対しての答えも、まるで春斗は事務的に、かつ簡潔に答えた。

「ミーティングの時もサラリと出たが、男の狙いはこの機動六課だけでは無く管理局全体だ。　六課が解散したところで平和にならないのは目に見えている」

《前から思っていたのだが、何故あの男は—我が主《サー》やなのは嫌の事を狙う？
》

「根本的な質問だな。　だが的確だ…簡単な事だろうよ、何者かが命令したからだ」

あえて管理局の誰かが、とは言わなかった春斗だが、バルディッシ

ユならば理解しているだろう。彼のデバイスとしての知能はその辺のデバイスを軽く上回る。まさに一を聞いて十を知る、という言葉が簡単に当てはまる様に。元々自分の主が無言であったというのもあるのだろう。

《命令……》

それを呟いたつきり、バルディッシュも黙り春斗も黙る。

だが、感じていることはおそらく同じだろう。

このままでは、不味い。

いつか必ず、取り返しのつかない事件が起こる。

そしてその日は彼らにとって不幸なことに——着実に迫っていたのである。

機動六課 side out

アルデイス side

「とまあ、城は正直に言って何も面白い所が無いだろう？ この城には我々王族警備軍の面々と王族しか住んでいないのでな。しかし部屋だけは無駄に100以上ある。先代が作ったらしい」

その頃アルデイスでは、相変わらず様々なことをライムに質問し情報を収集している無還者と、この状況を楽しみ始めたデミスが城の中を回り終えた所であった。

その結果あってかなり興味深い話も聞けた。この国が出来た歴史だ。

まず先代でありながら同時に古代龍族の長でもある——ロザリーの父は、その生まれながらにして得ていた知力と類い稀な力をもって、自分達古龍族の住処を治めていたのだ。

だがある日のこと、彼らと友好的関係にある幻想種の中の一つ、賢狼族がボロボロになりながら古代龍族の長である彼に助けを求めて来たという。

なんでも他の種族が、取り決められた縄張りの条約を破って不法に彼らの縄張りを占拠したらしい。義に厚く、そう言った卑怯な事を嫌う先代の王は直ぐに其方へ向かいその種族を懲らしめ、追い払った。

賢狼族はそれはそれは大いに感謝し、なんと礼として自分達の縄張りを差し出してきたのだ。もちろん賢狼族はそのまま住み続ける。だがもし自分達の長になってくれるのなら、賢狼族の縄張りでしか取れない果物や植物を提供する。なのでもしよければ自分達の縄張りも収めてくれないか、という頼みだった。

古龍族は悩んだが、それを承諾した。これが現在の国であるアルデイスの始めの一步だったという。

その次はなんと先程笑顔で挨拶していた『メビア』の古龍族へのカチコミだった。様々な世界を旅していた最後の真租の吸血鬼である彼は、暇な生活にも飽きたので世界最強と聞いた古龍族へ喧嘩を売ったのである。

全古龍族対真租の吸血鬼一匹。この絶望的な戦力差の中、メビアは先代以外の古龍族を全て戦闘不能にし、一ヶ月ほど休み無く先代

の王とガチバトルをしたらしい。結果はメビアの敗北だったが、先代はその強さと根気に敬意を表し、彼に自分達の仲間へならないかと誘ったのである。

その誘いに対しての会話が、

『うーん。貴方のグループに入れば退屈しない？』

『ふっ。させるものか』

『よし、じゃあその誘い受けるっ』

という物であったのは今もアルデイス国の一部の民の伝説となっている。

真祖の吸血鬼のみならず、長生きする生き物にとって『退屈』はどんな物よりも恐ろしいとライムは語る。やる事がなくなればもう生きるのも面倒になって自害する者もいるらしい。

さて、古龍族からひとときしりの歓迎（と言う名の仕返し）を受け、当時の現状を聞いたミビアはふと『ちょっと行ってきます。多分すぐ帰ってきます』という書置きを残し50年程いなくなったらしい。確かに古龍族からしれみれば50年などほとんど意味の無い物だが、何処がすぐ帰って来るなんだ、と先代が一人でエアツコミをしていたのは古龍族の記憶に根深く残っているとかなんとか。

そして50年後、笑顔で帰ってきたメビアは先代からひとときしり説

教を受けた後にいくつかいろいろな世界から連れてきた幻想種などを紹介した。

ユニコーンやゴブリン、精霊種など：それらはメビア曰く、生存競争に生き残れなかった種族、またはグループの生き残りで自分の住処に（暇潰しに）隠して世話をしていたらしい。その中には家族とはぐれたりした鬼神族の少女の姿もあったらしい。

メビアの願いというのは、そんな彼らの面倒をどうにかして見てはくれないだろうか、というものだった。それを聞き、何とも言わずに彼が連れてきた100匹以上の様々な種族等が揃っているのを壮観だ、と思いながら見ているとふと先代はあることに気づいたという。

全く喧嘩：争いをしていないのだ。それどころか本来食べられる者と食べられてしまう者の間柄にある筈の鳥人種と獣人種が仲良く話していたり、その獣人種が主に食べている筈の人魚族マーメイドの子供が獣人種の手の中でぐっすりと眠っていても誰も慌てない。寧ろ当然というべき感じだった。

それを見たメビアが、少し笑いながら言った。

『古龍族の王様には信じられない光景かな？ でもね、僕が保護したのは皆こんな感じなんだ。共に食料を分け合い、取り合い、そして笑い合う。まあ喧嘩して取り返しのつかない規模に成るたびに住処を移動してきたりもしたけど、皆同じ苦労を知ってるんだ。今更種族間の争いなんてしてる暇なんてなかったんだよ』

これを聞いた先代は感動した。自分が求めていたのはこれだ。争い無く、種族間で余っている食べ物を分け合い、譲り合う。そんな世界が出来たのならどれだけ素晴らしいだろう。

『王様。あえて今だから言うけど、この先僕らの姿をしてるけど僕らじゃない生物が出てくると思う』

そんな先代へ、笑顔のままだが目だけは真剣なメビアの言葉が彼の耳へと流れていく。

『僕は勝手に“賢猿人”て呼んでるけど、彼らは僕らには及ばないまでも既に今の時点でかなりの高い知能を持っている。今はまだいいけど、これから更に“賢猿人”は知能と子孫を広げていって、僕ら幻想種、古龍種の数を超えるだろう。そうなると始まるのは数の暴力だ。彼らにとっての僕らは“異形”となり、差別と略奪が始まると思う』

全ては予想でしかないけど。そう言っ一つ深呼吸をしても、彼の言葉に口を挟むものはいない。

何といっても、幻想種の中ではかなりの知力を誇る真租の吸血鬼の言葉だ。その予想が当たる確率はほとんど100%とすら言えるだろう。

『古龍族の王様さん。僕らによる、僕らのための、僕らの国を作ってみない？ もちろん簡単には行かないだろうし、絶対に争いも起きる。けど価値はあると思う。どうだろう？』

そして、この一言こそ――

『――暇潰しにさ♪』

『…ふふっ。暇潰しにもならんさ。忙しすぎて後悔するぞ、メビア』

この国が始まる、本格的なスタートになったのである。

メビアは王と本当に仲が良かった。親友のように色々な場所へ連れていっては幻獣や幻想種に話を聞かせたり、時には喧嘩したり、時には星を一つ消滅させたりと…彼らの信用の為に言っておくが、一応無人惑星だったので死人は出ていない。

…そしてある日のことだ。そう、今から92年前――ようやく国と呼べるまでに人も集まってきた頃。

先代とある幻想種の女性の間に子供が生まれた。それがロザリーである。国中の民全員がお祭り騒ぎで、自然と宴が始まった。テンションそのまままで宴は一ヶ月続いたという。

この頃、リンが国の近くの樹海で怪我をして倒れているのが見つかって保護されたり、鬼神族であるライムらが国に加わったりと色々あった。騒ぎもあったがそれぞれが相応の形で丸く収まり、アルデイス国は順調に繁栄していった。

「まあ、王族ではない私が話せるのはこの位だな。何か質問はあるか？」

「『…その質問への返答ですが、先程から至る写真の中に写っているこの女性は一体？』」

そのライムの言葉に反応し、疑問を返したのは無還者だった。ふとその言葉に眉を釣り上げると、ライムは申し訳なさそうにこういうのだった。

「ああ、その女性か…すまないが分からない。様子を見るに、メビアとロザリーがいた頃からずっといると思うのだが、現在はその女性の姿がないのだ。どうやら王族のみしか知らぬことらしくてな、誰にも話せないんだそうだ」

「『…、』」

「…お父さん？　どの女の人がかしたの？」

写真に写っているのは、カールが掛かった長く白い髪に水色の瞳をした女性だった。落ち着いた感じを漂わせ、見ているだけで心が

癒されそうなの、そんな不思議な感じに誘われるような女性。
それを無還者は、無機質な瞳でじっと見つめている。

「『…、』」

ザザザッ…

——…約束です…絶対、ですよ…

ザザザザッ…

「『…ッ?』」

「? 客人殿、どうした? まさかまだ具合が悪いのか?」

「お父さん? (主?)」

一瞬だけ。

一瞬だけだが、確かに——頭の中に、何かの映像が流れ込んできた。

兵器の心の誤作動だろうか? ウェボンマインド だが自分ではそんなバグは発見出来ない。兵器であろう自分が風邪の類を引く訳も無い。では一体

…？

「『…いいえ、問題ありません。ですが少々この女性が気になって…：申し訳ありませんが、少し此処で休ませていただいても宜しいでしょうか？』」

「そんな気にする必要はない。どうせこの部屋も使っていないのだから…では待っていてくれ、少し飲み物を取ってこよう」

「あ、じゃあ僕はお父さんを見えています」

「うむ、頼むぞ」

そう言って少し笑うと、パチンツ！と指を弾く。と同時に彼の姿が気配ごと消え失せた。転移の一種だろう、と計算しつつ近くにあったソファアーへと座る。その横へデミスがちょこん、と座った。

「…主？」

「『申し訳ありませんデミス、情報収集の最中に…』」

「いや、それはさしたる問題ではない。寧ろ問題なのは主だ」

「『…？ よく意味が理解出来ませんでした。宜しければもう一度お願いします』」

「今主は何といった？ 『この女性が気になって』？ …それはお

かしい、主は兵器の心で感情ごと過去を抑えられていると自分で言っていただろう。記憶喪失も同然の主が『会ったことのない女性』を気になるというのはおかしい」

「『…、一度バグが起きた時間帯からバグが目立ちます…自己修復は不可能で、原因も不明。宜しければ休止モードに入りたいのですが、よろしいでしょうか？』」

「…そうだな。休む事も大切だ。我々にはそんなものは無いがな——ところで主、まだ高町春斗について何も思いつかないか？」

「『何の事でしょう？ 彼は局員No. 500341“高町春斗”ということしかデータにはありませんが…』」

「いや、何でもない。吾輩の勘違いだったのかもしれぬしな…『無還者、休止モードを許可する』」

「『？ デm——モード承認しました。 休止モードに移行します。 御用の際は再起動してください』」

質問の意図が分からずそれがどんな意味が尋ねようとするも、ふと機械的にそう告げると、倒れるようにそのままソファーに横たわる無還者。邪魔にならぬようソファーから飛び降りると、狙ったかのようにそこに無還者の頭が乗った。そのまま健やかに寝息を立て始める。

「…こうしてみると、何処にでもいそうな人間なのだがな」

その寝顔を見ながらボソツと独り言を漏らすデミス。そして休止モードに入った無還者の代わりともいえるべき彼は、『高町春斗』と今回の『無還者のバグ』に付いて思考を始める。

（まず、十中八九あの“高町春斗”と名乗っていた男はNO.2の“消失者”：幼い頃から魔力も性格もまるで変わっていなかったからそれは直ぐに理解出来た。：あの頃の主が知ったら喜ぶのであろうか、弟が幸せになっていることを）

思考の最後で訪れた無駄な感情と思考を消し、再度もう一つの問題の究明に没頭する。

（それよりも分からぬのは主の兵器の心のバグだな。 ウェポンマインド これまで10年間以上主に付き合ってきたが、此処まで酷いバグは見たことが無い：キーワードは高町春斗が言っていた『目的』、そしてあの女性：）

先程まで自分の主が見ていた写真立てを取り、問題の女性を眺める。先程も記述したとおり、物静かそうな女性だった。しかしよく観察すると、かなりの色白で体が弱そうな感じがする。病室で寝込んでいてもおかしくないレベルだ。

もしかや病気だったのだろうか？ しかしそれでは無還者がこの女性を気になる理由が分からない。

———も、し、や、プロジェクトに関係する者だった？ いや、それは無いと思う。彼女の写っている写真が色あせているのを見ても、彼女がいたのはプロジェクトが出来た遥か昔であることが伺える。それにその頃にはまだ管理局の姿もほとんど無かったはずだ。

どんなに考えても、手掛かりが少なすぎる。無還者が何か覚えているとは考えにくいし、他の兵器達も知っている可能性は低いだろう…

そう考えた時、消えた時と同じようにライムが急に現れた。魔力反応のないその転移に今始めて疑問を覚えるが、今はまた子供の役に戻らなくてはならないデミスは、取り敢えず考えていることを頭の隅に追いやり、ライムへ状況の報告をするのだった。

アルデイス side out

??? side

ザザザッ…

『私は…（ザザ…）だから…（ザザザザ…）から…分からないです
けど…』

ザザ…ザザザザッ、ザザ…

『貴方の…（ザザ…ッ）…は、暖かく、心地いい…です』

ザ、ザザザザ…ッ、ザザ…

『どうか…私のことは…（ザザ…）れて…貴方は（ザッ、
ザザザ）になってください…貴方には、その…（ザザザ…）があり
ますし…（ザザッ）の私も、きっとそれを望んでいます…』

ザ…ザア、ザザッ…

『ありがとう（ザザ…）…楽し（ザザ…ザザッ）です……ねえ、（ザ
……ジジッ、ジジジッ）？ 私は、多分だけど貴方のことが――
』

ザッ、ザ――。

“過去”（後書き）

最後の終わりに意図はありません。何となくこんな終わり方をしてみたかったです。

なのは「かなり深刻な終わり方だったけど…」

フェイト「大丈夫なの？ 無還者は」

天破「大丈夫じゃないよ。こっからだよ、いよいよ物語は。そして管理局もついでに破壊されていくよ」

はやて「ついで！？ ついでなんか私達は！？」

一応最終回までのプロットは出来ているんですが、ハッピーエンドにするかそうじゃなくするか…いや、バッドエンド（兵器&人類滅亡Ⅱ生き残り無還者のみ）にはなりません、どっちかによってラスポス戦で生き残る人数が違ってきます。

ハッピーエンドにすれば全員生き残るかもです。無還者も生き残り、更に色々なオマケも付いてくるかも知れません。

しかし切ないエンドになると、悲しい別れが何回かあります。この小説のラスポス戦のテーマは実は『戦争』です。モブキャラは普通に死にます。これはハッピーエンドでもこっちでも変わりません。

…まあ、ゆっくりと煮詰めていきたいと思います（ハ、△、＊）

それでは、読んでいただきありがとうございました！

天破でした（´∀｀）／～

“狂者”（前書き）

ただいま戻りました！　ようやく投稿できました…ハハ

今回のサブタイトルですが、すいませんいいのが思いつかなかったんです。タイトル詐欺ですごめんなさい。狂ったのが出てくるのは前半だけです↑
もしかしたら変えるかもです↑↑

では、この話を読むにあたっての注意事項っす！

・遂に王族警備軍『隊長』の登場です！　歪みきった性格とそのチート過ぎる能力をどうぞ見てくださいw

・ロザリーvsデミス…？　何があったっ！？
ウェボンマインド

・兵器の心は無還者もデミスも知らない謎のリミッターが！　そしてそのリミッターに保存されていた物とは…？

・アルデイスが本格的に管理局と対立していく、この物語の大きな転換点みたいなのを意識しています。　そうは全く見えませんがw
・春斗、逃げて。　超逃げて。

これで一旦アルデイスの世界からは帰還し、同時にデミスと無還者の出番もアグスタ編までほとんど無くなります。　さあ、皆様お待ちかね！！　次回からはデイルとフランのターンが始まる…筈ですよ…！！（お

…シリアス方面になりそうですが（△、ヾ）

それでは、どうぞ^^　すぐに修正を加える可能性があります、ご了承くださいm（￣）m

10／1 11..50 追記..寝ぼけてたのか、完全に間違えてい
る部分を発見しました。そして修正；
誤↓いくらでも変えられるようになった『人間』はゝ
正↓いくらでも変えられるようになった『精霊』はゝ
申し訳ありませんm（　　）m

“狂者”

貴方は、『天国』と『地獄』という名称の世界はあると信じているだろうか？

所詮、作り話や様々な宗教が造り出した空想・幻想の世界。死後の救済と断罪の世界などあるわけが無い。そう思いの方が多いのではないだろうか。

しかしそれでは余りにも味気ない。なので仮定しよう、『天国と地獄が実在する』と。

まず『天国』という世界を考えてみる。数々の御伽話や宗教では、天国とはおおまかに『雲の上、またはその更に上にある全く別の世界』とされている。そして天国と言えば『天使』や『神』などが存在する世界であり、死後この国に来た人々は幸せに暮らせるという。

では次に地獄について考えてみる。地獄と言えば先程も少し記述した通り罪人達の罪滅ぼしの場、または浄罪の場と呼ばれている。

重い罪を背負う罪人には拷問や苦痛を伴う仕事、どちらかといえば軽い罪を背負う者はしばらく地獄で裁きを受けると天国へ昇れる、との話もある。

地獄の住人という単語で連想するのは、『悪魔』や『死神』、『鬼』だろう。だが此処ではそれらに触れず、地獄の最高権力者と言われる――『閻魔大王』について深く考えてみようと思う。

閻魔大王とは、様々な御伽噺や宗教などで時には悪役として、時には厳正なる法の執行人として登場する。彼の腹一つで地獄に堕ちた魂が天国へ昇れるか否かを決めると言っても過言ではない。

法の執行者。　この単語から更に我々の身近にある存在を導けないだろうか？　——そう、管理局である。

皮肉にも管理局は、聖王協会の使徒や局員からは『天国』、次元犯罪者などからは『地獄』と呼ばれる。『天堂地獄』——者によつては天国にも地獄にもなるという意味の四字熟語だが、まさに現在の管理局の代名詞と言えるのかもしれない。

結局の所私が述べたいのは、『疑う事なき正義の法のもとに罪を必ず裁くべき』という使命を掲げるのであればそれ相応の態度を示して頂きたい、と言うことだ。

正義。　無罪の市民を犯罪者に祭り上げ、家族をも破滅に追い込むその所業が正義か？

法。『正義』と掲げるのは結構だが、金でいくらすり抜けられるような法律が果たして許されるのか？

此処に書いてあることは所詮極論であり、反感を示す者も多くいると思う。上記に書いてる言葉を信じるのも諸兄ら次第だ。

だが、一度だけでも良い、考えて欲しい。果たして今の管理局のやつていることは正義なのか？　今自分らが為していることは果たして正義か？

正義と悪とはなんなのか。　その問いの意味を深く捉え、諸兄らの考えの手助けになれば幸いである——

＊

「『——尚、この件に関しての異議・反論は全て私が負うものとし、我らが自由の国アルデイスとは何の関係も無い物とする』——
—著…『アルデイス王族警備軍隊長』 ドーナ・クライオン」

週刊雑誌の特集に存在した『最低の人間から、管理局への反論手紙』
と洒落が効いているようで洒落にならない記事を読み終わった管理局員——高町春斗はふう、と息をつく。

“ドーナ・クライオン”。管理局のみならず、その力は全管理世界、いや管理外世界にまで轟いていると言われており、現在確認されている中で最も生きていると言われる——最強の『古代精霊』である。

元々は脆弱なとある湖に宿っていた精霊だったが、あらゆる世界の中で唯一『鍊金術』を完成させ、更にそれを昇華させた物を操るようになり——本人は『遊戯造界』メイキングワールドと呼んでおり、その正体は擬似的な『世界』を造り出す能力である。

『世界の創成者』や『現代に甦った神』、『最低の精霊』として有名であり、管理局唯一の『特級指定次元犯罪者』とされている。

この『特級指定次元犯罪者』に付いて調べてみると、法に厳格な管理局には珍しく、『このリストに登録された次元犯罪者と対立した場合、特別な事情がない限り逃亡を許可する』とある。

なんてことはない。自分の力を私利私欲のために利用しようとした管理局の船を1000艦程沈めただけである。それもただ一人で、だ。

そして彼がその湖の水ごと消え失せたのはその直ぐ後だった。私利私欲の為に自分の力を利用する人間が嫌になったらしい。

先程遠まわしに『世界を造る能力』と説明したが、錬金術の応用で世界の位相を弄り、変換し、組み替えることにより、彼が定めた一定の空間内の物体を別の次元に誘導したり移動させるだけの力だ、と彼は言う。

だが少し考えてみて欲しい。春斗も彼の能力を知り面白半分に試してみたが、2、3秒計算した瞬間に体力が尽きて倒れ込んでしまった事がある。兵器である彼ですら一瞬で限界に達する程の演算能力が必要な能力なのだ。ドーナという精霊はどれ程の天才なのだろうか？

さて、話が脱線したので元に戻す。つまり別の次元に誘導して何が出来ると言えば、つまりその擬似的に造り出した次元は彼の独壇場である。その次元の位相を少し弄るだけで、自分以外の生物をその世界に閉じ込めてしまったり、果てにはその次元ごと虚数空間に押し込む事も可能だという。彼が『特級指定次元犯罪者』と呼ばれる所以である。

その気になれば世界を丸ごと消し飛ばすことすら可能だし、転移の応用のような感じで大地と空を逆転させたり、海の水を全て管理局へ雪崩込ませることすら出来てしまうのだ。その気になれば兵器クラスの危険人物である事には違いないだろう。

『最低の精霊』と呼ばれる所以についてだが、彼は決して『他人の為に』『頼まれて』動かないことで有名だ。

自分が興味を示さなければ誰かが死にかけていても無視すれば、村が丸ごと焼き払われていても動じずにその風景を眺めていた、などという情報もある。要は自分の関心を示さない事には全く興味がないのだ。今もゴスロリ服の女性と一緒にいるであろう何処かのマッドサイエンティストを彷彿とさせるが、此処ではあえて触れないでおく。

『魔法は正義の為に使われる為にある』と信じている管理局員に取っては確かに最低だろう。

暫く何処かで隠居とか何とかで静かにしていたのだが、ここ最近このような文を投稿しては管理局への不信を募らせるような言葉を民衆の心へ刷り込んでいる。因みにこの週刊誌はドーナと全く関係なく、偶に会社の前に置かれている手紙を拾ったらドーナの手記であったという、全社員がひっくりがえるような驚愕の事件の後、定期的に同じ場所に手紙が置かれていくので、以来は深く考えず、『言論の自由』を盾に週刊誌に乗せているのだという。

「まったく、こちらら兄貴で精一杯だつーのに…上には上がいるもんだな、こりゃ」

どう考えてもドーナの思考能力は無還者と同格かそれ以上と見ても良い物であった。何せ世界の位相空間を全て弄れるのだ。どんな方法を使って干渉しているのかは全く分からないが、重力や怪我すら無視した戦いが可能なのではないだろうか、と思う。

そうなれば、援護なしに勝てると思うほど春斗は自分に自惚れてはいない。フランの手助けがあれば勝てるか、と見積もっても少ないくらいであった。

「…、どうすっかなー…」

動き始めた『最低の精霊』、そして今は何処にいるのかも分からない『最凶の兵器』、そして謎に包まれた国である『アルデイス』。

自分のやるべきことは何なのか、そして今阻止すべき事は何なのか
…今日も彼は、仕事をサボるついでに深い思考の海へと沈んでいく
のだった。

春斗 side out

??? side

「……」

とある管理外世界、樹海。

その中でも巨大な針葉樹の頂点に片足だけで立つ男が一人。

「……見つけた？」

ふと、彼の肩に鳥が止まってピー、ピーとまるで耳打ちするかのよう
に鳴く。それに静かにつぶやいて頷くことで応答すると、その

鳥へ小さな餌をやって自分は針葉樹の上から『歩きだした』。

コツ、コツ、コツ——空中では絶対にありえない音が誰もいない樹海の空に響く。

髪が真っ白な男である。顔を見れば、片目に傷を負っているのか深く目を閉じていて、もう片方は透き通るかのような白い瞳だった。

少し、空中で歩いていくとある一部分で停止する。片目を擦り、下を見るとなにやら不自然に森が植えられた後が見える。他の木は曲がりくねって伸びているのに、その場所だけ完全に真っ直ぐ——つまり人口の針葉樹が植えられていたのだ。

「…空中を歩くのも疲れた……」

再びボソリ、とつぶやくと、フツ、と男の体は宙に浮き——そのまま猛スピードで地面に落下し始めた。

ぶつかる。空中を歩いていたとはいえ、このスピードで地上にぶつかればただではすまない。普通ならばただの肉になって潰れるだけである。

それは当然、世界の理として彼にも適用する。彼だって『人間』なのだから。

「……『位相転換。 わたし↑↓木。 交換』」
トレード

ふと、男の姿が消えた。

消えた場所に現れたのは、男が落ちていく筈だった場所の近くに生えていた針葉樹だった。

「（トン）……到着……着地……大丈夫。 チェコ、おいで」

そしてその針葉樹があつた場所に、男が現れた。 当然針葉樹のあつた場所には元々根っこがあつた部分が丸ごと消えているので、結構大きな穴が空いている。

その穴にスッポリと収まるように立つと、誰も居ないはずのその空間に、男は誰かを喚んだ。

現れたのは、耳が常人より少し長い小さな子供だった。 緑色の髪に翠色の目。 着ている服から少女であることが伺える。

「はい、此処に」

「今、大丈夫だった？」

「丁度城下町で退屈していた所です。 喚んで頂いて嬉しいですよ」

「うん、ありがと。 ……ロザリーに連絡。 『例の場所は発見した、早急に反抗軍と鑑識の手配をお願い。 管理局は此方で抑える、
レジスタンス』」

場合によっては武力行使。その許可も出来れば』。これでわかると思う」

「了解いたしました。 それでは、これで」

「うん。 それじゃ」

短い会話の後、出てきた時と同じくスツ、と消える少女。 と、同時に先程の針葉樹が、男の真上から降ってきた。

車以上の速度で、重力による加速もあった木の直撃。

直撃ならば…一瞬でもあたっていれば、何かが変わっていたのかもしれない。

だが男は平然と、落下して地面に不格好に突き刺さった針葉樹の上に立っていた。

「『PROJECT S・W』……嘘？ ホント？ …どっちでもいいや。 何もかも、壊せば………」

子供のようで、残酷にして狂気で造られた笑みを口端に浮かべながら。

世界すら再現し、更には自分の姿すら錬金術でいくらでも変えられ

るようになった『精霊』は——小さな声で、呟く。

「……………わたしといっしょに殺^{あそ}びましょ……………」

春斗の、予想外の事柄。

ドーナ・クライオンは、彼が想像する以上に狂っていたのである。

??? 改めドーナsideout

アスデイスside

「そう。 分かったわ…ありがと、チェコ」

「いえ、この位なら…」

「直ぐに鑑識と軍を向かわせるわ。 リン」

「ええ、了解よ姉さん。 取り敢えず今はDランクでいいわよね？」

「その辺は任せる。 良い？ 徹底的に探すのよ。 ひとつでもそれっぽいのが見つければ管理局を追撃する材料になる。 ただでさ

え機動六課やら地上本部の連続殺人事件やらでてんてこ舞いらしいし、このチャンス逃す手はないわ」

「そんな研究があつたなんて、信じたくないけど…」

「信じる信じないの問題じゃないわ。この研究には恐らく私達の同胞も犠牲になってる。それが分かればあたし自ら管理局を潰しに行っても良いくらいよ」

物騒な会話を城の広々とした廊下で交わすのは、王女のロザリーとその妹のリンの2名。ロザリーの目にはうっすらと古龍族独特の紋様が浮かび上がり、今にもこの城ごと吹き飛ばして管理曲に特攻をかけそうな勢いである。

「それはさすがにダメよ姉さん。姉さんが行ったら次元世界の一つ二つ滅ぶ程度じゃすまないし」

「わかってるわ、冗談よ。でも急いだほうがいいかも」

「なぜ？」

「ドーナの破壊衝動がそろそろ再発する頃だから」

「隊長おおお！ もうっ、なんで王族警備軍の隊長がそんな厄介な衝動抱えてるのよっ！」

「はい葉。もう山のつか二つ消し飛んでるかもしれないけど誤差のうちよ。早く行って収めて来て」

「分かったわ：はあ、仕事を開始する前から何人か怪我人が出る予感が……」

「この前は管理局からだけど死人が出たからね。　流石に同情せざるを得ないわ：はい、出撃！」

「り、了解っ！」

「チェコ、貴方はリンの補佐。　出来るわね？」

「はい、了解しました」

「貴方のお母さんにはあたしから話しておく。　頼んだわよ」

「はいっ!!」

まずはリンが、続いてチェコが彼女の周囲から魔力の反応なく消えていく。

それを感じながら、幾分か冷静になった頭で新たに浮かんだ管理局の『深淵』^{けいかく}について考える。

全ては偶然だった。

リンがミッドチルダに買い物に行つて、あの男の人を保護していなかったら。

その男の人の身元を調べようとしていなかったら。

その男の人が、管理局の裏の世界の存在ではない、とはっきり言っていたら。

こうなつては、いなかっただろう。結局の所、彼女は知らないが
ウェポンマインド兵器の心に記録されていた対話能力の少なさが仇となった。

新たに浮かんだ管理局の『深淵』けいかくの名は『PROJECT S・W』。

『生体兵器の制作とその量産』を目的とした――管理局創立以来史上最高値の死人を出した計画であり、そして成功体も5体しか存在しないという。数時間に及ぶリンVS管理局の最高プロテクトの末、ようやく手に入った『単語』である。内容は完全に抹消されており、兵器がどんな能力を持っていたのかも分からない。

しかし今重要なのは、現在病気という理由で眠っている『客人』とその『息子』が――

その計画の関係者である確率が出てきた、ということだ。

「もし管理局の回し者なら、殺さなくちゃいけない。けど」

もし、兵器ひがしやの類に入る者ならば——これ以上ない戦力と限りなく
強固な証拠が同時に手に入ることになる。

なんだかんだ言いながら『女王』としての顔になっているロザリー
は、その思考をフル回転させてあらゆる事態を想定し、指示を下す。

まずはあの『客人』が目覚めるのを待つだけだ。

全てはそこから、始まるか否か。

その答えは、まだ彼女にも分からない。

アルデイス side

管理局 side

：結論を言うと、なのはは回復した。そしてやっぱり卵は埋め込
まれていた。

その大きさに全員戦慄する。ザフィーラ人間形態の拳の半分程度
の大きさがあった。孵化していたらどれほどになっていたのか想

像もつかない。

「ふえええん…良かった、良かったよ」

「よしよし、なのは…ゆっくり休んでね…」

恐怖の重圧に解放されたのはがフェイトに抱きつき、そしてそれを優しく慰めるフェイト。

そこに、仕事を脱走したのがバレてティアナやフランから命からがら逃げてきた春斗が様子を見に来た。

「はあ、はあ…フランはともかく、なぜティアナが俺の体力に付いて来れるんだ…？ よ、なのは姉」

「あ、春斗おー！ 取り出してもらえたよ」

「よしよし、よかったなのは姉。 そうだフェイトさん、バルデイッシュは返します」

「あ、ありがとう…ね、ねえ？ さっき病室を出るときに話してた、その、私が可愛くなっていくって話なんだけd」

「はーるーと——！！！！」

「逃がしませんよ春斗さん！！ 何がどうあっても貴方の仕事は貴方にやらせます！！」

「ちいいっ！ 何たる無駄すぎる察知スキルと執念！　さらばだなのは姉、また改めて見舞いに来る！」

「えっ、ちょ、春斗！？　まさか仕事サボったの！？」

「それとフェイトさん！」

「へ？　な、なにっ！」

「…………バルディッシュ、後は頼んだ☆」

《春斗卿っ！？》

「さらばだっ！！」

「「待ちなさーい！！」」

ガシャーン！（春斗が身近の窓を叩き壊す音）

バツ（その窓からダイブした音）

「春斗さん…！　窓から降りるとは汚い真似を…！！」

「ティアナ、貴方はクロスミラージュの浮遊魔法で追ってくださいですわ！　私は下に降りて追いかけます！」

「了解です！」

バツ（ティアナも窓からダイブした音）

バツ（フランが春斗を捉えるべく走り出した音）

静かに現れ、嵐のごとく去っていった春斗達。 静まり返る病室で、
ふと思い出したようにフェイトがつぶやいた。

「バルディツシュ？」

《…、》

「あ、あの話の事について…話して、くれるよね？」

《…イエス、サー……》

現在ミッドチルダは、麗らかな日差しの指す昼時。

魔導士たちは、つかの間の休息を得るのだった。

管理局 side out

??? side

全不全。

不潔で、不快で、不平等。

不明瞭で、不定形で、不安定。

この世界は『不』ばかり。

ある日、少年は思った。

ならば壊そうと。

こんな不完全な世界、滅ぼそうと。

あの時は確かに、そう思った。

そんな時だった。

『 に会ったのは――』

―――兵器の心1sトリミッターの解除条件を満たしました。
ウェポンマインド
音声データの存在を確認。 再生を開始。

??? side out

無還者 side

「『(パチッ)………』」

「! お、お父さん!？」

それは確かに夢であり、幻想である筈の物である。

「（ガチャ）あら、気がついた？ 客人さん」

しかし。

ロザリーの方を向いた男の目は、今までよりも更に虚ろで、感情のない物だった。

「『——（ザザッ）ア…イ…リイ…？』」

「具合はどう——ッ！！？」

ふと彼が感情無き声で、しかし何かを噛み締めるようにつぶやくと、ニコニコ顔だったロザリーの顔が、デミスからも分かるように急激に歪んだ。

「『……、幻想か…幻覚か……まさか、このデータが再生される日が来るとは…思わなかった（ザザ…）…』」

「お、お父さん？」

そのデミスの声は既に届いていない。

どう考えても今目の前にいる自分の主は、この部屋を、自分たちを見ていなかった。

「『伝え、ないと…（ザザッ…）……これが例え、バグでも、別人でも…』」

「（声にノイズ！？ バグが治っていないのか！！） お父さ——」

「『——これは“アイリイ”からの、伝言、です』」

無機質な声で、無表情な顔で、兵器は言葉を紡ぐ。

「『これを聞いている人へ。 ロザリーは元気でしょうか？ これを聞いているのが私の知り合いであることを祈ります』」

いきなり知り合いの単語が呼び捨てで飛び出した。 思わずデミスが後ろを向くと、ロザリーが呆然とした顔で立っていた。

もちろんそんなことは知らない男は、更に言葉を続けていく。

「『きっと、まだ言えない事の方が多い。だから要点だけ伝えるね？ 私はクローンです。 本物じゃない。 けど最期の最期で、貴方達を思い出せた。 きっと本物の私も、喜んでいるはずです』」

感情の籠らない筈のその声に、感情が籠っていると錯覚するほど暖かく、愛情のあふれる言葉だった。

「『ロザリーは、クローンである私を母とは認めないかもしれないね。背も小さいし。^{ウェボンマインド}もし生きてられたら、いっぱい話したかったんだけど、私には兵器の心に割り込みをかけるのが精一杯でした』」

その割り込みと同時に音声データを魔力データに変換して入力した？ それを想像すると、思わずデミスの背筋に凍ったような感覚が走る。

そんな事は普通の人間には不可能だ。最低でも三つ以上の複雑な並列思考をこなさなくてはならない。無還者ならば100程度までなら余裕だろうが、それでも高等技術には変わりなく、それが出来るだけでS級は堅い。

「『そして：“リセッター”の近くに居てくれている方へ。ありがとう。出来ることなら私が居てあげたかったけど、無理でした』」

その声は常に無機質で、しかもところどころノイズが入り聞きづらい。しかし誰一人その病室内でしゃべることはなく、その言葉を聞き取ろうと必死になっている。

「『この音声が再生されているということは、“リセッター”の能力が何個が開放される事になるかと思えます。出来ることなら開放される前に封印なり破壊なりして欲しかったけど、喜んでいいの

か悪いのか…でも、きつと。 誰かが、止めてくれると信じてます」

リミッターの存在も、そして隠された能力の事もデミスのみならず恐らく無還者本人も知らないに違いない。 必死に思考能力をフル起動し情報を組み立ていくデミス。 そんな目の前で、“アイリイ”は別れの言葉を告げようとしていた。

「『万が一、2ndリミッターが解除された場合…また、私の音声データが隠してあります。 それと、このデータは再生後に消滅します。 これを聞いている誰かさんは、もし良ければアルデイスつて言う国の王族へ知らせてください。 宜しくお願いします』」

そして、と“アイリイ”は告げる。

「『PROJECT』には深入りして欲しくないけど…もしそんなに知りたいのなら、私達の兄弟を探してね。 きつというはず。 私の他に“リセッター”も入れて5人居るはずだ…から………』」

それを最後に―――無還者は再び、力を抜いて倒れた。

「…」

「…」

無言の時間が、病室で続く。

先に動いたのは、この国の王女だった。

どこから取り出したのか、彼女の身長の2倍はありそうな剣がデミスに向かって振るわれる。

しかしそれを、もう隠す必要もないと判断したのかデミスが障壁で受け止めた。

ドォンッ！！　という音が響いた。

ロザリーの大剣とデミスの障壁が衝突した音だった。

「貴方、人間じゃないわね？」

「そう言う汝こそ」

狭い病室で、背は小さい二人が障壁と大剣のつばぜり合いをしながら会話をする。

何も知らない誰かが見れば子供が遊んでいるようにしか見えないかも知れないが、現在あの大剣には大陸を叩き割るだけの力がある。デミスが万が一にでも競り負けでもしたら、この城ごと真つ二つになってもおかしくは無い程の力が。

「教えてもらおうかしら。この国での極秘情報に指定されている単語をなぜ知っているのか」

「さてな。吾輩は“アイリイ”という名前など知らぬ」

「嘘を言わないで。今あたしイラ付いてるんだけど」

「吾輩は知らぬぞ。だがPROJECTについてなら少しは話せる。しかし、吾輩は主が幼少時の頃から主と共にいたが、“アイリイ”と言う名前の生き物など見なかった」

「……、」

ガンッ！！という耳障りな音と共に、ロザリーがデミスの障壁を弾いて後退し、同時に彼の障壁も消滅した。

それを感じてデミスは眉を釣り上げつつ、

「む…その剣、ただの大剣ではないな」

「ええ。 お父様が開発した『宝具』と呼ばれるべき武器よ。 そしてこの国の王の証でもある」

ロザリーは静かにそう言うと、その大剣の切っ先をデミスへと突き付けた。

「アルデイスの王として聞きます。 『プロジェクト』について知っていることを教えなさい」

「その様子を見ると、吾輩達のことは元々疑っていた、と見て良いか？」

「いいえ、疑い始めたのは5分前くらいからよ。 リンが管理局のデータベースに侵入してね、何とか『PROJECT S・W』って名前だけは入手したわ。 その研究が行われていた場所と概要も、けど誰がそんな研究をしていたか、そして成功体^{へいき}の能力や面子は割れなかった」

「…」

デミスは静かに目を閉じると、「これは吾輩のただの独り言だ」と前置きして、口を開いた。

「確か管理局の『機動六課』に高町春斗という男がいたな。魔力や風貌に面影がある。あの男はPROJECTの成功体の一人だろう」

「…、」

「どうやら『エース・オブ・エース』の義弟として生きてきたらしい。兵器という事は明かしていないことが見て取れた。フェイト・T・ハラOWNなどの機動六課隊長陣を痛めつけた吾輩らへの憎悪への奥底に、管理局への怒りと憎悪を確かに感じた。あの様子であれば、恐らく我が主が管理局の駒として良いように使われていることも知っている」

「待ちなさい。管理局の駒として言いように使われている？ 初耳ね、その男は管理局に協力しているの？」

「そう言えば、主はこのプロジェクトの背後にいる黒幕に『操られている』のだったな。管理局の上層部の命令を何でも聞く様に」

「反吐が出るわね。あの組織の上層部はどこまで私たちを馬鹿にすれば気がすむのかしら」

彼の『独り言』を嘲笑するかのように口を歪めるロザリーに対し、少し顔を歪める少年の姿をした人外。それを見逃さなかったロザリーは、彼に対して静かに言った。

「その様子を見ると、貴方も管理局にいい感情はもってないらしいわね？」

「…、」

「無言はこの場では肯定と受け取るわ。 後、さっきの物言いから『黒幕』も知っているみたいだけど…流石にそれは言ってくれないわよね」

「…吾輩を捕まえぬのか？」

「愚問よ。 今ので分かったわ、貴方とそこの男の人は私と同等、いやそれ以上の強さを持つてる。 そんな人ところでやりあったらこの国が潰れちゃうわ。 私は家族には優しいのよ。 それに、今回の件とはあまり関係ないけど別の件についてかなりの手掛かりを得たわ…それで十分」

そう言うと、切っ先を向けていた大剣を肩に担ぎ、くるとデミス達に背を向けて部屋を後にしようとする。

それを見て取ったデミスもベッドで倒れ付す自分の主に触れ、転移魔法を展開した。

「で、これからどうするの？」

「帰るさ。 地獄にな」

「ここに住むという選択肢は？ どんなに人を殺したって、どんな

に非人道的な事をしたって、それはやっぱり命令なんでしょう？」

「良く分かったな？ 確かに主は吾輩の知る限り一度たりとも自分の意思で殺しをした事はない」

「簡単な推測よ。 上層部に洗脳された幻想種わたしたちかそれ以上の力を持つ生体兵器：あの屑共がそんな人にさせることと行ったらそれくらいでしょう」

少し振り向いて、その小さな背からは想像も出来ないほど鋭い瞳でデミスを、そしてその更に向こうに居るであろう『黒幕』を射抜くかのように見据える。

その目から感じるのは、その風貌からは想像も出来ぬほどの王の『覇気』。一般人ならば昏倒するだろうそれを受けて、デミスは少し嘲笑するかのように笑うと転移魔法を更に輝かせ、呟くように口を開いた。

「ゼフィナ・フリアード」

「？」

「カーレア・セビアス、ニアス・ブリティクス、ノコア・クルビオン。 吾輩が覚えている中で、現在生存を確認している例のプロジエクトに関わった研究者の名だ」

「！」

その言葉が言い終わるか言い終わらないかの瀬戸際で、彼女の小さな体が勢い良く此方向き、その瞳が揺れる。

それが本当ならば、現在の状況ではこれ以上無い情報だ。その研究員を捕まえて尋問でも拷問でもして聞きだせば有力な手掛かりを得られる可能性がある。

しかしなぜ、それをロザリーへ伝えたのだろうか？ その疑問が顔に出ていたらしく、デミスは口を歪めたまま言葉を続けた。

「吾輩は元々名前の無い人外だ。人であったのは今から何千年と前の話になる」

「…、」

「だからこそ、感情は無いとはいえ名前をくれた主の幸福を願っている。どんな形でもいい、この負の連鎖から抜け出したいとも」

「ならどうして此処に隠れないの？ 管理局のサーチには絶対に引っ掛けない自信があるわ。そう願っているのなら…」

「だが、吾輩が願った主の幸福は別にある。そう、完全に洗脳を受ける前の主の願いこそ主の幸福だ」

その言葉にあるのは、深い悲しみと儚さだ———そう感じたロザリーは自然と口を閉じてしまう。

「失う悲しみというのを吾輩はよく知っているつもりだった。吾輩が人間である時もそうだった。だが…主は洗脳されている中で、失う悲しみというのを何処かで分かっていたのかもしれない」

それがどういふことを示すのかは分からぬがな、と呟いたと同時に、遂に転移魔方陣が真っ黒に光輝き、ロザリーの視界を塗りつぶす。

その刹那、彼女の頭に響いたのは念話だった。

『汝に王の加護があることを…吾輩らしくもないがな』

その言葉が響いたと同時に黒い光は消え、広がったのは誰もいない寝室だった。

「王の加護があることを、か。王女に何を言っているのかしら」

面白くなったのか、クスクスと笑うロザリーは少し前にやったように頭をコンコン、と叩くと遠い世界にいる自分の妹に連絡した。

「あ、リン？ そっちはどう…あ、山が2つと龍種が4匹消し飛んだ？ うん、寧ろその程度で良かったって言った方がいいかしら。

同じ龍種として少し複雑だけど。で、今ドーナはどうしてる？

真面目に捜査してる？ じゃ、呼び戻してくれるかしら…『拷問』おはなし

の時間よ、って言えば喜んでこっちに来ると思うから」

少し戦慄しているであろう自分の妹を想像しまたクスリと笑うと、何秒で来るかなー、と予想を立てつつ、ニコニコと笑顔でこの国唯一の『拷問官』として認められている男の到着を待つ。

『“自由の国” アルデイス』。

その正体は、『力ある者こそ上に立つべきである』という無茶苦茶な言葉が簡単に罷り通る——良くも悪くも凶悪で簡潔な、最高にして最強の国。

この数日後。

ゼファイア・フリアード、カーレア・セビアス、ニアス・ブリテイクス、ノコア・クルビオン。以上四名が、管理局の局員登録名簿から消え失せる事となる。

“狂者”（後書き）

天破「今回の話で出てきた研究員は今日この時の為だけに10秒で考えました。当然ですが二度と喋ることはない状態です」

春斗「南無…」

ディール「ふん、自業自得じゃ。それにしてもまた厄介なのがでてきたの…」

フラン「メイキングワンダーランド遊戯造界ですわよね？ 私達でも追い付けないほどの演算能力を持つ精霊…凄いですわねえ」

春斗「能力もチートだぞ。この作品中でも出てきたが、視界に入った物体と自分とのトレードをしてたし、何か召喚してたしな…」

天破「これ、このキャラが本気を出すとどんな被害が出るんだろう…

…………ミッドチルダに」

春斗「…オイ待て、ミッドチルダで使わせる気か。…ゴラァ、逃げんじゃねえ作者アァー!!」

これでアルデイスの主要人物が一通り揃ったことになります。後には…まあ…ちょっと異常だったりするかもしれませんが、普通のしかいません。例えば自分の不幸を他人の幸運と入れ替えるような奴とか廃墟寸前の神社を一人で掃除している狐耳の幼女とかry

ごめんなさい。 全部私の趣味で（終了）

それでは改めて、次回も御楽しみに〜♪
感想などなど、お待ちしております（´∀`）／〜

登場人物紹介【アルデイス編】（前書き）

ちよつとあるデイスのオリキャラの数が増えすぎてよく分かんなくなってきたいるかもしれないので、作者の整理の意味も兼ねての人物紹介です（ノ、＼、）

こちらでは題名通り、天破の作中に登場するオリジナルの次元世界である『アルデイス』内に住んでいる&登場する、または関係のある人物を書いていきます。

新キャラが出てくるたびに更新されて行くので、たまに見ておくと話の流れを先読みできる可能性も…あったりなかったりです。

それとついでに、この人物紹介を読んでいる方へのお知らせがあります。

詳しくは後書きをご覧くださいw

それではどうぞm（　　）m

登場人物紹介【アルデイス編】

（この作品中のオリ世界である『アルデイス』とは）

あらゆる『人間じゃない』種族が共存して生きる世界で、管理外世界では最も賑わっている世界とまで言われている。常に国を囲んでいる森にはA M F的な磁場が発生しており、魔力をその身に宿す生き物を地面に張り付けにしてしまう天然の要塞である。数々の次元犯罪者を匿っている事から何度か管理局と対立したことがあったが、すべて撃退している。管理世界には詳細な情報が届くことは無いので、一般的には『謎の国』として認識されている。

———登場人物紹介（王族・王族警備軍編）———

【アルデイス国王女にして最強の古龍種】

名前…ロザリー・アルデイス

外見…身長120cm程度で、外見は子供。しかし実は95歳を超える古龍種。王女だからという理由でいつも煌びやかな服を着ているが堅苦しくてしかたないらしい。

所属…アルデイス国（王女）

魔力量…EX

魔導士ランク…正規な魔導士ではないため測定不可能

魔力光…灰色 魔力変換資質…【炎熱】、【風圧】

使用術式…古龍式ドラグーン ※古龍種にしか使えない。

—希少能力—

【???】…物体を視界に入れるだけでその物体を蒸発させてしまう能力。

【???】…龍の息吹系統の能力。この息吹を受けた物体は融解してしまう。

備考…身長のことを言うと泣く。本来なら大人の姿にも変身できるはずなのだが、魔力運用がかなり下手であり、普通に炎熱変換で指先に火を灯そうと思ったら、とある無人世界の山が焼失したらしい。

魔力変換資質の炎熱と風圧を組み合わせることににより【爆風】が起こせる。最上位に位置する古龍種であり、大抵の龍は強制的に従わせることが出来る。

古龍族のみが使える術式である『古龍式』は、その名から想像できるように龍の如き魔力を駆使した破壊術式——ではなく、実は補助に長けている術式だ。

『息吹』ブレスやその強靱な生命力と巨大な肉体を持つ古龍種という物に

とって、魔力は攻撃に使えばただの邪魔な存在である。ただしロザリーの父である先代の王はその魔力を縦横無尽に放出することにより攻撃をしていたらしいが、それは例外だ。ただでさえ魔力運用が苦手なロザリーにそんな技術が或わけもなく、結局は補助術式という形で落ち着いている。

【笑顔を浮かべるその裏には凶悪な魔女が潜む、地球から逃げ延びた『災厄の魔女』】

リン・アルデイス

外見…身長は165cm程度はある、100歳は超えているであろう魔女。胸が意外と大きい。イメージはバカとテストと召喚獣の『姫路瑞樹』さんなど。

所属…アルデイス国（次期王女）兼王族警備軍副隊長

魔力量…SSS

魔導士ランク…魔導士ではないため測定不可能

魔力光…暗い青 エキドナ 魔力変換資質…なし
使用術式…黒魔女式 ※現在はリンしか使えない。

—希少能力—

【亡者進軍】 アンデットロード …あらゆる武器を持った骸骨姿の人形を召喚する。

実体を持たないのでリン本人を止めない限り何度でも再生する。

【????】..????

【????】..????

備考…歳の事を言うと言殺される。意外と気にしているらしい。

いつも優しくニコニコとしている彼女だが、魔女狩りが起きる前の彼女は人間を遊び道具とする残忍な性格であり、上記の能力を使い人間の街を襲っては虐殺を繰り返した為、地球でも何千万\$という賞金がかけられていた。

元々は普通の人間だったのだが、彼女の父が彼女を魔女にするための改造魔術を施したのが原因である。その結果として、歪んだ性格と莫大な魔力を得たらしい。

しかし魔女狩りが始まり、自分と絡んでいた友達の魔女や人間が死んでいくのを見て、自分の行いの残酷さに耐え切れなくなった彼女は精神的に疲労していき、そこを魔女狩りや賞金稼ぎに狙われ生命の危機に陥ったところで未完成の転移魔法を使いアルデイスへとたどり着いた———というのが真実である。

その後は様々な人物の強力あって、その人格を封印し、擬似的な多重人格状態になっている。

【確認されている中での史上最後の真祖の吸血鬼】

メビア・アルデイス

「華麗に、優雅に、美しく、殺せ。面倒でしょ？ 真租^{うち}の家訓なんだよね」

外見…高校2年生程度の少年に見える。実際は王族一長生きしている。

所属…アルデイス国（王族・リンとロザリーの弟扱い）

魔力量…EX以上

魔導士ランク…何十年前前に測ったらEX+十とか何とか

魔力光…真紅^{ヴァンパイア} 魔力変換資質…【氷結】、【霧】

使用術式…吸血鬼^{ヴァンパイア}式 ※真租の吸血鬼しか使えない。

—希少能力—

【精魂^{ライフテイカー}吸引】…吸血鬼なら誰でも持っている、相手の魔力や精気を喰らって寿命を得る能力。吸血鬼によって食らう物が異なるらしい。尚メビアの場合は『女性の魔力』が一番美味とか。噛み付かなくても触れさえすれば吸収できるのでこれだけで戦いの決着がつくこともしばしばある。

【???】…???

【???】…???

【???】…???

備考…見かけとは裏腹にかなりの賢人。同じく賢いことで有名な

古龍種と競えるほどの力・知力を持つ。
吸血鬼、最後の真租であり、その力は計り知れない。特に満月の日は無限に魔力を回復していく特性があるので、ロザリーやリンすらも勝てない状態になる。戦う場所の状況に置いては最強になる。吸血鬼としては珍しく、そこまで吸血・吸引することを望まない。本当に必要なときにのみ吸引をする。尚その時犠牲になるのは大抵リンである事は口外無用の事柄である。
彼の他の真租は皆死んでいるとされている。彼も最初の100年位は他の真租を探すことに費やしたが飽きたので辞めてしまった。
現在は暇潰しがてら王族をしている。

【ロザリーの父にして先代の王、現時点で満月の夜のメビアと互角に戦える唯一の人物】

名前…????

「平穏と安らぎを求め、国まで作って：フツ、私らしくもないな。感傷に浸るなど」

外見…40代後半のおじ様イメージ。『ネギま!』のタカミチとかガトウなどを参考にしています。

所属…アルデイス国（元国王。現在は故人）

魔力量…????

魔導士ランク…現在は故人の上、生きている間も測る機会が無かつ

たと思うので測定不能とする

魔力光…黒紫 魔力変換資質…【灼熱】、【雷光】
使用術式…古龍式

―希少能力―

【???】…????

【???】…????

【???】…????

【???】…????

備考…責任感もあり、義に厚い人物。 1000年以上生きてと言

われている、最古の古龍種。 魔力変換資質はそれぞれ【炎熱】と

【雷電】の上位互換であり、その威力は最早炎と雷ではなくレーザー砲として認識されるほど。 惑星の核を貫く威力を持つ【雷光】

と、海の水を一瞬で干上がらせ、石をも融解させる【灼熱】は、

古龍族に対立する者たちにとっての死神同然であった。

メビアに勝った唯一の幻想種で、その後メビアとは仲のいい友人となった。そして90年以上前、とある幻想種の女性を妻にしてロザリーを授かったが、その幸せの絶頂の中、ある日を境に精神が崩壊。更に自身の口から『古龍族末代までの恥』と言わしめるほどの禁忌を犯し、その内容を王族に伝えたとそのまま亡くなった。

そしてその『禁忌』以来、管理局とアルデイスの仲の悪さは一層高まったという。真相は王族しか知らぬことだが、どうも『アイリィ』（後述に記載）という名前に何か関係があるようである。

【一切素性不明の謎の存在、ロザリー曰く“極秘単語”、デミス曰く“ただの人間ではない”】

名前…アイリィ

「……、ロザリー…」

外見…???

所属…??（ロザリーや無還者に関係していると思われる）

魔導士ランク…???

魔力光…?? 魔力変換資質…???

使用術式…???

—希少能力—

※幾つ、そして何があるのか全て不明

備考…先代よりも謎の多い存在。性別すら何であるのかも不明。

ロザリーが急激に顔を歪める姿を見せるほどの思い入れがあるらしいが、その理由すら分からない。無還者の兵器の心ウェポンマインドに細工をした
り、それで尚無還者のことを心配している様な事を言っている
ので更に事態をややくしくさせる原因となっている。

【見た目は20代後半前後の若々しい男性、だが正体は鬼神族の副長】

名前…ライム・ローディウス

外見…外見はまんま『バカとテストと召喚獣』の坂本雄二を少し大人っぽくした感じです。ただし髪は茶色で首ほどまである感じとなっています。いつもスーツっぽいのを来ています。

所属…王族警備軍補佐役

魔導士ランク…大体SSS前後

魔力光…土色 魔力変換資質…【風】

—希少能力—

エンシェントアップ

【老力増加】…ある一定の時期まで、歳を取ればとるほど力が上がっていくという鬼神族のみが持つ能力。一定の時期というのは個々によって異なる。

【???】…????

備考…アルデイス安定の年齢詐欺4人目。普段は心優しき野生味溢れる顔をした紳士（メビア談）だが、戦闘になると敵を一人残らず喰い殺すまで戦い続ける生粋の鬼。肉食であり、実年齢20代

の頃は自分を捕まえようとしてきた人間を骨ごと食べてきた経歴がある。

敵対した人間には容赦はないが、そもそも鬼神族は人間と友好的な関係を望んでいる種族である。危害さえ加えなければ優しい。

魔力変換資質である【風】は、風を圧縮したものをその異常な腕力で打ち出すことにより擬似的な『無音拳』として使用することができる。その威力は圧縮時間を3秒と仮定すると、『ディバインバスター』を超えてしまう。

ドーナ（後述）とは結構仲が良いが、破壊衝動発動時の彼とは二度と戦いたくないとの事。

【全世界唯一の“特級指定次元犯罪者”であり、破壊衝動を持つ人格破綻者】

名前…ドーナ・クライオン

外見…『めだかボックス』の“球磨川禊”の髪の毛と目の色を白く染めて、片目に傷を付け、髪の毛を背中の中間地点まで伸ばした感じです。

所属…王族警備軍隊長

魔導士ランク…管理局が推定した数値ではEX+++++。ただし破壊衝動発動時はEXを10乗した値でも足りない筈だとか（※リン談）。

魔力光…精霊なので魔力無し 魔力変換資質…無し

―希少能力―

メイキングワンダーランド

【遊戯造界】…世界や物体の位相を弄る事により、好きな位置にあるものを自由な位置に動かしたり、新たに次元を作ることにも可能な能力。元ネタは『東方』のスキマ妖怪様。

【水霊の加護】…元々が湖の精霊だったので、水を自由に召喚・操作出来る。【遊戯造界】と組み合わせることにより、360度いつでもどこでも何リットルでも水を召喚できるようになった。

【???】…????

備考…恐らくアルデイス国の中でも一番のチート能力所有者。能力はぶっちゃけてしまうと『ネギま!』の【造物主の掟】や『月姫』の【直視の魔眼】、そして様々な作品に紹介・使用されている【アカシック・レコード】を全て足して2乗したような感じになる。

位相を弄ることにより、次元転移を魔力使用無しで幾らでも可能にした。更には擬似的な位相空間を『世界』という集合の中に設けることにより、その位相空間内にその『世界』と全く同じミラーワールドを一部だけだが造ることに成功している。

位相空間とはそもそも現在も研究中の分野でもあり、『集合に要素どうしの近さや繋がり方に関する情報(位相)を付け加え、点列の収束や関数の連続性といった概念の源とされている(Wikipediaより引用)』。

これがどういうことを示すかと言えば、魔力素を収束して放たれる『魔力砲撃』や『魔力弾』、連続して発動する設置型魔法等の『繋がり方に関する情報』を0にしてしまうことで無かった事にしてしまう事が出来る、という事になる。

もちろんただ無くしてしまうだけではなく『付け加える』事だって可能である。例えばだが、迫り来る魔砲撃に対し、魔力玉を出して『この魔力玉と魔砲撃は同じ繋がりを持つ』とすれば砲撃はその魔力玉に吸収されてしまう。彼に魔力が無いのが唯一の救いだらう。

難しいことを並べたが、簡略すると『世界に存在する物体ならなんでも操作できるし移動させることが出来る』という事になる。因みに人間だって様々な原子の集合体である、その集合を0にされたらどうなるかなど想像したくもない。

破壊衝動の件についてだが、これは彼が精霊であった頃から存在する衝動であり、いつもは寡黙で必要なことしか言わない様な者なのだが、この状態になると『全世界の崩壊を目的とする』スイッチが入ってしまい、暴走する。

大規模な物だと王族総出で止めなくてはならないらしい。どっちが警備してるんだか分からない。

尚、彼と戦ったor破壊衝動時に放った攻撃に直撃した存在で、灰にならなかった者は未だ嘗て王族のみである…。

登場人物紹介【アルデイス編】（後書き）

さて、前書きでも言った『お知らせ』の件ですが、実はオリキャラの募集をしたと思っていますのです。

もちろん登場する場所はアルデイス国。春斗らの敵になるかどうかはお楽しみ、というなんともいろんな意味で危ないポジションに付けるような逸材を探しています。もう、ドーナの前ではあらゆる能力が霞んでしまうので出来れば魔力を使わない能力を持つオリジナルキャラクターを一人、皆様から募集したいと思います。

ここでポイント。

男性キャラなら——春斗と仲良くなります。 ディールかフランにフラグが立ちます。

女性キャラなら——多分、春斗かシーナに惚れます。 春斗の死亡フラグが確立します。

春斗「これどっちも俺助かってなくね？ 関わり合うこと決定だよなコレ」

そんなことは知らんな。

まあそんなわけで、感想でもメールでもいいので皆様の考えるチー

トオリジナルキャラクターをくだされば…と思います。

もしこんな駄作者にアイデアを下さるのでしたら、皆様の期待に応えるべく左右全ての指に魂を込めて執筆する所存でございます。宜しく願います。

因みに、万が一アイディアがひとつも来なかった場合、私が考えた『女性キャラ』になってしまいます。

この意味がお分かりですね（∨、＊）？

フラン「ピクッ

スバル「ピクッ

はやて「ピクッ

ティアナ「…チラッ

春斗「やべえ…何かが…何かが俺の中で終わろうとしている…ッ！
」

それはきつと貴方の未来です。

という訳で、アイデア&新キャラ随時募集のお知らせでした（＊、
∨、＊）

次回は、アルデイスのある人物が早速春斗に接触しに行きます。しかし、それを見た某ちびたぬ隊長が勘違いをしてうんたらかんたらなお話です。

ギャグも混入しているので、見といて損はないかもしれないという

かあると思う（え　天破の文章は半分がノリ、もう半分が低クオリティで構成されています。優しさって、なんですか？

それでは次回も御楽しみに^^
天破でした（´∀´）／~~

“交渉（前編）”（前書き）

さて、此処でこの作品に関する注意事項が新たに生まれました。

ふと、思ったんです。

：これ、時間軸的にホテルアグスタもう始まつてる時期じゃねえ？と。

PCは小説投稿とエロゲやギャルゲ及び英単語検索以外出来なくなっているので、ちょっと調べられないのですが：

えっ？ 不純な使用目的が混ざってた？ 気のせいです。一言言うなら、年齢という壁は果てしなく高いように見えて悟りを開けば何ら問題はないのです。

話を戻しましょう。 えー、私に分からないのは原作最初の機動六課担当事件である『リニアール事件』と『ホテルアグスタ事件』の間にどれほどの時間が空いていたのか？ ということなのです（´・ω・｀）

もし二週間以下しか無いのだったらアウトです。 全体的に時間軸が少しズレます。 ゆりかご事件の方も行うつもりなので、少々10月に食い込んでしまうんじゃないかなという絶望的な未来が見えます。 何かもう申し訳ない。

あつ、キャラ募集の件はまだ受付中です（今言うか

それでは長くなりましたが、『本編とは全く違う時間軸で動く可能性がある』ということだけ覚えていてくだされば幸いです。

では、取り敢えず本編の前に注意事項！

・まさか！？ 春斗の真のメインヒロインはフランやはやてじゃ無かった！？

・だが取り敢えず春斗は殺さなくてはなるまい

・ヴァイス達勇敢な戦士達に黙祷を

・チート集団、ちよつとずつ侵攻開始

・ドーナは実は癒やし系キャラだったとかそうじゃないとか

なんですかこれ。 どうしてこうなった。

あつ、今回のお話には批判もあるかもしれない。 真摯に受取りますのでよろしければ感想等でぶっちゃけちゃってください。

では、本編をどうぞm（　　）m

“交渉（前編）”

なのはの体の中から卵が摘出された次の日――

管理局 side

とある、一人の女性がふわり、と日傘を持って管理局の前に現れた。スラリとした身体に優しい笑みを浮かべているその姿は、一瞬にして男女問わずあらゆる局員の目を釘付けにした。

可愛らしい日傘を畳み、惚けている受付の女性に話しかける。

「今、よろしいでしょうか？」

「ふえ…あ、はい！ 何か御用でしょうか!？」

その様子を見てふふ、と軽く笑うと、「人を呼んで欲しいんです」と彼女は言った。

「管理局“機動六課”所属の『高町春斗』という方なのですが…。

もしいらっしやいましたら、どうか此方に連れてきては頂けない
でしょうか？」

管理局 side out

春斗 side

ブルブル…

「なんだ！？ いきなり背筋に悪寒が走ったんだが！？」

「気のせいだ。 負けるからといって逃げようというのではあるまいな？ 王手」

「いや、気のせいじゃねえと思うんだが…王手か…んじゃ、ほれ」

「ぬっ…むう…ならば、こうだ」

「じゃ、王手で」

「！……俺の負けだ」

「けけけ、まだまだだなザフィーラ」

そんな局員事情も知らず、ザフィーラと将棋をやっているのは紛れもなく高町春斗本人であった。ザフィーラには先日教えたばかりなのだが、毎日打っているだけあってかなりの速度で上達している。対局相手が出来た、と春斗も嬉しそうであった。

「此処で飛車が来るとは思わなかったな」

「裏の裏を読む男、それが高町春斗と言う男さ」

クックック、と笑いながら言うザフィーラもそれにつられて少しだけ笑う。結構すり減ってきた将棋駒とボロボロになっている将棋盤を片付け、自分のベッドの上に置いた。

「しかし、お前の人間形態も随分久しいな。結構しゃべってはいるんだが」

「主は犬を飼うことを望んでいるからな。俺はそれに忠実に答えるだけだ」

「だが、その分だとキャロとエリオ、そしてティアナやスバルが前が人間形態になれること知らねえんじゃねえ？」

「……………」

「そこで黙られるとかなり申し訳ないんだが…」

春斗が的確に真実を言うと、少し顔を俯けて憂鬱げな表情になってしまったザフィーラ。少し気にしていたらしかった。

「お前がそれでいいんだったらそれでいけど…ま、暇なときはこうして将棋にでも付き合うから、何かネタがあったら言ってくれ…（プルルル）…ん、端末？」

「俺ではないな」

「まあお前にだったら念話でいいだろ。消去法で俺か…（カチッ）はい、此方高町春斗ですが」

『ハアアアルウウウウトオオオオオ！！！ テメエ今度は何やらかしやがったアアアアアア！！』

「そうか、間違い電話か。気をつけろ」

プツン（端末を切った音）

「…、春斗？」

「言うな。違う、あれは絶対にヴァイスじゃ無い。俺の知っているヴァイスはあんなに目が血走ってないし俺に殺意を向けてない」

プルルル…

「…、」

「……、（カチッ）すまんが俺に通じる言葉で頼む」

『いきなり切んじゃねえよ!!』

「だからうるせえよ！ 何があつたんだお前に！」

『リア充なんて滅びちまえY A—H A!!』

「その意見には全面的に同意するが、テンションがおかしいぞ。後、目が異様に血走ってる。結局要件は何なんだ？」

『とぼけんじゃねえっ!! お前に客だよ畜生！ ハルトなんて大嫌いだ!! 受付に行け!』

「いやだから、言葉になってn」

『つㇿ、）。。。＊…。』

プツン（端末が一方的に切られた音）

「……取り敢えず…受付に行けばいいのか…？ どう思う？」

「…俺は何も聞いてないぞ」

「テメエ、後で覚えとけ。この状況で他人の振りをしたその意味を絶対に教えてやる。…まあ、行ってくるか。此处で昼寝してでもいいぞー」

「ああ、もしかしたらその言葉に甘えるかもしれ…ん…」

やはりシグナムの看護やはやて周囲の警戒で疲れていたのだろう。狼モードになったザフィーラはそのまま眠ってしまう。

それを見て少し笑うと、「ゆっくりな」と一言言って部屋から出た。

後には、久々に深い眠りにつくザフィーラだけが残された。

春斗side out

ティアナside

「ふう…ようやく仕事一段落ついたわね」

「ティア…」

「…少しはアンタがやりなさい。昼休みから戻ったら手伝うから」

「ありがとう…ガクッ」

此方はティアナ達の仕事室。いつものようにスバルが疲労で倒れ、ティアナがどうにかこうにか午前中の仕事を終わらせたところだ。

スバルに関してだが、自分の口で『ガクッ』などと言っているうちならまだ生きているだろう。そう結論づけたティアナは少し休憩すべく部屋の外へ出る。そして何となく左を振り向くと、見知った顔が歩いていくのがチラッと見えた。

「…春斗さん？」

一瞬自分に会いに来たのかとそんな夢物語に胸を高鳴らせるがそんなことはなく、彼は彼女に気づくことなく廊下を歩いていく。少しだけ落胆するもよく考えたら春斗さんがそんなことをする訳が無いか、と気を取り直して何処か行こうとするも…

「…」

乙女の感とでも言うのか、何故か春斗が何をしにくのか無性に気になったティアナはこっそりと春斗の後を付いていくことにした。恐るべき勘である。

春斗はそれにも気づく様子はなく、どうやら受付の方へ向かっている様子であった。そのままこっそりと追跡する事2、3分。

受付にたどり着き、春斗が何事か受付の女性と話しているのを見つ
つ少し辺りを見回していたら、何故か血が出る程唇をかみしめ、血
涙を流しながら春斗を見ているヴァイスの姿が。

「…あの、ヴァイスさん？」

その剣幕に、思わずかなり下手で出てしまうティアナ。その声を
聞きまるでブリキ人形が動くかのような擬音を立てて振り向くヴァ
イス。正直言って一種のホラーである。

「…ティアナか。なあティアナ、リア充って滅びればいいとは思
わないか？」

「いきなり何不穏な台詞を言ってるんですか！？ しかも状況が把
握できませんって！」

よく辺りを見てみると、ヴァイスと同じく歯を食いしばり血涙を流
しながら春斗の事を睨む男性局員が何人か。

本当に分からない。一体彼らに何があったというのだろう。

と、そこに。

「？ なんやこの異様な集まりは。ヴァイス君、どうしたん？」

更に事態をややこしくさせそうな女性、狸ことはやてが現れた。

「ああ、はやて隊長！ 聞いてください！ 春斗が…奴こそが裏切り者だったんです！！」

「う、裏切り者？ 春斗が？ ということや？」

「あの野郎…チィッ、絶対に許さねえぜ！ なあ皆あ！！」

『そうだそうだ！』 『なぜあんな奴が…この恨み、死ぬまでには絶対晴らしてやらあ！！』 『裏切り者には死を！』

少し受付から離れたところでの賛同の声。 聞こえているのかいな
いのか、「何やってんだ？」という顔で此方を見ながら首をかしげる春斗。 まさに自分の命の危機なのだが、それを彼が察することはないだろう。

「皆どうしたん？ ちょっと理解が出来てへんのやけど…」

「あ、あたしもわからないです」

「聞いてくださいよ！ あの野郎は…あの野郎は…っ！！」

オレらに内緒で彼女を作りやがったんです！！」

彼女達の頭の中が真っ白になった。

彼女？ 誰に？ まさか、春斗に？

そうだとしたら、私達は――

「ちいい、もう我慢できねえ！！ 皆！ あの裏切り者を殺せえっ
！」

「よっしゃあああ！」 「さっすがヴァイスさん！ その号令を待ってたぜえ！」 「ヒヤッハアアアアア！」

そんなはやて達の様子に気づくことなく、遂に我慢の限界に達したか残像の出るスピードで春斗に近寄ろうとする嫉妬集団。 なんと
いう醜さだろうか。 無還者すら戦うのを遠慮しそうな勢いである。

春斗に迫る魔手。 遂に此処で春斗の命運も尽きたか、と誰もが思った。

その時。

突拍子もなく――青い風が、吹き荒れた。

と思った瞬間、春斗を襲おうとしていた男子局員の服が下着を残して全て吹き飛んだ。

「「「あ？」」「」」

時間が止まったかのように静止する局員達。 自業自得なのだが、これには流石に黙想するしか手立てはない。

「…きゃー!!」

たまたまいた女性局員が悲鳴を上げる、それを聞きつけた局員がざわざわと集まっていき、そして次々と噂が立っていく。

『何だ？ ヴァイス達は裸族だったのか？』 「いや違…」 『ま、まさか裸で春斗君を襲おうと…？ きゃー!』 「それは無…」 『どち

らにしろ露出狂だと言うことは理解できた。子供も出入りするこの場所で下着を残し裸になるとは…尊敬するぜ』『ちょ、待…』

誤解は誤解を呼び、そして彼らの社会的な死を招く。混沌としてきたロビーの中、鈴の音が鳴るような声が響きわたった。

「あ、ごめんなさい。待ちましたか？」

その声にひとりの局員が振り向き、その美しさに呆然とする。

更にその局員に気づいた女性局員が振り向き、思わず見とれてしまう。

ざわざわと立っていた噂や言葉は、一瞬にしてその女性の出現が原因で沈黙した。

「…？ アンタは？」

「もう、照れなくても良いじゃないですか？ 私達付き合ってるんですよ？」

そしてその言葉に敏感に反応した女性2人。そしてまた広がってゆく噂。

『今、あの人なんて言った!?』『春斗と付き合ってる、だと…許せん!』『えー!? 春斗君…意外と格好いいから狙ってたのに…orz』

「いや、だが俺の記憶ではアンタに見覚えは――…つと、もう隠す必要もなかったか。そうだったな、もう付き合って一週間も経つんだから堂々としてりゃいいのか」

「!…ええ、そうですよ。 全く、恥ずかしがり屋さんですね。春斗君は」

「はは、わりいわりい。 で、今日は何処に行くんだっけ？」

「私達のこれからについて少し静かな所で話したいです。 その…今日は、大事な話があるので」

「へえー、そりゃ楽しみな。 じゃあ今日は俺が案内しよう。 静かな場所には心当たりがあるしな」

「あら、そうなんですか？ それは楽しみです♪」

さも当たり前のように人前で自然に会話する春斗達。 その光景を見て更に頭の中が真っ白になっていくのはやてとティアナ。

こうしてみると、まさに春斗とあの女性はお似合いに見えてしまう。 自分達ですら見とれてしまった美貌を持ち、プロポーションも良い。 背が低いのが少々春斗との凸凹感を感じさせてしまうがそれすらも忘れさせるほどの美しい女性だった。

「じゃ、行くか。 あ、はやて。 少し俺は『お話』しに行ってくるわ」

「あ、部隊長さんですか？ 申し訳ありません、少し春斗君をお借りします」

そう言うと、春斗は女性の手を引いてさっさとロビー出口から出ていってしまう。

後に残されたはやてが言った言葉は、一言だった。

「ティアナ。 追うで」

「了解しました」

仕事なんて知らない。 さっさと出ていくはやて達。

人は時に、何より大切な物がある――

そう。

「…あれ、ティア戻ってこない…もしかして手伝ってくれないの…

「？」

——訓練学校時代からの親友よりも、優先すべきものが。

ティアナ side out

春斗 side

「で？」

「何ですか、春斗君っ♪」

「いや、もうその芝居はいいから。　　というか何故俺にあんな小っ恥ずかしい芝居をさせた。　　彼氏彼女とか、もうはやて達からの視線が恥ずかしくて死にそうだった」

「あら、それにしても一週間前から付き合っていたとか私が言ってもいないことをアドリブで付け足してましたよね？」

「見栄を張りたかったんだよ畜生！　　文句あるか！」

「いえ、別に♪」

此方はロビーを出たばかりの春斗達。先程まで笑顔で会話していた『恋人同士』はもう何処にもいない。春斗からしてみればやはりこの桃髪の女性は知らない人であつたし、そしてそれを彼女も理解しているらしくニコニコ顔を崩さないまま自己紹介した。

「それにしても、ウインクしただけで良く分かりましたね、私の言いたかった事…あ、名前を言ってませんでした。私はリン。魔法使いです」

「何となくな。女のウインクには裏があると血だらけの士郎父さんに教わったことがあるから察せた…それと魔法使いであることは理解できる。さっきの武装解除魔法、テメエだろ？」

「えっ、血だらけって…ああいえ、何のことですか？」

「惚けんじゃねえ。正直、アンタの魔力量は『異常』の一言だ。そんな魔力から放たれる武装解除だ、俺だって誰が出したか位はわかるぜ。それに、普通何の用事もなく俺個人を呼びつけたのは考えにくい。普通ならこんな冴えない弟よりもエースであるのは姉達を呼ぶだろうしな。とすると、俺のことを少しは知ってる…と見てもいいよな？」

「…さすがです。結構魔力隠蔽工作はしていたしリミッターも掛けているのですが、私の魔力を見抜くなんて…姉さんが言っていただけの事がありますね。でも、この続きは本当に人には聞かせられないので、何処か人の少ない場所をお願いします」

「了解した。 そうだな、知り合いの男がやっているバーがある。そこで酒でも飲みながら話すか」

「その男の人は大丈夫なんですか？」

「心配すんな、やっていると言っても普段はいない。俺が特別に親しいだけだ。なので合鍵をもらっている。『秘密の話をするときなどに使うといい』と言われたんだが、まさか本当に使うことになるとは」

「それなら聞かれる心配ありませんね。 あ、そうでした」

「？」

「そのお店、ワインもありますか？」

「古い物で120年以上前の代物があるぜ」

「決定ですね♪」

「どうやらこの（春斗から見ても）小さな魔法使いはワインが好きらしい。一体幾つなのだろう？」

「そんなどうでもいいことを考えながら、春斗は合鍵を手に持ちつつ裏路地へと歩を進めていった。」

「あ、それともう一ついいですか？」

「ん？ 何だ？」

「その男の人の名前を教えてくださいませんか？ やはり名前くらいは知っておかないと心配です」

「ああ、ジュエル・スカエルツティというんだが、なかなか面白い男だな。最近はロボ系のアニメに二人してハマっている。特に機動戦士ガ○ダムとか」

「……………、貴方はその名前を聞いて、何も思わないんですか…？」

「ん？ 何を？」

「いえ、なんでもないです…（いや、どう考えてもその人ってジュエル・スカリエツティの関係者か本人だと思うんですけど…いや、でも名前が似ているだけで…うーん、それにしても出来過ぎな気が…）」

その頃、某科学者のラボにて。

「ハクシュンッ！」

「？ ジェイル、風邪を引いたのかの？」

「いや……最近友と深夜までアニメを見ている事があるから、少し身体を冷やしてしまったのかもしれないな」

「ほお、お主が見るアニメ？ 友というのも初耳じゃが、そっちの方が興味があるのう。 題名はなんじゃ？」

「機動戦士ガ○ダムΩ」

「うむ、後で調べる」

「見たら感想を聞かせてくれたまえ」

「了解じゃ」

何処かの科学者と何処かの合法ロリが、そんな会話をしていたとかないとか。

春斗side out

ティアナside

此方は絶賛尾行中のはやて&ティアナ。何も知らない彼女たちから見たら、春斗と謎の女性が仲良く手をつないで会話をしているようにしか見えないので、既に疑念が確信へと変わり始めていた。

春斗には彼女がいた、と…。彼女達にとっては絶望的な真実だが、やはり受け入れるしか無いのだろう。例えば、本当はそれが春斗の社会的生命を刈り取る虚実だったとしても…。

これからどうしようかと全く無駄なことを考えていると、いきなり春斗達が路地裏へと曲がった。慌てて自分たちも路地裏に曲がると、更に入り組んだ道が目の前に現れる。

どうやら人気にない場所に行きたいらしい。だが此処まで来たらもう引き下がれないティアナたちは、完全に仕事の事を頭から吹っ飛ばして行動を開始した。

訓練で培った体力を無駄に発揮し、時にははやてがティアナを、ティアナがはやてを助けながら春斗を探していく。

素晴らしいチームワークだが、これが任務でもなんでもなく不純な動機から来るといふのは悲しい物である。恐らくフェイトですら涙を禁じ得ないだろう。

そして何かいないかと探し回ること30分…。

「…酒屋？」

「…そうみたい、やな」

かなり怪しげなバーにたどり着いた。少しドアを動かそうとするも、鍵がかかっているらしく開かない。

何が怪しいかと言えば、まず看板が無い。そして酒屋というには少々装飾がたりなさすぎる。本当にいつも営業しているのかどうかすら疑問である。

しかし困ったことに此処で彼女達の春斗追跡任務は終わらざるを得なくなった。何しろ本人達が全くいないのである。ある意味当然の事だろうが、もちろん彼女達は春斗がこの酒屋の合鍵を持っているなどというご都合主義は考えない。

「撤退、か…すまんかったなティアナ、連れ出してもうて…」

「いえ、いいんです…帰ってきたら春斗さん本人に聞いてみましょう…」

「そうやな…」

そして、この瞬間に春斗の死亡フラグも確立するのだった。

ティアナ side out

春斗 side

「…」

「どうしたんですか？」

「いや…マジで風邪引いたのかなって思ってたな…今日は寒気がある日が多い」

死の危機を感じ、再びブルルツ、と身体を震わす春斗。その悪寒が現在自分達のいるバーの前から発せられることには気づかない。

「ま、いいか。で、何が良い？」

「あるんだったら赤ワインがいいです」

「そらよ。じゃあ俺は日本酒でいいか」

「…本当に何でもあるんですね。その、ジェイラー…ジュエルさんは何者なんですか？」

「何処にでもいる我が親友だ。オタクの道に踏み込みかけているがギリギリ停止している感じだな」

「…なんか、疑ってる自分がおかしく思えてきました…」

「？」

「いえ、なんでもありません」

少し挙動不審なリンを不審に思いつつ、赤ワインの入った容器を投げる春斗。それを綺麗な手で受け取ったリンは、ラベルをしげしげと見定める。

「……ってこれ超高級品じゃないですか！　こんなもの飲んじゃっていいんですか！？」

「いいんじゃないかな？　ジュエルからここに置いてあるものは何だって飲んでいいと言われてるから」

そう言って春斗が手に取ったのは、『鬼酒』と呼ばれる最高峰の日本酒だった。何故そんなものが此処にあるのか疑問は尽きないが、もう考えるだけ無駄だと悟ったリンはこのバーについての思考を放棄した。

「それじゃ、乾杯でもしましょうか？」

「お、いいね。それじゃ…」

「私達の出会いを祝って？」

「なんだそりゃ。 まあいいか、乾杯」

チン、ではなくゴンツ、と酒の入った瓶同士が大きな音を鳴らす。
優雅なカップルとは程遠い乾杯だったが、飲んでいる本人たちが満足しているため彼らはこれで良いのだろう。

「…ふう…おいしいです…流石、高級なお酒は違いますね…」

「っばあっ！ いやー、この酒はうまいな。 当たりを引いたかも知れねえ」

それぞれ、リンは優雅に、春斗は気品のかけらも感じない声でそれぞれ酒を飲み干す。 その後暫く余韻に浸っていた春斗たちだが、数分もすると復帰し本題を始めた。

「さて、色々と脱線したが…リン、だっけか？ 俺について何か知ってるんだったら聞かせてくれ」

「…私も姉さんから、姉さんも人から聞いた話だからまだ確信ではないらしいんですが…もし間違っているとしても訂正はしないでいいですよ」

そう前置きすると、彼女はどこからか紙を取り出して読み上げ始めた。

「『高町春斗』。 project S・Wの成功体被害者の5人のうちの一人で、今は高町なのは義弟として生活。兵器である事は周りには知られていない。ここまでで何かありますか？」

「いや、続けてくれ」

「高町なのは及び周囲の人間には、自分を捨て子と言う事で誤魔化している。ただし管理局への憎しみは持っているのが確認できる」

ふと春斗の眉が吊り上がる。それを見て少し笑ったリンは、その紙を畳んで服の裏ポケットに締まった。

「それで、此処までで何かありますか？」

「そんじゃ質問。誰から聞いたんだ、こりゃ？」

「それは残念ながらまだ教えられません」

「（“まだ”：か）：、それじゃもう一つの質問だ。被害者五人と言ったが俺の他に誰が何処にいるのかは知っていたりしないか？」

「……一人。一人だけお会いしたことがあります。戦闘には発展しませんでしたし、どうやら体調を崩していたようなので向こうからお帰りになりましたが：」

「！！　　そ、それは誰だ？　女か？男か！？」

「男の方です。真っ黒なドレスのような服を着た男性の方」

それを聞いて、春斗は少し硬直し、そしてパタリ、と机に突っ伏してしまった。

時間から考えて、どうやらその男――無還者なのはやフェイトを襲撃したその帰り道、なんらかの出来事があり彼女（達？）によって保護されたと言うことだろう。あの無還者が体調を崩すとは考えにくい、彼女がそういうのであれば恐らく事実なのだろう。それに自分に見つかった時から無還者も調子が悪かったのだし、ありえない話ではなかった。

「どうしたんですか？」

「そいつな。俺達の中でも別格で、そいつ以外の兵器が全員集まって攻撃して傷を付けられるかどうかすらわからない」

息を呑む音が聞こえた。驚いているのか目を見開いている。「今はどうか分からねえけどな」と呟くように付け足して、少し深呼吸をする。

どうせ手掛かりも何もない、今ここで深く考えたところで何が分かるわけでもないのだ。それならば今は目の前の女性の話に集中しよう。そう思った春斗は、改めて自分とリン以外誰もいないバーの中で彼女と向き合う。

「…それはまあいいとして、だ。その男以外に会ったのは？」

「いえ、現在調査中です」

「そうか」

静かにつぶやき、一息で酒瓶をすべて飲み干してしまう春斗。はあ、と再び息を吐く。

「すまねえな、アンタの話を中断しちゃった。それで、アンタの方の用件は何だ？」

「…、そのお話をする前に、お一つお伺いを立ててもよろしいでしょうか？」

「構わねえよ」

「貴方は、今の管理局をどう思いますか？」

「完全に腐蝕してんな。救いようもねえ程に」

顔を歪めて苦々しく即答する春斗。その顔を見て少し自分も眉をひそめつつ、リンは淡々と「その根拠は？」と更に尋ねる。

「これは俺らが兵器だとかそんなもんを全て抜きにしての率直な感想だ。しかも下の奴らが腐ってるんじゃないくて上層部全体がシロアリの如く蠢いてるんだからタチが悪い。レジアス中將を含む一部のクリーン派が居ることは確かなんだが、とてもじゃないが彼らだけじゃシロアリの駆除は出来ない。駆除するにはもうこの管理局全体を一度建て替えないといけないんじゃないかな」

「レジアス中將？ あの人は寧ろジェイル・スカリエッティ等の次元犯罪者・違法組織に協力し、戦闘機人計画の黒幕の一人だと思っ
ていたのですけど…」

「その事なんだがな。そこにさっきアンタが会ったって言ってた男が出てくる」

苦々しい顔を崩さぬまま、彼は続ける。

「俺のことを調べてきたくらいだ。当然知っているんだろうが、
そいつは管理局の上層部の言いなりになるように洗脳と改造を受けている。
つまり、あらゆる罪を特定の個人に被せることもかなり容易だ。方法は何でもいい、その男が行なったかもしれない大量虐殺罪だって被せることが出来るかも知れねえぜ？」

「…成程。自分達は手を汚さず、それでいて邪魔者を遠まわしに消すことも可能……というわけですか」

「まあ、要約するとそういうことだ…他に何か質問とかはあるか？」

「いえ…質問はこれで終わりです」

「ん？　これだけでいいのか？　他にも色々あるかと思ったが」

「はい。　なのでこれからは交渉に入りたいと思います」

浮かべるのは艶やかな笑み。

身長170cm前後と、大人の女性としてはなかなか大きいほうに入るリンは――首を傾げる春斗に、笑みを浮かべながら、言った。

「貴方、私達の国に来ませんか？」

春斗sideout

??? side

此方はミッドチルダ中央通り。

▲月□日 午後○時××分にて――――

「…賑やか」

「ほんと、賑やかだねえ。 僕達の国といい勝負じゃないかな?」

「…（グウ……）……メビア…わたし、お腹減った」

「あのさ、ドーナ? 一応君は僕の護衛なんだからさ、普通立場逆じゃない?」

「……お腹減った…あ、あの子供……おいしそう……」

「おっとおー!? あんな所に食べ放題店が見えるッ!! さあ行こうドーナ! きつとハンバーグやホットドックが君を待っている!」

「……………!」 ダッ

「…、」

ピッ。

「ねえ、ロザリー姉ちゃん。これって人選ミスじゃない？」

『言わないで。うん、確かに王族警備軍ってまともな居ないわよね。改めてそう思ったわ』

「思う前に行動して欲しいな」

「（クイクイツ）メビア、早く行かなくちゃ：ハンバーグが逃げちゃう」

「逃げるいよ！？ 大丈夫！ 絶対に君の元からハンバーグは逃げないから！ だからあの子供を見つめてヨダレを垂らすのを止めて！？ 食べさせないよ！？」

「……」

「違う！ 僕が言いたかったのは子供を食べると言う思考そのものを無くすことであって、子供を見ながらヨダレを垂らす事から子供を指さしながら物欲しそうに僕を見上げる事に変えてくれっていうんじゃないんだ！」

『ごめんライム。メビアとチェンジの方向で』

『だが断る』

特級指定次元犯罪者、そして真租の吸血鬼。

この2名が、ミッドチルダに降り立ち——物語は加速する。

某ホテル襲撃事件が起こる迄、残り8日。

“交渉（前編）”（後書き）

天破「春斗：短かったけど管理局とはお別れの時が来たね。行つてらっしゃい。向こうでフラグ立てたら殺すから」

春斗「感動の別れのシーンだと思ったら殺害予告だった罫。それとまだ行くかどうか決めてねえからな？」

天破「あつ、あんなところに巨乳猫耳の美女がつ！」

春斗「ちよつとアルデイス行つてくr」

フラン「春斗？ 何か言いまして？」

なのは「もちろん春斗はこっちにとどまるんだよね？」

春斗「：俺はっ：どうすればいいんだ：！！」

天破「まずはその欲望をどうにかした方がいいと思うな」

後半に続きます。 　　いつUP出来るかは：分りませんorz

この作品中に出てくる設定等は、ほとんど私の被害妄想から成り立っています。　なので批判等ありましても『スカリエッティは悪役だろjk』や『フランを巨乳にして』、『ディール様を貸してください』などなど、話の展開上もう変更できない箇所もございますのでご了承ください。

という訳で、ちょっとフランが鬼神の如きオーラをまとわせながら此方へ来ているのでお別れの挨拶を。

感想・お気に入り等、励みになります！ これからも天破を宜しく願います^^

それではまた読んでくださることを願って。

天破でした（ゝ∀ゝ）／～～

フラン「死になさい」

天破「待つんだ、まずは話し合いを（ボキユッ）」

“交渉（後編）”（前書き）

バトル突入。　ただし決着はつかず、どれだけアルデイスの面々が狂ってるか、そして強いかの再確認的な感じです。

結局、あの国にまともな奴なんて…いなかったのさ…！

さて、天破は来週にテストを控えています＼（＾Ｏ＾）／
なので更新を一時的に完全停止させていただき、運が悪いとこれが10月最後の更新になるやも知れません。

何故ッ　習っていない箇所を　テストにッ　出すんだッ！

すべての教科が絶望的な今日この頃。私はどう生きていけば良いのでしょうか？

では、この話を読むにあたっての注意事項をば。

- ・生々しい表現が多々混入。　ドーナの狂気が見え隠れしています。ご注意ください。
- ・リンもやはりまともでは無かった
- ・メディアなんてもっとまともじゃ無かった
- ・はやてが格好いいだと…？（失礼
- ・『彼』が春斗と話を…その内容とは？
- ・ラストの方にて衝撃の会話

尚、今回リンが使用する能力には元ネタがあります。
後書きにて発表するので考えてみてくださいw

ヒント…映画化、そしてサンデー連載中。

読んでる方なら一瞬にして分かってしまうヒントですね。

いつにもまして駄文ですが…では、どうぞm ((m

“交渉（後編）”

「俺が、あんたらの国に？」

その言葉を聞き、まず春斗が発した言葉は確認だった。

しかしその顔に焦燥や驚愕が見て取れない事に、少し首をかしげてリンが尋ねる。

「あれ？ 驚かないんですね、国とか、いきなりのスカウトとか」

「アンタの持ってきた『情報』はかなり深いところまで調べられていたからな。とてもじゃねえが、管理局相手に個人でそこまで調べられる訳が無い。とすれば大きな組織か、国とかと見るのが妥当な線だと思ってたからな」

「あゝ…」

「だが、流石に何処に国なのかは分からん。教えてくれ」

納得したように頷きかけるリンに、少し困ったように尋ねる。流石に国というだけではどこの世界にある何処の国かまでは分からないためだ。

そうでした、と笑って彼女はその問いに答えた。

「私達の国の名前は“アルデイス”。第二管理外世界に存在する都市です」

そして、その国名を聞いて、たまたま口にふくんでいた水を全て吐き出してしまった。

アルデイスといえば、対管理局勢力の集う最強最悪の国である事で有名だ。その国に行くということ——それはつまり、管理局への反旗を翻すことと同義である。

「正気か？ これをなのは姉……いや、匿名で上に密告すればアンタらはただじゃ……」

「はい。大丈夫です、管理局の艦隊くらいなら一人で沈められる自信があります」

「……おっそろしい自信だ。だが現実味があるな。あの国から来たっていうんだから確かにそのくらいは出来るだろ」

そこで言葉を区切り、改めて水を組み入れて一気に飲み干すと更に続けた。

「で、目的は？」

「簡潔に言うと『打倒！ 管理局』です」

「わかりやすくして何よりだ。じゃあ聞くが、その後のケアとかはあるのか？」

「管理局の過去に汚職の歴史がある者を徹底排除した後、地上本部含む『クリーン派』を私達の国の内政官と共にミッドチルダに派遣し、抗争や反乱を抑えます。ミッドチルダ以外の管理世界はそれぞれに任せ、もし希望があれば私達が治める世界に加えます。基本全ての国に自治権利を与え、何があっても自己責任になる予定です」

「それは今よりも混乱するんじゃないか？ 管理局を倒してからの管理世界の秩序とかはどうするんだよ？」

「もう手は打ってあります。いえ、打っている途中と言うべきでしょう。管理外世界の私達の仲間が、随時抗争のあった管理世界へ派遣され争いを収めています。一部の管理世界では既に管理局よりも私達を推挙する声が上がっています」

「成程ねえ：地道に信頼を築く事によって、万が一管理局が潰れても混乱を最小限にとどめるってコトか。だがそう考えると俺は必要ないんじゃないか？」

「確かに戦力の面では必要ないかもしれませんが。近年の管理局員の練度は一部を除いて酷いものですからね。この前うちの国の一人がデコピンをしたら頭が吹き飛んでしまったんです」

「いや、魔法や体術の練度と頭蓋骨の硬度は何ら関係無いと思うんだが…」

デコピンで人間の頭蓋骨ごと頭を吹き飛ばしたという話も中々特異な話だが、それを普通に受け止める春斗も大したもののである。

「話を戻しますね。 ええっと、単刀直入に言うと貴方には被害者になってもらいたいのです」

「！ …なるほど。 いや、大丈夫だ、理解できた。 つまり、被害者である俺が管理局の扱いの辛さに耐え切れなくなり、そしてそれを理由として管理局へ攻め込む…そういうことか？」

「少し違います。 少し辛いかもしれませんが、例のプロジェクトで管理局が行なった事をただ言ってくれればいいだけです。 そしてそれを言う場所はTV局。 そしてそれを全世界ネットで流すことで、管理局は悪役になって私達は正義になる」

「えげつないねえ…こわいこわい。 敵には回したくない部類の人間だな、アンタ。 直接戦うんじゃなく、敵の周りを自分の味方に変えてしまうことで相手に絶望を与えつつ追い込む…俺みたいな力バカが戦いたく無い相手だ」

「ふふっ、褒め言葉として受取りますね。 それで、ご返事はどうされますか？」

「なんだ、考えさせてくれる時間すらくれねえのかよ？」

「考えるんですか？ 向こうにはたくさん貴方の好きそうな女性の方がいますよ？ …私も含めて、ね？」

クスクスと笑いながらいたずらっぽく付け足してくる。 普通の男性ならホイホイと付いていきそうな感じだが、春斗はそれに少しだけ笑った。

「何だ？ そっちの上司から『いっそ籠絡してでも連れてこい』とでも言われたか？」

「……立场上、仕方なかったんです…仕方なかったんですよ…」

「え、マジだったの？ つか経験者だったの？ すまん。 そんな傷を追ってるとは思わなかった」

「いいえ、大丈夫です。 まだ処女は守ってますから。 破られそうになっているだけです」

「それは俺が破ろうとしているという最悪の誤解を受けているという事にとってもいいのか？ 無駄だ、俺に籠絡は効かねえよ」

「え？ どうして？」

「…、」

その言葉にすこし考えるも、「これは俺の個人情報だが同時に機密

情報だぞ」と言って、話した。

「

」

「！ …それは…男性としては致命的じゃありません？」

「そうだよなあ。 御陰で、自慰もできやしねえし親友とのそういう話もできない。 俺はどうすりゃいんだよっていう話だ」

「…………あの、そういうことを普通に言われるのは女性としてその…は、恥ずかしいんですけれど」

「おっと、わりいわりい。 ま、つまり俺が言いたいのは」

再び水を水道から組み入れて、ゴクゴクゴクツ、と飲み干し、静かにテーブルの上に置く。

「まどろっこしい事してねえで、力づくで奪いに来てくれねえかな。 俺を従わせるだけの、戦力・人格・そして心。 籠絡だとか誘惑だとか、んなもんじゃ俺は動かねえよ」

「…………見た目に合わず、中々堅気なんですな。 惚れちゃいそうです」

「かっかっか、そりや光栄だ」

その笑いを受けて、魔女はクスクスと笑いながら、入口とは逆方向――バーの最奥、何もない壁に寄っかかる様に立つ。

兵器もまたくっくくと笑いながら、入口――そう、リンと向かい合う感じで、仁王立ちした。

「そうですか。でも私は任務を受けたのでただじゃ帰れません」

「そうかい。なら、どうする」

「貴方の言う通りです。私達の国の信条を教えて差し上げます。『強き者こそ上に立つべし』。簡単でしょう？」

「ああ、簡単だ。魅力溢れる世界だな、浮気しちまいそうだよ」

「それならそこをどいて私と一緒に帰りませんか？ 美味しい料理と小さい私達の王女様が首を長くして待ってますよ？」

「生憎と小さいのには興味が無いんでね。アンタ位のは無いとダメだな」

「ふふふっ、それは光栄です」

楽しそうに、愉しそうに。

二人の化け物は会話する。

ケタケタと何かが笑う音がすれば、静かに荒れ狂う魔力の渦がその音をかき消し、そして魔力の渦は辺りにあったテーブルや椅子を手当たりしだいに葬ってゆく。

「なので――失礼ですがその力、この王族警備軍副隊長兼次期王女であるリン・アルデイスが囃らせていただきます」

「なんだ、アンタ王族だったのか？　しかも副隊長まで兼任してんのか。　かかか、そりゃ魔力も能力もバケモンな訳だ」

もう、彼女も春斗もまともな笑みは浮かべていない。

リンは歪んで歪んで、歪みきった笑み。

それはあの天使のほほえみとは程遠く、その目は明らかに人を殺すという快樂を知っている目。

春斗は歯を剥き出しにし、リンが悪魔の微笑みなら彼は獣の笑みだろう。

目は獲物を狙うかのように光り輝き、リンの一挙一動を逃すまいと注視している。

「そう、貴方の言うとおり――結局、わたしたち化け物に話し合いなんて必要ありません。　全ては力。　絶対にして最高の法律です。――

「行きますよ高町春斗さん。その力と貴方の身体、全部喰らって差し上げます」

「ははは、いいねいいねえ！！正直アンタの事は魔性の女みたいで好きではなかったが、今日この時をもって本当に好きになれそうだ！！その自分の欲求を全面に押し出した顔：仮面なんざ似合わないさ、バケモンはとことん残虐でなくっちゃなあ！！」

「——————クスクスクスッ。貴方は本当に、面白い人ですね…」

「んじゃ…喰らって見やがれっ！！」

「————最大威力！！パニッシュ・インパクト！！」

「————全てを喰らう骸の翼《イートオール・ザ・ウィング・オブ・スケルトン》。」

世界が、揺れた。

春斗 side out

管理局 side

ヴーっ！！　ヴーっ！！

「こ、これは：ミッドチルダにて小規模の次元震確認！　被害はありませんが住民の混乱があります！」

「そんな馬鹿な！？　原因はなんだ！？」

「不明です！　何処で、どうして、何故起きたのか全くわかりません！　ミッドチルダの何処かというのみしか！」

「くっ：ミッドチルダの皆へ落ち着けるように呼びかけろ！　どんな方法でも構わん！　場合によっては僕も出る！」

「は、はい！　全管理局員へ通達っ！　小規模の次元震が発生、ミッドチルダの民衆が混乱に陥っています！　手の空いている方は被害状況の確認、民の誘導をお願いします！　任務中・現在休養中の方には、可能な場合のみお知らせして置いてください！」

とある管理局の施設で、様々なことを考えつつあらゆる指示を出す
とある提督は、冷や汗を拭いながら考える。

「…一体、どういうことだ…!!?」

管理局 side out

??? side

「…! メビア…これ…」

「うん。 十中八九リン姉ちゃんだ。 この揺れを見るに、…えー
っと、高町春斗君だっけ? との交渉は決裂したのかな?」

「(フルフル)」

「…ドーナ?」

「…違う…リンと技をぶつけた奴…わたしと同じ臭いがする…」

「…え?」

「……そう、わたしと同じ。 『何処か狂ってる』」

とある食べ放題店、突然起きた次元震にパニックを隠せないで外へ出ていったコックや店員含む人間たちの御陰でただ飯にありついている二人の化け物のうちの一人――ドーナ・クライオンが、懐かしそうに、愉しそうに目を細めながら、偶然なのか彼らがいるバーの方向を見ながら呟く。

「戦いでしか自分を見いだせなくて、人間を信じられなくて……結局、力に頼るしかない奴。今リンと戦ってる奴……そういう奴は、強い。護るものが無いから、本気を出せる」

「…、」

「……護るものがある人は、だめ。弱いとか強いとか、そういうもんだいじゃない。弱点がおおすぎる」

珍しく饒舌に話す次元犯罪者を、珍奇な動物を見るような目で見るメビアは取り敢えず皿の縁で思い切り叩いておく。「ぎゃああ！頭に皿の破片が刺さって目に皿の破片が入ったような痛みがあああ！」と喚いているのを見て満足し、更に料理を取りに行くついでに彼は続きをぼそぼそと話していく。

「護るものを人質にとられたら？　そうどころか殺されたら？　うん、目の前で拷問されたら？　もしかしたら操られて戦わせられるかもしれない。よくテレビとかでやってるけど、『護るべき物があるから強くなる』。ただの理想論」

彼はまだ、春斗とリンがぶつかったであろうバーの方角から目を逸らさない。

「これもよく小説とかであるけど、『もし何かがあったらおまえを助けてやる』。うん、すごいね。すごいすごい。でもね?」

まるで兵器のように抑揚のない声で、彼は涙目になって皿の破片を頭から抜いているメビアに淡々と告げる。

「その助けてくれる勇者サマが、魔王に勝てなきゃ意味が無い。魔王は正々堂々と待つ必要は無い。勇者サマがLv1の時に背後から襲っちゃえばはいおしまい。万が一負けそうになったらお姫サマを盾にすればいい。その何処が卑怯なの? その何処が可笑しいの? だって命を掛けた戦いでしょ?」

「相変わらずだねー。その勝者絶対主義。だからこそ、君は王族警備軍の隊長になったんだろうけど。そしてだからこそ、僕の傍にいられるんだろうけど」

破片を抜き終わり、しばらくすると綺麗に傷はふさがっていた。目がまだ少し痛いので、「帰ったら刮り貫いて洗ってみるか」と明らかにおかしい言葉をボソボソと呟いているのも気づかない様子で、人格破綻者であるドーナ・クライオンは話す。

「助けたい？　なら助ける場所に爆弾を置いておこう！　助けたい？　それなら四肢を切断したバラバラ死体を置いておこう！　どうしても助けたい？　なら勇者サマ、あなたが死ねば助かるよ？　どうする？」

歌うように、嘲るように、妖精のような声で、最低の言葉を。

「そうだねえ」

それに同じく、笑いながらメビアが解答を言った。

「ならお姫サマを殺して、呆気にとられた所を狙おうか？　そのバラバラ死体を魔王様の目に投げて視界を潰すのも面白いね。爆弾があつて魔王様がいらないなら無理だ。帰って母さんの飯食べて平和な時間を過ごせばいいじゃん？」

これもまた、狂い切った答え。

普通じゃない。異常だ。人間として、生き物としておかしい。

これが普通だとしたら。　これが、彼らにとっての日常だとしたら――。

「…人を殺して…はやくおやつ食べたい」

「人は殺さないからね？ 今回の任務。ま、『クロ』の方は別に殺したって構わないけど」

超古代精霊と真祖の吸血鬼。

アルデイス王族警備軍隊長と、アルデイス家の末裔。

共に最低最悪最凶の自論を持つ二人が、動く。

狙うは管理局機動六課。

フェイト・T・ハラOWN及び高町なのは、八神はやての『記憶』の採取。

??? side out

春斗 side

「…衝撃と魔力を弾いた……いや、かき消した？」

「そうですよ？」

いくらか少し離れたと言っても所詮室内、バーの中は既にボロボロであり高級なワインや酒も全て消失し消えている。

バーそのものが吹き飛ぶことも懸念していた春斗だが、これには少し安心した。

「…その服…そしてその骨で出来た翼…テメエ、ただの『魔法使い』じゃねえな？ アンデット・サーカス『骸達ノ狂躁曲』は太古に失われた術式のはずだ。

俺だって気味が悪すぎる上に難しすぎて再現もできねえ」

「はい。私は第97管理外世界の『地球』という場所で起きた“魔女狩り”を回避して逃げ延びた者ですから」

「……………勘弁して欲しいな。本物の大魔女じゃねえか」

「今更ですか？ ふふっ、貴方がいけないんですよ？ 貴方が、私の中の『欲』の目を覚まさせるから…？」

———マジシャン・オブ・レクイエム
魔女ノ葬送曲。

狭いバーの店内の中で出現するのは、巨大な骨の腕。

あらゆる物体を破壊しながら、春斗を掴もうと迫る。

「ツチイッ！！（此処でよけんのも限界か！ できる限りなのは姉達に正体がバレるような馬鹿なこととはしたくねえんだが…相手が本気で来てんだ。わりいなフラン、約束守れそうにねえよ！！）オラァッ！！」

それを巧みによけていく春斗だったがよくも悪くも所詮は密室。回避に限界を感じ始めた春斗は、自らバーの天井を壊してそこから外へ逃げる。

「あら、いいんですか！？ 正体は隠して置くんでしょう！？」

「バーロー、男にはそれよりも大事な事があるんだよ！！」

「…クス、貴方、本当に面白いです！！」

春斗が飛び上がった次の瞬間。

バーが倒壊した。

否、破裂したとでも言うべきか。 圧倒的質量を持つ何かが、この世界に来ようとしている。

『GYUOOOOO!!』

何か雄叫びも聞こえてくる。 どう考えてもそこらの龍種や幻想種では及びもつかない覇気も感じる。

「…? ーーッ!」

ふと、自分の動きが見られているような錯覚に陥り、そしてその感覚が何なのか判明する。

サーチャーだ。 こちらを見られている。 管理局の隊員服を着ているから、バレてしまったかもしれない。

「…、マジでアルデイスに行くべきかもしれんな」

そうつぶやいた瞬間、『何か』によって全てのサーチャーが破壊さ

れた。

「…アンタか」

「はい。其の通りです」

気づけば魔女かのじよは春斗よりも高い位置に立ってニコニコと笑っていた。そう、立っているのだ。浮いてない。まるで何か物理的な物に乗っかっているようだった。

「此処でサーチャーを壊さなければ、俺はアンタについて行ったかもしれないねえぜ？」

「そうかもしれませんね。でもそれじゃあ貴方は納得しませんよね？」

「ほほお、アンタも俺の扱いが中々分かって来たな。褒めて遣わす」

「ありがたき幸せ……ですか？　でも生憎——」

GOOG AAAAAAAAAA

!!!

「——王様ごっこは間に合ってるんですよ。ミダス、その姿を

見せてあげてください」

彼女が座っていた位置から、まるで緑色のペンキを透明なガラス細工に垂らしていくかのように『何か』があらわれていく。

何も入っていない空洞の目。

肉がついていない身体。

そして、その身体には金銀財宝がまとわりついているのが見える。

「ミダス……ミダス？ ……欲望の王、ミダスカ!？」

「其の通りです。 気を付けてくださいね？ 彼は気に入った存在に『永久金剛化』の呪いを掛けますよ?。」

そう言った瞬間、リンと同時に巨大な骸の王の姿が消えた。

「…ツ…カメレオン見てえに風景に色を合わせてんのか…あれほどの覇気まで遮断するとは…ツ!」

咄嗟に、今向いている方向とは逆を向き、腕を交差させて障壁を造った。

一秒も経たずして彼を襲ったのは衝撃。

この世界で春斗が望まぬ生を受けてから始めて経験した、鬼神の如き拳撃——其れは、否が応にも高町なのはの集束砲を思わせる。

「これを止めるんですか。普通なら簡単に潰れて吹き飛んじゃうんですが——それなら…」

『OOOOOOONッ!!』

バチッ、と。

『ミダス』と呼ばれた、欲望の王の成れの果ての骨で構成された左手に、電気が帯電した。

(——ま、さか)

「いくら分厚い障壁でも、貫通力の高い雷系を付加した拳撃なら———どうですか？」

バチチチチチチッ!!

『OOOOOOONッ!!』

「（あれは流石にヤベっ！！）耐圧障壁全開・魔力封殺障壁展開
！！ 前方12時の方向に最強防護壁展開！！」
アイギス

「貫いてください、ミダス」

『GOOOOON！！』

—————雷化型金剛拳！！

アッパーのような形で放たれた雷の巨大な拳は、障壁を全力で展開した春斗ごと飲み込んだ。

春斗side out

機動六課side

サーチャーは何者かに叩き潰されて使えない。

市街地の方に巨大な骸骨の化け物が出たとかその骸骨と一体一で戦ってる人がいるとか、未確認情報も飛び交ってもう彼女たちはてんでこ舞いだった。

だから、この自体の収束には自然と彼女達現場で活躍する職員の手が必要になるのだが：

何故か。

何らかの術なのか、機動六課の外へ出ることができないのだ。

廊下へ出ることはできる。自由に歩ける。しかし外へ出ることも出来ない。スバルやティアナが窓からの離脱を試みたが、結局元の場所へ戻ってしまうのだ。

閉じ込められた。彼女達がそれをようやく把握し、緊急会議を開いたのは春斗とリンが互いの一撃をぶつけ合ってから5分後程度だった。

「ミッドチルダへの襲撃でしょうか？」

「そうかも知れないね。：あんまり言いたくないけど、管理局にいい感情を持つてる人ばかりいるとは限らないし」

「でも、次元震を起こせるほどの力があるんですの？ 理論上ではS級砲撃クラスの魔法をぶつけ合わないと次元震は起こせませんわ」

「じゃあ少なくとも、この次元震を起こした何者かはSクラスの実力を持つって事やな」

S級次元犯罪者。それが何を意味するか――つまりこの部隊では、なのは、フェイト、はやて以外は太刀打ちが出来ない程の強さを誇る犯罪者が、この街にいる可能性がある。

「でも、まずは此処からでないといけないね」

「うん：でも、どういう術なんだろう？ 空間幻術？ それにしては何処にも術師が居ないし」

「空間幻術なら、閉じ込めた空間の中に術師がいないと発動できませんからね」

「：考えても仕方あらへん。皆、取り敢えずもう一度分散して何か此処から出る方法を探そう。もし術師かこの魔法の仕掛けの様な物が見つかったら随時回収、無理なようだったら破壊や。ええな？」

「「はいっ！」「」」

元気に返事をし、次々と会議室を出てゆく魔導士達。

それを座りながら細目で笑いながら、見ているのははやて。

それが何故か気になったのはは、最後に出てゆく直前にはやての方を向いて言った。

「はやて？」

「あ、なのはちゃん？ すまんなあ、こんなときで悪いんやけど少し考えさせてくれる？ 少し頭の中を整理したいんや」

「……大丈夫？」

「平気や、平気。直ぐに私も後を追う。自分の足で歩かなきゃ、部隊長やないからな」

「…、約束だよ？」

呟くように言い残して、なのはもまた会議室を出ていく。

それを笑顔で手を振って見送り、会議室のドアが閉まるとその顔から笑顔が消えた。

「いるんやろ？」

彼女以外、誰もいない空間。

しかし彼女は、確かな確信を持って呼びかける。

「アンタの目的が何か知らへんし、もし知らん振りするならええけ

どな。　じゃあこれは私の独り言や」

そう言って、なにやら隊服の後ろポケットを探ると映写機型のデバイスが机の上に置かれた。その横にはデータが入っているであろう、ICチップが2枚ある。

「一つはロストログアであるレリックの強奪虐殺事件で残されている映像ファイル。もう一つはいま私らが分かっている例の男の情報を纏めたモノ。もう一つ、デバイスの中に記録してあるのはレリックについての詳細。どうや、これではちゃん達は勘弁してくれへんか？」

「――：分らない」

突然響いた声。しかしその声を聞いても動揺すらせず、八神はやてはその声に返答する。

「分らない？　何がや？」

「：確かにわたしは、この部屋で姿を消して貴方達を見てた。高町なのは”と“フェイト・T・ハラオウン”、そして貴方の記憶も狙ってた。けどなんで気づいたの？　わたしの『遊戯造界』、気づいたの貴方が始めて」

「別に不思議なことやあらへんよ。　女の勘、って奴や」

「…貴方、面白い」

笑顔を浮かべた訪問者は、はやてから見て後ろから手を伸ばし、机の上に置かれたICチップとデバイスを取ると、こう訪ねた。

「名前、改めて聞いてもいい？」

「機動六課部隊長、八神はやてや。覚えとき」

「…（コク）うん。覚えとく」

はやてが面白そうに笑うと、彼女からの品を受け取った訪問者はそのまま去ろうとする。

しかしふと窓まで近づいたところで立ち止まると、思い出したようにつぶやいた。

「ドーナ」

「…？ ……ドーナ？ ま、まさかアンタの名前なんか？」

「うん。ドーナ・クライオン。貴方、本当に面白い。わたしと関わった人間は、わたしの名前聞いて覚える前に死んじゃうから。そして、わたしが人の名前を覚えるのも本当に不思議なこと」

「……………っ！」

「覚えとく。　八神はやて、今度会ったら一緒に遊ぼう？」

はやては向かない、否、向けない。

背筋に走る悪寒が教えてくれる。

彼は笑っている。

今一挙一動でも彼の興味を失うようなことをすれば、殺される、と。

「……………約束…ね」

そしてようやく、その禍々しい気配が消えて彼女は冷や汗がどっと溢れた。

そのまま机につつ伏す。

これは文字通り命懸けの方法だった。

相手があの次元犯罪者ドーナだったとは恐ろしく想定外であったし、そうじゃなくてもこうして自分達を閉じ込めているのだから少なからず害意を加える可能性があった。　なので決裂し自分が殺される事も覚悟して交渉してみたのだが、なんとか成功したようだ。

『…（ザザッ）八神隊長！』

「！ フェイトちゃん、どないした？」

『外に出れます！ 空間幻術が解除されたみたい！』

「ほんまか？ それじゃ…ライトニング分隊、スターズ分隊、それぞれに分かれて混乱している市民の安全確保と被害状況の確認や！
ロングアーチは少しでも原因の究明を！ 頼んだで！」

『『了解！』』』

再び元気な返事が帰ってきて通信が切れたところで、はやては椅子にもたれながら呟く。

「…少し、厄介なのに目を付けられたかもしれんなあ…」

いや、少しどころかかなり厄介なのに目を付けられた——の間違いかもしれない。

自分でそう考えて苦笑しながら、機動六課部隊長八神はやても事態の解決に向けて、動く。

機動六課 side out

春斗side

「…ケホッ、ケホッ。効いた…ッ」

「それは普通の人間なら消し炭になっても全く不思議のない電流を喰らって言うセリフではないですよ？」

所々隊服は焦げ、更に少し皮膚が焼け爛れたりもしたが、結論として彼は生きていた。

「いや、俺に火傷を負わせた時点でもうアンタはEX級確定だな。悪役っぽく言うと、これで俺の体に傷を付けたのはアンタで二人目だ」

「へえ、一人目は誰なんですか？」

「アンタが会ったっていう男だ。というか傷どころじゃねえ、昔はホント攻撃が一撃も当たらなかった」

「…、成程、姉さんが戦うのを避ける訳です。そんな人と戦っていたら、私達の国も倒壊していたかもしれないね」

「で、どうする？ 続けんのかよ？」

「いえ、力量の程は既に図れました。なので今回は此処までにし

ておきます。　それに――」

相変わらずミダスの頭に立ちながら、コンコンと額を叩く動作を繰り返す。その動作を訝しげに思う春斗だが、彼女の次の言葉でその意味が分かった。

「……今私の仲間から連絡がありました。機動六課が出動したそうです。サーチャーは見つけ次第全て潰しているみたいですが、何分このデカさです。恐らくすぐ飛んでくるでしょうね」

「げっ」

「それでもまだ続けるというのなら、私に異論はありませんけど？」

「いや、降参だ。久々に心躍る戦いだったが、非常に残念だがこの辺で辞めておこう」

「戦い？　：興味がありますね。　貴方にとっての心躍る戦いとは？」

「“自分が本気を出せる相手であり、尚且つ殺し殺される危険性が無い戦い”だな。兵器も随分と丸くなったもんだ。あの頃は人殺しが日常だったつーのに、今じゃもう知人が死んでんのを見るだけで吐き気がしちまう。笑ってもいいんだぜ？」

「いいえ、それは素晴らしいことです。生命の重みを知ること、それは生き物にとって一番大事なことです。悲しいことに、王族警備軍の面々は誰一人その重さを理解していないのですが……」

よよよ、と泣き崩れる真似をするリン。誤魔化されてはならないのは、彼女も王族警備軍の一人でありしかも副隊長であることだ。口ぶりからして、彼女も人を殺すのに抵抗は無いのだろう。

「…………アンタらとは事を構えたくないな」

「それは無理な話です。貴方達が『プロジェクト』を追う限り、必ずまた何処かでぶつかります。その時は、例えば貴方の姉でも友人でも——容赦はしませんよ」

「肝に銘じておくれ。…っと、これはなのは姉の魔力っ…やべえ、こっちに来る！　さらばだっ！」

捨て台詞のごとき言葉を残し、高町春斗はその場から姿を消した。恐らく転移か高速移動でも使ったのだろう。それを微笑みながら考えていると、ふと周囲に敵意を感じ取った。

「——許可なき召喚魔術の使用、更には民間への二次災害。看過できる物ではありません。速やかに召喚を取り消し、投降して下さい」

声をかけたのは、顔に皺の寄ったエース・オブ・エース高町なのは。そして彼女を囲むのは、その部下に当たるティアナ・ランスターと

スバル・ナカジマ。

「あらあら、これは困りましたね……ん？」

全く困っていない声で周囲を見渡すと、ふと彼女の目がスバルの前で止まった。そしてその目が、驚愕に見開かれて行く。

「……驚きました。こんなところに戦闘機人がいるんですか？

タイプゼロ・セカンド………初期の戦闘機人ですね」

「!?!?!?」

その言葉に、いつも笑顔の彼女とは思えないほど顔を歪めるスバル。そして驚きで身体を硬直させたのは、他でもないのはとティアナ。

今日の前の女性は、スバルを見ただけで戦闘機人と見破った。それはどういことだろう？ 彼女の外見は人間と何ら変わらないし、彼女たちだって人間として接している。戦闘機人だと匂わせる要素など何処にもないはずだ。

「そういえば、私達の国にも戦闘機人のデータはありませんでしたね。どれ…少し、情報収集させていただきますでしょうか」

「…何を言っ―――」

「隊長さん、メビア。　お願いします」

感じたのは敵意でも殺意でも無い。

『悪寒』。

それは人間としての本能が勝手に働き、ティアナとスバルの身体を素早く横にずらした。

その瞬間彼女たちを貫いたのは目視出来ない速度で放たれた抜き手とどれほどの圧力が掛かっているのか計り知れない程の巨大な水鉄砲。　抜き手で振り切られた手はパパンッ！！と空気を破裂させ、水鉄砲に至ってはドォンッ！！とまるで大砲が発射されるかの様な音を立て空中で霧散した。

「…よけられた。　次は…当てる」

「んー、僕としてはなるべく女の子に手は出したくないというのが信条なんですがねリン姉ちゃん。　そこの所譲歩は無理ですか？」

「これは無理とか無理じゃないとかいう問題じゃないのです。　国の利益に繋がることですよ？」

「そっかー、なら仕方ないか。　ごめんねお嬢ちゃん、君の記憶――もうようっ！！」

「……………戦闘機人、タイプ・ゼロセカンド。その機体、もらいうける」

「ミダス、あの二人ならば安心ですので私達はエース・オブ・エースの相手をしましょうか」

『GUOOOON…』

「っ！」

《マスター、検索結果が出ました。目の前の女性とティアナ二陸士と戦っている少年のデータはありませんが、現在スバル二空尉と戦っているのは“特級指定次元犯罪者” ドーナ・クライオンかと》

「!?! ど、ドーナって…あの、ドーナ・クライオン!?!」

記憶に新しい、ドーナ・クライオンによる『艦隊抹消事件』。抹殺では無く抹消である。

彼を討伐すべく向かった勇氣ある艦隊が、全て虚数空間に閉じ込められた事件であり、しかもドーナ本人はただ中指を動かしただけである。しかも本人が魔力がないのを利用して、わざわざ虚数空間へ出向き金目の物だけ持ってきて人間だけ置いてきたという話もある。

勝てない。　　というか指一本動かすだけで艦隊を一つ完全壊滅に追い込むような化け物に、どうやって勝てる?　こっちが知りたいく

らいだ。

顔に冷や汗が溢れ、それを察したリンが悪魔の笑みを浮かべながらミダスへと指令を出そうとしたところで――予想外の声が割り込んだ。

「……………ん？　リン」

「どうしたんですか？」

「この…えーっと…「スバル・ナカジマ？」　そう、スバル・ナカジマ。この人、機動六課所属？」

「そうですけど…」

リンがそう答えた瞬間。

ドーナの動きが、ピタリと止まった。

「ほへ？　ドーナ？」

「…っ、がああ……」

惚けた声をだしたのはメビア。その右手には、幻術ごと粉碎し先程捕まえたティアナの首が存在する。もちろん、少し力をいれて

しまえば簡単に折れる程度の力加減で。

「……機動六課所属……ごめん、リン、メビア。わたし、帰る」

「「ええ!?!」」

「ちょ、ちょっとドーナ、どうしたんですか!?!」

「約束、したの」

そう言って空中に浮くドーナが取り出したのは、映写機型デバイスとICチップ二枚。

そして約束という言葉に反応するリンとメビア。

「『これを渡す代わりに、なのはちゃん達には手を出さないでくれへんか?』：機動六課、八神はやてからの取引。わたしはこれに応じた。だから今回は手を出さない」

「因みに、そのデータの中身は?」

「例の男に関するデータと、レリックとか言うロストログアの情報だっ」

「…、成程。流石は機動六課部隊長。機を見て、敏と言えば良いんでしょうか?」

「やるねえ、というか僕たちの目的があの人の情報だってよくわかったね？」

「…（フルフル）心の中では、命を失うことも覚悟してた。それに、わたしが名前を覚えてる」

「そういえばそうだった。ドーナが僕ら以外の名前を覚えるなんて何十年ぶりだろう…っと、ごめんねお嬢さん」

少し感銘を受けていたメビアだが、まだティアナの首を締めていた事を思い出し慌てて手を離す。

急に気管が開放されゴホゴホと咳き込むティアナに安心し、しかしなのははその件について焦りながら追求した。

「待って、その話だと…はやてちゃんは…」

「…八神はやてに感謝すること。もしこれがなかったら、もう貴方達、死んでた」

「……っ！（ぞくっ…!）」

「はぁ、約束なら仕方ないですね」

「そうだね。約束は守らないと」

巨大な骸骨の姿が消え、溢れていた禍々しい魔力も消え。

魔女は日傘を差し、吸血鬼は笑い、犯罪者はフードを被る。

「……八神はやてへの伝言。これで約束は終了。次はわたしとの約束も守ってね? って」

「待っ——」

「……それと、今回起きたこのミッドチルダでの損害はこちらの責任。」「うっ!」直すから、そのままにしておいてくれればありがたい」

「ああっ! リン姉ちゃんがうずくまっちゃった!?!」

「…自業自得…」

「ま、まさか隊長からそれを言われるなんて…正直、何か悔しいです…!」

「…どういう意味なのか、向こうで聞かせてね?」

「あっ、ごめんなさい失言でしただからやめてってきゃあああ——」

魔女の悲鳴を最後に、三人の姿は消えた。

「…っ、はあ、はあ…スバル、ティアナ! 大丈夫!?!」

「な、何とか……」

「…っ！　なのはさん…あたし、あたし、」

「落ち着いて、スバル。　大丈夫。　わたしはそんなことで貴方を嫌ったりはしない…それに、スバルはスバルだよ？　それ以外の何者でもないんだから」

「…！　う、ううっ…」

「ほら、泣くのはまだ早いよ。　早く街の復興を——」

《マスター、フランさんから通信です》

「フランから？　——もしもし？」

『な、なのはさんですか！？　は、はは、春斗がつ…！』

嫌な予感。　フランが春斗に好意を持っているなど周知の事実、そのフランが泣きそうな顔で春斗の事を言っている。

彼女の頭に、最悪の予想が浮かび——それをかき消す。

「落ち着いてフラン！　どうしたの？」

『先程から姿が見えないんです！　何処にいるか知りませんか！？』

姿が見えない？ この状況で？

彼は（なのは達視点では）魔力適性も持たないただの人間だ。それがドーナや先程の女性の攻撃に巻き込まれていたりすれば――！

「…私は分からないけど…ティアナ、スバル！ 春斗何処に行ったか知らない！？」

「…は、春斗さん…？ あ！」

「ティアナ、知ってるの！？」

「…知ってるも何も…今思い出したんですが、さっき巨大な召喚魔術を扱ってたあの女の人…あの人に連れられて出ていきましたよ…彼氏彼女とか言ってましたけど…」

『…彼氏、彼女？』

「フラン？ どうしたの？」

『と、言うことは…』

「フラン？」

『なのはさん、急を要します。早く春斗を探したほうがいいかもしれません』

「ど、どうしたの？」

言われなくても探すつもりであったが、その剣幕はただ事ではない。そう問い、帰ってきた答えは彼女の顔を蒼白にするには十分だった。

『大抵春斗は、異性と何らかの大事な話をするときその設定を使うんです。そして一週間前から付き合っている、と必ず言うんです。ティアナさん、言っていないませんでしたか？』

「た、確かに一週間前から付き合ってるって言ってました」

『その言葉を使うとき、春斗は大抵——揉め事を解決しにくくことが多いんです。そして今回の事件の首謀者との打ち合わせでの設定を使った：そうになると、どう考えてもただ事ではありません。最悪、命を落としている可能性がありますわ』

それだけ聞けば十分——いや、その先を聴きたくないというように、彼女は通信の電源を切った。

「スバル、ティアナ！ 手分けして春斗を探すよ！ いい！？」

「「了解！」」

事の次第を聞いていた魔導士達も——焦ったように、三方向に別れて春斗の事を探し始めるのだった。

＊

「…車は急には止まらないというのは知っているが、春斗は急には止まれないという言葉があることも知っておいてもらいたい」

訳の分からない事を言って現在『ミダス』が破壊した民家に埋もれる形になっているのは、どう見ても先程から血眼になって彼女達が探している男、高町春斗である。

「久々の高速移動だったもんだからブレーキが付かなかった…少し練習が必要かもしれないねえな」

ブツブツと文句を言う春斗。取り敢えずガレキをどけつつ自分の体を出そうとして、

誰かが、自分の横に降り立ったのを見て——それをやめて、寝っ転がった。

「よ」

短く挨拶をする春斗だが、当然といえば当然だが相手がそれを返す素振りは見せない。

「…何しに此处へ来た？ 此处には面白いもんなって何もないぞ」

少し挑発するような言葉を投げかけて、ようやくその男は無機質な瞳を自分へ向けた。

「『…：貴方は何故そこで寝ているのですか？』」

「さあ？」

「『…容量の得ない答えです。 やはり、貴方達はよく分かりません…』」

無表情のその男は、崩れた民家——つまり春斗の横にポスン、と座ると黙って空を見上げる。

「『一つ問いますが、よろしいですか？』」

「ああ、なんでも」

「『……貴方は…昔に、私に面識がありませんか?』」

心臓が飛び出たかと思った。

今日の前の男が言った言葉は、それほど衝撃的だった。

「『…いえ、なんでもありません。失礼しました』」

「待て。…何故俺に会ったことがあるか、って聞いたんだ?」

その言葉に動きを止めると、少し考えるような機械的な素振りから、彼は言葉を紡いだ。

「『…何故でしょうか。私も、自分自身の行動が理解できません。ただ』」

「ただ?」

「『もし、貴方がこうなる前の私を知っているのですしたら…私は貴方に、別れを言わなくてはならないかもしれない』」

ザア、と風が吹いた。

丁度、彼がガレキの上で立ち上がった瞬間だった。

「…それは？」

ウェポンマインド

「『兵器の心が第二形態に移行しようとしています。このように流暢に言葉を話す機能が消滅するかわりに、演算能力やその他の機能を向上させます』」

兵器の心に第二形態とやらがあるだけでも恐ろしい事なのに、何故か春斗の頭は冷静だった。

それに不思議でもないことも確かだ。研究所の科学者達は文字通り狂っていた。何形態あってもおかしくはない。

だが、何よりも分からないのは――

「もっと分からん。何故それを俺に言うんだ？ 最悪お前が廃棄処分になる可能性もあるんだぞ？」

「『廃棄処分』」

その部分を噛み締めるように無機質な声で繰り返した男は…ふと、こんな事を言った。

「『何故でしょう。その言葉には酷い既視感を覚えます。いえ、厳密にはこれは既視感とは言えないのでしょうか？』」

その言葉で、またしても春斗の心臓は跳ね上がった。

『廃棄処分』。

その単語は研究所にいた頃、彼らが最も恐怖し最も悲劇を生み出していた単語だ。

「『……申し訳ありません。やはりまだメンテナンスをすべきのようです。これ程までに変な感覚を覚えるとは……私はこれにて失礼します』」

少し空を見上げようとして、しかしやはり目を閉じて無機質な声で告げた男は、そのまま踵を返そうとする。

その背中を何故か見ていられなくなって……春斗は、劈くような大声で叫んだ。

「……兄貴……!」

「『……?』」

「俺たちは、絶対にアンタを倒して……アンタを助ける! だから……」

アンタも、頑張ってくれ……」

「『…、』」

矛盾しているその言葉に、返されるは無言。

そのまま彼の姿が消えてゆき、春斗もそれを黙って見つめる。

透けていく。

それは嘗て、男が春斗たちを逃がしたときの逆を見ているようで――

「『……何故でしょう。その呼び方にも、酷い既視感を覚えます』

」

「…！」

もう、間違いない。

目の前の兵器は、少しずつだが、研究所時代の記憶を取り戻しつつある――！！

そう考えた春斗の耳に、更に信じられない声が届いた。

「『…貴方はやはり、昔から変わってません』」

「…———は？」

それは、現在の彼の状況からすれば信じられないことで。

洗脳を受け、過去の記憶が封じられている状況で、『昔』などという単語が出る訳がなくて。

「『礼を言います、高町春斗。もうこの状態には戻れない。そして兵器の心のバグが目立ったこと、謝罪します』」
ウェポンマインド

「ま、待ってくれ！ 今、今アンタは———」

「『———無還者…転移↓管理者』」

フツ、と消えた。

まるで何も居なかったかのように。

何もなかったかのように。

開きかけた未来への光は、再び管理局の深き深き闇で閉ざされた。

ウェポンマインド
兵器の心の第二形態———。

絶対なる正義が生み出した闇の産物が、覚醒する時が訪れる。

そして春斗は、なのはが自分を呼びながら降下してくることに気づかないほど——呆然とし、動けなかったのだった。

“交渉（後編）”（後書き）

リンの能力は『ハヤテのごとく』の『天上院アテネ』を操っていた『キング・ミダス』をそのままパクりました。生半可な攻撃は完全無効、更には『永久金剛化』という呪いを加えてみることににより人の身体を金に変えてしまう、という設定も見事無理矢理入れることに成功しました。アテネファンの方に全身全霊をかけた謝罪を↑

天破「テストだ！ 終わりだ！ ヒャッハアアアア！」

ディール「作者の禁断症状がまた出たぞい！？」

春斗「殺してでも気絶させろ！ この前は世界が3つ吹き飛んだんだぞー！！」

フラン「な、なんて汚れた気…負の感情が完全に表に出てますわ…！」

そんなことを考えながら、少しでもワークを進める私でした。

次回、いつお会い出来るかわかりませんが宜しければ心の隅っこでもいいので、御楽しみに！

感想やメール等、お待ちしております^^ 趣味の話も大歓迎です↑ お気に入り登録もすごく励みになります。 感想も簡単にでも投下していただければかなり執筆意欲が湧いてきます。 これからもよろしく願いますー（ー）ー

天破でした（、∀、）／
～

“逃避”（前書き）

鬱です。

いえ、春斗がです。 私もですが（テスト的な意味で）。

これは、月曜日と明日は学校に行くべきではないのではないだろうか（おい

英語も数学も＼（＾Ｏ＾）／＼（＾Ｏ＾）／＼（＾Ｏ＾）／

さて、この話を読むにあたっての注意事項です。

- ・ ティアナの代わりに春斗に鬱になっていただきました。
- ・ 春斗らしくもない思考の連続ですがお気にせずw
- ・ そしてラスト、春斗の気持ちに変化が…？
- ・ メインヒロイン決定か！？（お

それでは、駄文ですがお読み下さる方はどうぞですm（　　）m

※やっぱり時系列がおかしかったので少し変更しました。

申し訳ありません or z

“逃避”

保護された春斗は問答無用で入院させられた。

入院というよりは休養と言うべきか。スバルには泣きつかれティアナは心配したんですからね、と鼻声で声をかけられフランに至っては大泣きされなにはもう二度とこんな事が無いように釘を刺された。

3日間の休養――。真っ白な病室を寝っ転がって見上げる春斗だが、その頭の中は相変わらず自分の兄の事ばかりである。

――“本当に、貴方は昔から変わってない”

まず第一に、洗脳されているはずの兄が自分の場所に自分の意思で来た時点でおかしいと思うべきだった。更にはその台詞の節々から『何故か春斗の元へ来てしまった』と、兵器の心ウェポンマインドに洗脳されているとはありえない曖昧な理由で来た事がわかる。

そしてその後続く、洗脳されているとは思えない言葉。あれはまさか、春斗――いや、自分達への警告に来たのだろうか？『これまでの自分とは別格であるから、もう手を出すな』と。

しかしどうして？あの時だけ洗脳が解けかけていたのか、もしそうだとしたら春斗はある意味決定的なチャンス逃してしまったの

かもしれない。洗脳が解けかけているのならばどうにかして解除、またはデータを作れたかもしれないからだ。

「…俺の責任、だな」

彼らしくもない言葉。

そもそもフランにのみ分かるように伝えたと言え、あの魔女の誘いに乗ったのは自分。もしあれをごまかし続ければ、何か結果が変わっていたのかもしれないが…。

所詮は結果——なんども自分に言い聞かせてきたはずの言葉が、今回はかなり重く感じてしまう。

はやての勇気ある行動でなのは達は無事だった。しかし、これでもしはやて、なのは、フェイトの記憶を盗られ、更にあの状況になっていたとすれば？

確信があった。

彼らは全く躊躇うこともなく、全員を殺すだろう。

それこそ誰でもいい、彼らが指一本振るだけでその戦いは終わる。

それがドーナ・クライオンであつたら、恐らくこの世界に存在した欠片も残さず。リン・アルデイスであれば、良くて全員金剛化、

悪くて骨まで残さず粉碎されているだろう。 実際、春斗が受けたあの『ミダス』の拳は普通の魔導士ならば骨や内臓がぐしゃぐしゃになって吹き飛んでもおかしくはない程の威力だった。

「…何やってんだろ、俺」

結局、自分は完全に迷惑をかけていた。 兵器であることを考えずにしても、自分はどう考えても部隊の足を引っ張っていた。

そう考えた自分の頭に手を持っていき、ポリポリと髪を掻く。

何を今自分は考えるべきで。

自分はこれからどうすればいいのだろうか？

無限に続くかのような広大な砂漠を想像した。

どっちに行っても餓死^{けっか}が変わらないような感覚。 自分で馬鹿だ馬鹿だとは言っているが、兵器として造られた彼らの頭は一般と比べればかなりずば抜けている。 しかし、時にはその頭の良さがこのような連鎖を生み出す事もある。

負の思考は負の思考を呼び、彼の未来を残酷に彩ってゆく。

砂漠でオアシスが見えたと思ったら、蜃気楼だったため心が折れた——とでも表せば良いだろうか。

「…っ、」

選択を間違えてしまったのだろうか？

やはり、自分はここにいるべきではないのだろうか？

あの時、あの魔女の誘いに乗って居れば彼女たちが苦しむことも無かったのではないか——そんな想いがのしかかり、彼の心は既に潰れかけていた。

無還者が『感情』を封印された理由が分かった気がする。　こういう風に、兵器には無駄な事を考えないようにするためだろう。

人を殺すことが日常の生体兵器にとって、感情はとてつもなく邪魔になる。　罪悪感も、何もかも必要無い。　いちいち人を殺すのに罪悪感など感じていては何も出来ない。

見かけ以上に彼の心は、繊細で、敏感。

ドーナが言っていた、『護るべき人間がいる者は弱い』——彼も、その中の一人だった。

昔は、そんなものなかった。　ただ殺せば殺されなかったし、言われれば誰だって殺した。

でも今は違う。 大事な家族がいる、後輩がいる、幼馴染がいる：彼は背負い過ぎてしまった。 そして昔を懐かしく思ってしまった自分に、再び絶望する。

現実から逃げ、逃げて、逃げて――

もう何も聞こえ無くなる様な錯覚に陥った瞬間、矛盾するかのよう
に誰かの声が聞こえた。

＊

「ドーナ、感想は？」

「考えるだけ、無駄」

さて、此方はアルデイスにある王宮の映写室。 そこで八神はやてから譲り受けたデータを再生し、王族警備軍十王族で何か情報がないか調べていた。

そして上の会話は、そのデータの一つである『管理局強奪虐殺事件』の映像でのドーナの感想である。

「その心は？」

「…全く局員に感知できない程の侵入スキル、更には軽くSSSランクはある魔力と超越した空間把握能力と掌握能力。　どう考えてもこの記録デバイスだけ壊し忘れたとは考えられない」

「僕も同意見」

「私事です。　…やはり、この襲撃も全ては台本通りであった、と見るのが妥当ですわね」

「…、」

自分の妹と弟、そして王族警備軍の隊長が同意したのを聞いて目を閉じて情報を整理する。

「うん、あたしも同意見。　面白くないわね…一体、この人を操っている管理局の上層部は何様なのかしら？」

「神とでも思ってるんじゃないか？　あの者達ならばその程度思っ
ていそうだ」

「違いないわね」

自嘲するかのように口を曲げると、その映像を止め、続いて再生す

るのは現在『兵器』について分かっていることだ。此方は自分達の知っている情報も加えているので、ある意味管理局の上に行くデータである。

果たして、データが開かれた。

「…『イマジンエネルギー創造魔力』ってさ…反則じゃない？」

「私としてはノーモーションでSSランク砲撃を撃ったことが信じられない。我々ですら2〜3秒の溜めは必要だぞ？」

「人間なら、ね。でもこの人は非道な実験結果生まれた『被害者』兵器よ。この位、不思議じゃないと思っという方がいいわ」

そのアルデイスの王、ロザリーが真剣な顔で——しかし、少し微笑みながらそう告げる。そしてそれを見て、自然と全員の顔つきが変わっていく。

敵は未知数にして強大。少なくとも、この国での王族クラスは存在すると見積もっても少ないと言えるほど。

だからこそ狂った者（主にドーナ）は戦いを求め、野次馬根性溢れる者（主にメビア）は色々と画策し、知の探求者である者（主にリン）はその男の情報を求める。

国の未来など、楽しみの前では彼らにはどうだって良かった。

王女であるロザリーも、そしてこの国の住人もその例に漏れず。

彼らは、やはりどこまで行っても幻想種であり、妖怪であり、人間じゃないモノ。

楽しみたい、壊したい、遊びたい、戦いたい――そんな欲求を叶えるべく、ロザリーはその身長に似合わない邪悪な笑みを浮かべながらとある地図を表示し、「さて、此处で一つ吉報よ」と告げた。

「いろいろと調べてく内に、此处で何かオークションをやることを突き止めたの。でね、その場所にあの機動六課とあの人が追ってくるロストログアであるレリックが出てくるかもしれないですって」

何人かが反応を示した。それを見て更に笑みを邪悪に深めつつ、ロザリーは告げた。

「で、ちょっとこのオークション、あたしの気になるブランドが出てくるらしいのよね」

言いたいことなど、皆直ぐに理解した。

既に目を輝かせている者までいる。そして、王女は邪悪な笑みを引っ込め、いつものニコニコ顔で、提案した。

「あたしの買い物ついでに、付いてきたい人？」

答えなんて、そこにいる皆決まっていた。

三日月状に捻じ曲がった口を晒しながら、愉しそうに彼らは話す。

祭りの場所はホテル・アグスタ。

自分達の愉しみがそこにあることを、期待して。

＊

「誰だ…」

『…誰だ?』

真っ暗な世界の中——いや、春斗の精神世界の中とも言おうか。

そこで何をすることなく、何を見ようともせず座っていた春斗の背に、何者かが現れた。

『俺は俺さ。 高町春斗だ』

「…意味が分からん。 俺はひとりだぞ。 アンタは一体――」

なんともしがたい気味の悪さを感じて、後ろを振りむいた春斗は――硬直した。

そこにいたのは紛れも無く自分だった。

そう、その顔に浮かべている三日月状の笑み以外は――全て。

『残虐』

『春斗』は告げる。

『残虐、孤独、憤怒、絶望、非情、憎悪、狂気。 コイツラは人間の奥底に隠れた闇だ』

笑みを浮かべたまま、そしてその目で春斗を見据えながら。

『自分で言っていたが、ずいぶん丸くなっちまったもんだなあ、オリジナル』

此方に歩いてくる。

動けない。

彼は、自分と同じ姿の『何か』から、目が離せなかった。これが例え夢でも、幻でも、誰かのいたずらでも。本能が逃げることを拒否していた。

『…研究所の時の、残虐さと非情さは何処へ行った』

彼は静かに呟き、そしてその足で春斗を蹴った。

「グフツ…」

『自分の運命を笑いながら書き換える人間に向けての憤怒や憎悪は何処にやった？』

蹴り倒し、襟首をつかんで持ち上げる。春斗は身動きもせず、それをただ受け入れていて。

その目に生氣は無く、ただそこにあるのは何処にでもいそうなただ

の人間そのものであり。

その様子にため息をつくとき、“春斗”は春斗を睨みながら言った。

『…テメエは忘れたのか？ いや、忘れちゃったんだろうな。 研究所にいたときの、孤独と絶望を』

「…違う、忘れてなんか……」

『ならば、何故高町なのはへ殺意を持たない』

その言葉は、氷のつららの様に春斗の心へ突き刺さり、悪寒を齎した。

『何故ティアナ・ランスターへ敵意を持たない。 何故フェイト・T・ハラオウンに憎悪を持たない』

「…、」

『テメエは、背負いすぎた。 だから忘れた。 “大切な物”に押し入れちまって、深い深い引き出しの奥に仕舞っちゃった…嘘とは言わせねえ。 最初、テメエは高町なのはが管理局に入ったと知ったとき、そしてリンディ・ハラオウンに初めて出会ったとき、なんて思った？ 何を感じた？』

「…やめろ……」

『クロノ・ハラオウンに出会ったとき何をしようとした？ フェイト・T・ハラオウンに握手を求められたとき、何故最初は応じようとしなかった？』

「…やめろって言って——」

『教えてやろうか。 その時俺は——お前は、考えたはずだ。 どうやってコイツ、殺そうか。 ってな』

「——、」

春斗の何かが、崩れた音がした。 それほど、今の彼にとってその言葉は重く、鋭くて——

『相手が管理局ってだけでどうやって殺そうか考える——それが高町春斗——存在だったはずだ。 フェイト・T・ハラオウンとの握手を拒否したのは、手なんか握ったらその拍子に奴を殺してしまいそうだったからだろう』

「っ、あ…」

『クロノ・ハラオウンに出会ったとき、無意識にお前は頭を吹き飛ばそうとしたっけな？ なんとか止められたみてえだが。 リンデイ・ハラオウンと会った時はおっそろしい程の殺意をまき散らしたっけなあ。 で、高町なのはに至っては——』

「——」

最早、その顔にいつもの高町春斗は浮かんでいない。

恐怖。

記憶の底に閉じ込めた筈の、自分への絶望という感情が、頭を擡げて、彼を喰らおうとしている。

彼はそれを止められず——そして彼は、彼を鏡に映したような何かの口から、絶望が入った引き出しの鍵を開けた。

『ある日の夜、忍びこんで殺そうとしたよな？　しかも一家諸共、口封じの為、そして自分の憎しみをぶつけるために』

「：あ、っ、違——」

『何がちげえんだ。　そうだろう、あの時のお前は見ものだったぜ。　全く躊躇することもなく眠っていた高町なのはの部屋に入って、その顔に向けて拳を振り上げて——』

「っ、あああああ！！」

『!』

壊れた。その重みに耐え切れず、彼は遂に人格を作るのを辞めた。力づくで自分の襟を持つその手を払いのけ、獣の如く後ろに飛び跳ねると、右手に強大な光が収束していく。

「うううう…ああああ」

『潰れたか？ ククク…いいぜ、撃ってみろ。俺はお前だ。受けきってやるよ』

ガードする様子も無く、両手を広げる『春斗』。その顔にはやはり笑みが張り付いている。

しかし、今の春斗にはそれを見る判断力も、思考能力も失われていた。

現実逃避という生優しいものではなかった。彼はあれ程自分が言っていた『結果』からも逃げていた。

目を背け、そちらを見ようとせず、しかし現在を楽しんでいた。

なんて自分は愚かで、最低なんだろうか？ 『それ』は夢だ、悪夢だと思い込み、心の奥底に封じ込めて、自分はのうのうと今を生き

て暮らしていた。それを許せるほど、彼は自分に対して寛大ではないし優しくは無い。

罪の意識は、時に罪人を改心させるが時にはその心をぶち壊す。今の春斗が、そんな状況だった。

「パニッシュ——」

消失の概念が、抵抗する気配の無い『春斗』へと——

「インパク、トオッ!!」

とてつもない光の渦が、同じ顔、同じ姿をした者に向けて解き放たれた。

『…本当に、忘れちゃったんだな。オリジナル』

光の渦を見ながら、先程とは打って変わって、悲しそうな顔で『春斗』は告げる。

『罪の意識に押しつぶされて、大事な支えまで忘れちゃったのか?』

——大事な支え？

その言葉が、頭の中が真っ白の春斗の頭に響きわたる。

支え？

ささ——

——“春斗、大丈夫…わたし、ずっと、春斗のそばにいるから。
兄妹だから、痛いのも、つらいのも、楽しいのも、半分こだよ？”

『！』

再度、“春斗”の目が見開かれた。

光の渦が、消えた。 いや、霧散した。 自分を飲み込むべく放たれた光が。

『んだあ…？ って…アンタは…』

オリジナル
春斗の方は、何もしていない。

しかしその身に、小さな誰かが寄りかかっていた。 いや、春斗の手を握って、肩を抱いて、包み込んでいた。

白い服を着た、ポニーテールの少女だった。

＊

「…、」ガタッ

「？　なのはさん？」

管理局機動六課内にある仕事部屋——その中の一室でともに仕事をしていたフラン、なのは、フェイトが、突然立ち上がったなのはを見て驚きの目を向ける。

「なのは、どうしたの？」

「…、分かんないの」

口調が昔に戻っている。　それ程驚くことがあったのか？　と顔を見合わせて首をかしげるフランとフェイト。　しかし不思議な顔をしている二人がまるで見えないかの等に、彼女は自分も分からないうちにギュッと自分の手と手を組んで、何かを祈っていた。

「…春斗………！」

＊

『…、いや、本人じゃ無えな。　そうか、アンタはオリジナルが生んだ幻影か』

『…：知らないし、関係ないの。　そんなのは』

『そうだな。　確かに今は関係ない…で、どうするんだ？　オリジナルが生んだ幻影って事は、テメエは覚えてるんだよな？　そのオリジナルがあんたを殺そうとしたことを。　恨みを晴らしたくは無いか？　怒ればいいじゃねえか。　殺せばいいじゃねえか。　きっと愛する姉の手に葬られればオリジナルも満足だろ』

『怒る？　殺す？　恨む？』

本当に不思議な顔で、少女は首をかしげる。

『そんなの、春斗に対してわたしは思ったことないの』

『…なん…ッ？　ありえねえよ、人間なら一度でも他の人間に対して恨むとかの感情はもったことがあるはず…』

『うん、そうだよ。　フェイトちゃんともたくさん喧嘩したし、はやてちゃんともたくさん喧嘩した。　春斗とだって殴り合ったこともあったなあ』

『なら怒ったことはあるんじゃないか』

『違うの。わたしは春斗に対して怒ったことは一度もない、けど自分に対して怒った事なら何度もあるの』

『自分に対してだあ？』

唄うように、少女は目をつぶって“春斗”へと言葉を紡ぐ。

『うん。ちゃんと、自分の考えを伝えられない自分に対して。

想いを伝えられない自分に対して。それが表に出ちゃうと、あんなふうになっちゃうんだけどね？』

その答えにあっけに取られるようになる“春斗”。しかし目の前の幼い少女の目には、その言葉が嘘であることなど一切感じさせない光がある。

所詮は幻影だ。春斗が造り出したただの幻かも知れない。だが、“春斗”はその光を無視することはできなかった。

『…私には眩しすぎる光です……』

『?』

『いや、なんでもねえ』

ふと、口調も声も全く変わった台詞が流れた気がして、首をかしげる少女。それを見て首を横に振り、しかし不敵に笑って“春斗”は言う。

『だが、いくらアンタがそう言おうと、オリジナルの心は既に崩壊寸前だ。どうするっつーんだ？』

『そんなの関係ない』

またしても予想外の言葉に、目を白黒させて少女を見る“春斗”。少女はそれが当たり前のように、笑顔を見せながら言った。

『わたしと、春斗は兄妹だから…辛いのも、楽しいのも、悲しいのも、全部、全部半分こって約束したから。そして、春斗もわたしに約束してくれたから』

真っ暗な世界に、罅が入った。

それは彼女達を起点として、全体に広がっていく。

『わたしは春斗に何も聞かないし何も言わない。でも、わたしは春斗を信じてる』

言葉と共に広がる、闇の世界に起きた異変。　罅が入った場所から漏れ出すのは、真っ白な光。

『無条件で…人を信じられるっつーのかよ？　ありえねーよ！　人間にそんな事が出来る訳がっ！！』

『わたしが、その何よりの証明だから』

“春斗”の叫びすら、その小さき少女はたったひとつの言葉で打ち消す。　罅は広がり、そしてそれは“春斗”の方向にまで伸びてゆく。

『あなたも、きっと春斗なんだよね。　わたしを信じられない心とかがいっぱい集めてできた春斗。　でも、わたしはあなたの事も信じてる』

『――っ！』

『だって…春斗は、春斗はいつだって…』

天使のような笑顔で、彼女はその小さな手で春斗の手を握りながら、言った。

『わたしの、世界で一番大切な弟だし、世界で一番大好きな人だか

ら
』

空間が、はじけた。

“春斗”に存在していたあの邪悪な笑みは既になりを潜め、その顔にあるのは驚愕。

この空間は、春斗の殻を示していた。

誰とも干渉されることのない、精神世界の壁。人の精神世界に強制的に入る術など、世界で数人しか持たぬ秘術。しかし目の前の幻は、その殻を内側から崩してしまった。こんな事がありえるのだろうか？

少なくとも、“春斗”が知っている人間でこのような事をする者はいない。

ゆっくりと、何か吹っ切れたのか自らのオリジナルが立ち上がる。

自分は彼に酷な事をした。自覚はある。ならば今回ばかりは何もせずに消えるべきだろう…そう考えた“春斗”は、静かに目を閉じた。

「何目をつぶってんだ？」

笑った声が聞こえたのは、それから時間は掛からなかった。

『…消せよ。 お前の殻は消えた。 ならば俺はもう用済みだ』

「変なことを言うんだな。 テメエはさっき自分で言っただろ？
俺はお前だって。 そしてなのは姉も言ってたしな」

——お前が俺なら、俺はお前を消さない。

そう続けた春斗の顔に、苦しみは無かった。

この短い時間でどんな葛藤が存在し、どんな思考があったのか。
それは“春斗”にもわからない。

ただ、その顔は憑き物はとれたかのようにすっきりとしていた。

「俺さ、もう先を見ることを辞める事にする」

自分の生み出したであろう幻の頭を撫でながら、彼は笑顔で話す。

「先ばっかみても何も分からねえし、何も出来ない。 俺は怖かったんだろ？ 最悪の未来が」

それは一種の現実逃避と言えるのかもしれない。

だが、この短い期間で彼が成長したのは伺えた。　そう思い、“春斗”も釣られて笑う。

「だから、俺は今を生きてみるよ。　何があるか分からねえけどな」

『それでこそ、“俺”だ』

ククク、と笑う“春斗”は、右手の親指で自分の後方を示した。

『行けよ。　勝手口は向こうだ。　もう会うこともねえだろうけどな』

「ああ、ありがとよ」

『それと忠告な。　そろそろ自分の感情に気づいたほうがいいぜ』

「？」

『お前、自分が人間じゃねえからって異性を好きになることをためらってやがるな？』

「！」

『少しでもいい。　あらゆる概念——『義姉』『幼馴染』『後輩』『悪友』『兵器』『人間』その他諸々をとっぱらった目で“大事な人”を見てくるといい』

「？ …意味がわからんが、了解した。 ありがとよ、何から何まで」

『礼には及ばねえよ。 俺が、俺のために、勝手にやったことだ』

「…、」

その言葉に薄く笑って、春斗はゆつくりと“春斗”の横を通過する。扉は直ぐに見つかった。 真っ白な世界の中、真っ黒なトンネルのような入口がある。 ちよつとこの中に入ることに躊躇いを感じる春斗だが、悩んでも仕方ないか、と言うような感じで一步を踏み出す。

ふと、後ろを振り向く。

“春斗”もまた、春斗とは別の方向——少女のなのはが微笑む場所へゆつくり歩いていた。 しかしその先に出入口はない。

彼は本当に、今日、『この時の為だけに準備していて』くれていたのだろう——いや、もしかしたらただの保険のつもりだったのかも知れないが——それでも全く、『彼』は恐ろしい。 そう思いながら、春斗は大声を出して彼を呼んだ。

「おーい！」

『?』

ピタツ、と“春斗”の身体が止まる。その機械的な動作に疑問も持たず、春斗は叫び続ける。

「ありがとよ！ アンタの事だ、恐らく全部の兄妹にこんな仕掛けをしてあるんだろうが…もう心配ねえぜ！」

『…、』

彼は既に、“自分”に話しかけてはいなかった。

しかし彼は、楽しそうに言葉を続ける。

「もう、迷わねえしもう逃げねえから…だから、まあ気長にまってくれ！ 絶対アンタの事、助けるから！」

『…』

「そしたらよ、兄妹全員でゲームでもパーティーでもしようぜ？ なあ——兄貴！」

ザア、と真っ黒な煙が吹き荒れた。

“春斗”の身体から、出てきた物だった。

「『——そうですね』」

それもしかしたら、春斗が生んだ幻想なのかもしれない。彼の
思考が生んだ、希望と言う名の幻。

でも。

その時、彼は確かに——

「『楽しみに待ってますよ？ ——春斗』」

一瞬だけ、微笑んで。

そして次の瞬間、春斗の意識は急速に浮上した。

＊

「『…!』」

『ドウシタ、主』

ふよふよを浮遊する骸の中央に、真っ黒なドレスに返り血を浴びて
真っ赤に染まった男が、ふと空を見上げる。

空は、相変わらずの青空だ。　麗らかで、清らかで、何処までも青
い。

「『…いえ』」

しかし彼は、それを心の中に仕舞った。

兵器に、『何かが起こった気がする』などという曖昧な考えは許さ
れないから。

「っ…たず、け…」

まだ、息のある男がいた。

それを探知した彼の目が紅く染まり、右腕がその男に向けられた。

「『——警告』」

今日も麗らかな青空に、甲高い悲鳴と耳を劈く爆撃音や斬撃音が交差する。

その日。

第6管理世界 アルザス少数地方民族『ル・ルシエ』。

“壊滅”。

＊

「…、ん…」

「春斗！ 大丈夫！？」

「春斗！」

聞いたことのあるような声。 いや、どう考えてもそれは自分の義姉と幼馴染の声だった。

ゆっくりと目を開けながら、彼女達の話聞く。

「様子を見に来たら、いきなり汗だくで唸ってたんだよ？ はあ、びっくりしたあ…」

「本当ですわよ。 全く、心配かけさせて…」

「ああ、悪い悪い。 ちょっとした夢を…」

ゴシゴシと目を擦って、眠気を覚まししながら目の前にいるはずの何時もの義姉と幼馴染を見る――

そう、何時もの…変わらない、筈だった。

「…んー…?」

「どうしましたの、春斗?」

コテン、とフランが首をかしげた。それに合わせて彼女のトレードマークの一つであるツインテールが揺れる。

春斗の方とは言えば、別に調子が悪いわけでもなければ異変が起きたわけでもない。

ただ、彼女たちを思ったときにこう考えただけだった。

(この2人、こんなに…美人だったけ?)

もう一度目をこする。

見る。

やはり変わらない。

そういえば、“春斗”の姿をした兄が言っていた。見る目を変えろとか何とか…。

あれは夢だったのだろうか? いや、あれ程リアルな夢も珍しいものだが…。

「春斗、どうしたの？　なんか呆然としてるけど…」

なのはも心配したのか、少し身体をこっちへ寄せてくる。整った顔と女性特有の甘い香りが漂ってきて、春斗とあろうもの思わず鼓動が高鳴った。

（って俺は何考えてんだ！！　相手はなのは姉とフランだぞバーロ
ー！　落ち着け、落ち着いて素数を…あれ、素数ってなんだっけか）

少しパニックになったのか、完全に兵器としての演算能力もついて行っていない。　というか兵器云々を抜きにしても素数が分からないのは少々まずい。

しかしこの間わずか0.2秒。　少し気づかれない程度に深呼吸をし、自分の義姉の顔を見してみる。

「？　春斗？」

見ていくうちに、やはり認めざるを得なくなった。

（…畜生……可愛い…ッ………！！）

今まで感じたこともないしというか考えたこともなかった、異性の顔。

あの戦いが原因か、それとも自分の中で何かが変わったのか――よくよく見てみると、フランもなのは可愛い上に美人であった。

何故これまで気付かなかったのか分からない程に。

しかし、だが今はそんな事を考えてる場合ではない。いや、今だからこそ考えるべきなのかも知れないが、それはまあ置いておこう。

「いや、何でもない。なんでもないから落ち着け俺」

「いや、大丈夫春斗？ 何か慌ててるみたいだけど」

「（スマン、アンタらが原因だ） いやいや、俺は至^{ちぎれる}って冷しえ（ガリッ）ぎゃああっ！ 舌がひぎれるかのようにいひゃいっ！」

「は、春斗！？ 私、春斗が舌を嚙んだところ初めて見ましたわ…」

「はあ、はあ…大丈夫だ、問題ねえ…で、改めて…なのは姉…ちよつと、いいか？」

「え？ うん、別に大丈夫だけど…」

慌てに慌て、何とか落ち着いた春斗は改めて椅子に座ったなのはの顔を見る。

どうしたのかな、と首をかしげるなのはやはり美人で、何故こうなったのか自分自身分からない。　が——こういうのも、悪くないのかもしれない。

ただ、色々と言いたい言葉はあるのだが、改めて彼女の顔を見ると何故か言い出せない。　柄にも無く緊張しているのか、と自分へ向けて少し笑うと、なのはがムツとしたように、

「春斗？　わたしの顔がそんなに面白いかな？」

「あー、いやいや、違うんだ。　ちよつとな…なのは姉、スマン」

「へ？」

そういうと、春斗は突然力を抜いて、なのはの方に倒れ込むように身体をあずけた。

まあ、自然と——春斗の身体が直接触れて、しかも春斗の手が首へ回ってるのだから、はたから見れば春斗がなのはに抱きついたようにしか見えない。

「えっ、ちよつ、春斗！！？　／＼／＼」

なのはの方からしてみれば、男性に直接、しかも突然抱きつかれたことは無いため顔を真っ赤にしてオロオロとしている。　相手が義弟と言っても恐らく彼女はそんなことは忘れているだろう。

フランもこの突然のイベントに驚いているらしく、取り敢えず手頃な鈍器で春斗の意識を取り戻させようとしたときだった。

「だ、大丈夫！？ いや、気持ちはあるの、その、えと大事にしないで、ちやと思うんだけど、その――」

「ありがとう」

心の籠った、お礼だった。

思わず沸騰していた頭が急速に冷えていき、フランの方も冷静になって春斗を見る。

「ずっと俺が忘れてた…約束を、守ってくれて…ありがとう」

その言葉に、なのはの顔が驚愕に彩られ、そしてフランの顔が疑問に満ちていく。

約束というのがなんのことなのか、彼女にはわからないからだ。

そして、その事について尋ねようとしてなのはの方を向いて――
思わず惚けた。

なのは笑顔が、まるで聖母のように――優しく、包容力のある――輝かしくも奥深い、とても普段通りなら見れないであろう笑顔だったから。

「わたしも、ありがとう」

彼女の口からも、言葉が紡がれていく。

「俺は何もしてねえよ？」

「ううん、春斗はしっかりとわたしの約束を守ってくれてる」

その声はどこまでも優しく、どこまでも柔らかい。

彼は、春斗は、彼女が最初の希望と最初の願いを与えてくれた人だから――

「ありがとうね。わたしの傍に居てくれて…春斗？」

「……………（くー…くー…）」

伝えたいことを伝えたのか、彼はあっさりと眠ってしまった。疲れてたのかなとクスリと笑って、自分の肩に乗った春斗の腕を丁寧に降ろすと、そのままベッドに寝かす。

その寝顔は、フランですら見たことがないほど——心地よくて、綺麗な寝顔だった。

「あはは、寝ちゃったね」

「…」

「それじゃあ、わたしは仕事に戻るけど…フランは？」

「あ、私はもう少し此处で…」

「うん、ありがとう。何かあったら呼んでね」

「わかりましたわ」

そう言って扉から出ていくのは。自動ドアがカシュン、と閉まったのを確認して、フランは目を腕で覆いながら天井を仰いだ。

「…勝てませんわね、これじゃあ」

幸せそうな春斗の寝顔、そして幸せそうなのはの笑顔。

自分は、これまで一回もこんな心地よさそうな寝顔を見たことはな

い。それはつまり、自分では春斗に幸せな夢すら見せて上げられない――。

「……。はあ…」

恋煩いも、此処まで来るとそろそろ危険ではないだろうか？ そう思っ、ため息を付く。

でも、考えていたって何も始まらないのも確か。 こういう時は誰かに相談するのもいいかもしれない――そう思いながら、彼女も仕事に戻るべく部屋のドアを潜って、外へ出た。

その心配が杞憂だったと知るのは、意外にも早い事も知らずに。

様々な想い、様々な陰謀、様々な種族が交錯する中――

春斗が丁度退院を許可された当日、二日後に行われる予定の『ホテル・アグスタ』内で行われるオークション――その警備命令が、下った。

“逃避”（後書き）

天破「春斗の思考が1800。変わっちゃったwww」

春斗「…」

なのは「春斗、どうしたの？」

春斗「いや、その…なのは姉、少し近いというか…何というか…」

なのは「え？ いつも椅子ってこの位だよ？」

春斗「…なん…だと…」

天破「オイ誰か鈍器か拳銃が無還者連れてこい。あの天然バカッ

プルを粉々に殺害してやるんだ」

ヴァイス「任せろ」

さて、次回からようやくアグスタへ向かいます。 戦闘スタート！

主に某ドSとナンバーズが活躍する予定ですw

さて、セリフですが一部お見せしましょう。アグスタ編全部を通して、何処かに登場するはずの台詞です。

―次回予告―

なのは「春斗、この服どう？」

春斗「…に、似合ってるんじゃないか？（俺は何故こんな服を…）」

???「へえー、結構いい品物が出てるっぽいじゃない。…あら、

あれは…？」

???「匂う…これ、血の臭いだ…♪」

???「『警告…第2章11項。 地に堕ちる紅き十字架』発動

準備開始。 ↓完全発動まで残り5秒』」

??? 「はぁ：はぁ…………ごめ：みんな…」

??? 「『警告…第1章23項。 ↓無還者の行動を阻害する生命体の存在を確認。 ↓同時に本体への身体的な拘束とそれに伴う思考能力の遅延を確認。 ↓本体の拘束解除及び思考能力の回復を最優先。 ↓その後行動をを阻害する生命体の排除へと行動目的を変更します』」

??? 「…お互い、変わった上に成長したのう…………久しぶりじゃな、兄上？」

宜しければ御楽しみに^^

感想等、ありがとうございます。 励みになります^^ 宜しければ一行でもいいので投稿してくださればと思います。

ヴァイス「ぐはぁ!？」

天破「ちょWWおまWW何がどうなっってこうなったWWW」

それでは^^

天破でした（、^、）／～

“集結”（前書き）

ホテル・アグスタが始まる二日前の話。

さあ、チートも兵器も管理局も集う祭りが次の話から始まるぜ☆

今回の話を読むにあたっての注意事項です↓

- ・ 結局春斗のメインヒロインは誰なんだろうか
- ・ 無還者が強化されとるがなw w w
- ・ うん…登場人物、多くねえ？
- ・ 謎の少女（仮）登場。 あれ、この風貌は…？

えと、次の話からアグスタ事件始まるのでこの次の日は飛ばします。
…何か、時系列がおかしい気がしなくてもありませんが置いておきま
しょう。

それでは、こんな駄文を受け入れてくださっている皆様に無上の感
謝と喜びを捧げつつ、もしよろしければ先にお進みくださいませm

〔 〕 m

“集結”

ホテル・アグスタ――

森の中に存在する豪華なホテルで、良くオークションや大々的な式が行われることもある目立つ建物である。

そして春斗が退院して二日後の事、そのアグスタにて大きなオークションが開催される事が分かっている。

もちろん表はただの大きなオークションなのだが、当然表には裏がある。ドサクサに紛れて管理局にとっての違法品――質量兵器や危険認定済みのロストログアを取引する輩が出てくるのだ。

しかも今回のオークションには管理世界の要人達や管理局の“上”の人間も来る。取引される物も違法品では無いにしろかなり高価な物が多く、そのままでは奪われたり暗殺されたりする可能性大である。

という訳で――

「成程、だから俺達が警護する訳になったわけだな」

「うん。結構重要な任務だよ」

場所は管理局機動六課の廊下。

話しているのはエース・オブ・エース高町なのはとその弟高町春斗。

彼は退院したばかりである。

一応形式上は部隊に『戦闘に置ける負傷』という事で片付けられているので、隊員の義務として部隊長に報告しないとならない為だ。

……その部隊長がどういう人間なのか知っている彼としては、正直面倒なことこの上ないのだが。

「おや、今日は綺麗な空だななのは姉。少し街へ出たいものだが」

「今日、午後からずっと曇りだよ？」

「そういえば腹が減ったなあ……ちよつと飯食いに行ってきた方がいいか？」

「さっき牛丼三杯とカツ丼五杯と親子丼五杯食べたよね？ 御陰でお給料が大半吹き飛んじやっただけ……」

「おっと、急に尿意が……ちよつと失礼」

「その言葉、二分前に聞いたけど？」

「…」

「…」

「どうしろってんだよ!!」

「まず逃げる前提で話をしないほうが良いんじゃないかな!？」

相変わらずの天然夫婦漫才きょうだいだった。

「はあ…いつの間にか部隊長室の前についてるし…相手ははやて何だから適当にやっておけばいいじゃねえか…」

「いや、それじゃあ他の人に示しがつかないし…ほら、入った入った」

「へいへい」

コンコン、と扉をノックする。 「ええよー」と声が聞こえたと同じ時に扉が開いた。

「八神部隊長、高町春斗です。 一応地獄の淵から復活して参りました」

「怖い事言わんといてーな!？」

「取り敢えず夢魔族が可愛すぎて半端なかった」
サキユバス

「ちょっとその話について別室で聞いてもええか？ 主に夢魔族の胸の大きさに付いゝ」

「はやてちゃーん…乗せられてますう…」

「はっ！！？ こ、この私を手玉に取るとは…春斗、恐ろしい子…」

「普通にボケを振ったら過敏に反応したのはテメェだろーが」

閑話休題。

「まあ、何はともあれ無事で良かったわ…で、なのはちゃんから詳細は聞いとるな？」

「ああ。 ホテル・アグスタでオークションが行われる、という所から先は聞いてない」

「春斗、それは断じて聞いとるとは言えへんからな？」

「というかわたしの話無視してたの！？ 酷い！」

「いや、護衛とか言う時点で俺の専門じゃねえし…俺は寧ろ家でゆったりしてるのが似合ってる。 はやてじゃねえが、いつかは俺も結婚する相手、ってのを探したほうがいいのかねー」

「（ぴくっ）は、春斗？ このタイミングでその話題は…もしかして…」

「…、」

「？」

「…いや、お前は無いぞ、はやて」

「……………。（。ダ。）。」

一応好意を持っている相手からの『お前は無い』宣言は、真っ直ぐで尚且つ鋭利な刃となって彼女の心に深刻なダメージを与えた。

机に突っ伏し落ち込むはやてを見ながら、しかし春斗ははやての事を見ながら言う。

「……………しかし…何だ、うん、可愛い事は認める」

「？ ……何か言うた？」

「いや、何も——」

「…にゅふふ、はやてちゃん、春斗さんは今ですね（モガッ）」

「（何でも好きなジュース10本でどうだ）」

「（交渉成立ですう♪）」

「いえ、ごめんなさい。 気のせいでした」

「そう？」

あの“夢”から、確かに春斗の目は変わった。

異性を意識するようになったのだ。

恵まれすぎて気付かなかったのか、それとも気にすることがなかったからなのか――自分の周りが完全に美少女だらけだったと気づいて頭を抱えたのは実は昨日の事だった。

当然『自分の事を好きな異性』がいるという事までは気づいてないが、ずっと見てきて気付かなかった異性それぞれの魅力や個性が一気に見えてきてしまい、彼は現在進行系で混乱中だった。 先程のように、不用意に可愛いなどという単語を出しては誤魔化すことも珍しくはない。

「いや、まあ話が逸れたんやけど…要は、『オークションに危険な奴や危険な物があるかも知れへんから捕まえてお持ち帰りするでー』ってことや」

「はやてちゃん…流石にその説明はどうかと思いますう…」

「成程、理解した。つまりオークションに来る危険物その他を捕まえてなのは姉がお話してフェイトさんが取り調べするんだな？ふっ、この事件…敵の遺影が今から見えるようだぜ……」

「同感やな…」

「いや、それで理解しちゃうんですか！？ はやてちゃんもそこ領いたら…っ、悪寒が…ちよっと外に出てますう」

「…春斗、はやて、それどういう意味？　というか私のお話とフェイトちゃんの取り調べ、どう違うの？」

「リインめ、逃げやがったな…!!？　よしはやて、説明は頼んだ。俺はちよっと自分探しをするべくミッド街の食べ歩きに行ってくる」

「待てや春斗。この戦い、アンタが逃げることは許されへんで」

「だが断る。俺は！　今！　風になるっ!!！」

ダッ（春斗が身を翻して部隊長室の扉へ走った音）

「はやてさん、この書類の件なのですけれど——」

ドゴォ（思いつき春斗と部隊長室へ入ろうとしたフランが激突して床に転がった音）

「何故テメエはこう間の悪い時に来る！？　もしかして狙ってんのか！？　俺の不幸を望んでいるのか！？」

「そんな訳ないでしょう！？　ちよっ…というか、この体制は…」

「…ん？」

構図的に、フランの上に春斗が覆いかぶさった様な感じに見える。
何も知らない第三者が見れば、恐らく『春斗がフランを襲った』
とでも見えるのだろうか。

「あ、貴方はそんなに気にしないのですけど、私はその、「だあああ！　す、スマン！」　…え？」

確かにフランの言う通り、これまでの春斗なら「わりいわりい」と
かいて起き上がって説教を食らう所なのだろうが、フランの考え
ていた春斗の行動と現実は全く違っていた。

あの春斗が、自分の上から慌てたように飛んだのである。　しかも
少し顔が赤い。　…これは…？

「（…も、もしかして…意識されてるって、ことなのでしょう…
？）」

そう考えて彼女も少し恥ずかしくなって顔を赤らめているのにすら気づかない春斗は、現在頭を抱えて心の中でのたうち回っていた。

「（ああああ！！ 相手は腐れ縁の幼馴染の筈なのにめっちゃ良い匂いだとかすげー可愛い顔してるなーとか思っちゃまったああ！！ダメだ俺！ 取り敢えず兄貴に会ったら一発殴らねえと気が晴れない！！）」

それは八つ当たりというものではないだろうか。

「…なのはちゃん、いつから機動六課はこんなピンク色の空気が流れる職場になったんやろうか」

「……いいなあフラン、私も別に春斗なら乗っかれてもいいのに」

「ちょ、その発言は取りようによっては完全にアウトやからな！！？ 主に健全な意味で！」

「?」

何かもう、ゴチャゴチャだった。

（再度）閑話休題

「さて、ピンク色の空気もようやく晴れてフランの用事も済ませたところで…春斗君もこのアグスタの警備に行って欲しいんやけど、ええか？」

「しかし、俺には戦闘能力が全く無いぞ？　意味あんのか？」

「うん、それがなあ…ユーノ君で知ってるやろ？」

ユーノ・スクライア――

なのはが魔法の世界に関わり始めたきっかけの人物と言っても過言では無い男だ。現在は確か無限書庫で司書長をやっている。

無還者には及ばないまでも、類い稀な並行演算能力を持ち、暗記能力も司書長に相応しい物がある。彼らの幼少時、皆で銭湯に行った際、彼がまだフェレットモードの状態だった時に無理矢理なのは達に女湯に入れさせられそうになったのを春斗が救ったのは今でも記憶に新しい。

確か某提督からの仕事関係の圧力が半端ではないと愚痴っていたが、その愚痴の最中に笑顔を浮かべた某提督が彼の背後にいたというのめかなり記憶に新しい。因みにその後、無限書庫から聞こえる悲鳴が増えたとか増えないとか。

「ああ、知っているどころかたまに会うな。最近はどうも忙しいらしくて会ってないが：それがどうかしたのか？」

「今回のオークションに参加するらしいんやけど、もし良ければついでに春斗を連れてきてはくれないか、って言うんや。何か伝言があるなら伝えておく、って言っても言葉を濁すばかりでなあ。アンタ本人と話がしたいらしいんよ」

だから、今回の件は半分休暇みたいな感じで参加してくれて問題ない、とはやては言う。オークションに参加する客に扮し、もし怪しげな男がいたら直ぐに隊長、または近くの職員へ連絡。それすらも面倒であれば、オークションが終わった頃に来るという感じでも構わないらしい。

ユーノ曰く、「今回オークションに出れる時間があっただけ奇跡」とハイライトが消えた瞳で言っていたため、恐らくこれを逃すと余程のミラクルが起きない限り時間が取れなくなってしまうらしい。

その言葉の裏には自分らを犠牲にして一番頑張ってる司書長にどうにか休みを与えようと奮闘した無限書庫の職員の姿が存在し、ユーノの今回の休日は彼らの犠牲の上に成り立っているのである。素晴らしい上司と部下の信頼関係に涙が止まらない。

それを聞いて大体状況を把握した春斗は「なるほど」と頷き、

「分かった。それならオークション中は森の中で寝てる。何かあったら無線持っておくから鳴らしてくれ」

「いや、それ何かあったとき危険やないか!？」

「大丈夫だ、その点を考慮してシャーリーにインスタントの結界装置を作ってもらった。オークション中は結界が俺を守ってくれる……答だ」

「ま、まあそれなら何もないよりはマシだと思うけど…」

「ははは、俺はあの骸骨巨人の大災害やドーナ・クライオンの戦いに巻き込まれつつ生き残ったんだぜ？ このくらいで死んでちゃ、申し訳が立たねえよ」

「その言葉自体、結構な死亡フラグやで？」

「…マジでか」

それから元々少ししかなかった真面目な空気も完全に消え、明後日に任務があるなどと感じさせないような天然漫才は聞くものに砂糖と血を吐かせ、男性は春斗への殺意を高め、女性はそんな春斗に少し興味を持ち始めるのだった。

こうして彼のフラグは構築されていくのである……。まあ、とてつもなくどうでも良いことでもあるが。

機動六課より、ライトニング分隊、スターズ分隊、ロングアーチ分隊、そして兵器“消失者”である高町春斗。

未来すら見えぬ戦いへ、彼女達は出陣する。

＊

場所は変わって、某スカリエッティラボ。 此処に鼻歌を唄う、ゴスロリ服を着た女性が1人――。

「♪ さあ、明後日はどの服を着て行こうかの♪」

「いや、ディールよ。 明らかに戦闘に行く者の雰囲気では無いと思うのだが…」

「いや、スカリエッティによれば『ルーとゼストが働いてくれるから直ぐ終わる』らしいのじゃ。 どうせなら可愛い服でも着込んで、何処かの男でも引っ掛けようかなー、と思っただけ」

妾はただついて行って見に行くだけになるかもしれないのじゃ、とその言葉に付け足す女性、ディール――しかしその顔はとても楽しそうで、これから起こる『事件』に心を躍らせているようだった。

「はあ…まあ着込んでいくのは構わんが、変な男を引っ掛けては駄目d――おいディール、そのきわどい服を何故私に当てて首をかしげている」

「いや何…なんか、意外に似合いそうじゃのう」

「ちょ、ちょっと待て！ いや、私はそのそういうのに興味はなくてだな」

「そうじゃのう、でもゴスロリではなく何かメイド服の方が合いそうじゃ。 いや、いつそ何処かの国の女王様のコスプレでも…」

「待て待て待て！ 暴走してる！ 暴走してるから！」

「いやいや、姉上。 お主はもう少し自分の容姿に自信を持ったほうがいい」

「…え？」

「可愛い眼帯に綺麗な銀髪、その口調…どれをとっても可愛いものばかりじゃぞ？」

「そ、そうか？」

「という訳で、それを更に際立たせる為にじゃな、少し妾達に任せはくれへんか？」

「で、でも、…だが…うーん…」

「頼むのじゃ！ ほら、この通り！」

必死に懇願するように見える自分の可愛い妹。 それを見て、デイ

ールの着替えを見ていた彼女は遂に陥落した。

「わ、分かった…けど、一度だけだぞ？」

「分かったのじゃ♪ もちろん、妾は一度だけなのじゃ」

「……………お前は？」

「ふふふ…クアットロ姉上！ 話は聞いとるよな！？」

「はぁ…いい、勿論よろ？」

そう言ってタイミングぴったりで入ってきたのは、当然のごとく彼のドＳメガネこと戦闘機人N04こと“クアットロ”。

その顔を見て顔を真っ青に染めたのは、もう言わなくてもわかるだろう…戦闘機人N05こと“チンク”だ。

そして更にチンクへ追い打ちをかけるかのように、その後ろから見覚えのある顔が入ってくる。

「ふむ、クアットロ…何か面白いことがあると聞いたが、何かね？」

「少し興味がありますね。ディールも関わっているらしいですし」

「ドクター！？ ウーノ姉！？ …はっ！？ まさかこの会話その

物が罠だったのか!？」

「今更気づいたのかのチンク姉上…妾が着替えを選び始めた瞬間から既に策は始まっておったのじゃよ…!」

「そんな馬鹿な!？　いつだ、いつの間に作戦を練っていた!？」

「作戦なんて練ってないのじゃ」

「同じ性格同士、何か通じる物があつたっただけよ♪」

「しまった…この2人がそういう性格の持ち主だということを知し
く忘れていた…!!」

厄介なことに、同じ性格を持つ者は直感的に思考がリンクするらしい。もしそうならとてつもなく革命的な発見だが、この面子はそれを自分が楽しむためだけに使っているのが惜しい物である。

「さあ、チンク姉上…観念するんじゃ…!」

「待て!　落ち着け!　くっ…ど、ドクター助けっ」

「ウーノ、君にはこの服が似合うんじゃないか？」

「い、いやいやいや!　私はその、別にそういうのは…いやでも、
ドクターがその…それの方がいいというのなら…」

「そんな…初々しい夫婦的な天然会話漫才をやってるせいで反応し

ない…だと…っ！」

「それじゃあ、始めましょうかあ〜♪ 第一回、チンクちゃん弄りコンテストお〜」

「今言ったよな！？ 今“弄る”って言い切ったぞーって止めて、うわああああ！！」

全く無駄な事をしている気がしなくもないが、今日も彼らは元気だった。

スカリエッティグループより、“ゼスト・クライガンツ”、“ルーテシア”、“ディール”。

間もなく彼らは、出陣の準備を整える。

＊

とある青空が澄み渡る世界。

ふと、鳥がその世界にある屋敷から飛んできた。

その屋敷で飼われている鳥だった。綺麗で、この空のように澄み渡るような青色の鳥で、誰にでも懐くので子供を中心に人気が高い鳥だった。

この屋敷の住人も、使用人想いの素晴らしい男性であり、非の打ち所のないような人間だった。管理局に協力しており、悪を許さないといった思考の持ち主でもある。彼もまた、鳥と同じく人気が高かった。

彼は知らなかった。

真の闇の世界で、正義のままにしていることなど到底できないと。

彼は自分を信じてしまった。

彼が自身の足で踏み込んだその世界では、近寄る人間どころか自分ですら信じてはならないのに。

そして彼は知ることになる。

正義とか悪とか闇とか光とか、下らない事にこだわる人間が『全ての底辺』へと足を踏み入れたらどうなるのかを。

屋敷から飛んできた鳥が、とある子供達の周りをパタパタと飛んで、傍にあった木の棒へと降り立った。

その子供達は、良く屋敷に遊びにきては自分を可愛がってくれた人間だった。そしてその鳥があゝの屋敷の鳥だということを知ると、ワツと群がろうとする子供達。

しかしその中で、幼いながらもリーダーシップのありそうな少年がそれを止めて誰が一番に触るかという事をジャンケンで決めようと指示しようとし、そこでこの鳥の異変に気づいた。しかしそれが何なのかまでは分からないので、近くにいた自分の親へ「これは何なのか」と聞きに行った。

彼の親は答えなかった。

否、答えられなかった。

その鳥の翼に、あの澄み渡るかのような青い色はなかった。

変わりに、真っ赤で、しかしドス黒い何かが全身に染み付いていた。

青かったはずの鳥が、少年の手の中で鳴いた。

聞いたこともないような、甲高い声だった。

まるで、何かを訴えているかのようにだった。

薄暗く、静寂が支配する屋敷の中で、真っ黒なドレスを着た男がコツコツと、足音を響かせて歩く。

周囲には大量の細身の剣。

そしてその剣に貫かれた、人間達。

「『：第1章11項…命令を確認しました。 管理者からの命令を最優先事項に設定。 ↓指定された任務地へ向かいます』」

制圧にかかった時間は、約3秒。

殲滅にかかった時間は、約1分。

殺した人間の数は、使用人と雇われていた兵隊含め約500人。

腕を振ったら死んだ。

指を向けたら死んだ。

目で見たら死んだ。

どうしたら、人間は死なないのだろうか？

『主、次ノ任務地ハ何処ダ？　　イイ加減此処ニ生キ残りハアルマイ』

大量の光子で構成された三本の剣でズタズタに引き裂き、今はグロテスクで様々な色に輝いている内蔵を晒しているこの屋敷の主だった物を見ながら考えていると、この血みどろの空間に異様な存在が浮かび上がる。

巨大な鎌を持ち、真っ黒なローブで体を隠した、顔に肉のついていない――骸骨だった。

その鎌にもやはり真っ黒な血がこびり付いていた。あれは取るのに苦労するだろうと客観的に算出しつつ、自分の顔にも真っ黒な返り血が付いてるのも気にせずには彼はその問いに答えた。

「『第1章7項…その問いへの回答です』」

男はその真っ赤で光の無い瞳を、屋敷の天井をへと向けながら、ただ事務的にこう言った。

「『第1管理世界。 名称は“ミッドチルダ”。 座標X…261 Y…76に存在する宿泊施設。 名称は“ホテル・アグスタ”。 任務内容は“暗殺”及び“強奪”となります』」

『ククッ、アノ老害共ガ直々ニ“暗殺”ノ命令ヲ下ストハ。 暗殺対象ハソレ程ノ危険人物ナノカ?』

「『第1章5項…その問いは機密事項に該当するのでお答えすることは出来ません』」

『ムウ、ソレナラバ仕方アルマイ。 …ダガ……フム…』

「『どうかいたしましたか?』」

『ナニ』

骸骨は愉しそうに、本当に楽しそうに笑っているような声で男に話す。

『次ノ任務ハ：久々ニ吾輩モ、愉シメソウナ氣ガシテナ』

鳥が飛んできた村へ、爆音が響き強風が吹き荒れた。

その余りの強さに、木で造られた家が吹き飛びかけた程だった。

皆が砂が入り込まないように目を瞑り、吹き飛ばないように必死に何かにしがみつく。

暫くして、永遠とも感じる風が通り過ぎ、一番に目が回復した村の青年が呆然とした。

真っ赤な炎が、立ち上っていた。

何もかも焼き尽くすかのような真っ赤な炎と、悪魔にすら見えてしまうような真っ黒な煙が少し離れたところから立ち上っている。

青年の記憶が正しければ——あの位置には、自分も何度かお世話になった男のいる屋敷が存在している筈なのに。

突然の強風に驚いた少年によって爆風から守られた、青い鳥が再び鳴いた。

とても、悲しそうな声だった。

まるで、何が起こったか知っているように、あの立ち上る煙へ向かって――鳥は、何かを悼んでいるかの様に、何度でも鳴き続けた。

管理局の闇より、最凶最悪の兵器“無還者”と謎の多き骸“デミス”。

一方は“管理者”の任務を達成するため、もう一方はそれを最後まで見届けるため。

彼らもまた、ミッドチルダへと出向く。

＊

「――急報が入ったわ。第6管理世界の少数民族『ル・ルシエ』が壊滅、そして第21管理世界の管理局民間協力者“エヴァー・ガインラック”が使用人・兵隊諸共殺された」

場所は大きく移り、“アルデイス”王宮の会議室――王族警備軍や王族だけでなく、人間や幻想種問わず反管理局軍のリーダー格までもが召集を掛けられ、真剣な顔で会議をしている真っ最中だ。

「ただし、ル・ルシエの民に関しては予め子供・女、一部の男はこっちに避難させてある。だから“ル・ルシエ”の血は絶やさない事に何とか成功した」

「おっと、その件に関して質問いいか？」

「ええ、どうぞ。エル」

たった今呼ばれたのは第一反乱軍隊長の“エル”と名乗っている男。元の名前は捨てていて、名乗る気もないらしい。謎の多い男だが実力は確かで、指揮能力も高い人間だ。

「予めと言っていたが、どうやって予測できたんだ？ 不慮の事件

に対する予防策としちゃあ、中々に用意周到だが…」

「いい所を突いたわね。これを見てくれるかしら？」

ロザリーがそう言って開いたのは、桃色の頭髪をした可愛らしい少女——機動六課所属ライトニング03、“キャロ・ル・ルシエ”の詳細なデータだ。

「キャロ…“ル・ルシエ”？」

「そう、今回の壊滅には恐らくこの子が関与してる。いえ、この子が悪いわけでも黒幕ってわけでもなくてね、“ル・ルシエ”の竜巫女の末裔が機動六課にいたからその縁であるル・ルシエの民を殺した”って事じゃないかしら」

「尚更分らないんだが、何故この子が機動六課にいただけでル・ルシエの民が殺されなくてはならないんだ？」

「恐らく戦力の低下ね。竜巫女っていうのは強大な力を持つ…直接手を下さないのは、今流れてる噂の一つ“機動六課にいる人間は不幸になる”ってのに真実味を持たせる為じゃないかしら。精神的に追い込んで、このキャロちゃんが自分から機動六課をやめるように仕向けたかったんでしょね。そうすることで更に機動六課は信用を失う。たった1人の少女の幸せすら、彼女達は守れなかったって…無論、当然だけど機動六課は悪い訳じゃないけどね」

「成程、理解した。…気に食わないが理想的な手だな、そういう風に外から攻めてくる輩は」

「ええ、敬遠されがちだけど効果的でしょう。だから万が一に備えて、罪のない機動六課のメンバーの家族には全員見張りを付けてあるの。あたし達の最終目標は害虫の駆除だからね…で、他に質問は？…じゃあ、続けるわ」

少し見渡して何事もないのを確認すると、「次はエヴァー・ガインラックについてね」と優しそうな男が写っているデータを開く。

「エヴァー・ガインラック、通称ガイン。誰にでも優しい男の人で、綺麗な青い鳥を飼っていたそうよ。皮肉にも彼の身に何かあったと気づいたのは、その鳥が血まみれで飛んできたからなんです。そして決定的だったのがそのガインが住んできた屋敷の爆発…500人位いた屋敷で、当然生存者は0。というか人の原型を保ってるのが存在してなかったって」

「ん？ 姉ちゃん、その話からするとその鳥が飛んでくるまで誰も異変に気付かなかったの？」

「そうらしいのよね。考えられるのは余程高度な隠密スキルを持っているか、もしくは誰も気づかない程のスピードで屋敷全員を殺したのか…私的には前者だと思うんだけど、信じたく無いことにどうも後者の方の可能性が高いのよね」

「…それ、どういうこと？」

その言葉に反応し、一番に口を開けたのは特級指定次元犯罪者こと

ドーナ・クライオン。彼の机の前にはこの空気に相応しくないお菓子が大量に散らばっているが、誰もその件に関しては突っ込まない。誰だって自ら虚数空間へ突っ込むような真似はしたくないだろう。

「この会議を開始する前に、A級部隊に現場をこっそり爆発した直後の現場を見てきてもらったんだけどね？ 次元復元魔法で検出された結果、焼死体だったんだけど死んでから3分も経って無かったらしいのよ」

「ああ、だからキークが居なかったわけね」

「だって酒飲んで暇そうにしてたんだもん。あたしだって飲みたくて我慢してるのに……！」

『オイ』

王族警備軍&革命軍&ロザリー以外の王族全員からの総ツツコミだった。

「まあ、それはさておき……死んでから三分も経ってないって事は、よ。つまり、その屋敷にいた使用人と兵士含む500人も人間を、三分以内に生き残りも残さず惨殺した、って事になるわ」

「だが、正確には2分も経ってないだろうナ。死んでから屋敷の爆発までに少しのタイムラグがあったと推測してもおかしくはないだろ？」

そう、何処か面白そうに口に出したのは第二反管理局軍副隊長である“アッシュ”と言う男だ。“エル”と同じく本当の名前を捨てた男で、適当にアルファベットから付けている。語尾がカタコトになるという珍しい特徴を持ち、得意な魔法は蛇術。蛇に関する魔術なら即座に看破できるし、扱うことが可能な人間だ。目の周囲には常に痣があり、顔は青白いが死ぬことはない。

「そうね、アッシュの言う通りだわ：でも、いくら幻想種にとっては脆弱な人間だって500人も人間を2分弱で殺すことなんて屋敷ごと吹き飛ばすか、王族^{あたし}クラスが去向かないと不可能よ。それをこの犯人はやってのけた。つまり、」

「今回の犯人は、王族クラスの単独犯である可能性がある：だね？
ロザリー姉ちゃん」

「ええ、そうよ。そしてその犯人の目星もついてる。この人よ」

更に空間に現れたキーボード状の物を操作すると、次に出てきたのは明らかに隠し撮りされた真っ黒なドレスの様な物を着ているような男。そしてその魔力の変動グラフ。

「ル・ルシエの里で隠し撮りした写真よ。とてつもなく厄介なことに、彼を中心とした半径40kmに存在する単独行動型の自動撮影機は全て探知されて壊されたわ。無事だったのはこの一枚だけ」

「それじゃあ、円に直すと80km圏内の存在は全て探知出来るってことか？ こいつは」

「ええ」

「……どう考えても王族クラスだな」

「いえ、王族以上よ。あたしやリン、ドーナはともかくメビアですらそんな広域探知を使用したら脳が壊れちゃう。この人の情報処理能力と空間把握能力は幻想種どころか神獣種っていう単語ですら片付けられないわ」

その言葉に、隠し撮りされた画像を見る人間、幻想種の目が変わる。

ある者は畏怖、ある者は一種の尊敬、ある者は興味、ある者は疑問の目――しかし、それで尚“恐怖”を感じている生き物がいないのだから何処かこの面子もネジが何本か抜けてるんだろなあ、とロザリーは苦笑する。

いや違う。厳密には感じているのだろうが、“興味”という欲望がその恐怖を押しつぶしているのだ。安全な生の結果より、死んでも満足できる結果を選ぶ。このグループはそんな集まりだった。

「なーるー。でも面白いじゃないか。丁度平穏な日々には飽き飽きしてたところだし」

愉快げな声を発したのは、真っ白な歯を見せてニカッと笑っているヨボヨボで身長も小さい、正直言って遠い山奥で隠居してるのが似合いそうな老いた女性だ。此処にいるとは思えないような風貌だが、誤魔化されてはならない。この女性、実は外見を自由に変えられる希少能力を持つ人間であり、第四反管理局軍の隊長をしている。本当の顔は誰も知らないのだ。暗殺の仕方も心得ている。

「カル、その発言は我々の間だから許されるのだぞ？」

「かかか、分かってるよ。当然隊員の前では言わねえが、ウチの所の隊員だってそうだろうさ。何せ変装の名人として有名だった元次元犯罪者の集いだからねえ。あたしの勇気ある指導のおかげで、今では何処に出しても恥ずかしくないホストと執事の集まりだけど」

「カル、君のあれは指導って言わない。あれは指導というよりは一種の拷問だ」

「さあて、なんのことだか分からないねえ」

ケタケタと笑う、我らが国が誇る諜報の名人にちよつと涙が出た。

これで国が運営できているのだから、少しでも正常な者達が頑張っている姿が容易に想像出来る。

「ま、カルは置いておきましょう。取り敢えずこの男の人がル・ルシエの襲撃とエヴァー・ガインラックを殺害した、と考えられるわ」

「それで？ 貴方の事だ。 次何処に出てくるかも分かってるのでしょう？」

「そのとおり！ 流石ハク、私の事分かってる！」

たった今ロザリーにハクと呼ばれたこの少女、エルフ族長の娘に該当する。 幼いながらも聡明で魔力も高く、彼女以外にエルフ族の後継者もないとされている。 尚彼女も名前はアルファベットから適当につけられた。 彼女自身が気に入っているのだからいいのだろうが、もう少し考えようぜとメディアからツツコミの形で指摘を受けたのは今でも記憶に残っている。

「…所で、ハク。 貴方のお母さんの“イブ”が影も形もないように見えるんだけど」

「……『ちよっくらどつかで酒飲みの旅に行ってくるぜ！』って言ったきり、3日連絡が無い………」

「あの馬鹿あ……少しは自由奔放なその癖直しなさいよ…」

「姉ちゃんには言われたくないよね」

「そうだな」

「即答！？」

脱力するロザリーとその周囲で頷き合うハクとメビア。よく見ると、少し気まずそうにロザリーから目を逸らしたり懸命に笑いを堪えている者の姿も見える。　どうやら全員同感のようだ。

「ぶー。　良いわよ良いわよ。　どうせあたしは王に相応しくありませんよーだ」

そう言いながらゆっくりとカーソルを動かし、新しいウィンドウを表示させる。

「えとね、確か名前はホテル・アグスタ…って言ったかしら。　そこで大規模なオークションをやるんですって」

「へえ？」

「で、そこに“レリック”って言うロストログア含む何かが取引されるらしいんだけど、この男の人はそのレリックを狙ってるの。　多分自分の意志じゃ無くて、誰かの命令でだろうけど…だから十中八九、この人は此処に来る」

「来なかったら？」

「このオークションで出てくる品物、全部買ってあげる」

「うおーい、太っ腹だなあ」

即答だった。 「でもね」とロザリーは笑いながら話す。

「…一応この会議自体非公式だから、行けるのが王族警備軍と王族…そして＋１人になるのよ」

「「「！！」」」

「行きたい人？」

「「「俺っ！（私！）（僕っ！！）」」」

『……』

「はい、ジャンケンで」

一時間による平和的な激闘の末、紙一重でジャンケンに敗北した反管理局軍の屍の上に立った少女――ハクは、そのホテル・アグスタがあるという世界のミッドチルダへ向かうべく、喜々として準備を始めるのだった。

「カオスになりそうだねえ」

「うん。 寧ろカオスになるしかないわ」

「カオス結構じゃありませんか。 寧ろ楽しみです」

「……愉しみ……♪」

「いや、仮にも王族がそんな事を言っているのか……？」

自由の国アルデイスから、古龍種“ロザリー”、真祖の吸血鬼“メビア”、大魔女“リン”、特級指定次元犯罪者“ドーナ”、エルフ族長の娘にして次期族長“ハク”。

彼らは自分らの目的と欲望を果たすべく、自ら“敵地”へと乗り込む。

そして――

『……全く持って、酷いことをしますね。 聖王のコピーとは』

某研究所にて、近々搬送予定のある培養液に入れられた小さな少女。その正面に立つのは、白い髪を持ち水色の瞳を持つ小さな少女――

周囲には、何やらニヤつきながら話し合う研究員の姿がある。 し

かし、その少女に言及する者は誰もいない。

まるで、誰も気づいていないかのようにだった。

『現在の“私”はまだ完全に存在を確立できません。 所詮、感受性の高い人に見てもらおうことが出来る程度です…でも』

少女の姿が、ぶれる。

まるで、映像のように。

『今はただの“力”の集合体ですが、貴方を導くこと程度なら出来るはずです』

更に、ぶれる。

集合した粒子が、ほどけて散るかの様に消えていく。

『また、その時に会いしましょう。 聖王オリヴィエ…いいえ、ヴィオ』

少女は、その言葉を遺して消えた。

それに答えるかのように、酸素供給装置を付けられた少女の口から数個の泡が出てきた。

あらゆる勢力が集結する事件、ホテル・アグスタのオークションまで：残り、約二日。

“集結”（後書き）

天破「神は言った！！ リア充は死ねと！！ 我らが神の意思の元、
高町春斗を処刑せよ！！」

処刑員『はっ！』

春斗「理不尽だあああああ！！！！」

フラン「は、春斗ーーーー！！！！？」

戦闘入れなかったす。 すいません。

次回からようやく、奴の無双が始まります。 誰の無双かは聞くまでもありませんよね（＼＼＼＊）ウフフ

皆様の予想だにしない人間が、兵器と戦うことになるかもしれまんよ…？

それでは、よろしければ次回もお楽しみに♪

天破でした（ゝ＼＼）／～～

“ホテル・アグスタ【開幕】”（前書き）

タイトルですが、“宴”をイメージ致しました。本来ならガジェット程度の襲撃で終わる所に、多数の人外や兵器が乱入し、入り乱れる事に関連付けて見たのです。反省も後悔もしています。もしかしたら変えるかもです（お

今回の話を読むにあたっての注意事項です^^

- ・VS無還者、開幕。 標的は一体誰だ？
- ・砂糖耐性のある方は出来る限り心の準備を。 無い方は多分大丈夫です。 多分。
- ・遂に某無限の欲望の正体が明らかにW 春斗とエリオの反応に注目です。

挿入歌…VS無還者【第1形態】 『Pray』 歌…水樹奈々様

【第一形態】が何のことかは、まあいつか明らかにしていきます。
挿入歌すら伏線に使う、それは私クオリティ（意味不

それでは、駄文を受け入れる勇氣がある方はお進み下さいませ…m

（ ） m

“ホテル・アグスタ【開幕】”

——さて、オークション当日——。

「さあ、現在ヘリの内部で四肢を拘束され連行される無実の高町春斗被告……この先どう逆転するのか、こうご期々」

「いやいや。無実も何も、任務の前に逃げ出したら重罪やろうが」

上の会話からもわかるように、オークション当日早々春斗は窓から六課の脱出を計り、行方を晦まそうとした——だが、それら全てはなのはの掌の上だった。その事に春斗が気づいたのは、全方位を女性局員に包囲されてからだったという…。

「しかし、なのは姉もさすがだな。まさか俺の行動パターンを読まれていたとは」

「あはは…もう何年も付き合ってきたからね…」

「まあ取り敢えずこれからの任務の説明をするんだったらこの拘束器具を外してくれ。苦しくて叶わん」

「分かった分かった…ほら、これでええやろ」

少し理不尽なものを感じながらも、拘束器具が落ちたので背中を伸ばして骨を鳴らすと、

「そんじゃ、すまなかったな。話してくれ」

「そうやな。それじゃこれから行く“ホテル・アグスタ”についての説明やで」

そこからは春斗も聞いた話が繰り返される。その豪華さ、オークションの規模、そしてその事への警備の危険性……。結婚式やデートスポットという関係なさそうな単語も聞こえた気がしたが、空耳だろうと春斗はスルーした。

彼女達の中から数名が、少し気になるように春斗を見ているのにも当然気づかない。

そんな空気の中、コホン。と一つ咳払いをし、少し力の抜けた顔から一瞬にして部隊長の顔になる。そして此処からが色んな意味での本題だと直感した彼女達は姿勢をただした。

「ええか、ここ最近起こつとるガジェットドローン事件やけどな…その黒幕と思われる人物が特定できた」

『!』

「この男や」

そう言ってヴヴン…という音と共に空中に映される男の映像。そして、お約束とでも言わんばかりにそれを見た何名かの行動が急激に変化した。

「（ごフツ！！？）　ゴホっ、ゴホゴホゴホッ！！？」

「……！！？　あうああああええええええええ！！！！？」

「……？」

上から春斗、エリオ、キャロである。　ただしキャロはそんなに記憶に残って居なかったのか、何処かで見たことがあるような無いような、という感じで首を傾げるものだったが。

だがしかし、彼らの狼狽も当然だろう。

空間に映されたその男の姿は、地球に任務に行った際、共に銭湯へ入った男——ジュエル・スカエルッティその人だったのだから。

「？　エリオ、春斗、どうしたの？」

「いやあの、フェイトさん実はっ（モガッ）んー！！？」

「ちよっとエリオ、作戦会議タイムと行こうか」

パニックしたエリオの口を塞ぎ、連行するかのように怪訝な顔をしている隊長陣から離れていく春斗。そして少し離れた所で、エリオとの超少量音声による会議が始まった。

「（バカお前、此処で次元犯罪者と会ったことがあるなどと言ってみろ！ このヘリが墜落するぞ！！）」

「（で、でででもっ、次元犯罪者だなんて知りませんでしたし…というか墜落するんですか！？）」

「（ああ、俺の第七感辺りが叫んでる。　　いいか、よく聞けよ…）」

スカリエッティが銭湯にいた事を知る↓フェイト・なのは暴走↓更にその風呂にキャロが入った事が判明↓スカリエッティにキャロとエリオの裸を見られたという事実↓フェイトが気づく↓ヘリ墜落

「（こういう感じになる事は間違いない）」

「（いやいやいや！？　最後のヘリ墜落の項目とその前の事実ってこの項目の間に何が事があったんですか！！！？）」

「（それどころかヘリの墜落よりも先に俺が処刑される可能性がある。　せっかく今動いている命だ、此処で失うには余りにも惜しい…………！！）」

「（それはそうですけど……でも、あの人そんなに悪い人には見えなかったけどなあ）」

「（人とは外見で判断がつかないものだぞ、エリオ。覚えておくといい）」

余談だが、銭湯に行った際に『俺は見ただけでその人間が悪い奴か良い奴か判断出来る』的な言葉を言ったのは紛れも無くこの男である。

「（じゃ、じゃあどうすれば……？）」

「（時が来れば恐らく自然と言うことになると思うから今は置いとけ。　　というか隠せ。　　……今もたまに連絡を取り合ってるとか知られたら、何かマジで殺されそうだし……）」

「（ちよ、今確実に聞き逃せない言葉を言いましたよね！？）」

「（ええい、男ならば細かいことをグチグチと言うな！！　まあつまりだが、俺の存在を少しでも長生きさせるために協力してくれお願ひします！！）」

「（えええええ！？）」

小声とはいえ、10歳の子供に頭を下げると同時に下手に出る19歳の男。　シュール以外の何者でもない光景だろう。

「（わ、わかりました：確かに、此処で会ったことがあるなんて言ったら任務に集中できませんし：）」

「（ありがとう心の友よ。 今度何でも好きな物を買ってやろう）」

最後には買収という手段を取る辺り、こうした事を何度もしたこと
が伺える。 それに苦笑しつつ、困ったように頭を掻きながら色々
と言いつつ、ぼいのを述べている春斗への加勢に、エリオも向かうの
だった。

＊

さて、紆余曲折が有りすぎるので取り敢えず結論だけ述べると、何
とかへりは墜落せずにアグスタへと無事着陸した。

へりから降りると、すぐ近くにいた局員から敬礼をされ、状況を説
明される。

曰く、アグスタ周辺は局員で取り囲み、身分証明偽造や変装の類ま
で警戒し、簡単な荷物検査までしている。

曰く、オークション内にも何人か局員が変装して忍び込んでいる。

曰く、機動六課から何名かに分けて、オークションの警護役とアグスタ周辺の警戒をやって欲しいとの事。

これらの報告を受けて、部隊長であるはやては指示をだした。

オークション入りは、なのは、フェイト、はやて、春斗の四名。

そして外には、新人魔導士＋αという形でそれぞれの防衛についてもらうことになった。

ヴィータ、シグナム、シャマル、リインフォースはが最前線。

そして、ティアナ、スバル、エリオ、キャロがそれぞれ防衛ラインの担当だ。

そして、緊急時の連絡役及びバックアップとして、無線機を持ったフラン。これは本人の要望で、ただ待っているだけで忍びないので少しでも手伝いたい、とはやてに進言した結果でもあった。

振り分けも終わり、元氣よく返事をしてから各自準備に取り掛かって――

「ってちょっと待てやコラア」

「なんや春斗？ 何か問題でもあるんか？」

「大有りだ！　なんで俺が入ることになってるんだよ！？　せつかくハンモック持ってきたのに…」

「いや、私としてはこの何が起きるかわからない状況で本気で眠ろうとする勇氣があるアンタを尊敬するわ。　でも、それならなんで逃げたん？　普通それなら逃げないやろ」

この疑問は最もだ。　この状況下で普通に眠れる程の度胸があるのなら逃げなくてもいいと思う。

「いやなあ…」

そして春斗はその問いに、再び頭を掻きながら空を見上げて、呟いた。

＊

「……勘でしかねえが、何だか嫌な予感がするなあ、って思ってよ」

「どうも、こんにちは」

フワリ、と。

桃色の髪を持つ天女の如き女性が、偽造された身分証明書を見せて話す。

「父が急病で来れなくなってしまったため、変わりに来た者なのですが…参加させていただけますか？」

その美貌に見とれていたフロントマンは、慌ててその証明書とその女性、そしてその周囲に控えている護衛と思しき人間の顔を確認する。特に異常な点もなく、彼は真正銘の身分証明書だと錯覚した。

「ど、どうぞ。 お待たせして申し訳ございません…」

「いえいえ。 謝るようなことではないですよ」

優雅に女性は一礼すると、護衛達に目配せしてオークション会場へと入っていく。

そしてその後続くように、身長から2人の少年と男と思われる護衛も入っていく。

その美貌に『呪われた』と言っても良い、フロントマンは気付かなかった。

その護衛のうち1人の口が、三日月状に歪んでいるのを。

「：侵入成功、だね」

「気を抜くんじゃない。いつ、どこから、何がくるのか分からないからな」

「うふふ、ライム。貴方も随分心配症なんですね」

「いや、私が心配しているのはこのオークション会場ではなく、外に待機しているドーナの方だ」

「「……………ああ……………」」

そう、彼女は確かに今は証明書に書かれた、とある大金持ちの子女なのだ。

病気であるのも本当——だが、その病気が作り出されたものだとしたらどうだろう？

屋敷全体が、致死性はないが体中へ走る幻痛に戦っているとしたら？

それを治す取引条件として、彼のサインが入った身分証明書のコピーを奪えたら？

彼らは何も、悪いことなどしていない。

ただ、『運悪く』その大金持ちが病気で倒れ、『運良く』その難病を治すことの出来る者が屋敷に来て、そして『貴方の身分証明書のコピーと引き換えに、この薬を渡ししょう』と言っただけの事。

「さ、行きましょう。 どんな物が出てるのか確かめて知らせないと」

「了解」 「うん」

アルデイス国より、リン・アルデイス、メビア・アルデイス、ライム・ローディウス。

以上三名、オークション会場への侵入成功。

任務続行。

＊

————さて、少し遡って…機動六課のあの後の事を話そう。

「まあ、行くからには着替えないとね♪」という、シャマルの提案の下、いつの間にか彼女が用意していた衣装を着ることになった。正直なところ、春斗からしてみればいつ用意したのか不思議でないがそこは今置いておこう。

四苦八苦しながら堅苦しい服を着終え、ため息をつきながら集合場所であるホテルのロビーへ向かう。

やはり女性は時間がかかるのか、まだ誰もロビーには来てなかった。少し固い服と背骨を伸ばすように再び背伸びをしていると、視界の端に見覚えのある桃色のロングヘアが写った。

「…って、オイ」

何処かですれ違ったときに記憶したのか、と思って横目で見てみれば、なんと言っていることだろう。つい数日前に自分と殺し合いをした大魔女がそこに存在しているではないか。

相変わらずの綺麗な笑みで、魅了されたのかフロントマンの男性も惚けて固まっている。その後何事か話し合っていると、彼女は慌てた様子のフロントマンに普通に通された。…いや、普通に考えて管理外世界、それも反管理局勢力の集うアルデイスからの客と知って通す馬鹿はそうそういない。

とすると、偽造証明書や洗脳魔術でも使って入ったのだろうか。そこまでして入る程の価値がこのオークションにあるのだろうか？

「（……俺の勘も、捨てたもんじゃねえってことか）」

少し楽しそうに言ってみるも、顔が苦虫を噛み潰したかのような表情になっている事は否めない。

彼の勘が当たる、それは今回ろくでもない事が起きるという事だ。

だからこそ脱走し、一足先にアグスタへ行つて様子を確かめようと思ったのだが、まさか自分の義姉に捕まるとは夢にも思っていなかった。彼は変な所で自分に甘かった。

「（…今から憂鬱だ。何かあらゆる全てが吹き飛ぶような良いことがあれば気が晴れるんだが…）」

「春斗、お待たせっ」

「？ ああ、なのは姉か。随分遅かったn——」

その瞬間、彼の頭からあらゆる情報が一瞬だけ吹き飛んだ。

目の前にいたのは、自分が知っている隊員服姿のなのはではなかった。

桃色のドレスを着て、いつもは結んでいる髪を解き————なんというか、彼の知っている義姉とは別人のようで——

「えへへ…春斗、この服どう？」

「……………可愛い」

「…そうだね、春斗はそういうの気にしな——えっ？」

「綺麗だ……」

言葉を訂正するのすら、忘れていた。

それ程、何故か春斗にとってなのはは幻想的で、美しかった。

「…え、えと春斗…よ、予想してなかったっていうか…や、やっぱり面と向かって言われると恥ずかしいって言うか…／＼／＼」

「…え？ ……（青年記憶再生中…） ……ぎゃあああ！！！？ 俺はなんて事を口走った！？」

「う、嬉しいよ？ とっても嬉しいけど、人の前だし（ガシッ）？ 春斗？」

「忘れてくれ」

「え？」

「い・い・か・ら忘れてくれ！！ 今のは俺であって俺じゃないんだ！！ 本来の俺は可愛いとか綺麗だとか言わねえ筈なんだ！！」

「? ……本来の春斗ってなに?」

「……、」

「……?」

「……よし、やり直そう。　なのは姉の記憶はたった今俺に会った所からやり直し。　そして俺は普通に『似合ってるんじゃないか?』って返した。　OK?」

「え?　でも——」

「……正直、あんな事を口走ったせいで恥ずかしさで死にそうだ……現実逃避もしたくなるんだ……!　察してくれ……!」

「う、うん!　分かった……!」

春斗自信も恥ずかしかったらしかった。　なのはもその涙目の鬼気迫る表情から、何かを察したようで頷いた。

彼らに誤算があったとするなら——

「……あの2人、私らがいること忘れとんどちゃう?」

「あはは……でも、まさか春斗があんな、ねえ……」

「……私も言われたかったなあ……」

なのはの背後から少し離れた位置に、はやてとフェイトが苦笑しながら立っていた事に、最後まで気付かなかったことだろう。結局春斗がそれを知り、弄られるのはこの任務が終わってからとなるので――今は置いておく。

紆余曲折あり、約2名の男女がある意味しばらくは消えないであろう貴重な体験をしたりしたが、機動六課の隊長陣十春斗も無事にオークション内へ突入。

警備任務、開始。

＊

さて、此方はホテル・アグスタより少し離れた森の中――。

小さな古龍種と特級指定次元犯罪者とエルフ族次期族長が酒盛りを始めていゝ「ちよつと待て!!」

「あら、どうしたのよ？」

「……お酒、まだ飲んでない」

「いや、一応……というか体格的に私達は酒を飲んでいいのだろうか……？ 此処にいる全員、身長が140cm以下なのだが……」

歳は皆20を超えてるから問題はない。 とうかさつきからツツコミを入れているこの少女以外は20どころか100歳近いので余り意味をなさない。

「問題ないわよ。 お酒は美味しいんだから」

「（コクコク）」

「何も解決になってないからな！？」

はあー、はあーと息を付き、呼吸を整えるエルフ族——“ハク”。
それを見て笑っていると、ふと小さな古龍種であり彼女達の王である——ロザリーが懷をまさぐり、小型の万能端末を取り出した。

「はあい、此方ロザリーよ。 どうかした、リン？」

『あ、お姉様？ 結構見たけど、意外とロストログア関係の出品が多いみたいよ』

「あら、やっぱり木を隠すなら森の中、ロストログアを隠すならロ

ストロギアの中って感じなのかしら。 物騒だけどね」

『確かに。 あ、ちょっと今から商品リストを送るわね』

その言葉と共に端末がデータを受信し、そのデータが表示される。

ふむふむ、とうなずきながら見ていき、そして最後にぽつりとロザリーは言った。

「へえー…結構いい品物が出てるっぽいじゃない。 …あら、あれは…？」

『お姉様？』

「……うん、やっぱり機動六課。 来ると思ってたわ…」

「(ぴくっ)」

リストを見て唸ったり頷いたりしていると、遠くから見覚えのある魔導士の姿が見えた。 確かティアナ・ランスターとスバル・ナカジマという魔導士だったと思う、とロザリーは記憶を掘り返す。そしてスバル・ナカジマの方は戦闘機人だとリンから報告は受けている。

同時に目の前の特級指定次元犯罪者であるドーナ・クライオンがわかり易いくらいに反応した。

「…ドーナ、そんなに目をキラキラさせても八神はやては居ないわよ」

「えー…?」

「そんな残念そうな顔されても…はあ。リン、会場内に機動六課隊長陣の姿ってある?」

『ええと……うーん、人が多くて分からないわ。見つけたらまた報告する』

「お願い…って、ドーナ?」

端末を閉じ、ふと目の前に居るはずのドーナを見る。するとどうだろうか。

八神はやてが居なくて落ち込んでいるかとおもいきや——先程の20倍は目をキラキラさせた次元犯罪者がそこにいた（ロザリー談）。

「えーと…聞くのも怖いんだけど、どうしたの…?」

「…（ボソ…）……」

「え?」

「聞こえないぞ?」

彼は、楽しみにしていた酒のコップが地面に倒れているのにも気づかない様子で、口を大きく歪曲させた。

その白い目は細められ、何かを見通しているようだ。

「ドーナ？」

「…う……」

「…えっ？」

「匂う……」

彼は愉しそうにロザリーとハクに向けて振り返り、笑顔のまま告げた。

「匂う……これ、血の臭いだ…♪」

告げられたのは——戦いの、序章だった。

??? side

防御なんて、警戒なんて意味をなさなかった。

ただ、ロビーや受付、この宿泊施設の周囲を見張ってる局員を素通りし、行動する上で邪魔になりそうな客に扮している管理局員を葬って行動するだけ。

死体は四肢を切断してコンパクトに纏めたあとにその辺の箱に入れておいた。自分はそのまま放置しておこうとしたのだが、「箱に詰めて置いたほうがバレにくい」という、こんな自分についてくるおかしい骸骨からの意見を採用した。

——— 任務対象、目視。

誰にも見られる事無く、誰にも気づかれることなく、誰にもぶつか
ることもなく、標的へと歩いていく。

これは自分の日常。

このまま近寄って、首から上を吹き飛ばして、ロストログアを奪取して、任務終了。

ただそれだけの事。いつも通りの事。

—————任務対象の周囲に障害と思える存在の無い事を確認。

兵器の心を搭載している自分には、考えられることに制限がある。

その中で自分は、今までずっと“人間はどうかしたら死なないのか？”というのを考えて来た。

いや、厳密には“自分と関わって死なない人間はいないのだろうか？”の間違いだった。高町春斗などの機動六課陣は除外してある。あの課は管理者からの意向で“殺すな”と命令を受けているからだ。

暗殺対象は、相変わらず笑顔で他の人間と話している。自分が近づくのにも気づく気配は無い。

当然といえば当然であった。何百、下手すれば何千といえるこのオークション会場の誰一人として気づけぬ自分の存在を、人間の気配溢れかえるこの中で反応できるとは到底思えない。

———任務対象との距離、50 m以下。迅速な任務遂行を実現するため、これより攻撃を開始。

他の人間の“死”は必要ない。

今回必要なのは、1人の“死”とロストログアのみ。

精々、この会場がパニックになって終わるだけ。管理局が駆けつけば、自分の姿はもうない。

その、筈だった。

(———^{ブースト}“加速”)

その足で軽く豪華に装飾された床を蹴り、そのまま軽やかに暗殺対象の上へ飛び上がる。

後は、自分の右手に持つ鎌で相手の首を断ち切れれば治療による蘇生の可能性も0になり、任務は達成されたも同然となる。

その、筈だった。

軽く、鮮やかに空中を蹴ってゆっくりと任務対象の首に向けて空中で鎌を振る。

音も、気配も、そして殺気すらも感じさせぬ最高の一撃。当然だ、自分は常に最高の一撃を出せるようにプログラムされている。

1秒後には、相手の頭が空を飛び、同時に自分は床に着地していた。

筈……だった。

そう、その筈であった。

その、自分が鎌を振ってから相手の命が絶たれるまでの、僅か1秒の間隔。

確かに、—自分と暗殺対象と目が合った《……………》
・》。

鳴り響いたのは軽く人の首が飛ぶような音ではなく、金属同士がぶつかり合うような耳障りな音だった。

その場にいた皆がその方向を向いた。 任務対象の傍にいた人間達も同じく。

誰かがいた。

真っ黒なドレスのような服を着て、黒く長い頭髪を翻し、その目は血のように紅い。

しかし彼らは信じられない。 否、信じたくない。

ほんの1秒前まで、そこには誰も居なかった筈なのに。

「『…、』」

音が鳴った事で、このオークション会場にいる全員に存在を知られたその男は、全く慌てる様子も見せず俯くかのように自分の足を見る。

確かに地面に付いていた。

計算で算出した位置と、全く同じ位置に着地している。

しかし、唯一にして最大の誤算。“自分の攻撃が、障壁によって止められている”という光景を視認した男は、その紅い目を一際輝かせると同時に自分の鎌に力を込め、その障壁を叩き割るような感じで粉碎し後ろへ下がった。

「『…警告』」

男が、無機質で、無慈悲で、機械的な感情の無き声を呟くかのよう
に外へ出す。

「『第12章71項。 ↓本体による攻撃を止めた事を確認。 ↓
ウェポンルール兵器の掟に従い、敵対対象の警戒ランクをS級相当まで上昇させま
す』」

後ろに下がったその男は、着地点にあったテーブルに音も無く着
地する。 対する男の“敵”であり“殺さなくてはならない相手”
は、少し笑みすら浮かべてデバイスを構えた。

「君の戦闘映像を見させてもらった。 確かにその強力な一撃・強
大な魔力・驚異的な身体能力は驚異の一言だ。 弱点なんて見当た
らない。 だけど、機械的に動くからこそ弱点があることによろや
く気がついたんだ」

「『……、』」

「君はその性質上、敵を一瞬で殺さなくてはならないから人体の急所しか狙えない。：でも、掛かってくる場所は正直運任せだった。心臓を狙ってこられたらアウトだったから：どこを狙ってくるのが分かれば、防ぐ手立てはいくらでもあるよね？」

「『第12章26項。↓質問させて頂きますが、それは私が何故此处に存在しているかも理解しているという事と取っても宜しいでしょうか?』」

「…うん…まあ」

「『…第11章36項。管理者からの伝言です』」

離れている筈の二人の会話から漏れている緊張感に、会場全体が動けないでいる中、機械的な音声で男は言った。

「『君は知りすぎた』 ↓以上です』」

「…っ」

「『第12章52項。↓生きている方への伝言があるならば受け付けます』」

それは恐らく、遠まわしに“遺言はあるか”と聞いているのだろう。対して、それを理解した男は軽く笑って、言った。

「それなら、どうせだから君に」

「『…?』」

「僕は、絶対に負けない” って」

彼なりの“遺言”であり、そして本気の言葉だった。それはつまり、
“死のうと悔いは無い”と取る事も出来るという事で。

その気迫を受け取ったのか、それとも何か指令を受けたのか。全身真っ黒な服や髪で包まれた男の様子も、変わる。

「『――警告…第2章21項及び第2章47項。『豊穰神フレイの剣』並びに『スレイプニール』発動準備開始。↓完全発動まで残り10秒』」

異様な光景だった。

何も存在しない箇所から幾つもの西洋剣が召喚され、黒く、禍々しかったその背中から漆黒の翼が構成された。

彼が瞬きを一度しただけの中で起きた出来事だった。

「『警告…第2章31項。『万象貫く死の長剣』発動準備開始。↓完全発動まで残り8秒』」

そして今度こそ、オークション参加者全員へ悪寒が走った。

真っ黒な刀身を持った長剣が、螺旋状に何十本も男を囲むように浮いている。360°、どこでもどこからでも撃てるであろう状態で。

あの剣がどういう意味を示すのかも知らないが、普通の人間ならば剣が刺さっただけで致命傷だ。急所に突き刺さり、一撃で命を落とす者もいる可能性が高い。

だからこそ、彼は声を張り上げた。

「皆、逃げて!!」

その言葉が、皮切りだった。

甲高い悲鳴が飛び交い、人が走る耳障りな音が会場中に響き渡る。

ぶつかっても構わずに競争の様な感じで出ていくため、転けてしまった人が何人もの人に踏まれている光景も所々存在する。人間の醜い箇所が一面に出ていくような状況だった。

所詮は自分のみを優先する存在。人間という存在にそんな思考を少なからず持っていた1人の兵器は、無表情のまま首を傾げて目の前の男へ問うた。

「『第12章62項。↓最後の確認です』」

「…、」

「『↓死を受け入れる気はありませんか？

ユーノ・スクライア司書長』」

名を兵器に呼ばれた青年——ユーノ・スクライアは、その問いの一言一言を噛み締めるかのように答えて。

「…申し訳ないけど、そんな事出来ない。僕は確かに君に比べれば弱いけど、死にたくもないから」

「『…↓そうですか』」

その解答を受けて、少し男は目を瞑る。

何秒にも、何十秒にも感じるその空白。しかし兵器は無慈悲にも再びその紅く輝く目を細く開き、ユーノ・スクライアへとその眼光を向けて。

「『↓残念です』」

『兵器』は形式だけ、感情の籠っていない言葉を投げかけたと同時に。

漆黒の翼が羽撃き、神々しい神の剣と禍々しい死の剣が一斉にユーノに襲いかかった。

“ホテル・アグスタ【開幕】”（後書き）

原作？ アニメ？ 美味しいの？ モード突入しました。

始めましょう、チートと兵器と管理局入り乱れる宴を。

…もう逃げるんですか？ まだ宴は開幕したばかりですよ？ うふふふふ（壊）

スケジュール表

現在

←

開幕↓余幕（前編↪後編）↓主幕（前編↪後編）↓佳境（前編↪後編）↓終幕

※宴の盛り上がり様によっては長引いたり短くなったりする可能性あり（主に駄作者の暴走で）

さて、紆余曲折ありつつも宴は無事開幕しました。 続きましては余幕（前編）。

v s 無還者を始め、スカリエッティ side 及び、デミス side、管理局 side を中心にお送りいたしましょう。

天破の駄小説に付き合ってくださいっている皆様へ、無上の感謝の意を示します。

これからどうぞ天破を宜しく願います m (_ _) m

それでは今話の後書はこの辺にて。

天破でした（、△、）／～～

“ ホテル・アグスタ【余興】 ” (前編) (前書き)

まだホテル・アグスタ(アニメ7話)なのに気づけばラスボス戦の如き雰囲気。

どうしてこうなった。

このお話を読む際の注意事項っす(・ω・)

・ユーノカッコイイです。マジイケメンです

・遂に無還者本気モード(?) ……!!?

・戦いはまだまだ続いたり続かなかったり ※続きます

・ちよつと自分でも納得できない箇所がいくつかあるので変更する可能性があります。 ご了承ください。

・後書きは作者が壊れた結果です。 スルーお願いします(・∀
、) bグッ!

、今日の挿入歌(作者の気分で登場するコーナーです)

V S デミス戦イメージ曲 『バベル』 歌…初音ミク様

ホテル・アグスタ編 BGM 『タイヨウノハナ』 歌…3L様

V S 無還者第二回戦イメージ曲 『BLAZE』 歌…k o t o k
O様

それでは、いつにも増して駄文なこの話を受け入れる勇氣のある方はどうぞお進みくださいませ…m () m

“ホテル・アグスタ【余興】”（前編）

———現在の状況———

（ホテル・アグスタ内）

ユーノ・スクライアVS無還者：継続中

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、高町春斗：無還者の出現に気づくも、我先にと逃げ出すオークション参加客に押され現在行動不可能

リン・アルデイス、メビア・アルデイス、ライム・ローディウス：同じく、オークション参加客に押され行動不可能。ただしメビアは無還者が現れた瞬間に既に離脱済み

（ホテル・アグスタ周辺）

ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、エリオ・モンデュアル、キャロ・ル・ルシエ：異変に気づくが、情報系統の錯乱や念話や端末の阻害魔法により動きたいが動けない。

ヴィータ、ザフィーラ、シャマル、フラン・T・ハラオウン：異変に気づくが、同じく念話及び端末が使用不可能な状況に気づく。ヴィータとザフィーラはホテル・アグスタ内へ、シャマルとフラン

は警戒しつつ新人魔導士の元へ

【ホテル・アグスタ内部】

ユーノvs無還者side

さて、此方はユーノと兵器の戦闘場面――。 在り来たりな言葉で、尚且つその内容を簡潔に纏めると。

「『――警告…第2章29項及び第2章66項。 『鋼の軛』並びに『スターライトブレイカー』発動準備開始。 ↓完全発動まで残り7秒』」

戦いは、第三者から見れば完全に無還者の“蹂躪”だった。

ユーノの体を魔力によって白い鎖の形に編まれた軛が縛り付け、そこに桃色の巨大な閃光が放たれる。

いくら並行魔法使用に自信があるユーノでも、無敵とすら言える目の前の“兵器”と戦うこの戦闘は無茶以外の何者でも無かった。そしてそれは本人が重々承知している事でもある。

「――っ!!（ザファイラの“鋼の軛”になのはの“スターライトブレイカー”、しかも補助にははやての“スレイプニール”…よくもまあ、僕の知ってる魔法ばかり使ってくれた物だねっ!!!!）」

味方が使用した際は頼もしかった白い軛や桃色の閃光は、今の彼にとっては全て自分の生命を狩る死神と同義。全壊約2秒でリミッター完全解除時のなのはの砲撃を撃てるまでに魔力を収束出来る男を前に、彼は冷静に考え、この状況を改善する方法を一つ一つ打っていく。

―――バインド拘束魔法解析、解除!!

目を瞑って集中し、自分の身体を引き裂こうとしている鋼の軛を破壊し、解除する。と同時に桃色の巨大な砲撃が放たれ、彼は恥も外聞も気にせず、必死に床を転がることでそれを回避する。

轟音が迸しり、壁に深刻なダメージが及んだ。

直撃どころかカスリもしてないのに、体中に張り手を食らったかの

ような錯覚を覚える。無限書庫で本ばかり読んでいたせいで悪くなった視力の為に掛けておいた眼鏡が吹き飛んでしまうほどだった。

「『警告…第2章7項。』

『約束された勝利の剣』エクスカリバー 発動準備開始。

↓完全発動まで残り4秒』」

(!?! マズツ—————)

更に追い打ちをかけるかの如く、きっかり4秒後に放たれたのは強大で強烈な王の放つ筈の斬撃。

当然ユーノは、目の前の兵器がもし実在するなら宝具、否、ロストロギア当然である“約束された勝利の剣”エクスカリバーを持つてゐる等とは考えない。その無限とも呼べる魔力が、この凝縮された斬撃系統の魔法を放つ事を可能にしているのだろう。

簡単に言うなら、目の前の男はただ“凝縮した魔力を斬撃の様に放った”という事になる。並みの魔導士なら恐らく放てるかどうかすら難しい所だろうが、兵器はそれを放った後も何やら呪文を呟いている。この程度は彼にとっても“簡単”なのだろう。

そんな考えを苦い顔で巡らしている間もガガガッ!! という音を立てつつ、大地を削りながらユーノへ高速で接近する魔力による斬撃。

当然、ただで喰らうわけにもいかない。ユーノは“こんな高密度の魔力攻撃は、一度放てば直線状にしか進む事が出来ない”事を自らの知識を総動員し即座に看破。しかしその速度は無視できるも

のではなく、看破したと同時にもう一度右へ飛ぶように避ける。

再び斬撃が壁に直撃する。魔力でのみ構成された攻撃で、壁に斬撃傷が出来る事など普通はありえない。しかし現実には切り傷が出来ているのを見ると、今の攻撃はそれほど鋭利で、強力な物だったのだろう。そう思うと寒気がした。

此処で、このような絶望的な力の差で何故ユーノが未だに生きているか言及しようと思う。――それは一重に、先程ユーノが指摘した『兵器は人間の急所しか狙えない』という弱点とも利点とも言える箇所であった。

そこで兵器はその言葉の意味を読み取り、即座に“兵器の心”へその問題点への修正を完了する。しかしそれこそがユーノがこのオークション前日からずっと練っていた策であり、そしてその策は現在見事に実っていたのである。

兵器はその攻撃方法を、『急所を狙う』事から『身体ごと潰して木っ端微塵にする』事へと変更した。つまり放つ一撃をほとんど小細工なしの対単独専用の極大級魔法へ切り替えたのだ。

現に今、彼の攻撃方法は“約束された勝利の剣”を始めとする“スターライトブレイカー”等のS級以上の攻撃のみである。恐らく、その強大な魔力でただの魔力弾を何万発と連弾されていたりでもしたらとうにユーノは生きては居なかっただろう。

そしてS級以上の攻撃方法は、いずれも強大な力を持つ代わりに大体は何かしらの弱点が存在する。相手が相手なので、魔力量や純

粹な身体能力でその弱点がカバーされてしまうこともあるにしろ、先程の攻撃のようにただ直線上に進むだけの攻撃や拘束魔法で相手の動きを封じてからの極大砲撃というパターンなら彼でも避けることが可能である。

自分の生命を賭けた博打でもあったが、この頭脳戦は問題点を取り込み改善する機械的な思考を利用したユーノの勝利だと言う所だろう。それが果たして本格的な勝利につながるかどうかと言えば、絶望的だとは言えないが。

「（だから、避けられる）」

続いて放たれたのが、彼とは腐れ縁の青年が扱っている魔法でもある『エクスキューショナー・ステインガー・ブレード』。底なしの魔力から放たれるそれは鋭利で且つ危険な物だったが、ユーノは自らが得意とする結界魔法でそれを防ぐ。何本か突き刺さったが、多重にも展開した自らの結界はその刃をほとんどを弾き、その刃を魔力素へと還した。

それを見届けると彼はすぐに結界を消し、バッグステップで後退する。昔と違い、今はなのはの様な砲撃役もフェイトの様な攪乱役もはやての様な広域殲滅役もない。

ならば、自分がやるしかない。

何度も悩み抜き、そして決心したその“誓い”を胸に、彼の目に先程までとは異なる光が灯る。

「『警告…第12章77項。 ユーノ・スクライアに敵意を確認。
第一級警戒モードへ移行。 ↓同時にユーノ・スクライアのデー
タを更新します』」

それを見抜いたか、無機質な音声がユーノの耳に届いたと同時に男
の周囲へと障壁が展開される。

結果を得意とするユーノは、一目見ただけでその障壁の異常性を見
抜く。

一般魔導士には不可能なレベルの、障壁を超えた障壁がいくつも展
開されている。

あれを撃ち抜くには、分かりやすく言って現在のなのは本気のス
ターライトブレイカーが三発は必要だろう。

しかし、だからどうした？

「僕には残念なから、君を救う力はない」

その顔に恐怖は無く、存在していたのは兵器に対しての悲しみ。

彼は何もかも見通す様な神でもないし、どんな物でも救える様な権

力者でも無い。

しかし、心優しい彼は例え命を失う事になろうとも『例の研究』を見逃すことは出来なかった。その選択が間違っていたのか、合っていたのかなど振り返ったって仕方がない。

彼は今まで、ひよんな出会いから生まれた繋がりを胸に、自分の信じた道を精一杯、後悔しないように生きてきたのだ。

もちろん罪悪感だってある。自分がいなければこの道に引きずり込まなくて済んだ筈の女性を思い浮かべ、彼は何度後悔したことだろう。しかしそれでも彼は進んできた。例え敵が最強クラスの大魔導士でも、あらゆる世界を崩壊へと導いた化け物でも、管理局の純然たる“闇”そのものでも。

そしてそれが、最悪の結果を生む可能性があるを知って、尚。

「だから、僕は此処で退場するかもしれない。けど、僕のやろうとした事は遺るんだ」

兵器にはその言葉の意味はわからないだろう。

分かるはずもない。

だが。

「だって——ただで死ぬ事を嫌がるくらいには、僕にだって人間らしいところはあるからね」

その目は、人間の何もかも諦めている姿を見てきた、兵器“無還者”の知る人間では無かった。

人間全て、一度は経験した事のあるはずの“四諦”が全くその目に宿っていなかった。

「……ッ!!」

「『!』」

その事に関して情報を整理している最中、確率的に有り得ない筈のユーノ・スクライアからの“攻撃”が一瞬彼の動きを止めた。

否、それは攻撃と言えるのかどうか。精神的な拘束なのか、左手が急に満足に動かなくなった。本体の動作の故障かと思ひ、同時に左手を解析する。

同時に、その紅い目が大きく見開かれた。

左腕の中に、極小の“結界”が形成されていた。

その結界が自分の腕に通っている神経を囲み、電気信号を遮断して

いた。

「『————警告…第12章23項。 ユーノ・スクライアによる攻撃を確認。 ↓左腕関節部の伝達神経の電気信号の遮断を確認。 ↓結界を解析した後破壊、本体への異常が無い事を優先的に確認しまし』」

「遅いよ」

聞こえたのは、静かな声だった。

その直ぐ後に聞こえたのは、聞いただけで吐き気を催してしまうかのような破裂音だった。

一瞬。

痛みすらなく、自らの左手が吹き飛んでいるのを確認した“無還者”は再び大きく紅い瞳を見開き、揺らす。

「原理は簡単さ。 誰も実行しようとしただけなんだ」

ユーノ・スクライア——当初は一瞬で終わらせるはずだったその存在が、無還者の中で警鐘を鳴らし始める。

「相手の体内に結界を形成して、そしてそれを暴発させて破裂させるだけ……。でも誰も試そうとしなかったし、誰も使おうとはしなかった。うん、まあ管理ぼくろ局員に取って多分この方法は異端だからね。“正義”じゃないって言われるのは目に見えてる」

自分を前にして、生を諦めないその態度。

更には無還者本体の四肢の内一つを破壊。

さらに付け加えるなら、まだ此方は一撃も攻撃を与えていない。

「でもね、そんな事もうどうでもいいんだ——さっきも同じようなこと言ったけど、僕にだってまだ大事な人ややり残した事を思い浮かべる程度にはまだこの世界に未練があるから」

それは彼らしい笑みだった。

幼馴染に、親友に見せていたいつもの笑み。こんな彼の事を誰が弱いと言えようか？ 誰が馬鹿に出来ようか？

彼は生きる事に必死で、でもお人好しで、何処か甘くて人間味溢れるただの“人間”だ。

普通の人間として当然の事をしているだけなのだ。

しかし、それが理解出来ない“兵器”は。

人間そのものを“知る必要の無い事”と処分するようにプログラムされた無還者は。

その“心”を危険視し始めた。

「『警告…第1章42項。 本体の右腕の損傷を確認。 ↓修復作業に移行』」

グチャグチャグチャ!! と気味の悪い音が発せられたと同時に、吹き飛ぶ前と全く同じ形の腕が傷口から生える。

驚異的な自己再生能力。 もちろんそれを知った上で、ユーノ・スクライアは未だ逃げずに戦う。

「『警告…第12章72項。 ↓ユーノ・スクライアへの警戒ランクをSSへ上昇させます。 同時に、管理者へ兵器本体のリミッターの解除申請…申請許可確認』」

もう死体とユーノと兵器しかない会場の中、機械的な音声が響く。

未だ戦いは終わらず。

そして、始まってもない。

「『↓
“ ” の使用開始』」

兵器『無還者』VSユーノ・スクライア。

ある意味で、この戦いは今ようやく始まったばかりなのかもしれない――。

＊

【ホテル・アグスタ外部】

スカリエッティside

響いたのは轟音だった。

森の中からでも、それは普通に確認出来た。

「!?!?」

「……!」

「むっ!?!?」

森の中に潜んでいた、スカリエッティグループの面々――ゼスト・クライガンツ、ルーテシア・アルビーノ、ディールはその轟音と魔力に驚きを隠せず、ただ目を見開く。

明らかにホテル・アグスタの様子がおかしい。

最前列で待機していた魔導士達が混乱し、慌てた様子でアグスタ方へと戻っていく。普通に考えて、オークション会場に何かあったと思うべきだろう。

「……………」

その中でもディールの顔は、既に青を超えて白くなってガタガタと震えている。あの気高く、しかし何処か子供っぽい同一人物と思

えないその姿にゼストとルーテシアは驚きを隠せず、「どうした？」と質問した。

ディールは口を開いた。

その答えは、酷く簡単で残酷だった。

「逃げるのじゃ」

震えている声は、彼女の恐怖を表している。

「兄上じゃ……………“無還者”はあの会場ホテルに来とる！！ 妾はともかく、お主らはいても殺されるだけじゃ！！ 逃げなくてはまずい！！」

「「！！」」

その顔は必死で、これ以上余力を残していないかのようなだった。

兵器の話はゼストらも聞いている。説明も受けた。信じられないような力であり、最初は嘘かとも思ったがジェイル・スカリエツティやディールの真剣な顔と念には念を押したかのような態度で信じざるを得なくなった。その後常に警戒している。

「つ…………スカリエツティ！」

『ディール、状況は理解しているよ。ゼストとルーテシアは此方で回収しよう。君はどうする?』

「妾はここに残る」

「……! (フルフル)」

短くバツサリと言い切ったディールのドレスの裾へ、ルーテシアがその目を向けて首を横へ振っている。幼いながらも、恐らくこの魔力の禍々しさと邪悪さを感じ取っているのだろう。その顔はディール以上に青く、少し震えている。

だからこそ彼女は此処にいるという事がどれ程無謀なことか直感で理解していた。ルーテシアはディールにとっても懐いている。もし彼女が居なくなってしまうような事があれば、恐らくかルーテシアは――

「大丈夫じゃよ、ルー」

そんな彼女へ、既に動揺も収まったのかディールが優しく声をかけて頭を撫でる。

「必ず戻ってくる。その時にまた、皆で一緒に遊ぶのじゃ」

「……本当?」

「本当じゃとも。 妾は約束は違えん」

それだけ言うと、ゼストに向けて小さく頷く。ゼストはその意を正しく汲み取り、「生きて帰れよ」と小さく一言残してルーテシアの手を握って森の奥へ歩いていった。この奥にはスカリエッティのラボへの転移中継ポイントがある。そこまでたどり着けば何とかなるだろう。

「……生きて帰れよ、とな。 無理かもしれんのう……すまん、ルー」

少し小さく笑う。

先程はかなりの失態を見せた。 小さい頃の恐怖が蘇ったとしても言うべきか。

しかし今は心が落ち着き、少しは冷静に物事を考えられるようには頭が冴えてくる。

自分の今すべきことは何か？

それを的確に見据え——ディールという名前を与えられた、NO. 5『拒絶者』もまた動き出す。

＊

??? side

ホテル・アグスタ屋上――。

粉碎された警備兵とデバイスとヘリの残骸がそこら中に散らばる一種の地獄絵図の中、座禪を組んでいた男がふと目を開けた。

周辺には炎が燃え滾っているのにも関わらず涼しい顔で座禪を組んでいたというのも恐ろしいが、そんな中で何かを察してホテル・アグスタ内部へと耳を傾ける姿もかなり異常。少しの間、男はその耳を少し動かしていたが少しだけ眉を上を釣り上げた。

「……ほお、”を使うのか。ユーノ・スクライアとはそれ程の力を持つ者か？ ……いや、恐らく本人の実力ではなく“兵器の心”^{ウェポンマインド}の弱点を付かれたか」

この男、“兵器の心”の弱点を知っている。自分に問題点があった場合は即座にそれを修復する癖がある事、更に魔術や技を連発すると“処理落ち”が起きて一瞬だが動く速さが遅くなる事など。

後者はともかく、前者はある意味で致命的とも言える。敵が適当な言葉を言う分には当然耳を貸さずに殺して黙らせればいいだけなのだが、もしその言葉が的中していて、“兵器の心”^{ウェポンマインド}がその問題点を認めた場合はそれを修正してしまうのだ。

この時、その裏をつかれる可能性があるなどと言う事は考えない。^{ウェポンマインド}兵器の心は確かに感情^{こころ}を削ぎ落とすには便利な物だが、所詮はたかが人間が作った洗脳魔術^{プログラム}。穴がたくさんあるのは当然といえよう。

寧ろ生き物が作り、動かしいる存在に弱点がない物など有り得ないのだ。魔法はAMFで軽減ができる。それが無理ならデバイスその物を破壊する。それも無理なら質量兵器かロストロギアを盾もしくは使って戦う。この世界で言う“当然の力”も、例として挙げただけでこれ程簡単（簡単かどうかは別問題だが）に対策が出来るてしまう。

だからこそ、“この世界のルールで説明できない何か”はとてつもなく恐ろしい。

「……ユーノ・スクライア、か。確か無限書庫とか言う場所の司書長だとか言っていたな。この様な運命で無ければ、もしかしたら吾輩もその者と知り合えたかも知れぬが……………」

だからこそ、男は再び目を瞑る。

これから始まるのは、戦いではない。

虐殺だ。

「残念だ。 ユーノ・スクライア……しかし汝はある意味幸運だよ。
この世界のルールでは到底説明できぬ概念を垣間見れる」

果たして何分持つだろう。 1分? 3分? 5分?

それは恐らくユーノ・スクライアの“恐怖”次第だろうが……どんなに自分に自信のある人間でも、心の底から恐怖を感じ得ないという事は有り得ない。 しかし無還者相手に逃げずに戦う事を選択する様な人間だ。 それは流石に、男でも未知数な存在。

「遠い昔にも ” を使い逃げなかった者が確か2人いたな
…あの者達は、殺すのも惜しかった………名はなんだったか……
この世界ではほとんど見ることの無い、真っ直ぐな信念を持つ者だった。 もしあの様な者達が研究所に1人でも居てくれたのなら……」

それはただの願望だ。 しかももう二度と叶わない、無駄な思考。

そう考えた男は、目を閉じたまま頭を横に振り、再び瞑想を始める。

そして一言だけ、その思考を振り切る為に。

「本当に残念だ……吾輩の様な化け物ではなく汝の様な男が主の傍にいたのなら——この未来は、変わっていたかもしれないのにな……」

そう呟き、それきり喋らなくなる男。

その姿はさながら聖人の様であり、極悪人のようであり、愚者の様であった。

＊

ヴィータ・ザフィールside

走る。

走る。

走る————。

最前線どころか、あらゆる防衛線を完全に無視して起こり始めた『異変』。

ホテル・アグスタ内にいた魔導士とは一切連絡が取れない。何らかの方法を使って念話や端末が阻害されているのだろう。いや、もしかしたら既に――

「っ!!」

なのはやフェイト、春斗、そして自分達の主であり隊長であるはやてが、そう簡単に死ぬ様な人間じゃないことは彼女達自身が重々承知している。

アグスタ内は予想通りの大混乱だった。我先にとアグスタから出ていくオークション客、人にぶつかろうが人を踏もうが構わず飛び出していく。

戦争を想像した。

彼女達に記憶はない。だがその時味わった痛みや苦しみは身体が少なからず覚えている。夢でもたまに見るベルカ時代――即ち彼女達がまだ闇の書であった時代。

奪い続け、奪われ続け、結局得る物など何も無かった時代――。今この場にるのが改めて奇跡であると実感させられる。

今も彼女達の目の前で雪崩の如く逃げる客ら。その目に宿っているのは恐怖。殺されるかもしれない、という純粹な恐れ感情。

記憶にないはずの既視感を感じ、目を瞑ってそれを振り払う。

「行くぞ、ザファイラッ!!」

「応!!」

人ごみをかき分け、入口からアグスタ内へ踏み込む。

——と同時に体全体に違和感と悪寒を感じて、踏み込んだ瞬間に未だ人が雪崩の様に押し寄せる中を跳躍して、人の頭上を飛び越えてそのデバイスであるアイゼンを“入口”へ叩き込む。

ガアンッ!! と音がした。

一瞬だけ、真っ黒な魔方陣が見えたかと思うとアイゼンが離れたと同時に消えた。

「ッ…!?!」

自分は、何もない空間を叩いた筈なのだ。しかし現に自らのデバイスで叩いた場所には黒い魔方陣が浮かび上がった。悪寒の正体はこの魔方陣を通ったから——つまり、この魔方陣には何らかの仕掛けがある。

しかし今も人は悲鳴を上げてホテルの外へ逃げていく。もちろん

先程の魔方陣を通っているはずなのだが、一向に何か起きる気配はない。

「ヴィータ、気になるが今は主の方が優先だ。行くぞ」

「…ああ、そうだな！」

そう、確かに気にしている時間は無い。今も彼女達の主は戦っているかもしれないのだ。主の危険に駆けつけぬ騎士など、騎士では無い。

はやては意外と早く見つかった。その周囲には顔を青く染めたなのはと、悔しそうに顔を歪めている春斗とフェイトがいた。どうやら皆固まっているようだ。

「はやてっ!!」

「!? ヴィータ……来てしまったんやな………」

「どうしたんだ!? ここ、オークション会場のドアの前じゃねーか! こんな所で休んでないだ」

「違うんや……入りたい、入りたいけど……入れないんや」

「……え？」

予想もしない答えに呆然とするヴィータの横を通り、人間形態になったザフィーラが完全に開いている筈の扉へと拳を振り抜く。

しかしその拳は、先程現れた魔方陣の様な物が邪魔をして止められた。

「……これは……!!!?」

「恐らく、何らかの魔術だね……一度この魔方陣をすり抜けると、もう中へは入れなくなるんだ」

フェイトが苦々しく、齒を食いしばりながら考えを話す。

「血管とかにある“弁”見たいな物とを考えてくれりゃあ良いと思うぜ……“戻る”つつーことが不可能なんだよ、この術は……」

「で、でもあたし達は入口から来たんだぞ!? “戻る”んじゃ無くて“入る”筈なのに、どうして……!!!?」

「その辺はこれをやった敵の恐ろしい所だ。ご丁寧にこんな意味の分からん術の他に別の結界を何重にも張ってある見てえでな、全部ぶち抜くにはなのは姉のスターライトブレイカーが五発は必要らしい」

「……っ、そんな……「しかも、や」」

はやてが厳しい顔で、真っ黒な障壁に隠された先のオークション会場を見据える。

「これをやったのは『例の男』や」

衝撃が走った。いつもは冷静のザフィーラですら顔を歪めてしまう。

シグナムを殺しかけ、新人魔導士をも狙い、更にはレリックを強奪した挙句に局員を全て虐殺した張本人——それが、目の前にいる。

「更に悪い事にな」

そのはやての言葉に、沸騰しかけた彼女たちの頭が急速に冷えていく。

そして次の言葉で、背筋に悪寒が走った。

「中に、ユーノ君がおる……今回の男の狙いは、ユーノ君の命や」

口の中が乾き、冷や汗が垂れていく。

その心を感じるのは、騎士としての直感。

ユーノ・スクライアは、

この場で、死ぬ。

何もできず、しかし何もされず、ただただ拳を握りめて顔を俯ける
ことしかできない。

そんな絶望の空気の中。

ひとつの、声がした。

「助けたい？」

少年の声だった。

なのははその声、その姿に見覚えがある。

「貴方は……!？」

「や、久しぶりですエース・オブ・エースさん。そして初めまして、機動六課の皆さん」

ニコニコと笑顔でやってきたその少年は、この場にはかなり不釣合
いであり。

此方の害になることはしなさそうだが、利になる事もしなさそうな
存在だった。

少年は思いついたように自己紹介をする。

「申し遅れました。僕の名はメビア。真租の吸血鬼で、アルデ
イスという国の王族をやってます。——今回は皆様に、“交渉
”を持ちかけに参りました」

＊

アルデイス side

「――状況は理解したわ。 結局の所、全てあたし達の読み通りだったってことね」

「唯一、彼の任務内容に“暗殺”が含まれていたことが誤算だったかな……」

「そうね、確かユーノ・スクライアだったかしら……ああ、スクライア一族なのね。 それなら一応お世話になった事もあるし、助けてもいいかなーって気はするけど………あら？」

「どうしたの、お姉様？」

「……メビアは？」

「ああ、言うのを忘れていた。 あの馬鹿は『彼』が出現した瞬間には既に居なかったぞ」

「ええ、その逃走の速さたるや全力で飛ぶお姉様とほぼ互角かそれ以上だったわ」

「はあ………相変わらずねえ……ま、いつか」

「……………いいの？」

「多分メビアの事だし、機動六課に何らかの交渉か相談でも持ちか

けているんじゃないかしら。多分あたしよりも国の事考えてるのってリンとメビアとライムだけだし……特にメビアは絶対に国の不利益になる様な事はしないと断言できるわ。だからこっちも独自に動きましょう。まず、ハク」

「なんだ？」

「貴方は探索魔法で、ホテルから逃げてきた客達に怪しいのかいないかどうかの探索。出来そうだったら頭の中を覗いちゃって情報収集をお願い。王として許可するわ」

「了解した」

「ライム、リン。貴方二人はホテルに仕掛けられてる術式の読み取りと出来るなら解除。多分『あの人』が仕掛けた物だろうし、もしかしたらメビアがその関係で動いてるかも知れないけど一応ね。読み取りができれば国に帰ったときにあのマッドサイエンティストが喜んでくれるだろうから」

「お姉様、あの人は興奮すると私やライムを普通に襲ってくる可能性があるんだけどどうすればいい？」

「檻でも仕掛けたりとかしてなんでもいいから対処しなさい。この前肉の骨を投げたらすごいスピードで追いかけてったわよ。頭いいのか悪いのか分からないのよね、彼女……まあ気を取り直して最後、あたしとドーナはしばらく待機で」

「……！？」「ガン！！」

「うん、妥当な判断ね」

「妥当だな」

「ああ、素晴らしい判断だ」

力加減という物を知っているリンやライム、メビアやハクはともかくロザリーとドーナは動いた瞬間にミッドチルダごと崩壊させかねない力をもっている。さらに言えば、ドーナもロザリーも戦闘狂じみているところがあり、たまに周りが見えなくなって当たり構わず災害をまき散らす事すらあるのだ。この状況での待機は正しいといわざるを得ない。

「……！！　　ロザリー………わたし、中に入りたい……」

「貴方がいる周辺って虚数空間にいつ沈むのかわからないからそれなりに実力のある人以外立ち入り禁止区域になってるの知ってる？　　ダメ。　　もう少し待ちなさいって」

「……ケチ」

「ケチで結構よ。　　それだけでこの世界が守れるなら」

結構切実だった。

「じゃ、各自やる事を頭の中で反芻しつつ……始めなさい」

『了解!!』

王としての命令と共に、瞬時に散開するハク、リン、ライム。

後に残ったのは、ロザリーとドーナのみ。それを確認したロザリーはふう、と一息ついてふくれっ面になっているドーナへ振り向いた。

「さ、てと」

「……」

「行きましようか」

「……え？」

その口から出たのは悪戯っぽい声だった。ドーナも驚き振り向いてみると、そこには笑顔を浮かべたロザリーの姿が。

「何を驚いた顔してんのよ。せっかくのお祭りよ？ 楽しまなきゃ損でしょ？」

「……………」

「で、来るの？ 来ないの？」

「……行く!」

「そう来ると思ってたわ。それじゃ、まずは屋上に向いましょうか。何か面白い発見がある気がするのよね」

ニヤリ、と歪んだ笑みを浮かべたと同時に背中からバキベキボキバキバキッ、と不自然で異様な音が木霊する。

数秒後、グシャッ! と音を立ててその背中から生えたのは巨大な龍の翼。

鱗は真っ黒で、翼膜は紫色の渦々しくも何処か神聖な感じがする翼だった。

対するメビアの口も少しだけ歪むと同時、“ルール遊戯造界”を発動して世界の位相を弄り始める。

万物に降りかかる重力を自分に対してだけ0にする。

音速で飛ぶことで発生する空気抵抗・並びに空気摩擦等を全て無しにする。

音速で飛ぶ事で起きる窒息などを起こさぬ様に、自分だけの周囲には常に空気を纏わせるようにする。

それだけで、彼は宇宙空間をも自在に動ける怪物となる。

「行くわよっ、化け物^{ドーナ}!!」

「……うん、行く。一緒にね、怪物^{ロザリー}」

ドンッ!! という音が響く。

彼らが上へ跳躍し、飛び上がる為に踏み込んだ場所は爆発したかのように破裂していた。

常人の目には見えない速度。音速を超えて飛び上がる化け物と怪物は、僅か数秒で屋上へ到達する。

彼らが見た光景は、一種の地獄。

恐らく誰かが来るために止まっていたのだろうか。ヘリは完全に潰されて、真っ赤な炎が立ち上っていた。その周辺には人の内臓の様な物が無造作に転がっている。見張りをしていたと思われる魔導士も首から上以外はスクラップになって死んでいた。

だがこの常人なら吐いてしまうかの如き光景に、彼らは顔色一つ変えず平気で炎の中を、人の身体だった物の上を歩く。彼らに取ってこの程度の光景なんぞ日常茶飯事。歯向かってくる人間や自分達を虐げられる人間を殺していけば、これくらいは何時でもお目に掛かれると言っても過言ではない。

果たして、ホテル屋上の中央に到達した。

そこにも異常な光景が広がっていた。

1人の男が、座禅を組み座っていた。

この燃えるような暑さの中、肉が腐るような臭いの中、顔色を一切変えずに。

“人間ではない”。そう直感した彼らは、一瞬ののちに警戒体勢に突入し何時でも動ける様に構えて目の前の男を見る。

その気配を感じたのか。果たして、男がゆっくりと目を開いた。

何処か神聖だが、しかし何処か愚者の様な雰囲気を出す、奇妙な男だった。その目がドーナとロザリーを視界に入れると、スッ、と目を細める。

「……久しい、という訳でもないか。その説は世話になったな、ロザリー・アルデイス」

「えっ、誰？」

だが突然その緊張感は消え失せた。ガクッ、と少し力が抜ける様

に体勢を崩すドーナと男。　しかし一瞬の後には気を取り直し、男は笑いながら言った。

「この姿では分からぬか。　汝が我が主を保護した際、その子供役をやっていた者だ」

「……………えー!!!?　嘘だ!!　外見が違いすぎるもん!!」

「外見なんぞいくらでも変えられる。　そこの男もそうだろう?」

「……………うん」

「今程あたしは自分の幼児体型を恨んだことはないッ!!」

ぜえー、ぜえー、とツツコミの様なものを終えて、しかしロザリーは笑っている男を見据えて言葉を紡ぐ。

「それはまあ置いといて……………貴方なら知ってるでしょ、この術式。解いてくれないかしら」

「それは困るな。　今主が戦闘中だ、今術式を解除してしまえばクラナガン全域に被害が出るぞ」

「嘘……………と言い切れないのが怖いわね。　まだ実力も未知数だし」

「ククッ……………で、どうする?」

「……決まってる」

ボツ！！ という音がした。

無重力状態のドーナが、その拳を男へ叩きつけた。しかしそれは障壁に阻まれ、再び爆発するかのような音が辺りを埋め尽くす。

「……………わたしにはこのホテルがどうなっても関係ないもん……」

「奇遇だな、吾輩もだ。『特級指定次元犯罪者』ドーナ・クライオンよ。そしてアルデイス国王女のロザリー・アルデイス……その様子を見ると、汝らも暇そうだな」

男の目が完全に見開かれたと同時に変化する。

紫色の不気味な両眼が、瞬いたと同時に黒と灰色の極彩色の目へと変貌を遂げる。

「どれ、暇ならば一つ殺し合いでもどうだ？」

「あら、ドーナはともかくあたしをデートに誘う気？ 高くつくわよ？」

「構わんさ」

座禪を解き、その足で立った直後に黒色の魔方陣が二つ展開。中から現れたのは、二対の剣だった。

一つは白。一つは黒。彼が生前によく使っていた武器だった。

「どうせ、直ぐに口も聞けなくなる」

その言葉と同時。王女は腰を深く据えて手を前に構え、化け物はその目を細くし力を抜き、人外はその二対の剣の黒を前に、白を後ろにして構える。

人外が言った。

「申し遅れた。吾輩の名はデミス……まあ偽名だがな。深くは言えぬし主にも言っていないことだが……生前——そう、古代ベルカ時代の大戦にて、“王殺し”の宿命を背負っていた、王だ」

一閃——否、正確には八閃。

剣が動いたとロザリー達が知覚した瞬間には、始まっていた。

雷、炎、氷、光のあらゆる斬撃が——ホテル・アグスタ屋上で吹き荒れる。

過去の王と幻想種の王、最強の精霊との、殺し合いが始まった。

＊

「……これは、不味いわね………」

任された防衛ラインで何もする事が出来ず、混乱するスバルを静めた後に冷静になって自分のすべきことを整理するのは――機動六課所属ライトニング分隊のティアナ・ランスター。

不安そうに自分を見るスバルを落ち着かせながら、今の状況を整理していく。

まず念話や端末による通信が出来ないのは痛い。これで大多数の魔導士が使う通信手段はほとんど完全に絶たれたと言っても過言ではない。現に、自分達の様な新人ではないプロと見られる管理局員も先程錯乱しているのを見かけた。情報が得られないというのはやはり誰にとっても怖い。スバルも、ティアナが居なければ何かに特攻して最悪死んでいたかもしれないのだ。

更に、ホテル・アグスタ全面に薄い結界の類が貼られているのがわかっていて。これはスバルに思いつき叩いてもらった結果、その一撃が弾かれてスバルが転倒してしまった事で判明した。触っ

て見ると、任務で地球へ行った際に遭遇したあのロストログアの様な感触がした、とスバル。つまり打撃・斬撃・魔力弾無効の結界と言うわけだ。どんな結界だ、と思わなくもないが実在しているのだから恐らくが展開できる何者かがいるのだろう。

壁を破壊しての侵入、仲間との通信も不可。この現状を解決するには、新人魔導士の彼女達だけでは荷が重いだろう。

恐らく、それまでの彼女ならとうに諦めていた筈だ。

「（あたしは、凡人じゃ無い）」

かと言って特別でもない。まだまだ隊長陣には足元にも及ばないし、あらゆる点で精進が足りないと思っている。

でも。

大好きなあの人が、そう言ってくれたから。だから彼女は諦めることが出来ない。

「（諦めない…… “無敵”なんて無いんだ……絶対に何処か弱点が……っ!!） ? そういえば……」

「え?」

「春斗さんがあの時、あのスライムみたいなロストログアを捕まえ

て持ち帰るとか何とか言ってたわよね。 あれ、どうやって掴んだ？」

「えーと……こう、スライムの中に少し指を突っ込んで、それでいて手を籠みたいな形にして……」

「……………それだ!!」

「えっ!？」

急に大声を出した自分の親友を見て驚くティアナ。 しかし大声を出すのも無理はないだろう。

彼女は見つけたのだ。

この結界の弱点を。

「スバル。 あんたを見込んで頼みがある」

そして改めて、彼女は自分の腐れ縁の親友にお願いする。

この弱点を付くには、この親友の破壊力が不可欠だから。

「失敗すると、アンタが大変な事になるかもしれない……けど、あ

たしはまだ勉強が足りないから、この方法しか思いつかないの。
お願い、アンタの力、あたしに預けてくれる？」

「……！ もちろん！」

スバルもまた、彼女の願いに笑顔で答える。

「あたしはいつだってティアを信じてるから！ 何でも言って！」

「ありがとう、スバル……それじゃ、まずは……」

実力は未だ未知数、あらゆる全てが規格外な敵へ、新人魔導士が挑む。

＊

「……れ……」

「……キャロ？」

此方はエリオとキャロ。

彼女達も連絡が出来ずに孤立した為、相談した結果まずは仲間との合流の為に発しようとした——その時、急にキャロとフリードが震え出したのだ。

エリオには何も見えないから分からないが、彼女達には見えていた。

それは恐怖。

それは絶望。

それはこの世界では到底説明できない存在——^{ルール}

「エリオ、君……早く……皆に……知らせなきゃ……!!」

「キャロ、落ち着いて! どうしたの!？」

「……あの人が……」

「え？」

「……………あの、リニアレールの事件の時の男の人が……此処に来て……!!」

*

真っ黒な霧の様な物が、渦巻く。

あらゆるロストロギアや骨董品が並んでいた棚はロストロギアごと溶けていた。

床や壁には、焼け焦げた後や無数の切り傷は愚か凍った後すら存在する。

その中で、真っ黒な霧の中心にいる男は——あらゆる傷を負っている、目の前のユーノ・スクライアに向けて告げる。

「『↓その痛みはただの幻痛です』」

至ってシンプルな回答だった。

右肩から先を切り裂かれ、腹や足には無数の穴が開き、更には左目にナイフが突き刺さっているユーノは、その言葉に無理に笑みを作って、言う。

「……そんなことが、あるわけが、ない……幻術でも無いし、血も流れてる感覚が、あるのに……」

しかしその表情は、笑みから直ぐに痛みをこらえている表情に変わる。その苦しそうな表情を凍りついたかのような無表情で見ながら、兵器は更にその言葉に否定を返す。

「『↓その疑問への解答ですが、その痛みは正真正銘貴方の“生存本能”が造り出した物です。↓私はただ――』」

兵器が右手を大きく挙げる。

同時に、ボロ布に身を包んだ骸骨が黒い霧の中から一斉に現れた。

その手には槍や銃、松明を持っている。

「『――貴方へ“死”を与えているだけ』」

骸骨の1人がその槍を放り投げたと同時、ユーノの胸にそれが突き刺さった。たまらずその苦痛に大声を上げて血を吐くユーノ。

しかし彼は死ねない。否、死を受け入れない。

何か、トリックがあるはずなのだ。何か、何か壮大な存在が――

「『トリック――その言葉がどういう意味を示すのか理解しかね

ますが、強いて上げるのならそれは貴方自身です、ユーノ・スクライア』」

「……え？」

すると、普通に心を読まれた。少し首をかしげながら、しかし無表情でユーノの疑問を解消させていく無還者。

「『↓私は今とある能力を発動させています。↓その能力は自分の使用者の思うがままに敵対者へ“死”を与える能力——ただし、一方的に殺すことが出来る訳ではなく相手の生存^{生きる力}本能を削り取る能力、と言えはお分かりでしょうか？』」

相手に“死”という概念を、存在を押し付ける能力？ それを理解した瞬間、この戦いでユーノの身体に始めて悪寒が走った。

心の弱い人間なら瞬時に朽ち果ててしまうだろう。つまりユーノは、自分のある意味異常とも言える現実逃避能力で生きているということになる。余り威張れることでもないような気がするが、この時ばかりはずっと本ばかり読んでいた自分の人生に感謝した。

「……理解できたよ。つまりこれは、僕に“自分は死んだ”って言う事を認めさせる為に造り出された物って訳だ」

「『↓その思考を肯定します。↓見事です、その事実を知って発狂しなかった人間はこれで貴方が三人目です』」

「……三人目？」

「『↓貴方の他の方の名前は極秘事項です。 ↓しかし彼らは最終的にはやはりこの能力で果てました。 ↓そして』」

ゴォツ、と。

真っ黒な霧の様な存在が兵器の頭上に渦巻く。

「『↓説明したにも関わらず、貴方はこの能力の本質を勘違いしているようです』」

「……？」

「『この力は、死を押し付け^{きたる}る能力です。 “あらゆる存在に死は来る”。 この能力の真髄は、対個人では無く—— “対世界” そのものなのです』」

瞬間。

彼の息が、止まった。

「（……ッ！！？）」

息が吸えない。吐くことはできるが、吸えないのだ。

違う。気道に何かされたわけではないはずだ。まるで、空気が全くなくなつたような――

「『↓“空気”という存在に“終焉”^死を与えました。↓この空間では空気という存在は死に絶えます』」

「（そんな……！？ 生物だけじゃなく、物体や存在、概念にも使えるのなんて……！？）」

「『↓対生物の場合は“意思”がある為“即死”しない場合が多いですが、現在の貴方の様に“生”を削る事は可能です。そして意思のない対無生物の場合は一瞬でその存在に終わり^死を与えることが可能です』」

この応用力、この存在感。当然だが、ユーノも改めて体験する。

これが、“死”。

これが、管理局史上最強の所有物と言わしめた“兵器”。

「（……っ、ぐ……息が……！！）」

「『↓対象の生命力低下。↓確実に蘇生の可能性を0にするため、魔術を使用し徹底的に対象を排除します』」

満足に息もできない青年へ、男が近寄ると同時に魔方陣を展開する。

「『警告…第2章11項。 『地に堕ちる紅き十字架』 発動準備開始。 ↓完全発動まで残り5秒』」

声を、絞り出す。

空気が死に絶えたこの墓場で、自分の吐いた息を震わせて。

最期の、言葉を――。

「はぁ…はぁ………ごめ…みんな…」

真っ黒な魔方陣が、展開する。

真っ赤な十字の炎が堕ちる――

ドオンッ！！ という音だけがした。

痛みは、感じなかった。

「『…………警告』」

変わりに聞こえたのは、目の前で自分を殺そうとしているはずの無還者の声だった。

「『第12章89項。 ↓高町なのは及びフェイト・T・ハラオウン、八神はやて、鉄槌の騎士ヴィータ、更に詳細不明のアンノウンを確認。 ↓同時に敵意を多数確認、排除開始』」

バツ、とユーノの周囲にいつの間にか存在していたなのは達から瞬時に遠ざかり、死の概念が羽ばたいた。 真っ黒な霧は、あらゆる全てに平等に死を与えながら牙を剥く。

しかしそれすらも兵器の想定外の事柄が許さない。

ビギッ、と入るはずのない罅が、会場の壁に入るのを見たとはほぼ同時。

その壁が、粉々に砕かれた。

その箇所から光が漏れる。 更にその数瞬後、状況を把握する間もなくオレンジ色の弾丸が数発兵器の本体を打ち抜いた。 撃ち抜かれた箇所は周囲に渦巻いているのと同じような真っ黒な霧になって瞬時に再生したが、同時に“死”の概念による攻撃も止まってしまう。

「『警告…第一章2項。 本体への攻撃を知覚。 ↓サーチ結果、
ティアナ・ランスター及びスバル・ナカジマの物と思われる魔力反
応が——』」

「やあこんにちは。 久しぶりだね、客人さん♪」

連鎖するかのごとく起きる“想定外の事態”。 先程探知したはず
の未確認生命体^{アンノウン}がいつの間にか背後にいと知覚したときには、そ
の者は障壁ごと自分を外へ吹き飛ばしていた。

「『（ギシッ、ギシギシギシッ!!） 警告…第一章12項。 ↓
本体への攻撃を知覚。 ↓背骨及び脇骨数本の破損を確認。 ↓修
復作業を優先。 ↓その後に任務を続行します』」

ティアナとスバルがこじ開けた穴から放り出され、日の光が差し込
む外へと吹き飛び、そのまま森へと突っ込んで激突する兵器。 し
かしその顔にはやはり苦しそうな表情は見えず、その紅い目は冷静
に状況を解析していた。

「『警告…第一章98項。 敵意の増殖を確認。 ↓任務遂行に弊
害があると確定。 ↓単独殲滅プログラムから広域殲滅プログラム
へ切り替えます——』」

———————スターライト・ブレイカー×3、終焉の笛ラグナロク×

2、デス・デミス・ブレイカー×3

一瞬で構築されるのは、それぞれが桃色と白色と黒色の輝きを放つ魔方阵。更に展開されてから僅か数秒でSS級の魔力が収束されていく。

「っ!!!?!」

ユーノ個人を抹殺することから、ホテルごと吹き飛ばす事に切り替えたのだ。それを知ったなのは達は無理があるとは知りつつもすぐさま防御体制を取ろうとするが、数秒後にその必要がなかったと知る。

二つの影が、身軽に飛んだ。

「————ッ!!」

———オーガ・ブラスト鬼神剛拳!!

「————すうー…はあ…えいつ!!」

———エキドナ・ディザスター黒魔女の大災害!!

低く力強い声から放たれた男の拳は一撃で兵器の障壁を何個も粉砕し、更にその数瞬後、可愛らしい声と可愛らしい日傘から放たれた女性の嵐のごとき竜巻は放とうとしていた砲撃を全て巻き込みつつ兵器本体へと直撃した。

「……あ、貴方達は………?」

呆氣にとられたなのはが、どちらも一撃であの男を沈めた女性と男性に向かって喋る。

男は笑って、女は微笑み、自己紹介をした。

「初めまして、か。私の名はライム・ローディウス、アルデイス国王族警備軍補佐だ」

「そして改めまして、私はリン・アルデイス。アルデイスの王族兼アルデイス国王族警備軍副隊長です」

無視できない単語が幾つも出てきた。さらに何か聞こうとするなのはを手で制し、ライムは低い声で呟く。

「まあ色々と言いたいこともあるだろうが、今はそんな場合ではあるまい?」

その言葉が終わる刹那、真っ黒な霧が兵器の居るはずの場所から吹き荒れた。

霧が触れた場所から、草木は溶けて、大地は腐蝕し、そして誤ってその霧に触れた魔導士が急に発火し、うめき声を上げながら燃え尽きて死んだ。それを見てなのは達も顔を顰め、同時にこれはなんなのかと激しく疑問に思う。

黒い霧を纏わせて、男が出てくる。

その紅い目を輝かせ、無表情でこちらを見ながら。

「心配せずとも、今は私達は貴方の敵ではありません。今回は協力します。その勇氣ある子供たちに敬意を表して……」

「ふっ、エース・オブエースよ……いい部下を持った物だな。その二人がいなければ、私たちとてこの結界の弱点に気づけはしなかった」

その興味深そうな視線の先には、少し恐縮してるようなティアナと照れているスバルの姿があった。当然、よく分からないので少し首を傾げると、「それも後で説明するか」と一言述べて前方の敵を見定める。

「『↓敵意の増幅、並びに任務の遂行を阻害する存在を認知。 ↓

先程の魔力や力量、及び情報を元に、敵対者ランクをSSSに設定。
↓この瞬間、兵器の掟が適用されます』」

真っ黒な魔方陣が兵器の足元に現れ、輝く。しかしそれも一瞬で、別段変わったところも無い様に見える兵器の本体は、口を動かした。

「『兵器の掟11項。敵対者ランクがSSS以上と判断された場合、ロストロギアの使用を許可されます。↓掟に従い、危険度SS以下のロストロギア起動準備開始』」

管理局の最高傑作との第二回戦が、始まる。

未だ戦いは、終わりすら見えず、始まりすら見えず――――

ただ宴の参加者達は、見えもしない未来を信じ黙って戦うのみ。

今はまだ、余興をお楽しみあれ。

“ホテル・アグスタ【余興】”（前編）（後書き）

今回はキャラ登場はお休みです。もうなんか色々と、駄文ほんとうすいません。

戦闘シーンなんて 書ける訳が 無かったのさ……！

さてはて、気づけば余興も前編が終わり、次はいよいよ後半へと突入。

“死”の力の応用力の深さを貴方は知る。

酒を準備して、目を閉じて。

今日この時を、この宴を祝いましょう。そして受け入れましょう。

ほら、わかりませんか？

貴方の腹に、風穴が空いてることが。

宴はやはり、まだ始まったばかり。敵役はいても、主役はまだ本格的には登場せず。

あらゆる死の概念を前に、貴方ならどう立ち向かいますか？

さあ、休憩時間も終わりです。

余興は、直ぐにまた始まります。

その死は、幻ですか現実ですか？

貴方は現実それを認めてないだけで、既に死んでいるのかもしれない。
黒い霧は見えますか？
もし、見えたのなら、どうでしょう。

私と一緒に、死の世界で踊りませんか？

次回も御楽しみに m (_ _) m

“ホテル・アグスタ【余幕】”（後編）（前書き）

余幕終了！！ 次回からついにアニメ本編のゆりかご戦を彷彿とさせる戦いの幕が（多分）開くぜ！！

※まだアグスタ編です。

さてはて、なんやかんやでいつの間にか小説を投稿し始めて4ヶ月が経過していました。まさかこんな自分の駄作がこれ程続くとは自分でも驚きです。

その代わり、我が成績という大きな犠牲がありました……私は過去を振り返らない主義なのです。 本当なのです。

と、取り敢えずこの話を読むにあたつての注意事項です！！

- ・遂に本当の戦いが始まるぜ……！！
- ・ユーノの運命や如何に！？ 死の概念が彼へと襲いかかる——！！
- ・vid5巻の影響が少なからず出ています。 お気にせずお願いします（・ω・）ゞ
- ・そして後書きで再び暴走しています（ノ＼、） スルーでry
- ・さあ……夢も希望も無い戦い、始まります。 ※多分嘘です

（今話の挿入歌）

VSDーナ・クライオンイメージ曲 『sweet little sister』 歌…さゆり様

V S ロザリー・アルデイスイメージ曲 『アンチクロロベンゼン』
歌：鏡音リン様

※ニコ動で全部聞けます（、＼、）bグッ！

それでは、何かどっか文が抜けてる気がする様な駄作者が送る駄文
を受け入れる勇気のある方は、どうぞお楽しみ下さい……m（
　　）m

“ホテル・アグスタ【余幕】”（後編）

死の概念を広範囲へまき散らしつつ、兵器はその卓越した思考能力で考える。

自分には何が足りないのか。

人間にあって、自分にはない物とは何か。

自分の目的は“管理者及び依頼者の願いを叶える事”。この他に目的は存在せず、出来る事もこれから先はないだろう。

だが先程のユーノ・スクライアの存在は、自分に保存されているデータを大きく改変させる要因へとなった。先程彼は人間の体内に結界を構成し、それを破裂させる事で本体へとダメージを与えることを“原理は簡単”と言っていたが決してそんな事はない。

まず人間の体というのは大量の管が通っているのだ。痛覚を司る神経から、血管まで数えればそれこそキリがない。そんな膨大な数ある中の一本である、極細の神経を正確に結界の中へ納め、それで尚電気信号のみを遮断するというのは並大抵の実力では出来る訳がない。

しかもこの魔法の恐ろしい所は、障壁が意味を成さない事だ。どれだけ堅固でどれだけ大量の障壁を展開しても、直接体内へ結界を形成するならばそんな物関係無い。それどころか障壁の展開と維

持で魔力と意識を使っている分不利だとすら言える。

どうしてユーノ・スクライアという存在は、その様な攻撃方法を思いつくに至ったか？

彼にあって、自分に足りない物とは何か？

知識？ 魔力？ それとも、何かそれとは違う能力？

違う。知識も魔力も身体能力でも圧倒的に自分が上だ。それは彼も認めているし、データでも証明されている。

何か、ある。

何か、彼にあって、y g b r d x自分に足りない物が。

足りない。何もj s h g f u wかも。

力が。知識i w h dが。何かが。

そうだ、彼は自分と出会ったとき、そして戦闘の最中何をしていただろう？

頭の中にある戦闘記録をもう一度再生する。

思い出した。

彼は“自分が来ると分かっていたからこそこの様な対策が出来た”のだ。

まず、自分が首を跳ねる所から彼は既に予想を立てて、堅固で小さな障壁をピンポイントで展開し、自分の攻撃を防いでいた。

更に、自分の展開する障壁をぐり抜けて攻撃する技術をも身に付けていた。現在のユーノ・スクライアは過去のデータとは別の存在だ。このような魔法を使うなど知らなかった。恐らくこれも自分が来ると分かっているからこそ、警戒し、この魔法を習得したのだろう。

結界や障壁の構成は基礎中の基礎だ。それは兵器も、恐らく彼も分かっている事に違いない。彼はそれをさらに発展させた。ただそれだけの事に過ぎないが、それは現に自分へと効果を発揮している。

人間は確か、この様に“基礎”を元に新たなる技術や魔術を開発すること。“進化”または“進歩”と言うらしい。そしてそれまでに至る行動を“積み重ね”という単語を使って表現する。

その“積み重ね”や“進化”という物がどういう意味を示すのかはやはり分からない。自分にはそれらの行動が全く意味を成さない、元々完成された状態で生まれて来ても同然の存在だから。

だが、その行動に興味があるのも確かだ。

兵器は、より素晴らしい完全へと、より恐ろしい存在へと昇華するべく、その単語の実現にはどうすれば良いのかを考える。

自分にとっての基礎とは何か？

自分に備わっている利点とは何か？

自分はどうすれば“進化”出来るのか？

そんな物は、考えれば直ぐに分かる。

自分の利点とはある化け物のDNAを元に造られたこの肉体と、現在だけで100を超える希少能力とロストロギア、それを扱えるだけの魔力、そして思考能力。

ならば自分の活かすべき利点は何か？

↓希少能力と魔力、及びロストロギアの使用方法和、この肉体の構造の改善。

答えは出た。

ならば任務を続行しよう。

敵はSSS級、“大災害クラス”。先程自分が決めた数値だ。

だが不思議な事に。

今の自分と比較しての敵の危険度は、SS級にも満たなかった。

＊

ゾクッ!!

「「……!!?」」

ロストログアの使用を開始します、と目の前の兵器が言った瞬間だった。

リン・アルデイスとライム・ローディウスの背に、悪寒が走った。

ロストログアに畏れを感じたわけではない——兵器本体から溢れる邪気のような物の本質が変わった様に感じたのだ。

例えるならば、百獣の王であるライオンに人間のズル賢い頭脳が宿ったかの様な——恐怖。

「……リン」

「そうですね……これは、ちょっと……大変な事になってるかもしれません……」

兵器が規則正しい足音を立てて歩いてくる。

ふと、そのまま突進してくるかと思いきや適当な位置で立ち止まって両手を広げた。

その手に、先程から死を撒き散らしていた黒い霧が渦巻くように集まってくる。

更に集まった先から消えていく。そう、兵器はその能力を解除している様に見えた。

「……?」

何をしているのかわからないのも当然だろう。

この霧を解除して兵器に利点があるとも思えない。先程から触れるだけで存在が死んでいくという恐怖を味わっていた彼女達としては喜ばしい所だが、果たしてあの男が自分達に不利な事をするだろうか？

「『……』」

そのまま広げた両手の内、右手を前に左手をその後ろに構えて腰を低くした。同時にその場にいる全員に戦慄が走る。

それ自体は驚くべきことではない。問題は他の何でもない、『目の前の男が構えを取った』という事になる。

これまでは言うなれば自然体。両手をだらんと下げた状態からの極大魔術や殲滅魔法の連弾が主な攻撃方法だった兵器が、今日初めて“構え”を取った。

それはそこにいる全員に寒気を感じさせるには十分であり。

刹那、フツという擬音が付く様な感覚がした。

「……は？」

ライム・ローディウスが柄にも無く間の抜けた声を出した。

一瞬、今何がなくなっただのか本当に分からなかったのだ。

魔法も無く、気配ごと移動した？ 鬼神族や大魔女がいるこの状況で？ 瞬きしたらいなかった、そんな漫画の様な話があるのか？

「――、」

再び寒気が起きた。

誰の声も聞こえず、何も見ようとせず、彼は迷わず振り向き様に裏拳を放つ。

鬼神族の力が完全に編み込まれた一撃。人間の頭蓋骨をも粉々に打ち砕くはずのその一撃は、まるで水を殴ったかのように静かに受け流された。

受け流したのは、真っ赤な瞳をした何かだった。

見えたのは、それだけだった。

腹を貫くかの如き衝撃と苦痛が走ったと身体が知覚したのは、彼は既に気を失う寸前であった。

「（……鬼神、族の、裏拳を、流して……しかも、耐圧障壁ごとぶち抜いて、一撃を……）」

自分の口から声が出ていないことにも気づかないライムは、呆然としているリンへと視線を投げかける。

「（気を、つけろ……彼は……もう……我々の知っている、存在では、無……）」

次の瞬間、彼の意識は真っ暗な闇の中へ落ちて行った。

そしてそれを確認した男は、流れるような動作で身体を動かし、危険人物の行動不能を狙うべく動く。

V S兵器の第二回戦は、幻想種ライム・ローディウスのリタイアが皮切りになって始まった。

＊

——さて……少し時間は遡り、舞台はメビア・アルデイスが機動六課へと交渉を持ちかけた場面へ戻る。

「交渉……？」

メビアの言葉に一番に警戒を示したのは、やはりというべきか機動六課部隊長、八神はやて。それを確認したメビアは口端を少しだけ曲げて、

「流石はドーナの目を付けただけの事はありますね。立ち直りがお早いようで……まあそれはさておき、交渉の内容に移らせて頂きます」

少年の様な風貌をした化け物はそこで目を細めると声を少し低くして言った。

「約束して頂きたい事はひとつだけ。今後、我々から絡まない場合を除きアルデイスへの干渉、捜査、及びそれに類する行為をしない事”。これだけです」

同時にそれを聞いたはやて、そして春斗の頭が大きく回転し始める。

それはつまり、もしアルデイスの面子——そう、例としてドーナ・クライオンを見つけても逮捕するな、という事だろうか？

疑問を読み取ったのか、メビアは少し笑いを含む調子でこう言った。

「僕達は何をしようとも貴方達は干渉するな。そういうことです。もし僕が貴方達の目の前で人を殺しても貴方達は無視をしなくてはならない……という訳ですね」

「はあ!!? 何言っただテメエ、そんな要求がまかり通るとでも「黙つとき、ヴィータ」はやてっ!？」

ヴィータの暴言を聞いても軽く受け流すメビア。こんな交渉をこんな状況で掛けてくるのだ、恐らく交渉、否脅迫のプロだと考えても間違いではあるまいとはやては考える。

まずアルデイスの面子はあらゆる意味で規格外ばかりだ。目の前の真租の吸血鬼もそうだが、鬼神族や古龍族、先程も出てきたドーナ・クライオンも存在する。管理局の総戦力をぶつけて勝てるかわからないという感じである。

簡潔に言う、干渉するしない以前に干渉出来ない、という言葉が正しいだろう。曖昧になっているその問題を、目の前の少年はハッキリさせようとしている。化け物

更に付け足すのであれば、自分達にはユーノの生命というタイムリミットが存在する。早く決めなくては死んでしまうことは明らかだろう。もしかしたら何らかの方法でこの結界をくぐり抜けたとしてもその先にあるのは彼の死体だけだった——という可能性だつて捨てきれない。

つまりこの状況で彼女達に選択肢は無い。ユーノを助けるにはこの交渉に応じる、それしか無いのである。それでも尚、どうにか自分達に利点のある事を付け足せないかと高速で思考を働かせるはやてだが、ふと横の春斗へと目を移す。

その視線は疑問が含まれていた。そしてその疑問の視線は紛れも無くメビアへ向けられている。それを思考する片手間で見ていると、春斗の瞳が見開いてコクツ、と頷いた。それを見て満足げに頷くメビア。

そして春斗が言った。

「はやて、俺はこの交渉を受けるべきだと思う」

「……それはまたどうしてや？」

「確かに干渉するなどは言った。それなら本当に無視してやればいい。考えても見ろ、こんな交渉は機動六課ではなく管理局そのものに持ちかけたほうが得策だ。恐らく機動六課が動くところちになんらかの問題が生じるんじゃないか？」

「その件なのですが……掻い摘んで説明すると、私達は『例の男』を追っています」

その言葉に驚きを隠せない機動六課の隊長陣。その驚きを見えない様にメビアは言葉を続ける。

「そしてどうやら、例の男は主に貴方方が関与している場所へ向かう事が多いようだ。そうなると何かの拍子に貴方方と我々が戦闘になった場合あの男の人が現れて我々も甚大な被害を食らう可能性があります。それなら個別個別で追った方が得策ではないでしょうか？」

「一理あるな。……余り時間もないようやし、分かった。その交渉、受けたるわ」

「流石機動六課部隊長殿。この交渉の意味を理解されたようで……おっと。高町春斗君、君に一つ頼み事があります」

「なんだ？」

「屋上に僕達の王とドーナ・クライオンがいるんですが」

「ああ」

「呼んできてくれませんか？」

「っ！！？何を言って——」「分かった」春斗！！？」

無茶な頼みである。アルデイス国の王と特級指定次元犯罪者のドーナ・クライオンを迎えに行けというのだ。場合によっては死ぬ可能性すらある。春斗は恐らくそれを分かって頷いたのだろうが、そうだとしたらものは納得しない。

「物わかりが良くて何よりです」

「はっ、よく言うぜ……じゃあな、皆。ユーノを救ってやってくれ」

「ま、待って春斗——」「待つんや、なのはちゃん」はやてちゃん、

「どうして!？」

「分らんか？　今私らは人質を取られたんよ」

「え？」

苦々しく告げるはやての顔はとてつもなく悔しそうであり。

「遠まわしに、私らが交渉で成立した約束を破った場合、春斗の生命は無いってことや。だから私達と隔離した……上にドーナ・クライオンがいるのかも怪しいな」

「……っ!!！」

「ははは、そんなに心配ですか？　……なら、そうですね……盾の騎士、ザフィーラさん。　貴方は春斗君について行ってもいいですよ？」

そこに提示されたのは破格の内容だった。　要するに人質に護衛を付けてくれるのだという。　これ程ありがたい事は無い。　畏の可能性も捨てきれないが、応じなければ春斗が危険である……ザフィーラもはやてもそう判断したのか、互いに頷きあった。

「……お言葉に甘えさせてもらうわ。　ザフィーラ、頼めるか？」

「承知。　主はやてもお気を付けて」

言うが早いが鍛え込まれたその足で春斗を追って駆け出すザフィーラ。あのスピードなら直ぐに春斗に追いつけるだろう——そう判断したはやてはメビアへと向き合った。

「……じゃ、今度はそっちの番やで？」

「わかってますよ——しっかり意識を保っててね？」

その言葉の終了の刹那。

メビアは手のひらを思い切り地面へと叩きつけ——と同時に見たこともない複雑な魔方陣が展開し、その規模ははやて達の足元にも及んでいく。

「……何を……する気や……!？」

「転移だよ。吸血鬼にのみ許された最強の転移魔術。君らは幸運だね、生涯に一度でも体験できるんだから」

ヴォン、と魔方陣が輝いた。

「さあ、招待するよ。影の世界へ」

電球が破壊された薄暗いロビーで、一瞬真っ黒な影そのものが蠢いて。

次の瞬間に彼女達は吸い込まれるように消えて——此処で初めて、ユーノ・スクライアがまさに止めをさせようとしていた瞬間へと移るのである。

＊

さて、此方は壁を壊す前のティアナとスバル。ティアナがスバルへと作戦の説明をしていた。

否、それは作戦と呼べるのかどうか……。なんてことはない、ティアナが今の状態で放つことが可能な最高の貫通弾と同時に、スバルのリボルバーナックルをその貫通弾ごと壁を殴る。魔力による貫通とスバルの力による、作戦というよりは力任せの技だった。

それはティアナも承知しており、その危険性も説明した。これはタイミングが一秒でもずれればアウトだ。そしてどちらかがコントロールをミスっても駄目。スバルは正確に貫通弾の真ん中へ拳をぶつけなくてはならないし、ティアナは計算より少しでも貫通弾の威力を多めに放たなくてはならない。カバーしてくれる者もない、まさに失敗か成功かの二択。

そしてそれを決めるのは、紛れも無く彼女達本人のスペックだ――
―。それを二人共分かってるからこそ、彼女達はあえてこの場で
息を整える。

しかし、“失敗すれば最悪重傷を負う”という重圧は考えないよう
にしているにしろティアナの心に重くのしかかっていた。だが彼女
を攻めるわけには行かない、まだティアナは凡人だろうと才人だろ
うとまだ場数をほとんど踏んでいない新人魔導士そのものだ。ダ
イヤの原石だって磨かなければ光らない。未だ“新人魔導士”の
域を抜けていないも同然の彼女に重圧を考えぬようにしろと言うの
は些か酷だろう。

それを直感の様な物で察知したスバルは、何かどうにかして励まそ
うとして話題を考える。

何故かひとつしか思い浮かばなかった。

「ねえティア」

「? どうしたの? 作戦に穴があるんだったら――」

「ティアってさ、春斗さんの事好きだよね?」

ゴンツ（ティアナが地面に頭をぶつける音）

「ななななな、ああああああ!!?／／／」

「何を言ってるのよアンタは、って言いたいんだよね? うん、やつぱりそうなんだ」

誰が見てもわかるような感じで慌てるティアナ。スバルと言えば、普段見れない親友の慌てた姿にニヤニヤと笑いながら言葉が続ける。

「いやー、勘で」

「勘ッ……!?!? わ、笑うなっ!!」

勘でプライベートな心の内を暴かれたティアナとしては凄く理不尽なところだが、親友のニヤニヤ顔を見ていると何だか恥ずかしくなっつてつい大声を上げてしまった。

「あはははっ、ティアも恋する乙女って感じだね♪」

「ううゝ……一生の不覚だわ……」

「でも、緊張は取れたでしょ?」

「……え?」

そう言えば、と彼女は今更ながらに思う。

胸の奥につつかえてたモヤモヤが取れた感じがある。プレッシャー 重圧があるのは変わらないが、それでも先程からは幾分かマシになったと言えるだろう。

「スバル、アンタ……」

「知ってる？ 春斗さんて、今はまだ好きな人いないんだって」

此処ではそこまで重大では無いが、彼女達に取っては結構重大な事だった。

「だから、此処で頑張って春斗さんに褒めてもらおう？ ティア……一緒に、ね？」

「……当然よ。失敗したらただじゃおかないんだからね！」

「それでこそティアだよ！」

そして、彼女達は構える。

自分を、そしてその横にいるパートナーを信じて。

プレッシャー
不思議ともう重圧は——無かった。

「————行くわよ、スバル！」

「うんっ！！！！」

————ヴァリアブルバレット！！

持てる魔力を全ての精神力を動員して凝縮して放った貫通砲撃。
本来それは対AMFの為の物だが、これは対結界にも作用する様に
作り替えた物だ。 計算通りのスピードを持ってホテルの壁へと直
進していく。

そして、

「うおおおおおっ！！！」

頼れる相方の声も一緒に——。

貫通弾がホテルに着弾する——直前に彼女の拳が弾丸へと到達し、
ホテルの壁へとそのまま一撃を放つ。 それは、ティアナが思い描
くよりも遥かに素晴らしいタイミングであり。

————バリアブレイクッ！！！！

ドオンッ！！ という音が響く。

細く、貫通に特化する様なイメージで作り上げた弾丸はスバルの腕力の後押しもあってドリルのような役目をし、ゼリーの様な材質で出来ている結界を削って行って――

ピキキツ、と。

彼女達の望む音が、ホテルの壁から響いた。

「――――おおおおおおおおおッ！！！！」

そこに再びスバルの咆哮が木霊する。同時に大きなヒビは確実に広がり、遂に――

一際大きい音と共に、ホテルの壁が粉碎された。

「！ やっ――――」

「スバル！！ 敵が居るかもしれないから間髪入れずに撃つわ、しやがんで！」

「っ、了解！！」

拳を振り切った格好のまま、倒れるようにティアナの前から退くス

バル。同時にティアナも全神経を集中し“敵”と思える魔力を探す。

一瞬で見つかった。

忘れもしない、あの時リニアレールで出会った時感じた底知れぬ闇の如き力。そしてそれに伴う恐怖の感情。今は煙で見えないが、あの時の男が少し先の直線上にいる———！

「っ、クロスミラージュ！」

《了解！》

———ヴァリアブルシュート！！

破壊された壁を通り抜けて放たれるオレンジ色の弾丸。先程の誘導弾ではなく連射を重視した魔法だ。

命中した感覚はあるが、撃墜・完全なクリーンヒットという感覚はまるでない———分かっていたことだが、不意をついたくらいではどうにもならない様である。

「当たったっぽいけど多分効いてないわね……」

「どうするっ..」

「一旦此処からどいて体制を立て直しましょう。　極大砲撃や空間破壊魔法が来たら流石に対処できないわ」

「うん、分かった！」

やることを決めるやいなや両方とも森の方向へと走り出す。　草むらへ隠れるように飛び込んだ瞬間、轟音が響いた。

振り向いて先程自分達が破壊したホテルの壁を見ると、そこを弾丸の様に吹き飛ばされた何かが森に突っ込んで行くのが分かった。どうやら魔法関係が撃てない何かが今あの男の身に起こっている。そう考えて追撃をするか一瞬迷ったティアナだが、その壁から出てきた者を見て思わず声を上げた。

「なのはさん！？　そして……フェイトさんに、はやてさん……ヴイータさんまで……」

その後ろにはボロボロな男の人が見たことのある（というか自分が殺されかけた事のある）少年に捕まっていた。状況はよくわからないが、加勢しに行くべきだろう——そう考えてスバルと頷き合っている、草むらから抜け出し、隊長達へと声をかけようとした瞬間。

男が動いた。　倒れたまま桃色や白色の魔方陣もいくつも展開し始めたのだ。

その魔力収束速度はどう考えても異常な物だ。　有名なスターライトブレイカーや、恐らくその横の白い魔法陣は終焉の笛ラグナロク

……黒い魔法陣は男本来の物なのだろう。だがそこに収束される魔力は他の砲撃と遜色ない物。

どう考えても受けきれない。

そんな考えを振り払い、出来る限りの障壁を展開しようとして――何が起きたかわからないうちに、すべての砲撃がキャンセルされて男が吹き飛んで。

そして、ここであろうやく兵器がロストログアの使用を開始した場面へと移ることになる。――。

＊

ドドンッ!!

「（厄介なことを……あの吸血鬼め……!!）」

此方は思いつきり壁を蹴って方向転換し、なんとかまだ壊れていない階段を登っていく春斗と、

「春斗、大丈夫か？」

ザフィーラー——春斗にとっては掛け替えのない1人の親友だが、今は彼に押し付けられた鎖であった。

なのは達は知らない。

真に人質にされたのは、紛れもなくザフィーラーであることを。

“機動六課は高町春斗の正体を知らない”という要因を付いた的確かつ非常に効果的な作戦だ。ザフィーラーはどんな状況に合っても春斗の身を守ろうとするだろうが、春斗は地球の軍隊が一斉に自分一人に押し押せてきても秒殺出来るそれなりの能力を持っている。

つまりザフィーラは春斗が自由に動けなくなる“鎖”そのもの
行っても過言ではなかった。

これにより春斗は本気を出せなくなり、“人質”という設定からの
脱出も出来なくなる。だからと言ってザフィーラを見捨てること
は出来ない。

彼は既に、兵器を名乗るには重すぎる物を抱えていたから。

「（だがその選択自体に悔いはねえ……!!）」

しかし今それよりも重要なのは、先程の交渉と並行して行われてい
た春斗とメビアの念話による話だった。

この屋上に“デミス”がいる――。実はこの人質という設定も
彼と打ち合わせ済みであり、なのは達には悪いとは思いつつも人質
のフリをして彼に会いに行こうとした。“デミス”という存在には
色々と聞かなくてはならないのだ。自分達のことや、兄の事を。
だが、見事にメビアはその行動にザフィーラという名の釘を打っ
てきた。

因みに何故メビアが屋上にデミスがいるかと分かった理由は簡単だ。

“ロザリー王女”と“ドーナ最強の精霊”が双方本気を出して未だ倒れない相手、
更にその魔力はどう考えても生物が出すものでは無い物であったと
いう。真偽は定かではないが、吸血鬼というものはそういうもの

に敏感らしい。

確証はないが、君の記憶に存在する骸骨の様な存在の魔力エネルギーと一致する——本人がと念話にて言っていた。記憶 流石にその言葉には改めて真租の恐ろしさを感じたが、勝手に頭の中を覗かないで欲しい。春斗本人の切実な願いだった。

「……大丈夫、少し足が滑っただけだ」

「慌てぬようにな。何かあれば必ず俺が護る」

その言葉が春斗へ罪悪感となって重くのしかかる。

自分が本当の事を言っていればこんな事にはならなかったのかもしれない。だがそれは昔から決めていた事だ、どうしようも無くなった時にしか手出しはしないと。

そしてまだその時ではない、と思う。そう願いたい。

「ザフィーラ」

「なんだ？」

「そろそろ屋上だ。頼む、俺なんかを庇って死ぬなよ」

「……盾の守護獣を甘く見るな。どんな攻撃だって防いで見せる」

「ああ、そうだな。 愚問だった」

だから、この親友の事も自分の家族の事も仲間の事も必ず守る。

そう、あの時心に決めたから。

*

屋上 side

「すうううううう……はあああああ……!!!!」

——— 龍神の咆哮……!!

「巡り狂いて世界よ廻れ、堕ちて壊れて世界よ終われっ!!」

——— フールドターン
天地廻転。

「はははは、龍種吐息系と位相をずらす事で起こる天地の回転か！
？ 全く、汝らは面白い魔法を使うな!!」

あらゆる物を粉碎し破壊する咆哮が存在を破壊し、それを縫うかのように擬似的な天地の回転——重力が上からでは無く下から昇ってくるという不気味な力が男へと襲い掛かる。

両者とも全力。

これ以上油断も余力も残せない状況。

「だが、甘い!!」

だが男はそれを嘲る様に笑い、重力を受けて空へと堕ちながら咆哮を避けつつ剣を構える。

「白帝起動…コード認証…発動」

白い方の剣が輝く。

同時に、まさに現在位相を弄り天地を逆転させていた筈のドーナ・クライオンは先程から繰り返される現象に戸惑ったように声を挙げた。

「まただ……弄った筈の位相が、一瞬で元に戻ってく……」

天地が再び回転し元へ戻る。そのままホテルの屋上へと優雅に着地した男——デミスは、当然彼らが一瞬でも呆然としている隙を逃がしはしない。

「——“憤れ、黒帝”」

——憤怒の炎剣。

放たれたのは巨大な炎の斬撃。

結界を張っていないければ恐らくこのホテルごと蒸発していそうな一撃がドーナ・クライオンへと降りかかる。

「……我が聖水よ、邪を払いて敵を討て」

——水爆条龍撃。

迎え撃ったのは水の龍だった。説明を付け加えるなら、ドーナ・クライオンはそもそも水の精霊であり、水を操る存在である。何千リットルという量の水を操る等造作も無い。

果たしてぶつかり合う炎と水——水は炎を消し、炎は水を蒸発させてゆく。水が蒸発した事で出現する煙が各々の視界を阻害した。

「目晦ましか……だが無駄だ！ “狂え、白帝”」

——狂気の風剣。

だが遂に白い剣が振るわれた瞬間、ボォッ！！という音と共に煙が吹き飛ぶ。同時に、煙に紛れて近づいていたロザリーと目が合った。

「——ッ！！」

「——ハハッ、」

一方の目が細められ、もう一方が笑った直後にガンッ！！という音が聞こえた。

デミスがその二対の剣でロザリーの大剣を受け止めた音だった。

始まったのは神速と呼ぶ事すら驕ましい、常識を超えた斬撃の嵐と嵐の激突だった。

突き、袈裟斬り、兜割り、十字斬り、裏斬り——あらゆる流派の

技が悉く使われて、悉く防がれてゆく。 ガガガガガ！　という音が連続して響けばデミスによる連続切りをロザリーが防いだ音で、ドオオンッ！！　という音がすればロザリーの大剣が地面にめり込んでいる音であった。

簡潔に言おう、

「……全然見えない……………」

ドーナ・クライオンは能力が化け物同然であるだけであり、決して自分の身体能力が高い訳ではない。　恐らくアルデイスの連中と能力を使わずに腕相撲なり殺し合いをした場合、彼は秒殺される事だろう。　その為視力はその辺にいる人間より少し高い程度だった。

「……、」

あの剣撃の応酬の中に飛び込んでも、何故か自分の能力が無効化されてしまうことから殺されてしまう可能性が高い。　そう思ったドーナは戦闘を個人的に中断し、水を使ってホテル全体の様子を確かめる。

「ん…………（ピクッ）」

すると、此方へ真っ直ぐ昇ってくる存在がいる事が判明した。　数

は2。水を使ってその振動で判断しているだけなので力量までは分からない。ならば無視していれば勝手に巻き込まれて死ぬかも？ そう考えた。

スルーしようとしたその時――彼の直感が何か面白い事が起きそうな気がすると思いついた。ドーナの直感は当たる事が多い。これまで様々な事でこうした勘が自分に囁くが、どれも間違ったものはないのだ。

そうならば自分としては面白い方の場所に行きたい。

チラリとロザリーを見ると、今のところは生命の危険は無さそうなので何かを言われる前にさっさと逃げた。

彼は特級指定次元犯罪者と言われながら、別段勝ち負けに興味はない。

いつかにも述べたが彼は興味のあることしか参加しようしないし干渉しようともせず、無断で国に関係する重大な会議に欠席する事もしばしばあった。つまり何が言いたいかというと――

『ちょっとドーナあああああ！！ 何逃げてるのよアンタはあああああああ！！！！』

『はっはっはっは！！ 汝らは面白いな、まるで意識疎通が出来ていないのに強い！！』

『それ褒めてるの！？　　というかアンタ王族警備軍の隊長でしょう
がああ！　早くこっち来てあたしを守りなさ————きゃああああ
！！』

例え彼は自分がどんな職に付いてようと、それよりも楽しそうなこ
とが見つかればそちらに靡く。

どんな犠牲があろうとも自分を優先する存在————それが、良
くも悪くもドーナ・クライオンという存在であった。

＊

「————……着いたな」

「……ああ」

屋上へ出るドアの前に、二つの影がたどり着いた。

高町春斗と守護騎士の1人、ザフィーラだ。

「戦いの音は聞こえないな」

「という事は嘘……か？」

春斗としてはそれを期待していた。

ザフィーラは決して弱くない。否、強いとすら言えるだろう。少なくとも一般の魔導士相手なら瞬殺すら可能な筈だ。

だが今回ばかりは相手が悪い。彼らが対処すべき敵は特級指定次元犯罪者のドーナ・クライオンと真祖の吸血鬼が従う幻想種の王である。更には無還者と同格かそれ以上の実力を持つと考えられるデミスと名乗った化け物。この三名を相手にした場合、恐らく春斗1人ならまだしもザフィーラがいては対処しきれない。

ザフィーラは春斗を守ろうとするだろう。自分の生命も顧みずに。何度か此処に来るまでに思いつめたような顔があった。最悪死ぬつもりだ——それがどれだけ、アルデイスの国の幹部達や無還者を操る連中が喜ぶかどうかとも知らずに。

ザフィーラが万が一にでも死んでしまった場合、八神はやてやヴォルケンリッターの動揺は計り知れない。その周囲の連中もそうだろう。そうなれば実質的な戦力の低下は目に見えている。踏ん切りがつくまでも時間がかかるだろう。

それを狙われれば一溜りもない。いや、確実に機動六課を疎ましく思う管理局の上層部達はそれを狙ってくる。精神的にも戦力的にも問題がある状況で無還者と戦うなど自殺行為だ。つまり、此処でザフィーラを死なせる訳には行かない——。

「ザフィーラ」

「？」

「これが終わったら旨い酒があるんだ。一緒に行かねえか？」

「……そうだな。是非とも共に行こう。その時は、回復したシグナムも誘ってな」

「いいねえ。楽しくなりそうだ……じゃ、1、2の、3で行くか」

「ああ、分かった……じゃあ行くぞ」

ザフィーラも春斗も警戒度をMAXにしてドアに張り付く。

「1」

一方は親友の為、主の為に。

「2の——」

もう一方は、“今”を生き抜く為、背負ったものを守り抜くべく。

「「3!」」

彼らは今、死地へと飛び込む。

「見
い
つ
け
た
あ
……
？」

歪んだ笑みが、あった。

白髪白眼の男――彼らはその男を見たことがある。

――水霊断絶剣。

男が、笑ったまま手の形を手刀へと変えた。

同時にその手に限りなく透明な水の刀が形成される。

決死の覚悟で飛び込んだ彼らを嘲るような背後からの一撃。

何故かスローモーションに感じる周囲の風景の中、春斗はこの未来を幻視した。

絶対的な確信があった。

この場でザフィーラも春斗も障壁ごと上半身と下半身が引きちぎられて終わる——。そして春斗のみが再生して生き残る。この状況下で、それ以外の未来は考えられない。

「（冗談じゃ、ねえっ——！！！！）」

また自分は繰り返すのか？

自分を優先して、また誰かを失い、誰かを悲しませるのか——！！？

「（……そんな事は、許されねえ……！！！！）」

何を悩んでいたのか、もう自分でも分からない。 いや、寧ろ何を悩む必要があった？

これが、“その時”だ。

この先、これ以上の災厄が起こるかもしれない。 その可能性は高いだろう。

だが。

自分は、目の前を精一杯生きていくと————必死に今を生きてい

くと決めたから。

考える必要などない。彼は知り合いが、親友が目の前で死ぬことには我慢ができなかった。それだけで行動理由としては十分だ。

「————っ、」

どんな障害があろうとも——自分で弾けばいい。その時はその時。彼にとっては今、この時こそが重要だ。

ならば、まずはこれから起こるであろう最悪の未来を変えなくてはならない。

春斗が動こうとしたのを見て、更に男の笑みが深く歪んだ。

横に薙ごうとした水の剣を、春斗のみを切り裂くように切っ先を切り替える。

だが、高速で振られた水の剣の軌道上に既に春斗はいなかった。

空中で、男が振り向く。

高速の一撃と圧縮された水の斬撃が一瞬の後に交錯し、それぞれが地面に降り立つ。

「……意外」

「……、」

「貴方は、別に今動かなくても身体を再生できるはず。　　とうか
今動かなければ、斬られた直後に再生してわたしの背後から強襲で
きた。　　なんで動いたの？」

「ああ、そりゃあな……」

春斗の輝く様な金色の瞳が、凍てつくような銀色へと変化していく。
ゆっくりと、双方の殺気が高まっていく。

「人生の先輩から教えてもらったんだよ……先のことを見るんじや
なく、今を見て歩けてな」

「……、」

「アンタの望む兵器はもう此処にいなえよ。　　俺は兵器を名乗るに
はもう背負い過ぎた……幻滅するか？」

「そんなこと、ない」

対するドーナ・クライオンの笑みは、いよいよ深く、底知れぬ物に
なっていく。

彼は今、本当に楽しくて、本当に嬉しくて堪らないのだろう。

アルデイス以外で自分を“戦い”という舞台で楽しませてくれる玩具がいた、その事実が――！！！！

「……は、春斗……なのか？」

「ザフィーラ」

ザフィーラが聞いたそれは。春斗の声のようで、春斗とは思えない声だった。

しっかりと芯の通った凜とした声。主の命を受けた騎士の様に、譲れぬ信念が存在する魔導士の様にも見える目の前の男は、確実にザフィーラの知っている“春斗”では無かった。

「すまねえな。一旦これが終わったら全部説明するよ……それからお前がどうするかはお前次第だけだな」

あらゆる世界が凍結したかの如き瞳を細くして、春斗は目の前の“敵”を睨む。

これまで、本気で向けられたことのなかった自分と同じ実力を、同じ化け物の様な能力を持つ者からの敵意に、ドーナ・クライオンも愉しそうに口端を歪めながら言葉を紡いだ。

「というか、こっちの方が面白い……………!!」

「そうかよ、そりゃ何よりだ」

スウ、と周りで燃えている筈の炎を感じなくなるかのような敵意と殺気が遂に双方共極限まで高まった。

一方は自分が愉しむ為。

もう一方は“今”を精一杯息抜き、大切な存在を護るため。

「ほらあ……そんなに力を籠めないで……わたしといっしょに殺びあそましょおっ!!!!」

「だが断るッ!!!! そんなに遊びてえんなら、あの世でテメエ1人でやってやがれえッ!!!!!!」

ロード・オブ・ザ・ワールドメーカー
——世界主の掟——

パニッシュカーテン
——消えろ存在——

最早、この世界に存在する生き物同士の戦いではない——本当の別次元の戦いが、始まった。

＊

その時。

デミスとロザリーとの戦いにも、侵入者が訪れた。

真っ白なツインテールをした、何処か気品さのある女性だった。

デミスは黒い剣を、ロザリーはその大剣を、双方思い切り薙いだのを思い切りこの女性は受け止めたのだ。

「……ほう？」

「へえ……」

ガガンツ、という音と共にその女性から離れる兩名。しかしその障壁には傷一つ入っていない。

相当に堅い障壁——かなりの実力者である。そう考えたロザリーとデミスは少し笑いながら目の前の女性へと警戒を強める。

「ふむ……吾輩らの攻撃を、傷一つ受けず障壁で傷つけるか。 汝、かなりの実力者と見た」

「同じく。 宜しければ、名前を聞かせてくれないかしら？ お嬢さん」

女性は、ゆつくりと障壁を展開するために伸ばした手を下ろし、顔を挙げた。

深い緑色の瞳を持った、端正な顔立ちの女性だった。 女性は少し微笑み「名を名乗る程の者ではありません」と言う。 その言葉に続けて、

「――通りすがりの兵器です」

一瞬。

その単語を聞いた瞬間、デミスもロザリーもその表情から笑みを消して魔力を完全に開放し、目を細めて各々の獲物を構えた。 彼らに取って“兵器”というたった二文字のこの単語にはそれだけの危険性と深い意味を持つ。

「……あら、どうしてその兵器がここにいるのかしら？ あたし達

に捕まりに来た？」

「そんな訳ありませんわ」

ロザリーによる古龍種独特の威圧感が女性を襲うも、彼女はそれをまるで効かないものかのようにクスクスと笑いながら受け流す。

「ちよつと——困った兄さんをお手伝いに来ただけですわ」

その目線は先程ドーナが向かった所に向いている。よく見ると、そこでも何者かの戦闘が始まっている……恐らく彼女の言う“兄”がいるのだろう。しかしどうやら目の前の女性はそれだけの為に来たのではないようだ——そう考えたデミスは女性へと視線を向けて、

「ふむ。何の事だか分からぬが、取り敢えず汝は投降する事は無い、と見て良いのだな？」

「構いませんわよ？ それに——私も、ただで死ぬ気は毛頭ありませんし」

隊服から取り出したそれは、奇妙な文様の書かれた札の様な物だった。どうやら彼女の武器はあれらしい——此処にわざわざ乗り込んできた位だ、恐らくろくでもなく強力なものに違いない。そんな仮説を同時に立てたデミスとロザリーはいつでも全力の障壁を

展開できるように構えつつ言葉を紡ぐ。

「……舐められた物だな。 そんな物で我々を倒せるとでも？」

「はい。 思っていますわよ」

挑発してみたが彼女はそれすらも全く応じない。 それどころかその自信が更にデミスたちを警戒させた。

それを感じつつ、チラリと彼女は自分の背後を向く。

1人の女性が立っていた。

表情にあるのは驚愕。 恐らく彼女は、自分が何故此処に居るかも理解していないだろう——そう思うとかなり申し訳ない気持ちになる。

「シャマルさん」

「……、」

「ごめんなさい。 これが終わったら必ず全て話します。 それからどうするかは貴方が決めてくださいませ」

それだけ話してから再び目の前の化け物×2に視線を戻す。

彼らは恐らく、背後の女性に手は出さないだろう。否、出させない。そんな事は自分がさせない。

「思い出したぞ。その隊服、機動六課の物だな」

「ええ」

「つまり汝は機動六課所属だということか——全く、運命と言うものは誠に面白いな」

「それについてはあたしも同意よ……」

「……ふふっ」

兵器と、人外と、龍種の視線が交錯する。

兵器が、言った。

「あらあら……そんなに力んじやうと、老けてしまうますわよ?」

「問題無いな。吾輩らは——」

「——もう既に80年以上生きてるからねっ!」

人外の斬撃と龍のバカ力による斬撃が、兵器——フラン・T・ハラオウンの障壁によって受け止められて。

ドオオオンッ！！　という音が響く。

皮肉にもそれが、彼女達の開戦の合図となった。

＊

とある兵器は考える——。

零距离で魔導砲撃を放ってきた場合はどうすればいいか？

↓脅威返しで弾き返した直後に追撃を加えて昏倒させる。
メナスカウンタ1

計算した通りに脅威返しを展開する。　自分の砲撃があらぬ方向へ飛んで行き、驚いたような顔をした桃色の髪をした危険度SSランクの女性へさらに追撃を加える。

脅威返しを展開した手を引っ込め、そのまま顎へと拳による一撃を繰り出す。　女性は防御する間もなく、脳震盪を起こして気絶した。

素早く後ろを向く。流石に状況を理解したのか、魔導士たちが既に各自攻撃の準備を開始していた。

兵器は更に思考する―――。

相手が速度強化魔法で背後に回って来る場合は？

↓来る場所が分かっているのならそこにタイミングよく魔力玉を置いておけば勝手に自爆する。待っている必要はない。

フェイト・T・ハラオウンが被弾した。

大量のスフィアによる砲撃・魔力弾が迫ってくる場合は？

↓迫る砲撃・魔力弾を受け流しつつ攻撃を放った本人へ接近後再び顎を殴って気絶させる。無理に脅威返しで相手の自爆を待っている必要はない。

高町なのはが気絶した。

幻術が使われた場合は？

↓無理に探知する必要はない、幻術により発生している分身を全て破壊すればいい。幸い自分には風の魔力変換資質がある。広範

罅に嵐を起こす事ならばできる。

ティアナ・ランスターが傷を負った。

前方からアタッカー、後方に魔法が飛んできた場合は？

↓あえて前方のアタッカーへと突っ込み、掌底を放って気絶させる。
同時に背後から迫る魔法は上手く掌の上で滑らせて軌道をずらす。
本体へ直撃する危険性が無くなったら魔法を放った本人へ零距离から貫通型魔力弾を放てば良い。

スバル・ナカジマと八神はやてが気絶した。

頭上から高威力と思われる打撃が迫ってきた場合は？

↓右手で受け止めた後に左手で攻撃を放ってきた本人へ拳撃を放つ。
万が一という可能性もあるので、強化魔法で両腕を硬化させて置けば問題ない。

ヴィータが気絶した。

前方から、魔法による対応不可能の拳撃が顔へ飛んできたなら？

↓自分の左足を右足で払って転倒するような形で回避。その後体

制を立て直したら腰を深く構えて掌底を放ち、念の為顎へ拳撃を掠らせておく。

メビア・アルデイスが一時的に行動不能に陥った。

ああ。

何故だろう。

兵器は感情を、^{じぶん}持っては居ないはずなのに――――

楽しい。

そう、確かに感じた。

まだ動ける最後の一人であり暗殺対象である、ユーノ・スクライア

と目が合った。

彼はかなり驚いているようだったが、直ぐにその顔に苦痛でも、怒りでも、諦観のどれでもないただの微笑みが浮かぶ。

この状況で微笑みが浮かぶ要素が浮かばず、体制を低くして彼へと突っ込みながら少し首を傾げた。

そうか、と彼は口を動かした。

「僕は……まだ、君を表面しか見ていなかったみたいだ………君を完璧だと決めつけてた……」

フフツと、彼が笑った。

「顔が笑ってるよ？」

言われて初めて気づく。

確かに自分の口が、本当に少しだけ笑っていた。

こんな事は始めてだ。

バグなのか、それとも違う何なのか？

だが一つ言える事がある——少なくとも、この感じは悪くはない。

「僕の負けだ」

清々しい声だった。 恨みや憎悪なんて感情は一切入ってない。

その声と共に、兵器の右手に真っ黒な魔力玉が収束されていく。

「でも、悔いは無いよ。 僕は最期まで、君に勝とうとして、策を練って、でも足りなかった……救おうなんてだいそれた事をいう資格、僕にはなかったんだね……僕は、君を心のどこかで完璧な生体兵器と思ってた。 人間とは見てなかったんだ」

心情の吐露——。 何故か、ユーノと兵器の間の時間がゆっくりと流れていくような錯覚に陥る。

「ごめんね……そして、ありがとう」

その言葉。

一瞬だけ、その言葉を噛み締めるかのように兵器が目を閉じる。

それがどういう意味を示すのか、ユーノには分からない。

そしてこの謝罪と礼が何を示すのか、兵器には分からない。

1秒にも満たぬ静寂の後――――

あらゆる全てを飲み込むかのような紅い瞳が再び見開いた。

「―――、」

「『―――』」

敵が完全に何の抵抗もせず、死を覚悟している場合は？

↓魔力弾をぶつけて、暴発させ爆発させると同時に死の概念をぶつける。そうすることで確実に殺す事が出来る。今までは幻術を使って無理矢理相手に死んだと錯覚させることでこの魔術を使っていたが、本当の痛みと共にぶつけることでその効果は何倍にもなる。

極論として、無邪気な子供がデコピンをして「今貴方は圧死した」という様な物だ。そしてそんな簡単な仕掛けで死んでしまう程、人間というのは弱い。

黒き魔力弾が、放たれる。

同時に、先程擬似的に解除した“死の霧”をユーノ・スクライアに直撃させる。

それで、終わり。

この任務は終了する――――

――unabhangig Bombe zum Opfer
死セヨ――
《爆

筈だった。

その時。

兵器の身体に異常が起きた。

身体を動かすために身体中へ伝達するための電気信号が乱され、思うように動けない。

ユーノ・スクライア？

しかし彼は既に――――

否。違う。

ユーノ・スクライアの生存反応……？

「危なかったのう……ギリギリまで出てこないようにしたが、どうにか間に合ったようじゃ」

声が出た方向を顔を少し動かして見てみると、そこにいたのは自分と同じく黒を基調とした服装をした女性だった。

その腕には気絶したユーノ・スクライアが存在している。　　どうやら先程の攻撃は防がれたようだ……。　　そう考えて、身体の拘束の理由を少しずつ解析していきつつ警戒態勢を敷く兵器。

「さて、と」

ユーノ・スクライアをゆっくりと地面へ寝かす。　　そして女性は此方を向いて――――

刹那、彼女の魔力が完全に開放された。

その余りの濃密度に、木々は揺れて地面は隆起しホテルの外装にはヒビが入ってゆく――――その異常なまでの魔力とこちらに降りかかる敵意から、一瞬にして彼女を敵だと認識した兵器――『無還者』は告げる。

「『警告…第1章23項。　↓無還者の行動を阻害する生命体の存在を確認。　↓同時に本体への身体的な拘束とそれに伴う思考能力の遅延を確認。　↓本体の拘束解除及び思考能力の回復を最優先。　↓その後行動をを阻害する生命体の排除へと行動目的を変更します』」

「…お互い、変わった上に成長したのう……久しぶりじゃな、兄上？」

相対する女性――不敵な笑顔を見せるNo.5“拒絶者”、ディールもまた、敵であり兄である目の前の男を睨みつけ、戦闘態勢に入する。

そして、この時を持って。

遂に余興は終わる。

主役も敵役も、所定の位置についた。

主幕が始まる。

戦いは遂に佳境へ――。選ばれた宴の参加者達は血塗られた舞台へと登り、戦いを始まる。

さあ、兵器達による主幕をお楽しみあれ。

“ ホテル・アグスタ【余幕】 ” （後編） （後書き）

さあ、余興は終わり。 脇役達は退場し、遂に主役達の主役達による血塗られた主幕が始まる。

勝つのは、兵器か、精霊か。

兵器か、龍か、化け物か。

それとも――？

最後に笑いながら敗者の血を浴びるのは誰なのか。
もし宜しければ―――お見届けください。

感想、大大感謝です！ この投稿終わったら感想を投下しに回る予定ですのでその際はどうぞよしなに（＾▽＾＊）ウッフ
え？ テスト？ そんなものなかったんです。

宜しければ次回もご覧いただけるよう、お願い申し上げます（^^ゞ

“ホテル・アグスタ【主幕】”（前編）（前書き）

どうしてこうなった／＼（＾Ｏ＾）／

今回の話を読むにあたっての注意事項っす。はい。

- ・そろそろ誰かに刺されそうな某T・H
- ・意外と強かった某ツインテール
- ・死亡フラグが立ち過ぎている某D
- ・正体が完全に化け物な某D・K
- ・ずっと言い忘れていましたが、この小説はとある魔術の禁書目録の影響を受けています。表現が似ている箇所がありますがその辺は温かい目で見守っていただければと思います（・ω・）

＼今日の挿入歌＼

ディールVS無還者イメージ曲 『ETERNAL BLAZE』

歌…水樹奈々様

改めて言いますが、天破の小説は基本行き当たりばったりで構築されています。なので分かりにくい伏線が張られていたりとか伏線そのものが存在しないのにいきなり後付設定が飛び出したりなど駄作たる所以な箇所が多々ありますがご勘弁ください……。・（つд、）。。・

では、駄作者の駄文の勇気を受け入れてくれて下さる方はどうぞご覧くださいませ……m（＿）m

“ホテル・アグスタ【主幕】”（前編）

溢れる魔力。

隙のない構え。

そして何より、人を殺す事に躊躇いのない瞳。

全てが規格外に相応しい存在が、無還者の目の前にいた。

彼が製造されてから、EXクラスとの敵との戦いは一度たりともない。高くてもSSS程度だ。そしてそれは、今日この時までそうだった。

だが目の前の女性はどう見てもあらゆる要素が規格外。魔力も、意思も、その洗練された構えも。

そう判断した兵器は力を開放する。

自分の全てを、全ての能力を。敵は、それを見るに値する存在と判定されたから。

「『警告…第1章90項。↓敵の警戒度をEXへ上昇。それに伴い魔力完全開放・能力全開放・障壁全開——標的の排除開始。』

“任務再開”』

紅い瞳が見開く。刹那、彼のいた場所が爆発するかのような音を立てて破裂した。

全体重を乗せた、見た目華奢な女性への一撃。それは鉄すら貫通するであろう死の一撃だ。

そう、初端から全開。EX級相手に能力やロストログアの出し惜しみをする程彼は優しくはない。首を狙うなどまだ生易しい。

身体の骨も、内蔵も、魂も粉々に叩き潰して破壊する。

EX級の危険性を持つ敵が相手ならば、自分のすべき事はそれのみだった。

しかし敵はそれを予想していたかの様に目を細めてその一撃を回避する。

パパパンッ！！と冗談抜きで空気を破裂させて女性の左真横を通り抜ける拳撃——違う、外したのではない。躲かれた。

音速を超える拳撃をこうも冷静に、しかも的確に対処するその力量——更に警戒を強めたと同時に、倒れるように自分の懐に入ってきた女性が言った。

「――雷閃必滅……」

その呟くような声に答えるが如く、彼女の右手に金色の雷電が輝いた。

「――雷塵拳ッ!!」

零距离で放たれた雷の拳――常に展開してある耐圧障壁の上からでもその威力はほとんど落ちず、それはそのまま無還者へと突き刺さって吹き飛ぶ形となった。

しかし彼もこの程度の迎撃で一旦退くなどという選択肢は一切ない。空中で一回転する事で吹き飛ばされている力を殺し、地面に着地する。同時に攻撃を開始した。

「――空間焼却魔術・連弾!!」

女性の周囲へ真っ黒な魔方陣が幾つも展開される。それはあの烈火の将を殺しかけた空間攻撃魔法――起動したが最後、連動するかのように爆発し敵の生命を奪う。

だが、女性もその程度の魔法で殺される程甘くはない。

「――ッ！」

―――
ライザースト
雷加速。

再び、白銀の雷電が空間に放出される。　どうやら何かを仕掛ける事が予測される――当然それを黙って見ている筈もなく、彼はそのまま黒い魔方阵を輝かせて起動させる。

耳を劈くような轟音と、静電気が走るような音が同時に響いた。

気がつくのと、敵である女性は自分の目の前にいた。

「『……、』」

「はぁッ！！」

―――5重障壁前方45°展開。

―――
リフューズクロー
拒絶ノ爪！！

ドンッ！！　という音が大気を揺るがしたと同時に、そこにあったのは女性の攻撃を障壁で受け止めている兵器と真っ黒な何かを右手に

纏わせている女性の姿。常人の目にはその行動の一片たりとも見えない様な速さでの攻防だった。

「流石じゃのう、兄上……相変わらず、全く隙の無い障壁じゃ……」

「『……………、』」

「じゃが……妾とて、この十数年間何もやっていなかったわけでは
——無い——！」

————兵器十二式試作型障壁破壊式——！

ピキッ、と。

序で、一際大きい音を立てて無還者の障壁が完全に崩壊する。力業で突破されたのではない、恐らく障壁に割込みプログラムを掛けられた——一瞬の後にそう判断した彼は直ぐに防御体制を取る。

「シッ——！」

そのまま女性は空中で金色の雷を纏う蹴りを放った。その威力、速さとも彼は全く体験したことのないものである——だが、所詮はその程度。

一度攻撃を見れば攻撃速度、地形、状況等を判断し回避が可能。
彼はその蹴りが来るタイミングに合わせて左手を置き、その一撃を
後方へと受け流した。

「ッ!？」

「『――』」

そして、追撃。蹴りを放ったまま硬直している女性に右手の拳撃
を放つ。

皮肉にも、先程彼が喰らった雷の拳撃の仕返しのような形となった。

「『アタックブースト火力加算並びに硬化魔術発動。 ↓攻撃』」

鈍い音がした。現在鉄以上の硬さを誇る拳にただでさえ高い火力
を二倍した“ただの拳撃”は一撃で女性の骨を数本粉碎し、吹き飛
ばした。

「グガッ……冗談じゃないのう、そんな一撃を何度も食らうわけに
はいかぬ!!」

少しだけ口から溢れた赤い液体を拭い、空中で体制を整えつつデ
ィールは両手で輪を造るような形を作る。刹那、その輪の中心に金

色の雷球が形成された。

「『!』」

———メナスカウンター———
脅威返し!!

「甘いのじゃ……喰らうが良い!!」

———雷塵滅却砲!!———

無還者に見えたのは、金色の龍が目の前口を開けていた——その瞬間だけだった。

キインツ、とレーザー砲が鳴らす様な音を立てて、放たれたのは極大の雷の砲撃。それは脅威返しごと彼を飲み込んで、彼を中心に爆発した。

広範囲の森を、草を、花を一瞬で根絶やす一撃。その体感温度は恐らく太陽と同じ物だろう。

だが、やはり彼女らにとってはこの程度なのだ。無限と言える魔力は破壊された障壁を幾らでも生成出来る事を示し、不死身の如き再生能力は自分の身体がいくら傷ついても構わない事を示す。

つまり、この戦いの決着は――

「そう、簡単なのじゃよ。要はスペックの違いこそが明暗を分けるのじゃ」

それに賛同するかのように、生物が雷の一撃で死に絶えた地で、所々服が焼け焦げてはいる物のほとんど傷の付いていない男が現れた。

「何処まで相手の予想外の事を出来るか、何処まで相手の対処しきれない事をするか――それらに勝った者が、即ちこの戦いの勝者なのじゃよ」

紅い目と金色の目が、ボロボロになったホテル周辺の土地の上でぶつかる。

刹那――一方は再び地面が爆発した様な音を立て、もう一方はバチチツ、と電気が走る様な音を立てて、その場から消える。

金色の雷と真っ黒な魔力が交錯した。

規格外同士の戦いに、まだ終焉は訪れない。

*

「――……クスッ」

何も映さない、味気ない白い瞳が愉しそうに見開く。

同時に――再び、屋上で空気が爆発したかのような音を立てて存在が消えた。

それを直感と恐るべき身体能力で避けつつ、正真正銘の化け物と相対する兵器――高町春斗は考える。

（……、何だこりゃ？）

存在の消失――それは自分が持つ能力でもあり、相手が相手なので別段使われても違和感ないというのが実情だが、この現象は消失とはちよつと違う気がする。

「ほらほらあ、避けないで当たって消えちゃってっ!!」

「残念だったな！ 俺は男には興味はない!!」

続けざまに放たれる謎の见えない一撃。 避けて飛んで伏せて一歩

踏み込んで、取り敢えずその顔に一撃をぶつけた。

「という訳でテメエが消えろ!!」

———零距离・パニッシュインパクト!!

快樂という感情を浮かべる次元犯罪者の顔へ、あらゆる概念や存在をかき消す光が直撃する。

だが、聞いた話ではアカンシエルで無人世界ごと吹き飛ばそうとしたら無傷で生き残ったという逸話すらある存在だ。この程度で倒せると思っているほど春斗は「フフツ……」思っ
てn

「ッ!?!」

「残念でした〜♪」

同時に、ボキユツ!! という音が、自分の体から聞こえた。

零距离で、何をされたのかも分からぬまま右手、左足が吹き飛んだ。

(———うおおおっ!?! 痛みがねえっ!?!?)

だが驚くべきところは攻撃された事でもいつの間にか背後に回っていた事でもない。今も右手や左足は吹き飛んだままなのに痛みや血が出ない、それが異様であり異常な光景だった。

だが、逆にこれで能力の本質は絞れた。ポジティブ思考に切り替えて吹き飛んだ箇所を再生させる。本人も慣れていない気味の悪い音を立てて左足や右足が再生していくのを見て、人格破綻者ドーナ・クライオンは気味悪がるどころか更に笑みを深くする。

「やっぱりわたし、貴方のことだあい好き！」

「やめろ！ 男に言われると冗談でも寒気がするんだよ！！」

その言葉と同時に、始めてドーナが右手を春斗へと向ける。その笑みとその動作とその言葉が、春斗の背中に感じたことも無い様な悪寒を感じさせる。

「ほんとのほんとだよ？ すっごくすっごく——壊しちゃいたいくらいに！！」

今までの一撃とは全く違う、巨大な見えない力が放出された。ゴォッ！！ という突風の如き音と共に、ドーナの前方に存在する全てが消えていく。

[illegible]

それは明らかに平常の者が発する笑いでは無かった。

ドーナ・クライオンの破壊衝動――。ある意味最悪、しかしある意味最高のタイミングで、その衝動が高町春斗という存在に向けて放たれようとしている。彼のこれを収めるには、葉を飲ませるか彼が満足するまで戦い続けなくてはならない。

前者も後者も、任務として存在するとするならばE X級の難易度を誇ってもおかしくはない。特に後者はこの人格破綻者と正面切つて戦う様にしなくてはならないのだから生命が幾つあつても足りないだろう。

「……あれ？」

ふと、彼はそこで笑いを止めた。先程まであった“高町春斗”という存在が気配ごと消えているのに気づいたのだ。

消えてしまった？ まさか。先程から自分の力を勘だけで避ける様な面白い存在がこの程度で消える訳がない——。

「そうだな。そう簡単には消えねえよ」

頭を力強く掴まれた。

肩で息をしている春斗だった。

「……ほえ？」

「吹っ飛べやオラァ!!」

——ノーモーション——無式・大暴投!!

頭を掴まれたまま結界の壁に向けて投げられるドーナ。流石に彼も思いつきり投げられるという体験をするのは始めてのようで、「——!？」と声にならない叫びを発したまま結界へ叩きつけられる。

「つぐ……（いつの間に後ろに……？）……!!」

考えている暇などなかった。それに気づいたのは、春斗が目の前に迫っていた後だった。

——ノーモーション——無式・消失螺旋拳!!

技を放つ始動すら見抜けぬ一撃。しかも壁に激突したまま放たれ、腹に食い込みながら回転しているので衝撃が逃がせず内臓がグシ

ヤグシヤになるのを感じる。堪らずに吐血した。

「はっはっは、テメエの血も赤いんだな……何か安心したぜッ!!」

それは先程とは丸で逆。再び春斗がドーナの頭を掴み取り、そしてそのまま腕力も付けて振りかぶる。

「おらよッ!!」

———
ノーマーシヨン
無式・地球返し!!

ドオオンッ!! という音を立てて、ドーナの後頭部がホテル屋上へと減り込む。その轟音はその一撃がどれだけの力を持つかを物語るには十分過ぎる物で。

「テメエの能力、喰らって始めて分かった」

その言葉は流石のドーナにも驚愕を走らせる。その言葉の意味をそのまま取るとするならば、自分が放った先程の一撃は“直撃した”のでは無く“直撃して見た”という事になる。そしてその意味は正解だった。

「テメエの能力は“分解”だな。それもただの“分解”じゃねえ、物体を構成している原子そのものを破壊し分解する力……俺の“消^ち失”と似てる訳だ、俺のは原子と言うより存在を消す力だけだな」

「……………何の事だか分からない」

「惚けるな。　　というか惚ける気無いだろお前、今の間は何だオイ」

「……………止めは？」

「は？」

「殺さないの？　　貴方ならわたしを微塵も無く消せる筈だよ？　　その消失の力で」

人格破綻者の声とは思えない程、しっかりと意思の籠った言葉だった。　　リン辺りが居れば偽物と疑うくらいの勢いである。

「あー、そうか。　　そういう選択肢もあるのか」

だが、帰ってきた答えは予想外で、けど。

「すまん、俺は人は殺さない」

彼の興味を示すには十分だった。

「……殺さない？ わたしを？ たくさん人を殺して、貴方の仲間も殺そうとした、わたしを？」

それは彼にとって始めての事だった。

向かってくる人間は皆、敵。自分の能力を使って、自分勝手な世界を作る為にやって来る者や勝手な逆恨みで来る者や様々で、その中で彼に最後まで殺意、そして敵意を向けなかったのは、王国警備軍の勧誘に来たロザリーだけだった。

だからこそ彼はロザリーの勧誘に応じた。“好きな行動をさせてくれること”、“面白そうなことは知らせて欲しい”という事、この二つの条件で。結果今の環境がある訳なのだが、現在その環境をも揺るがす事態が起こっている。

人間が 自分に 敵意を 向けない？

そんなこと 有り得ない 筈なのに。

そんな彼の心情なんて知らず、春斗はドーナを組み伏せたまま言葉を続ける。

「俺の自己満足なんだけどな。もう人を殺すのは子供の頃に嫌という程体験したんだよ……心臓を抉ったりもした、首から上を消し

たりした、他の人間への見せしめにミンチにしてバラ撒いたりもした」

「……、」

「それはもう悪夢だ。自分勝手だが、俺は人を殺せなくなっちゃった……さっきも言ったけどよ、俺はもう大切な物が出来すぎちゃったよ」

どんなに敵が憎くても、どんなに相手が残酷な人間でも、“殺さない”。彼はそう続け、ドーナの組み伏せを解いて後ろに跳んだ。

それは恐らく、“世界最強にして最悪の次元犯罪者”ドーナ・クライオンを倒せる最後のチャンスだったのだと思う。そのチャンスを、最低の精霊を倒したという名誉を捨ててまで——彼は笑いながら、再び構えを取った。

「ほら、立てよ。心配すんな、手加減も油断もしねえさ……アンタは強い。敬意を表して、俺も全力で戦う」

そう、始めてなのだ。

ドーナ・クライオンを、“次元犯罪者”でも“化け物”とも見ない人間は。

「……、」

脈が高鳴る。

緊張してる？ 違う。これは別の高鳴りだ。

少し顔も熱い気がするが、気のせいと思っておこう。

「ねえ、高町春斗」

「ん？」

「知ってる？ ロザリーにも話してないんだけどね？」

いたずらっぽく、“彼”は笑う。

「……水の精霊、というか水に深く関与してる魔術師の家系って――
――どうしてか、皆女の子なんだって」

「……へ？」

瞬間、巨大な水の柱がドーナ・クライオンの足から立ち上る。その勢いに驚愕を表す春斗だが、そんな水の中でも不思議とドーナの変化が見て取れた。

少々短かった白い髪の毛が、踵まで大きく伸びて赤いリボンで結ばれた。

身長140cm以下と思われる小柄な体が、少し光ったかと思うと150cm超ある身体へと変化する。

同時に、“彼”には無いはずの胸の脂肪等が形成され、身体の形状もより“女性”ぽくなり、最後に服が変化する。

シャルのバリアジャケットの緑の部分を青く染めただけの様な感じを想像すればいいだろうか。帽子はないが、この彼(?)の場合は無いほうがいいのかもしれない。

さて、一応現在の春斗の心境を覗いてみよう。

(。Д。) ↑春斗

大体予想通りの反応だった。

「……改めて、自己紹介」

この身体になるのは久しぶりと発言するドーナ(?)。手首を捻り、首を回し、腰を回す(変な意味ではない)。

「……………わたしの名は“ウィティクス・フォレスター”。仲の良い人には“ウーティ”って呼ばれてた。貴方もそう呼んでいい」

「スマン、普通喜ぶべき所なんだろうがこの状況でのその言葉は嫌な予感しかない。しかしどうして偽名なんて使ってたn……“フォレスター”？」

春斗の頬が引きつった。その名前には聞き覚えがある——確か、旧ベルカの王族の名にそんな名前が……

「……多分、貴方が思ってる事で合ってる。如何にもわたしは遙か古に滅びた旧ベルカが王家、水帝“フォレスター”家の創始者。戦争で死にそうになった時、水帝の家系に伝わる秘術で精霊化して生き延びた。けどそのままの格好じゃバレちゃうから、今日この時まで性別を変えてたの」

彼——否、“彼女”は告げる。

その笑みは先程と同じく、何処かおかしそうな微笑み。玩具を見つけた、そんな子供のような表情。

「勘弁してくれよ……大魔女に引き続きベルカ時代の初代の王とかよ……」

対する春斗はこの一瞬ですべての体力を消耗した様な表情だ。旧ベルカ時代での帝の位を持つ王族、しかも初代ともなれば恐らく化け物クラスだ。もしかしたら兵器クラスの可能性もある。

「……わたしは貴方を認めた。わたしが人間だった時代は、わたしに認められるって言うのは凄いことだったんだよ？」

「そりゃそうだ。仮にもアンタは王族、そんな人に認められたら嬉しいだろうなあ」

「だから……ね？ 高町春斗……」

バリアジャケットが翻ると同時に彼女の身体から現れたのは、水の翼。

左右合計八本——ある意味二度と見れぬであろうその幻想的な光景は、春斗の頭に走馬灯を起こさせるには十分すぎる規模だった。

（冗談抜きでヤベェなこりゃあ……まさか旧ベルカ時代の初代の王だったとは……）

「……………わたしと一緒に踊いませよ♪」

ギチギチと音がした。

同時に、八枚の水の翼が一斉に春斗へと襲いかかった。

「……アンタ見てえな綺麗な人とだったらやってもいいかな、と一瞬でも思った自分の煩惱を殴ってやりてえよ畜生!!」

——消失の翼撃!!
パニツシュウイング

その翼を消失の概念で掻き消す——が、一瞬で元の形状に戻ってしまう。その現象から“攻撃はほとんど無意味”と判断した春斗もまたこの戦いの行方を見た。

持久戦。どちらかの精神力か魔力が切れたその瞬間、勝者と敗者が決定する。

「あはは、わたし綺麗? 嬉しいなあ♪」

「ああ、良ければこの物騒な水の翼も引っ込めて貰えば最高なんだけどなっ!!」

「それはダメ?」

化物VS兵器改め、旧ベルカ王族“初代水帝”VS兵器。

第二回戦、開始。

＊

此方はデミスとロザリーVS兵器、フラン・T・ハラウン――

彼らは、簡潔に言って“兵器”相手に苦戦していた。

彼女の出現により、彼らの目的も大きく変わった。デミスもロザリーも兵器そのものに様がある。つまりは目指すものは同じ。戦闘に突入する直前にそう考えた二人は念話で協定を結び、先程からフラン1人を集中的に狙っているのだが。

「――陰陽術五式【八点結界】」

彼女は一切、デミスとロザリーが攻撃する時には反撃をしない。それだけで彼女達は苦戦を強いられていた。

良くも悪くも、彼らは両方とも攻撃役であり防御は殆どしない。それはつまり、攻撃を封じられたら彼らは何もできないのである。もちろん両名とも頭は回る。だが策も何もない“自分達の力では突破できない堅い壁”にはお手上げ状態だ。

そう、フ란の障壁は彼らですら打ち倒せない物だった。

かといって、距離を取り様子を見ようとすれば――

「陰陽術七式【煉獄瀑布】――！」

フ란の攻撃が待っている。

投げつけられたのはただの紙。しかし先程そう侮って即死級のダメージを食らった彼らはその三枚の紙を必死に避ける。

「あら、もう当たってはくれませんかのね？」

「当然よバカああ――！！ 何！？ こんな紙屑が永久凍結魔術の発動キーって！ 巫山戯てるの！？ あのままだとあたし死んでただけど――！」

「先程切り裂いても発動する事が分かったからな。もうその妙な攻撃は喰らわぬぞ」

「あら、そうですよ。 残念です」

フ란は強かに笑って、彼らの背後を指さした。

「なら、油断したまま溶けちゃってくださいですわ♪」

「「は？」」

ドロリ、と言う音が聞こえた気がした。

振り向くと、札が張られている岩から真っ赤なマグマが溢れ出していた。

「————なあっ!？」

「【煉獄瀑布】は無機物に張られて始めて効果を発揮する術なのですわ」

ニコニコとした笑顔で彼女は技の説明をする。自信があるのだろう、『彼らはこの術を知らないから対処のしようがない』と。

「効果は簡単、無機物の下からマグマが溢れる……それだけです」

「それだけで片付けられないわよね!？ 物理法則とかそういうの完全無視じゃないの!！」

「はい、この能力はそういう物なので♪」

そう言って更に札を数枚投げるフラン。仕方ないのでデミスも口

ザリーも上に飛ぶことで札と溶岩を回避——しようとしたのだが。

「陰陽術八式【創成操作】」

複雑な文字が書かれた札が溶岩に触れた刹那、その札を頭にするかのような感じで溶岩の龍が首をもたげて昇り始めた。

「はぁ!？」

「もう……無茶苦茶だな、汝は!!」

「あら、女性にそんな言葉は禁物ですわよ? 人外さん」

花が咲くような笑顔で皮肉を言うフランに頬を引き攣らせながらも、迫る溶岩の龍を叩き伏せるデミス達。

剣が溶けるような音を立てるが、どうやら札で操られているのでそれのみを切り裂けばいい。そう考えたデミスは空中に飛んだまま黒い方の剣を構えた。

「———“狂え、黒帝”」

吹き荒れたのは風というよりは嵐。 見えない刃は正確にすべての札を切り裂き、同時にマグマが完全に消滅する。 少しでもフラン

の顔から笑みが消えた。

陰陽術の利点は発動さえすれば自動的に動いてくれる事にある。だがその分魔力ではなく精神力の消耗が多い。そもそもフランにはリンカーコアが存在しないのである。だから彼女のみ魔力を隠す事も無く事なく此処まで兵器であることを隠し通せきた訳だが。

札を破壊されれば破壊されるほど、結界の維持もかなり難易度が上昇する。それを考慮すると、やはり自分は戦うのに向いていない事を痛感した。

(残り14枚……この2人相手じゃいずれ限界が来る……)

防御では勝っていても、攻撃で言えば自分は圧倒的に彼らの足元にも及ばない。優位に立っているのは、彼らが自分の見たこともない術に驚き、慣れていないからだろう。直ぐに弱点を見破られて反撃される事も予想される。

(……春斗……分かってますわよね?)

目の前に再び降り立つ二人の“王”を見ながら、彼女は思う。

(この下で、お兄様以外の“兵器”の気配が感知されましたわ——
—貴方も気づいているはず。私達としては、接触を計りたい所です)

ただ、と彼女は呟く。

（春斗の相手はあのドーナ・クライオン、そして私の相手はお兄様と同様かそれ以上の實力を持つ謎の男の人と幻想種の王女……隙なんて見せてくれるわけも無いし、見せるわけにもいかない）

それどころか、此処にいる存在だけで次元世界を三桁は崩せるだろう。兵器という存在はそもそも“1人いるだけで世界を終わらす事が出来る”というキャッチフレーズを元に造られている。フランや春斗、無還者を持つということはそれ即ち世界の統治すら不可能ではない戦力を手に入れる事になるのだ。

（……シャルさんとザフィーラさんを置き去りにする訳にもいかないですし……）

ザフィーラは兎も角、シャルは本当に偶々巻き込まれてしまった、という表現の方が正しい。新人魔導士達の方へ向かう最中、隠れて屋上へ転移しようとしたらシャルが転移可能圏内に入ってしまったのである。自分の落ち度であると思う。あれ程春斗も自分も気を付けていたのに、バレるときはこれ程あっさりと――。

「――」
“欲せ、白帝!!”

———欲望の雷剣!!

「壊・れ・て・消・え・ろお——!!」

———アルディメットクラッシュァー
大極閃崩壊剣!!

雷の一閃と名前からして破壊力抜群な剣撃が再び自分を取り囲む境界へと衝撃を与え、火花を散らす。その衝撃で我に帰ったフランは、気づかれない程度に頭を振って気合を入れ直す。

（今はどうせ何も出来ない——私は私のすべきことをするだけですわ……!!）

「——陰陽術壺式」

ゾワワツ、と。

デミスとロザリーの背に、氷を入れられたかのような悪寒が走る。

何かが来る。

只管にヤバイ、何かが。

「―――（バツ！！）障壁、最強防護壁起動」
アイギス

「……………“龍神の守護よ、我が名に従い我を守りたまえ”」

障壁と―――概念武装の類だろうか？　ロザリーの身体を赤い色の
力が取り囲んでいく。

しかし、それは全て無駄。

この技へ、障壁は意味を成さない。　寧ろ、絶好の餌食となるのだ
から。

「生きて居れば、またお会いしましょう」

―――【崩概】。

札は飛んでこなかった。

変化は一瞬で、一瞬の後に、終わった。

大地を揺るがす轟音が響く。

ロザリーとデミスの居た場所で、大規模な爆発が起きた音だった。

無還者の瞬間焼却魔法が、なのはのスターライトブレイカーが、春斗のパニッシュインパクトが可愛く見えてしまう程の威力だった。

「対魔導士専用に開発した術式ですわ。 空气中に浮いている魔力素及び効果範囲内にある魔力を全て爆発させる効果があります……まあ」

結界がなければホテルの半分は倒壊したであろう爆発により発生した煙が晴れる。

「……ぜえ……ぜえ……」

「はあー……はあ……」

息を吐いてはいたものの、五体満足のロザリーとデミスがそこにいた。

「貴方達には、余り効果は無いみたいですわね」

「抜かせ……魔力素の爆発なぞ500年以上生きてきて初めて見たぞ……」

「それは僥倖ですわね。 見れてよかったじゃありませんか（…ケガでもしてくれたらなあ、と思ってましたけれど、そう甘くはありませんか）」

「こんな狭い場所じゃ見たくなかったけどね…でも、ますます興味が出てきたわ」

この術は何なのか、そして何よりこんな技を容易く使うフランに対して。

微笑みながらロザリーは告げる。

「絶対に国へ持ち帰って色々聞かせてもらうんだからね！」

「何だか言い方がおかしい気がするが気のせいと信じる事にしよう。フラン・T・ハラオウンよ…高町春斗にも言ったが、汝も変わったな。口数が少なかったあの頃とは大違いだ」

「……何を…！？ 貴方、まさか！？」

「知りたくば、勝て。 吾輩の時代ではそれが掟だ」

——大罪の七閃——！！

ガガガガガ！！ と音がした。

雷、火、水、風などの斬撃が彼女の障壁へ直撃した音だった。

「……つく、う……!!」

「あたしを忘れないでよ？ お楽しみはこれからなんだから!!」

圧倒的な戦力差の中、再びデミスとロザリーがその得物を振るいフ
ランへと襲いかかる。

この戦いもまた、フランが先に倒れるか彼らが先に疲労するか
の持久戦へと持ち込まれた。

＊

ふと、騒音がして起きた。

もしかして、訓練中に眠ってしまったのかと慌てて起きる。 万が一
それなら某教導管がお怒りに違いない——来るべき死よりも恐
ろしき罰に身を震わせて、薄目をそっと開ける。

一瞬で後悔した。

というか、まだなのはが怒っている方がマシだった。

「『……………!!』」ザザザッ!!

———
邪炎劫火球!!
ダークネスギガフレイム

「ぬうんッ……………!!」

———
雷塵轟拳!!

それは戦いではなかった。

戦争と言った方が正しいだろう。 極大殲滅魔法や空間攻撃魔法の
応酬・連発——底なしの魔力とそれを扱えるだけの才能が可能に
した個人対個人の戦争だ。 正直、自分や他の皆が原型を留めてい
る事自体奇跡だろう。

片手で放たれた極大殲滅焼却魔法を極大の雷電が蓄積されている拳
一撃で相殺しあって転移や高速移動魔法を使用しつつの攻防戦。
正直戦いの内容は3割も理解できなかった。

逃げ出したい衝動を押さえつけ、ティアナ・ランスターは気づかれ
ないように周囲を探る。

見事に全員が気絶していた。 いや、意識は少しだけあるが完全に動けないという者もいるようだが変わらない。

(……クロスミラージュ、出来る限り気づかれないようにこの戦いを録画して)

そうならば自分は自分にしか出来ない事をするしかない。 自らの愛機に呼びかけると、それに応える様にコアがチカチカと光った。 どうやら機能的には大丈夫なようだ――一先ず安心した彼女も気合を入れ直して目の前の戦いを見る。

「『――第1章28項…敵対対象が移動の際に使う魔法が判明。
↓自らの身体を粒子レベルで雷と混合し、擬似的な雷速を編み出している」と確定。 ↓対策として移動の瞬間に静電気が空气中に走る事を看破』」

「ッ!! (まさかたった7、8回の使用で気づかれるとは……ッ!
! 何処までも規格外な存在じゃのう……!!)」

あの規格外な男と見た目互角な戦いを繰り広げている女性に見覚えがあった。 あれは確か銭湯で一緒に入ったデイルという女性じゃなかっただろうか?

(……いや、今はそんな場合じゃない)

それも驚きだが、今はこの戦況はどうか、ということだろう。
第三者の目から見てこれは、

(……ディールさんが押されてる……………!!)

「『警告…第1章特例項。 敵対対象の戦力、並びに実力を80%
把握。 ↓反撃開始』」

「!?!」

雷速の右拳撃を流し、同速度の左蹴撃を見極めて避け、一瞬にして
ディールの懐に入った兵器はそのまま人体の急所である顎へと掌底
を放つ。彼女は視界が揺らぎ、危うく意識が暗転しそうになるが
それを舌を噛むことで堪える。

それを見越してか、続けざまに彼は正拳突き、裏拳、踵落として“
敵”の昏倒、もしくは隙を狙う。一撃一撃が全て重いその連撃は、
彼女の腹へ深いダメージを齎し。

そして耐圧障壁すら砕け散ったその瞬間に、集束された魔力が加算
された拳が放たれた。

———スターダスト・ブラスト
星屑螺旋拳

直撃——意識が朦朧とする中、本能的に少し体を引くことでダメージを少なくした物の、エース・オブ・エースと同等の集束砲撃が加算されたその拳は重く少々遠くまで吹き飛ばされてしまう。

再び吐血した。もうこの戦いだけでどれ程の血を吐いたのか分からない。傷は修復できるが血は戻らない、その為体力は絶えず減っていく。

だが、彼女は例え自分の頭の中を覗かれたとしてもここで立ち止まるわけには行かない。もう後戻りは出来ない地点まで来てしまったのだ。此処で引けばどちらにしろ、死ぬ。

身体を雷とし、瞬間的な速度で移動する。彼が看破した通りこの移動方法の弱点は移動の瞬間に小さな静電気が空気中に放出されてしまうことにある。普通ならば気づかないそれは、達人以上のクラスになると察知されてしまうのだ。つまり何処に来るかを常に知らせているような物である。

そして目の前の兵器は——達人と言う領域などと言うことすら驕ましい、化け物だ。

雷速で移動した箇所に、魔力弾が設置されていたことに気づいたのは移動した後だった。

(しまッ——!!)

悔いる時間すら、無かった。

行動に移す時間も、無かった。

真っ黒な魔力弾が零距离で起爆する。威力自体は大したことはないとはいえ、その一撃はデイルの心へと浸透する。

それは恐怖であり、自分自身への怒りでもある——そしてその動揺を逃してくれるほど無還者は甘くはない。

「『対象に精神的な問題を確認。 ↓追撃します』」

一瞬の隙を見抜かれ、零距离で放たれる魔力砲撃。慌てて障壁を展開する間も無く、直接食らって壁へと吹き飛ばぶ。

「くうう……っ!!」 バッ!!

だが、まだ一撃だ。

まだ自分は戦える。 まだ雷も放てる——!!

——雷塵轟壊砲!!

「『雷系統の砲撃探知。 ↓相殺します』」

———ダーク・ブラスト。

しかしその一撃すら、無還者が片手で放った砲撃で相殺されてしま
う。これは明らかに戦闘を始めた頃とは違う。 全て自分の動き
を知っているかのように動いてくる。

———まさか……。

「この短い間で……妾の力を見抜いたのかの………！？」

信じられない。 信じたくない。 だが、無還者ならば不可能では
ない。

その赤い目が自分の存在ごと壊しそうな気がして、幼い頃の記憶が
再び甦る。

「———ッ！！」

———ザザ………

プライドを身体ごと押しつぶされ、粉碎されて——絶対的な力の差を知って——全てに絶望して上を見上げたら、自分の血を身体中に浴びて自分を見下ろす紅い目があって——

ザザザッ……——

「……！！ はあ、はあ、はあ……」

吐きそうだ。

つらい。

逃げ出したい。

だが、逃げられない。

「まだじゃぞ……兄上」

彼女にとって、この戦いは非常に深い意味を持つ。

これは幼き日への決別でもあり。

兄を超える、という目標の為の修練の成果を試す場であり。

そして、自分を拾ってくれた大切な家族を守るためでもあるのだ。

だから彼女は、負ける訳にはいかない。

「……出し惜しみは……しないの……じゃったな……」

彼女の本質は、その卓越した反射神経にある。

人間の身体が考えてから動くまでを1と仮定すると、彼女は0.001の間に動ける程の反射神経を持つ。だから音速の攻撃が飛んできてほとんど考える前に動くことが出来る。

これから始めるのは、それを応用した術。

スカリエッティから使うのを止められている、正真正銘——vs
悪魔や神等以外では使うなと厳命された物だ。

（使うことになるとは……これなら、スカリエッティの事でも一度
父上と呼んでやるべきだったかのう）

そうなれば恐らく母上と呼ぶことになるのはウーノ姉上か……自分で想像してなんだがそこまで違和感のない事に戦慄を覚えてしまった。

「行くぞ」

自分へと声をかける。

何かを感じ取ったのか、同時に無還者も大地を蹴って魔力を纏った手刀を構える。そのまま貫くつもりなのだろう。

が。

「『!?!?』」

轟音が発せられた。

無還者の身体へ、雷が直撃した音だった。

どこから？　だが目の前の敵は何もしていないように見える。では一体？

「次元魔法の応用じゃ。これより、この場所では『妾以外の動いた者』へ即死級の雷が降り注ぐ——お主に取っては行動を停止させる程度の物じゃが、それでも十分じゃよ……」

——拒絶葬槍!!

序で放たれたのは真っ黒な槍の形をした力の塊。当然ただで喰らう訳も無く、再び障壁を展開しようと腕を上げて――

「『！』（ドォンッ！！）』」

再び雷が直撃し、あらゆる思考回路が一瞬だけショートする。雷が止んだ瞬間、右腕に理解できない何かがぶつかった。

瞳だけを動かして右腕を見る。

肩から引きちぎられてられていた。

ユーノ・スクライアの様な技術ではない、純粹な力で。

「拒絶の力――あらゆる全てを弾き、絶つ力。それはお主の身体や障壁として例外ではない……そして」

そして彼女は立ち上がり、両手を広げる。

「右手に拒絶を――」

そして、紡ぐ。

「左手に雷を――」

彼女は笑う。

その笑顔が何を示すかは、当然無還者には分からない。

だが彼女の事を少しでも知る者がこの場にいるのならば、迷わずこう言うだろう。

「……………死ぬ気かね、デイル……………!!」

何処からのラボから、大好きな科学者の声が聞こえた気がしてクスリ、と再びデイルは笑う。

そして、彼らがいたからこそ自分はある――だからあえて、心を籠めてこの場で言いたい。

いつもは小っ恥ずかしくて言えなかったけど。

ずっと、言おうとして、言えなかったことを――

「皆……もう言えぬかも知れないから言っておくのじゃ。――
今まで、ありがとう」

長かった。

これを言うまで、本当に。

「――――（キッ！）――ハッ！」

大気を揺るがす気合と共に、彼女は相反する筈の二つの概念が形成
されている両手を合わせた。

小さく何か潰れたような音が響く。当然これで終わる訳が無く、
変化があったのは次の瞬間だった。

「ああああああああああああああ！」

何かが、起きている。

迂闊に動いても無駄なダメージを喰らうだけだと判断した兵器は、
少しだけその瞳を細くして、片腕がもげたまま微動だにせず無表情
で敵を見る。

変化があった。

艶やかな黒い髪が輝かしい金色に変わっていく。

穏やかな緑色の瞳が攻撃的な緋色に染まっていく。

「……………」

咆哮が、止んだ。

序で、ディールが消えた。

「……………！」

速い。何が起きたのかすら脳が追いつけない程、一瞬で消えた。

その事に気づいた瞬間、鈍い音が聞こえた。自分の腹部へ先程とはまるで別格な一撃が叩き込まれた音だった。静電気の音すら聞こえなかった。

「……………が、ハッ」

機械的に喋る事すら出来ずに、鮮血と共に掠れたような声を吐いて

空中で吹き飛ばされた。

一撃で内臓がいくつかやられてしまった——直ぐに再生を開始しつつ体制を立て直し、術式を展開する。

「『警告——』」

「こっちじゃ」

背後から聞こえたその声に振り向いたと、同時。

展開しておいた障壁ごと突き抜けて、敵の身体がそのまま突っ込んで来た。

「『——!?!?』」

——閃天壊雷!!

自分自身が閃光となり、対象を貫く一撃。音速ジェット機すら凌駕するその一閃はそのまま無還者を大地へと墜落させる。

力の衝撃はそのまま大地へと通り、彼らを中心に大地が大規模に隆起する。耐え切れず、再び無還者が身体の中の空気を血と共に吐き出した。

「これが雷速の完成形態じゃ」

潰れたり破裂している身体を、高速で再生して復活する無還者を見ながらデイルは言う。

「拒絶の力と雷の融合——“雷絶”と妾は呼んでいるがの。隠すことでもないから言うが、この形態は妾への負担も凄まじい」

静かに、何の攻撃も受けていない彼女の口から一筋の赤い液体が垂れてくる。それを服の袖で拭きながら彼女は続ける。

「今、この身体はお主が先程言った通り“雷”そのものじゃ。打撃や斬撃は無効化する。ついでに拒絶の概念も入ってるから魔法も大抵の物は防御できる」

その顔に、死を恐る感情は無かった。

寧ろ、楽しそうな顔つきだった。この殺し合いを心の底から面白そうに。

「時間は5分。それで終いじゃ。何が終わるかは、お主と妾次第じゃがの」

まさに、ディールの為に造られた独壇場。

動けば雷が降り注ぎ、止まっていれば彼女の攻撃が襲いかかる。

どちらの術にも対抗策が見当たらない事に気づいた無還者は再び少し目を細めた。

「ああ、もう移動するときの静電気も走らんよ。あと速度も上がった。もう化け物だとか兵器だとか関係はない……」

お主は、もう妾を追うことは出来ん——そう告げたと同時、再びディールの姿が消えて。

その移動と同時に錯覚するかのスピードで、再び彼の多重障壁を貫通して腹部へ一撃が加えられる。

「『……………ッガ、あ』」

「……………先程の言葉を撤回するのじゃ……終わらせよう、兄上。今日この時を以って、兵器の忌まわしい歴史は終いなのじゃ!!」

雷の嵐が、たった1つの生命を刈り取るべく吹き荒れる。

“拒絶者”による“無還者”の蹂躪が、始まった。

“ホテル・アグスタ【主幕】”（前編）（後書き）

天破「ディール……ヤムチャしやがって……君の事は忘れないZE
☆シ」

ディール「!？」

という訳で主幕の前編をお届けします。少し考えて見ると、今ホテル・アグスタという狭い場所で兵器が4人も揃ってるんですね……世界とは狭い物です。ゲンヤやはやてが喜びそうですが、正直彼らの思い通りに行くとは思えませんw

さて、主幕も開演しそれぞれがそれぞれの死力を尽くして戦います。

ある兵器はちょっと死亡フラグなのか違うのかよく分からんフラグを建て……（パルパルパry

またとある兵器は最強級の敵2人を相手に持久戦を挑み……

そして地上で戦う兵器はその身を削りながらも“勝利”という単語を勝ち取るべく、管理局の闇へ挑みます。

どちらにせよホテル・アグスタ編も予定では残り2話。現在で既にシヤマルとザフィーラに正体がバレている春斗達ですが、果たして彼らにバレただけでこの事件は終わるのでしょうか？ご期待せずにお待ち下さい。

それでは、次回も出来れば宜しくお願いします m (_) m

“ホテル・アグスタ【主幕】”（後編）（前書き）

どうしてもこうなっ た／（＾Ｏ＾）＼

今回の話の注意事項です！ うっす！！

- ・全ての戦いが決着！！ 果たして勝敗や如何に！？
- ・ザフィーラ、ごめん、こうするしか、なかったんだ……
- ・シャマル……結局一回しかしゃべってねえ……
- ・ツンデレガンナアアア！！ 俺だ！！ 結婚してk（ry
- ・水帝マジチート（ノ＼、）
- ・地味にデミスもチート（ノ＼、）
- ・でもやっぱり無還者が一番のチート（ノ＼、）

荒ぶる注意事項と後書きッ！！ 取り敢えずスルー推奨DA☆
しかし切実に閑話を書きたいぞジョジョオオオオオオオ！！
※この話投稿後、天破の姿を見た者はいないという……。

それでは、宜しく願いますm（＿）m

“ ホテル・アグスタ【主幕】 ” （後編）

ウィティクス・フォレスター。本来王族、それも帝の二つ名を持つ存在となれば伝記や物語などが残されている物だが、奇妙な事に彼女に関して書かれた書物は一つ足りともない。

否、異例として“ 覇王 ” イングヴァルトが書き残した水帝に付いての一筆がある。古代ベルカ語で書かれていたそれを解読するところんな事が書いてあった。

『 “ 水帝 ” ウィティクス・フォレスターは権力にも栄光にも勝敗にも興味を示さぬ、この時代では実に珍しい存在である。彼女が“ 水帝 ” としての地位を確立した後も、彼女自身は戦争を放って一般兵と遊戯をしたりして街の子供と遊んでいるのが度々見られる。ある意味非常に興味が尽きない。一度だけ1対1で話す機会があり、それからも珍しい言葉がいくつか聞こえたので此方に載せておくこととする 』

（水帝 ウィティクス・フォレスター）

好きな四字熟語…自由奔放

好きな言葉…後は任せた

座右の銘…人任せとは正義（他のは無いかと聞いたところ、“無責任こそ大義”と答えられたので聞かなかった事にしたのは霸王のみが知る）

自慢できる事…少し前に炎帝と雷帝と風帝（※一応味方）を三人同時に片手で倒した。

好きな事…自分の思った通りに行動する事。

苦手な事…好意を持つ事、持たれること。

……と、これだけ見ると非常に気まぐれで自分が脚光を浴びるのが嫌なのが分かるだろう。

だが自慢できる事についての事柄を無視してはならない。三人の“帝”を同時に片手で倒した？ そんな実力があるのならとうに戦場に名を轟かす様な有名人になっている筈である。

慌ててこれまでの戦歴は？ と霸王が聞いた所、彼女は首を横に振って無い、と答えた。何故？ と更に質問した所、彼女が言った答えは霸王に取ってとてつもない衝撃を与えた。

“わたし、戦争に参加した事がないんです”

これが彼女の伝記も物語も無い所以である。それはそうだ、書きようも無いだろう。伝説どころか、彼女は活躍してすらいないのだから。

だが覇王は上記の一筆の直ぐ後に、こう記している。

『彼女は本当に、この時代では珍しい存在である。だが私は確信した。生まれながらにしてこの女性は、肉体改造を施した覇王であるこの私や聖王であるオリヴィエと同等の実力を持つのだと――』

だから、彼女がいつ生まれ、いつ死んだのか。全くその存在理由も、死因すらも分からないのだ。それこそが謎の多き水帝の創始者――ウィティクス・フォレスターである。

そして彼女は、その話し合いの後に一度だけ戦争に参加した。

その理由が“敵が子供達の遊び道具を踏んづけて壊した”というどうも幼稚に見える物だったが、それを彼女が知り、子供達の前から去った20分後。

敵の本隊が、壊滅した。

死人の数は四十万にも及んでいたと言う。しかも全部“敵”の物だ。死兵となる覚悟すら出来ていた味方は1人も死なず、全員が肉の欠片も残さずに溶けて死んだ。

とある、旧ベルカ時代を研究する科学者は言う。

“水帝 ウィティクス・フォレスター”は戦争に“参加したくなかった臆病者”では無いのでは無いかと。

“参加する必要も無い”と見たからなのではないかと。

そして。

研究者の間で波紋を呼ぶ謎の存在である“水帝”が、数百年の月日を経て再びこの世界へと姿を現した。

その実力は未知数にして、絶対。

不気味な笑みを浮かべた帝が、不敵な笑みを浮かべた兵器へ向かって力を解き放つ。

＊

「……、」

不気味。その一言に尽きる。

春斗の戦い方の一つでもある“直感”がほとんど通じない。何処から、どうやって、何処に攻撃するのかがまるで分からない。背中から生えている羽で攻撃するのか、それとも別の方向から来るのか。

気配すらその部分だけ丸ごと削げた様な感覚。春斗は、自分の身体が一筋の汗と共に思いっきり震えた気がした。

これが。

これが、旧ベルカ時代で“最強”と言わしめた王族の実力——！！

水帝が、動いた。

その指が一本だけ動こうとしたその瞬間に、春斗もまた地を蹴って一步を踏み出す。自分にとってこの距離はそこまで大したことは無い、一回蹴れば直ぐに懐へ飛び込める——！！

「……遅い」

聞こえたのは、自分の背後だった。

自分は、その声の主の懐へ飛び込んだ筈だった。

「――――ッ!？」

「……五式【水鏡】みづかがみ。使用者の姿を丸ごと大気中の水素に映し出す」

音もなかった。

その言葉が終わると同時に、春斗の周囲を取り囲む様に四人の“ウーティ”が現れる。気配も何もかもが全員“本物”の感覚。改めて痛感した。改

強い。

下手すれば、自分の兄貴級の實力者だと。

「……皆、“遊戯造界”がわたしの強さの秘密と思ってるかもしれない。けどそれは大きな間違い」

ゆらり、ゆらりと漂うかの様な構え。一見隙だらけのように見える春斗もどの“ウーティ”へ飛び出すのかを思考する。

飛び出した先が偽物なら、背後をつかれて絶命する可能性がある。

それ程の危険性を持つ相手だ。警戒して損はない。

「……そもそも、“遊戯造界”はわたしが精霊になってから始めて暇潰しに身に付けた技。あんな面白可笑しな手品見たいな能力に何か頼った事はない」

「取り敢えずテメエは、テメエが出てくるまでずっと“錬金術”の研究をしてきた科学者に全身全霊を掛けて謝って来い。んなチート技、暇潰しで身に付けられたら叶わねえよ」

「……貴方がわたしに勝ったらやってあげてもいい。だけど」

彼女の背に生える水の翼が金切り声の様な音を発したかと思うと触手の様に分裂し、同時に彼女の口がひん曲がった。

「それは、有り得ない」

——二式【水鞭】すいべん

刹那、襲いかかる水の鞭。驚異的な身体能力と直感でそれを躲す春斗だが、ふと自分の右側からも同じ声が聞こえてきた。

「……わたしを忘れてる」

“水鏡”で分身しているウーティの声だった。同時に彼女の背からも水の鞭が生え、春斗へと襲いかかる。

「はあああああ！！？」

計4人の“水帝”による、鉄をも押し潰す水圧による乱撃。流石に避け切れずに、前方と後方からの挟撃を飛ぶことで回避した所で両手両足を水で拘束された。

「しまっ！？」

「……六式【水漸】すいざん」

追撃として放たれたのは、巨大な槍に変貌した水の鞭。

一瞬の空白の後、全く躊躇も見せずにそれは春斗の腹を貫いた。

「――！！」

それを観戦しているザフィーラが息を飲む。先程から驚愕の事実で全く頭が追いついていなかったが、今日の前で起きている事柄だけは分かる。

あれは致命傷だ。

心臓どころか、内蔵全てが潰れてもおかしくない。

⋮
?

しかしそんなザフィーラの心情も知らず、4人のウーティは静かに首を傾げた。

生命活動が全く停止しない。いや、それは仮にも“兵器”なのだから内蔵を完全に潰されていたぐらいで死んだら興ざめだが。

しかし、死なないとは言っても激痛は走っている筈だ。なのに、彼の顔は何故微笑んでいるのだろうか？

「……はは……」

そして兵器は笑う。

手足を拘束され、腹に巨大な槍が突き刺さっているこの地獄絵図の中。

「あーっはっはっはっはっはっはっは！
見iiiiii付けたあああ
あああああ！！！」

巨大な水の槍の先を辿る。そこにいたのは、他の3人とは異なり驚愕の表情をしているウーティだ。

彼女の驚きも無理はあるまい。彼は“腹を貫かれた”という苦痛を受けるのも覚悟して、自分が止めを刺そうとするこの瞬間を逆手にとった。先程の“遊戯造界”と全く同じ方法だが、此方は“分解”では無いのでかなりの痛みの筈だ。あらゆる回避方法を頭にいれていたウーティだが、この方法だけは考えもしなかった。現に彼女は僅か0.1秒の間、思考が停止して全く動けなかった。

「……………!!」

正気に戻った彼女は一瞬で春斗の頭へ水による鉄槌の一撃を放つ。だが手応えがない。同時に水による拘束の感覚も既に無いことに気づき、“水鏡”を解除して周囲を探す。

彼は直ぐに見つかった。

——自分の直ぐ前に。

「っ（ガッ）んぐっ!？」

「痛え……自業自得なんだが、この癖早く直した方がいいよなあ」

何かをする前に顔を掴まれ、そのまま彼はウーティを重心と力を利用して彼女を背後へ倒す。

「ぜえ、ぜえ……………さて、仕返しだ」

———ワンモーション一式———ちぎゆかえ・地球返し———

思いっきり左足に重心をかけ、そのままウーティを後頭部から地面に叩きつける。

先程の数倍の轟音と衝撃が誰もいないホテルを揺らす。普通の間なら頭が潰れたトマトになっていてもおかしくはないのだが——そう考えた春斗だが、彼女の様子を見て少しだけ苦笑した。

「……………有りかよ、そんなの」

「……………わたしは水帝だから、どんな水でも操れる」

その顔に苦痛は見られない。ある意味当然か——と、春斗はその端正な顔の後ろにある物へ目を向ける。

ジェル状の“水”だった。

彼女はあの一瞬でこれを構築し、衝撃をほぼ軽減したのだ。

一瞬その瞳と目があつたと同時、得体の知れない寒気を感じて彼女から離れる。その直感は正しかったらしく、ゆっくりと立ち上がる彼女の足元から何やら溶けるような音が聞こえる。

「……王水ってしってる？ 油以外の物質を全て溶かして崩しちゃうの」

「造れるとか言うんじゃないだろうな？」

「今作ってる」

「マジで止めて欲しいんだが」

「ダメ？」

クスクスと愛嬌のある笑みで笑うウーティだが、その下で死の水が蠢いている事を思うと自然な笑顔が返せない春斗。

「……………うーん……………わたし、貴方の事本当に好きになりそう♪」

「抜かせ、現在進行系で殺そうとしてる癖に」

「ええ……………本当なのにい……………クスクス♪」

その笑いと共に、一層物質が溶解する音が大きくなる。刹那、ゴボゴボと恐ろしい音を立てて死の水が何本も空へと渦巻いた。

大量の王水である。触れたが最後、身体が溶解して消えてしまうだろう。さすがに春斗も骨や肉を全身溶かされての再生は難しい。

「――七式【水壊】」

考えている間に、全てを溶かし尽くす死の水が春斗へと雪崩込み始める。

その光景に一瞬だけ憂鬱な顔をした春斗だが、直ぐにそれは不敵な笑みへと変わる。何かするのかと期待を寄せるウーティ――何か違う気がするが此処ではあえて触れない事とする。

「これは本当にヤベエかもな……が、残念だ」

前方に迫る水に構わず、春斗はバツ！！と後ろを振り向く。

予想通り、“水鏡”で分身したウーティが春斗を“水鞭”で拘束しようとしていた。

「「!?!」」

「悪いなあ……」

その左手に、白銀色の力の塊が宿る。

「俺に、一度使った技は効かん!!」

——失いて消えよ我が障害!!

その塊が地面に叩きつけられ、春斗の周囲へ白銀色の壁が展開される。同時に王水と水鞭がその壁に到達したが、破裂する様な音を立てて消えてしまう。同時にその衝撃を喰らった水鏡の分身も消えた。

消失の概念——食らうたびに転移で逃げたりして今まで直接見たことは無かったが、成程。春斗が“分解”と似ていると言うのも分かる気がする。注意しないとわからないが、完全に水が“消えた”。自分の支配下にあった筈の水との接続が切れてしまった様な感覚だ。

「……ふうーん。ならこれはどうかな？」

右手を掲げる。その行動に追従するかの様にゾゾゾゾ!!と水がその先へ集まっていく。どうやら王水ではない、真水の様だ。が何をするつもりだろうか？警戒する春斗の目の前で、信じられない出来事が起こった。

高速で水が回転し始めた。　そう、そこまではいい。

その水の回転で、どうして目視出来る程の静電気が起こる！？

「……何の不思議もない。　水同士が波立つだけで静電気は起こせる。　だから今、一つの水球の上半分と下半分をそれぞれ逆回転させてその中心に電気を起こしてる。　微量な物だけど、集まれば痺れさせる事くらいは出来る」

それはどう考えても痺れる程度にはならない、即死級だろうと必死で突っ込みたい衝動を押さえつけ、右手に消失の概念を発現させる春斗。

ともかく、あの球さえ止めれば――

「……あ、後三つくらい作っておこう」

ゾゾゾゾゾ……ボッ！！！！（ウーティの周囲に水が集い、高速回転を始めた音）

「いやいやいや、そういう事が出来るんだったら右手をワザワザ掲げる必要なかったよな。　何故掲げたんだ」

「……………」

「いや、良い。何も考えてなかったんだな？ ああもう、何かこういうところがあるから非常にやりにくいよ畜生」

「……（カアアアア……）……（キッ！）」

——九式【爆水】——！！

「ってうおおおい！！？」

その白い瞳を細くして春斗を睨んだかと思うと、雷を纏う水球が春斗の元へと向かう。危なげなく一つ目を躲すと、バチバチッ！！という小さな音を立ててその水球が起爆した。その威力に、『いやこれ対軍兵器だろ』と思いつつ残りの三球は右手に存在する消失の概念でかき消す。

「（——よし、消した！！ これで次は本体に——） ってはあああ！？」

「……………」

——八式【水絶】——！！

気を取り直してウーティを見上げみると、続いて放たれたのは瞬時

に構築されていた王水による巨大な圧縮砲。当たれば存在ごと物理的に粉碎される――消失の概念も間に合わない判断し、障壁でガードしきれるか微妙だったので横に飛んで回避する。

ボシュッ!! と音がした。

春斗の斜め後ろの地面が水圧で吹き飛び、しかも王水の影響で少しずつその箇所が溶けていつている。どうやら避けたのは完全に正解だったようだ。

「いやいや、切実に殺す気かこの野郎!? 何でいきなり気合入ったんだよ!?!」

「……わたし………何だか、貴方に間違いを指摘されると――」

「……?」

「……………むかつく恥ずかしいっ!!」

――八式【水絶】×4!!

「普通に八つ当たりじゃねえか!? だあああ畜生!! 殺そうと襲いかかってくる敵と何会話してんだ俺はああっ!!」

――パニッシュインパクト×5!!

ドドドドドド！！ と、消失の概念と物理的な溶解の力が衝突し合う。

轟音を立てて周辺の景色が溶けたり消滅していく中で、再び水帝と春斗が直接ぶつかり合った。

「……………零、」

「距離ッ……………！！」

—————一式【水崩】！！

—————ノーモーションレリョウしさいげいけん無式・消失殺迎拳！！

水のドリルと消失の概念が零距离でかち合い、パンツ！！ という音を立てて水帝が吹き飛ぶ。すかさず追撃する春斗だが、その顔を見て一瞬凍りついた。

笑っている。

あの笑みは、特に悪知恵が働く自分やはやてが“計画通り”の際にする笑みだ。

「————っ!!」

何かする前に仕留める。 本能とも言える危機回避能力がそう決定付け、空気を蹴って吹き飛んだ水帝に肉薄する。

「零距离イツ!!」

————パニッシュブラスト!!!!

近距離専用の“消失”の一撃。 何かしらで避けられる事も考え、このホテルごと消すつもりで放った一撃だ。

それが直撃しようかという瞬間、彼女の口が静かに動いた。

“残念でした”。

胸に、鋭い痛みと共に何か突き刺さった。 余りの痛みに“パニッシュブラスト”も解除されてしまう。

まるで他人事のようにそれを見る——刺さった箇所から不気味にジュルジュルと音を立てて溶けていた。

振ってきた場所と見られる、空を見上げる。

雨だ。

そう、王水で出来た槍の雨――

「てんおううげき天王雨撃」

彼女の言葉が、今度はハッキリと聞き取れた。

「……王水を使って雲を作って、巨大な水の塊を降らしてる。逃げられる箇所なんてない。この場所全域が攻撃範囲だから」
逃

その言葉が終わるか終わらないかという刹那、春斗はウーティを放って全く別方向へと駆け出す。

向かう場所は、ザフィーラのいる場所。彼は突然降ってきた雨を見上げて怪訝な顔をしていたが、構わない。

そのまま蹴り飛ばす形で覆いかぶさる。障壁も、消失の力も展開する猶予なんて、余裕なんて無かった。何か親友からの怒鳴り声の様な声が聞こえるが構わない。

あらゆる全ての音が消えたような錯覚に陥る。

背後から、水帝の鈴のような声が聞こえてきた。

「……貴方の敗因は、この場に盾の守護獣を連れてきたこと。まさかこの時代まで“闇の書”が存在するなんて今日まで全く知らなかったけど……確かに守護騎士は強い。だけどそれは主や他の守護騎士が居てこそその強さ。守護騎士の強さとはつまり“チームワーク”にある。でも、他に誰もいない単体の場合は単なる“荷物”」

何も映さない、虚ろな白い瞳が不気味に光った様な気がした。

「……………貴方には特別……………水帝の力を見せてあげるよ……………」

その言葉が終わる刹那、自分の息遣いすら聞こえない錯覚が起きた。

“殺気”だ。静かだが濃厚すぎるそれは、春斗の五感すら全て封殺したのだ。ウーティが放つ殺気^{それ}は、紛れもなく春斗を殺す為だけに放たれた物。それを受け、不思議と春斗の顔には笑みがこみ上げてきた。

ああ、何て凄いんだ。

これ程、目の前にある壁は高いのか、と。

「……………残念だけど、高町春斗」

ボボボボボッ！！　と音がした。

空から、小さい子供の腕程度の大きさの水の槍がホテル・アグスタ周辺へと降り注ぐ音だった。

「貴方にはまだ、“王”は早いね」

――――極式【罪人^{つみびと}への贈物^{おくりもの}】。

「あーあ」

春斗は笑う。

目の前で驚きながら声を上げる親友の声を聞きながら、上から迫る

死の槍が空気を切り裂く音を聞きながら。

「畜生、アンタめちやくちや強いじゃねえか」

盾の守護獣の絶叫と共に、自分の腹を何本もの異物が貫く感覚がした。

そして、此処で一つの戦いの勝敗が確定する。

兵器V S 水帝は、水帝の勝利で終末を迎えたのだった。

＊

同時刻、フランV S デミス&ロザリ————

ドガガガガガガガッ！！

「！………槍の雨！？」

「これは……（バシュッ……ジュウウッ！！）ッ！？　こんなの、あたし達以外で出来るのは……まさか、ドーナが！？」

「……………！？　（溶解液で出来た雨……？　ドーナ・クライオンにそんな能力が？　……春斗……！）」

*

同時刻、デイル VS 無還者———

「しまっ———」

「『警告…第2章51項。『焼き爛れし神の皮膚』発動準備開始。
↓完全発動まで残r』」

ドガガガガガガガガッ！！

「『！？　（ズガガガガガッ！！……ジュウッ！！）———ア、グウっ……』」

「！！　（なんじゃ、水槍の雨！？　……何者か知らぬが、礼を言うぞい！！）」　———だあああああッ！！！！」

＊

「……………」クルッ

約2分間降り注いだ王水の槍を全身に受け、完全に気を失った春斗へと背を向けてフヨフヨと浮遊し、ロザリー達の元へ戻ろうとするウーティ。

もう此処には面白い事は何もない。 そう言いたいがように。

ふと、背後に気配を感じた。 一応そこで立ち止まる。

「……止めといった方がいい」

その言葉は、彼を見ずに放たれた。

力の差を感じさせる重みのある言葉だった。

「わたしの話聞いてたでしょ？ 守護騎士は単体ではせいぜい戦争で言う“司令官”程度……ましてや貴方は守護騎士の中でも防御役。わたしに一撃でも付ける事はない」

「それでもだ」

その目には涙がたまっていた。

悔しいのだろう。目の前で何もできず、倒れた親友を見るのが。

本来“盾”になるべき自分が、逆に庇われ生命を助けられたことが。

「俺は盾……本来主の命に従い、春斗を護らなければならない立場だと言うのに……！！」

だからこそ、自分の生命すら捨ててでも彼女に一矢でも報いようとするつもりなのだろう。

しかし。

帝は、そのザフィーラを塞がっていない片目だけで見据えた。

「自惚れるな」

刹那、ザフィーラへと降りかかったのは春斗が受けたのと同じ“殺気”。

最早それは“殺気”ではなく“重圧”であり、ザフィーラの身体中が拒否反応を示して思わず勝手に膝を付きそうになる。

「命令がどうしたの？ 立場がなんなの？ 盾の守護獣が聞いて呆れる」

「……な、に………」

「今高町春斗は貴方を文字通り身体を張って護ったんだよ？ 実はわたしの“極式”は発動中は移動できないのが難点なの。高町春斗の能力なら、自分の頭上に傘の様な物を展開すればそれで済んだ筈だった。けど、それなのに攻撃を受けた。それは貴方がいたからだ、盾の守護獣」

「……！」

「もし貴方がいなければ、高町春斗はわたしに勝っていたかも知れない。結局この勝負を分けたのは“持久力”なんかじゃない、“仲間”という存在の有無。わたしには“仲間”はいない。でも高町春斗には貴方という“仲間”がいた。……本当に、残念」

「……ッ………！！」

「しかもわたしとの勝負すら投げ出して、殺される危険すらも顧みずに貴方を救った高町春斗を放って、貴方はわたしに殺されようとしている。本当に愚か。それが守護騎士として本当に正しい事なの？ 盾の守護獣」

「――」

無言で両膝を付くザフィーラ。彼女の言葉是一片たりとも間違っちゃいない、正論そのものだ。だからこそ何も言い返せない。

顔を俯けるザフィーラへ、帝からの非情な言葉が届いた。

「……丸くなったね、貴方も。盾の守護獣ザフィーラ。やっぱり貴方は、旧ベルカ時代あのころよりも弱くなってる」

わたしも人のことは言えないけど――という言葉を小さく付けたし、今度こそ彼女は背を向けて去りゆく。

顔を俯けたまま、ザフィーラは齒を食縛って噛み締める。

これが、“王族”。

自分達が生まれた時代で、最強の名を思いのままにした“帝”の1人。

「……でも、高町春斗程じゃないけど……その態度は好感が持てる」

クスリと笑い、彼女は面白そうに告げた。

「……………高町春斗に伝言しておいて。『また会ったら遊びましょ』、って。それと、盾の守護獣——貴方が、もしくは貴方の“仲間”がもしわたしの身体に傷を付けるような事があれば、その時は全身全霊を以って相手する事を水帝の名において誓うよ」

————それじゃ、ばいばーい♪

ポチャン、と軽い音がした。

顔を見上げると、既にそこには誰もいなかった。

「……ッ」

悔しさから思いっきり地面へ拳を叩きつける。少し地面が陥没するが、周囲には春斗やウーティが付けた大量の隆起や陥没穴が存在する。この程度、気にも止められやしないだろう。

硬い地面を殴って、しかし全く傷のついてない手を見た後に空を見上げる。

地上の戦火など全く知らないかの様に、青く澄み切った空だった。

他人とは違って大きい筈の手は、何故か今はとてもちっぽけに見えた。

高町春斗&ザフィーラvs水帝 ウィティクス・フォレスター

勝者 水帝 ウィティクス・フォレスター 敗者 高町春斗（気絶）
&ザフィーラ（戦意喪失）

——— 終結。

*

——— 時は遡り、春斗らの決着が付く数分前。

相変わらずの、完全な“持久戦”の最中であつた。

ロザリーとデミスの圧倒的な攻撃を防御魔術で避け、流し、受け止める。

しかし、いくらなんでも敵が悪い。相手は戦闘狂の気がある、攻撃をするためだけに生まれてきた怪物×2である。防御するのに限界がある。現に今彼女は、その恐るべき攻撃の嵐を受けきれず、障壁を貫通した攻撃が擦り傷や切り傷が身体中に出来ていた。

「はあ、はあ……」

「ぜえ、ぜえ……喜んでいいわよ兵器ちゃん……あたしの息を切らせたの、90年位生きてきて貴方で3人目よ……」

「ぬう……っ。だが汝も余裕が無いようだな。ようやく攻撃が通り始めた……」

「そうじゃなきゃ泣くわよあたし……貴方に放った攻撃だけでクラナガンを二回壊滅させる自信があるもん……」

「あら……それはそれは……」

———実際、気を失いそうだ。

既に精神力も限界に達しそうである。

残っている札は残り2枚……あの後、もう一度放った【崩概】で更に6枚使ってしまったのがやはり大きかった。その成果あり、何とか皮膚に火傷程度は負わせる事が出来た様だが……普通なら爆散してもおかしくない衝撃のはずなのに、と苦笑しながら“敵”の異常さを改めて感じ取った。

フランは、この戦い勝てるなんて微塵も思っちゃいない。

寧ろ負けるのが当然の戦いだろう。そう、消化試合の様な物だ。

クラナガンを二回壊滅させる程の力をだしてようやく息が切れ始めている古龍族と、まだ息も切れていない得体のしれない人外が現在の敵で、そして自分の持ち技はほとんど出尽くした。結界を張っていられるのが奇跡とすら言える。

恐らく次、ディバインバスター級上級の一撃でも放たれたら破られる。残りの札2枚を全部防御に回しても敗北するまでの時間が長くなるだけだ。というかその二枚を防御に回して生き残って、その後どうしろというのか。自分の武器を失って目前の二人に勝てると思う程彼女は馬鹿ではない。フラン本体の身体能力は高いどころか低いのだ、指一本で秒殺されるのがオチだろう。

「ま、結構楽しめたわよ。でもその顔を見るにもう限界って感じかしら？」

「そんな訳ないですわ。まだまだ戦えます」

「あはは、そんな強情を張らなくたって大丈夫よ。別に貴方が負けようが、別に生命を奪うような真似はしないから」

「……………え？」

「え、なにその顔。もしかして誤解してたの？　というか高町春斗君から聞いてない？」

「……………え？」

初耳だった。　　どういことだろう？　　そんな表情を読み取ったのか、ロザリーが大剣を肩に担ぎながら言った。

「貴方には、あたし達がジャックしたTVで貴方が管理局にされたことを言ってもらいたい。それだけ。それだけで民衆の暴走が起きて、管理局を信じてる局員は失望してあたし達の味方になり、残ったのは管理局に巢食う上層部^{蛆虫}だけ。簡単だけど素敵でしょ？」

その笑顔を見た瞬間、始めてフランの背中に寒気が走った。

あの笑顔は、“自分と自分の関係者以外はもうなんでも構わない”という笑顔だ。　　そういった者は味方である分にはかなり心強いが、敵になった瞬間に最強の矛になる。　　どんな方法を使ってでも敵を最後まで追い詰め、欺き、味方を増やして、最後は自分の敵を敵の自滅で終わらせようとする者。　　それがどれだけの被害を、どれだけの死者を出したとしても、彼女は“英雄”、“革命者”として称えられることになる事だろう。

死んだ者達は“革命の礎”だとか“栄誉ある死”として片付けられ
良い。ロザリーの一言でそこまで読み取ったフランは、皮肉げに
口を歪ませた。

「……ええ、簡単ですわね。善も悪も無い、ただの“暴動とそれ
によって起きた革命”として片付ける気なんですか……怖いことを
考えますのね」

「うっわ、すごい。その一言でそこまで読み取ったんだあー」

「それで、良いんですの？ 私はその事をとにかく言う気はありま
せんが、シャルさんはどうか分かりませんよ？」

「あっはっは、貴方それ本気で言ってるわけじゃないわよね？ 管
理局の上層部がたった一人の小娘の戯言を聞いて防衛体制を取ると
思う？ あの屑共は自分の利益しか考えない強欲の塊よ。そんな
本当かどうか分からない防衛に金を回すくらいなら、貴方達のよ
うな生体兵器の量産にお金を注ぎ込むでしょうね」

「……、」

皮肉を皮肉で返された。しかも正論すぎて何も言い返せない。
思わずこめかみを引き攣らせつつ少し言葉を探すも、その台詞その
ものが真実そのもので下手に返すと更に皮肉を返される恐れが
ある。そう思い口を閉じた。

要は、小さな子供が大人に『後少ししたら大型台風が直撃するよ』

と忠告するような物だ。 大人は当然、それを笑って有り得ないとしても言うだろうが、その後本当に直撃したのを目撃してこう思うことだろう。

ああ、なんで自分はあるの子の言葉を聞かなかったのだろう、と。

それと全く同じことをロザリーは言った。 全く、正論すぎて耳が痛い。 しかも管理局の上層部は恐らくそんな懺悔すらする間もなく虐殺される様な気がするので、こんな例えの様な生易しい結末にならない事は確かだろう。

「吾輩もその返答には同感だ。 主の傍に付いている者として、正直あの者達には吐き気が出るな」

「……こうして敵として出会っていなければ、お酒でも飲みながらお兄様の話を聞きたいのですがね!!」

「いいわねえ、この戦いが終わったら飲みに行きましょうか!!」

———
アルカディアアクラッシュャー
神極閃崩潰剣!!

最早維持するのにも困難な結界に、大地を削りながら容赦の無い大剣による一撃が迫る。

フランは、その思考能力でこの先の未来を掴んだ。

この一撃で、この戦いはようやく終わる。

直撃は免れるが、恐らく剣圧かなんかで後方に吹き飛んで結界にぶつかるだろう。この消耗した身体では剣圧だけで気絶する自信がある。

（ようやく、終わりですか……まあ、戦闘専門じゃない兵器としては良く耐えた方ですわね）

はあ、とため息をつく。気絶した後どのような事をされるのかは分からないが、ロザリーの話では先程のような事を言うだけで良いという。革命を手伝うのは正直ご遠慮願いたい、敗者が勝者に意見する事など出来やしない。拒否すれば身体ごと消されてしまう可能性すらある。

ただ――

（春斗、フェイトお姉様……ごめんなさい、もう一度会いたかったですわ……）

未練があるとすれば、それだけだった。

少しだけ微笑みを浮かべて目を閉じる。

馬鹿でかい魔力を纏った馬鹿威力の大剣が、その結界に直撃した――

と、思ったのだが。

「……？」

何時まで経っても痛みがない。そっと目を開けると、結界へと激突する直前で“神極閃崩潰剣”を止めて怪訝に空を見上げるロザリィがいた。

何だろう？と自分も空を見上げて、異変に気づいた。

“雲”だった。

ただの雲ではない、ドス黒くて不自然に渦巻いている。まるで、人工的に造られたかのように。

「……兵器ちゃん？」

「違いますわよ。貴方が自分で言ったじゃないですか、もう私は限界です。天候を変えるなんて大逸れたこと、万全の準備が無いとできませんわ」

「うーん……じゃあ、」

「吾輩でも無い。吾輩は天候操作の術を知らんからな」

では、誰なのか——そう考えた次の瞬間、雲が動いた。

ドガガガガガガガガガ！！！！

「！！……槍の雨！？」

「これは……（バシュッ……ジュウウッ！！）ッ！？　こんなの、あたし達以外で出来るのは……まさか、ドーナが！？」

「……………！？　（溶解液で出来た雨……？　ドーナ・クライオンにそんな能力が？　……春斗……！）」

あらゆる全てを溶解させる槍の雨。

古龍族であるロザリー、人の形をしている人外ことデミス、そして既に脆弱ながらも結界で守られているフランとシャマルには効果はないが、それは確かに2分もの間降り注いだ。

「……なんなんですよ、一体………」

「あたしが聞きたいわよ……ドーナってこんな天候操作術なんて使えたの？ 知れば知るほどあの人チートになっていくんだけど」

国の女王から公式チート宣言が出たことに突っ込むべきか、それとも隙を付いて拘束だけでもするべきか……どっちにしろ自分の運命がそこまで変わらない事に気づき、考えるのをやめた。

「……むっ、何か来る」

何とも言えない微妙な空気が漂い始めた時、デミスが何らかの違和感を察知して剣を少しぬかるんでいる気がする地面へと投げて突き刺す。

その直ぐ横からボコボコと水が空気泡を出したかと思うと、突然その中から何かが飛び出してきた。

「……！ 危険。いきなり物を投げるのは良くない」

皆の心が、この時始めて一体になった。

“誰？”

少なくとも彼らの知っている者じゃないと思う。 いや、ロザリーからしてみればその白髪白眼に見覚えがある気がしなくもないのだが。自分には無いも同然な胸の脂肪や身長がその事実を認めない。というか性別からして違うのだからそうであるはずがない。

「……あつ、性別戻し忘れた……まあいいや」

今の言葉も聞かなかったことにする。

「ごめん、ロザリー。 さっき雨が降ったでしょ？ あれ、わたしでね？」

その話し方で完全に理解した。

この女性はドーナ・クライオンだ。

「ってなんて姿してんのよあんたは！？ 何がどうなったらそうなの！？」

「後で説明する。 で、さっき降らせたのって“王水”なんだけど……ちよつと降らせすぎたみたいで、この地面が溶けすぎたかm」

ボロッ（ロザリー達の立っている場所が崩れた軽い音）

「……溶けすぎたかも知れない……って言おうとしたけど、遅かった」

「いつもアンタは言うのが遅いのよ——！！」

「今の言葉にも突っ込みどころ満載だったがな……そこの湖の騎士と兵器、ちよつと動くな」

——空間凍結魔術！！

「（ガキンッ！！） ってきゃあ！？と、止まった！？」

「~~~~~っ！？」

シャルの頭は現在起こっている事に既についていけない様子である。まあ無理もないだろう。空中で完全に停止しているという奇妙な出来事を経験しつつ、フランは本当に申し訳ない気持ちになる。

「って、あたし達は！？」

「汝らはまだ余裕があるだろうが。 自力で昇ってこい」

「……正論だから言い返せない」

「鬼いい————っ！！！」

実はホテルの屋上から四階は、ドーナ(?)自らが降らせたあの雨が浸透したため既にかなり溶けている。子供が踏んでも崩れてしまいそうな程に薄くなっていることだろう。更に古龍族の硬い身体が仇となり、恐らく彼女はほとんどの階を貫通して下まで落ちていくことになる筈だ。ドーナ(?)は助ける気も昇る気もなさそうなので、彼女達はそのまま脱落だ。

「さ、て……」

顔に笑みを浮かべながら、デミスは空中に浮きながら剣先をフランへと向ける。

「まだ、戦うか？　ならばその空間凍結魔法も解除してやろう。吾輩は“尊厳を優先する者”と言うのは嫌いではない」

その問いに少々驚いたような顔をしたフランだが、苦笑した後、首を横に振った。

「……意地悪ですわね。　答えなんて分かってるくせに」

はあ、と溜息をついてデミスを見据える。

「降参ですわ。もう体力ありませんし、確かに尊厳プライドはありますが、この状況でその尊厳を優先させて良いことがあるかと言われれば……NOです」

「面白い答えを言うな、汝は……ふむ、中々に楽しめた。礼を言うぞ、フラン・T・ハラオウン」

「……！ 私の名前、分かってたんですの！？」

「はっはっは」

デミスは懐かしそうに目を細め、剣先を下げた後に口を開いた。

「吾輩はな——一度見た物は決して忘れぬ。それが例え蛆虫であろうと、兵器であろうと、帝であろうと、だ。兵器NO.2『再生者ファスター』よ。この戦い、吾輩の勝ちだ」

フラン・T・ハラウン&シャマルVSデミス&ロザリー・アルデイス

勝者 デミス&ロザリー・アルデイス（脱落） 敗者 フラン・T・ハラウン（降伏）&シャマル（戦闘不参加）

——終結。

*

————ホテル・アグスタ周辺side 此方はフラン達の決着が付く8分前に遡る——

まだだ。

「はあああああああああ!!」

まだ、自分はいける。

「『――――！！！！？』」

行ける。 いや、やって見せる。

この五分間で、最凶の兵器を倒す――！！

「『警k』」

「させんッ！！」

呪文を唱えさせないように顎を蹴り、魔法を放てないように腕を折って、行動できないように足を切り裂き、呼吸が出来ないように肺を殴る。

“雷絶速”は基本の速さが秒速400kmを超える。それは通常の雷の速さの約2倍だ。そして、その速度に反応できる者などこの世界にはいない。それは目の前の“最強”の兵器も同様。

これはもう魔力量がどうかではない、物理的に不可能なのだ。

反射神経がどれ程発達してようと、雷の速度の二倍で動き回る者に標準を合わせて魔法を放つなど出来やしない。しかも行動を阻害するため、少しでもダメージを与えるためにディールは今無還者へ拳を、蹴りを、雷をぶつけている。魔法すら使う暇もない連撃。

既に自らの拳に伝わった、骨を叩き折った感覚や内蔵を潰した感

覚の数は数え切れない。

だが。

「『(ドドドドドドドグシャツ、バキッ！) が、ツ……↓^{リカ}再生』」

ボキボキボキッ！！ と彼の体から不気味な音が響いたかと思うと、一瞬にしてそれらは回復してしまう。骨を折る程度では、内蔵を潰す程度ではダメージすら与えられないのだ。恐らく頭蓋骨ごと粉碎しても再生するだろう。

それでも。

「(諦めぬ……諦めぬ、ものか……！！) があああああああ
あ！！ ――― 『雷極閃【神楽】』！！」

雷のみで構成された集束砲撃を放ち、森ごと無還者を吹き飛ばしてさらに追撃を仕掛けようと大地を蹴った時、一撃も喰らっていない自分の口から鉄の味がするのを感じる。

既に身体が限界ギリギリなのだ。この状態になってから、もうどれ程立っているのかも分からない。5分過ぎているのか？ それともまだ全く経っていないのか？

「が、あああああ——！！！！」

自分でも何を叫んでいるのかも分らない。

まるで獣だ。　だけどこれでいい。

こうでもしなければ、目の前の“壁”敵には勝てないから。

足りなければ努力で補う。　これまでもそうしてきた。　そして、
これからも——

「『雷絶剣らいぜつけん【滅劫めつきやく】！！』」

右手から放たれた巨大な雷の剣が無還者を貫く。

自分の兄が苦しそうに呻くのを歯を食いしばって聞きながら、左手
で更に追撃を掛けた。

「うおおおおおおあああああ！！！！」

——雷塵殲滅拳らいじんせんめつけん！！

「『つが、あ……………障壁…………展開』」

ドオオオオンッ！！　という音がして——彼女の顔が青ざめる。

止め、られた。

攻撃と攻撃の間、コンマ1秒にも満たない間を突かれて——！！

放った左手が、ギシギシと音を立てながら“敵”の手で受け止められているを感じる。

粉塵の先に、あの紅い目が光るのが見える。

マズイ。

動けない。

止められない————

「しまっ————」

「『警告…第2章51項。『焼き爛れし神の皮膚』発動準備開始。
↓完全発動まで残り』」

絶望を感じ取った、その瞬間だった。

ドガガガガガガガッ！！ という音が響いた。

「『！？（ズガガガガガッ！！……ジュウッ！！）——ア、グウっ……』」

降り注いだのは、水帝の放ちし水槍の雨。

目の前の標的にのみ集中していた兵器は、不意を突かれた水の槍に対処しきれず、咄嗟に右手で庇うも身体の至るところへその槍を受ける。

ディールがゆっくりと目を開けると、雷絶モードの自分に被害はないが、目の前の“敵”に大量の水の槍が突き刺さっていた。

「！！（なんじゃ、水槍の雨！？……何者か知らぬが、礼を言うぞい！！）——だあああああッ！！！」

「『グ、う……第1章特例項…本体へ何者からの攻撃による被害を確認。↓液体の分析結果、これは特殊な方法で生成された“王水”と断定さr（ドスッ！！）っが、はッ……！！』」

今度は障壁割込みプログラムと同時に放った右拳による一撃。それは正面に多数展開されていた対魔法障壁を一撃で打ち抜き、再度

無還者を思い切りホテルの方向へ吹き飛ばす。

「『(ドオンッ！！) ……………っガ…………』」

「！ (バチィッ！！) ……ドンッ！！) はああああああああああああ！！！！」

———雷絶砲【天獅子】！！

そのまま壁に激突した兵器へ向けて、右手で放たれた物質破壊型雷電砲撃。それを彼は血涙を流していると錯覚するような目で見つめると、その体制のまま背後に魔方陣を展開した。

その色は、桃色と黒色。

「『↓術式開放。 “ディバインバスター×29” & “デス・メテオ・ブラスター×11”』」

ドガガガガガガガ！ という音と共に、大量の魔方陣と共に放れ、殺到する桃色と黒色の閃光。

それは真正面から、ディールの砲撃とぶつかりあった。

「(ドオオンッ！！) っ…………ぐ…………うおおおおおおあああああ

ああああ!!」

「『(ドオオンッ!!) ……うグ…………出力最大……“スターライトブレイカー×12”&“デス・デミス・ブレイカー×19”』」

片手では食い止められる気すらない巨大な桃色と黒色の混ざった閃光。恐らく60本以上の砲撃が輝いて一本に見えているのだから、正直砲撃の大きさに“アカンシエル”に匹敵しそうだった。

「ぐ……ぬおおお……っ」

余りの質量に堪えきれなくなり、震えだす右手。それを左手で支え、腰を深くして吹き飛ばされないよう、あの閃光を真正面から受けないように構える。

「負けられないんじゃよ……」

その不敵な笑みを崩さず、口から流れ出る鮮血にも構わずに彼女は吠える。

「妾は負けられない!! 妾は……妾はこれ以上、お主が、兄上が自分の意思でも無く人を殺すのを……見てられぬのじゃ!!!!」

もう身体の節々が悲鳴を上げ始めた。

血液も、弁を無視して逆流したり身体の中で破裂したりと散々なものだ。

内蔵は恐らく、健康な時と同じ位置に入っではないだろう。何のデメリットもなしに“雷絶速”なんていう凶悪な移動魔法が使える訳がない。使うたびに内臓の位置はグシャグシャになり、骨はメリメリと悲鳴を上げる。今も、いつ全身の骨が壊れるか分からない程ボロボロだった。

「もう良い……殺さなくても、苦しまなくても良いんじゃない……他の兄上や姉上の手を煩わせることもない！！ 妾がお主に終止符を打つ！！」

魔力を全力で開放する。 今度こそ骨が断末魔のような悲鳴を上げて軋み始めた。

爪や皮膚が剥がれて肉が露出し、魔力圧で自分の身体が切り刻まれていく。 痛い。

死ぬ程痛い。 今、内蔵が潰れた音がした。 ついでに骨も折れた。 正直立ってられない。

でも、と彼女は改めて歯を噛み締め、目を細めて自分の兄を睨みつける。

やらなくてはならない。

此処まで来たら、引き返せない。

もう、ウーノの手料理も食べれないだろう。 大好きな姉達と共に
お風呂も入れないだろう。 クアットロと一緒に悪戯も出来ないだ
ろう。 大好きな科学者と一緒に遊ぶことも出来ないだろう。

「それでいい」

しかし彼女は、笑顔だった。

「結局——妾達のような“生まれてはならなかった何か”は、こ
の世界から消えなければ行けないのじゃよ……そうは思わんか、兄
上」

相手から、答えはなかった。

変わりに、全力で自ら砲撃の出力を上げた。

「壊せ、雷閃!!!!!!」

——出力最大！！ 生命エネルギー・魔力変換開始、全魔力・精神エネルギー変換開始！！！！

「あああああああああああああああああああああああ
！！！！！」

.....!!!

金色の雷が、桃色の砲撃を完全に飲み込んだ。

後ろは壁。

転移するのは物理的にも時間的にも不可能。

攻撃範囲が広いから下手に移動しても無意味。

[illegible]

「甘いッッ！！！」

自分の身体へ、何かが落ちた。

雷だった。そう、金色の雷——思考回路がショートし、あらゆる機能が一瞬だけ停止する。

そう、その一瞬。

その一瞬で、十分だった。

思考回路のショートが回復し、目前の景色を見る。

視界一杯に、金色の光があった。

「『————EX——級砲撃————回避————不可能————』」

あらゆる音をかき消す、爆音が響いた。

“生き物”という存在が放てる限界を超えた砲撃は、無還者ごとホテル・アグスタを貫通し。

瞬間、それは炸裂して全てを崩壊させた。

＊

同時刻——————気絶魔導士side

「——っ!？」

「……これは……あのお嬢さん、死んじゃうよ……!!」

＊

同時刻———ロザリー&ウーティ side

「……!？　なに、この馬鹿魔力!？」

「!?!　ロザリー、前方12時障壁全力展開!?!」

「え!？　「早く!」　——まあいいや、了解っ!!　信じる
わよ!?!」

———水帝式最強防壁展開!?!
アイギス

———古龍式障壁全力展開!?!

カッ………!!

＊

同時刻———デミス&フラン&シャマル

「……！？ この魔力は……いやしかし、一気にこんな物を解き放つては……！！ フラン・T・ハラオウン、湖の騎士、起きろ！！」

「！？ ……あれ、私いきなり眠くなって……」

「あれ、私……」

「吾輩が眠らせた！ 記憶を覗こうかと思ったがそんな場合でも無いようだ、転移するぞ！！ 急げ！！」

＊

同時刻———春斗&ザフィーラ

ゴゴゴゴゴ……!!

「っ!? マズイ、この馬鹿魔力を此処にぶつける気か!? ザフイーラ逃げっぞ!! セっかく助かったこの生命、此処で瓦礫に埋もれるは余りに残念!!」

「いや春斗!? お前大丈夫なのか!？」

「知らねえのかザファイラ、良い子は3分寝ればどんな傷だろうと全回復するんだぜ!!？」

「~~~~~ッ!! 後で全て説明してもらおうぞ!! 正直展開に付いて行けん!!」

「へいへい了解!! 取り敢えず飛び降りるぞ!」

＊

暗い。

死んでしまったか、と思ったが暫くすると物音だけが聞こえてきた。どうやらギリギリで生きているらしい。

でも、もう限界だ——そう考えた瞬間、身体中から力が溶けるように消えていく。“雷絶モード”が終わった。同時に、自分を支えていた力も消えた。

両膝を付き、腕をだらんと下げた状態になる。口が不自然に空いたままの様になってしまったが、もう口一つ動かす力もない。

ふと、自分の身体に異変を感じた。

罅が入っている。腕や、足や、顔にまで。

自分を構築している細胞組織が崩壊しかけているのだろう。今の自分は、恐らく指でつついただけで壊れて潰れてしまう。

笑うことも出来ない。指一本動かす事も出来ない。

ふと、目の前に足音が聞こえた。

不思議な気持ちだった。あれ程倒そうと10年以上の間修行し、それでもなお届かない壁を前にして、しかし彼女に後悔や未練は無かった。

「『第1章……（ザザッ……）……3項……。何故……。最後……威力を……軽減したの……。ですか……。？』」

雑音が入っている声。恐らく目の前の男も満身創痍という文字がそのまま当てはまるような身体に違いない——それだけでデ---

ルは、自分の力が少しでも目標であり憧れだった存在へ届いた事への喜びを感じる事が出来た。

「『↓理解……出来ません……。 ↓あの状況で……最大威力で……放っていれば……本体は……恐らく……』」

「……、」

不思議と、この問いに対しては声が出せた。

“人間”、やれば出来るものだと思った。

「妾も丸くなったものじゃなあ……なに、簡単じゃよ。 もう、誰も……死んでいく所を……見たく……ないんじゃない……それが例え、お主でも……」

最期の最後で、ディールの“目標”を阻害した物。

それは“感情”。あの状況下に置いて、とてつもなく不必要な“心”が、彼女の決心を鈍らせたのだ。

巨大な雷の砲撃を放ちきる寸前、彼女は一瞬だけこう考えてしまった。

“本当に殺してしまっているのか。 また、あの頃のように楽しく

やり直せないのだろうか——”

そんな無駄な思考で、消費してはならない時間だった。

そんな甘すぎる思考で戦ってはならない相手だった。

それは、彼女が一番よくわかっていた筈なのに。

しかし彼女はあの瞬間に選んでしまった。自分の末路を、自分の終わりを。それが例え無意識だろうと、心の何処かにあった“過去”を望む心だったとしても、もうこの現実是不変ならない。

「『↓理解……出来ま……せ、ン……』」

対する無還者の身体も、酷いものだった。

高温の雷の砲撃に障壁もなく触れた事により、身体に至る場所が焼け爛れ、場所によっては肉が炭になって骨が見えている箇所すらある。

目も右目は完全に焼け焦げて直視出来ない悲惨な物になっていた。

無事な場所が全く無い、と言ってもいい。

しかし彼はこうして生きている。五臓六腑の内、四臓五腑が全て役立たずになったとしてもこうして立っている。

なんて、生命を馬鹿にした存在なのだろう。

なんて怖くて、恐ろしくて、凶悪な存在なのだろう。

骨が見えている右腕を、震えつつも少し上に上げる。その腕に、ドス黒い魔力が集束されていくのを肌で感じる。今言葉を絞り出しただけで奇跡なのに、これ以上何かしたところでもう自壊しかない。

もう、終わろう。

これで、No. 5 “拒絶者”として生まれた兵器、“デール”という存在は終わる。

一つの異物が、この世界から消える。

（この世界は、妾1人が消えた程度では収まりきらん程の“異物”がある）

目の前の“最強の兵器”がいい例だ。

そして、自分を拾い、育ててくれたスカリエッティもまた人造魔導士。そして大好きな姉達も、人の手によって造られた戦闘機人。

良く一緒に酒を飲んで遊んでいるゼストも人造魔導士。ルーテシ

アは人間だが、上層部の手によって洗脳チップを埋め込まれている。
下手に取り出せばルーテシアが死んでしまう仕組みだ。

なんて、歪んだ世界なんだろう。

—————けど。

（じゃが、やはりあるのと無いとでは大きな差がある——妾は、
無い方がいい）

人間以外は淘汰され、自分の利己だけを思考し、欲望の為だけに動く
生き物が繁殖する世界。そんな世界に生まれたのなら、このま
ま歩ませるのも一興だろう。その歩みに、どう考えても“人間じ
やない物”は必要ない。

出来ることなら目の前の兵器も、自分と同じくこの世界から消えた
ほうが良い存在のひとつなのだろうが……自分には、無理だ。

駄目だ、消せない。

自分に、“家族”を殺すことは、出来ない。

「『警告……特例により、詠唱破棄……（ザザッ） 魔力弾……を
……起爆、します』」

真っ黒な魔力弾が、自分へ迫るのを感じる。

それを他人事のように思いながら、ああ、とデイルは最期に思う。

“やっぱり、別れが言えなかった”。

ドオンッ！！　と音がした。

デイルに痛みはこなかった。

その代わりに、何かが頭にぶつかった。

その何かがぶつかったせいで、更に広がる罅を無視して丁度視線の先に落ちた物を見る。

——— “無還者”の、腕だった。

その時。

無還者^{リセッター}は気づく。 先程気絶させ、負傷させておいたティアナ・ラ
ンスターがこの砲撃を撃ったのだと。

先程の一撃で弱っていたとはいえ、魔力弾一発で“兵器”の身体が
吹き飛ぶなど有り得ない。 恐らくは、何者かの強化魔法がある――
――焼け爛れた身体を無理矢理の様な感じで回転させティアナ達へ
狙いを付ける。 身体はボロボロだが、魔力ならばまだ余裕はある。
他の魔導士ごと一撃で吹き飛ばせば問題は――

その間、僅か6秒。

そう、6秒――たったこれだけの時間で、この戦いの勝敗は決定
した。

その時。

彼はあらゆる方向から、かなりの量の魔力収束率を感知した。 数
は1、2、3……6……？

多過ぎる。今の状態では対処しきれない。

これ以上のダメージは、深刻な被害を本体へ及ぼす可能性がある――
――！！

「『……警告――（ザザツ）！！………了解。申し訳ありません、管理者』」

『

』

「『↓……即刻帰還します』」

その、会話が終わった刹那。

申し合わせたかのように、兵器が探知した全ての砲撃が放たれた。

「ティアナああああ！！！！ 今日には本当にお前に惚れそうだぜええッ！！！！」

――――パニッシュ・エンド・インパクト！！！！

「――陰陽術参式……」

――【建神雷】――！！

「……………滅せ」

――崩式【水^{すい}陷^{かん}】――。

「色々降り積もったあたしのイラ付きを思い知れええっ！！！！」

――エ^エン^ンド^ドワ^ワール^{ール}ド^ドク^クラ^ラッ^ッシャ^{シャ}――
――零^{ゼロ}極^{キョク}閃^{セン}崩^{ボン}界^{カイ}剣^{ケン}！！！！

「勇気あるお嬢さんに敬意を表して！――――“逝ね、存在”」

――吸血神の鉄槌！！

「もうっ、私は接近戦は得意じゃないんですからねっ！」

――地獄降誕！！

ゆらり、と。

迫り来るSSS級以上の6つ砲撃を虚ろな目で見ながら、兵器はただ眩いた。

「『
“ ”
』」

爆発音は、しなかった。

それどころか、閃光すら起こらなかった。

「「「はあっ!!?」」」

「「!?!?」」

まるで消えたかのように静寂が戻る。

兵器の横に、少し目を細めたデミスが着地する。丁度その瞬間、何かの気配を感じてディールが力尽きている筈の場所へ剣を振り下ろすが、既にそこには誰もいなかった。

ディールを何者かに回収された——舌打ちをした後、気を取り直してデミスは無還者へと声を掛けた。

「手酷くやられた物だな……兵器同士の戦いがこれほどの物になるとは……予想だになかった。その様子を見ると、帰還命令が出たのだろうか？」

「『その質問に（ザザッ）……肯定を、示します……↓転移して……帰還……します』」

「了解——主は回復に専念している。吾輩が転移する」

黒い魔方陣が展開する。消える寸前、顔の肉すらも焼け爛れ、少しグロテスクな色になっている無還者が顔を上げて、瞳を少し動かしたかと思うと、かろうじてまだ無事な場所の森を見た。

少しじーっと眺めていたかと思うと、ゆっくりと視線をロザリーへと戻して口を動かした。

「『………、』」

「……？」

「『………↓“兵器の掟”に従い、任務続行不可能と判断した為今回は見逃します……↓次発見した場合、生命の保証はありませんのでそのようにお伝えください』」

「え？」

「『……、』」

それだけ言うと、黒い魔法陣が一層輝いて——彼らは消えた。

「……？」「……ろ、ロザリー……」……って、ハクウ！？ アン
タ逃げなかったの！？」

「に、逃げるタイミングを見失ったんだ……怖かったあ……怖かったよお……」

「ああああ泣かないで泣かないで、頑張ったわよアンタは！ うん、もうこの光景を見るだけでどれだけ地獄だったかが想像できるから！ 正直あたしでも生き残れる自信ないから！」

「ふええええ……」

「ああもうグダグダ！！——アルデイスパーティー、撤退するわよ！！！」

「「了解ッ！！」」

「あ、そうだ！ 兵器ちゃん！」

なんかかんやで気絶したフリをしてたり、自分が出る幕ではないか

と勝手に思い込み静観を決めていたアルデイスメンバーは一瞬で集合した。

そして速攻で次元転移で帰ろうとした瞬間、ロザリーがポイツ、と何かをフランに投げた。

展開についていけずめを白黒させたフランがそれを見ると、ロザリーの連絡先が書いてある名刺だった。

「暇だったらメールしてお酒誘って！ 全力で抜け出してそっち行くから！」

「いやダメだからね！？ 何を言ってるのかなロザリー姉ちゃん！？」

「……そうだ、高町春斗」

「？」

ピッ（ウーティが何かを投げる音）

グサッ（春斗の額にそれが刺さる音）

「……それ、上げる。暇だったらお菓子用意して連絡して。絶対に行く」

「まずは額に紙が刺さったことを謝らない事に全俺が泣いた。まあいいか、りょーかい。暇だったらな」

突き刺さった名刺っぽいのを抜いて、隊服の後ろポケットに入れておく。寧ろこの辺りでギャグを入れる辺り、この水帝はやはり只者ではないと言えるだろう。

「あと、そのオレンジ色の髪した女の子!」

「は、はいいい!」?

ついに帰るかと思いきや、立ち止まって勢い良く振り向く。その視線の先は気が抜けて腰が抜けているティアナ。

彼女が恐縮してしまうのも無理はないだろう。彼女もまた展開についていけない意味被害者の1人だが、目の前にいるのは恐らく“最強”や“無敵”と呼ばれる部類に入る者達だという事は分かる。そんな中の“王”に呼ばれば恐縮もするだろう。

何を言われるのだろう……と不安に思う彼女の心情は、いい意味で裏切られた。

「見直したわよ、ティアナ・ランスター! 貴方の勇気が一つの生命を救ったのよ。誇っていいわ」

「ホント、あそこで射撃をするなんて思わなかったよ。腰抜けの

局員とは大違いだ」

「ええ、相手がそこまで親交の深くない相手だとしても助けようとするその姿勢……見事です。尊敬しますよ」

「幻想種とて、皆人間が嫌いな訳じゃないのだぞ。　　というか人間が嫌いなのはほとんどが人間から弾圧を受けた者達だけだ。私達は君の様な人間は嫌いではない」

「……………良く、頑張った。　　貴方の様な人は大好きだよ」

思わず、顔を上げた。

そこに、自分を嘲るような顔は全く存在しなかった。

純粹に尊敬の笑みを向ける者、口が少しだけ微笑んでいる者、顔が丸ごとニコニコとしている者様々だ。　　突然の事でよく分からないが、分かることが一つだけある。

認められた。

“無敵”とすら言える力を持つ彼らに、自分の力が。

ランスターの弾丸が、認められた————！

「……………！」

「ああ、よく頑張ったよティアナ」

感動で震えていると、頭に暖かい手が乗るのを感じる。

春斗の手だった。地球の時と同じで暖かくて、大きくて——

「お前は本当に頑張った。だから、もう我慢する必要はない」

「……ふえ……」

「任務は終了だ。ユーノも生きてる。死人は出ちまったが、それでも兄貴^{あいつ}の目的を阻止する事は出来たはずだ。お前のおかげで、ティアナ……もう任務は終わった。此処からは、もう気を張らなくていい」

「……（ポロ……）……怖かった……怖かったですよ……」ポロ
ポロ……

恥ずかしさも何処かに吹っ飛び、打つときの恐怖心が思い返されて春斗に抱きついて嗚咽を漏らすティアナ。その背中をポンポンと叩きながら、ふと後ろを向くと全く同じ動作をハクにしているロザリーの姿が。

目が合って、同時に苦笑した。

（戦いがあったとは思えないわね）

（ああ、全くだ。でも俺らはこれでいいと思う）

（そうね、たしかにそうかもしれない……貴方これから大変じゃない？ 正体バレちゃったじゃない）

（ああ、その時はその時だよ。こいつらがどんな反応をしたって、俺の意思は変わらない）

（そう、残念。また寂しくなったらいつでも来てね……それじゃ、ばいばい♪）

彼女はヒラヒラと手を振り、まだ泣いているハクを背負うと魔方陣を展開する。一瞬まばゆい光を放ったと思ったら、そこには誰もいなかった。

「帰った、か……うん？ ティアナ？ おーい？」

「……………」スー……スー……

「ああ、寝ちまったか……………フラン」

「はい、なんでしょう？」

「状況説明、適当に頼んでいいか？」

「え？ どうして……………あ、わかりましたわ。お疲れ様です。お休みなさい、春斗」

「ああ、すまねえ……苦勞掛けんな……お休み……」

ドサツ、という音と共に春斗も横になる。数秒後、王水の槍を受けてボロボロになった隊員服のまま彼は寝息をたて始めた。

「ふう……」

ポスン、と彼女も焼け焦げて隆起して陥没したりしてボロボロになっている地面に座る。色々と有りすぎて驚愕の表情を浮かべているシャマルとザフィーラへ苦笑しながら「なのはさん達をお願いできますか?」と言うと、慌てて動き出す。

その後、空を見上げた。

空は、地上の戦火なんて知らないかの様に青く、澄み渡っていた。

「……青いですわねえ……」

その声と共に、静かに優しい風が吹いた。

自分達の無事を祝ってくれている——そんな想いを抱かせてくれる、暖かい風だった。

無還者 V S デイール（+ティアナ、春斗、フラン、ロザリー、メビ
ア、ウーティ、リン）

勝者 デイール（死亡寸前だったが、ティアナの決死の一撃により
生存。その後行方不明） 敗者 無還者（任務失敗&満身創痍に
よりホテル・アグスタからデミスと共に離脱。その後行方不明）

――――終結。

宴は終わり、役者達は居場所へと帰ろうと動き出す。

貴方の思っていた結末とはどうだっただろうか？ 合っていただろ
うか？ それとも違っていただろうか？

2人の兵器の再起不能クラスの傷は、彼らにどのような変化を持た

せるのか？

そして、大事な仲間が“人間”では無い事を知った“人間”の反応は――？

おっと、まだ帰宅は早いですよ。確かに主幕は終わりましたが、まだあと一つ“終幕”が残っています。

もちろん後片付けは彼らがやるので、皆様はどうぞ最後までご覧頂きたく存じます。

では、今暫くの休憩時間を再びお楽しみください。

“ ホテル・アグスタ【主幕】 ” （後編） （後書き）

さてさて！！ 決着が付き、ようやくホテル・アグスタ編一段落です！！

なげえよ？ はい、本人が一番わかってます！ どうしてこうなった状態ですよもう本当に（血涙）

さて、感想で指摘がありました『原作キャラ仕事しろ（※少し改変）』という言葉ですが、今回のティアナを皮切りに少しずつ活躍していく予定です。でも、本当に原作キャラ活躍してませんね……やはりアルデイスを出したのは間違いだったのk申し訳ありませんでした王女様、その大剣をまずは下ろしてくださいさアッー！

ロザリー「それじゃ次回も見てね♪（ハ、ハ、ハ）ウフフ」

いや、終わらねえよ！？

今回は、取り敢えずティアナ達sideのお話や事件のお話です。

無還者を撃つ時のティアナの心情や、ディールのその後、後はザフィーラ達の決心やその心情を細かく書いていけたらなあと予定して

います。

しかし予定通りにいかないのが予定通りな天破クオリティに隙はありません。どうぞ御期待せずにお待ち下さい。

感想、ありがとうございます、本当にありがとうございます。嬉しすぎてテンション上がります。これからも宜しくお願いします
^^

天破でした（・∀・）／～～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9760t/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～PROJECT S.W～

2011年11月8日03時16分発行